渡瀬寅次郎傳

序

渡瀬寅次郎の生涯を文字に綴つて我が家に殘さうといふ計畫は、母初め、我々兄弟姉妹が早くから考へてゐたことであつた。我々、直接父に咫尺した者たちの時代は兎も角、我々の子供の代、孫の代になつたら、祖父、或ひは曾祖父の顏は勿論、その爲人すらも、僅かに斷片的の語り草によつて漠然と傳へらるゝのみで、その全人格を知るべき何等の正確な資料がないために、やがては忘却の裡に埋沒されてしまふであらう。それは惜しいことだ。尠くとも渡瀬一族に關する限り、寅次郎の一生を後の世に傳へるといふことは意義のあることだ。さうして我々の子供達にとつて、將又孫たちにとつて、その祖父が、或ひは曾祖父が、彼等の「知つておくべき人」だつたことを、彼等に正確な記錄によつて知らしめるといふ意味に於て、この仕事は我々の一つの責務でさへある。

この計畫が企圖されたのは昭和七年の十月であつた。當初編纂を擔當された

人は、材料の蒐集その他に並々ならぬ苦心を拂はれた後、惜しくも健康を害されたため、この事業も一時中絶するの已むなきに至つた。その後、昭和八年十一月に至つて、再びこの計畫が續行されることゝなつたが、何等謂ふべき公生涯を持たぬ一私人に關する記錄資料は、歿後十年に近き今日、既に散逸して、その蒐集は困難を極めた。しかし、故人の先輩、舊友諸氏の御好意による材料御提供と、各位の熱誠なる技術的御援助を賴りに、同族一統が努力した結果、一箇年の日子を費して、今日亡父の命日にあたりやうやく上梓の運びとなつたのである。こゝに、本書監修の勞をとられた大島正健先生、題字を賜つた佐藤昌介先生の、故人生前よりの御懇情に加へて歿後遺族に對する毎に變らぬ御芳志に對して、特に滿腔の謝意を捧ぐると共に、御助力を賜つた大方各位に厚く御禮を申し上げる次第である。

渡瀨寅次郎六十八年の生涯と、同香芽子七十四年の經歷とを綴つたこの書は、明治初年に於ける先覺者の奮鬪史であり、明治、大正、昭和を通じての日本文化史の一斷面を示す書でもある。と同時に、とりもなほさず、これは我が家の歷史である。渡瀨家に屬するもの、又渡瀨家より出でたるもの、この書を讀むに及んで、少年は靑

雲の志を抱き、青年は努力を訓へられ、妻は内助を勵み、母は眞の慈愛を解するに至らば幸ひである。

昭和九年秋

編者　渡瀬昌勝識

渡瀬寅次郎傳　目次

略歴

第一章　搖籃時代……三

生誕―父の死と江戸退轉―母を失ふ―祖母の薫陶―烈婦政子―沼津の教育機關―寅次郎の入學と當時の生徒―寅次郎と英語―嫂の情愛―當時の寅次郎

第二章　農學校時代……一三

大志を農學に轉ず―札幌農學校創立由來―少年寅次郎の感懐―偉人クラーク―クラークと黒田長官―Be gentleman !―全學生の欣慕―Boys, be ambitious !―初期の農學校風景―クラークの獨立自營的訓練―農學生時代の寅次郎―質素は偉大なり―寅次郎の英語演説―盟友の眞情―本邦最初の農學士十三名

第三章　在官時代……二三

青年技師の二功績―結婚札幌を去る―英國へ渡る―歐米巡遊の收穫―佐藤氏と舊交を曖む―歸朝後育英界に入る―英語と體育に主力―森文相の教育制度刷新―森文相の死―青年校長排斥運動―千萬人と雖も我行かむ―硬骨教諭の

直言―磐石の決意―永久に官學を去る

第四章　日本農界のために……三五

大日本農會役員として―東京農學校の大成まで―日本園藝會評議員として―農商工高等會議議員として―肥料界に活躍す―農事視察に南船北馬―滿洲の富源に着眼―指頭に描く遺志―興農學園の生るゝまで―清新の氣潑溂として―教育方針を統一す―寅次郎の遺志その緒につく

第五章　興農園とその事業……五六

進歩的種苗農具商の必要―卒先して難關に當る―最初は專ら種苗―札幌支店の設置―めでたし「凱旋陸稻」―選擧廓清に一役―駒澤村試驗場の設置―誇りのメロン―果樹園と蠶種部―絶讃の玉蜀黍―農書の出版開始―愈々農具賣出し―珍果奇草に命名―顧客本位の方針―人肥及農業藥品の發賣―本格的に農具販賣―驅蟲石鹼及珍奇農具の發賣―相次ぐ受賞と分店及農場新設―海外の主要取引先―學校園及高山植物種苗の發賣―農產物品評會の開催―臺灣農場―埼玉農場―歐洲大戰と大震災の影響―組織を改め株式會社とす―寅次郎の死と興農園の現況

第六章　文化の先驅「興農雜誌」……七五

通信販賣のパイオニア―過渡期ジャーナリズムに投じた一石―創刊號とその內容―佐藤氏の祝辭と創刊主意の言―購讀料と廣告料―巧妙なる讀者吸收策―內容及び體裁の變遷―附錄と增刊―寅次郎の社說―廢刊―寄稿家及論題一覽―農學講義錄とその內容―學課及講師

第七章　市政に參與して……九五

區會議員時代―市會議員となる―日比谷公園の造營に參畫す―市參事會員時代―日比谷國民大會―獻身的努力を市政に

第八章　私學教育と信仰……一〇一

東洋英和に教鞭をとる―東京中學院院長となる―東京學院と改稱す―實力涵養主義―寅次郎の教授法―子弟を愛すること子の如し―クラークの遺德―信仰生活のスタート―札幌獨立基督教會―水戸に於ける布教―荊棘の路―麻布教會時代―Y.M.C.A.―赤坂病院と平和協會―信仰の權化―微笑の昇天

第九章　渡瀨香芽子……一〇九

明治初期の女學校風景―日本女子教育の濫觴―新榮女學校發祥の由來―カロゾルス夫人とその功績―日本文化を開發せる宣教師の力―溝部私塾入門―忘じ難し雪中の試練―カロゾルス女學校に轉ず―進歩的な當時の教育方針―宗

敎的熱情と社會奉仕の賜―生徒一人に敎師數名の奇觀―新人を結ぶ結婚の盛儀―ポプラに風薫る札幌の新婚生活―寅次郎の外遊と初陣の留守居―レヴイツト夫人の講演を通譯す―矯風會創立と山室氏信仰の動機―水戸の生活と布敎への努力―香芽子の婦人文化運動―微笑ましき失敗の思ひ出―フロック・コートと豚の丸焼―夫妻育英に盡瘁―興農園開店と香芽子の內助―留守師團長の奮闘―母としての香芽子―香芽子の敎育法―日本人離れのした英語―宗敎的訓練の感化―「母の會」を創む―日本の母の友として―矯風會と香芽子―日本代表として萬國矯風會大會に出會―六十八歳にして再度代表となる―五十年のよき配偶者寅次郎と哀別す―亡き夫に捧ぐ國民高等學校―老いて樂しむ二つの趣味―幸福と感謝の裡に

第十章　日記抄……一三五

A日記帳より―B筆談帳より―病床日誌

追憶

わが知己渡瀨君……尾崎行雄……一六七

思ひ出……佐藤昌介……一六八

舊き學友として……大島正健……一九〇

グルントウイツヒの如く……內村鑑三……一九一

渡瀬寅次郎君を偲ぶ……南　鷹次郎……一九四
畏友渡瀬寅次郎君を憶ふ……宮部金吾……一九六
交游四十年の回顧……植村澄三郎……二〇〇
渡瀬君の宗教生活斷片……平岩愃保……二〇九
恩人渡瀬さん……清水由松……二一一
渡米實業團當時の思ひ出……名取和作……二一七
渡瀬氏成功の因……河村九淵……二一八
Feeling a Debt of Gratitude to Mr. and Mrs. Watase……A. W. Clement.……二二一
Appreciation of the Life of Mr. Torajiro Watase……G. Bowles……二二五
嗚呼渡瀬先生……渡邊房吉……二二九
渡瀬さんと私……出田新……二三一
農會への奉仕……肥田源吉郎……二三四
先生と通信販賣……池田次郎吉……二三五
主義と溫情の別……松澤市之丞……二三八
先生の英靈に謝す……瀧澤七郎……二三九
先生の耐忍力……高田篤行……二四一
興農學園に起居して……大谷英一……二四三
亡き父を憶ふ……渡瀬雅太郎……二四八

思ひ出づるまゝに……渡瀬喜美子……二五六
謹嚴なりし風格……小坂順造……二五八
その面影を偲びて……小坂花子……二六一
亡き父上のことども……加藤春惠……二六五
久連學園と父……田中次郎……二六七
追慕……渡瀬三郎……二七三
父上への感謝……相田優子……二七六
追憶斷片……渡瀬昌勝……二七七
父の臨終……渡瀬成美……二八三

餘錄

對岳五十話……二九一
年譜……一
渡瀬氏系譜……一

略歷

出生

一、安政六年六月二十五日、江戸牛込に於て渡瀬源四郎の七男として生る。

學業

一、明治九年七月、東京英語學校を卒業す、時に十八才。

一、明治九年八月、開拓使の試驗に合格して、北海道札幌農學校第一期生となる。

一、明治十三年七月十日、同校を卒業して農學士の學位を受く、時に二十二才。

官職

一、明治十三年七月、開拓使御用係を拜命し、民事局勸業課詰を命ぜらる。

一、明治十五年二月、開拓使廢止と共に札幌縣御用係を拜命し、勸業課詰を命ぜらる。

一、明治十七年七月、願に依り札幌縣御用掛を免ぜらる。

一、同年九月、農商務省御用係を拜命し、北海道事業管理局事務取扱を命ぜらる。

一、同年十二月、農商務省北海道事業管理局長安田定則氏、英國倫敦發明品博覽會事務官長として渡英するに付隨行を命ぜらる。

一、明治十八年一月、倫敦萬國發明品博覽會事務官補となり、農商務省博覽會係事務取扱兼勤を命ぜらる。

一、同年三月、英國へ出發に先立ち、文部省より出張中英國農學校に關する調査を依囑され、文部省御用係兼勤を命ぜらる。

一、明治十九年四月、歸朝後間もなく茨城縣知事に任命されたる安田定則氏に懇望されて、茨城縣に赴任す。

育英

一、明治十九年八月、茨城縣立中學校長兼一等教諭に任ぜらる、時に二十八才。

一、明治二十一年五月、三十才にして茨城縣立師範學校長に任ぜられ、學務課長を兼任し、公私立小學校教科用圖書審査委員長及習字本編輯委員長を命ぜらる。

一、明治二十二年六月、願に依り茨城縣立師範學校長を免ぜらる。

一、同年東京に歸り、翌二十三年、麻布の東洋英和學校に於て英語譯讀及英文學を講じ、明治二十八年四月、同校中學部が麻布中學校となるに及んでその教頭の職に就き、同年七月、これを辭す。

一、明治二十六年、東京農學校評議員、同二十八年、同校教務委員、同三十年、大日本農會附屬東京農學校商議員となり、大正十四年まで在任、傍ら科外講師として農業經濟及經濟原論を講ず。

一、明治二十八年九月、東京學院院長に就任三十七才なり。同三十六年、これを辭す。

農事

一、明治十三年十月、命により北海道各地の飛蝗被害狀況を視察し、害蟲驅除法草案を作成、これを基礎として四箇年計畫にて禍根を絶つ。

一、明治十四年十月、北海道勸農協會の設立を提唱して、これを創設す、時に二十三才。

一、明治二十二年十一月、大日本農會特選幹事に任命され、同時に同會農藝委員を委囑さる。

一、明治二十三年三月、內國勸業博覽會審査官を命ぜらる。

一、明治二十五年一月、大日本農會常置議員に當選す。

一、明治二十五年十月、東京興農園を創め、優良種苗及改良農具等を普及せしめて、本邦農業界の發展に資するところあらむとす。

一、明治二十六年、日本園藝會評議員となる。

一、明治二十七年十月、「興農雜誌」を創刊す。

一、明治二十八年、大阪硫曹株式會社顧問となる。

一、明治二十九年二月、東京地方森林會議議員に選任す。

一、明治二十九年二月、大日本農學講習會を創め、農學講義錄を刊行す。

一、明治三十一年三月、農商工高等會議議員に任命せらる。
一、明治三十八年、智利硝石普及會東洋本部顧問となる。
一、明治四十年十月、大阪硫曹株式會社を辭し、關東酸曹株式會社顧問に就任す。
一、明治四十二年十一月、東京興農園主催農產物品評會を開催す。
一、大正五年六月、大日本農會理事に選任す。

市政

一、明治二十五年五月、赤坂區會議員に當選し、爾來同三十一年十一月、同三十七年十一月、同四十三年十一月、大正二年十一月の各改選期毎に當選、大正六年十一月辭任す。
一、明治三十一年十月第三代赤坂區會議長に當選し、在任二年三箇月にして辭任す。
一、明治三十二年五月、東京市會議員に當選す。
一、明治三十五年六月、東京市區改正委員、同常務委員、東京築港調査委員、及東京市養育院委員に就任す。
一、明治三十七年八月、東京市參事會員に當選す。
一、明治四十一年一月、赤坂區學務委員長に就任す。
一　明治四十一年四月、日本大博覽會東京市博覽會局長に任命され、同年十一月、これを辭す。

視察

一、明治三十三年十一月、渡米して各地を巡遊し、農事を視察、種苗及農具貿易の便宜を得て歸朝す。

一、明治三十九年三月、利源調査委員として滿鮮各地を視察す。

一、明治四十二年六月、渡米實業團員として米國各地を視察す。

一、大正十三年一月、香港、廣東より臺灣に渡り、農場を視察す。

宗教

一、明治十年八月、札幌に於て宣教師ハリス氏より洗禮を受く。

一、明治十三年、北海道開拓使に在任中、同期生と共に札幌獨立基督教會の創設に參畫、布教に從事す。

一、明治十九年より四箇年間、水戸中學校長及水戸師範學校長として在任中、米人宣教師等を招き、大いに布教に努む。

一、明治二十六年、東京基督教青年會理事に選任す。

受賞

一　明治十八年一月、英國倫敦發明品博覽會事務官補として渡英中、同博覽會より功勞賞を受く。

一、明治二十七年十二月、大日本農會北白川會頭宮殿下より綠白綬有功章を授與さる。
一、明治三十三年四月、大日本農會小松總裁宮殿下より紅白綬有功章を授與さる。
一、大正二年十月、富山縣主催一府八縣聯合共進會に於て、農商務大臣より功勞賞銀牌を授與さる。
一、大正三年四月、大日本農會伏見總裁宮殿下より紫白綬有功章を授與さる。
一、大正三年十月、東京市名譽職として多年公共事務に盡瘁せる功勞顯著なるの故を以て、東京市長より金杯を贈らる。
一、大正三年十月、大日本農會伏見總裁宮殿下より、多年東京高等農學校のため盡瘁したる功により銀杯を下賜さる。
一　大正四年十一月、多年東京市赤坂區の公職に盡瘁せる功少からざるの故を以て、御卽位式擧行の嘉辰に際し、東京市長より特に銀製花瓶を贈らる。
一、以上の外、內外各地の博覽會、共進會及品評會等より受賞せること多く、その主なるものは第四回及第五回內國勸業博覽會に於ける有功二等賞及銀牌賞、米國聖路易世界博覽會に於ける銀牌賞、米國ポートランド萬國博覽會に於ける金牌賞、日英博覽會に於ける金牌賞、東京大正博覽會に於ける銀牌二個及銅牌三個、米國桑港巴奈馬大博覽會に於ける名譽賞二個等なりとす。

結婚

一、明治十六年、二十五才にして相田新助氏の五女香芽子と結婚す。

昇天

一、大正十五年十一月八日、宿痾喉頭癌のために昇天す。

家族

一、妻　香芽子　文久元年十一月二十一日、埼玉縣忍町行田に生る。士族相田新助五女。

一、長男　雅太郎　明治十七年十一月二十日出生。同四十四年十一月二日、北海道士族森傪三郎次女君子を娶る。

一、長女　花子　明治二十年二月二十日出生。同四十一年十一月二十日、長野縣平民小坂順造に嫁し、長女百合子（美濃部亮吉に嫁し、長女冴子あり）。長男善太郎、次男善次郎、三男德三郎あり。

一、次女　春惠　明治二十二年三月二十八日出生。同四十三年二月二十六日、東京府士族加藤成一に嫁し、長女光子（病歿）、次女多喜子（阿部源一に嫁す）三女澄子（土肥保之に嫁す）、四女順子、長男雄健（病歿）五女智惠子、六女睦子、次男正二あり。

一、次男　次郎　明治二十四年十月六日出生。大正九年五月十五日、神奈川縣平民田中平八の養嗣子となり、その長女花子と婚す。長女洋子、次女節子、長男雄平、三女朝子あり。

一、三男　三郎　明治二十八年二月十六日出生。昭和二年十一月二十六日、山口縣士族福原榮太郎の長女長子を娶り、長男良道、長女智子、次男健二郎あり。

一、三女　優子　明治三十年八月七日出生。埼玉縣士族相田正述の養女となり、大正七年九月二十八日、福島縣

士族三雲久太郎次男辰雄と婚す。長男新一郎、長女多惠子、次女美惠子、次男雄次郎、三女照子、四女榮子、三男秀三郎、四男志摩雄（病歿）あり。

一、四女愛子　明治三十二年九月七日出生。大正三年四月十一日病歿す。

一、五女里子　明治三十四年十二月十一日出生。大正十三年三月十一日、東京府平民小島虎之輔に嫁し、昭和六年三月六日病歿す。

一、四男昌勝　明治三十七年四月二十一日出生。昭和五年十一月十九日、東京府平民周防初次郎次女花子を娶る。

一、五男成美　明治四十年九月二十六日出生。

傳郎次寅瀨渡

第一章　搖籃時代

生誕

渡瀬寅次郎の父は名を源四郎と云つた。江戸牛込仲町に住居した徳川末期の柳營の徒士、後、抜擢されて日光の吟味役を拜命した溫順謹直の人物である。八男あり、長子を錡太郎、次子を金四郎、三子を廣太郎、四子を源之助、五子を昌邦、六子を新六郎、七子が卽ち寅次郎、末子を孫三郎と呼び、女子が長女勢以、次女登喜の二人、第四子源之助までの四男及び長女は死別した先妻の子で、何れも夭折し、五男昌邦以下の四男及び次女が後妻ゆう女の腹であつたが、これも六男新六郎は安政五年六月、登喜女は同年八月、相次いで早逝した。

ゆう女は江戸番町の旗本藪益次郎の家老たりし竹田伴內の女、寅次郎は、この父この母の仲に、安政六年六月二十五日、呱々の聲を擧げたのである。

父の死と江戸退轉

寅次郎五歲の時、卽ち、文久三年の四月二十二日、豫ねて日光勤役中劇務のため健康を害し、江戸の自邸に靜養中であつた父源四郎は、遂に妻子を遺して永眠したので、卽ちこれを四谷西應寺に葬る。享年四十八。時に兄昌邦は十二歲、弟孫三郎（後に庄三郎）は漸く二歲であつた。

然るに、父逝いて五年、所謂明治維新の黎明はあけて、徳川慶喜は慶應三年十月、大政奉還を斷行の上、靜岡へ移封されることになつたので、舊幕臣の多くは無祿御供を願ひ、駿遠の地に移り住むの已むなきに至つた。

父亡き後、男勝りの健氣な母の慈愛の懐ろに育くまれて、春の嫩草の如くすく〳〵と生ひ立つて來た渡瀬家の幼けなき三兄弟も亦、なつかしい江戸の地を後に、母に伴はれて駿州藤枝の里へ移り住んだ。慶應三年も末のことである。

居ること一年、明治元年の秋、今度は沼津へ割りつけられることになり、流轉の旅は又しても沼津へと續けられた。當時無祿御供に加つた家中の婦人で、一藝一能に勝れたもの少なからず、就中十二人の賢婦と呼ばれた人々あり、その中にはゆう女を初め、平岩愃保、小田川全之諸氏の母堂等もあつた。之等の婦人は何れも率先して自分の技能を舊家中の子女に教へ、ゆう女も亦裁縫家事の方面で甲斐々々しく指導の任に當つた。

渡瀬家は、富裕と云へないまでも生計の料に事缺くやうなことはなかつたが、何しろ無祿御供と稱する位だから、賜る收入は僅少に過ぎず、生活に窮する向も甚だ多かつたので、かうした有志婦人連の指導によつて內職を得、暮しの補ひをつけることの出來た人々も少くなかつた。

母を失ふ

ゆう女は、生來蒲柳の質であつたが、鐵の如き志操、よくこれを支えて、前記の如く指導

役を力むる傍ら、幼兒三人の教育に餘念もなかつた。が、彼女に對する浮世の試煉は餘りにも苛酷であつた。夫との死別、激變して行く世相、思ひもかけぬ流轉の運命に喘ぐ異鄕の旅、餘りにも烈しかつた有爲轉變の生活は、いつしか彼女の心身を蝕み盡して、ゆう女は愛兒三人の行末を思ひ煩ひつゝ、沼津へ移つた翌明治二年八月二十四日、終に長逝したのである。享年四十九歲、現沼津市新浦町眞樂寺にあるその墓碑こそ、當年のゆう女が苦闘を偲ぶよすがなのである。

宿命の遺兒三人、寅次郎この時十一歲、兄昌邦十八歲、弟孫三郎が八歲であつた。後年日本農業界に貢獻の意圖を以て終始した渡瀨寅次郎が奮闘史の第一頁はこゝに開かれるのである。

祖母の薫陶

ゆう女に代つて寅次郎の薫陶に當つたのは、ゆう女の母で、寅次郎には祖母に當る竹田りき女であつた。りき女は前記竹田伴內の妻、江戸三田なる旗本の臣中野元右衞門の妹で、當時既に六十の坂を越ゆる老齡の身であつたが、ゆう女の遺兒の面倒を見るやうになると、所謂「祖母育ちは値が三百下る」と云はれるのを嫌つて、非常に嚴格な教育方針をとつた。かう云ふ話がある。

寅次郎と弟の孫三郎とは頗る仲が善かつたが、何しろ腕白盛りだから喧嘩もよくやつた。或る時も例の通り取ツ組合ひを始めたが、どつちも負けず嫌ひだから仲々治まりがつかない。これを凝ツと見てゐたりき女は、默つて奥から二口の脇差を持つて來ると、矢庭に二人の前へ投

げ出したから、幼い二人は膽をつぶして飛び退いた。

「さ、それを貸して上げるから二人で戸外へ出て一と思ひに勝負をつけてお出で。お祖母さんは喧嘩を止めるんぢやない。喧嘩はしてもいゝから男らしくおやりと云ふのです。いつまでも心に根を持つて喧嘩をしてゐるやうな、女の腐つたやうな男はお祖母さんは大嫌ひ」。

何だか蘆花の「生ひ立ちの記」にでも出て來るやうな愉快な話だが、一事が萬事、かうした行き方のスパルタ式で、寅次郎は幼い時からかう云ふ烈しい精神的訓練を受けた。他日彼が堅實な信仰生活に終始して、只管人格の修養に努めたのも、幼時に於けるりき女の薫陶が抑〻その礎石となつてゐたのであらう。

烈婦政子　渡瀬家は最初駿州の中澤田村に農家を借りてゐたが、明治五年、中澤田村と門地村とに士族長屋が建てられたので、中澤田村の方の長屋へ移り住んだ。これより嚮、明治三年八月、軍人志望で當時兵學寮資業生たるべく準備中であつた兄昌邦は、室政子を娶つたので、りき女は安心して實家へ引き揚げた。

政女の父は德川家直參の御腰物方同心、原田鐵之助で、政女はその次女として安政元年十二月に生れたのであるから、輿入の當時は十七歳の初々しい花嫁御寮であつた。花婿が十九歳、義弟が十二歳に九歳、これだけの水入らずの一家、「本當に飯ごとのやうな生活でした」と云ふ現存する

政子刀自の述懐は洵に微笑まれるものがある。

年こそまだ少女の域を出でぬ政女ではあつたが、一家の主婦としての彼女は、到底現代の女學校出の花嫁など足許へもよれぬ立派な教育をうけてゐた。夫昌邦に對しては貞淑なる妻として、親なき弟二人のためには良き母として、家事一切の切盛りから、弟達の勉學に對する心遣ひなど、到底二八の乙女と思へぬ甲斐々々しさであつたとは、未だに當時を知る人が三嘆して語るところである。

昌邦はその後明治四年三月沼津兵學寮の資業生となり、更に陸軍教導團を經て東京陸軍士官學校に入り、二十四歳にしてこれを卒へ、累進して陸軍砲兵大佐に至つて後逝き、庄三郎は札幌農學校を卒へて後理學博士の學位を得、東京帝國大學理學部教授となり、日本理學界の重鎭として一生を終る、寅次郎は日本農界に一生を捧げてこれ亦既に亡し。東京郊外世田谷の片ほとりなる隱宅に、今悠々たる餘生を樂しむ政子刀自、春の晨、秋の夕に、當時を思ひ出でては、轉々感慨に堪へざるものありと聞く。

沼津の教育機關

さて、こゝで敍述の筆を轉じて、當時に於ける沼津の教育機關の大要を述べやう。

明治元年九月、德川家士中の有志が相圖つて沼津城内の一隅に代戲館と稱する小やかな學校を創立して士人子弟の教育に努めた。これが今日の沼津小學校

の濫觴なのであるが、當時は寺小屋式の極めて小規模なもの、學科の如きも漢書、洋算の二科目に過ぎなかつた。

翌明治二年一月、德川家に於ては江原素六氏をして沼津舊城趾に兵學寮を起さしめ、同時に代戲館もその傍に移してその附屬小學校とし、學科も讀書、算術習字、體操と、範圍を擴めたのである。更に明治三年には靜岡藩小學校と改稱し、同四年には廢藩置縣が行はれて學校組織も變更、沼津小學校と改められた。明治五年に初めて學制の發布を見るや、翌六年一月、その制度に基き、小學集成舍と改め、茲に初めて公立小學校となつた。

次いで同年二月、更にその組織に變則科と云ふものを特設して、上級の教育を授けることになつた。これは上級教育機關たる兵學寮が明治四年に東京へ移されたため、その代用機關として設けられたのであつて、これがつまり今日の中學校の前身となつたものである。この變則科には十四歲以上の者を收容して、高級の英、漢、數、習字等の學科を課した。

寅次郎の入學と當時の生徒

さて、寅次郎は、明治元年に藤枝から沼津へ移つた時、代戲館へ入學し、更に變則科に學んだのであるが、變則科時代には短期間ながら寄宿舍生活をしたことがあり、當時同室であつた現明大豫科教授平井參氏は次のやうに語つてをられる。

「私は當時十五人ばかりの舍生を收容してゐた小學集成舍の寄宿舍で渡瀨君と同じ釜の飯を

食つたのであるが、その期間は僅々三箇月ばかり、私は渡瀬君から英語を教へて貰ひ、漢文は私が教へてやつたものである」。

して見ると、寅次郎は當時から英語に力を入れてゐたことが判るのである。

變則科の生徒の中には、土着の士分の子弟も、例の無祿御供で來た連中の子弟もゐたが、就中後者が多かつた。この無祿御供の子弟の連中は、世が世であれば天下の直參たる身分でゐられるのに、時勢の赴くところ、今はともすれば朝敵呼ばはりをされ、所謂勤王諸藩の輩から蔑視されると云ふ洵に不遇な立場にあつた。

かゝる事情から彼等の腦裡には幼少の頃から一種の反抗的觀念が培はれて、この觀念は長ずるにつれ、いつとはなしに熾烈な競爭心に變じて行つた。時勢は既に移つた、所謂勤王諸藩の者と相競つてこれに對抗し、これを打倒する途は、學問に志すに如くはない、我等が生くべき將來はそこにある——かうした考が彼等子弟の誰しもの胸に火と燃えてゐたから、その刻苦勉勵の狀は想像に餘りあるものがあつて、これがためこの變則科生徒の中からは後年幾多の人材偉傑が雲の如く輩出したのである。

寅次郎と英語

寅次郎も固より無祿御供の子弟組、烈々たる勉學の熱意は決して僚友に劣らず、年少ながら夙に青雲の志を抱いてゐたが、寅次郎が特に着目したのは英語であつた。

これから學問で身を立てやうとする者は、到底從來のやうに和漢の學ばかり修めてゐたのではいけない、どうしても外國語に精通する必要がある――寅次郎は常にかう考へてゐた。

寅次郎が英語を學んだのは、明治六年に變則科へ入つてからであるが、驚嘆に價する熱心さで、毎日、未明に家を出て、學校の門に近づく頃に漸く夜が白み初めると云ふ有樣、明治七年に外人教師が來て正式に英語を教へるやうになつてからは、その勉勵振りは一入增した。その頃寅次郎は、必要な本があると、士官學校在學中の兄昌邦から送金して貰ふのを常としてゐた。

嫂の情愛

或る時英語の讀本、ナショナル・リーダーが是非とも入用になつたので、兄へ請求して貰ふやうに嫂の政子に賴むと

「そんなに大切な本なら、あなたの將來のため、どんなに高價くても惜しくはありません。態々兄さんに申し上げずとも私が出して上げませう」

と、政子は當時にしては大金の五十錢を快く出して與へた。そのナショナルは二三分の厚味の薄い假綴本であつたが、少年寅次郎は姉の厚い志と共にこの小冊子を抱きしめて涙ぐんだと云ふ可憐な逸話さへある。

兩親と早く別れた寅次郎にとつて、兄昌邦夫婦は親に代るべき懷かしい存在であつた。札幌農學校へ入學して遠く北海の地に遊んでも、兄夫婦への便りは毎月缺かしたことはなかつた。

熊を解剖した話餅菓子を儉約して白砂糖を溶かしたのを皆でなめた話、人跡未踏の深山に植物採集に出かけた話、凡そ珍らしい體驗、面白い出來事は、細大洩らさず、折にふれては書き送つて兄や嫂を慰めたのだつた。官費生でも小遣は要るので、兄夫婦も心にかけては小遣錢を送つて寂しい邊土に學ぶ弟に不自由をさせぬやうにするなど、兄弟の情甚だ濃やかなるものがあつた。

當時の寅次郎

當時の變則科の生徒中には、まだ結髪してゐる者も稀にあつたが、寅次郎は坊主頭で、常に袴を着け、帶刀はしてゐなかつた。變則科で一二級後輩であつた小出半次郎氏は、當時の寅次郎の風格について次のやうに語つてをられる。

「渡瀨さんは年こそ若かつたが、當時既に立派な成人の俤があり、謹嚴にして冒し難い風格があつた。つまり人間がもう出來上つてゐたのである。かと云つて、俗によくある氣むづかしい氣取り屋では決してなく、一度接して見ると大變親切なおとなしい方であつた」。

第二章　農學校時代

大志を農學に轉ず

明治八年一月、渡瀬一家は、無祿御供で江戸を去つて以來、九年ぶりで東京へ歸つたが、寅次郎は學業の都合上獨り沼津に留まつて、金岡村は江原素六氏の塾で勉學を續け、三月に業を卒へて出京、更に官立東京英語學校に入り、こゝでみつちり語學の修業を積んだ。この東京英語學校とは大學豫備門の前身である。

翌明治九年七月、東京英語學校を卒業した。時に十八歳。本來ならこの學校を卒へると、當時の開成學校―後の東京帝國大學へ入るのが順序であつたが、寅次郎は

「自分は何となく農學に自分の將來が見出せるやうな氣がする」

とて、當時北海道に新設せられんとする札幌農學校を志望し、開拓使で募集した官費生の試驗を受け、榮譽ある合格者十一名中の一人に列したのであつた。

札幌農學校創立由來

こゝで少しく札幌農學校新設に至るまでの經緯を略說してをかう。

明治五年三月十四日、拓殖上必要な人物を養成する目的から、東京市芝區增上寺內に開拓使假學校を置き、全國的に生徒を募集して四月十五日開校式を擧

行したが、當時の生徒中には元田肇、江木千之、安川敬一郎、神鞭知常等、後年錚々の名を走せた連中もゐた。が、何しろ各藩から集まつた生徒である上、一般に年も老り、粗暴である上に校規を輕んじ、その半ばは外國語に通ぜず、到底所期の目的は達せられぬため、時の開拓使次官黒田清隆は遂に持前の癇癪を起して、明治六年三月十四日、遂に假學校を閉鎖して組織の根本的改革に着手した。

明治八年三月、東京假學校を北海道札幌に移すの議決し、同年七月校舍修築成り、假學校を札幌學校と改めた。これは學校を拓殖の目的地に轉じて教育上の能率を高めると共に、規模を擴大して驗てこの地に高等農事教育機關を樹立する準備をなすためであつた。機愈〻熟するや、明治九年三月、米國マサチユーセツツ農科大學長ウイリアム・スミス・クラーク博士を聘して新農學校の創立を委囑するに決し、クラーク博士はW・ホイーラー(William Wheeler) D・P・ペンハロー(David P. Penhallow)の兩バチェラ・オヴ・サイエンスを伴つて同年七月三十一日無事着札した。クラーク博士については項を改めて說く。

少年寅次郎の感懷

クラーク博士一行は、品川灣から開拓使御用船玄武丸に便乘して小樽に入港したのであるが、この時黒田開拓使長官初め東京で新たに募集した十一名の官費生も同行した。彼等は何れも北方開拓の雄圖に燃えて、東京英語學校より開成學校に進む

目前の坦道をとらず、校長初め諸教官の切なる諫止にも耳を假さず、斷然渡道の決心をした者たちである。勿論寅次郎も十一名中の一人だつたのであるが

「船は小さいし、僅か十八の年少を以て遠く蝦夷の地に向ふ、さすがに心細さを覺えたが、飜つて考へれば、內地に跼蹐する儕輩に先んじて遙か未開の地に志を伸ぶるのであるから、愉快極りなかつた」

とは、後年寅次郎が當時を追想しての言葉である。

クラーク博士は、着任するや直ちに札幌學校の內容に大改正を加へ、明治九年八月十四日、本邦最初の高等農事教育機關たる新學校の歷史的開校式は擧行された。これが北海道帝國大學の前身である。その札幌農學校の名稱を用ひたのは、同年九月八日以後のことに屬する。

偉人クラーク

マサチユーセツツ州アマスト、マサチユーセツツ農科大學長ドクトル・フイロソフイエー・ドクトル・オヴ・ロウズ・ウイリアム・スミス・クラーク（William Smith Clark, Ph. D., LLD.）の名は、札幌農學校創立史上不朽に留められるゝものたると共に、渡瀬寅次郎の生涯にも偉大な影を投じてゐる。寅次郎の信仰、寅次郎の修養は、實にクラーク博士の感化によつて大成されたのである。

黑田開拓使長官が札幌の新學校に米人教授雇傭の議を決するや、時の米國公使吉田清成に依

賴して高等農學校組織の衝に當るべき適任者を物色せしめた結果、クラーク博士はマ大學から一箇年間の賜暇を得て、札幌農學校教頭として赴任したのである。クラーク博士は着任早々自校マ大學の組織によつて教則を編成し、札幌學校は面目を全く一新した。まことクラーク博士こそ事實上の札幌農學校創立者なのである。

クラークと黒田長官

赴任途上、玄武丸船中で黒田長官はクラーク博士に向つて云つた。

「最高の道德(Highest Morality)を學生に教へて戴きたいと思ふ」。

「私は基督教以外に道德あるを知らぬ」。"I know no morality except Christianity."

クラーク博士は大聲に叱呼した。驚いたのは黒田長官、基督教を學校教育にとり入れることは禁制の當時だ。憤然として

「その宗教は禁制であります！」

と叫んで、斷乎としてこれを拒絶したが、クラーク博士は一歩も讓らず、なほも激論を闘はしたことは有名な逸話であるが、一說によれば、この論爭は上陸後のことだとも云はれる。何れにせよ、當初に於て教育と宗教の問題が紛糾したことは事實であつたが、その問題の解決は一時留保されたまゝ、クラーク博士は着々その信條に向つて邁進し、德化全校に及ぶに至つたので、一日學校を視察した黒田長官は、孜々として業務にいそしむ生徒たちを見て頗る滿足し、

「貴下の教育は必ず予の希望する有用なる人物を作り出すであらう。爾今、德育の問題は貴下に一任し、宗教の如何は問はざるべし」

と云ふに至つた。これより博士は大いに喜んで聖書を全生徒に頒ち、又、生徒たちのために日曜學校を起し、自ら青年の宗教的指導に努めた。しかしクラーク博士は徒らに黒田長官の立場を無視しやうとしたのではなかつた。最初の內は毎朝授業前に、聖書の數節を朗讀して基督教に關する主義及び信仰を說き、「主の禱り」を捧ぐるを教場の習慣としてゐたが、後、長官の意向を忖度し、遠慮してこれを中止した。着任の翌春、任期滿ちて出發に先立ち、自ら「イエスを信ずる者の契約」なるものを起草して、學生中の有志に署名を求めたところ、全級悉く署名して洗禮を受けたと云ふ。

Be gentleman!!

クラーク博士こそ近世罕に見る大人格者であつた。着任するや從來の校則全部を抹消して、Be gentleman !! (紳士であれ)の一條のみとし、身を以て全校學生の模範となつた。彼の精神は一に「紳士であれ」に盡きてゐたのである。すべてこれ人格的教育方針で、死んだ學問はさせず、人物を鍛へ、人間を作る——その熱と人格とは全校を感化せずにはゐなかつた。

全學生の欣慕

クラーク博士は修身科を設けず、全學科卽修身であるとした。全學生は飮酒、喫煙、博奕、スワリン(瀆神の語)を禁ずる連判狀に署名し(明治九年十一月)、クラーク博士は

藥用として本國から持ち來つた葡萄酒を悉く粉碎すると云ふ劇的光景まで演ぜられたのである。教へ導く者はかゝる氣宇高邁の人傑、四圍はこれ未だ人跡罕なる北海の廣漠たる大原野、誰かかゝる環境の中にあつて偉大な精神の陶冶されぬ者があらうか。黒田長官が視察に來て全校學生の肅然たる氣風にいたく打たれたのも尤もなことであつた。

或る時のことであつた。彼は生徒たちを連れて植物採集に出かけたが、ふと見ると高い崖の上に珍らしい蔦が絡んでゐる。取らうとしたが誰も手が屆かない。暫く考へて居たが、彼はいきなりそこへ四ン這ひになつて

「黒岩(四方之進)君は一番背が高いから、私の背中に乘つてあれを取れ」

と云つた。彼がよく青年の氣持に同化して、その德を及ぼしたことを示すによき挿話である。

Boys, be ambitious!!

クラーク博士は在任八箇月、明治十年に歸米したが、この短期間にも拘らず、その人格、その精神力の學生を感化したことは非常なものであつた。去るに臨み、職員學生一同馬首を列ねてクラーク博士を札幌の南六里、膽振國島松驛に送つたが、歡談數刻愈〻袂を分つに當つて、クラーク博士はやをら南部産の駿馬に跨り、"Boys, be ambitious!!(青年よ、大志を懷け)の名句をかたみに、一鞭を加へて疎林の彼方に姿を沒したと云ふ話は今に語り草となつてゐる。次の詩はその時一行の中にあつた、後の農學士、文學博士大島正健氏が、十八歳の若

き感激を籠めて作つたものである。

送クラーク先生之歸國

青年奮起立功名　馬上遺言籠熱誠
別路春寒島松驛　一鞭直蹴雪泥行

クラーク博士は歸國して十年、六十歳にして永眠したが、訃報傳はるや、農學校では全校その業を休んで追悼會を催した。札幌市に聳り立つクラーク會堂も亦クラーク博士が宗教的感化を偲ばしむる一象徴であらう。

初期の農學校風景

寅次郎が入學當時の札幌農學校では、學生の大半を寄宿舍に收容した。その寄宿舍は一室を二人に充て、テーブル、椅子、ベツド各二個、戸棚及びストーヴの設備があつて、簡素ながら極めて愉快な生活であつた。そして學生は何れも自重して言行を愼しみ、學業に精勵したのである。

食事には特に注意し、朝夕は洋食、晝は和食で、貨幣の價値が今日の十倍以上であつた當時、八圓十錢の食費を支給されてゐたのであるから、榮養甚だ豊富で、學生の元氣は頗る旺盛であつた。

クラークの獨立自營的訓練

クラーク博士は學生に獨立自營的訓練を施した。卽ち、學生には隔日三時間の實習が課せられたのであるが、一時間につき五錢―卽ち合計十五

錢（これは今日の一圓五十錢より價値がある）の勞働報酬を支給して、勞働と金錢の價値を知らしめる一端とし、又二年生になると、一學生毎に二百五十坪の畑地を貸與し、馬鈴薯、玉蜀黍、甜菜の內一種を試作せしめ、その總收入の內から借地料、農具及耕牛借入費、種苗及肥料代等を控除して、その純益を支給されたが、最高四十餘圓から最低十五圓位の收入があつたと云ふ。更に、各學科につき成績優秀なる者には、一等十圓、二等五圓の賞金が支給されたのである。

札幌農學校出身者中に獨立の事業に携はる者が多く、又農學を專門に攻究してゐる者に對しては當時未だ經濟的恩惠が甚だ少いのを常としてゐたにも拘らず、何れも相當に成功してゐるのは、如上のクラーク博士の訓練が與つて力あること、蓋し尠少であるまい。寅次郎が後年東京興農園を創めて種苗及農具等の販賣事業に從事したのも、この頃の訓練に影響さるゝところが多い。

農學生時代の寅次郎

寅次郎の人格はクラーク博士によつて陶冶された。クラーク博士の感化によつて基督敎を信奉し、入學後一年、明治十年八月、函館から札幌へ來た米國名譽副領事たる宣敎師M・C・ハリスの洗禮を受けて、爾來信仰の生活に入り、機會ある毎にこれが傳道を怠らなかつた。

學徒としての寅次郎は固より勤勉であつた。その頃の級中の模樣を回想する第一期生の話

によれば、同級生の内荒川重秀、佐藤昌介の兩氏は常に首席を爭ひ、大島正健氏は、終始第三位を保持し、第四位及び第五位は常に黒岩四方之進、小野兼基、内田瀞の諸氏及び渡瀬寅次郎の爭ふところとなつてゐた。數學を得意とした黒岩氏、幼時より西洋婦人について學び英語に秀でゝゐた内田氏等に拮抗して屢〻その牙城に肉薄した寅次郎は、實に不撓の努力と不斷の勤勉とを以てこの成績を擧げてゐたのである。

當時の寅次郎は何れかと云へば野心的な華やかな歩み方は採らず、飽までも一歩々々堅實に進む方であつたから、すべてが確實で間違ひがない。殊に實行力に富み、實地に勝れてゐたから、開拓事業に好適な人物を養成する學校の目的に洵によく適つてゐた學生だつたと云へやう。

質素は偉大なり

當時開拓使から出る小遣錢が一週間に十錢、これで石鹸も買ひ、手拭も求め、頭を刈り、入浴までしたのである。寅次郎は早くから孤兒となり儉約の念が常に頭にあつたらしく、右の小遣のうちから貯蓄して、卒業する時に金時計を買つたと云ふ話がある。多も餘程塞くなければストーヴを焚かなかつたさうである。後年大成してからも「質素は偉大、偉大は質素だ」と云ふモツトーを堅く守り、品格を持する以上の贅澤をしなかつたのも若い時からの修練と主義によるものであつた。

寅次郎の

英語を得意とした寅次郎は、在學中に前後二回英語演說を試みてゐる。第一回

英語演說

は明治十年七月四日、學年末に行はれた農學校創立第一回記念公開演說會の時で、演題は“Health essential to Success.”この時は出演者八名中、七名まで英語演說で、大島正健、佐藤昌介等の諸氏の顏觸れも見える。第二回は明治十一年七月三日大試驗終了式（これは當時「演藝式」と云つたもので本來「第二年演藝」と云ふ）當日のことで、演題は“Self Dependence.”如何にも謹直な寅次郎らしいタイトルである。この時にも佐藤、大島、內村諸氏の名が見えるが、この人々はこの頃から雄辯家だつたのであらう。

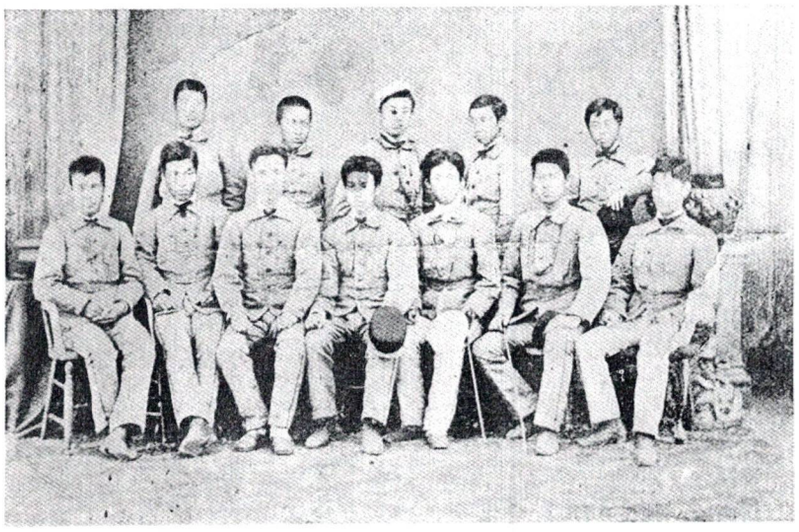
盟友の眞情

その頃一級下には太田稻造（新渡戶）、內村鑑三等の諸氏がゐた。當時の生徒は數も少く、特殊な環境に學んでゐたので、皆よく兄弟のやうに和合して、荒凉たる原野に美しい友情の花を咲かせたものであつた。後年、それ〴〵世に出でゝ名を成してからも、各地に札幌同窓會支部を設立して折に觸れ、事に當つて相睦み相扶け、盡きぬ歡談に昔を偲ぶを常とした。殊に寅次郎は同會東京支部長として、熱心に同窓の親睦、後輩の斡旋に盡瘁し、永年その聲望を謳はれたものであつた。

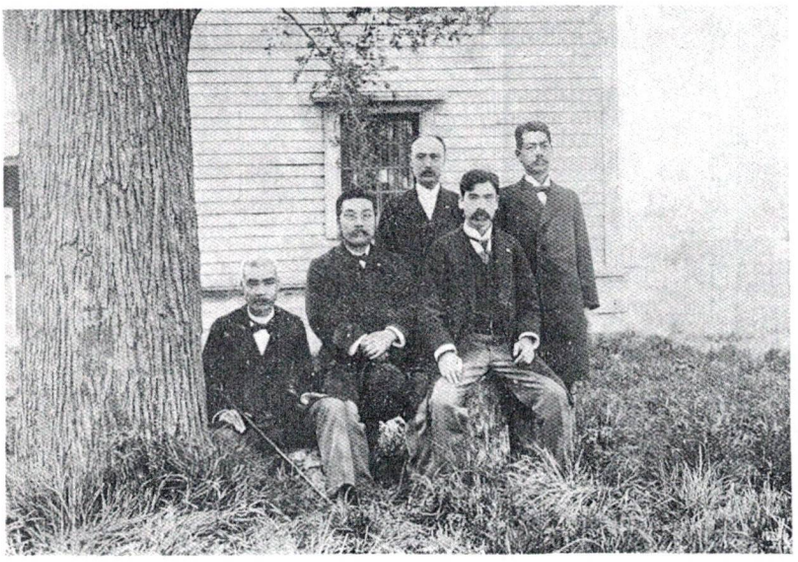
本邦最初の農學士十三名

明治十三年七月十日、札幌農學校第一回卒業式が擧行され、同窓十二名（內、大島正健、黑岩四方之進、佐藤昌介、內田瀞、田內捨六、中島信之、出田晴太郎、柳本通義、山田義容及び玉置某の十氏は東京からクラーク博士に從ひ來札した人々。猶山田、玉置の兩氏は半途退學。又、荒川重秀、小野兼基、伊藤一隆、佐藤勇の諸氏は札幌學校から試驗によつて選拔せられた人々）と共に、白面の一青年渡瀨寅次郎は、代戲

館以來十有二年、茲に螢雪の功成り、二十二歳にして本邦最初の名譽ある農學士の學位（當時は「稱號」と云はず）を受けたのである。



明治十三年札幌農學校卒業記念
前列・(右より)荒川重秀、黒岩四方之進、伊藤一隆、渡瀬寅次郎、佐藤昌介、小野兼基、内田瀞
後列・(右より)出田晴太郎、中島信之、柳本通義、大鳥正健、内田捨六(この内に佐藤勇を缺く)



明治三十四年五月十五日、札幌農學校創立二十五年祝賀會の翌日、演武講堂の裏手に於て、當時札幌に居合はせたる同級生と共に撮影せるものなり(裏紙に記入せる寅次郎自筆の説明文・原文通)
右より 黒岩四方之進、渡瀬寅次郎、佐藤昌介、佐藤勇、内田瀞

札幌を思ひ出づる集ひ（大正五年頃）

前列（左より）伊藤夫人、渡瀬香芽子、内田夫人
後列（左より）佐藤昌介氏　内田瀞氏、伊藤一隆氏、柳本通義氏、渡瀬寅次郎

第三章　在官時代

青年技師の二功績

寅次郎は卒業した年、卽ち明治十三年の七月、開拓使御用掛を拜命し、民事局勸業課詰として拓殖勸業に關する事務一切を取扱ふこととなつたが、爾來明治十七年に至る四年間を專ら北海道農業振興のために捧げたのであつた。任官して三箇月目、明治十三年九月、北海道十勝國から飛蝗の大群が現はれ、その被害、十勝、日高、膽振、石狩の四箇國に及び、勢猖獗を極むるの報に接した當局は、寅次郎に命じてこれが驅除法調査をなさしめたので、寅次郎は十月被害地を巡視して、具さに被害狀況視察の上、歸來直ちに海外に於ける驅除法を研究し、これを參考として驅除法草案を作成、上司に提出した。

開拓使當局、卽ちこれを採用して、翌十四年、太政官に請ふて驅除費四萬圓の交附を受け、寅次郎は、農商務省の出張官と協力して、爾來四年に亙つて害蟲驅除方指導の任に當り、遂にこれを殲滅せしめたのである。就任早々先づ功を樹てた次第である。更に、同年十月、寅次郎は現北海道農會の前身たる北海道勸農協會設立の議を提唱して、札幌官民の贊同の下にこれを創設、自ら幹事の椅子について諸般の事務を見た。學窓を出でて未だ日淺き二十三歳の若冠にして、彼此の提

案朝野の迎ふるところとなる、青年技師寅次郎の胸中、蓋し欣快に堪へぬものがあつたであらう。

結婚 札幌を去る

翌十五年二月、開拓使廢止されて、札幌縣、函館縣、根室縣の三縣が置かれ、普通行政は內務、司法等の各省これを管轄し、農商務省に北海道事業管理局を置き、農工關係の各種事業を監督したが、その中には札幌農學校も含まれてゐた。これと同時に寅次郎は札幌縣御用係となり、勸業課詰たること舊の如くであつたが、この年も飛蝗驅除と農事奬勵の用務を兼ねて、再び北海道各地巡視の機會を得た。その翌十六年、埼玉縣忍町の士族相田新助の五女香芽子を娶つて室とし、翌十七年七月、札幌縣御用係を依願免官となり、こゝに農學校入學以來九年に及ぶ想ひ出多き札幌の地を後にすることとなつた。

英國へ渡る

次いで同年九月、農商務省御用掛を拜命して北海道事業管理局事務取扱となつた。當時の局長は安田定則氏、勅任御用係として松本莊一郎氏（工部省大技士で管理局長は兼務、前商相松本丞治氏の父）や、その他鈴木大亮氏は大書記官として在任した。越えて十二月、安田局長が英國倫敦で開催さるべき萬國發明品博覽會の事務官長として渡英するに當り、これが隨行を命ぜられ、翌十八年一月同博覽會事務官補に任じ、且つ農商務省博覽會係事務取扱をも兼ねたが、同年三月、渡英に先立ち、更に文部省から英國農學校に關する調査を委囑されて文部省御用係兼務となつた。この農學校調査については、森有禮氏から特に依頼さるゝところがあつたが、後年寅次郎が森氏の

開拓使勤務時代

「相田大兄に呈す、渡瀬寅次郎、明治十六年四月」と自署あり

（二十五歳）

ロンドンにて

右より安田定則氏、渡瀬寅次郎、尾崎逸足氏

（二十七歳）

知遇を得て、同氏の教育制度新計畫に際し、水戸師範の校長に拔擢さるゝに至つたのも、蓋しこの時分からの關係であらう。

歐米巡遊の收穫

博覽會に於ける寅次郎の仕事は、出品に關する事務取扱や、出品物の說明に當る役で、得意の英語がこゝで大いに役に立つたわけである。この博覽會では功勞賞を授與された。かくて博覽會終了するや、英國に於ける農學校の調査も終へたので、歐洲各國を巡遊し、農事に關する諸般の施設を視察したが、この時寅次郎が日本と歐米諸國の農業を比較して特に痛感したのは、種苗及び農具供給者の知識及び實力の懸隔が餘りにも甚だしいことで、後年寅次郎が野に下つて東京興農園の事業を創めた抑々の動機は、既にこの頃に胚胎してゐたのである。

佐藤氏と舊交を暖む

かくて、米國を經由して歸朝したのは、翌十九年の春四月であつた。この滯英中、舊友佐藤昌介氏が獨逸漫遊の歸途、英國へ立ち寄つたのに偶然邂逅し、農學校卒業以來、親しく相見ゆるの機を得なかつた親友二人は、互にその奇遇を喜こび、暫らく倫敦で下宿を共にして大いに舊交を暖めたのであつた。

歸朝後育英界に入る

寅次郎は歸朝後暫く博覽會の殘務整理に當つてゐたが、夙に寅次郎が英國へ隨行し、その後茨城縣知事になつた安田定則氏が、寅次郎を茨城縣へ是非

と懇望したので、寅次郎もその知遇に感じてこれに應ずることとなつた。

かくて明治十九年八月、年齒二十八歳にして、茨城縣立水戸中學校長兼一等教諭に任ぜられたが、これ寅次郎が育英界に身を投じた最初である。寅次郎は鋭意中等教育の理想的刷新と發達に努むる傍ら、縣下の産業改良に着眼して、寸暇を偸んでは縣下産業狀態を視察した上、同縣下に實施し得べき産業上の新施設は漸次これを實行するやうに安田知事に進言し、極力縣産業の振興を圖るところがあつた。茨城縣で明治二十一年から實施して、成績大いに擧つた農事講習會及び耕地整理、さては縣下有力者を勸說して興した常總農會の如き、何れもこの當時に於ける寅次郎が努力の一端の現れである。

英語と體育に主力

教育方面では先づ主力を英語に注ぎ、米人クレメント及びフイツシヤー等を招いて正則英語の教授に當らしめた。更に注目すべきは體育に心を用ひた點である。卽ち、クレメント等を師範として野球やアスレテイツク・スポーツの奬勵に努め、毎年春秋二回、水戸の弘道館馬場で大競技會を開催するなど、當時としては珍らしい體育方針で、中等程度の學校でかゝる新式スポーツを採用したのは、蓋し水戸中學校を以て最初とするであらう。アスレテイツク・スポーツに就いては、抑〻寅次郎の母校札幌農學校に於て、明治九年米國より招聘されたクラーク博士が學制の制定に當り學課として兵式體操を實施することゝなつた際、そ

の體操の時間に陸上競技（アスレティックスポーツ）をも教へたのが、日本に於ける陸上競技の起源であり、明治十一年同校に於て我が國最初の競技會が開かれたとされてゐるが、蓋し寅次郎が水戸中學に於て、かゝる新式の體育方針を取つたのは、やはりクラーク博士の方針に則つたものであらう。當時の生徒の中には、今日財界の第一線に活躍する井坂孝氏、通俗小說で大成した菊池幽芳氏、名力士常陸山谷右衞門氏等がゐた。信仰の方面でも水戸では大いに活躍したのであるが、これはその章に讓る。

森文相の教育制度刷新

森有禮氏が文部大臣當時、師範教育に力を注いで、帝大派から酷く反感を買つたことは相當有名な話である。森氏としては、强ち帝大派を蔑視する意圖もなかつたのであらうが、帝大派としてはかなりの打擊と云はざるを得なかつたのである。が、森氏の炯眼は、そんな小さな問題より、もつと大局を見てゐた。

將來に於ける日本の發展は國民教育の振興確立に俟つよりない——森氏はかう云ふ堅い信念から、國家的大精神から、教育組織の大改革を企圖したのである。さて、愈〻これが實現を試みるには、先づ第一に師範教育の改善を急務としたが、それには何よりも第一流の人物を師範學校長の椅子に据えねばならぬとあつて、各方面を愼重に物色した結果、茨城縣下では寅次郎に白羽の矢が立つた。玆に於て、寅次郎は茨城縣水戸尋常師範學校長を命ぜられ、縣學務課長を兼任、且つ公私立小學校教科用圖書審査委員長及び習字本編輯委員長に選ばれた。この兩委員會につ

いては、書肆との關係上、忌むべき風評各府縣に少なからず、終に後年所謂教科書疑獄が白日下に暴露されたが、寅次郎在任中は堅く相戒めて情實一切を排除したので、委員中一の醜聞を受けた者さへなかつた。寅次郎、時に三十歳、明治二十一年五月のことである。

森文相の死

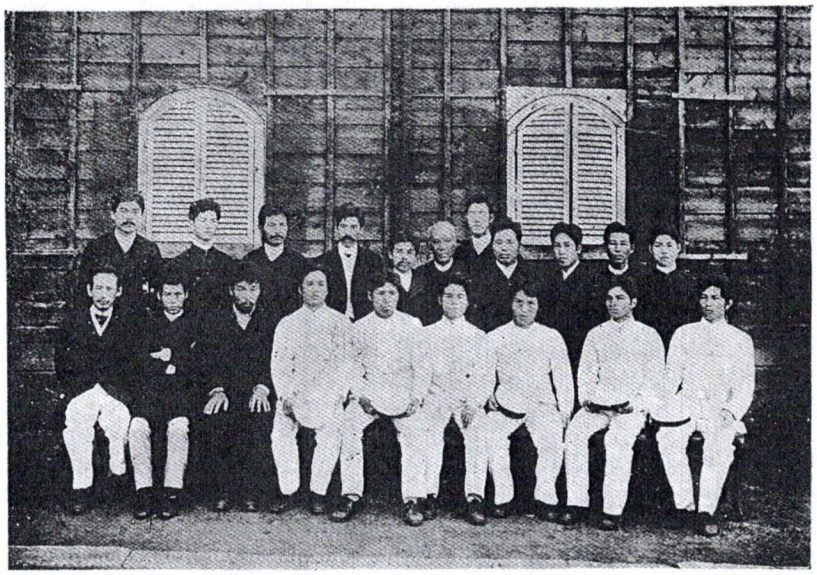
明治二十二年二月十一日、紀元の佳節を卜して行はれた憲法大典發布の當日、この曠古の大典に列するため豫ねて水戸から上京してゐた寅次郎は、早朝森文相を訪れ、要談をすませて別れると間もなく、「森文部大臣兇漢に刺さる」の飛報は迅雷の如く彼の耳朶を打つた。若輩の身ながら森氏から信賴さるゝこと頗る厚かつた寅次郎にとつて、森氏の兇變こそ轉ゝ感慨無量なる若き日の思ひ出となつたのである。

寅次郎の校長としての面目は、彼が師範學校長を辭した前後の事情に於て、眞に躍如たるものがある。

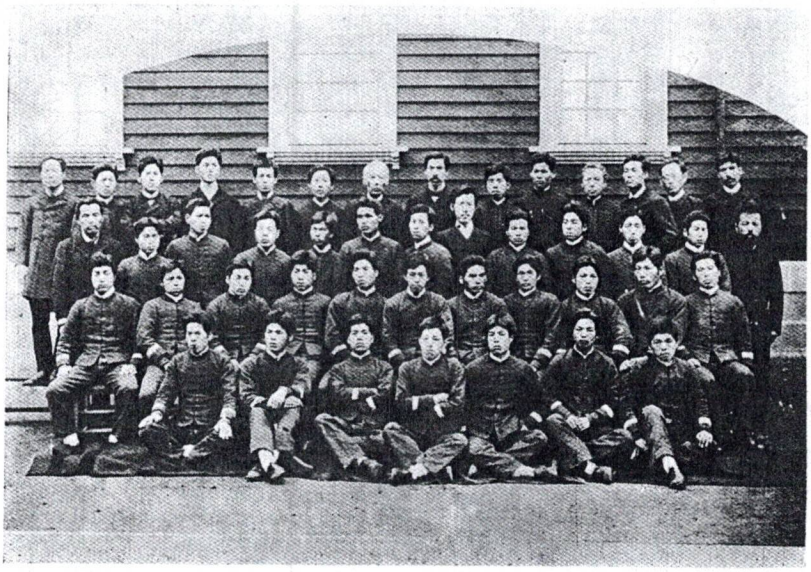
青年校長排斥運動

寅次郎が師範學校長に就任して間もなく、その年の十月末から十一月にかけて、約一週間の豫定で上級生徒が筑波山方面へ修學旅行に行つたが、この時生徒中の不良分子が遊廓に遊んだことが露はれ、こゝに容易ならぬ風紀問題が持ち上つた。固より峻嚴な渡瀬校長のことであるから、直ちにその生徒等を退校處分に附し、一方、當時の引率者たる體操教師某も馘首さるゝに至つた。然るにこの體操教師は陸軍の教導官で、生徒の信望比較的厚

青年校長二題



水戸中學校長時代（後列左より四人目・貢次郎）



水戸師範學校長時代（最後列中央が貢次郎・その右が清水由松氏）

く、ために同教諭が主任であつた三年生は結束して同教諭の復職及退校生徒の復校運動を開始し、一方に於て一、二、四の三學年生徒は、學校側に味方して、交〻知事邸へ押し寄せるなど仲々の騒ぎになつた。で、結局三年生は全部放校處分に附せられたのであるが、この機逸すべからずと北叟笑んだのが、豫ねて若冠校長寅次郎の下風に立つを喜ばなかつた修身の教師某であつた。

もと〳〵寅次郎が一校を統率する教育家の立場として、なすべき當然のことをなしたのであるから、さまで事件の擴大する筈はなかつたのであるが、前記教諭某は奇貨措くべからずとし、寅次郎を放逐して自ら校長たらんとする野望を遂げんものと、裏面にあつて盛に血氣の生徒を煽動したので、忽ち事が大きくなつたのである。そして某は安田知事に面會を求めて

「もし私に委せてくれゝば、生徒は自分が必らず鎭壓して見せる」

と、暗に自分を校長の後釜に自薦したものである。しかし、安田知事も流石に具眼の士、早くも彼の陰謀を察知して、その言に耳も藉さず、却つてこれを免職處分とし、一方これを寅次郎に告げたから、某は籔蛇の形で引き込んだのであつた。この男はその後何れかの師範學校長になつたが、陰謀家遂に終りを全うせず、教科書疑獄に連座して失脚したと傳へられる。

千萬人と雖も我行かむ

しかし、三年生全級の放校は儼然たる事實であつた。この斷乎たる寅次郎の處置に驚愕したのは、父兄及び生徒である。原因を洗へば非は固より生徒に

ある。寅次郎はまだ三十一歳、前記某等の煽動もあり、若輩何するものぞと侮つてゐた彼等も、寅次郎の秋霜烈日の慨ある處分を見て、今更ながら狼狽措くところを知らなかつた。寄り〳〵協議の結果、父兄連は相謀つて縣會議員の力で生徒の復校運動を始めやうとした。當時の師範學校生徒は官費生であつたから、縣會議員の威光も相當に利いたものである。が、胸中祕かに期するところある寅次郎は、縣議連の要請も言下に却けた。

硬骨敎諭の直言

そこで、今度は縣議連が策動して安田知事を動かし、寅次郎を說得させやうとした。蓋し寅次郎が安田氏に重用されてゐるので、否やを云はせまい魂膽なのであつた。然るに、安田知事は、今も昔も餘り變らぬ所謂萍(うきぐさ)の知事勤めの情なさ、殊にその時代の政情は縣會議員の勢力が强大で、その云ふことなら御無理御尤もで聞かねばならぬ事情もあつたであらうが、兎も角安田知事は唯々諾々として屬僚を隨へ、自ら學校へ出向き、こゝに知事、校長以下職員一同の協議會と云ふ一中等學校の紛擾解決には一寸類例のない會議が開かれたのである。

これが處分後五日目のことであつた。安田知事は、開口一番

「生徒は既に悔悟してゐる。この際復校を許可した方が穩便だらう」

と、劈頭から高壓的態度に出た。これを聞いて猛然と席を起つたのが硬骨を以て鳴る清水由

松教諭である。

「知事閣下は彼等が悔悟してゐると云はれますが、何か御信念があつてのお言葉ですか」。

「いや、縣會議員の諸君が來てわしに保證して行かれたのぢや」。

「それはいけません。かゝる問題に縣會議員が容喙することは、とりも直さず縣の政治と教育とを混同せしむるものです。換言すれば、神聖なるべき教育のことを、政爭渦中に投ぜんとするものです。教育當局が是と信じて斷行したことに對し、何の定見もなく縣會議員が自己地盤の擁護と云ふ陋劣な心事から知事を動かして徒らに朝變暮改せしめんとする、教育界惰落の一歩はこゝに始まる、抑々今回の事件……」。

「默り給へ」。

安田知事は面上朱を濺いだ。

「何を生意氣な。縣の教育は縣の政治の一部ぢや。餘り勝手な眞似をされては迷惑ぢやからわしが乘り出したのぢや。それを何だ、一教員の分際で。免職するぞ」。

「免職結構です。しかし」

と、再び起たうとする清水教諭の上衣の裾を輕く押へたのは、校長の寅次郎であつた。

「清水君、待ち給へ。どうです、安田さん、折角御來駕下すつたのに恐縮ですが、一つ我々の間で協

議した上で、あなたと更に御相談した方がよいと思ひますが……」。

「うむ。それもよからう。ぢや、わしは一先づ歸るから、君が後刻來るがいゝ」。

そのまゝ進めば、當然波瀾萬丈の氣運を釀すべき氣配を感じた寅次郎は、一先づその場の空氣を緩和させたのである。が、それから數刻、校長室では寅次郎と清水教諭が默々として相對してゐた。この清水氏は、寅次郎がその人格を見こんで茨城師範へ推薦したほどの人物、後、寅次郎の推薦によつて麻布中學校教頭となり、更に江原素六翁の後を襲つて同校々長の椅子に就き老來なほその職にあつて育英界のために盡してをられる。

寅次郎は暫らくして云つた。

「清水君、君の意見は全く私の意見と同一だ。安田知事の考は根本から間違つてゐる。眞の教育なるものは、縣の俗吏に支配されてゐるやうでは到底出來ることではない。もしやるなら、自分で學校を經營して自から信ずるところを行はねば駄目だ」。

「さうですとも」。

「私の肚は先刻知事の言葉を聞いた時にきまつた。後事は宜しく……」。

「いけません。私もこんなところに戀々たるものではありません。卽刻、辭表を書きます」。

窓外には風がまた寂しく吹き過ぎて行つた。

かくて、學校側の態度緩和の返事を欠伸と共に待つてゐた安田知事の前に屆けられたのは、寅次郎初め、これに殉ずる清水、本間（小左衛門）、小林（錠之助）の諸教諭の辭表であつたから、安田知事は驚いた。教諭連は兎も角、自ら片腕として懇望し、信任すること頗る厚い寅次郎が率先して辭意を表明したのであるから、知事としても餘りに事が大きいのに今更愕然としたのである。

磐石の決意

豪傑肌の人で、短氣で、直ぐ赫ツとなる性格の安田知事は、又、三省して己れに過ちあれば改むるに憚かるところなき人物であつた。この小事件が自分の最も信頼する寅次郎の辭職問題にまで波及しやうとはかけても思はなかつたから、當然の結果として、寅次郎の辭表は却下され、手を替へ品を代へて慰留の策を講じ、遂には文部省から檜垣視學官が水戸へ態々出張して來て寅次郎を說いたが、寅次郎は飜意しなかつた。苟くも正義に反し、己が主義主張と相容れざるものは、假令如何なる權勢が壓迫を加へやうと、斷じて屈服せぬ、名譽も利益も拋つて自己の信ずるところへ邁進する。これが少年時代から叩きこまれ、クラーク博士に薫陶された彼の眞面目であつた。一と度自己の信ずるところを行へば、如何なる手が伸びやうと、斷じて彼の意志を飜すことは出來なかつた。

永久に官學を去る

辭表を提出して、愈〻これが受理されるまで實に半歳、明治二十二年六月、漸く希望通りに依願免官の辭令を受けて東京へ歸つたのである。その後更に文部大臣や學務局長から、他の師範學校長に就任すべき勸說を受くること屢〻であつたが、寅次郎は

「自分は元來本邦の農業振興のため、野にあつてこれに盡瘁せんとする素志であつた。しかし安田知事の懇請があつたため、この素志貫徹の機が遲れたのを甚だ遺憾としてゐたのであるから」

と、固辭して再び受けなかつた。

その後寅次郎は、平岩愃保氏の請によつて東洋英和學校に教鞭をとり、又、望まれて東京學院々長ともなつたが、官學には絕對近づかなかつた。蓋し、官學は政治に汚濁されるものと信じた彼は、これに職を奉ずることを屑しとしなかつたのである。

第四章　日本農界のために

大日本農會役員として

――冀くは野にあつて日本農業の振興のために。

寅次郎がこの希望は、水戸師範辭任後半歲、明治二十二年十一月、高島千畝氏の後任として大日本農會特選幹事を命ぜられ、更に同月同會農藝委員に委囑されたことによつて、早くも實現への第一歩を踏み出した。越えて四年、明治二十五年一月、同會常置議員（この名稱は明治三十五年十一月第二十一回總會に於て常議員と改む）に當選、爾來何れも引き續き重任してその職に竭した。

明治二十七年、大日本農會に有功章の規程成り、紫白綬有功章を最高とし、以下紅白綬、綠白綬の順位制定さるゝや、先づ同年十二月同會北白川會頭宮殿下より夙に農事に盡した功によつて綠白綬有功章を授與され、更に明治三十三年四月、同會小松總裁宮殿下より「夙に農學を修めて勸誘啓導苟も懈らす且本會議員委員等に歷任し又常務幹事の職に膺り勵精盡竭其功勞頗る顯著なりとす仍て茲に大日本農會の有功章を贈與し以てその名譽を表彰す」と云ふ表彰狀と共に、紅白綬有功章を授けられた。これに對し重孝翁なる人が同年七月の興農雜誌に次のやうな歌を寄せてゐる。

たみくさのたかやしわさもふみことも
つくすいさをはあらはれにけり

同年十一月十日、寅次郎は北米大陸視察の途に上り、翌三十四年春歸朝するや、同年四月七日に於ける大日本農會第二十回總會席上、小松總裁宮殿下の御前に於て「米國視察所感」と題し、次の如き要旨の演說を試みた。

米國の產業の進步隆々たるは、曰く機械の應用、曰く農業敎育の普及、曰く共同團結心の發達等等、その原因多々あれども、最も大なる原因にして我等に著しく眼についたのは、米人のよく働らくことである。實に米人一人がスペイン人又は伊太利人十六人、エヂプト人二十人、印度人二十五人、支那人三十人と、その勞働の功程相匹敵するは信じ難い程の話である。この米人が近來著々米作改良を企て、やがて日本にも米を輸出せんと傲語せるは恐るべき問題であつて、この外菜業なり、砂糖なり、凡ゆる殖產に熱心で他國を壓倒せんとしてゐるのを見れば、日本農家たるもの、枕を高うして惰眠を貪ることは決して出來ない。

明治三十七年五月一日、大日本農會第二十二回大集會席上で「軍國の農會」なる題下に演說したが、これは記錄要旨がない。この頃寅次郎は役員として會務に盡す傍ら、或ひは講師として各地の招聘に應じて出張講話し、或ひは歐米の農業關係文獻の重要記事を譯述して農會報の資料供給に努めるなど、當時僅かに車代を辨ずる程度に過ぎなかつた報酬に對してその獻身的奉仕は

農會關係者を感激せしむるものがあつたといふ。殊に彼が札幌農學校出身の身を以てよく駒場出身者の間に伍し、所謂學閥を超越して努力を惜しまなかつたことは、遍に彼の大日本農會に對する熱誠が然らしめたものである。卽ち、大正二年十月、富山縣主催一府八縣聯合共進會に於て、多年農事に對する功績顯著なりとして、農商務大臣山本達雄氏より功勞賞銀牌を授與され、又大正三年十二月、同農會伏見總裁宮殿下より「夙に農學を修めて研鑽應用に力め、學理を闡示し實務を啓導し其貢獻する所洵に多し且嘗て大日本農會の常務幹事に膺任し常議員農藝委員に歷任して又克く其職に盡し勵精多年斯業の振作を贊襄し功績特に大なりとす仍て更に大日本農會の紫白綬有功章を贈與し以て其名譽を表彰す」と云ふ表彰狀と共に有功章の最高峰たる紫白綬有功章を授けられた。

大日本農會は大正五年六月に社團法人組織に變更されたので、定款を定めて、寅次郎は理事に選任された。かくて寅次郎は、初めて大日本農會に關係して以來、實に三十有一年の長きに亙つて同會の要職にあり、眞に已むを得ざる事故の外は各集會の席上にその顏を見ざることなしと云ふ恪勤の範を垂れて、大正十三年春、めでたく農會の舞臺から退いたのであつた。

東京農學校の大成まで

大日本農會と關聯して寅次郎の生涯から疎外する能はざるものに東京農學校がある。

東京農學校は、元來明治二十四年三月、舊幕臣及び舊靜岡藩士が相倚り、榎本武揚子を校主として東京市麹町區飯田河岸に設立した育英黌農業科を濫觴とし、明治二十六年五月に農業科が獨立して東京農學校と改稱したものである。次いで翌二十七年十月、榎本子は同學校を讓り受けて獨力これを經營したが、明治三十年一月、榎本子は學校を擧げて大日本農會に讓渡し、こゝに大日本農會附屬東京農學校と稱するに至つた。明治三十四年七月、大日本農會附屬東京高等農學校と改稱、更に同四十一年には單に東京高等農學校と稱したが、經營者は依然として大日本農會であつた。次いで明治四十四年十一月、東京農業大學と改稱し、校運隆々として大正十四年五月遂に大日本農會の經營を離れ、財團法人東京農業大學として、こゝに多年の宿望成り、大學令による大學設立を認可されて今日に至り、私學一方の雄として認めらるゝに至つたのである。

寅次郎が東京農學校の評議員になつたのは明治二十六年、東京農學校獨立當時で榎本子の管理に移るや、明治二十八年一月、押川則吉、横井時敬の諸氏と共に同校教務委員を囑託された。明治三十年、同校が大日本農會の附屬校となるや、寅次郎は商議員となり且、移管に際しての調査及び整理委員に選ばれた。商議員の任には同校が大日本農會の經營を離れるまで在職してゐた。學生に農業經濟や經濟原論を教へたこともあるが、これは單に科外講師として教壇に立つたに過ぎない。しかしながら、殆んど創立當初から面倒を見て來た同校が、寅次郎の死の前年に昇格

したことは、洵に奇しき因緣であつて、寅次郎としても、生みの親、育ての親となつて慈しんだ子が立派に成人した安堵と愉悦を禁ずる能はざるものがあつたらうと思はれる。寅次郎が創立以來東京農學校のために盡した功績に對し、大正三年十月、大日本農會伏見總裁宮殿下には特に銀杯を賜つてその勞に酬いられたのである。

日本園藝會評議員として

寅次郎が日本園藝會の評議員に選ばれたのは、明治二十六年のことで、當時の會長は花房義質子、この會は非常に有名な會だから敢てこゝに贅言を要せぬが、寅次郎は明治三十六年同會規則改正が行はれるまで前後十年、評議員として盡したのであつた。恰かも明治三十一年十一月二十七日、同會が大隈伯邸内で開かれ、評議員の半數改選あり、寅次郎外五氏當選次いで大隈伯及び寅次郎の講演があつたが、寅次郎は「害蟲驅除につきて」の題下に左の論旨を述べた記錄がある。

斯業者が熱心なる志操と熟練なる伎倆を有しながら、害蟲の驅除豫防に餘り深く注意せざるため、多年苦心生育せしめたるものを忽ち枯凋せしめて塵芥と共に遺棄するに至りては痛嘆の外なし。これ畢竟害蟲驅除豫防方法を研究せざるがためのみ。故に既に學識あり經驗ある本會員は進んでこれが研究をなし、一は他の模範となり、一は斯業の發達に努むべし。

農商工高等會議議員として

明治三十一年前後は寅次郎が愈ゝ活躍期に入らんとする時分で、或ひは各地の農談會に招かれて蔬菜や園藝に關する講演を試み、或ひは諸所に農會設立の勸說に赴き、或ひは各地品評會に出席し、或ひは自家農園を巡視するなど、眞に席の暖まる暇とてなかつたらしい。農商工高等會議臨時議員に任命されたのも明治三十一年三月である。

この農商工高等會議と云ふのは、農商工業の重要事項につき、農商務大臣の諮問に應じて意見を開陳し、或ひは農商工業に關する重要事項を協議調査する機關であつた。同年十月二十日、初めて開かれた農商工高等會議に於て、寅次郎は「良種苗ヲ全國ニ配付スルノ建議案」並びに「農商工ニ關スル調査書及報告書類ヲ頒布スルノ建議案」を提出した。その趣旨は

農產物ハ人工ヲ加フレバ漸次改良シ得ルモノナレドモ等閑ニ附スレバ逐次劣等ニ趨クモノナリ、故ニ農產物ノ進歩ヲ圖ルニハ先ヅ種苗ノ精選ヲ以テ第一着手トナサザル可カラズ

とて

米國ニテハ政府ヨリ純良種苗ノ一定量ヲ限リテ無代價ニテ廣ク全州ニ配付スルノ例アリ

と縷述し

故ニ本邦ニテモ政府ヨリ良種苗ヲ無代配布スルノ方法ヲ實行スベシ

と論じたる後、轉じて

政府ヨリ報告又ハ頒布スル農業上ノ成績又ハ事項ハナルベク文義ハ平易ニシテ解シ難カラザルモノトシ、且廣ク當業者間ニ行キ亘ルヤウ頒布シテ、各當業者ニ利益ヲ得セシムベシ

となしたものである。

肥料界に活躍す

次に看過してならないのは、寅次郎が肥料界に於ける業績である。寅次郎が肥料界に關係したのは明治二十八年で、この年大阪硫曹株式會社顧問となり、全國的に人造肥料の普及に努め、本邦人造肥料界に異常の刺戟を與へたが、をること十二年、明治四十年十月、同社顧問を辭して、關東酸曹株式會社の囑により、同社顧問となつて終身在職した。

更に、英獨二國の資本より成れる智利硝石普及會(Chilian Nitrate Propaganda)は、明治三十八年、本邦に日本本部(後に東洋本部と改稱)を設置、英國農學博士ストラツザース氏(Dr. John Struthers)を理事長として智利硝石宣傳のことに當るや、寅次郎は新渡戸博士と共にこれが顧問を委囑されたが、何しろ當時は智利硝石と云へば、火藥製造用及び工業用原料と考へられてゐた時代で、肥料に使用するなど夢想だにする者がなかつた。加之、農業者側は「智利硝石は可溶性で、土壤により化學的に吸收されないから、雨量の多い日本の氣候に不適當である」とし、肥料業者側は「智利硝石は貯藏及運搬中、空氣の濕氣を吸收し、自から包裝外に流失するから商品としての資格なし」として、囂々たる非難を浴びせたので、宣傳當局の苦戰は名狀すべからざるものがあつた。

しかし、明治四十年頃僅々六千噸（約六十萬圓）の輸入額に過ぎなかつた智利硝石が、二十年後に於て十萬噸（約一千萬圓）の年輸入額に飛躍した事實に徴すれば、宣傳當局の血みどろの奮闘が奏效しなかつたと誰が云へやう。苦闘時代に於ける諸員努力の一斑は寅次郎も亦大いに與つたのである。

農事視察に南船北馬

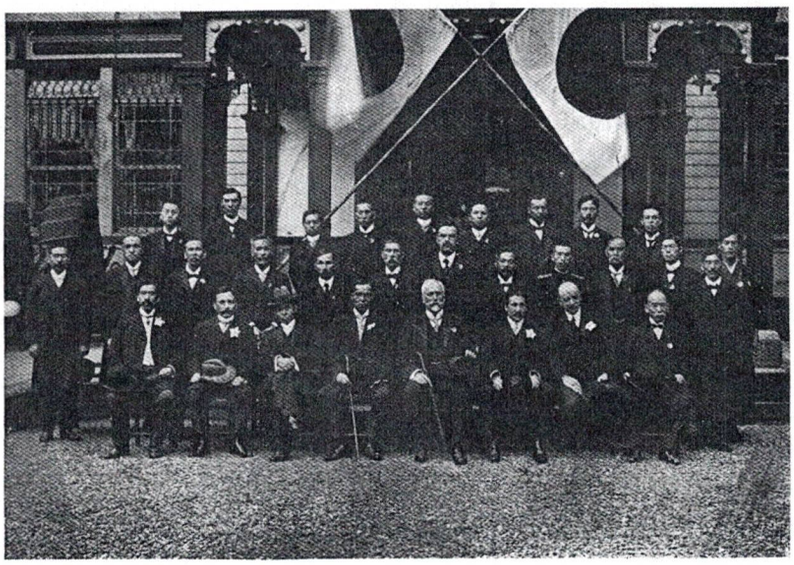
寅次郎は好んで視察旅行に赴いた。これは、農學校時代の燃えるやうな研究癖が年と共に旺んになる結果に外ならなかつた。明治三十三年十一月、寅次郎は米國及びカナダに於ける農界視察と、優良なる種苗、種豚、及び蜜蜂購入の目的とを兼ねて渡米したが、渡米に先立ち、農商務大臣曾彌荒助子から米大陸に於ける果樹蔬菜の類で本邦の風土に適すべき種類、果樹蔬菜類の害蟲驅除、豫防及び驅除法の調査方を委囑され、又、その前年東京市會議員に當選してゐた寅次郎は、東京市からも米國都市の諸般の施設調査方を依頼された。この時の收穫は甚だ大きく、米國の同業者とも屢々會見し、その實地作業を視察したばかりでなく、米國農商務當局を訪ねて種々有益な調査も行ひ、同當局並びに同業者から多數種苗の注文を受け、爾來取引上に多大の便宜を得たのであつた。

第二回目の渡米はそれから十年を經た明治四十二年六月のことであるが、この時は澁澤榮一子を首班とする渡米實業團々員たる資格で行つたのであつて、米國各地、カナダ及びメキシコ方

渡米實業團員として訪米の際、紐育シェネクテデイに於て、ヂエネラル・エレクトツリク會社見學記念

最前列左より五人目　寅次郎、中央　澁澤榮一子

智利硝石普及會理事時代（明治四十二年）



中列左より七人目　ストラザース氏
前列左端　寅次郎

面を視察、十年間に於ける米大陸農業界の推移と現狀につき、具さに再檢討を試みて同年十二月歸朝した。

鮮滿方面に足跡を印したのは、日露の風雲收まつた明治三十九年五月のこと、同年三月に東京市より任命された利源調査委員として視察の途に上り、神戸から直ちに大連に向ひ、金州から蓋平、營口、遼河附近を踏査し、北、昌圖に赴き、更に奉天より道を轉じて安東縣に出で、新義州から京義鐵道沿線を視察、平安、黃海兩道の富力を見、京城から南部地方を視察し、一箇月半にして歸國した。

滿洲の富源に着眼

寅次郎はこの時早くも滿洲富源將來の重要性に着眼し、歸來、直ちに勸業協會の招請に應じて、同年六月二十三日、東京府會堂で「滿洲の農業」なる題下に長廣舌を揮ひ「從來滿洲が荒蕪の地にして、氣候土質共に耕作に適せずとなされし」を駁して「これに大陸的（アメリカ式）農業技術を適用し、又北海道方面の、寒氣に對して強き住民を移住せしむれば必ず豐富なる資源の開發に成功すべし」と喝破したがこれは今日より見て蓋し卓見と稱すべきであらう。彼自身も視察旅行の際、奉天附近に十數町歩の土地を購入、自ら滿洲興農園を經營せんとしたが、この方は事情があつて中止となつたやうである。天、寅次郎に藉すに尙十年の壽を以てし、寅次郎にして今日の王道樂土、滿洲帝國の隆々たる產業勃興の實狀を見たならば、二十餘年前に於ける己が企圖を想起して、轉々會心の微笑を禁ずる能はざるものがあつたであらう。

大正十三年一月中旬、六十六歳の老軀を提げて、香港、廣東から臺灣へ渡つて農場視察をなしたが、正に長逝する二年前、洵に老後の想ひ出にふさはしい視察旅行であつた。

指頭に描く遺志

寅次郎は最後の息を引きとるまで日本農界のために盡すことを忘れなかつた。昇天する數日前のことであつた。重態の床に呻吟してゐた寅次郎は、何思つたか、むつくり床の上に起き直つた。

枕頭にゐた家族の人々は、驚いてこれをとゞめやうとしたが、寅次郎は痩せ細つた手で靜かにこれを制し、やをら右手の食指で一字々々力をこめつゝ左手の掌に文字を書き始めた。喉頭癌であるから、聲を出すことは全然不可能だつたのである。凝視すればそこに描き出されたのは次のやうな文言であつた。

「余は既に再起の見込なし。よつてこれより天父の御許へ行かむとす。遺族よ、余がかねて希望せる學校を設立し、その實現を圖ることを忘るゝなかれ」。

寅次郎が希望せる學校とは抑〻何をか指す。これ卽ち、範を丁抹の國民高等學校にとり、基督教を基礎とせる精神教育、及び實際に則したる農業教育を日本農民に施さんとする、寅次郎が理想の農業教育機關に外ならぬのであつた。

寅次郎はかゝる教育機關の創設を日本に於ける急務と信じ、自分も私財三十萬圓を提供する

一方、友人知己を說いて百萬圓程度の基金を調へ、自らこれを經營し、自ら教育指導の任に當つて見たいと云ふ年來の熱望を抱いてゐた。しかし天命を知り、再び起つ能ざることを悟つた寅次郎は、遺志を己が死後に實現せんものと、かくは遺族の人々に後圖を託したのであつた。

興農學園の生るゝまで

この寅次郎の遺圖を聞いて、先づ異常な感激の下に双手をあげて贊成したのは、札幌農學校時代からの盟友内村鑑三氏であつた。氏は告別式席上、追悼の辭を述ぶるに當つて特にこの點を强調、禮讃し、更に自らも創立委員の一人たることを快諾して、これが創設に非常な盡力を捧げられた。

寅次郎逝いて半歲、昭和二年四月十一日、寅次郎の遺志を實現するため、左の諸氏が會合して最初の協議會を開催した。

内村鑑三、植村澄三郎、伊藤一隆、渡瀨庄三郎、渡瀨香芽子、小坂順造、田中次郎。

而して當日決議された事項は大體次の如くであつた。

一、創立委員は前記出席者全員の外に左の四氏を加ふ。

佐藤昌介、新渡戸稻造、宮部金吾、清水由松

一、學校は基督教を基礎とし、農業教育を行ふこと。

一、學校長の選任は内村鑑三氏に委囑し、伊藤、小坂兩氏これを輔佐すること。

一、基本金として渡瀨家より金十萬圓を支出すること。

一、さし當り農閑期を利用して數箇月間の講習會の如きものを開き、主として精神教育を行ひ、又、農業教育及び實習をも併せ行ふ。なるべく簡便なる方法により、規模は小なりとも速やかに事業に着手すること。

一、校名は「興農學園」とすること。

かくて同年六月、多年丁抹にあつて國民高等學校組織を研究し、同國の農民教育に深い興味と經驗を有する平林廣人氏を學校長として內村氏より推薦され、越えて十一月、平林氏にこれを正式に委囑し、こゝに愈〻創立準備に着手した。次いで十二月、九州帝大農學部助手大谷英一氏も參畫、こゝに平林、大谷兩氏の努力の下に着々と仕事は進捗して行つた。

最も困難を感じたのは、敷地選定と財團法人認可の問題であつたが、敷地の方は第一回協議會開催後約一年にして、興農園農場の所在地靜岡縣田方郡西浦村久連を最適の地として選定し、昭和三年十月十日、こゝに漸く創立委員會を開催するの運びとなつた。當日の出席者及び決議事項は左の如くである。

出席者　內村鑑三、大島正健、伊藤一隆、新渡戸稻造、植村澄三郎、平林廣人、渡瀨香芽子、小坂順造、田中次郎、渡瀨三郎の諸氏。

決議事項

一、興農學園建設地を靜岡縣田方郡西浦村久連となすこと。

一、基金十萬圓の內、五萬圓は久連農場に屬する土地、建物、植物、農具及什器其他全財產を以てこれに充て、五萬圓は現金とす。

一、さし當り久連村落にある空家を借り入れ、これを修築して、約十人の生徒を收容し、可及的速かに開校の運びとなすこと。

一、久連青年團に屬する集會場を借り受け、これを改造して體操器具を設備して體操場とし、又多人數の集會場となすこと。

清新の氣溌剌として

翌昭和四年六月、渡瀨香芽子氏の寄附により木造二階建で約二十五人を收容し得る寄宿舍（當時「雄心寮」と稱す）及び體操場が落成したので、同月十三日、新渡戸、大島兩博士及び渡瀨雅太郎、小坂順造夫妻、田中次郎、渡瀨三郎夫妻、相田辰雄等の遺族、並びに土地の有力者列席の上、盛大な開校式を擧行した。平林、大谷の兩指導者及び昭和三年十二月に入學した生徒七名も勿論參列した。その席上、新渡戸博士は一場の講演を試み、郡長及び村長其他の祝辭があつた。

爾來、昭和六年二月に第三回修業式を行ふまで、毎年十五名位の生徒を教育してゐたが、この間小坂順造、加藤成一兩氏の圖書寄贈、竹內茂代、山田わか兩女史の來援等、諸氏が有形無形に學園教育のため盡力されたことは等閑に附することは出來ない。

昭和五年十一月、伊豆に大震があり、平林園長はこれを機として學園を去り、靜岡縣囑託として

震災地を中心に活動することゝなつたゝめ、大谷英一氏これが後任として園長に就任することとなり、第三回修業式を終へると同時に、一時生徒の募集を中止し、昭和六年四月、獨逸及丁抹等の國民高等學校教育施設の視察研究を目的として、大谷氏は二箇年の豫定で渡歐した。かくて具さに新知識を修めた大谷氏は、昭和七年八月歸朝し、直ちに開校の準備に着手、食堂、校長住宅、農場、實驗室、當直室等の新築と相俟つて潑溂たる清新の氣に包まれつゝ、こゝに興農學園は再開したのである。

教育方針を統一す

興農學園の財團法人組織が認可されるまでには種々の事情に阻まれて容易に實現しなかつたが、小坂、加藤、大谷諸氏の盡力で昭和八年二月、文部省から正式に認可され、財團法人興農學園が私塾久連國民高等學校を維持經營すると云ふ形式に改まつた。

大谷氏歸朝後、學園教育を統一して、夏期三箇月、冬期五箇月の兩期間に於て教育を施すことに決定、昭和八年五月一日から久連國民高等學校第四回夏期部生を入學せしめた。當時は生徒十二名、研究生六名で、その出身縣別を示すと、東京、山梨、栃木、長野、愛知、山形、秋田、靜岡、宮城、愛媛等であつた。當時教師として商學士宇田米夫氏其他多數講師の援助を受け、又、農場は渡邊忠吉氏の助力を仰いだのであつた。

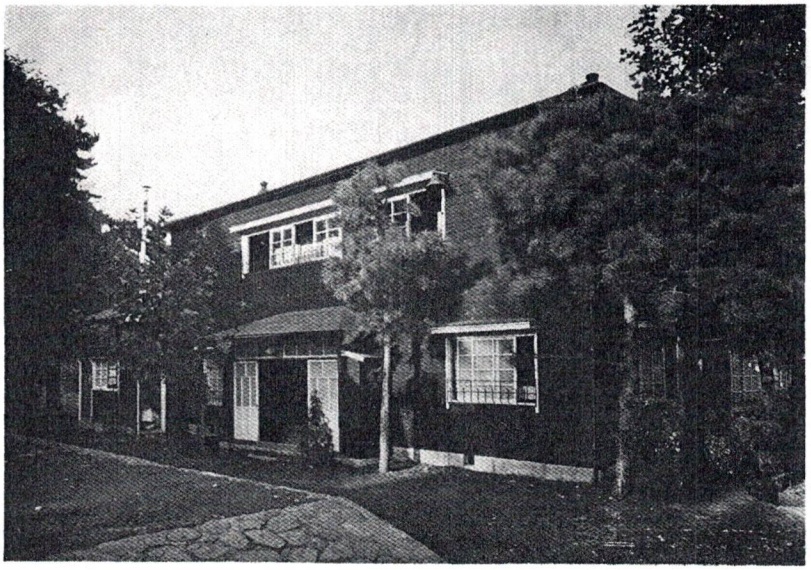
次いで同年冬期部生として、生徒十二名、研究生二名を入學せしめたが、その出身地別は、東京、栃

興農學園寄宿舍落成式記念

昭和四年六月十三日　於體操場前

田中次郎氏
渡瀬三郎氏
渡瀬長子氏
小坂花子氏
相田辰雄氏
大島正健氏
渡瀬香芽子氏
小坂順造氏
新渡戸稻造氏
平林廣人氏
渡瀬雅太郎氏
大谷英一氏

新渡戸博士揮毫の扁額（農學園校舎の一部）



寄宿舎前景

木、群馬、山形、福島、長野、新潟、福井、愛知、和歌山、德島、朝鮮に亙り、教師として農學士中田正一及岡田勉の兩氏を迎へた。この間に短期講習會を開き、受講者約百五十名を出してゐる。更に、昭和九年度第五回夏期部生は生徒十二名、研究生四名で、北海道、東京、栃木、山形、長野、靜岡、愛知等の諸府縣の出身者であつた。

寅次郎の遺志その緒につく

寅次郎逝いて九年、興農學園生れてこゝに七星霜、寅次郎が死に臨むまで翹望して已まなかつた理想の學園は、知己遺族等の努力により、幾多の障礙を征服しながら、今や新興日本に於ける唯一の特殊農業教育機關として、識者の視聽を集めつゝある。寅次郎が英靈、又、以て瞑すべきであらう。

最後に、財團法人興農學園設立趣意書、寄附行爲、創立當時及び現在の理事、監事、並に現評議員の芳名を左に錄する。

設立趣意書

故渡瀨寅次郎ハ明治十三年札幌農學校第一期卒業生ニシテ札幌縣開拓使御用係、茨城縣師範學校長ヲ歷任、後、官ヲ辭シ明治二十五年東京興農園ヲ創設シ優良種苗ノ普及新式農具ノ輸入改良ニ努力シ我邦農界ニ對シ多大ノ貢獻ヲナシ大正二年農商務大臣ヨリ特ニ表彰セラレタリ晩年丁抹式國民學校ノ制度ガ我邦農村青年ノ教育上極メテ緊要ナル事ヲ痛感シ最後ノ奉公トシテ實行セン

トセシモ病軀之ヲ果サズ大正十五年病革マルニ及ンデ遺産ノ一部ヲ此資ニ當テ友人及贊成者ノ援助ヲ仰ギテ此擧ヲ遂行センコトヲ遺族ニ囑シ永眠セリ

依ツテ發起人ハ先ヅ遺族ノ寄附金ヲ以テ別紙公益財團法人興農學園ヲ設立シ小規模ニ事業ヲ創メ漸次大方ノ援助ニ依リ事業ヲ擴張シ聊カ農村社會教育及其ノ他育英ノ事ニ貢獻セント欲スルモノナリ

財團法人興農學園設立者渡瀬同族株式會社

代理人　渡瀬雅太郎

財團法人興農學園寄附行爲

第一章　名稱

第一條　本財團ハ財團法人興農學園ト稱ス

第二章　目的

第二條　本財團ハ故渡瀬寅次郎ノ遺志ニ基キ農村ノ社會教育及育英ニ資スル爲左ノ事業ヲ行フ

(1)　私塾久連國民高等學校ノ設立及維持

(2)　農村ニ於ケル講習、講話及實際指導ヲ爲スコト

(3)　農業改善ニ關スル試驗及調査ニ補助ヲ爲スコト

(4)　其ノ他本財團ノ目的達成上評議員會ニ於テ必要ト認メタル事項

第三章　事務所

第三條　本財團ハ事務所ヲ靜岡縣田方郡西浦村久連貳番地ニ置ク

第四章　資產及經費

第四條　本財團ノ資產ハ設立者ノ寄附ニ係ル左記財產竝ニ本財團設立後ノ寄附金及其他ノ收入ヨリ成ル

一、基本金　金參萬參千圓也
二、農場農舍價格　金五萬貳千五百圓也
三、建築物　金參千貳百圓也
四、器具及圖書　金貳千八百參拾壹圓貳拾九錢也
五、現金　金貳千七百參拾參圓六錢也
計　金九萬四千貳百六拾四圓參拾五錢也
（昭和七年八月卅一日現在）

前項第一號及第二號ノ資產ハ之ヲ基本財產トス
但寄附金及歲計剩餘金ハ評議員會ノ議決ヲ經テ之ヲ基本財產ニ編入スル事ヲ得基本財產ハ之ヲ消費スルコトヲ得ズ

第五條　前條資產ノ管理者ハ常務理事トス又其ノ管理方法ハ理事會ノ議決ヲ經テ之ヲ定ム

第六條　本財團ノ經費ハ資產ヨリ生ズル收入、講習料、農場收入及寄附金其ノ他ノ收入ヲ以テ之ニ充ツ

第七條　本財團ノ豫算ハ每會計年度開始前評議員會ノ議決ヲ經テ之ヲ定ム

本財團ノ決算ハ年度結了後一ケ月以内ニ作製シテ評議員會ノ承認ヲ受クベキモノトス

第八條　必要避クベカラザル豫算外ノ經費ニ對シテハ追加豫算ヲ作製シテ評議委員會ニ附議スルモノトス

但臨時急施ヲ要シ評議員會ヲ召集スル暇ナキ時ハ理事會ニ附議シテ理事長之ヲ定ムル事ヲ得此場合ニハ事後ニ於テ評議員會ノ追認ヲ經ベキモノトス

第九條　本財團ノ會計年度ハ毎年九月一日ニ始リ翌年八月三十一日ニ終ル

第五章　役員及役員會

第十條　本財團ニ左ノ役員ヲ置ク

一、理事三名以上十二名以内トシ、内一名ヲ理事長、一名乃至三名ヲ常務理事トス

二、監　事　二　名

三、評議員　若干名

第十一條　理事ハ理事長及常務理事ヲ互選ス

理事長事故アルトキハ常務理事又ハ年長理事之ヲ代理ス、常務理事ハ理事長ノ命ヲ受ケ常務ヲ處理ス

第十二條　理事ハ評議員會ニ於テ選擧ス其ノ任期ハ三ケ年トス

第十三條　監事ハ評議員會ニ於テ之ヲ選擧ス其ノ任期ハ二ケ年トス

第十四條　評議員ハ理事會ノ決議ヲ經テ理事長之ヲ依囑シ其ノ任期ハ五ケ年トス

第十五條　役員中缺員ヲ生ジタル場合ハ次會ノ評議員會又ハ理事會ニ於テ選擧シ其ノ任期ハ前

任者ノ殘任期間トス

第十六條　役員任期滿了スルト雖モ後任者ノ就任スル迄ハ其ノ職務ヲ行フモノトス

第十七條　久連國民高等學校ニ關スル職員ハ別ニ之ヲ定ム

但シ其主腦者ハ理事會ノ決議ニヨリ評議員會ノ承認ヲ經テ理事長之ヲ委囑ス

第十八條　理事會ニ於テ議決スベキ事項左ノ如シ

一、豫算及決算審議ニ關スル事項

二、寄附金受領並ニ資產保管方法及管理者ニ關スル事項

三、評議員ノ選任ニ關スル事項

四、久連國民高等學校主腦者ノ選任ニ關スル事項

五、寄附行爲ノ變更ニ關スル事項

六、本財團ノ擴張若クハ解散ニ關スル事項

七、其ノ他重要ナル事項

第十九條　理事會ハ隨時理事長之ヲ招集シ過半數ノ出席ヲ以テ成立ス、理事長議長トナリ其ノ議決ハ出席理事過半數ノ同意ヲ得テ之ヲ決ス

但可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニヨル

第二十條　評議員會ニ於テ議決スベキ事項左ノ如シ

一、豫算ノ決定及決算ノ承認ニ關スル事項

二、理事及監事ノ選任ニ關スル事項

三、寄附行爲ノ變更ニ關スル事項
四、本財團ノ擴張若ハ解散ニ關スル事項
五、其ノ他重要ナル事項

第廿一條　評議員會ハ毎年一回以上之ヲ開ク其ノ招集成立並ニ議事ニ關シテハ第十九條ヲ準用ス
但理事長ニ於テ必要ト認メタル時ハ臨時之ヲ招集スルコトヲ得

第六章　寄附行爲變更及解散

第廿二條　本財團ノ寄附行爲ハ理事會並ニ評議員會ノ議決ヲ經テ主務官廳ノ認可ヲ得ルニアラザレバ變更スルコトヲ得ズ
但シ此ノ場合ニアリテハ各會ニ於ケル役員總數三分ノ二以上ノ出席ヲ以テ成立シ決議ハ出席會員三分ノ二ノ同意ヲ以テ之ヲ定ム

第廿三條　本財團ハ必要ニ應ジ理事會並ニ評議員會ノ議決ヲ經テ解散スル事ヲ得
但シ此ノ場合ニハ前條但書ヲ準用ス

第廿四條　解散ノ場合ニ於ケル殘餘ノ財產ハ出資額ノ限度ニ於テ寄附者ニ歸屬ス
但シ殘餘財產ノ全部又ハ一部ハ理事會並ニ評議員會ノ議決ヲ經テ農村社會教育事業ニ寄附スル事ヲ得

第七章　雜　則

第廿五條　本寄附行爲ノ施行ニ關シ必要ナル細則ハ評議員會ノ議決ヲ經テ別ニ之ヲ定ム

本財團設立當初及ビ現在ニ於ケル役員左ノ如シ(ナホ興農學園創立當時ヨリ理事(非公式)タリシ伊藤一隆、内村鑑三兩氏ハ財團設立認可前ニ逝去セラル)

理事　新渡戸稲造(昭和八年逝去マデ)　渡瀬かめ　渡瀬雅太郎　小坂順造
加藤成一　田中次郎　渡瀬三郎　今井三郎
大谷英一

監事　植村澄三郎　大島正健

久連國民高等學校指導者　大谷英一

評議員　男爵佐藤昌介　大島正健　南鷹次郎　宮部金吾
植村澄三郎　白澤保美　清水由松　男爵稲田昌植
齋藤惣一　岡村精次　菅儀一　高橋郁郎
今井三郎　高須虎吉　小野武夫　植村甲午郎
金子鷹之助　渡瀬かめ　渡瀬雅太郎　小坂順造
加藤成一　田中次郎　渡瀬三郎　大谷英一

第五章　興農園とその事業

進歩的種苗農具商の必要

寅次郎が日本農業發展のため、畢生の事業として創始したのが、卽ち東京興農園で、明治二十五年十月の創立にかゝる。既述の如く寅次郎は先年歐米にあつた時、本邦農業發達のためには優良なる種苗農具が如何に必要であるかを夙に痛感してゐたのであるが、大日本農會特選幹事在任時代に各方面から質問を受け、且つ自ら實地の視察をして、益々その必要を悟り、業界有力者に自分の體驗から模範的種苗農具店開設方の必要を勸說するところ屢々なるものがあつた。

卒先して難關に當る

實際、我が農業界に「一種（たね）、二肥（こえ）、三作り（つくり）」の標語あり、米國の一篤農家は「農業に一番大切なものが三つある。第一が種子、第二が種子、第三も種子だ」と云つてゐる。これほど重要な種苗でありながら、種苗園そのものの經營が非常に困難なので、當時の本邦の斯業の如きはまるで幼稚で、僅かに何かの商賣の片手間で賣つてゐるに過ぎない有樣だつたから、寅次郎必死の勸說も何等效を奏しなかつた。

よつて寅次郎は、自ら卒先、その衝に當る決心を固め、明治二十五年、偶〻赤坂溜池に東京興農園

本店を開いたのである。最初は從來の種苗業者から様々な妨害を受けたが更に顧みず、只管優良種苗の販賣に努めて創業の礎を築いた。

最初は專ら種苗

しかし、寅次郎の堅實な性格は事業の上にも現はれずにはゐなかつた。農具の方は第二段の仕事として最初は專ら種苗のみに力を注いだ——卽ち水稻、陸稻、玉蜀黍、蔬類、茄子類、甘藍類、蔓苣類、大根類、牛蒡類、豆類、葱類、洋種蕃茄、牧草類、果樹苗木、觀賞植物種苗、用材苗木、用材及各用樹木種子、竹類、觀賞草花類、種苗草花珍根類、新舶來草花等が創業當時の商品の重なるものであつた。殊に落葉松、梨、黑松の種苗の如きは興農園が日本に於ける元祖とも云ふべく、就中落葉松の種苗は嘖々たる名聲を博した。副業的に牛血乾固肥料も賣つたし、全然畑違ひの各種農業書籍の取次販賣もやつた。

札幌支店の設置

越えて二年、明治二十七年には思ひ出の札幌に改良蔬菜の採取場を設け、歐洲から精良な新種苗を輸入し、海外先進國に於ける方法に倣つて種子の採取を開始し、同時に札幌南二條西一丁目に東京興農園札幌支店を設け、農學士小川二郎氏を支店主任に任じた。この支店は明治三十三年に札幌興農園と改稱して獨立したものである。

めてたし「凱旋陸稻」

この二十七年と云ふ年は全國的に稀有の大旱魃であつたが、豫て興農園で清國種陸稻を精選して培養してゐた稗陸稻（うるち）「興農園種」は斷然他を壓して毫も旱魃の

害を受けず、一反歩籾量二石一斗、同藁量百五十二貫二百目を得て氣を吐き、寅次郎初め大いに喜んで、折柄日清戰役中で連戰連勝の皇軍に因み、これに「凱旋陸稻」の名稱を與へた。

選擧廓清に一役

もう一つ面白い話がある。この年の一月、寅次郎が少年時代の恩師江原素六氏は靜岡縣第一區選出の代議士となつてゐたが謹嚴な氏は選擧運動をしてくれた者に酒食を以て報ゆることを喜ばず、興農園の札幌胡蘿蔔種子を購入して各戸に配符したが、後これを栽培して食した人々は、その美味なのに驚いて急に蘿胡蔔栽培の改良が叫ばれるやうになつた。酒食の代りに地方農産物の改良――如何にも江原氏らしいが、興農園が圖らずも選擧廓清の一役を勤めたやうで面白いではないか。

興農園の宣傳機關であり、寅次郎の所論發表の機關でもあつた「興農雜誌」が創刊されたのは、この年の十月であつた。同誌については後に詳しく述べる。

駒澤村試驗場の設置

翌二十八年三月、種苗の良否を檢定し、又は種苗を栽培して採種せんがため、と、大日本農會試驗場であつた東京府荏原郡駒澤村に東京興農園試驗場を設置したが、地域は廣く、排水の便完備し、加ふるに地味肥えた好適地で、これに熟練した園丁及び農夫を置いて、寅次郎以下店員が常に巡視監督を怠らなかつた。

誇りのメロン

この頃興農園栽培のメロン（まくわ瓜）に舌鼓うつた。時の米國公使ダンは興農園の手腕に敬服して、態々米國から良種のメロンの種子を取り寄せ、これが栽培方を寅次郎に委囑した。メロンの栽培などは、當時の日本農家の腕では米國の足下へも寄れなかつた當時、本物のダンが賞美するほどのメロンが出來たことは、ダンも驚いたであらうし、興農園としても誇つてよい一事であつた。

この年第四回內國勸業博覽會が開かれ、興農園はその出品種苗に對し、第三等有功賞を授與された。

果樹園と蠶種部

明治二十九年一月、北海道札幌で有名だつた中川苹果園（園主、中川嘉平氏、面積三町八反歩）を借り入れて東京興農園果樹園とし、苹果、西洋梨其他諸苗木の栽培を行ふことになつた。この果樹園は成績の見るべきものがあつたが、經營四五年の後、都合により廢止された。又、同じ二十九年、信州上田に東京興農園信濃蠶種部を設け、瀧澤七郎氏を主任に任じて專ら蠶種改良の事に當らしめた。この年から興農園の副業も餘程增加し、佛國種食用兎、盆栽肥料、除蟲液、除蟲粉、保米袋、蠶種等を賣り出し、大分活氣づいては來たが、農具の方面はまだ愼重な態度で、滿を持して放たざるものがあつた。

絶讃の玉蜀黍

この年十一月一日から開かれた大日本農會第三十二回農産物品評會に、數種の作物を出品したが、玉蜀黍「ロングフェロー」、苹果等は特に絶讃を博した。次に當時の審査委員長田中芳男氏の審査報告を摘錄してをかう。

…玉蜀黍ニ付キ東京市赤坂區溜池町東京興農園出品ノ北海道長形種ノ如キハ穗形甚ダ長ク、條列整齊、子粒光實セル佳品ニシテ、內地ニ於テ見ザルモノトス。又同園ノ白穗玉蜀黍モ亦佳良ナリ…

農書の出版開始

書籍は從來農業書取次のみであつたが、この年から出版も開始して、本格的な書肆の形態を備ふるに至つた。年代は幾分不同であるが、東京興農園が出版した圖書目錄を表にして示せば次の如くである。

著者	書名	定價	郵稅	備考
明治三十年三月興農雜誌第三十號附錄	實用家鷄割勢術	○・四一二	（郵稅共）	一年以上の雜誌購讀者へ無代進呈せるもの
農科大學教授農學士 横井時敬	通俗農用種子學	○・二八	○・四〇二	
札幌農學校助教授農學士 松村松年	日本有益蟲一覽	○・二〇	（郵稅共）	新聞二頁大、石版色刷、興農雜誌第十五號附錄
農友園 友山木駒吉	薄荷栽培並ニ製造法	○・一二	○・〇二	
衆議院議員 田中鳥雄	椎茸養成法	○・二〇	（郵稅共）	

秋田縣簡易農學校長 農學士	尾泉良太郎	土壤學	○・六○	○・○六
農學士	橫山久四郎(調査)	農家の餘業	○・一二	(郵稅共)
山梨縣	加賀美保	金松樹栽培祕訣	○・○七	(郵稅共) 寅次郎の序あり
農學士	峰幾太郎	三極栽培要錄	○・○七	(郵稅共)
務台量平		改良稻作法	○・三○	○・○四
		秋蠶飼育新書	○・一二	(郵稅共)
山口農事試驗場技師 農學士	高橋久四郎	蔬菜草花栽培全書	○・五五	○・○六
同	同	蔬菜栽培全書	○・三五	○・○六 教科書用に前者を分刊せるもの
同	同	果樹栽培新書	○・二五	○・○二
札幌農學校助教授 農學士	松村松年	害蟲驅除全書	○・九五	(郵稅共)
田中長嶺		蔓種栽培祕法	○・○七	(郵稅共)
小松政一		蘿蔔栽培新說	○・一○	○・○二
農學士	山田幸太郎	玉葱栽培新法	○・二○	○・○二
井出喜重		落葉松栽培法	○・二五	○・○二

小松政一　大根栽培新書　〇・〇八　〇・〇二
農學士湯淺中夫　肥料新書　〇・四五　〇・〇六
農商務省秋田種馬所技手小田東耕　實驗馬耕傳習新書　〇・三五　〇・〇四
千葉縣松戸覺之助　實驗應用梨樹栽培新書　〇・四〇　〇・〇四
新潟縣農事試驗場長農學士矢崎亥八　輸出有益農林副産藥用黃連栽培法　〇・三〇　〇・〇二

如上の出版書籍の內、松村農學士の「日本有益蟲一覽」、「害蟲驅除全書」、高橋農學士の「蔬菜草花栽培全書」、峰農學士の「改良稻作法」等は仲々好評で、何れも三版乃至六版を重ねてゐる。

愈々農具賣出し

明治三十年にはイタリア蜜蜂を輸入して發賣し、同年六月頃から養蠶用の寒暖計及び乾濕計を賣り出した。改良農具に一指を染めた初めである。この年は例の郡司大尉等の報效義會の請で千島の寒地へ種子を送り、幸ひに好成績で大いに感謝され、又米國イリノイス州ジェー・メインなる米人から種子が優良だからと、追加註文を受けてゐる等、努力の報償が漸次見えて來た。國產の養蠶用煖爐を賣り出したのはこの年の末である。

珍果奇草に命名

翌三十一年初頭には、甚だ似合しからぬ商品を賣り出した。火災保險附盜難防禦金庫がそれである。これは幼稚な當時の日本文化に貢獻せんとする寅次郎

の徽意に外ならなかつたのであらう。同年二月には純良種禽及び雛卵、それから佐宗式飼養器附改良孵卵器と云ふものを發賣した。これで鳥屋も兼業した次第である。更に、三月には、米國から害蟲黴菌驅除用細霧注射器及び簡便細霧注射器を輸入販賣し、同時に耐熱農用檢溫器、改良稻麥扱機等も發賣した。特殊の果實や草花に對し、內外產品たるを問はず、一々寅次郎が新味ある名稱を附するやうになつたのもこの頃からのことである。例へば、スキート・ピーを麝香連理草（これは明治二十八年、興農園が初めて輸入し、札幌採種場に於て栽培したもので我國に於ける元祖である）、松戶氏の錦果園で出來た太白種の新種の梨を二十世紀と命名した如きそれである。

顧客本位の方針

總じて、興農園の方針として種苗農具の優良なる外國種は原則としてこれを輸入するが、農具の中でも需要の多いものは、充分研究して、なるべくこれを模倣して國產品を製作し、以て廉價販賣に努め、又、高等園藝用種苗の如きは、原種を輸入して、勞銀の安い日本で栽培して逆輸出した方が利益なので、可能性あるものは、すべてこの方法をとることゝしてゐた。

人肥及農業藥品の發賣

明治三十一年六月、神戶市五二會から興農園出品の種苗に對し、有功二等賞銀牌を授與された。これより先、明治二十八年、寅次郎は大阪硫曹株式會社顧問に就任してゐた關係上、この頃には人造肥料をも取扱つてゐた。

同年八月から獨逸ブリーン府クロウゼン商會特製の害蟲黴菌驅除劑タバコ・エクストラクト（「害蟲必滅濃液」と名づく）の日本一手販賣店となり、猫いらずの元祖のやうなコンモンセンス・ラツト・エクスターミネーターを賣り出したのもこの頃であつたが、この月新輸入の堆肥反轉用鋤等を賣り出したのを機會に、改良農具輸入販賣の機運が漸次濃厚となつて來た。

本格的に農具販賣

愈〻本格的に改良農具販賣をやり出したのは翌三十二年十月からである。當時の發賣品目の大要を示すと次の通りである。

釘拔及手斧兼用農作用金槌、ウイーダー、移植用鏝、除草器、農家用安全燈、柄長農用ショベル、開墾用鍬、害蟲驅除用粉末撒布器、レーキ、害蟲驅除用小鋸、肥料用及乾草用叉、接木用小刀、園藝用鏝、馬鈴薯採掘用叉其他（用語はすべて當時のまゝ）

驅蟲石鹼及珍奇農具の發賣

この年の夏、寅次郎の創案に成る「驅蟲石鹼」が賣り出された。小箱十六錢、中箱二十六錢、大箱五十錢。四十匁の石鹼を四合の湯に溶かし、害蟲及び植物の強弱に應じて冷水四升乃至一斗内外を加へ、よく攪拌して細霧注射器（又は刷毛）で被害作物に撒布すると、大抵の害蟲は斃死すると云ふのである。

當時の日本農界で珍らしいとされた果物壓搾器、橙搾（レモンスクヰザー）、鼷鼠捕鼠器、強力捕鼠器、果實剝皮及種取器、各種ホウ、プラウ、ホイールバロウ（孤輪車）等の改良農具が續々賣り出されたのもこ

の年の暮から翌三十三年末までのことであつた。

明治三十四年春からは、米國テートン型自轉車、養蠶用煖爐以下新農具數十種を輸入販賣し、同年十月頃から米國オレンシヤツト商會と特約して、十八種に亙る海外農業雜誌及び農書の取次をも開始した。これは何れも寅次郎渡米の結果によるものであつた。

相次ぐ受賞と分店及農場新設

明治三十六年、大阪の第五回勸業博覽會への出品は二等賞を授與され、翌年米國セントルイスの萬國世界大博覽會に、當局の指定により興農園から出品した園藝種子及山林用種子に對しては、双方に一個づゝ計二個の銀牌を受領した。

同年東京府下澁谷町宮益坂上に分店を設け、東京興農園澁谷分店と稱したが、これが今日の東京興農園本店である。又、この年靜岡縣田方郡西浦村久連に溫暖なる地を相し、山林十五町歩を購入して開墾、柑橘園とし、傍ら東京興農園採種場及び農場としたが、爾來附近に園藝趣味を喚起し、荒蕪地の開墾されて柑橘園と化するもの頗る多かつた。

海外の主要取引先

この時分までに外國に於ける種苗業者との取引が漸次增加して來たが、その主なるものを擧ぐれば——

Vilmorin Andrieux et Cie. France (Paris)

Peter Henderson & Co. U. S. A.

W. Atlee Burpee & Co.　U. S. A.
C. C. Morse.　U. S. A.
Sluis & Groot's.　Holland (Enkhuizen)
Sutton & Son's.　England
Kelway & Co.　England
Carter & Co.　England
Veitch & Co.　England

學校園及高山植物種苗の發賣

明治三十八年秋から營業種目中に、學校園教材植物種苗を加へ、毒草、藥草、纖維科、染科、油臘科其他教材植物の種苗販賣を開始したが、これは實に本邦に於ける學校園教材植物種苗供給の嚆矢である。更に明治四十年秋から高山植物種苗の販賣を開始したが、これに先立ち、同年七月下旬寅次郎は、東京帝大植物學教室助手田中貢一氏の東道で信州戸隱山に高山植物種苗の大採集を行つた。當時寅次郎は既に四十九歳、往年農學校時代に植物を採集しつゝ北海の深山溪谷を跋渉した研究癖は老來なほ衰へず、老書生の意氣颯爽たるものあるを覺ゆる。この時の紀行文は「今膝栗毛」と題して、田中氏が「東京興農雜誌」の第一卷第六、七兩號に面白可笑しく書いてゐるから、今、その一節を左に錄して見やう。

〔前略〕少し行つて、百間長屋を出外れやうとするところに、鐵の鎖がさがつてゐる。これに捉まつ

て上つて行くのだ。鎖のある下のところには、白根葵が澤山あつた。「ねまがりだけ」や「もみぢはぐま」や、その外色々の草の中を押し分けて、總身濡鼠のやうになつて登つて行くと、凡そ五六町行つたところに、また一つの鐵鎖がある。「つりがねつゝぢ」の花が、美事に咲いてゐた。この附近には、有名な黄花敦盛草もあり、その外白山千鳥などもある。信ちやんは、もう力屈したものと見え、これより上へは行かなかつた。我々の一行が、頂上まで行つて來る間、こゝに待つてゐやうといふことであつた。

機械體操でもやるやうな風をして、彌治も、杢公も、喜多も、こゝを乘り越え、岩鏡の花で、足の進むところもないやうな中をボツ〳〵話しながら進んだ。途中又一つの鎖があつたが、無事に通過して、愈々評判の「蟻の塔渡」へ着いた。こゝ迄來る中に、「こけもゝ」や、「いはぎく」や、「いはおとぎり」や、「をさしだ」なぞを澤山採集した。〔中略〕百間長屋まで來る中に、一行の交る代るお撮き遊ばした尻餅の數が、喜多が一つ、信ちやんが三つ、彌治が五つゝ、杢ですら二つ、合計十一であつた。

百間長屋までは、喜多が先達で、杢が脊りといふ有樣だつたが、こゝから、陣立を變じて、杢が先達！續いて信ちやん、彌治、脊が喜多といふ順序になつた。背後の方から皆の降りて行く樣子を見ると、實に面白い。特に彌治殿の歩き方と來たら、實に滑稽で、何と形容してよいやら、そのあらはし方に苦しむ位だ。あひるに鎧を着せて、歩かせた時のやうとでもいはうか、それとも、支那の貴婦人に、重荷でも背負せて、一本橋でも渡らせた時のやうとでもいはうか、落下の隋性にかられて、ヨボヨボ、重たげな足を引いては駈け下るのである。そして、中途で足を止めやうとして、ドシ〳〵〳〵と駈け降つて、手當り次第に何の木へでもむしりつき、そこで止まらうとする。すると、隋性によつて、くる

りと幹を一周りまはつて、側の方へ抛られさうになる。可笑しさも可笑しいが、又、その危なさといつたら、到底見てはゐられない位だつた。その中には、また例の、お得意の尻餅を舂き始める。何でも、信ちやんが一つ舂くと、彌治殿が二つ乃至三つといふ位の割合であつた。

こんな調子で、少し下つて行くと、その中に、彌治殿がそれは滑稽千萬な、珍無類とも謂つべき、世にも珍らしい藝當をやつて、お目にかけてくれた。今でも、あり〳〵と目につくが、先づ、あんな珍らしい藝當は、如何に書きあらはしたら、讀者諸君に分るか、そのあらはしやうに困る、それは、例のフロツクコートをお召しになつて居る彌治殿が相も變らずの調子で、ドシ〳〵と駈け下り樣、二握りほどあるブナの木へ行つてむしりついた。すると、ブナの木はズーツと垂れて來たので、彌治はブラブラと吊し上がつて、吊り鯛の樣になつてしまつた。アレ〳〵といふ間もなく、木からドサリツ！と落ちて來て今度はまた前と同じ位なブナの木に引かゝつたのだ。ところが、其引かゝり方が餘程面白い。前とはその向きが反對で、根の方に頭が行き、先の方へ足が行つてゐる。落ちてはなるまいと、兩手で確かりむしりつき、更に兩足でからみついて、弓形になつて、ブナの木と力競べをやつてゐる樣子の可笑しさといつたら、先づ見た人以外には、想像のつきやうがない。彌公暫くは睨み合ひといふ風であつたが、その中に、バツターンと落ちて來て、まるで蟇蛙でも張りつぶした時のやうに、大の字になつてあふのけざまに横はつた。そして暫らくは身動きもしない。たゞさへ可笑しくて、可笑しくて、堪らないところへ、おまけに、こんな珍らしい滑稽劇を演じられて、可笑しいの、可笑しくないのなんといふ譯のものではない。信ちやんと杢は下から、喜多は上から……たゞ見て、お臍をよつてゐるばかりだつた。喜多などは、あまりの可笑しさに、お臍などはよつて〳〵より切つ

て、しまつて、果は腹を抱へて泣いた位だつた。定めし、戸隠山の神様までも、笑はずにはゐられなかつたことと思ふ。世界廣しと雖も、先づこんな滑稽千萬な、可笑しな尻餅をついたお方は、古來先づなかつたらう。それも、こんな戸隠山の山奥で……。思ふに、この事たる、少なくとも、彌治殿の、一生の歴史を飾るべき、花と謂つべきものであらう。奥社へ下るまでに、一行の春いた尻餅の數は大小合せて計算すると(最初の分も)、次表のやうであつた。

人名	尻餅の數	成績	人名	尻餅の數	成績
彌治郎兵衛	凡そ二十有餘	拔群	信ちやん	十三箇	優等
喜多八	二つ半	劣等	杢兵衛	三箇	下等

これ等の中には隨分奇拔なのもあり、面白いのもあつて、普通ならば、大いに世に紹介すべき價値あるものもあつたが、彌治殿の、今の尻餅を擔ぎ出された日には、到底物の數ではない。要するに、尻餅つきのオーソリテイーは、竟に彌治君の身に落ちてしまつた。

餘り永々しく書いてゐて、藪蛇でも出て來ると、それこそポーキュパインではないが、いゝお臀洗となるから、今膝栗毛は先づこれにて擱筆する。彌治君萬歳!!

(註) 右文中の彌治郎兵衛は寅次郎、喜多八は田中氏、又信ちやんと杢兵衛とは連行せる人夫。

農産物品評會の開催

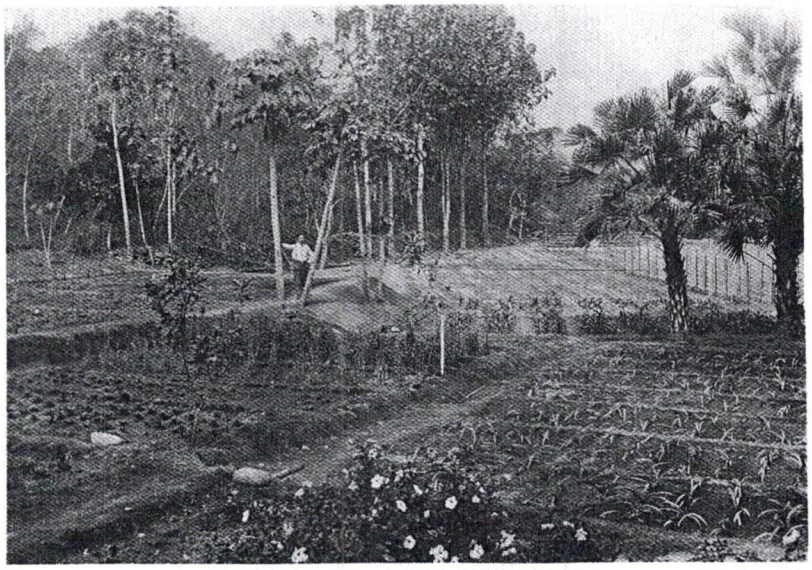
明治四十二年十一月、東京興農園主催で農産物品評會を開催し、出品物の資格を「興農園から購入した種苗による生産品」に限定して、汎く農産種子、蔬菜、果實等の出品を勸誘したが、出品人員約八百名、出品點數千點を越え、盛會であつた。恰かも寅次郎は渡米中だつたので、新渡戸稻造博士を審査委員長とし、會期一週間の終には、寅次郎の室香芽子が受賞者に賞狀及賞品を授與した。

この種の農園の主催としては空前の試みで、限定條件が一般華客の感興を唆り、出品點數が頗る多かつたのと、連日好晴に惠まれたのとで、觀覽者引きも切らず、又、出品者の希望による卽賣點數も驚くべき多數に達し、非常な好成績を收めたのである。

臺灣農場

寅次郎は豫ねて臺灣の富源に着眼し、大鵬の雄圖をこの地に伸べんとする志を有してゐたが、大正二年自ら渡臺し、各地を踏査した結果、臺南州善化里西堡茫萊宅の官有原野六百甲歩を以て造林及び水田畑地となす適地と認め、臺灣總督府に豫約拂下の出願をなし、彼が年來の宿望であつた未墾地開發の事業の端はこゝに開かれることとなつた。

次いで、同十二年、更に同島高雄州鳳山郡燕巢庄の官有原野二百甲歩についても小坂順造氏と連帶で同樣の出願をなし、こゝに熱帶下の兩原野に樹てられた遠大な計畫は、血と汗とに彩られながら、着々と實行され、東京興農園所屬第三、及び第四農場として太田良一、小林義利の兩氏各農



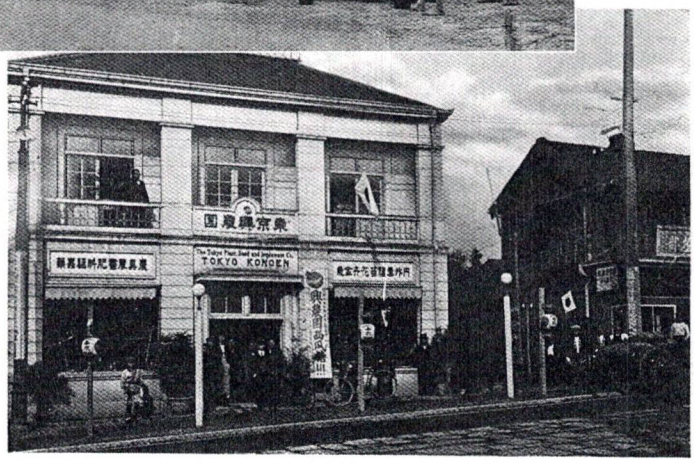
臺灣第三農場の一部

臺灣支店の一部

興農園の變遷

赤坂溜池本店（明治三十年頃）

澁谷宮益坂分店（明治三十六七年頃）



本店となりし澁谷分店（大正十年頃）

場の主任として經營の事に當り、寅次郎亦多忙の時間を割いて屢〻同地を訪れ、熱心に指導監督することを怠らなかつたので、業績大いに見るべきものがあつたが、何分にも廣漠たる未開の原野には幾多の障礙が群り横たはつて、これを征服せんとする寅次郎が懸命の努力も、その存命中には遂に報いられなかつたのである。

よつて、寅次郎の長逝後、遺族はその遺志を繼ぎ、東京興農園の事業として多額の費用と多大の日子を費し、鋭意開發に努めた結果、第三農場たる茎萊宅六百甲歩の地は昭和五年五月、第四農場たる燕巣庄二百甲歩の内三十六甲歩餘(仁武庄原野)は大正十五年十二月、三十八甲歩餘(仁武庄蜈蚣潭)は昭和七年十二月、それ〳〵臺灣總督府の成功檢査を通過して、こゝに拂下の許可を得、寅次郎が播いた良き種は遂に美き實を結んだのであつた。

昭和七年一月、臺南市に開設された東京興農園臺灣支店は、臺南市當局の熱心なる勸說に基き、幼稚の域を脫せぬ本島農事園藝の開發指導と、臺灣所在の前記兩農場の生產品販賣とを主たる目的として設けられたものである。

埼玉農場　次いで大正八年、埼玉縣北足立郡神根村に山林畑地約一萬一千坪を購入、これを苗圃として經營することゝなり、果樹苗を主として、山林樹苗、庭園樹苗等を併せて栽培しその種類及び數量は、共に逐年增加して今日に及んでゐる。この農場につき特に注意すべきは寅次郎が

その生涯の事業とした品種改良の試驗場としてこの地を專ら用ひたことで、當時內地は固より海外に於ても珍種として未だ普及してゐなかつた諸種の種苗や蔬菜の類をこの地に栽培し、試驗の結果好成績を得れば直ちにこれを大量に生產して全國へ廉價に頒布する方針を執つた。この農場は現に東京興農園第一農場として、多數の優良種苗を生產し、本店を通じてこれを全國に供給し、江湖の讃辭に浴してゐる。

歐洲大戰と大震災の影響

かくて東京興農園は寅次郎營々の努力、漸くに報いられ來つて、業態の隆運日に進み、月に旺んに、東京興農園の名、全國に普く、山間僻陬の地にも「農家便覽」の影を見ざることなく、顧客は年々增加するの盛況を呈するに至つた。殊に、歐洲大戰の勃發後は、一般の好況に伴ふ農村の繁榮に從ひ、販路著しく擴張されたため、營業方針上に種々の改善を斷行し、或ひは店員を增加して店務の圓滑を圖り、或ひは店舖を改築して「店賣り」顧客の吸收に力むるなど、刷新的氣分橫溢するものがあつた。

次いで襲ひ來つた大正十二年の關東大震災には、興農園發祥の由緒も深き想ひ出の赤坂溜池の店舖が惜しくも烏有に歸した。同店舖は明治四十二年本店を從來の澁谷分店に移して以來興農園分店として農具部を置き、多數の農具を取扱つてゐた關係上、燒失した農具其他の損害は實に莫大なものであつたが、その後、間もなく同分店を廢して、專ら澁谷の本店に主力を注ぎ、依然

として堅實な營業方針を續けて行つた。

組織を改め株式會社とす

大正十四年に至り、平素常に時勢の動きを洞察し、營業上の進歩的改革を怠らなかつた寅次郎は、事業の基礎を一層鞏固ならしめ、興農園百年の大計を樹てんとする考から、從來の個人經營組織を會社組織に改めんと發意するに至つた。乃ち、或ひは他人の言に聽き、或ひは自らも種々研究した結果、翌十五年に至り、東京興農園を株式會社組織となすことに決し、同年五月二十二日、これが創立總會を開き、寅次郎自ら社長の椅子に就き、渡瀬家同族を株主として、內數名を役員に選任、こゝに今日の株式會社東京興農園は生れ出でたのである。

寅次郎の死と興農園の現況

これより先、同年初頭より、寅次郎は宿痾喉頭癌漸く重り、會社設立後、同年十一月八日永眠するまで、病床に臥してゐたので、親しく新組織の運用に參畫することは出來なかつたが、事業に對する彼の熱意は少しも衰へず、手術後發聲全く不能となつた後も、筆談を以て家族及び店員を指揮し、又、自らは再起し得るものと信じ、その日を待ちつゝ微笑する樣子はむしろ悲壯の感あり、見る者をして思はず落涙せしめたのであつた。

顧れば、たゞそれ日本農界のために、たゞそれ日本農界と共に、邁進を續けた六十八年の努力の生涯よ!!　その間粒々辛苦の結晶として達成した自分の事業が、今や完璧の域に達せんとする

を目前にして、さては社會への奉仕未だ足れりとせず、再起更に新天地に活躍せんとする意氣を藏して、天帝の御許へ行く喜びに溢れながらも、意志の人、事業の人としての寅次郎が現世に對する哀別離苦の眞情は、最後まで彼が眉宇に漂つてゐたのである。

かくて、寅次郎永眠の後は、同族相倚り相扶けて、偉大なりし故人が奮闘の跡を偲びつゝ、その遺業の育成に專念してゐる。現在に於ける東京興農園の本支店、農場及び採種場所在地を示せば左の如くである。

本　店　東京市澁谷區上通二丁目

支　店　臺灣臺南市南門町

第一農場　埼玉縣北足立郡神根村

第二農場　靜岡縣田方郡西浦村

第三農場　臺灣臺南州善化郡茫菜宅

第四農場　臺灣高雄州鳳山郡燕巢庄

採種場　千葉縣(2)、埼玉縣(2)、山梨縣(2)、群馬縣(1)、長野縣(1)、北海道(1)、奈良縣(1)

第六章　文化の先驅「興農雜誌」

通信販賣のパイオニア

東京興農園が明治二十七年十月十五日を以て創刊した月刊「興農雜誌」は、既述の如く、寅次郎が農業上の意見を發表する機關であり、興農園の事業全體の宣傳機關でもあつたのである。

世に寅次郎、若くは東京興農園を以て通信販賣のパイオニアとなす所以のものは、同誌創刊前から「興農園發賣苗木草花種類及定價表」なるものの配符制度があり、又、毎年春秋二季に「農家便覽」を增刊又は附錄として刊行、興農園發賣、又は取次商品品目全般をこれに網羅して、有料又は無料で讀者や希望者に頒布し、その發行部數毎回十萬に垂んとした事實があつたからで、かゝる大規模な宣傳組織は、當時の日本商業界の眼を瞠らしむるに充分であり、種苗業者の地位を高め、興農園創業時代の販賣效果を擧げたこと、まことに圖り知れざるものがあつた。今日でも商業學校邊りで通信販賣の沿革を講ずる時は、寅次郎の名が出ると云ふ。

さて、この興農雜誌は如何なる特色を有してゐたか。次に創刊より廢刊までの特色や變遷を概略的に回想して見やう。

創刊號の表紙には農業、開墾、園藝、家事を四大モツトーとして和英兩文で掲げ、表紙の裏面には次の如きスローガンを堂々と發表した。

特色〜文章の平易、圖畫の挿入、實際の記事
　　家事の訓話、諮詢の應用

右最初三項に付ては各雜誌皆之を云ひ若くは實行す。本誌は殊に勉めて之を行はんとするにあり。而して最終の家事訓話は最も力を盡さんとする所にして、各種蔬菜の調理法、家内の手細工、小供の育て方、衞生法、勤儉貯蓄の訓話、古今賢哲の嘉言善行を記し、又時としては遊戯餘興に關する事も記載することあるべし。諮詢の應用は農業上に關する疑問と答辯を登載するものなれども單に是のみに限らず、廣く一身一家の事に就ても互に相談し互に問答し、且互に出來得る限りの便宜を計るを目的とす。漫遊修學の折を始め、興家立身等の事に就ても互に助言を與へ、其志を達せしめん事を期す。（句讀點以外原文通）

過渡期ジヤーナリズムに投じた一石

右の諸特色中、文章の平易調理法、手細工、育兒法、衞生法等の諸項は、現代のジヤーナリズムから見れば平凡な事柄であるが、當時の如き、農業雜誌は農事一方に偏した記事のみ揭げて、兎角無味乾燥なるを一般とした時代に於て、獨り興農雜誌が竿頭一歩を進めてこの方面にも留意したことは正に劃期的な試みで、農村大衆を初め、農事關係各方面に好評嘖々、忽ちにして讀者が激增したのであつた。これを以て見れば、興農雜誌は

過渡期日本ジヤーナリズムの一面に貴き一石を投じたものであり、我が國農村文化を導く曉鐘であつたと云つても過言ではあるまい。

創刊號とその內容

創刊當時の編輯責任者は寅次郎を初め、東京興農園札幌支店主管小川(二郎)農學士、池田次郎吉氏其他であつた。創刊號の內容を見ると、先づ全體を產業、家事、北海道、諮詢、園藝、雜報に分類し、卷頭には寅次郎の筆に成る「發刊の主意」を載せ、「產業欄」は農業上の專門知識を敎へるところ、「家事欄」には農產物の調理法、美容、衞生其他今日の新聞の婦人又は家庭欄に見るやうな記事を揭げ、「北海道欄」は小川札幌支店主管擔當の北海道移住案內で、これは約十數箇月に亘つて連載された。諮詢と云ふと、今日では一寸妙な響を與へるが、これは農業に關する質疑を編輯當事者及び讀者から提出し、これを普く讀者又は專門家に「諮詢」して、その答案を順次誌上に揭載する、その欄が「諮詢欄」だつたのである。「園藝欄」は各種農產物の栽培法、栽培上の實驗報告、外國產種苗の紹介等に充て、雜報欄には主要農業時事を採錄した。

佐藤氏の祝辭と創刊主意の言

創刊號には寅次郎の盟友佐藤昌介氏が祝辭を贈られた。寅次郎の創刊主意書と共に左に錄して記念とする。

祝辭

農學士 ドクトル・オブ・フイロソフイ 佐藤昌介

農業の振興の一日も忽諸にすべからざるは敢て論ずるを俟たず。蓋し土地の生産力を增加して富強の本源を養ふは農業によらざればこれを致す能はざるなり。本邦古來農を以て建國の基礎とし、專ら國貨をこれに仰ぎ、國民の多數も亦農業によりて生計を營めり。維新以來工藝製作の業大いに起れりと雖も、國家の富源の依然として農業に存するは、海外輸出品の重要なるものの多く農產物にかゝるを見ても知るべし。然るに退いて農業界の現況を觀察するに、耕種栽植の法未だ舊觀を改めず、山林原野の農業に適する地尙ほ荒蕪に屬するもの多し。殊に東北地方及北海道の如きは、農耕牧畜の適地に乏しからず。若し拓殖全くその功を奏するに至らば、今日に倍蓰するの美田良圃を得るに至るべし。過剩の人口を移して不毛の土地を開くは、これを他に求めざるも內に得ること甚だ容易なり。

長友渡瀨農學士、茲に見るところあり、曩に同志と相謀りて興農園を興し、種子の良新なるものを選んで廣く農界に販賣を試み、以て農家を益する所あらんことに努めたり。今又一步を進めて興農雜誌なるものを發行し、農業振興の策を講ぜんとす。その平生蘊蓄せる卓見を吐露するに惜しむことなく、大いに農界の氣運を盛ならしむるは疑を容れざるところなり。今や日淸交戰漸く酣ならんとし、我が叡聖文武なる　皇帝陛下は親征の大纛を廣島に進められ、近古未曾有の一大事なり。顧ふに國力を强大にし、國威を海外に發揚するの本源は、國家の殷富實ににその素因をなす。農業の振興は、兵馬倥傯の際と雖も豈等閑に附すべけむや。渡瀨君の興農雜誌を發兌して農界の木鐸たることを期するも亦この意に外ならざるべし。然ればその發兌は洵に時を得たるものと云ふべきなり。聊か一言を述べてこれを祝し、且つ前途の隆盛を祈る。

興農雜誌發行の主意

日清の媾和破れてより、天下の人心靡然としてこれに傾き、壯者丁者喜こんでその募りに應じ、老者婦女は內にありて專ら恤兵のことに從ふ。我が　陛下軍人の勇武なる、海に陸に皆悉く大捷を博し、雞林八道一の淸兵を留めず、奉天の地、北京の城、かの傲慢なる支那人をして、長縮哀を乞はしむる、亦遠きに非らんとす。誰か我が　天皇陛下の威武を仰がざるものあらむ。

吾人不肖聊か國に報ゆるの義務を知る。一朝その要あらば、劍を以て鋤に代へ、銃を以て鍬に代ふるの覺悟あり。しかも人各々常務あり、その常務を以て公に奉ずるは、蓋し亦吾人の本分なり。曩に各地忠勇の同胞が義勇團を組織するや、我が　天皇陛下には深くその精神を嘉し賜ひ、優渥なる詔勅を垂れ賜ひて曰く

國に常制あり民に常業あり非常徵發の場合を除くの外臣民其常業を勤むるを怠らず益々生殖を進め以て富强の源を培ふは朕の望む所なり

と。嗚呼、我が叡聖至文至武なる　天皇陛下は、この際吾人に詔して、一意その業に勉め、生殖の道を計れと宣まふ。吾人豈奮勉して聖諭に答へ奉らざるべけんや。

我が軍人既に外にありて勇往奮進、陛下の威武を輝かせり。我等內にあるもの亦我が軍人の心を以て心とし、夙夜勉勵、壯者丁者をして內顧の憂なからしめ、內外一致そのことに從はゞ、愈々以て我が武を揚げ、國威を各國に輝やかし、世界萬衆をして我が皇の盛德大業を頌せしむに至るべし。

聞く、亞米利加革命戰爭に方り、壯者走つて軍に赴くや、殘すところは老幼婦女のみ、已に耒耜を把つて耕耘に從事するものなし。然れども米人の義勇なる、少しもこれに屈せず、壯者は益々奮つて兵に從ひ、老幼婦女の內にあるものは更に耕耘生殖のことに努め、且つ專ら興農改進の道を計り、種々の器械を製し、人力勞費を省くの工夫をなしたれば、當時同國の農業は、啻に沮喪せざりしのみならず、却つて大いに發達し、その戰終へ、壯者復たび農圃に出づるに至り著るしく發達を見、今日の富强の基をなすに至れりといふ。

吾人の徽意亦爰にあり。吾人は、上、天皇陛下の聖勅を體し、この米國民の足轍を履み、我が國富强の源を開かむとす。かゝる時に方りては、一時商工業の不振を來すは免るべからざるところにして、雜誌の如きもその兵事に關するものゝ外は非常に發賣數を減ぜりといふ。吾人この逆流に投じて敢て舟を行らんとす。その困難なる、吾人固よりこれを知る。知つてこれを冒すもの、亦實に感奮するところあればなり。

思ふに、我が國農事の改良すべきもの甚だ多し。吾人これを思ふこと久しく、曩にその根本たる種苗の改良を計らんとして、東京興農園を起し、廣く內外の良種苗を蒐め、親しくこれを試驗せるに、その中意外の好結果を得、前途繁殖の見込充分なるものあり、內國種にして未だ世人の珍重せざる良種あり、その栽培繁殖につき、大いに諸君の協贊を得んとするものあり、全國各地農友諸君は熱心に吾人の擧を贊し、大家君子亦援助を垂れ、吾人の事業漸く緒に就かんとするに及びたるが、この間交通諮詢の機關として一雜誌を發行せよと勸めらるゝもの相次げり。

吾人は已にこの熱心なる諸君の慫慂あり、加之、方今時勢亦更に吾人を刺衝する者あり、これ敢て

吾人が自ら發奮せる所以なり。而して本誌は、農業上に於ける諸君の經驗を聞き、間々又吾人の愚見を參へ、以て斯業の改進を計るの外、本誌は尙吾人の快樂幸福を增進せんがため、家庭に係ることを記さんとす。卽ち各種蔬菜穀菽の調理法、家事經濟にかゝる諸事、閑夜爐を圍んで談ずるの際、子弟の訓誡となるべき事柄をも掲げ、又廣く諸般の質疑に應じ、啻に農事のみならず、子弟の敎育、一家の興復、漫遊、留學、醫治衞生等のことに至るまで、各その胸襟を披き、互に相助け、相敎ふるの便を計り、今日艱險の世にありても、吾人の一團は互に一家となり、一族となり、世の淋しきを覺えず、友なきを悲しまず、假令世は一面の大海にして波濤天を衝くも、吾人は一個の方舟に坐し、愉快和樂の中にこの險を越えむとす。

されば諸君、來つてこの舟に投ぜよ。舟中他人あるなし。目的も一、事業も一、その行かんとする所亦同じ。聊かも遠慮するに及ばず。凡そ多く問ふ者は、多くの益を得、多く考ふる者は亦多くのことを悟る。我等はこれまでの航海中、或は難船し、或は漂泊し、又或は奇利奇功を收めたることもあり。思ふに諸君の事業亦然りしならむ。相共に之等の實歷を語る。白河夜船の團欒、亦甚だ面白からずや。かく吾人は互に打ちとけて懇談する中、舟は自から彼岸に達し、希望の港に上るを得む。

今日、聖天子上にましまし、忠勇なる武夫外にあり。吾人その間に棲息し、聖旨を奉じて生殖興農の道を講じ、吾人の天職を守るは、吾人の最も幸福とするところなり。伏惟

天皇陛下萬歲

國富兵强　帝國萬歲

購讀料と廣告料

興農雜誌の購讀料は一部金五錢であつた。郵稅は五厘、一箇年分が郵稅共金五十錢、廣告料は五號活字で二十二字詰一行六錢、二回以上一割引であつた。購讀料は廢刊まで据置であつたが、廣告料金の方は倍額位にまで上つた。廣告料金の値上は、諸經費の增加も原因になるが、一方に於て雜誌自體の價値の向上、購讀者の激增、延いては廣告效果の增大を意味するのであるから、これによつて興農雜誌の當時の人氣も推知されやう。

內容及び體裁の變遷は後に略述するが大體に於て菊判の大さで三十二頁、頁は一箇年間の追丁(おひちやう)制をとつて製本に便し、又、最初は卷數を附してゐたが、後には號數のみに改めた。

巧妙なる讀者吸收策

讀者の吸收には、かなり新機軸を編み出した跡が窺はれる。例へば創刊早々、第三號からは「農友團」の設立を發表した。團規はいろ〳〵あつたが、詮ずるところ、「會費五十錢で興農雜誌配布」が中心なのであるから、購讀者增加の一手段に外ならず、後年雨後の筍の如く簇生したこの種組織の先鞭であつたかと思はれる。勿論團章も設けたし、團員のための醫事請診制其他の特典もあつたが、結局最後まで存續した具體的特典は團員の寄書優遇程度であつたらしい。又、第四十號（明治三十一年）前後から「興農雜誌進物切手」を發行したのもその一例で、これが一枚五十錢、十枚以上二割引の文化的進物と、大いに宣傳したものである。思ふに丸善、三省堂邊りの圖書切手もこの後塵を拜したものではあるまいか。

內容及體裁の變遷

さて、創刊號の編輯形式は、約二箇年間變更を見なかつたが、第三十號（明治三十年三月）邊りから產業欄に新歸朝の專門家の寄稿を載せ、家事欄は諸家の所論を主とし「社說欄」、「論說欄」を明確に區別して、前者は寅次郎又は主筆の獨占するところ、後者では、松村松年、佐々木忠二郎、新渡戶稻造、田中芳男等の諸大家、山田幸太郎、川上謙三郎、三村鐘三郎等の少壯學者諸氏が交々筆を執るなど、非常に新鮮味が加つて來た。

その翌三十一年一月、第四十號から論說を時に「論叢」とも稱し、新たに「家禽欄」を設けて主として養鷄に關する指導的記事を載せ、更に、翌三十二年二月、第五十三號からは「寄書欄」を特設し、讀者の寄書中、見るべきものを選擇して一二篇宛採錄し、又「農況欄」も新設して地方及び海外の農況を每號紹介するなど、地方讀者優待の色彩の濃厚になつたのが看取される。且つこれと相前後して創刊以來の特色であつた「家事欄」は漸次影を消し、純農業雜誌としての傾向が著しく現はれて來た。

雜誌の體裁も幾分變動を見せてゐた。卽ち創刊號以來約三四年は表紙に農業、開墾、園藝、家事を四大モツトーとして和英兩文で表したが、一時和文だけの淡泊な表紙にして、モツトーを省いたこともある。內容及び體裁に著しい變革が見えたのは、明治三十三年十月、第七十號代——寅次郎の渡米前後からのことである。卽ち、明治三十三年八月、第七十一號から目次を表紙に出し、

題號を横書に、發行所は和英兩文とし、編輯上の分類も從來の如く細別せず「餘興欄」を新設して、各地の民謠や風俗等を紹介するやうになつた。寅次郎の渡米後は西垣（恒矩）農學士、主筆の任に就き、同年十一月、第七十四號からは雜誌役員に夫々肩書を附して堂々と發表してゐるのが眼につく。當時の役員は、編輯長渡瀬寅次郎、顧問河村九淵、主筆西垣恒矩、補助菅菊太郎、同明峰正夫の顏觸れで、河村、菅、明峰の諸氏は何れも農學士であつた。

この年十二月、第七十五號からは、菊判を四六倍判と一躍增大し、表紙裏に「本紙の主張」と題して

我農業は　將に革新の緒に就かむとす
　　世界的農業となれり
故に
我農業は　進取的なるべし
　　一致團結を計るべし
　　經濟智識の修得に勉むべし

と、大いに先覺者ぶりを發揮した。西垣主筆は明治三十四年十二月、第八十七號を以て病のため退き、富益（良一）農學士、代つて主筆となつたが、この間、從來の顏觸れとは全然違つた新進農學士が本誌に據つて大いに氣を吐いてゐるのは甚だ面白い。

次の改革は明治三十五年二月、第九十一號から現はれた。先づ全體の體裁は菊判に復歸し、表紙に重要記事を各號活字で混然と載せ、紫刷葡萄の圖案で輪廓をとるなど、一寸後年の各種パンフレツト通信式體裁を備へたが、同年六月、卽ち第九十五號から又もや四六倍判になり、題字も縱書、周圍に大きく井桁の輪廓を附し、その間に二號活字で「我農業は將に革新の緒に就き愈〻世界的となれり世界的農業に通じ革新的農業を知らんとする者は須らく興農雜誌を讀め」と點綴するなど、宣傳これ努めてゐる。この頃から內容の分類も舊の如くになつて、農藝、餘韻、講演、興農公壇等の各欄が新設された。

「農藝欄」には、農業に關する學術技藝につき、諸學士から進步的學理、新說の寄稿を仰ぎ、老農及び專門家諸氏の經濟談を揭げ、「餘韻欄」は詩歌、俳句、小說、俗謠等で農事に關係あるものや、讀者の寄稿にかゝるものに開放し、「講演欄」には、知名諸家の執筆にかゝる農藝諸般の簡明なる講義を採錄することとしたのであつた。「興農公壇欄」は內外農界時事を論ずる有益な欄であつたが、如何なる理由か、直ぐ廢止されてゐる。しかし、明治三十六年二月、第百四號から新設された「師友欄」と云ふのが興農公壇と往年の產業欄を合併したやうな內容を有してゐた。又、その頃までには、家事欄關係は殆んど顧みられぬ憂き目に會つてゐたものであるが、翌三月、第百五號から「農業と婦人」欄の新設を見た。これが家事欄の復活せる姿である。その翌四月から又も菊判になつて、題

號も白字ぬきの瀟洒なものになつたが、質素なるべき農業雜誌の體裁として稍〻スマート過ぎた感があつた。それかあらぬか、同年七月から四六倍判に復り、題號も白字ぬきで斜めに入れ、素朴な姿を廢刊まで持續したのである。記事の方も多少の變動こそあつたが、先づ大體如上の形式で終始した。

附錄と增刊

興農雜誌は最初の間二度ばかり附錄をつけたことがある。明治二十九年正月號に附した松村(松年)農學士編の「日本有益蟲一覽」、明治三十年三月號に附した山田(幸太郎)農學士著「家禽割勢術」がそれで、「日本有益蟲一覽」の如きは新聞二頁大、石版色刷の、今日の雜誌附錄に比しても劣るところなき立派なものであつた。この兩附錄とも、後に定價を附して一般希望者に頒布した。春秋二季に發刊する「農家便覽」を附錄としたこともあるが、これは概ね臨時增刊の形式をとり、頁數も普通號の二倍乃至三倍に及んだものである。

この「農家便覽」初期(明治三十一年一月乃至三十二年一月頃)の形式は仲々變つてゐて、表紙にその年の曆を入れ、樹木を配し、次に「謹告」として注文の仕方、發送方法、送金方法、種子、苗木、雜誌、書籍の注文は各別紙に認めよなど、委曲を盡した注意を與へ、注文用紙まで添へてある用意周到さ、本文の欄外も充分利用して、「不經濟なる農事をなさんと欲せば先づ廉價なる粗惡種子を播種せよ」、「精良の種苗は粗惡種苗の價格にては販賣する能はず」、「東京興農園は日本一の大種苗店にして販賣高亦無類

なり」、「良妻は良夫を爲す」、「掌中の一鳥は叢中の二鳥に勝る」等、等、宣傳語句、俚諺其他を六號活字で滿載したものであるが、かうした意味の欄外利用は一二回で廢めたやうである。明治三十七年度の便覽は從來の型を破り、春秋とも「東京興農園種苗農具農書一覽號」とし、題言も初めて口語文となり、表紙に興農園や寅次郎の寫眞等を挿入して頗る近代味を帶びたものであつた。

寅次郎の社說

寅次郎は興農雜誌創刊以來、卷頭社說欄に於て殆んど每號に亙り自己の所見を發表してゐた。第百號邊りから時折散見するに過ぎなくなつたが、これは寅次郎の身邊が公私共に多忙を極めて來た結果であらう。その吐露するところ、或は農民を指導し、或は當局に警告し、常に時勢より一步先んじて日本農界を導かんとした意圖が充分に窺知される。最初は無署名であつたが、第三十號以降は、本名若くは「對岳」の號を用ひてゐた。その主なるもの五十を選文して本書に附してをいたから就いて見られたい。

興農雜誌は創刊當時から東京興農園書籍雜誌部（後に獨立して單に雜誌部となる）を發行所とし、編輯局も同園內にあつたが、明治三十九年九月から「興農雜誌社」と云ふ獨立名稱に改め（發行所は依然として東京興農園）、同年十月から東京市赤坂區青山七丁目宮益坂上なる同園分店に編輯局を移した。

廢刊

然るに、その翌明治四十年四月に至り、年を閱する十有四年、號を重ねること百五十一號の光輝ある歷史を有する興農雜誌は、都合によつて、當時東京帝國大學農科大學植物學敎室助手

の職にあつた田中貢一氏に編輯を一任することゝなり、田中氏はこれを「東京興農雜誌」と改題し同年五月十五日、第一號より踏み出したが、明治四十二年五月、經費の都合で廢刊の已むなきに至つた。この東京興農雜誌は、興農雜誌の延長と見る向もあるが、前者は興農雜誌創刊以來の特色を排した傾あり、寅次郎の社說復た現はれず、且つ再び創刊號となされたる以上、興農雜誌の終焉は明治四十年四月と見るのが至當であらう。

寄稿家及論題一覽

所謂興農雜誌時代の記事中には、後年名を成した人々の寄書が少くない。左にその論題と芳名の一斑を記して參考に資する。

興農雜誌寄稿家及論題一斑（順序不同）

過燐酸石灰肥料施用法注意	農學士	川上謙三郎
腐熟及新鮮廐肥の比較（廐肥叢話）	同	同
肥料として食鹽を論ず	同	同
所謂完全肥料に就て	同	同
紫雲英の刈跡に留殘する窒素量の算出法	同	同
肥料の利用法	同	同
稻架の方面に就て	同	同
北海道移住手引草	農學士	小川二郎
北海道の植民	同	同
小麥のバント病豫防に關する試驗	農學士	橋本左五郎
麥酒釀造用大麥の耕作者は宜しく栽培改良組合を設置し以て釀造者と一致連合せざるべからず	農學士	矢木久太郎
人造肥料に就て	同	高橋良直
栽培植物の話	貴族院議員 東京學士院會員	田中芳男
甘藷の種類に就て	同	同
風露草	同	同
行路樹の說	同	同
無花果一名密花果に就て	同	同
阿利襪に就て	同	同

馬糞尿の生産量及び其價値　農學士　大島金太郎
甜菜採種に就て　同　同
獨逸帝國の農會　ドクトル　山本悌二郎
麥の銹病　農學士　宮部金吾
土地分裂の弊を防ぐの策　ドクトル・オブ・フイロソフイ　農學博士　新渡戸稻造
田畝集　同　同
實地應用蚕蠶害要論　中會根伸二郎
蠶兒の種類に就て　同　同
蔬菜栽培の將來　農學士　井上正賀
撰種に就て　同　同
天蠶飼育須知一束　矢口志摩司
雜林半島の農業と我等の冀望　相田延一
朝鮮農民の狀態　同　同
農業短說　加藤馨次
何ぞ速かに農林會を起さざる　同　同
學校植樹法の實行を望む　同　同
紫雲英栽培法　同　同
農學研究の必要　同　同
蠶栽培法　同　同
農家經濟鄙見　同　同
石灰の施用に就て　同　同
作物が花粉交接上より起る變化實驗　同　同
農家休日改良の急務　同　同
農事視察組合を設くべし　同　同
農家の弊風　同　同
百事を企てゝ成らざるは一事の成るに如かず　樋田魯一
農家の春　農學士　山田幸太郎
農業上氣象學の應用　同　同
葱頭栽培新說　同　同
農家と水　同　同
農家の足は最も良き肥料なり　同　同
害蟲に就て　獸醫學士　佐々木忠二郎
桑樹の病蟲害に就て　同　同
蠶病豫防法案に就て　同　同
小菓樹の栽培に就て　農學士　南鷹次郎
樟樹栽培法　同　同
亞米利加の農家譚　パチエラー・オブ・アーツ　伊藤爲太郎
亞米利加の家庭　同　同
日本の植物　同　同
米國に移植されたる日本產果樹の將來　同　同
雀の害に就て　同　同
乳牛飼養實驗譚　獸醫學士　岡見彥藏
歐洲の農業　獨逸理學士　岡見義治
養豚の必要　同　同
蠶種粗製の原因及根本的改良案を論ず　北村兵庫
茄栽培法　同　同

果樹栽培に就て	同	
胡瓜栽培法	同	
果樹園の位置	同	
果樹剪定の目的並に期節	同	
花卉繁殖法	農學士	高橋久四郎
秋蠶飼育法		務臺量平
米國の家庭教育一斑	バチエラー・オブ・リテラチユア	濱田梅子
益蟲に就て	農學士	松村松年
害蟲驅除概論	同	
害蟲飼育	同	
桑の尺蠖	同	
農家の經濟如何	同	
農事の奬勵を小學校職員に望む	同	本間小左衞門
富豪家に一言す	同	
意志を發表することに就て	同	
誰か天地を小なりと云ふや	同	
農家の好時機	同	
戰爭と農家	同	
孵卵器に就て	同	佐宗松五郎
ラミー草栽培摘要		渡邊乘藏
中古船來せし植物年表	同	
我邦に於て最も必要なる森林保護問題	林學士	新島善道

森林動物雜記	同	
松は土地を荒廢せしむるか	同	
啄木鳥は寧ろ有害鳥なり	同	
養鷄家の最利益多きは寒中孵化せしむるにあり		佐藤梅吉
興農園開業五周年を祝し併て將來の冀望を述ぶ		館林器雄
妊娠の徵候	米國醫學士	岡見京子
庭前の花圃		巖本善治
蜜蜂に就て	英國養蜂協會會員	ブロー
養禽法に就て	醫學士	古川榮君
ボルトウ劑の起元製方及其效用に就て	農學士	黑澤良平
稻の苗ヤケ病に就て	同	
乳牛ホルスタイン種に就て	米國農學士	堀健
米國農家の冬季間の働き	同	
胡瓜の「ベト」病	農學士	堀正太郎
農作物病害豫防法	同	
北米合衆國に於ける家禽景況一斑	米國農學士	堀翁之助
林樹苗圃下種法	林學士	三村鐘三郎
杉樹一班	同	
森林主副產物の用途	同	
根苅樽の栽培を勸む	同	
稻の收穫	農學士	矢崎亥八

陸稻	同	
土地と資本とを同一視すべからず	農學士	西垣恒矩
種子に就て	同	
石灰濫用禁止に關する政策	同	
良肥料を安く購求する法	同	
馬匹去勢法の精神及び解釋	同	
農家は進んで借金する勇氣を養ふべし	同	
稻田養鯉	同	
蟻の農業	理學士	飯塚啓
水稻種類の早、中、晩と地力消耗との關係	農學士	大工原銀次郎
種子の保存期	農學博士	横井時敬
振農意見	農學士	中村左太郎
螢の話	理學博士	渡瀨庄三郎
農作物の病害と衞生	農學士	西田藤次
農作物の病害に就て	同	
うき草の撲滅法	同	
稻の葉枯に就て	同	
農作物病害豫防法	同	
黴菌と細菌	同	
畑の清潔法	同	
種子の貯藏に就て	同	
土地整理談	農學士 農商務技師	明峰正夫 月田藤三郎
最も良き稻田一反歩の形狀	農學士	吉野得一郎
一反歩に要する水量	同	
本邦の農耕地は努めて稻田たらしむべく本邦の農業は將來に於ても米作を主とすべし	同	
釀造用大麥に要する性質	農學士	藤田昌
釀造用大麥の良種及び之を得るの方法	同	
農家は產業組合を利用すべし	農學士	伊藤清藏
人造肥料	農學士	中尾節藏
爪哇薯の栽培及用途		渡島笹峰
稻いもち病豫防法	農學士	川上瀧彌
稻の病害に就て	同	中司柏山
農場組織を改善すべし		
東北に於ける苹果栽培の將來	秋田縣鹿角郡農私試驗場長 農學士	山田太一郎 半澤洵
廿藍の腐敗病	農學士	湯淺中夫
農家と學術思想	同	
燐酸の效果	農學士	原田友作
農事改良の第一着	同	
曾婆の話	同	
兩窒素質肥料の消長	同	
合理的農民	同	
肥料使用者の戒心	同	
植物虐待	同	
農民到る所青山あり	同	

如何にして農家の生計を高むべき	同	農學士　廣瀨潤平
肥料の分析成分に就て	農事試驗場技師	鈴木千代吉
北米合衆國に於ける種子檢査法に就て	農學士	出田新
蠶豆の褐紋病に就て	同	同　田中萬逸
最近肺結核病問題	農學士	町田正路
工藝作物談	同	同　瀧澤德太郎
蚊と家畜	同	同
小果樹の栽培を奬勵す	同	同　山下順一郎
ジンチャー果實乾燥器使用法	同	同　長崎常
米國草棉肥料論	同	同　生駒藤太郎
	犬丸鐵太郎	同　高津敬三郎
	佐々木幹三郎	

農學講義錄とその內容

興農雜誌と相並んで寅次郎が主宰したものに、農學講義錄がある。これは寅次郎が農業上の專門知識普及の目的から、明治二十九年二月、大日本農學講習會を創立し、同會から發行したもので、毎月一回發行、一箇年卒業、束修金が三十錢、會費が月三十錢で、年二圓八十錢の規定であつた。卒業すると左の書式の卒業證書を交附するが、これには實費二十錢を要し、卒業生は會友として、希望により會友徽章を實費三十五錢で分與することになつてゐた。

卒業證（用紙鳥ノ子大判）

何府縣　何誰

本會規定ノ土壤、農業理科、植物病理、植物榮養、穀菽、果樹栽培、蔬菜栽培、害益蟲、牧畜、肥料、林學、農具、養蠶、農業經濟等ノ全學科ヲ履修セリ依テ之ヲ證ス

年　月　日

大日本農學講習會

又、十名以上の會員紹介者は、永く特待會友として、會友徽章及び、興農雜誌を贈呈し、會員及び會友には精選したる種苗蠶紙、肥料、農書及び農具等を廉價に購入する斡旋をなす等、種々の特典を設けた中にも、興農園や興農雜誌との聯絡が巧妙にとつてあつたのが見受けられる。

學課及講師

主幹は寅次郎、學科及び講師は左の如く、實に堂々たる顏觸れであつた。

科目	講師	備考
土壤學	畿內農事試驗場技師農學士　大工原銀次郎	明治三十二年十二月より塚本氏兼任
害益蟲	札幌農學校教授農學士　松村松年	
果樹栽培及蔬菜栽培	滋賀縣農事試驗場長農學士　高橋久四郎	

農業理化	農商務省技師農學士	塚本道遠	
肥料學	大阪府農學校教授農學士	川上謙三郎	
穀菽	神奈川縣農事試驗場長農學士	矢崎亥八	
農具	札幌農學校教授農學士	南鷹次郎	後札幌農學校教授尾泉良太郎氏と代る
牧畜	農學士	山田幸太郎	
農業經濟	御料局技師農學士	小川運平	
植物生理	畿內農事試驗場技師農學士	長崎常	「生理」は後に「榮養」と改む。
植物病理	西ヶ原農事試驗場技師理學士	堀正太郎	
山林	農科大學林學部教授林學士	新島善道	

(註) 明治三十二年六月より新島氏が山林學、同農大林學部教授三村鑓太郎氏が林業を擔當。

家事	米國醫學士	岡田京子
養蠶	札幌農學校教授農學士	須田金之助

この外、寅次郎自らも大日本中學會で農學講義を擔當してゐた。興農雜誌及びこの農學講義は現在なほ帝國圖書館に保存されてゐるが、後者は古稀書として閱覽を禁止されてゐる。

第七章　市政に參與して

區會議員時代

寅次郎は一介の農業人として日本農界に盡したのみでなく、教育、實業、宗教と凡ゆる方面に活躍の舞臺を有してゐたが、公人としても亦東京市政に貢獻するところ少からざるものがあつた。

卽ち、明治二十五年五月、東京市赤坂區會議員に選出されたのを第一歩として、大正六年十一月二十七日滿期辭任するまで前後四回の改選に際してその都度當選し、その間明治四十一年四月に日本大博覽會東京市博覽會局長として、市吏員たる身分となつたため、一旦辭任したが、十一月博覽會が中止となるや、直ちにこれを辭し、その身分解消と共に翌四十二年二月、再び區會議員に選出されて區のために活動したのであつた。又、明治三十一年十月、第三代赤坂區會議長の椅子に就き、明治三十四年一月まで、二年三箇月の間その任にあり、明治四十一年一月には赤坂區學務委員長に就任した。かくて寅次郎は前後二十有七年を赤坂區會のために捧げてゐた次第である。

卽ち、赤坂區の公職にあつて功少からずとあり、大正四年十一月、御卽位の大典を機として東京

市長奥田義人氏から銀製花瓶を贈られた。

市會議員となる

赤坂區會議員としてその人物力量の程を認められるゝや、寅次郎は四圍に推されて東京市會議員に當選した。明治三十二年五月のことである。市會に於ける寅次郎は全くユニークな存在であつた。農學士としての學識、クリスチヤンとしての人格は、所謂政治家臭味を全然脫却して、その所論識見は、まことに議員中での異彩であつたと云はれる。

日比谷公園の造營に參畫す

寅次郎が市會議員となつた翌三十三年、日比谷公園造營委員會が設定され、林學博士本多靜六、同白澤保美、理學博士松村任三の諸氏に、市參事會からは中鉢美明氏、市會からは寅次郎が委員として選任された。

元來日比谷公園の設計が始まつたのは明治二十七年のことで、事實上の日比谷公園地なるものが設定されたのは、明治二十九年五月、次いで明治三十年東京市に公園改良取調委員會なる機關が設置されて、多數委員が各地から蒐集した資料につき愼重審議の結果、漸く明治三十一年十一月に本格的な設計案提出の運びとなり、翌三十二年一月、市參事會で審議した揚句、更に工學博士辰野金吾氏に設計を委囑したが、これ亦決定の運びに至らなかつた。

蓋し日比谷公園は東京市の經營する最初の公園だつたので、非常に大事をとつたのであるが、明治三十二年八月に漸く輪廓が出來た程度で、容易に施設に着手しなかつたため、時の市參事會

赤坂區會議長時代

（四十一歳）

員星享は「寧ろ陸軍へ敷地を返還すべし」とまで極論した。これが動機となつて急に松田市長も造園方を促進するに至り、助役吉田弘藏氏が委員長となつて前記造園委員會の組織を見たのである。

さて、明治三十三年十一月、各委員の分擔が決定し、寅次郎は、その專門の關係から園藝及び種苗の實際的方面の研究一切を擔任することになつた。寅次郎が多年の蘊蓄を傾けてこれが計畫を完成したこと勿論であるが、特に寅次郎が留意したのは、將來に於ける帝都の代表的公園たるべき日比谷公園の發展性で、これを豫見した寅次郎は當時として實に大規模な計畫を樹てたのであつた。かくて五箇年、明治三十六年六月、豫定の如く日比谷公園は獨逸風造園に日本式造園の粋を加味した日本の持つ當時唯一の歐風公園たる英姿を現したのである。

市參事會員時代

寅次郎は明治三十五年六月、東京市區改正委員、同常務委員、東京市養育院委員及東京築港調査委員に就任したが、この時養育院長たりし市參與澁澤榮一子と相識り、圖らずもその信任を得たと云はれる。明治三十七年八月、東京市參事會員に補缺が生ずるや、寅次郎は直ちにこれに選任され、爾來明治四十一年四月まで五箇年間、再選を重ねて市參事會員の職にあつた。明治四十一年四月十一日前述の博覽會局長に就任したので自然に資格が消滅したのである。

日比谷國民大會

明治三十七年十二月、築港調査委員を辭し、翌三十八年六月、二期六箇年の任期を無事終へて市會議員を辭したが、その年九月、例のポーツマス條約に對する公憤から帝都未曾有の國民的暴動が勃發した。この時、日比谷公園を中心にして、東京市參事會が警視廳を徹底的にやりこめた插話が殘つてゐる。今、これを當時の萬朝報について見やう。

國民が屈辱的媾和に反對するの聲は必ず之を天聞に達せざるべからず。（中略）國民に對して敵意を含み、昨朝より日比谷公園を堅むる巡査警部無慮數百名、公園の綠蔭殆んど彼等の制服を以て白晝さるゝの有樣（中略）、二千人、三千人、四千人と群集の增加するに及んで警官は豫定の手筈を實行し始めたり。藩閥の走狗向田麴町署長は部下を督勵して、一面には正直なる國民を脅しつ、賺しつして公園より追出さんとし、一面には蔦の者をして六箇の門をば悉く丸太を以て嚴重に閉さしめたり（中略）。

何處よりか石降り來れり、砂飛び來れり、巡査は眼を開く能はず、應援の憲兵は手を拱きて氣の毒げに國民に同情の眼を寄するのみ、向田署長と其部下とは更に國民を迫拂はんとせり。零時四十分に至つて決死の國民丸太矢來の前迄肉迫せり。突貫々々の聲は四方より起れり。この時一群の紳士は車を急がして走せ來れり。

これぞ東京市參事會員なり。之より先、彼等の一人はこの騷擾を見、其原因の公園の門を閉ぢたるにあるを知るや、市長（尾崎行雄）に對して何故に警視廳をして斯る暴行を擅にせしめしかを詰りしに、市長も一向に知らざることとて、車を馳せて內務大臣の官舍を訪ひ、次官に逢ふて其を詰りし

に内務省の知らざる處なりと白ばくる。市長は轅をめぐらして更に警視總監を詰問せり。總監は其專横の所行を陳謝しながらも尙ほ其禁止の不法に非ざるを辯疏す。斯くと聞ける市參事會員は火の如く怒れり。

市の公園をば自儘に閉ぢる法やある、われ之を開かざるべからずと、江間、肥塚、森久保、中鉢、渡瀬、江崎、中島、松田、丸山、關の十紳士は車を飛ばして門外に來れり。署長は彼等を見るより俄かに猶の如くになりて、諸君が來てくれては困る、あとで話はつけるから許して下さいと陳謝すれども、江間、肥塚初め多くの紳士は大聲疾呼し、其不法を詰つて止まず、國民はこの道理ある後援を得、一層の勢力を增せり(中略)。市參事會員は署長を叱咤して丸太の繩に手をかけしめたり。忽ち見る、幾旒の弔旗電の如く閃めきて、幾萬の群集は潮の如く門內に殺到せり。署長は一散に逃げ出し、巡査は露兵の如く屛息せり(下略)。

——明治三八・九・六、萬朝報所載

この事件があつた後に開かれた東京市會に於て、寅次郎は「日比谷公園は東京市の管轄なり」として、大いに警視廳の行動を論難し、往年の恩師であり政治家としても大先輩の江原素六翁から「渡瀨君は頭がいゝ、着眼點が違つてゐる」と大いに褒められたさうである。とまれ、日比谷公園は寅次郎にとつて仲々にゆかりの深い公園なのであつた。

献身的努力を市政に

明治三十九年三月、利源調査委員として滿鮮各地を視察したことは、第四章に述べた通りであるが、更に明治四十年、倫敦に開催された日英博覽會に、寅次郎

は東京市會代表として渡英することとなり、市から出品する純日本式庭園の模型を携行する手筈になつてゐたが、事情があつて中止された。

寅次郎が市會議員當時は、自己畢生の業とした東京興農園の事業漸く緒に就き、公的には數多の公職を兼ねて、三面六臂を必要とする多忙の身であつたが、市會の問題とあれば何を措いても出かけて獻身的に盡すこと、農會に對すると少しも變らず、その熱心にして篤實な態度は常に敬虔の眼を以て見られてゐた。

大正三年十月、東京市名譽職として在任十年、公共事業に盡瘁するところ少からずとあつて、東京市長坂谷芳郎氏から金杯を贈與された。

第八章　私學教育と信仰

東洋英和に教鞭をとる

寅次郎が茨城師範を最後として、再び官立諸學校に職を奉じなかつたことは既述の如くであるが、野に下つてから私學の教壇に立つこと再三に及んでゐる。一は茨城師範を退いた翌年、當時麻布メソヂスト教會牧師で麻布東洋英和學校長の任にあつた平岩愃保氏の請に應じて、英文學を講じ、英語譯讀を教へた時で、この時は教室で折にふれては生徒に基督教義を說き、生徒の內にも大分信者が出來たと云ふ。東洋英和學校には後中學部が設けられ、中學部は明治二十八年四月、獨立して麻布中學校となり、寅次郎はその教頭に就任したが、同年七月、茨城師範退轉に際して行を共にした清水由松氏を後任に推薦して辭任した。

今一つは、東京高等農學校、東京農業大學で科外講師として農業經濟其他を講じた時、他は卽ち東京學院院長たりし時である。

東京中學院院長となる

曾て寅次郎が水戶中學に聘した米人宣教師アーネスト・ウイルソン・クレメント(Ernest W. Clement)氏の屬するバプチスト浸禮教會派宣教師團では豫ねてから東京にミツシヨン・スクール設立の意圖を抱いてゐたが、愈〻機熟してクレメント氏はその基金募集に

一旦歸米し、明治二十八年再び來朝するや、直ちに築地の居留地京橋區築地四十二番地に地をトしてこれを創立し、東京中學院と稱した。現在横濱にある關東學院の前身である。明治二十八年九月十日のことであつた。

設立委員長はG.W.タフト(G. W. Taft)氏だつたが、實際上の管理の任に當つたのはクレメント氏で、寅次郎は懇望されて院長の椅子に就き、クレメント氏は教頭となつた。學校と云つても固よりバラツク建で、西洋人の住居だつた二階家を借り、階下を教室、二階を寄宿舍に充てたものであつた。最初の生徒數は僅かに六名、生徒より先生の方が數が多い始末、正に師弟膝を交へて教授すると云ふ風であつた。

東京學院と改稱す

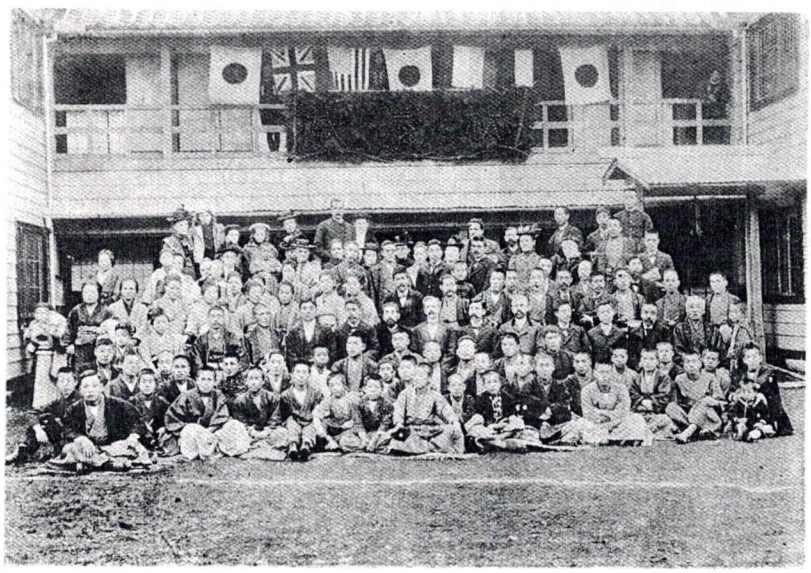
明治三十一年九月に第一回卒業生を出したがその時の卒業生は今の醫學博士渡邊房吉氏、牧師渡部元氏の二名であつた。明治三十二年九月に牛込區左內町二十九番地に地所を買ひ入れて先づ寄宿舍を新築し、その一部を教室に充てたが、翌年校舍が落成して、同時に東京學院と改稱した。左內坂へ移る前に都合によつて校舍を京橋區入舟町七丁目四十九番地へ移轉したから、結局入舟町から左內坂へ移つたことになるのである。

實力涵養主義

學校としては洵に小規模であり、設備も不充分なら生徒數も僅少ではあつたが、その校風、その規律は嚴肅且つ眞摯を極めたものであつた。學校設立の趣旨こそ基督教の宣

東京農學校講師時代（明治二十七八年頃）

（前列中央）横井時敬氏（その右）佐々木忠次郎氏（その左）寅次郎



東京學院長時代（明治三十年頃）

（中列中央）クレメント氏（その右）寅次郎

傳にあつても、その教育方針等は一切寅次郎の主義によるもので、萬事實力涵養第一主義、飽までも人物を作るのが主眼だつた。寅次郎の人格は全校に滲透してゐたのである。

――學校は工場ではない、數よりも質である。

これが寅次郎の信條であつたから、生徒の數も強ひて增加せしめやうとはしなかつた。

學校の修業年限は五箇年であつたが、實力のある者は二年級にでも三年級にでもどし〳〵編入した。科目は普通の中學と同樣に地理、歷史、英語、數學、倫理、國漢文、理科、體操等で、寅次郎の擔當は英譯萬國歷史、世界地理、それから倫理であつた。

寅次郎の教授法

寅次郎の教授法は頗る嚴格なもので、前日に「明日は何處から何處までを準備して來い」と命じ、その日になると、生徒の一人々々に豫習の結果を縱橫に質問し、覺えこむまで教へると云ふ主義であつた。從つて厭が應でも覺えなければいけなくなり、生徒の實力は彌が上にも增して行つた。

子弟を愛すること子の如し

また、寅次郎は子弟を愛する情極めて濃やかで、或る年、一卒業生が一高に入學を志願したところが、東京學院はまだ認可を受けてゐなかつたため、入學資格なしとして受驗を拒絕されたことがあつた。寅次郎は非常にこれに同情し、直接一高校長に會つて

「資格がなくても實力があればよいではないか」

と談判してやつた。が、これは結局規則の上から許されなかつたけれど、寅次郎の子弟を思ふ情と、その實力第一の主張とがよく窺はれる挿話である。實際その卒業生はそれから檢定で資格をとつた上で一高を受驗し一回で合格した。この他にも學院出の生徒で高等學校の入學試驗に合格した者は頗る多い。これを見ても實力のあつたことが判るのである。

學校の月謝は一圓であつた。他の學校では時勢に應じてどし〳〵月謝を値上げしたが、寅次郎は「學校は營利が目的に非ず」として絶對に一圓より上げなかつた。

クラークの遺德

明治三十五年、例の天下の耳目を聳動させた教科書問題の大疑獄が起つた。教科書出版業者が、學校教育者を買收した醜事件である。この時は全國的に學校職員が或は上役から强ひられ、或は下役から泣きつかれ、上下から迫る壓迫と誘惑の不安の中に、遂に瀆職の汚名を着る者全國に充ち滿ちたが、その渦中にあつて、直接間接にクラーク博士の薰陶を受けた者だけが獨り淸く、中には職を拋つてまで節操を全うしたものさへあつた。これはクラーク博士の人格の偉大さを物語るもので、寅次郎も勿論泥中の蓮の一片であつた。

明治三十六年、寅次郎は學院の基礎漸く鞏固となり、又一方家業も繁忙を加へて來たので、院長の職を辭しクレメント氏がこれに代つた。

信仰生活のスタート

東洋英和學校にまれ、東京學院にまれ、寅次郎の教鞭をとつた私學は、何れも基督教に緣故深いものであるが、寅次郎の信仰の生活は札幌農學校に於てそのスタートがきられたのである。寅次郎が札幌農學校時代、クラーク博士の感化を受けて基督教を信奉し、明治十年八月、十九歳の時、米宣教師ハリス氏の洗禮を受けたことは第二章に述べた通りである。

札幌獨立基督教會

が、愈〻街頭に立つて布教を始めたのは卒業してからであつた。卒業後、開拓使御用掛としての公務の餘暇を以て、同期生である大島正健、伊藤一隆、第二期生の內村鑑三等の諸氏と相圖つて、外國宣教師の力を借りない、所謂「札幌獨立基督教會」の設立に參畫し（設立は明治十五年十二月）、自らも馬を陣頭に進めて、熱心に布教に努めたのであつた。

布教に當つては同志が手分けをして各〻その持場を定め、大島組、伊藤組、渡瀨組などの名稱を附して各自その成績を競ひ、市中にはそれ〴〵講義所を持つてゐたがなほ足れりとせず、遠く山間の僻地まで馬に跨つて傳道に赴くなど、意氣軒昂たるものあり、日曜日にはこの報告を持ち寄つて互ひに勵まし合ふのを常とした。これは日本に於ける植民地布教に先鞭をつけたものとして意義ある活躍であつたといはねばなるまい。

水戸に於ける布教

北海道を去つてから數年は歐米にあつたから布教の機會を得なかつたわけであるが、歸朝後水戸中學校長として赴任してからは、再び大いに布教に努力したのである。卽ち今度は、同じ信仰に生きる妻、香芽子を得て、直接水戸市民と接觸しながら夫妻揃つて神の道を弘めて行つた。水戸中學の英語教師アーネスト・クレメント氏は浸禮（バプテスト）教會派宣教師で、これを教務の傍ら布教に從事させる外、更に東京からワデル氏等の宣教師を招いて市内の劇場で大說教會を開くこと數回に及んだ。寅次郎自身もかゝる會で壇上に立つたこと勿論であるが、その外日曜毎に水戸市上町にあつた高木牧師の長老教會に出て說教を試みてゐた。

荊棘の路

寅次郎はかうして市民の精神生活を向上せしめやうとしたのであるが、人も知る如く由來水戸は尊王攘夷の發祥地であり、國粹思想の源泉であると云つてもよい土地であるから、この土地で寅次郎が教育家の身を以て外來の基督教義を宣傳したについては、市民の非難、勢ひ大ならざるを得なかつた。これを押し切つて布教を續けるのには並々ならぬ勇氣と努力を要したのであるが、寅次郎は倦まず屈せず彼等に神の道を說いて、漸次に信者の數を增して行つたのであつた。

麻布教會時代

茨城師範學校長の職を去つて、東京市赤坂區溜池に閑居するや、附近に麻布メソヂスト教會牧師平岩愃保氏あり、親交を結んで同牧師の東洋英和學校に教鞭をとつ

ハリス牧師送別會記念（明治三十六七年頃）

前列中央　ハリス氏、中列右三人目より　寅次郎、黒岩、佐藤、内田、宮部の諸氏

札幌獨立教會東京會員懇親會記念（明治三十五六年頃　於淀橋水谷公園）

（第二列中央）寅次郎（その右）内村鑑三氏（その右）渡瀬春惠、同花子（渡瀬の後）香芽子（その右後）雅太郎（渡瀬の左）河江氏（前列右二人目より）渡瀬愛子、同優子、同次郎、同三郎

たことは既述の通りであるが、この間にも教室で機會ある毎に基督教を鼓吹し、生徒にも餘程信者が增えたとのことであつた。その外、自分も日曜毎に麻布教會の禮拜に缺かさず出席して熱心に說教を謹聽し、時には平岩牧師等と牧師館に行つて心靜かにイエスの教を語り合ふこともあつた。

Y·M·C·A

それから兩三年、明治二十六年に東京基督教青年會理事に選任された。小崎弘道氏等が早くから主唱した基督教青年會は、諸種の事情から中途挫折の悲運を見たので、當時來朝中の米人宣教師スキフト氏は大いに同情して、歸米の上資金を調達し、江口定條、木村駿吉、鵜澤聰明、渡瀨寅次郎等の諸氏が中心となつて、明治二十六年以來Y·M·C·Aの基礎を牢固として築いたのである。

赤坂病院と平和協會

寅次郎は、又、赤坂病院の創立者W·N·ホイツトニイ博士の親友であつた關係上、同病院が財團法人となるや、その理事として、將又理事長として、終身これがために盡すところがあつた。彼が基督教信者としての人格、及びその社會的地位は、外人經營の同病院發展のため少なからぬ利益を與へたと云はれてゐる。

更に、明治三十九年三月、日本平和協會が組織され、江原素六翁、その初代會長となるや、寅次郎はその下にあつて幹事長の椅子を占め、幹事連の一般事務を監督すると共に、理事會を代表した。

幹事長とは云ふものゝ、實務は常任理事に異るところがなかつたのである。同協會創立當時の基金は頗る僅少だつたので、如何にしてこれを有效に運用すべきかは、寅次郎としては少からぬ責務であつたが、よくその任を盡して、後年協會長としてその會計を監督した阪谷男も、寅次郎の方針を參考とされたことが少からずあつたと云はれてゐる。

信仰の權化

寅次郎は全く信仰の權化であつた。人生は賴むべからず、神の愛護に身を委ねるのが最も安全だ、と云ふ觀念は始終腦裡にあつたやうで、こゝに至れば既に佛教で云ふ悟脫の境地である。內村鑑三氏も「渡瀨君の如く希望を懷いてこの世を去り得る人は罕れだ」と云はれてゐる。

微笑の昇天

寅次郎はかねて喉頭癌に惱まされてゐたが、大正十五年三月頃から發病し、呼吸困難を訴へる度がだん〳〵烈しくなるので、遂に同年五月二十二日、氣管切開の大手術を行つたけれど、豫後思はしからず、病むこと半歲にしてその年の十一月八日、信仰の人が逝く時にのみ持つ平和な微笑を滿面に漲らせつゝ心安らかに天帝の御許へ歸つた。享年六十八歲。

昭和六年撮影

第九章　渡瀬香芽子

明治初期の女學校風景

明治九年の十一月、晩秋の和やかな薄れ日は、東京築地新榮町居留地の、とある洋館の窓越しに麗かに射しこんでゐた。内部には數人の女生徒と一人の教師が向ひ合つて——教師は若い外國婦人だつた。生徒はいづれも十五六歳の日本の少女、銀杏返しや桃割れに結つて、長い袖の着物を着たものが多く、中には唐人髷に結つて小倉の袴を穿いたものさへゐて、まことに色とりぐ〳〵なる光景であつた。教壇の上には、徑一尺位の地球儀がおいてある——外國地理の時間らしい。ゆつくり英語で講義が進められて行くと、判るのか判らないのか、兎も角生徒は熱心に聽いてゐる。一人の生徒が質問する、額から汗を流しながら教師に向つて話しかけるその言葉は、何とかいふ言の斷續した英語である。しかし、誰一人笑ふものはない。眞理を求める心、智識慾に燃える少女達の顏はみんな緊張して紅い——先頃政府の認可をうけて、明治初期の日本には珍らしい女學校の一となつた新榮女學校の窓越しに見た、或る日の教場風景なのである。

日本女子教育の濫觴

新榮女學校の歷史は明治三年に創まる。卽ち明治三年、築地明石町の居留地A第六番館に於て、米國長老教會婦人傳道局から派遣せられたカロゾルス夫人(Mrs. Corrothers)經營の下に、數名の有志女性を集めて英語の手ほどきがはじめられた。これがこの女學校の抑々の發端であり、又東京、否日本に於ける女子教育の濫觴でもある。この學校はA六番女學校ともカロゾルス女學校とも呼ばれたが、明治九年の春廢校となり、生徒の一部は同町同番地にあるB六番女學校に轉じ、他の生徒は新たに銀座に開かれた原女學校（後述）に籍を移した。

新榮女學校發祥の由來

B六番女學校は、明治六年、米國長老教會紐育婦人傳道局から派遣せられたパーク(Miss Park)及びヤングメン(Miss Youngman)兩女史經營の女學校で、同番地にあつたA六番女學校とこの學校とは合併さるべき性質のものであつたが、事情あつて三年間と云ふもの、同番地に、同じ教派に屬する女學校が二つあつたのである。明治九年の春、A六番女學校廢校と同時に、大部分の學生はこのB六番女學校に籍を移し、パーク女史がタムソン夫人となつた後は、ヤングメン女史が校長となり、專ら經營の任に當つてゐた。かくて創立四年の後―明治九年、築地新榮町四十二番地に校舍を建築して、そこへ移つた。移轉後、最初はグラハム女學校(Graham Seminary)と稱してゐたが、後、新榮女學校と改め、愈々正式に日本政府の認可をうけた

のは明治九年十月二十四日のことであつた。この新榮女學校こそ、明治二十三年、櫻井女學校と合併して、今日の麹町女子學院の基礎を築いた、黎明日本に於ける新女性の搖籃である。

これより嚮、前述のA六番女學校廢校の當時、カロゾルス門下の原胤昭氏は、從來、同校にあつた多數の女學生を收容して、京橋三十間堀に原女學校を創設したが、明治十三年、經營四年にして廢校の悲運に遭遇するや、多數の生徒は、同校教師ツルー夫人(Mrs. True)と共に、新榮女學校に來り投じた。明治十年頃の築地界隈は、教會と宗教學校(ミッション・スクール)の中心地となり、各派宣教師の住居が軒を列ね、安息日には多數の信者求道者がこゝに群り集ふ有樣であつた。

カロゾルス夫人とその功績

當時、男子の學校としては、官學の開成學校、私學の慶應義塾(福澤諭吉)、共慣義塾(福地源一郎)等があつたが、女子の學校は全くなかつた。この時に當つて、日本女子教育の礎石を築いたカロゾルス夫人の功績は大きい。夫人は、宣教師たる夫君カロゾルス氏に從つて明治二年に來朝し、夫君は慶應義塾の傭教師として在職の傍ら、築地に、築地大學(今の明治學院の前身)と稱する男子の學校を經營した。そして夫人は、日本の女子教育が全く閑却されてゐるのを見て、こゝに女學校を創始したのである。現今女子教育の普及著しきを見る時、そゞろに開拓者たる夫人の功績の偉大なりしを偲ばざるを得ない。

日本文化を開發せる宣教師の力

まことに、日本に於ける女子教育事業は、政府の手によつて開發されたものではなく、米國より派遣せられた宣教師の力により、創始されたものであつて、宣教師は日本に於ける女子教育の恩人であると云つてよからう。獨り、女子教育のみならず、一般文化の向上の基礎となつた英學の勃興は、全く彼等宣教師の力によるところ、頗る大なるものがあつた。卽ち、當時、我が國各地に布教の行はれた徑路は、最初に長崎、次に東京、横濱、後に京阪神といふ順序であつたが、英學の勃興も亦、必ずこれと時と處を同じうしたのであつた。かく英學の普及と基督教の弘布とがその發展を共にしたと云ふことは、英學が新文化の基礎となつた點から見て、明治初年の所謂文明開化を誘導した宣教師連の大なる力を證するものではあるまいか。なほ、當時我が國に布教されてゐた基督教の流派は、プレスビテリアン(Presbyterian)、アメリカン・ボード(American Board)、ダツチ・リフオーム(Dutch Reform)、スコツチ・プレスビテリアン(Scotch Presbyterian)等であるが、明治初年の日本政府顧問として近代史に有名なかのフルベツキ氏(Dr. Verbeck)はダツチ・リフオームに屬する宣教師である。

濱部私塾入門

渡瀬香芽子(かめ)の一生に最も大きな影響を與へた女學校教育はかゝる情勢を背景にして、明治七年、彼女が、唐人髷に小倉の袴のいでたちで、築地居留地A六番館なる、カロゾルス女學校の門をくゞつた時に始まつたのである。

香芽子は、文久元年十一月廿一日、武藏國忍の藩士、相田新助の五女として、同藩行田の里に孤々の聲を擧げた。幼にして母を喪つた彼女は、長じて七歳苛酷なる運命の手に更に父をも奪はれた。かくて天涯の孤兒となつた香芽子は、兄姉に護られて成長し、忍町の下荒井小學校を卒へた後、明治七年、十三歳の時、兄正述に伴はれて上京した。當時は維新の諸改革漸くその緒につき、文明開化の潮が滔々と國の上下に押し寄せてゐた時である。殊に、外國の事情に對する認識の必要——延いて英學の研究の必要は、心あるものゝ聲を大にして叫ぶところとなつてゐた。この風潮を見た少女香芽子は、幼いながらも深く感ずるところあり、健氣にも英學修業の志を固め、傳手を求めて、當時築地八丁堀に開業してゐた町醫者、溝部有山の門に入つたのである。有山は蘭學の大家で、自宅に私塾を開き、三十人餘の生徒を集めて英語を講じてゐた。當時、九段に、兄正述と共に一家を構へてゐた香芽子は、まだ交通機關の殆んどなかつた東京の町を、遙々九段から築地まで通つたのであるが、如何に氣丈であつたとはいへ、うら若い十三歳の少女にとつて、これは決して容易な業ではなかつたのである。

忘じ難し雪中の試練

或る冬の朝であつた。いつもの如く朝暗い內から起き出でた彼女は、例によつて炊事その他の家事一切を濟ませると、身仕度をして築地へ向つた。身を切るやうな筑波颪はいつしか雪を呼んで、東京の街々は間もなく白皚々の銀世界に化してしま

つた。綿をちぎつたやうに降りしきる牡丹雪に行く手を阻まれた少女香芽子の姿は、樽拾ひよりも慘めだつた。幾度か引き返さうと思つたが、その度毎に勇氣を振ひ起して進む中に、ふと顚いた路傍の小石に下駄の鼻緒はプツリと切れた。人通りの稀れな東京の街、雪はどん〳〵降る、恰かも彼女の勇猛心を試練するかのやうに。

しかし、負けぬ氣の彼女である。すぐに下駄を縛つて肩にかけ、手も足もちぎれんばかりの冷たい道を裸足に踏んで、とう〳〵築地の溝部塾まで辿り着いたが、もうその時には手も足も痛々しいばかりに赤く凍え切つてゐた。「その時の辛さは未だに忘れられぬ」と述懐する彼女の老の瞳の底には、過ぎにし試練の日を懐かしむ影が常に浮んで來るのを見る。

當時、同じく溝部塾の門下生で、且つ同塾の隣家に住んでゐた原胤昭氏は、當時の彼女を追想して「ほんとに健氣な、雄々しい勉學振りで、我々男學生も驚いてゐた位だ」と云つてゐる。

カロゾルス女學校に轉ず

溝部塾に學ぶこと數箇月、同年九月末には次兄鐵之助の勸めにより、築地のカロゾルス女學校に入學し、こゝに香芽子の女學校生活が始まつたのである。入學當時は相變らず九段から通學してゐたが、間もなく寄宿舍に入つた。寄宿舍と云ふも、校舍と云ふも、等しくこれ個人の住宅の一部をこれに充てゝゐたのである。從つて學校の生活、勉學の生活と云つても、今日とは違ひ、むしろ家庭的に、愉快に遊びながら自然に語學などを教へ、

又カロゾルス夫人の自然の感化で、次第に神の訓(をしへ)を體得せしめる方針だつたらしい。香芽子も入學以來めき〳〵と英語が上達すると共に、漸次神の道をも知るやうになり、明治七年の暮、カロゾルス牧師の手で洗禮をうけて信仰生活に入つた。その頃のことを彼女は次のやうに云つてゐる。

「その年のクリスマスに、カロゾルス先生から戴いたクリスマス・カードに、在學九十四日、と書いてあつたことを今でも覺えてゐる。その頃の自分は、眞理を學ぶ喜び、神を信ずる心强さが、ほんとうに何ものにも代へ難く嬉しかつた」。

進歩的な當時の教育方針

當時のミツシヨン・スクールの教育法は、今から想像もつかない位變つたものであつた。教師は全部英米人だから、質疑應答は勿論全部英語、教科書も英書で、植物學、數學、天文學、萬國史、萬國地理等の英文教科書と、ウイルソンのリーダー、ナショナル・リーダー、及び聖書の原書などがずらりと少女たちの前に並べられた時は、みんな鳩のやうな目を瞠つて驚いたものであつた。又教授法も、今から考へてもなか〳〵進歩してゐたと思はれる點が多い。例へば、植物學については、生徒各自に木製の箱を一個づゝ與へてこれに土を盛り、そこへ草花の種子を播いて、發芽、成育、開花の順序を觀察することを教へたり、又、天文學ならば、不完全ながらも望遠鏡を備へつけて生徒自身が天體を觀測することを教へるなど、すべて實驗的基礎を

與へるやうな教育方針をとつたことは、當時として實に進歩的な方法であつたと云へやう。

宗教的熱情と社會奉仕の賜

教師達も尊い育英事業のためには獻身的な努力を惜しまなかつた。彼等の宗教的熱情により、又、實際的な社會事業に對する奉仕觀念によつて、女子教育のみならず、日本の一般文化がどれだけ開發向上されたか判らないのである。餘談ながら、後年、日本基督教婦人矯風會頭として、世界的な日本の代表婦人として令名を一世に謳はれた矢島揖子女史は、明治十一二年の頃、香芽子が既に信者としてツルー夫人の許に學び且つ祈つてゐた時、同夫人を頼つて新榮女學校に來り、同校小學部の教師となつたが、ツルー夫人の教化によつて信仰の道に入り、同時に社會事業奉仕の魂を吹きこまれたのである。

生徒一人に教師數名の奇觀

學業と信仰の道へ!!　香芽子の精進はめざましかつた。前述の通り、A六番女學校からB六番女學校へ、B六番女學校から新榮女學校へと、學校そのものゝ變遷につれて、カロゾルス夫人からヤングメン女史へ、ギウリツク女史(Miss Gulik)からツルー夫人へと、師事する教師は變つて行つたし、そして學友たちは、家庭の事情とか、結婚とかのために、次から次へと學業半ばにして校門を辭したのであつたが、香芽子はどうしてもそんな中途半端な修業では滿足が出來なかつた。朝にパーレーの萬國史を學び、夕に聖書を繙いて祈りの生活を續けること滿六年、明治十三年には英語科を了へ、續いて二年間は同科に教鞭をとりつ

カロゾルス女學校時代（明治八年頃）

前列左端が香芽子

女子學院開校五十年記念（昭和三年）

右より　三谷民子女史（前院長）・岡山とし子夫人（穂井女學校第一回卒業生）・香芽子（新栄女學校第一回卒業生）

家庭の人となりて　（明治三十年頃）

學窓を出でし頃（明治十五年頃）

右より　ミス・スマート・相田香芽子・青山とよ氏・鈴木きよ氏

ゝ邦語科をも修め、明治十五年、遂に全科を卒業したのである。卒業に至る終りの數年間は、同級の學友すべて學窓を去つて彼女唯ゞ一人、彼女のクラスは生徒一人に教師數名といふ、いはゞ個人教授のやうな奇觀を呈したが、學ぶ香芽子の意氣込みは益々壯なりで、教師側もその熱心さに釣りこまれ愈ゞ身を入れて教へるといふ有様であつたと云ふ。今日、麹町の一角に聳り立つ女子學院の歴史を繙くものは、同校第一回、唯ゞ一人の卒業生として、香芽子の名が錄されてゐるのを見るであらう。

新人を結ぶ結婚の盛儀

明治十六年十二月廿六日、その前夜居留地の穹空深く鳴り響いた降誕祭の鐘の音は、今日しも相田香芽子の行末に幸あれかしと謳ふ結婚の祝ぎ歌に調べを變へて、彼女の耳に朗らかに樂しい律調を傳へてゐた。かねて知己の尾崎なか子夫人の斡旋によつて、北海道札幌縣御用係を拜命してゐた渡瀬寅次郎との緣談が一年の交際の後にめでたく纏つて、愈々その結婚式の當日が來たのである。新榮女學校の禮拜堂には、媒酌人尾崎逸足氏夫妻をはじめ、新郎の兄渡瀬昌邦夫妻、新婦の次兄相田銑之助、義兄古市友夫妻等の親戚知己の外、香芽子を手塩にかけて愛育した外人教師たちも、われらが最初の卒業生の結婚式を祝福せんものと、早くからつめかけてゐた。窓外には師走の雲低く垂れこめて、押し詰つた歳暮の情景は何となく忙しげに見えたが、室の内には春のやうに和やかな空氣が流れてゐた。定刻となつて式

が始まると聖壇から嚴かなビショップ・ハリス(Rev. Bishop M. C. Harris)の聲が場内に流れた。

「……これより後、なんぢらは一體となりたり。神の選び給ふところのもの、人これを離すべからず。……」の詞とともに誓の指環は取り交はされ、こゝに若き男女は神の御名に於て永久の契を結んだのである。司式者ハリス牧師は、先年寅次郎に洗禮を授けた、メソジスト派東洋總監督の職にある高德の人であるが、今またこの式を司つて、渡瀬新夫妻の生活に深き關係を有するに至つたことを大いに喜んで、彼等に、"Thy Marriage Bells are Ringing"なる書物を贈つた。

式後、パーラーに開かれた小宴に連る人々は、口々にこの良緣を祝福した。新郎は札幌農學校第一期卒業生として輝く青年農學士、新婦は新榮女學校第一期卒業生として新日本の女性のために氣を吐く新しき婦人、共に當時にあつては珍らしい智識的な存在と云ふべき新人、その祝宴の席に會するもの亦、黎明日本に文明を齎らした異國の使者たち、——明けゆく日本の文化に貢獻すべく約束された新夫妻の前途は、かれらの心からなる祝ひの言葉と明るい笑ひ聲に祝福されて、まことに記念すべき宴であつた。その席上、當時碩學として謳はれてゐたマコーレイ傳士(Dr. McCauley)は祝辭を述べて

"China is looknig upon you with envious eyes."

と云つた。思ふに當時新らしき文化に向つて躍進を續けてゐたのは、ひとり日本ばかりではな

く、同じ東洋に於て、隣國支那も亦歐米の文明に眼を開きはじめてゐたのであるから、渡瀬新夫妻の如き新智識の出現は、支那の羨望の的となつてゐるといふ意味を述べたものであらう。これによつて新夫妻の將來が、如何にかれら先進國の智識人の期待の的となつてゐたかゞ判るのである。

ポプラに風薫る札幌の新婚生活

結婚後、四箇月の賜暇を得てゐた寅次郎は、新妻をいたはる心から、雪の國に春の訪れるのを待つて歸任することゝし、そのまゝ滯京を續けて芝櫻田本郷町、築地備前町などに下宿してゐた。やがて休暇も終へ、北海にも春の便りを聞いたので、寅次郎は愈々赴任することゝなり、十七年四月末、若き妻は夫に伴はれて横濱を出帆し、馴れぬ船路も氣強く、樂しく、北海道は札幌へと渡つたのである。

札幌の生活は樂しかつた。遲い春の陽光は目もはるかなる野に山に照り映え、ポプラの並木に風薫る新天地の風物は、一として彼女の眼を樂しませぬものはなかつた。しかし何よりも彼等の生活を幸福にしたものは、同じ信仰に強く生きる配偶者を得たことゝ、同じやうに新らしい教育をうけたよき理解者を得たことに對する感謝の念であつたらう。

しかし、札幌にあること僅か百日、寅次郎は札幌縣を辭して農商務省詰となつたので、八月中旬、夫妻は再び東京へ歸つた。

寅次郎の外遊と初陣の留守居

その年十二月、寅次郎に海外出張の命下り、翌十八年三月、渡英したので、香芽子は前年出生の長男雅太郎を抱へて、牛込南町なる義兄昌邦方の隣家に一戸を構へ、夫の歸朝を待つた。後年寅次郎が社會各方面に活躍するに當つて、東奔西走席の暖まる隙とてもなく、香芽子は常に留守を守つて後顧の憂なからしめたが、この時の一年間の留守居こそ、彼女の留守居の初陣で時に年二十五才であつた。

レヴイツト夫人の講演を通譯す

その年の秋のことであつた。萬國基督教婦人矯風會の特派員として米國から派遣されたレヴィツト夫人(Mrs. Levitt)が來朝し、矯風會の組織目的について各地に遊説を行つた。このやうな國際的社會運動に携はる婦人の來朝は當時にあつては洵に珍らしいことであつたので、それだけにまた、非常なセンセイションを呼んだものであつた。通譯の經驗ある人も極く少かつたが、公開の講演にあたつては、最初は井深梶之助牧師、小崎弘道牧師などがその通譯に當つた。これに對しレヴィツト夫人は、婦人の演説を男が通譯するといふことを不滿に思ひ、是非とも婦人の通譯者を探して欲しい、と例のツルー夫人に要求した。そこでツルー夫人が思ひついたのは渡瀬香芽子のことであつた。當時日本の女性として英語を解するものは誠に曉天の星の如く、まして外人の通譯に當り得るものに至つてはむしろ皆無と云つてもよい位であつたが、この難局に當らしむべく香芽子を起用した恩師ツルー夫

人の眼は流石に過またなかつた。木挽町の貸席、厚生館に於けるレヴィツト夫人の公開演說會の壇上に雄々しく立つた香芽子は、勇氣と學力とを以て見事その大任を果したのである。通譯を終へて樂屋へ歸つた香芽子は、子守に背負はせてそこに待たせてあつた長男雅太郎に乳を喞ませながら、ホツと感謝と安心の吐息をついた。

矯風會創立と山室氏信仰の動機

この時の聽衆の中に、矢島揖子女史がゐた、山室軍平氏もゐた。矢島女史は、この講演は餘りよく判らなかつた、と云つてゐる。しかしこれが刺戟となり、動機となつて次第に矯風事業を諒解し、翌十九年十二月、岩本善治氏、大儀見牧師等と相圖り、日本基督教婦人矯風會を設立する運びとなつたのは否み得ぬ事實である。又、山室氏は

「當時、築地の活版所の職工をしてゐた私は、恰度その日、厚生館の前を通りかゝると大變な人出なので、何事かと思つて訊ねてみると、女の演說會があるといふ。これは世にも珍らしいものがあるわい、と好奇心から一寸入つてみたが、問題の西洋婦人の講演を聽いてゐる內に、だん〳〵その話が判つて來て面白くなり、つい終りまで聽いてしまつた。思はぬ道草を食つて遲くなつたので、慌てゝ工場へ歸つたが、その時の話が何時までも頭に殘つてゐていろ〳〵と考へさせられ、遂に信仰の道へ入つたやうなわけです。その時の通譯者が貴女でしたか」。

と、後年香芽子に語つたことがある。このやうに、日本に於ける社會事業運動の黎明期に貴き

一石を投じたレヴィツト夫人の遊說には、香芽子は重大なる役割を持つたのであるが、彼女自身もこれを機緣として、矯風事業に深い關心を持つやうになつたこと勿論である。

水戸の生活と布教への努力

明治十九年四月、歐米から歸朝した寅次郎は、望まれて水戸中學校長に就任したので、夫妻は水戸市に移つた。居ること三年、明治二十二年の同市退去に至るまで、數々の輝かしき仕事と、微笑ましき思ひ出を殘した水戸は、彼等にとつて永く第二の故郷となつたのである。

寅次郎が中學校長、師範學校長と歷任して、大いに縣の育英に盡す傍ら、縣下の產業を開發し、又一方基督教の傳道に活躍するに當つて、常に影の形に添ふ如くこれを助けた香芽子の力は大きかつた。當時水戸は國粹思想の最も旺だつた土地で、外來思想、殊に基督教に對する理解全くなく、死人があつてもそれが基督教信者ならば寺は墓地を貸さず、柩車に門前拂ひを食はせるほどの頑迷振りであつた。しかし、寅次郎、香芽子の兩人は氣を揃へて、事布教に關する限り一步も退かず、すべての迫害を乘り越えて千萬人と雖も我行かんの、確き信念を以て終始し、その奮鬪振は實にめざましく、實績大に擧つた。

香芽子の婦人文化運動

又、香芽子自身の仕事としては專ら水戸婦人の文化指導を志し、幼稚園を創め（同市に現存す）、婦人會を興し、更に、英語講習會を開いて英語の普及につとめた。

面白いのは、東京からわざ〳〵コツクを招いて洋食店を開かしめ、未だ西洋料理の何たるかを知らなかつたこの超國粋主義都市に、洋食及びその調理法を大いに普及させたことである。一面から見れば、水戸市民は渡瀬夫妻の努力で歐米文化に對する眼を開かれ、新文明の潮流に棹したとも云へやう。

微笑ましき失敗の思ひ出

明治二十二年の一月末、寅次郎は公用で出京し、香芽子は雅太郎、花子の二兒を抱へて留守を守つてゐた時のことである。その頃、農學士渡瀬寅次郎の趣味は實際の家庭生活にも現はれて、庭には豚、鶏、七面鳥、兎などの大家畜群を養つてゐたものであるが或る大雪の晩、眞夜中にふと目を覺ました香芽子の耳に、異樣な豚の鳴き聲が聞えた。訝んで雨戸を繰ると、雪に蔽はれた庭の一隅を豚の仔が啼きながら逃げて行く。野犬に檻を破られた豚が逃げ出したのだ、とすぐ氣づいた彼女は急いで庭に下り立つて豚の跡を追つた。鈍重な獸でも四本の足がある。ずぶり〳〵と一歩毎に膝のあたりまで沒するやうな大雪の中を、追ひかけて行くのだが、なか〳〵捕らない。夜明けに近く遂に豚の姿を見失つた彼女は、ふと殘して來た幼兒たちのことが氣にかゝり出した。大事な豚に對する責任感もさることながら、幼兒のことゝなつてはそれどころの騒ぎではない、慌てゝ又雪の上を駈け出した。歸つて見ると幼兒は幸ひに無事だつたが、さて驚いたことには、十頭餘りの豚の仔は全部犬に噛みつかれて雪の

上に死屍纍々たる有様である。彼女は呆然としてしまつた。何よりも困るのは後の始末である。折角夫が大事にしてゐた豚を、このまゝ捨てゝしまふのはどう考へても惜しい。何かよい思案はないかと考へてゐるうちに、思ひついたのが豚の丸焼である。そこはお手のものゝ西洋料理、臺所には蒸焼器も備へてある。一日がゝりで、見るからにうまさうな、何十人前かの仔豚の丸焼が出來上つた。

フロツク・コートと豚の丸焼

話はこれだけではない。その日の夕刻、在京の寅次郎から手紙が來た。實は二月十一日の憲法發布の祝典に參列することになつたから、フロツク・コートを送つて貰ひたいとの文面。これを見た香芽子は雀躍して喜んだ。ハッピイ・アイディアが彼女に訪れたのである。早速フロツク・コートを荷造りして、同じ包みに心盡しの豚の丸焼を入れて發送した。彼女は荷物を開いた時の夫の笑顏を想像した——定めし喜んで喰べることだらう、お義兄さんにも一匹差上げるやうに賴まう、など。しかし彼女の空想は美事に破られてしまつた。寅次郎の手許についた小包の中からは、丸焼から滲み出た油のため、見るも無殘に油漬けになつたフロツク・コートが出て來たのである。驚いたのは寅次郎、思ひもかけぬ豚の丸焼は嬉しかつたらうが、晴れの大典に列するフロツク・コートがこれでは、折角の美味も咽喉を通らなかつたらう。早速嫂に賴んで、油抜きに大騒ぎをしたと云ふ。フロツク・コートと豚の丸焼——

―何だか表現派の作品の題名のやうだが、「若き妻の失敗」と傍註（サブ・タイトル）をつければ「今思ひ出しても可笑しくつて堪らない」と云ふ香芽子の、水戸時代の微笑（ほゝえま）しき思ひ出となるのである。

夫妻、育英に盡瘁

明治二十二年寅次郎致仕して歸京するや、夫妻は牛込南町に居住してゐたが、同年九月、母校新榮女學校は櫻井女學校と合併して麹町上二番町に移り、矢島揖子女史を院長として女子學院となり、同時に學制を改革して尋常科及び幼稚園を獨立せしめ、これが經營を香芽子に委囑したので、香芽子はこれを引受けて學校を麹町下二番町に移し、自らもその傍らに居を定むるに至つた。

かくてその頃東洋英和學校に教鞭をとつてゐた寅次郎と共に、野にあつて育英に盡す身となつたが、この下二番小學校及び幼稚園の經營は、明治二十五年、寅次郎が東京興農園を設立するに及んで香芽子も著しく多忙の身となつたので、後事をエダ女史に托して辭任した。

興農園開店と香芽子の內助

明治二十五年、赤坂溜池に東京興農園が開店されると共に、香芽子の生活は繁忙を極めるに至つた。さらぬだに多忙な子女の養育と家政に加ふるに、內外各方面に活躍してゐた寅次郎一人ではとても處理しきれぬ複雜な店務は、勢ひ香芽子の助力に俟つより外なかつた。卽ち外、顧客に對する奉仕から、內、店員の養成に至るまで、寅次郎の剛よく香芽子の柔と調和して、初めて興農園は着々と繁榮への道を歩み出したのである。事業が

盛大となるにつれ、實業界に於ける寅次郎の地位は高まり、後には市政にまで關與するに及んで、寅次郎の生活は公私共に全く寧日なき有樣で、これを輔ける香芽子は、これ亦憩ふ暇とてもなかつた。

留守師團長の奮鬪

明治三十三年、同四十二年の二回に亘つて、寅次郎は新智識を求めて外遊したが、その留守中、香芽子は夫に代つて店務一切を總攬した。殊に四十二年の留守居中にはかの市區改正が行はれ、澁谷分店前の道路にも大工事が起されたので、これに應じて興農園も大改築を施すことゝなり、彼女はこれに關する一切の采配を揮つた。又、その年十一月には品評會を開催して興農園の名を全國に喧傳せしめるなど、全く女とは思へぬ働き振りであつた。

母としての香芽子

母としての生活は更に多忙であつた。五男成美を最後として次々に育て來つた子女實に十人、しかも家產未だ豐かならざる家業草創の際、一人の缺くるところなく身心共に立派に成人せしめた母としての功績は、他の多くの功績の內、最も賞讚さるべきものである。十人の子供の養育——全く想像するだに大變なことである。彼女の述懷するところによれば、夏の夕など、食卓を圍む子供の數はいつも七八人を下らず、母は襷掛けで團扇を翳して蚊を追ひながら、箸も覺つかない幼兒の世話をする。一人が泣けば一人がむづかる。全く戰場のやうな騷ぎだつたさうである。

まこと、寅次郎が常に後顧の憂なく、思ふがまゝの活躍をつゞけ、遂に事業を大成して家の基を築き、社會的名聲を博するを得たのも、その功の半ばはこれを香芽子に歸すべきであると、彼女の往年の苦心を知るほどの人にして云はざるはない。

香芽子の教育法

香芽子は子女に對して、溫情の中にも嚴格な教育方針をとり、殊に實際に役立つ技術才能の養成には最も力を用ひた。寅次郎も實際家だつたが香芽子も亦さうであつた。彼女は机上の空論が大嫌ひで、實現しない內はその理論の價値を認めなかつた。だから、彼女自身が實際家としてその範を示し、何事も自分の手を通してしなければ氣が濟まないし、又何一つとして彼女の手がけぬ仕事とてなかつた。子女に對してもこの方針で、どんな事でも自分の手でやつてみて體得するやうに躾け、安逸、贅澤は許さなかつた。これが後日かれ等にとつて、どんなに有難い躾け方であつたか知れなかつた。

日本人離れのした英語

渡瀨家の子女が最も幸福だつたことの一つは、寅次郎も香芽子もその學校時代にみつちり仕込まれた英語に熟達してゐたことで、平素その方面の勉學によき家庭教師を持つたこの子供達は、英語に關する限り、學校に於ても他に擢んで、社會に出ても役に立つ實力を養はれたもので、この點は子供達の常に感謝してゐるところである。實際、渡瀨夫妻の語學力は素晴らしかつた。殊に香芽子は、幼時日本語の使へない教育をうけただけあつ

て、日常の會話から自然に會得した英語は頗る流暢で、學校で日本式英語を學んだ子供達が、いくら優秀な成績を擧げてもとても敵はない位、寔に日本人離れのしたもので、度々外人を驚かしたものである。その時の外人たちの云ふことはいつもきまつてゐた——「貴女は何年外國に住みましたか」。

宗教的訓練の感化

宗教的訓練は勿論怠らなかつた。日々の家庭生活に於て、又毎日曜日の日曜學校に於て、折に觸れ、事に當つて常に默示、明示の訓へをうけた子女は、善きにつけ惡しきにつけ、神に謝し神に縋る宗教心を植えつけられた。この雰圍氣の中に、幼にして神を知つたものは幸福である。何故ならば、假令、求めて宗教的探索に沒頭し、又悟道に徹するほどのことはなくとも、一たび神を知つたものは、長じて、又老いて、決して神を忘れることはないからである。

「母の會」を創む

家庭に於けるよき母であつた香芽子は、又世の多くの母たちのよき友であつた。

明治三十年の頃、米國に於ける「母の會」(Mother's Congress)より派遣されたパリッシュ女史(Miss Parish)が來朝し、矯風會に對して「日本母の會」の開設方を慫慂するところがあつた。その時女史は香芽子に向ひ「貴女が一番多勢の子供を持つてゐるのだから、貴女が中心になつてお始めなさい」と云つたので、この勸めに從つた香芽子は、その後毎月一回、赤坂溜池なる我が家に、

嬌風會の一部會として母の會を開き、或ひは精神講話によつて修養を圖り、或ひは實際的の智識や技術の修得に努めたのであつた。この事業は最初はなか〳〵世人の理解を得なかつたが、教會婦人會、幼稚園などに働きかけてゐる中に、不斷の努力は漸く報いられて、數年の內に、東京市內各所及び全國各地に同じ趣旨の母の會が設けられるやうになつた。この趨勢に喜んだ香芽子は、今度は各地の母の會を糾合して一の團體を作り、これを「同盟母の會」と稱した。明治三十五年頃のことである。

日本の母の友として

その後間もなく、香芽子が嬌風會の他の部會に活躍するやうになつて、同會は彼女の手を離れ、後に「家庭會」と改稱して稍〻その仕事の性質を異にするに至つた。これと前後して、青山學院のチヤペル夫人（Mrs. Chapel）が嬌風會と別個に母の會を開いた。この會はチヤペル夫人に續いてドレーパー夫人（Mrs. Draper）、アレキサンダー夫人（Mrs. Alexander）などが牛耳をとるやうになり、この頃から香芽子も參畫して東京市內及び全國各地に呼びかけるや、嚮に香芽子の努力によつて釀成された氣運から、この運動に應ずるもの多く、各地に續々と母の會支部の設立を見るに至り、今日まで世の母たちのよき指導者として活動を續けてゐる。最近では佛教婦人にも手を差し伸べて同志を求め、奉ずる宗教の如何を問はず、母としての自覺向上に資せんと意圖して業績の大いに見るべきものがあるが、同會の發祥は實に香芽子の努力

に存するのである。

矯風會と香芽子

香芽子と矯風會の關係も亦永いものである。明治十八年レヴイツト夫人の通譯に當つてからの機緣で、明治十九年、日本基督教婦人矯風會の設立された時は恰かも水戸に在留したため、創立には參畫しなかつたが、同二十二年、歸京するや、直ちに同會役員に擧げられ、こゝに、禁酒、純潔、平和のために戰ふ十字軍、矯風會の鬪士となつた。爾來、同會常置員として、又同會の救濟事業たる慈愛館が明治三十二年、法人組織となつてからはその理事として、同會の樞機に參與し、幾多の尊い仕事に携つてゐたが、大正十二年六月、矯風會が法人の認可を受くるに及んでその理事に選任した。昭和七年、矯風會理事の職を辭したが、なほ婦人ホーム（慈愛館の後身）の理事として、又、矯風會最古參の會員として重きをなしてゐる。彼女自身としては、社會矯風の事業こそ己が畢生の事業と確信して、その理想實現のために今なほ祈り續けてゐる。

日本代表として萬國矯風會大會に出席

大正九年、昭和三年の兩度、香芽子は萬國基督教婦人矯風會大會（World's Conference of the Women's Christian Temperance Union）に、日本代表として出席した。その第一回は大正九年、香芽子六十才の時、倫敦に開かれた同大會に、矢島揖子女史、ガントレツト恒子女史と共に出席したのであるが、その行程を示せば、同年三月、横濱を出帆し、ジヤトル、ニューヨークを經てサバンプトンに上陸、四月倫敦に到着、同大會に出席して日本に於ける矯

嬌風會回顧

理事ミス・スマート送別理事會記念（明治四十五年頃）

前列・（左より）戸川ひで、ミス・スペンサー、ミス・スマート、矢島楫子の諸氏及香芽子
後列・（左より）古田とみ、根本正氏夫人、島田三郎氏夫人、小崎弘道氏夫人、井深梶之助氏夫人、本多庸一氏夫人の諸氏

萬國婦人嬌風會大會記念（昭和三年・瑞西ローザンヌに於て）

風會の活動の現狀を報告した。會議終了後は大陸に渡り、戰火の餘燼未だ冷めやらぬ西部戰線の廢墟を訪れた後、再び倫敦を經て歸途についた。歸途、ニューヨークで一行と別れて一人旅をつゞけ、ワシントン、ボストン、シカゴ、サンフランシスコ、オークランド、布哇などに歷遊し、その年禁酒法の布かれた米國上下の情勢を視察旁〻各地に於て講演をなしつゝ同年七月末歸朝した。

六十八歲にして再度代表となる

第二回は昭和三年で、この時は既に六十八才の高齡に達してゐたためこれを危ぶむものもあつたが、元氣壯者を凌ぐ彼女は、七月瑞西ローザンヌに開かれる矯風會大會に出席旁〻四男昌勝、五男成美兩名の見聞を廣むる意圖を以て決然と壯途についたのである。しかも同行する息等の學業の都合により、香芽子は六月末先發することゝなり、單身よくシベリヤ鐵道十日間の長旅に耐へてベルリンに到着、直ちに丁抹に到り同地の國民高等學校を視察した。これは先年永眠せる夫寅次郎の遺志實現に資せんがためであつた。十日の後、ベルリンに於て昌勝、成美と合し直ちに南下、ローザンヌに到つて大會に列した時は、會するものみな香芽子の元氣に驚き、老軀遠來の勞を犒つたものであつた。大會閉會後、ジュネーヴ、パリ、ロンドン、エヂンバラ、ベルリンに遊んで見聞を廣め、再びシベリヤ鐵道により、九月末歸朝した。

五十年のよき配偶者寅次郎と哀別す

大正十五年十一月、夫寅次郎の病日に篤く、香芽子は日夜これが看護に沒頭した。多勢の家族に取圍まれ、その心からなる看護をうけてゐた寅次郎は洵に嬉し氣であつたが、とりわけ香芽子のすゝめる食物、藥餌を一番喜んでゐる樣子であつた。香芽子自身も一生懸命だつた。文字通り夜の眠も寢ずに祈り且つ盡したけれど、天帝の召し給ふ御心は變へるに由なかつた。永眠の數日前、力なく床の上に起き上つた寅次郎は彼女に向ひ「永くお世話になりました」子供達に「よく母さんに孝養をつくして下さい」と遺言した。ほんとに永く——貞節內助の五十年は彼女の腦裡に走馬燈のやうに廻轉した。すべてが夢のやうであつた。彼女は胸がはり裂けるやうであつた。「神のあはせ給ふところのもの、人、これを離すべからず……」と云ふハリス牧師の聲がいづこからか聞えてきた。あれからもう五十年經つのか、そして夫は遂に神の御許へ召されて行くのか、何事も神の御意、悲しむべきではないとは思ひながらも、迫り來る悲しみは涙となつて溢れ落ちるばかりであつた。並みゐる子供達も、苦しみにつけ、樂しみにつけ、絶對の信賴をかけた夫に今や別れんとする母の心情を思ひやつて、袖を濡らさぬものとてなかつた。

亡き夫に捧ぐ國民高等學校

寅次郎すでに、滿腔の感謝の辭をのこして逝き、子女は悉く成人して世に出でたる今となつては、香芽子の「仕事」は終つたのである。今はたゞ安らかな、

豊かな餘生が報いられるだけである。しかし彼女にとつて、もう一つの尊い「仕事」が殘されてゐた。それは寅次郎が遺言によつて遺族に希望した國民高等學校の設立である。彼女は何ものに代へてもこの「仕事」だけは成し遂げねばならないと思つた。何故ならばそれは亡夫に對する最後の勤行とも云ふべきものであつたからである。この學校を世に出すことは寅次郎をこの世に甦らすことであつたからである。彼女は祈つた。そして子供たちを勵ました。幸ひに故人の舊友の贊成と、彼女の祈りと、當事者の努力によつて、興農學園が、故人の思ひ出深き伊豆久連の地に誕生した。そしてそこには今や希望に燃ゆる若人たちが新らしき農村の建設のために學んでゐるのである。香芽子はこの學園に寄宿舍と禮拜堂を寄附した。進展の途上にある同學園の事業は彼女に負ふところ甚だ大である。

老いて樂しむ二つの趣味

彼女の老後の趣味は旅行と長唄である。夫の生前も、機會さへあれば常に各地に足跡を印して、新らしき土地風物に接することを喜んでゐたが、昭和二年の一月、亡夫の遺業たる臺灣農場を視察し、同三年には前述の通り歐洲に遊んだ。同九年九月には七十四才の老齡にも拘らず大連に渡り、新興滿洲國の發展振りを親しく目擊した。「いくら年をとつても、まだ見ないところは見ておきたい、知つておきたい」と云ふ彼女の智識慾が、旅行を趣味としたのであらう。又長唄は六十の手習と人に笑はれても、「漸くお手習の暇があるやうにな

ゆました」と、平氣で樂しみに沒頭してゐる。成程、六十前には、手習をしたくともその暇がなかつたのである。

幸福と感謝の裡に

昭和七年十二月、腎盂炎に冒されて臥床半歲、一時は重態だつたが、天性の健康はよく危機を脫して全快した。その後レウマチスのため、歩行やゝ不自由を感じてゐたが、これも殆んど全快し、矍鑠として七十四才とは思へぬ元氣を示してゐる。

愛する子供たちの內、四女愛子は大正三年、五女里子は昭和六年、それ〳〵病歿して母を嘆きの淵に沈ませたが、殘る八人は各〻幸福な家庭を營み、香芽子を祖母と慕ふ孫二十五人、曾孫一人と云ふ一家一門の繁榮振りである。春の夕、秋の晨、よく母に仕へ祖母に親しむこの子この孫に圍まれて、彼女は今や世に稀なる平和と幸福の雰圍氣の中に息吹しつゝ、日々感謝の生活を送つてゐるのである。

幸福と感謝の裡に息吹しつゝ

昭和六年十二月二十五日・香芽子主催のクリスマス記念

昌　勝

小島虎之輔　花子（渡邊）　正二（加藤）

徳三郎（小坂）　智恵子（加藤）

冴子（美濃部）　榮子（相田）

美濃部亮吉　貴美子

百合子（美濃部）　多恵子（相田）

小坂順造　花子（田中）　雄次郎（相田）

香芽子

洋子（田中）　朝子（田中）

加藤成一　多喜子（阿部）

雅太郎　加藤氏母堂　雄平（田中）

美恵子（相田）

次郎（田中）　澄子（土肥）

春恵（加藤）　節子（田中）　照子（相田）

順子（加藤）

優子（相田）　睦子（加藤）

相田辰雄

秀三郎（相田）　新一郎（相田）

輕井澤山莊にて

滿洲國への鹿島立を前にして
——昭和九年八月撮す・七十四歲——

第十章　日記抄

寅次郎の日記で現存してゐるのは極めて僅かである。一は遠く明治十八年の昔、寅次郎が若冠二十七歳にして初めて外遊した頃のもの、他は大正七、八、九及び十五の四年間に於ける斷片的なもの、これだけに過ぎない。

よつて、こゝには右の日記斷片と、大正十五年五月下旬、病勢愈々重つて筆談の餘儀なきに至つてからの筆談帳の手記とを取捨抄錄することゝした。

A・日記帳より

明治十八年

この年は寅次郎が安田定則氏に隨つて渡英した時である。日記帳は內閣印刷局發行にかゝる定價金十錢の懷中日記、紙クロース表紙、手帖型の、今日では小學生も使ふまいと思はれるお粗末極まるもの。「予曾テ佛國千八百七十八年ノ新日記簿（ヌーヴヘルアジャンダ）ヲ外人某氏ニ得タリ之ヲ譯者ニ質スニ卽

チ一歳中ノ日記簿ニシテ紀事及日計月計ヨリ年計ニ至ル迄ノ位地ヲ設ケ之ニ繫ルニ新古雜錄ヲ以テセリ因テ今其體式ニ倣ヒ以テ是書ヲ編ス庶幾クハ人々日々ノ紀事ト會計トヲ明カニシ年間ノ閱歷ヲ異日ニ見ルノ便ヲ得セシメント云爾（原文通り）と云ふ、明治十二年十二月附の印刷局長序文まである古色蒼然たる時代物である。

寅次郎は、出發前は固より滯英中でも、折にふれてはこれに日記又は感想を書きとめたものゝ如く、匆忙の際とて、或ひは和文、或ひは英文で、鉛筆又はペンを以て走り書きがしてある。毎日克明に記入したわけではなく、一つの斷片的な備忘錄である。和文の假名は片假名を用ひてあるがこゝには全部これを平假名に直し、且つ句讀點を附して一讀に便した。閱讀甚だ困難なる箇所が多く、文意或ひは通ぜざるところがあるかも知れぬ。諸賢の御判讀を煩す次第である。

二月十一日　余等乘船日限取極めのため朝より安田氏方に尾崎と同行す。三月七日出帆のことに取定む。歸途農商務省に到り、それより神田教會に到る。

二月廿三日　退省後上野精養軒に到り、それより宮部金吾を訪れ、同家にて夕食す。宮部はその結婚のことにつき相談す。余は可ならざることを申聞く。歸途上野公園を散步す。

三月一日　宮部來泊す。この日文部省御用係を命ぜらる。

三月六日　十二時我が家を出づ。途中高田商會に到り爲替その他を受取る。一時新橋を發す。ハリスその他諸友來り送る。細君、兄、弟並びに下婢等は横濱まで來る。此夜七時乘船す。細君、兄、弟及び宮部等來送す。兄は船まで來る。

三月七日　午前四時「チベツト」にて横濱を發す。此日風、波共にありしが船體大なるが故にさのみ動搖を感ぜず。されども食事は甘く嗜するを得ざりき。爾他の人々も悉く船酔せる樣子。此夜留守宅のことを夢み、醒めて Home Sick を起す。

三月八日　此日風波昨日よりも餘程靜。午後二時、神戸着。尤も午前十時頃着の筈なりしも逆風のため遲延したる由。上陸。黒田氏及安田氏は直に大阪に赴く。余等二人は神戸に止り加藤信者の家に泊す。布引瀑、楠公社等に行く。此朝黒田氏と談話數刻。

三月九日　朝七時半起床、十時の汽車にて大阪に赴き、人力車にて市内の一部を馳せ、十二時二十五分の汽車にて歸神す。加藤家族甚だ親切、汁粉を供さる。此日午後七時、船解纜す。今夕より齒痛甚し。

三月十日　風波靜穩、景色殊に美、氣候極めて寒し。齒痛益〻甚しく、醫者に藥を乞ひて服用すれども效なし。此夜齒痛のため安眠し得ず。

三月十一日　此朝、醫に乞ひ痛齒を抜き去る。朝八時、長崎に至る。寒氣甚しく雪降る。齒痛のため氣分惡しきが故に余は上陸を止む。甚だ殘念なり。午後四時出帆す。此日午前、午後の二回に亙り留守宅へ手紙を出す。

三月十二日　風波昨日の如く、船體可成動搖す。余、氣分宜し。

三月十五日　今朝香港に入港の筈なりしも遲れたり。十時半より、ワレン氏講義を始む。二時入港、三時上陸。降雨のため道路少しく惡し。ビクトリヤ館に泊す。此夜少しく市街を歩く。書簡三通を出す。

三月十七日　他人は今朝船に赴く。余と事務長とは陸に止る。黑田氏を領事館に訪ひ、別れを告ぐ。午飯後余獨り船に到る。スラツト號四時拔錨。出港後船體少しく動搖。

三月十八日　氣候頗る暑し。

三月廿三日　午後六時新嘉坡着。七時、一行の者悉く馬車を驅つて歐羅巴旅館に到り、朝飯を了り公園に赴き、十二時半旅館に歸る。午餐後博物場に行き歸船す。馬車は壯麗旅館の食事は實に安廉也。支那人の學校ありと云ふ。細君に書を送る。

三月廿四日　午前八時出帆す、マレー王マラージヤ上船。土人英兵となるもの一小隊、棒銃の禮を行ふ。

三月廿五日　此夕六時ペナンに着。七時上陸し市街を散歩す。此港は英國の所轄にして、煉瓦家屋、高樓大厦、新嘉坡に優る。此日街上甚だ熱す。船十時出帆のこと故八時四十五分歸船。往復共リード夫妻と同伴す。細君及び兄等に書を送る。

三月廿九日　安息日。午後ワレン室に於て聖書を讀み祈禱をなす。細君の許へ書を認む。

三月三十日　午前七時コロンボ着。朝食を喫し緩々上陸の準備をなす。十時半、グランド・オリエンタル・ホテルに到る。安田、尾崎、辻松の三氏及余は今夜止宿するため部屋を定む。午食後二時より馬車にて市中を馳す、暑熱甚し。

三月卅一日　暑さ甚し。尾崎其他は朝飯前に船に到る。余は官長と共に朝食をとり、剪髪を了へ、十二時半、イサリヒントに到る。四時半出帆。雷雨。

四月七日　午前九時亞丁着。熱暑。船中より亞丁を望むに折柄軍艦商船數艘泊せり。檢疫法あるにより一時迄は上陸するを允さず。魚鱗頗る多し。兒、船に來つて錢を乞ふ。帽を購ふ。兒游泳中鮫のために喫まる。郵便を留守宅に送る。午後九時出帆。

四月八日　昨夕より今午迄に船二百里を走る。

四月九日　船動搖す。併し余は壯快なり。此夕船窓を閉づ。風あるが故なり。是を以て空

氣惡しく堪へ得ず。甲板に出て眠りしが熟睡するを得ず。

四月十二日　安息日。午前九時スエズ着。檢疫法あるにより上陸荷上げ共になさず。終日只泊するのみ。唯だ離艇するのみなるを以て碌に安息日を守り得ず。殘念なり。此日一同より辻氏に餞す。

四月十三日　午前十時上陸。駱駝にてスエズに到る。スエズは二英里を距る所にあり、市街不潔、市民猾にして惡。スエズ・ホテルに於て晝食。新聞を讀む。四時歸船す。

四月十四日　午前七時、船徐々に運河に進入す。此日中途にて泊す。

四月十五日　午後二時ポルトセイドに着す。直ちに上陸し市街を散歩す。各店頭に於て商賈出でゝ客を誘ふ。商賈中佛人多し。寫眞を購ひ、郵便を出し、コヒーを飲む。土人巧猾且惡。市中に格別見るべき所なし。蜜柑を買ひ、四時半歸船。六時四十五分出帆して地中海に出づ。此夜カルドの遊びをなす。

四月十六日　風波殊に穩。心地よし。歐洲風に吹かるゝは愉快なり。

四月十七日　船體動搖す。此朝雨降り雷鳴あり。余毫も弱らず。十時頃より快晴。波荒き故に船窓を閉づ。此日例の寅の日なれば毘沙門は雜沓なるべし。朝陸地を見る。

四月十八日　船體の動搖。朝雷雨驟にして晴。午後三時頃窓に陸地を望む。五時頃 Biggor

の市街を經過す。時に汽車の海岸を走るを見る。久しく綠色を見ざりしが、今日此邊の綠山蒼樹を一望して頗る壯快を覺ゆ。夕刻メツシナ海峽に入り、メツシナ市を眺望す。頗る繁華なるを知る。

四月十九日　安息日。天晴る。昨夕より風波全く靜まる。

四月二十日　晴朗。朝コルシカとサルジナの間を過ぐ。佛艦六隻の操練を見る。

四月廿一日　午前五時半馬港着。朝食後九時半上陸す。馬車にて Grand Hotel de Marseilles に赴く。入浴。

四月廿五日　倫敦着。在留日本人數名出迎ふ。ラングハム・ホテルに宿す。夜市街を歩く。三月十九日出の郵便を宅より受取る。glad！

四月廿六日　安息日。余は獨り止つて會堂へ行く。餘人は散歩す。

四月廿七日　園田領事を領事館に訪ふ。ケンシントンなる博覽會場に行く。此夜留守宅へ書を認む。

四月廿八日　今朝前日の書を便送す。此日 Emperor's Gate に移る。博覽會場に行く。

五月一日　無爲。Wrote a letter to Kame and sent through U. S. A.

五月三日　安息日なれども、不得已諸人と共に會場にて働く。

五月四日　開業式執行さる。

五月五日　安田官長より Bamboo stick (for present); Diary; Letter to Aoki; Money Account; etc.

五月六日　餘人は書面を日本より受取りしも、余は不然。

五月七日　Sent a letter home via San Francisco. 本日郵便來りたれども、留守宅よりは來らず。

五月八日　Sent a letter home via Suez Canal. 此夜公使館にて會議。Kよりの書を受取る。此夜公使館に赴く。

五月十日　Went to Presbyterian Church.

五月十一日　アーレンス等の爲に招狀を齎らし、高田商會に赴く。アーレンス、ショール兩人を招き、晩餐を喫す。

五月十七日　安息日。雨降る。午前 Scotch Church に出席す。午後美教會に到る。安田氏のために用事を爲す。

五月廿八日　本月八日より今に至るまで、宅より書を得ず、種々配慮せしが、今朝、幸ひ無事の書を得たり。此書は廿六日着せしも、誤つて他人の處へ配達されたるなり。

五月廿九日　東洋郵便日につき、宅へ書狀を出す。今日寫眞を復寫す。小刀と金指環を買ふ。

今朝ジェーリーに會ふ。

五月二十日　Wrote letters of reply to Prof. Ewing, Miss Braithwaite, Mr. Mulloy. Telegram from Yasuda, states we would be in Vienna 4 or 6 days.

五月廿一日　Sunday. Went to Scotch Church this morning, heard a very good sermon from Dr. D. D. Text. X's sufferings; the cup which he drank and the sorrow which we must suffer in this world. Read Pilgrims Progress, walked alone to S. K. Park; but many people looking on me, I returned at once.

This week our dear Lord blessed me very greatly. He has freed me from temptations and trouble; He gave me a letter from K.

This month has passed away now, but I did not do anything. I must not spend days so useless. I was very busy but I must improve my time better and use it. What would my beloved ones be doing now in Tokio, 10,000 miles away from here. May God bless them and make me meet them in happiness and prosperity. Let us obey Thee in all Thy Commandments.

六月一日　此夕 Braithwaite 方に赴き十時歸宅す。

六月二日　會場裝飾に從事し、大いに疲る。

六月三日　This morning I received 2 letters from home. Others did not receive any but myself and I was so glad, read the first one and took breakfast and I was so jolly and glad. After breakfast I read the latter one and lo, bad news, Masa is very ill. Dear Kame, if I were with you, I could assist you and comfort you. God be then pleased to save the life of Masa if it be Thine will. I prayed earnestly to God. O Lord be merciful unto us.

今日會場裝飾、少しく疲る。

六月十二日　會場出火す。直ちに消火。

六月十三日　博覽會掛員を訪ふ。

六月十四日　安息日。五十一番セント・マルチン・レインに到り、フレンヅスの說教所に赴き、ブレースウエートに遇ひ、會後同人宅に到りて會食す。今日ショール方に不得已赴く。

六月十五日　招待により、セント・ハロウエー・サナタリアムに到る。別仕立汽車にて二時四十分、ワルターレー停車場發、饗應後六時五十五分發の汽車にて歸舍す、時に十一時半。今朝ブレースウエート嬢二名來場、案內す。本日日本より郵便(米船)入りても余には來らず。失望。

六月十六日　今朝郵便を尋ね旁〻公用を兼ねて公使館に到りしも、余には郵便なし。

Invited by Sonoda to Japanese dinner this eve.

六月十八日 Invited by Ahrens; went to Crystal Palace.

六月十九日 Wrote to Kame via San Francisco. Sent Pictures to elder brother; book mask to Kame. I have been so anxious of Masa, how is he now, if he is not dead yet, and if he is dead, what would become of Kame; these thoughts always in my mind, but I conceal this in my letter to Kame. Oh, life is so uncertain, we know not what will become of us to-morrow.

七月廿三日 公使館へ行く。宅より書面並びに寫眞到る。

七月廿四日 宅より書狀一通到着。此朝余は宅へ書面を出す。

七月廿五日 Left London at 9. 20 a. m.

七月廿六日 To Antwerp and back at 5.50.

七月廿七日 午前八時半バーリン着。六時コロン着。案內者に誘はれ市中を散步す。八時半汽車コロン發。寫眞を購ふ。

七月卅一日 午前二時半ニユーレンバーグ着。アドレル・ホテルに到る。此朝伯林より山本君の許に電報を送りしが無效に屬す。今朝博覽會に到り一覽す。其盛なるに驚く。中島來り、

山本等他出する故、會はんとすれば今然るべき旨を申し聞く。不快なりしも其色を現はさずして停車場に赴き一面す。此日碌々、唯ゝ朝、會場を見しのみ。

八月一日　此夕七時半、山本等歸る。此日余は古跡等を探る。

八月二日　此晝山本等と共に不本意ながら食し、其招きに應じ聊かその意を慰む。夕四時半、ミユーニグに向つて出發。九時半ミユーニグに着す。夜市街を歩き、王宮の前に到る。ホツプの栽培多し。

八月三日　五時半起床、市中を巡覽し七時食事。停車場に赴き、デューリツクに向ふ。車中甚だ深切なる英婦人と獨逸人に遇ひ、感動す。愈ゝルーセルに赴くに決す。途中葡萄を栽培する所を見る。日本人松平に會す。夕、ルーセル着。

八月四日　リギ山に登る。午後山を下り、バールに到る。車中伊太利亞人と話す。

八月八日　Saturday. Saw Mr. Yasuda: he is in good humour and glad to see me; went exposition with Y. as Capt. Ito and others were coming there. As I probably ate rather too much last evening, I suffered from diasthia to-day and felt quite tired.

八月十日　石本、宮川、此夕出立。今夕余移轉す。此晝は宮川石本等と食事す。余は安田長官

に隨ひ、製鐵所へ赴く約あるを以て長く留る能はず。此夕、ビクトリア停車場に赴く。

八月十六日　Sunday. Attended this morning to Norland Chapel.

九月十五日　Yasuda left for Belgium with Ozaki.

九月十七日　A letter to Kame; sent via San Francisco.

九月十九日　Rainy. Could not go to Ramford. Worked at home.

九月二十日　安息日 Being alone, I can keep the day quiet, holy. Morning, to Congregational, and heard a very profitable sermon upon God's past, present and future Guidance.

十月十二日　安田官長と共にマンチェストルに來る。製鐵所分見。ベエライン氏來訪、共に晩食す。電信を尾崎に送る。

十月十三日　午前九時半出發、リー氏方に到り、商店を一覽す。それより木綿製造所に赴き、同所一覽。製鐵所に到り器械の製造を見る。此日ブルツクス氏と共に木綿其他の製造所に至る。木綿製造所に於て午飯を供せらる。夕、ビクトリア停車場より乘車歸宿す。

十月十四日　Went to Oldham, saw cotten mills machinery factory where 2,500 people are employed.

Invited to Bohlin to dinner at 8 p.m.

十月十五日　Went to see woolen factory in Yorkshire. Started home at 8. 30, treated kindly, had lunch at Mr. Shawl's house.

十月十六日　午前府廳に到る。ベニラインン氏案内す。慈善會に於て府知事の賞牌を渡す式を見る。了つて府知事の招きにより午餐を共に食す。サルフオルドの知事も亦同席す。了りてベニラインン氏方の商店に到る。今夕ベニラインン氏方に赴く。ショール氏は電報により今夜歸京す。

十月十七日　今朝マンチエスターを發す。

十一月三日　Called to Legation with others by evening dress.

十一月四日　Went to hear Salisbury with Suematsu. Did not sleep well, because I ate too much. In future let me always remember how I was situated now.

十一月五日　Went to Takata & Co. to receive official money ¥ 30. Hard time with Colonel Corn, but all work good for me. I must be patient and am determined to be forbearing.

十一月二十日　My son's birthday. What pure and thankful thonghts occur in my mind, sent a

letter to Kame this day.

十一月廿四日　McLean came to see me, but being absent did not see her. Yasuda much offended because she came to see me. He does not like to have my Xian friends come to see me. Most absurd and foolish. I was however very patient.

十一月廿四日　Went to Café Royal, then to see McLean.

十二月十日　Sent a letter to Kame via San Francisco.

十二月十一日　This week we have been very busy; it is almost a foolishness to hurry up the work so much, but under the circumstances, I could not help it. Sent Xmas Card to Kame.

十二月十二日　Left London for Holland this evening at 8. 30 from Victoria via Flushing.

十二月十三日　At 10.50 a. m. arrived at the Hague. Called on the Legation. The place comparatively quiet.

十二月十四日　Walked on street. The people look less active and healthy than we noticed in England.

十二月十五日　The blessing of God has constantly been upon me. Saw the boats on the Canal

which carry a load of potatoes.

十二月十七日　Went to Rotterdam.

十二月十九日　Left the Hague, arrived at Essen. Received 2 kind letters from home.

十二月廿一日　Visited factory of Krupp.

十二月廿二日　エツセンを發し伯林に到る。途中小林を多く見る。林を生ぜざる地は概ね牧草を植え,又は穀菽類を生ずるものの如し。羊の小林中に牧するを見る。夕,八時半伯林到着,カイザルホフに泊す。

十二月廿四日　Sent a letter this morning to beloved Kame. I felt badly this afternoon and evening. Yasuda scorned and frowned X. and Xianity. God bless me.

十二月廿五日　Xmas. What a different life we now live from last year. Next year I hope to enioy happy Xmas time with the beloved and many friends.

十二月廿九日　夕,十一時五分伯林發,露京に向ふ。

十二月三十日　昨日來汽車中にあり,今夕六時露境に達し車を更ふ。

十二月卅一日　夕六時露京着,公使館員一名,大村氏來迎す。招きに應じ八時半公使館に到りカルタの遊を爲し,十二時に新年を公使等と共に迎ふ。

明治十九年

この年の日記は極めて少部分が現存するに過ぎぬ。即ち左の如し。

一月一日　St.Petersburg, Russia.

Entered into the new year in peace and health. I do not feel much of 正月 now, especially so as this country has the new year after 12 days from now. May Lord be pleased to bless me this year as Thou used to do last year. May Thou bless my beloved wife and child most abundantly this year. If I must go back at once let me willingly do so, and let me act accordingly. It is always best to be ready for every emergency.

一月二日　Walked a great deal in streets; saw Russian soldiers marching. If any people be well equipped and well dressed, there cannot be any reason that one is superior to the other. We need not he afraid of Russia if we be well protected and well governed. Let Japs develop natural resources of undeveloped regions all over country, and we should be safe. Russians are said to drink "Votka"; they are some of them idle, have bribes, they are good payers though.

一月三日　Invited to Japanese dinner at the Legation. Read the Bible, sang hymns alone. Quite

cold. Wrote some lines to K. Yas is haughty and shabby. But what I have learned in Bible, in Psalm, is "Let me trust in God and He will bring it to pass."

一月十一日　今日農業博物館に往きて巡覧す。田内、内村、香芽へ書面を出す。田中並びに松本氏へも同斷。

一月十二日　After dinner this evening, we had 百人一首 card at the Legation, had I with Yasuda a very bad and unpleasant struggle which is very unreasonable on his part. As he is so stubborn and proud, I had to submit to my great patience. I will ever remember the time and will strive to improve the talent and genius as hard and as much as possible.

大正七年

六十才の時の日記である。相州秋谷久留和なる別荘生活の一端が窺はれる。

二月二日　此日赤十字病院に行き成美の快きを見、神に感謝す。

二月九日　常の如く八時出園。午後一時四十三分品川發秋谷に向ひ夕方秋谷着、風寒し。今夕此日記を認めながら、神の成美、香芽及予の病を輕快にせしめつゝある事を感謝す。

二月十日　腰痛のため今朝起床に際して困難を感ぜり。七時起床。掃除の後土鍋に米をか

けたるに水多くして粥になれり。朝より降雨、終日歇まず。傘なきにつき一度も外出せず。雨中に豆腐屋の聲聽ゆ。呼びて二個を購ふ。此夜九時半迄讀書して就眠す。

二月十一日　紀元節。曇天、風寒し。土釜にて飯を炊く。葉書を認め、投函旁〻散歩。增川不在。增川の子供を馬場に遣はして鷄卵を買はしめんとしたるに十一個有合せたりとてのしをつけて贈らる。

二月十二日　六時半起。晴天風寒し。昨日の殘飯をおじやにして食す。葉書を留守宅へ。午後一時ネーブル十二個を携へ馬場方に到り、昨日の返禮をなす。後、蘆名に蘆貞吉及古賀の促成栽培を視察し、蘆よりグラジオラス十個を購入す。歸途秋谷の溫泉に浴し、增川の紹介にて野菜五圓を買入れ東京に送らしむ。歸宅後彌平方より湯の沸きたる旨案內ありたれば再び入浴す。

二月十四日　正午秋谷發。午前中增川來訪。ミカンを與ふ。五時歸宅。直ちに大日本農會理事會に出席。此夜雨降る。十一時歸宅。

二月十五日　レントゲン治療のため本田醫院に到る。胸部のX線寫眞をとる。一時半智利硝石普及會に到りストラザースと會談二時間。分店に立寄り三時半歸宅。夜錢湯に赴く。

十二月十九日　久連よりの歸途汽車中にて。

秋谷附近の溫暖なる山地を開拓して盆栽金柑夏蜜柑などを仕立つるときは必ず好利益あるべし。久連には十五日夜着。東京は同日朝八時半出發。沼津にて風に阻まれしが、夕刻發の船にて急に桔梗屋を去り、大波を冒して唯一人乘船す。十六日終日出園。十七日半日雨。十八日終日働。十九日歸宅。この日午前六時起床、七時發動機船にて沼津に至り驛前を散歩。九時廿八分沼津發。十時半御殿場着。玉蜀黍一俵七圓七拾錢にて買入(高田仁三郎方にて)。親子飯を食し、十二時半御殿場發歸京の途につく。

大正八年

六十二才の時。豆州久連農場の生活手記が多い。

一月廿一日　午前八時半家を發し久連に向ふ。例刻(一時半)沼津に着きしも昨日より大風吹き續き出船なしといふ。因つて河澄留吉方に赴き黒松種三斗を買ひ、一升一圓三十錢の割にて廿圓の內金を渡す。外に大島櫻種子をも分ち呉るゝ筈なり。桔梗屋に荷物を預け、散歩す。

一月廿二日　早朝桔梗屋發。陸路を行くべくフランネル單衣、足袋、雜誌を風呂敷に入れ携へ馬車屋に赴く。其中に西風再起。江の浦より陸路して十二時半久連着。食後出園。寒氣のた

久連に遺香を偲ぶ

豆州久連農場にて（大正十年頃の冥次郎）

昭和六年十一月八日、故人の命日に、遺族うちつれて久連に遊び、ひねもす在りし日を追懐す

め柑樹落葉多し。相談の上施肥延期す。高田來談九時半に至る。

一月廿三日　園内を廻り「ハイ松」の接木をなし、又種々の用事を惣八に命ず。四時半歸宿。此夜よく眠られず。

一月廿四日　午前中出園勞働し、エリカ花を切り萩其他を掘り、惣八と共に梅盆栽を作るために大梅樹を掘る。十二時半歸宿。晝食の海苔と大根おろしには閉口す。出發遲れたると舟行不能のため、沼津發三時二十三分の列車に乘遲れ、今六時三十七分發列車を沼津驛に待ち居るところ。

三月廿八日　昨夜相磯勝男急病にて十時半頃死亡の旨、今朝承知。大に哀惜す。將來有望の人なりしに卒に亡す。農具部の將來に大打撃なり。此日妻をして香典七十圓を携へ吊慰せしむ。明廿九日告別式を行ひ、火葬にして遺骨は翌日鄉里へ家族のもの携行の由。

四月九日　午後三時久連福田屋に着く。喫茶後出園薄暮迄勞働す。明日の施肥人夫の手配を命ず。

四月十日　曇。早天微雨ありしも人夫來りしにより八時に施肥を始めしも時々小雨あり。

晝食後三時迄施肥せしも第一回を終るに至らずして大雨到る。女人夫を歸らせ男人夫だけを止めて配合肥をなさしむ。余は傍ら枇杷(土肥)穗を切り醉芙蓉の櫛杖を作る。五時過福田屋にかへる。雨頻りに到り衣を濡す。

四月十一日　快晴なれども寒し。東北風なり。人夫來るに先立ち施肥の手配をなす。人夫高價なるに拘らず能率鮮少なり。二區と三區の過半、四區の一部五區の一部の施肥を了る。

四月十二日　今朝は特に早出、人夫を督す。午前中は能率よかりしも午後は然らず。本日未だ全體の施肥を終るに至らず。予はボンカン苗等を掘取る、發送用なり。シトランジの穗を切る。

大正九年

六十三才。健康舊の如くならず氣力漸く衰へ初めたる狀が所々にほの見える。

三月十三日　香芽、鹿島丸にて米國シアトルに向ふに付き、十時十分東京驛發共に横濱に至る。乘船後一時半余先づ歸京の途につき他の家族は三時同船出帆まで殘る。余は赤坂分店に立寄り歸宅す。風花全身に生じ氣分惡し。

三月十四日　香芽出發後宗教上の感想殊に切なり。今朝教會に赴かんとせしも石井重任よ

り電話ありて中央人造會社に赴く、雨降る。發熱少々あり。

四月十日　小坂に居りし古市姉來りて宿泊す。快談。

四月十一日　愛子の墓參をなす。子供等と共に愛子の紀念會をなす。山林大會の餘興として帝劇觀劇、十時過歸宅。十一時半古市姉發病、十一時四十五分死去。

五月一日　次郎の荷物を出す爲め大に取込む。

五月二日　教會へ一同と共に出席。書面を香芽宛米國ワシントン大使館氣付にて出す。坐骨神經痛あり。南町、庄三郎方に赴く。次郎結婚式に出席を乞ふためなり。壽司を供せらる。植村方に行く。

五月七日　午後山田、普及會、分店に赴く。小坂方に行き善次郎を見る。

五月八日　雨。牛込赤坂に赴く。矯風會に廣田氏の話あるにより娘等に出席せしむ。小坂に善次郎の病を看る。此夕次郎と共に二山亭に行く。

五月十一日　體溫三十七度五分に付き千葉行を止め鵠沼に來る。氣分大に直る。日記及外國行書狀を認む。神經痛に惱む。東家閑靜なり。九時就寢迄讀書。

Rainy days continued for a week and it has just brightened this morning, though I suspect it will

rain again this evening or tomorrow. Not feeling well I wished to get over to Idzu where I can attend the farming and then go bathing to Nagaoka for a short while, but rain and some things or other prevented me from doing so. As Jiro's wedding is going to take place on the 15th, I must be back on the 14th at the latest. Having had stings of dyspepsia three times for the last three weeks, I have become quite exhausted and tiresome. I came to feel my weakened health. Yesterday, after I voted for Tamura for M. P. I intended to get out of Tokyo, but my temperature was 37.6 and, moreover, it was very rainy, so I confined myself at home. I intended to spend a few remaining days until the 14th at 成東 hotsprings, but this morning my temperature was 37.5 and I felt no slight pain on the left leg and hip, I was afraid if I could not walk well when this rheumatism become worse during my short trip. I therefore changed my mind to come over here. Although the pain in the leg does not subside, I feel better for which I feel thankful. I pray that the Lord will lead me, my wife and all beloved children, and bless us all.

Before I left Shibuya, telephone came and I learned with pleasure that Kosaka won the election with a slight margin or 76 votes. I wrote a card at the station and greeted him. I however wish that the Seiyu Kai will not have much majority. The less their numbers won, the better for the country.

五月十二日　I sweated very much last night. I feel better though, for I feel rested somewhat. Pain in my thigh has not abated, for which I suffer. Wrote letter to Kame. Walked forenoon and afternoon for an hour each. I feel weakness and it may be I am growing weak. I may be nearing my end.

五月十三日　春惠今夕着京。庄:贈物持參。

五月十五日　次郎結婚式。

五月十六日　中西來談。氣分惡し。春惠には甚だ氣の毒なりしが,晝食後成東溫泉に赴く,途中も不快なり。五時半着。入浴して元氣恢復。聖書を讀み,春惠のために特に祈る。

五月十七日　春惠に葉書を出す。春惠若し二ケ月以內に健康を恢復せば(余と競爭して)百圓を與ふべしと約す。

大正十五年

六十八才。昇天の年の日記である。年初より病勢次第に進み,安けき日のなかつたことがよく現はれてゐる。日記の敍述は六月十九日を以て終る。

一月十四日　馬場を伴ひ久連に赴く。七時四十分澁谷發。晴。赤切符なれども混雜せず。車中風邪を感ず。久連着後三時より出園。夕五時半歸宿。宿泊者別に六名あり。此夜喧しく

安眠せず。此夕宅へ葉書を認め、出發前記せしグランウオルドへの書面投函を三郎に命ず。

一月十六日　朝七時。朝暾富士峰に映じて美觀を極む。昨夜安眠す。エリカを切る。

一月十七日　出園。エリカを出荷す。

一月十八日　久連發。淡島及眞樂寺に立寄り寺に金五圓納む。後古奈白石館に赴き十二時半着。

一月十九日　起床前より頭痛甚し。フエナセチンを服用せしも癒えず。午後長岡發。東京に向ふ。昨夜より大雨、國府津にてフエナセチン再服。橫濱に近く、八時癒ゆ。

一月卅一日　少しく不例。熱あり。午後次郎來り、將棋をさす。

二月三日　赤十字病院に赴き咽喉の診療を受け一時歸宅す。

二月四日　電話にて普及會にストラザース在否を尋ね、十一時會見。ロスコー氏外三人と會談す。三郎につき高評をきく。午後久留和に向ふ。此日香芽先着。余、氣分頗る佳快なりしが、一睡後十二時頃より胸痛を覺え熱氣を感ず。辛子を張りて痛を去る。

二月五日　香芽歸京。家無人なるがためなり。胸痛全く去らざるも凌ぎよし。

二月七日　香芽子、田中花子と共に來久。午後共に散歩す。花子は四時歸京。母は泊る。

二月八日　小坂花見舞に來久。鷄肉を持參す。午後共に散歩。母早朝歸京。

二月九日　里子見舞に來久。慰安多し。里子と共に海岸にて魚を購ひ、共に食し、殘りは里子に土産に與ふ。

二月十日　雨。午前散髪屋に往きしも滿員にて歸る。雨中衣をぬらす。午後雨歇む。再往又滿員、歸宅す。里夕刻歸京す。

二月十一日　晴。紀元節。此地に初午を祝ふの日なり。床屋に往く。滿員に付諦む。歸京せんとして、午後三時より五時迄待ちしも自働車に乘れず。寒くして氣分惡しくなり、遂に歸京を思ひ止り、電話を以てその旨東京へ通ず。

二月十二日　午後五時歸京の途につく。自働車大に不便。

二月十八日　赤十字に到り岩田博士にレントゲン診療をうく。

二月十九日　赤十字院長に診療を受く。散藥及水藥を貰ふ。呼吸困難を覺ゆ。

三月二日　朝より雜用を濟ませ、三時四十分久留和に向ふ。

三月三日　朝小坂別莊の孫三人と散步す。咽喉の工合昨日よりも惡し。赤坂病院の使者ブレースウエート息來る。

三月四日　午後百合子來る。共に散歩し土筆を摘む。後小坂方に赴き花子の歸宅せるに逢ふ。しるこを供せらる。

三月五日　曇。後雪降りしも積らず。午後小坂方へ往き汁粉を供せらる。水仙根を掘る。

呼吸苦し。

三月六日　快晴。寒し。本日歸京。

三月廿二日　一時十五分帝大病院に到り、眞鍋氏の再診をうく。更に檢査を要すといふ。

三月廿三日　田所氏十時に來る。田中次郎よりの電話により急に來りしなり。今朝氣分不良。

四月十八日　晴、岡田博士に診斷をうくるため十一時香芽、次郎と同乘して赴く。閉塞の懸念なきにつき海濱行可なるを告ぐ。今日は前日次郎より岡田の診察を無斷依頼したりしなり。

四月廿一日　伊藤一隆來訪。同窓會繼續のことを勸めしも斷れり。後、祈禱して別る。

四月廿五日　二時四十五分發にて新橋より三郎、村田と共に久留和へ向ふ。新橋迄自働車、逗子より久留和までタキシー、夕食大にうまし。

四日廿六日　三郎及村田今朝六時發歸京。午後五時香芽來る。

四月廿八日　三郎來久。

四月廿九日　此日風大に強し。三郎歸京。

四月卅日　田中次郎來久。壽司、メロン、飴などを贈らる。午後小坂順造も來る。庭等に種子を播く。頭痛、服藥、癒ゆ。

五月一日　次郎、小坂、余、三名にて田中新築を見る。此日次郎及香芽歸京。此夕昌勝來久。大工及び丈八、夜將棋をさしに來る。

五日二日　此朝小坂方に赴く。午近く小坂花子來久、共に晝食す。午後小坂一同歸京す。海岸別莊に海岸松を昌勝と共に植う。好天氣。此夜も大工將棋をさしに來る。

五月六日　香芽子歸京。三郎と共に夕食。一杯の粥の盛り方過多なりしもこれを喰盡せしに、睡眠穩かならず、頭痛甚し。三郎起きて揉み呉れしも氣の毒故斷はれり。

五月七日　朝來雨。頭痛去らず。絕食。十一時半フエナ服用。三時に至るも直らず。葛湯を呑む。波荒し。讀書の氣分出ず。

五月十日　氣分可なり宜し。

五月十一日　昨夜發熱。大に苦しむ。早朝東京へ電話す。

五月十三日　午後里子來る。

五月十六日　日毎に衰弱を感じ、終末の近づくやを思ふ。次郎來る。此日三郎歸京を勸む。

My breathing is difficult and my end may come at any moment, so I write the above lines hurriedly to-night.

My dear children and wife are all asked to walk uprightly and honestly and purely upon God and men.

（註）この英文は大正十五年五月十六日夜認めた遺書の後段である。

五月十八日　決意歸京す。三郎迎へに來る。出發間際に辰雄來る。二時逗子發。妻三郎、辰雄等と共に歸る。次郎停車場に待吳れ、留守宅には花、里待吳る。

六月七日　Dr. Manabe came this afternoon at 4. 30.

六月十日　Went to Dr. Okada's for the first time after operation, with wife and the nurse by auto.

六月十八日　Bathed this noon, for my fever was gone for two days. Called on Hana Kosaka with Jiro.

六月十九日　高田便覽の用事にて長野へ出發す。里子、虎之輔と共に來る。午前十時、三十七度一分。午後三時、三十六度九分。夕、卅七度。

B。筆談帳より

日記帳に認めた日記は六月十九日で終り後はすべて日常生活の用事を辯ずる筆談帳にこれを錄す。筆談記錄は大正十五年五月二十二日、大手術直後に始まる。日附を認めたものと、然らざるものとがあるが、順序は日を逐つて記載しあり、全部で七冊に及ぶ。固よりその折々の斷片的記錄に過ぎないが、闘病生活、その間の肉體的及精神的苦惱、生きる希望と生への努力、病床に呻吟しながらも絶えず店務の指揮を怠らなかつたこと、友人、親戚、家族、看護婦、下婢の末に對し苦しい中にも禮儀の正しかつたこと、絶えず自己を鞭撻し、信仰に精進したことなどが、まざ〳〵と描き出され、實次郎の全人格のアウトラインがはつきりと印象づけられるのである。

▽去る五月廿二日岡田博士より氣管切開の手術を受け、口がきけませんから、面白い話があつたらそちらからして下さい。

▽岡田先生、癒つたら洋服が着られるやうになりますか。

▽野菜ソップはお說の通り甘くなけれども、春惠がベストを盡してこしらへ、持參したるものなれば有りがたく飮む。

▽今日溫室へ行つて見たるも一向ものになつてをらず。水は乾き鉢の中に草は生へ、戸外に出すべきものにして室内に乾きて枯死せるあり。如何せしや。

▽（岡田博士來る）。お蔭樣にて疼痛も大分減少して來ました。大に食物の味が出て參りました。しかし頭痛が甚だしく夜分睡眠が不充分で困ります。昨夜十一時に眞鍋先生がおいで下され、其後、頭痛藥と睡眠藥とを多量に用ひて眠りました。只今も頭痛のためフエナセチンを用ひましたが效能が日に〳〵薄らいで來ました。頭痛さへなければ他は甚だ良好です。晴天の時は二三十分位散步致してもよろしいでせうか。

▽今秋の便覽はあつさりと編輯して貰ひたし。部數は精確のところをお調べ下さい。小學校へは秋には出す必要少し。春は出す方よろし。秋は小學校休業中のもの多きにつき、見合す方よき分多かるべし。たゞし、兵庫縣下の小學校はこれまで夏秋に注文多かりしやに記憶す。又東北方面は春の便覽不足のため送らざりし個所ありしにつき、秋の分は大急ぎに出す必要あり。こゝ一週間にして編輯を了るやう農具及苗木の方へも御通知下さい。

▽氣を短くなどしては相濟まぬわけなれば大に耐忍す。

▽球根類の發送は了りしや。ダリア球の殘りはどうするのですか。芽の伸び過ぎたる分は直ちにチユリツプ畑の間に植える方よろし。芽の伸びざる分にて發送に差支なきものあれ

ば伊豆へ送りたきが如何。雑球でもよきものあれば採種用として送られたし。伊豆へはなるたけピオニー又はカクタスの良種のもの送りおきたし、如何。懸崖菊も少々仕立につき今より御着手下さい。

▽諸薬既に我が頭痛を癒す力なし。鍼又はマツサージも最初はよかりしも今は無效。

▽ラジアムは效ある由友人より聞き、又、余も曾て本田醫院にてこれを頭痛に用ひたる記憶あるにより、一昨日來二回に亙りラジアムを用ひしが、これをつけてゐる時は、殆んど苦痛を忘る、されど殆んどにて、ずつかりとはゆかず。兎に角、鍼やマツサージよりよろしきこと確かなり。

▽今年は大根不作につき、本店にて使はなくとも他の店に値よく賣れることあれば、決して二三年のひねも棄つること勿れ。他の景況、模様などを觀察注視する必要あり。

▽過日話せしモチの木の種子は店の二階にあり。かゝる些細なことでも輕忽にすべからず。上部の表面ばかり見てゐてはいけない。どうしても雇人は任せきりにしてをくわけにはゆかぬ故、自分から隅々まで注意する必要あり。

▽こんな苦しみをしてまで生命を保つてゆくからには、何かもつと良きことをしたいと思ふ。無意味に苦しむのは意義なし。

▽相州の別荘に赴いてゐたけれども段々呼吸が苦しくなり、歸京にも骨が折れるやうになつ

たから迚も長いことはないと思つてゐました。しかし、切開後は呼吸が樂になり、此分では急には死なぬかとも思ひます。

▽先頃所澤飛行隊の士官が安行農場へ來りし時、なぜもつとチユリツプ樹（トリー）を植えぬかと言ひしが、同樹は飛行機の材料に必要なる品の由なり。生長迅速なる樹木にして園内にも數本あり、外國にては皆これを飛行機の用材に用ふと云ふ。

▷ It needs no small forbearance to live as I do now. If I have no faith in God, I cannot bear. I feel always thankful for kindness of dear ones and friends, which is a great relief and joy and thankfulness. I must be always cheerful and joyous for all things, given to me from the above and environment.

▷ Though I want to think that all is for my good, this constant headache is often almost unbearable. I must however think that there is Divine love even in this.

▽六月七日、午後四時十五分、眞鍋先生來る。御多用中お出で下され洵に難有感謝致します。お蔭樣で漸次快方に向ふやうに思はれます。只、日毎に頭痛に惱まされるだけは苦痛でございます。しかし、昨夕はミグレニンを三粒用ひ、昨夜就眠時（十一時）にアダリン五粒を服用しまして、今曉三時頃まで眠りました。尿用の後七時半までまた眠りましたが、今日は始めて十二

時過ぎまで頭痛なく爽快に過しました。

▽相田述一氏(註、香芽子の甥)來る。

忍へお出かけの節は直之進さんによろしく。私も工合がよくなつたら家内と同伴で是非忍町へ往つてみる積りです。

▽六月九日、山口勝氏來訪。山口氏は曾て陸軍大臣に擬せられたる人なり。少年時代君と魚釣に中澤田村の戸谷へ往つたことを思ひ出します。その頃は君はとり眼だと云つてをられたやうに覺えてゐます。眼の他は故障はありませんか。前年の肺炎は完全にお直りですか。植村君は一昨日の日曜に釣りたるアイナメ數尾を贈つて呉れました。伊豆から唯今、夏みかん到著しました。甘くはありませんが、伊豆の農場の新種ですから御風味下さい。

▽六月十四日、田中花子來る。

フエナセチンとミグレニンと相互に服用して居りますが、餘程凌ぎよくなりました。眞鍋先生はラヂアム使用差支なしと申されますが、岡田先生は危險だと云はれますから見合せてゐます。お庭が出來、樹木が植はりましたか。草花の容易に成長するものを蒔いてはどうですか。私方にある筈ですから、お蒔きになるなら見つくろつて差上げますが。少し晩くなりましたが、まだよいものもあります。苗のあるものは苗を植えた方がよいでせう。ヘチマ、レイ

シ、ベニ花菜豆、藤豆など。小坂の所でも潮風の當る所ではみな枯れて駄目でしたから、あなたの所でも氣をつけることが肝要です。子供たちは壯健で遊んで來ましたか。

▽その麥わら帽子はどこにて買ひしや。帽子を買ふには松屋にでも三個位持つて來させて選ぶ方可なり。自分のも一つ買ひませう。これから外出には大に必要なるべし(チヤンスあれば)。

▽七月十三日。

Could not rest well on account of pain and fever. It is better to go away than to suffer and make a burden to others. May God bless dear family and let each one have more faith and love toward God.

▽便覽發送用の帶封の數は何枚か。便覽の數、十萬なるに帶封數が不明なるは如何せしや。馬鹿々々し。帶封數が假に便覽の數を越えてゐたらどうする。若し逆に不足だつたら更に馬力をかけて書かせざる可からず。そんな呑氣なことではいけない。このやうに店のことなど世話を燒くは好まざるも生きてゐる間は已むを得ず。

▽昨日植村君來訪。數日前北海道より歸京、札幌で佐藤、宮部等に會ひし由。佐藤は重荷を下したやうだと云ひ居りし由。しかし具體的に辭任のことは話しもせず、問ひもせざりし由。該地の噂には、佐藤辭め、南が暫時これに代るとのこと。しかし南も大分體が弱いといふ。

▽七月十五日、とう〳〵また切開されました。癒るにはまだ相當な日子と厄介を要するでせう。後から〳〵いろ〳〵の苦惱が續いても、未だ生命が保たれてゐるところを見ると、何かまだ私に爲すべき仕事が殘されてゐるのでせう。

▽いろ〳〵御馳走が並びましたね、これだけ平げられゝば直ぐに丈夫になれるでせう。あとで柘榴の花を少し挿して下さい。

▽七月十五日。

Written July 15 eve, lying on bed upstairs. Had a second operation by Dr. Okada at 10.30 this morning, pus was said to have come out quite abundantly with blood in greater quantity. Operation lasted about 20 minutes. Doctor said that the operation was conducted very timely. Dr. Manabe telephoned Jiro not to operate, I was rather hesitant. I trust in the Lord, for He leadeth me in the path I should walk, and what was done this morning in the Lord's Guidance. I thus believe I shall get well in time, I am, I trust, spared for some work yet.

▽七月十六日。

新らしき看護婦來る。

貴女の名は？　これまで切開した人の世話は度々なさいましたか、咽喉を切開する人は少く

ないでせう、私は岡田先生には大正二年以來パピロマ(註　鼠蹊帶の腫物)でお世話になり、昨年四月には二回に亙つて根岸へ往きパピロマを取つて頂きました。

岡田博士來る。

お蔭樣で大分宜しうございます、昨日の繃帶が緊く感じ創口邊が疼くて困ります。管に強く壓へられますため、その下が疼く感じます。此疼痛がなければ非常に樂にならうと存じます。手術後はお蔭で大層樂に感じます。この後は何日に一度お手當を受けますか。なるたけ屢々願ひます。出來るだけ早く避暑出來るやうにお願申します。熱がありませんときはそろ〳〵歩行したり又は風呂に入つてもよろしうございますか。

(註)　醫師に對しては苦しき中にも必ず一應は經過のよろしきを述べ、その勞を謝し、儀禮を盡すを常とせるを見る。

▽七月十七日、佐藤昌介君來る。

過般は成功裡に祝賀會を濟まされ大に喜んでゐました。先日伊藤君が訪ねて呉れて柳本氏の傳言を傳へ、その後小野兼基君が來訪し呉れいろ〳〵昔日の物語をしましたが、その頃は隨分氣分よろしく、近く佐藤君上京を機として拙宅においてクラス會を催ふしたしと話したるところ、小野氏も大層贊成せられたり。その後私は咽喉に腫物が出來、熱も非常に高まり、名醫

の說區々にて或ひは丹毒だと云ひ、或ひは然らずとのことなりしが、一昨日丹毒に非ずとて切開し、大に苦痛は感ぜしも只今の處にては今回はクラス會は出來ません。實はこの春以來度々死淵に臨みましたが、まだ life が spare されるからには何か後日に求めらるゝ處あるかと思ひ、靜かに且 patient に生存してゐます。

▽七月三十日

The heat and pain combining have oppressed extremely today. I am now tired of life and desire. I can sympathize with those who suffer from pain, and are destitute of consolation and commit suicide.

▽八月一日。今日は實際暑氣に閉口した。午前岡田さんへ行かうと思つたが、暑くて行く氣になれず。こんな暑さが續くと體が堪らないし、お前たちも大に氣の毒だから岡田さんへ電話して、これまで毎日の容態を述べ、兩三日試みに秋谷へ行きたいと思ひます、と斷つて下さい。そして明朝なるたけ早く往きませう。

▽八月二日。今朝八時半東京發、秋谷へ來る。昨日の暑熱は實に殺人的でしたから奮發して參りました。

▽小坂順造來る。これからどんな手當をすればよきや不明です。先日岡田さんは何も心配

は要らぬやうなことを云はれ、癒つてしまへば何のことはないと云はれましたが、今少し詳しく尋ね、且つ癒つた人の様子を聞いて見たいと思ひます。花子も是非早く避暑させてやりたいものです。少々無理でも、この暑さでは、其方よろしきかと思ひます。私も、岡田さんが、三十七度以上の熱が毎日ある故、まだ早いと申されましたが、早く來てよかつたと思ひます。お宅ならまだしもですが、病院では困るでせう。

▽一日の日曜日の激暑に閉口せしは生來始めてのことなり。明治十九年に外國より歸りし當座毎日農商務省に午後五時まで勤務せしことありしが、その節も非常に暑く、同僚の松平といふ人が毎日歸宅後屋根へ水を撒くと云ひをりしを記憶す。植村君は、その時分より我家に來始めたるなり。私は當時下痢を患ひ百方藥用したるも癒えず、遂に伊香保に赴き療養したる後、茨城縣へ赴任せり。

▽八月廿二日。秋の鹿の鳴く聲の淋しい話だが、慶應二年に母、兄等と共に江戸を出立したのは舊の九月で紀州蜜柑の黄熟する頃だつた。小田原で蜜柑の枝を駕籠の中に入れて貰つた。興津に泊つたとき、裏の山で夜、鹿のなくのを始めて聞き、殊に寂寥を感じたことを覺えてゐる。

▽明朝何時出京か。小坂花子に、善太郎病氣、同情に堪へず、切に神に祈ると傳言あれ。又、里子に、過日來色々お世話になりし禮を述べ、且つ同人の健康を尋ねられたし。

▽八月二十三日。頭痛といふものは實にいやなものなり。前年横濱にて頭痛のため米國人の自殺せるあり。ホイツトニー氏も同情しをりしが、余はそれ程のものと思はざりしに、この頃は大に同情するやうになりたり。

▽八月廿五日。デンマーク高等學校のことは調べられしや。大に賛成を得て、國家の利益になるものゝ基礎を作りたし。どの位要るや。やり方によるべし。徳富氏が國民教育會を設けるため、初めに基金を寄附し、これに他の寄附を乞ひ、今ではその利子で可成やつて行けるやうなり。私は發起人の一人となり、自ら十萬乃至三十萬圓を出し、同意者を集めて百萬圓ぐらゐを得、やつてみたいと思ふ。

▽八月二十六日。氣分やゝよし。

東京の冬が凌げるかどうか。今年は當秋谷に冬越しの計劃をする必要あるやも知れず。

先日讀んで呉れたヨハネ傳の續きを讀んで下さい。

私が信者になりし動機は、明治九年の初冬の夜、例の通りクラーク博士の許に他の三四名の學生と共に往き、ストーブの側にて種々の有益談を聽かんとせしに、博士は例の通り聖書を讀みゐたり。私はその、ヨハネ傳八章の姦淫の婦のところの説明を聽き、基督の實に偉大なることをつく〴〵感服し、信仰の心を起したるなり。私はその時十八だつた。

▽八月二十八日。

これまでは寢ることのなほこの上に積れかし、限ある身の力試さんと云ふ意氣を以て信仰を續け、天祐を祈りをりしが、不眠が續いたり、頭痛が癒えなかつたりするときは Life is weary, life is dreary. となり、厭世氣分が自然に起る。これ信仰の薄弱なるに基因するもの、心すべし。

I feel however very gratified for all that happen to me, for they must be meant for my good. I also feel very thankful for kindness of my beloved ones who must bear so many inconveniences and unpleasantness in attending me.

▽九月八日。

As I used to sleep most on the left side, my neck grew stiff and many portions of my head became benumbed after midnight. Even on the left side, I was often interrupted by violent coughing. At 3. 30 a. m. I took fenacetin to get over my headache. At about 4.00 a. m. I went to sleep and awoke at 5.00 a. m.

▷ That letter of Mrs. Jewett which you kindly read to me yesterday is a most conspiring, tender and affectionate letter. It has pleased me immensely that you have such a true, holy and tender friend. You have so long been exceedingly kind and faithful to me, especially at this time of my trial and

suffering, and I hope God will reward you as He will Mrs. Jewett.

▽九月十二日。

昨夜パントポンのためか咳大分輕くなれり。但しそのため頭痛は大なり。併し頭痛の方はこれまでの經驗あれば恐るゝに足らず。

▽臺灣より西瓜種子の註文あれば直ちに米國に註文せねばならぬ。臺灣より註文の量と共に他へ供給する量とを合せたるものを速に承知したしと高田に申聞けること。「スキートピー」種子も共に註文すべし。右の外店の狀況も時々報告すべし。

▽九月十三日。

本日午後二時晝食後アスピリンを用ひしため卅八度一分に熱を喰止めたり。然らざりせば昨日の如く卅八·五になりしものと信ず。其後卅八·一のとき用ひしも、藥效四時四十分に至るも顯れず。五時四十分に至り漸く三七·五に下熱す。本日は血膿多量に排出あり。

▽九月十五日。

I have had enough of this trial, please pray that it may be removed or changed.

▽九月十九日。眞鍋先生來る。

五月廿二日、咽喉切開以來殆んど四ケ月になるがその後熱の上下、痰の工合など同一事を繰返

しをり此頃に至りては却つて熱高まり一向に快方を見せず、痰の流出はこの頃その量增大し、且つ膿及血塊の腐りたるもの餘分に排出す。右眞鍋氏に語られたし。

▽九月二十日。

昨夜は咳のため眠れず。五時半にパントポンを服み、今まで眠つた。これよりまた眠つてみたい。

▽九月廿四日。

昨日はアスピリンを服まずして終日下熱せず。不快裡に日を送り、夜に至り三七、九の時アスピリンを用ふ。發汗を免れざりしも、今朝はこの不快を掃ふため特にコーヒーと牛乳とを早く用意せしめ、七時過にこれを服み、直ちにアスピリンを用ふ。その後吸入に取掛り、急がせしも一時間以上を費し、八時半に漸く終了す。昨夜は前夜よりよく寢しに付氣分宜し。或ひは里子の持參せしオレキシン效きたる歟。今朝も五時及その後も腹痛ありしため鹽水を飲まず。

▽先日來重荷になつてゐた米國バーピーに註文すべき凱旋水瓜其他の註文狀を、本日漸く認めて三郎に渡す、まだ佛國及び蘭國への註文が殘つてゐる。

▽九月廿九日。夕刻歸京。

今月中に是非歸宅の希望なりしも熱の工合などにて斷言する能はざりし故、誰にも確答せざりしが、今朝五時には三十八度なりしもアスピリンを用ふれば多分歸らるべしと信じ、その後アスピリンを服みしも三十八度二分となりたり。しかし遂に下熱したるにより、セキの藥や頭痛藥を服み、途中も諸藥を用意して安全に歸ることを得たり。

（註）十月に入り、一日分の記事著く減少す。六、七、八月頃は一日十頁位ありしが、九月の末頃より多くて四頁、少きは一頁となる。氣力及體力の衰へたるを知るべし。

▽十月十日。岡田博士との問答。

昨夜は隨分鮮血が多く出ました。

經過は良好の方でありますか。

水はなか〳〵頻りに出ますが、別に手當は要りませんか。

肉類などは通り惡く、時に吐き氣を催し、盛にむせて苦しみます。

別に外はどうもありません。

少々大儀でも運動は試みた方がよいでせうか。

▽十月十三日。內村鑑三君及び宮部金吾君來る。

伊藤君が此前訪ねくれた時內村君が私の信仰につき心配下さる由言つてゐました。大に感

謝してゐます。どうぞお祈り下さい。Our children should be more spiritual と私が願つてゐると彼らに告げて下さい。

▽十月十四日。

昨日は内村と宮部が訪問し、慰問し呉れたり。内村は熱心に祈りを捧げ呉れたり。

内村の話によれば、學生間にクリスト教は益〻盛にして、この分では我國は歐米に先立ち立派なクリスト教國となるべしとの確信を有しをれり。

久連には「チヤヨテ」栽培す。今年も何個出來るや。沼津邊の相場を調ぶべし。沼津川向ふの濱島農園にて昨年球根を買ひ、未だ全金額拂込まぬ筈、取調ぶべし。且つ今年も出來をるなら、明春送るやう約束すること。

▽十月二十六日。今井三郎牧師來る。

信仰が薄弱なので、苦痛の激しき折など、神の愛を疑ひ始めることあり、信仰がぐらつき出すことも往々あります。

If it be possible, let this cup pass from me. Nevertheless my will but Thine.

と申しますが六ケ敷くあります。

(一)斯様の心の狀態も救はれませうか。

(二)食慾が少しもありませんが、無理に攝れば少しはとれます。若し食したくないからと云つて食せざる時は自殺になるでせうか。

▽十月二十八日。

隨分衰弱を感じます。

I Corinthian 15—50 以下

（コリント前書十五節乃至五十節—章不明—を讀め、の意ならんか）

(註)この日を以て寅次郎の手記終る。この日の記事約十行。字ふるへて判讀を要す。本日以後は鉛筆を握る力なく、僅かに對者の掌に指を以て記すのみ。

▽十一月二日深更、妻の掌に——

My soul is committed to the Lord. I shall be with God in a few days. May God bless us thoroughly by Christ.

▽十一月三日朝、突然床上に起上つて家族を呼び集め——

今日は皆さんとお別れしたい。國民高等農學校を基督教の基礎の上に建る事業を完成せずして逝くことは殘念なり。しかし、遺族心を合はせ、同志を得て、その創立遂行を望む。（不明）の方は雅初め一同協力して邁進すべし。

葬式は内村さんと今井さんに頼む。場所は内村さんが承知ならば青山會館がよい。若し差支あらば青山學院教會。感謝すべし。これ(不明)のになりしことを謝す。(不明)多少この苦痛を切抜ける(不明)社も充分成立せしめ、外に希望の學校を建て、神と同胞に向つて盡したいと思つてゐましたが駄目です。諸君に於て宿望を遂げて呉れませぬか。家族のものが皆もつと宗教的になつて下さい。すべては神に任せてあるから安心してゐる。母さんによく孝養をつくして下さい。

▽十一月四日朝。　臨終に際しては注射などをせぬこと。苦痛を增さぬやうすること。今日中に逝きたい(註、ます?)

高田耕安氏に禮狀を出し、死に至るまで永年の親切を深謝すべし。不幸にして自ら書くことの出來ぬことを遺憾とす。

(不明)清水氏に、

(不明)の御懇切を謝します。御禮を述べます。此後遺族(不明)願上げます。

(不明)健康(不明)のために盡して下さい。

國民高等學校については佐藤宮部兩氏に。

▽十一月五日午後五時。　宮部氏に——

國民高等農學校の創立の件につきよろしく賴みます。葬式は內村さんと今井さんに賴む。

病床日誌

十一月一日　昨夜不眠。今朝疲勞甚しきを訴へらる。右大腿部の神經痛甚し。衰弱加はる。

十一月二日　夕食後氣分惡しく胸苦しきを感ぜられ、呼吸稍速搏の狀態。直ちに酸素吸入を施し、間もなく恢復さる。身體の疲勞甚し。

十一月三日　前日に同じ。前夜來嗜眠狀態に陷る。

十一月四日　前日に同じ。

十一月五日　十時四十五分より約一時間に亙り、滴々注腸を施せしも吸收力更になし(量、約二十瓦)。正午より呼吸速搏を來され、午後三時頃、最も困難なりしが、四時頃より稍恢復さる。

十一月六日　五時半頃より咳嗽甚しく苦悶を呈せらる。早速吸入を施す。九時食鹽注射三〇〇瓦。

十一月七日　昨夜より痰の喀出困難にして、午前五時半、呼吸速搏を起さる。直ちに吸入を施し、やゝ輕快の態なるも未だ(十時)恢復せず。しきりに苦悶す。

十一月八日　午前八時、葡萄糖注入。十二時四十分加藤先生御來診。皮下注射一筒(カンフル〇・五、パントポン〇・五)。午後一時半より昏睡狀態に陷り、午後八時十五分遂に永眠さる。

(以上看護婦某記)

憶追

――これは渡瀬寅次郎に關する諸賢が追憶の蒐錄である。種々の事情から本書の上梓が意外に遷延したゝめ、御寄稿を賜つた方々の中には故人となられた向もある。かゝる方々には深くお詫び申し上げると同時に、諸賢の故人及び遺族に對する御懇情をあつく御禮申上げる次第である。

（編者）

わが知己渡瀬君

尾崎行雄

渡瀬寅次郎君の盛名は、久しく耳にしてゐたが、親しく交つたのは、予が東京市長在職中であつた(明治三十五年より同四十四年に至る)。君が市會議員、及參事會員として、市の爲に貢獻された功績は、予が贅言を待たずして、市民の熟知する所である。

當時の市參事會員中には、大石正巳、神鞭知常、大岡育造、奥田義人等、日本一流の政治家が加はつてゐて、其言議は、中々雄大超凡であつた。渡瀬君は、此等の名流中に介在し、常に公正斬新にして、且つ實效的な意見を提唱し、嶄然頭角を現はしてゐた。

大岡育造君は、好んで他の短所をば衝くが、其長所をば賞めない性質の人であつたが、尚ほ數々渡瀬君が斬新警拔の意見に富むを說かれた。

市會議員及參事會員等が、動もすれば予に反抗して、予が提案を排擊せるに際して、渡瀬君は、常に公正の態度を持し、終始一貫、予を支援された。多年の舊友が、擧つて予を排擊するに方つて、新交の渡瀬君が、身を挺して予を支援せられた事は、予の今に至るも、尚ほ記憶に新たなる所である。

君が頭腦明晰にして、其言議、常に理想と實際の兩面を兼備併有したるは、予の深く推服する所

である。此偉才を國家の大局に運用せずして、早く世を去られた事は、遺憾の至りに堪へない。

思ひ出

佐藤昌介

渡瀬寅次郎君と小生とは明治八年東京英語學校以來の同窓でありまして、翌九年夏、開拓使が札幌農學校の生徒を東京英語學校の卒業生中から募集するに當り、開成學校（東京帝國大學の前身）へ進級するのを止めて、同志と共にこれに應じて札幌へまゐりました。

渡瀬君とは寄宿舍が同室で、四年間一緒にをりましたから、教室へ行くにも、食堂へ行くにも、又は散歩に出かけるのも一緒でありました。つまり常往坐臥を共にした學友でありました。

札幌農學徒卒業後は開拓使へ就職致しましたが、單身のこと故、元開拓使の官吏であつた人の宅に渡瀬君と共に下宿して、一箇年ばかり同居しましたが、その內に小生は米國へ留學致しましたから渡瀬君と別れました。しかし明治十八年に小生が獨逸へ漫遊しての歸途英國倫敦に立ち寄りましたところ、圖らずもこゝで渡瀬君と邂逅したのでありました。同君は農商務省より英國發明品博覽會へ出張した北海道事業管理局長安田定則氏に隨行して渡英してをられたのでした。暫らく倫敦で同じ下宿にゐて小生は米國へ歸りましたが、間もなく安田氏も渡米され

たので、米國で一行を迎へました。一行が滯米中に安田氏は元老院議員になられて渡瀨君を連れて歸朝の途に就かれました。小生は明治十九年夏に歸朝しましたところ、安田氏は茨城縣知事となり、渡瀨君は茨城縣中學校長として水戸にをられました。

小生の父昌藏は、茨城縣勸業課長、又は東茨城郡長をしてをりましたから、小生は公務を以て東京へ往來の際は水戸へ立寄り、安田知事にも渡瀨君にも屢、會合して友情を溫めたのでありました。

渡瀨君は茨城を去つて後、東京赤坂溜池に興農園なる種苗園を設け、獨立の事業を開始されてからも、小生が東京に參る度毎に會合の機會があつて、學生時代の思ひ出話は盡くるところがなかつたのです。又、札幌に同窓會を設け、東京に支部を置くに至つたので、支部長として渡瀨君が常に同窓の新進者を誘導し、又は母校のために盡力せられたことは感謝の至りでありました。又、その專門の事業に熱心にて、本道に、又は臺灣に事業を擴張せられ、經濟的にも好成績を擧げられたことは敬服の至りであります。又、熱心なる基督教信者で、學生時代からクラーク先生の薰陶を受けてその信念頗る堅固なるものがありました。臨終二三日前にその病床を見舞つた時、小生を見て喜色面に現はれ、令息の掌中に「生は天父の御許に行く」と指を以て書かれましたが、これが永別になるのかと思へば斷腸の念に堪へなかつたのでした。

青年時代の益友を失つたことは返すゞゝも殘念でありますが、しかし天の攝理は如何とも致し難いのであります。

御遺族の幸運を祈ります。

舊き學友として

大島正健

渡瀬寅次郎君は、學生の時代にありては勤勉力行の人にして、如何なる學課と雖も曾てこれを輕視したるを見ず、よく師の命を奉じたり。又、札幌農學校第一期生として、親しくクラーク先生の薫陶を受け、獨立獨行の精神を深くその腦頭に印せられたるは、君の生涯に重大なる影響を與へたるものといふべく、後年成功の原因は遠くこゝに存するを忘るべからず。又、先生の誘導によりて基督教を信奉するに至り、明治十年八月、宣教師ハリス氏より洗禮を受け、その後その敬虔なる信念は、時に誘惑危險の岐路に立つも動かず、君をして清潔なる生活を營ましめたることも特にこれを記せざるを得ず。

君不起の病を得て病床にあること久しく、余曾て君を訪ひて數語を交へしに、君既に人生の頼むべからざるを悟り、身を神の御愛護に托することの安全なるを語れり。余、これに答へて「君憂ふ

るを止めよ、今生の友は又來世の友なり、遠からずして余も同じく君の後を追ふべし」と述べ、別れを告げて辭し去れり。後再び君を訪ひしに、君疲勞してその意を洩らす力なし。互ひに眼と眼を見合せ、唯、固く握手せるのみ。

君既に逝けり。名譽財産問ふところにあらず。今や全國到るところ興農園の名を知らざるものなし。君が貢獻したる事業は永く世に傳はりて殘るべし。

秋深き色を留むる菊の花
君が手植の形見なりけり

グルントウイツヒの如く

內村鑑三

汝の少き日に汝の造主を記えよ　—傳道之書十二章一節

ヨブ曰ひけるは、我れ裸にて母の胎を出でたり。裸にて彼處に歸らん。エホバ與へエホバ取り給へり。エホバの御名は讃むべき哉　—ヨブ記一章二十一節

我れ知る我れを贖ふ者は活く、後の日に彼れ必ず地の上に立たん。我が此皮此身の朽ちはてん後、我れ肉を離れて神を見ん。我が目彼を見んに譏らぬ者の如くならじ。我が心之を望みて焦る　—同十九章二五—二七節

我等の舊き友の一人なる渡瀬寅次郎君は永き眠につかれました。悲しみに堪へません。君は明治の初年に我等と共にキリスト教を信じ、札幌獨立基督教會の設立を贊けられ、その信仰を維持して今日に至り、終にその信仰を以て眠られました。君は官吏として、學校教員として、實業家として、忠實にその職を盡されました。そして神は君の事業を惠み給ひて、これに成功を與へられました。君は農學士にふさはしい生涯を送られました。農を以て身を興し、農を以て國を益せられました。その點から見て君の生涯は間然するところがありません。我等はこの事につき君の爲に神に感謝するものであります。

しかしながら、もし渡瀬君に君の事業の外に所有（もちもの）がありませんでしたら、君も亦凡ての人と同じく貧しき者でありました。人は何人も裸にて母の胎を出で、裸にて彼處に往きます。渡瀬君のこの世の事業の成功は君自身にとつて何の用をもなしません。しかしながら、幸ひにして君は青年時代にこの世ならぬ財貨（たから）を蓄へられました。この財貨は或る時は君の眼に財貨と映らなかつたかも知れません。この世の多くの實業家のなすが如くに、神とか、救ひとか、來世とか云ふことは、あつてもなくてもよいことと思はれたかも知れません。しかし財貨は依然として財貨として存しました。そしてこの世の財貨がないものとして見え出した時に、君が曾て青年時代に於て蓄へ置きし天の財貨が眞の財貨として君の心に現れました。そして君はこの財貨を

見つめながら希望を以て世を去られました。かくて裸になつて裸になられませんでした。この世の着物が悉く君の體から剝ぎとられた時に、天に在りて朽ちざる義の衣が君に與へられました。

君が君の舊友の一人なる伊藤一隆君に英文を以て書き贈られたる最後の一言は左の如くでありました。

"I commit my soul to God. I will be with Him in a few days. God be with us all".

（余は余の靈魂を神に委ねまつる。數日の內に余は神と共にあるべし。神は我等一同と共におはさむ）

君はまことに福ひな人であります。世に君の如くに事業に成功した人は澤山あります。しかし君の如くに希望を懷いて世を去り得る者は滅多にありません。求むべきは永遠の神を信ずる信仰であります。人生の目的は最後の五分間のために準備するにあります。

渡瀨君の靈魂は天にましまず神の懷に歸りました。しかしながら君のこの世に於ける事業はまだ完成されません。神を信ずる者の事業は自分のための事業ではありません。國のため、人類のため、神のための事業であります。そして君はよくこの事を解してゐられたと承つてをります。丁抹流の基督教の基礎に立てる農學校を起したいとは、君の年來の志望であつたと承ります。もし君がなほ十年生存せられたならば、この理想が君の直接の監督の下に實現したら

うと思ひます。しかしながら、このことなくして逝かれしは、殘念至極であります。しかしこの尊ぶべき理想は實現を見ずして已むべきではありません。その實行の責任は今や御遺族と我等友人の上に落ちてゐるのであります。

日本はたしかにかゝる農學校を必要とします。基督教を基礎とするものでありますから、これを日本政府の設立にまつことは出來ません。これは渡瀬君の如き人物を待つて初めて實現さるゝものであります。もし丁抹の農聖グルントウイツヒの精神が我等の舊友渡瀬寅次郎君の名によつて、わが日本に實現するに至りますならば、君は天上の祝福を得しと同時に地上の榮光を得らるゝものであると思ひます。私は舊札幌農學校の同志を代表し、こゝに渡瀬寅次郎君の名を、グルントウイツヒの名が丁抹に殘る如く、我が日本に殘したいとの希望を述べます。これ亡き君に對し、君の遺族と友人とが盡すべき最大の義務であると信じます。

渡瀬寅次郎君を偲ぶ

南　鷹次郎

君は札幌農學校を卒業するや直ちに開拓使に奉職し、拓地植民の事業に努力せらるること數年、その功勳からざるものあり。明治十四年、農業振興を促進するの機關として札幌に勸農協會

を創設したるは、亦君の主唱によるものなり。同十八年に至り、農商務省より英國倫敦發明品博覽會事務員として英國に派遣せられ、滯英中更に文部省より歐米に於ける農學校の視察を囑托せらる。

同十九年歸朝し、一時茨城縣の中學校長となり、後、同縣の尋常師範學校長に轉じたるも、元來中等又は師範教育に身を處するは君の本意にあらざるを以て校長の職を辭し、東京に轉居して種苗及農具販賣業の經營に志し、愈々同二十五年東京興農園を起し、その販賣業を開始するに至れり。爾來君は始終一貫素志の遂行貫徹に努め、三十有餘年一日の如く奮闘努力せられ、熱心に種苗の育成に努め、純良なる種苗の生産をなし、或は良質の種苗を內外の各特産地に求め、これが販賣に精進し、且つ一面興農雜誌を發刊して農家の知識啓發に努めたる結果、興農園の名聲は顯著となり、營業は益々繁榮を極めたり。君は亦大日本農會の幹事となり、農會の爲め盡瘁する所あり、其他農業界に活動し、農民の指導誘掖に盡す所ありたり。

斯くして君は本邦農業界の爲め貢獻する所大なるものあり、大正二年農事上の功績に對し農商務大臣より功勞賞銀牌を受領し、又同三年大日本農會總裁宮殿下より紫白綬有功章を授與せられたるはこれを證して餘りあり。

明治四十二年、渡米實業團の一員として種苗營業者を代表して渡米し、大に北米各地に於ける

種苗の生産或は農具製作等の實況を視察し參考とする所多く、且つ彼我種苗農具等の取引上に利益する所勘なからざるものありしと思ふ。余は渡米旅行中君と行動を共にし、特に親交を重ぬるの機會を得たるは、誠に幸とする所なりき。

君は亦幾年月の間、赤坂區會議員、及東京市會議員として市政に關與し、市の爲めに盡瘁せる功績勘からず。

君は資性溫厚篤實、極めて圓滿の人格者にして、友情に厚く、同窓者間に重きを爲し、札幌同窓會東京支會開設以來、三十餘年間、引き續き支會長の位置にありて、後輩の爲め斡旋する所多く、常に同窓生の敬意を表する所となる。

君は理財に長じ、有富なる生活に惠まれしが、遺族は其の遺産の一部を割いて、財團法人興農學園經營の基金に寄附せられ、故人の德を永遠に傳ふる美擧に出たるは、誠に世の龜鑑として敬服に堪へざる所なり。

畏友渡瀨寅次郎君を憶ふ

宮部金吾

渡瀨君と自分との交際は、札幌農學校の初期に當り、學生として三年間同じ寄宿舍に起居を共

にせる時に結ばれ、爾後信仰の先輩、又、畏友として死に至るまで渝らざる親交を辱ふしました。君は學生時代から信實で眞面目な紳士でありました。當時同級生の中には隨分亂暴な連中が多くゐましたが、君はいつもさう云ふ仲間からは超然として離れてゐると云ふ風でありました。

君はクラーク先生より親しく薫陶を受け、先生の深い感化に浴されし一人であつて「イエスを信ずる者の契約」に署名し、同級生と共にエム・シー・ハリス師より洗禮を受けられ、在學中は言ふに及ばず、卒業の後も、基督と其の父なる神に對する堅き信仰に立つて世の中に處せられたことについては、同級生の佐藤兄及び大島兄より詳細に陳べらるゝ事と思ひますからこゝにはそれらの事柄は省略いたします。唯だ君が一生涯を通じてその純な信仰を完うされ、死後にも尚ほその感化を殘されたことは特筆に値することと思ふのであります。

農學校の植物學教授であつたペンハロー教師が、第一期生に對し、博物標本の採集を奬勵する意味で、最優秀の採集品に對して賞を與へることにしましたところ、動物標本には柳本通義君、昆蟲標本には田内捨六君、礦物標本には佐藤昌介君、而して植物標本に對しては渡瀬君がその賞を獲られました。渡瀬君に授與された賞はヘンフレー著の植物學書でありました。これらの標本は悉く學校へ納められましたから、本學腊葉庫に貯藏されてある標本中、一八八〇年（明治十三年）卒業の學生採集、と記入されてあるものの大部分は、多分渡瀬君の採集に係るものであらうと

思ひます。これらの植物標本は、米國ハーバード大學のエーサー・グレー教授の許に送つて其の學名鑑定を仰いだものでありますから、その數は多くはありませんが、本學腊葉庫の核となつたものであつて、甚だ貴重なものであります。

渡瀬君が學生時代から儉しかつたことについては左のやうな逸話があります。或る晩君の室へ遊びに行つた時に、机の引出から昆布を取り出し、それをランプのホヤの上で焼いて、君たべ給へ、と言つて馳走して下さつたのには少々驚きました。その後、卒業された年のクリスマスに、我々第二期生のクリスチヤン學生が、新農學士のクリスチヤンから招待されましたので、それ〴〵思ひ〳〵に工夫を凝らした贈物を用意して出かけましたが、自分は渡瀬君に昆布一束に左の歌を添へて進呈しました。

業をへて今は世の身となりしとて
わするなさきの昆布で茶話

明治十六年頃、渡瀬君が札幌縣の勸業課に勤めてをられた時、同じ下宿屋に住んでゐて特に親密な交際をしてゐましたが、その頃君は地方農村の視察指導のため屢〻出張してをられました。當時は交通の便が頗る悪るく、驛遞の馬より外には乘物がありませんでしたが、十五圓か二十圓も出すと相當な馬が買へましたので、渡瀬君は一頭を購入してそれに乘つて出張し、札幌に歸る

とこれを馬宿へ預けて置いたもので、かうして旅費の節約を計られました

園藝を以て一生の事業とされたのは、恐らく、在學中から植物に對して人一倍深い趣味を有つてをられたからであると思はれます。又その事業が益々隆盛を來し、一代にして巨萬の產を成すに至られましたのは、青年時代より勤儉貯蓄を主義とせられたためであるかも知れません。

最後に、渡瀨君と札幌獨立基督教會との關係について一言述べさせて戴きたい。明治十四年の頃、札幌農學校を卒業した銳氣勃々たる新進のクリスチヤン青年達が、大いに感ずる處あつてそれ〳〵所屬の教派より脫會し、札幌の地に全く外國のミツシヨンと無關係の純日本的教會を組織することを決議し、明治十五年十二月二十八日、遂にその設立を見るに至つた次第でありますが、渡瀨君はこの設立に關して、その主張を熱心に支持された一人であつて、この教會搖籃の時代に於て、屢〻教壇に立つて信仰の證をされました。札幌の地を離れるやうになつてから後も、常にこの教會の成長發達を心にかけられ、必要ある度毎に有力なる援助を與へられましたが、その永眠に當つては特に遺言して、多額の寄附金を教會のために贈られたのであります。

令息雅太郎君より此度嚴父の傳記を刊行せらるゝにつき追想の文を寄せられたき旨御依頼がありましたので、こゝに拙なき一文を草して故人を追慕する次第であります。

交游四十年の回顧

植村澄三郎

私が渡瀬さんと初めて面識を得たのは、明治十七年、渡瀬さんが北海道から東京へ赴任した時で、恰かも農商務省北海道事業管理局の一會計係であつた私が、渡瀬さんの相談を受けて旅費の精算法を教へた、その時からだと記憶する。

札幌農學校は東京の帝大に續いて相當有名だつたもので、當時珍らしい西洋文明の教育を施したところ、出身者は帝大同樣、官途に就けば御用掛と云ふ奏任官待遇を受けた。渡瀬さんが二十六歳、私が二十三歳位だつたと思ふ。私の月給が當時十五圓、隨分貧乏して、一寸病氣をすると、夏、蚊帳まで入質して藥代に充てる始末、それから間もなく八等屬になつて二十圓に增給された。

貧乏だから人と交際もしない、役所の同僚を訪問することもせぬ私であつたが、渡瀬さんの宅は度々訪ねた。管理局は人員も多からず、しかも私が最年少であつたほど老人揃ひだつたから、若い者同志話が合つたとでも云はうか。

それから、私は明治十八年に安田局長の命で北海道の各事業地を巡察に行つた。これは會計檢査院の人が北海道の會計を檢査に行くので、先發して下調べをすることになつたのである。ところが、同年春札

幌へ着いて各地巡回中のこと、九月に石狩方面を廻つたが、同月下旬札幌出發後函館で肋膜炎に罹り、初めは大したこともなかつたので、根室方面の牧場巡回をしてゐると、運悪く落馬し、急に熱が昇つて四十度の高熱になつたため、取り敢へず根室病院へ入院して靜養し、幸ひに全快したので、函館を經て紋鼈の製糖工場を視察の上、再び札幌へ來た。

その時はもう十一月末だつたので、雪も降り出すし、東京、札幌、何れで治療すべきかと迷つてゐた時、鈴木(大亮)大書記官が森札幌農學校長に依頼され、同農學校の化學教授の米人カツター氏が診察してくれて、結局札幌で養生することになつたが、十二月末に北海道事業管理局が廢止され、札幌、函館、根室の三縣も廢されて、こゝに北海道廳なるものが出來た。つまり私は出張中に北海道廳の役人になつてしまつたのである。

渡瀬さんはその翌年外遊から歸つて茨城縣立の中學校長になつた。以前から懇意であつたし、若い者の間だから常に双方が消息を怠らなかつたから、這般の事情は私の耳に入つてゐた。

その内に私の一身に複雜な變化が起きた。初代長官岩村さん以下、道廳の役人は舊開拓使の役人で未知の人が多かつたが、その内に私は鈴木大亮さんに隨行して東京へ行くことになつた。上京すると、鈴木さんは黒田さんに隨行して歐洲行と定まり、舊管理局長の安田さんは茨城縣知事になるし、松本莊一郎氏は鐵道局專任になると云つた風で、舊知の上官は皆變つてしまつた。

その頃、私の父は五十六歳だつたが、大病で臥床し、困つてゐたのである。月給は二十五圓に上つてゐたが、何しろ東京、札幌と、兩方に家を持つてゐたのでは、とてもやり切れぬと途方に暮れてゐた。ところが、偶然元開拓使の官吏だつた川村久直氏に逢つた。この人は榎本さん等と五稜廓に立て籠つた勇士である。

「この頃君はどうしとる」。

「いや、實は親が病氣で困つてをります」

と、委細話したところ

「そりや氣の毒ぢや。一つ遞信大臣の榎本さんに話して何とか頼んでやらう」

とのことで、私は一旦札幌へ歸つた。その内に榎本さんが北海道へ巡視に來て、岩村長官に會つた砌

「植村は當地におるか。おるなら俺の方へくれないか」。

「よろしい」

と、二つ返事で東京行が決定した。で、自分としては北海道廳へ辭表を出して父の看病をしやうと考へてゐたが、まだ遞信省へ採用されるなどと云ふことは夢想だにしなかつた。すると、私の心持を聞いた道廳理事官の湯地定基氏が大いに同情してくれて

「それは可哀さうだ。御用出張を命じて、父親の病氣が癒るまで東京へおいてやるから、辭職せずともよい」

と云つてくれたが、そこへ「遞信省へ來い」と云ふ電報が來た。この事は甚だ突然で、いはゞ寝耳に水であつた。が、怒つたのは湯地氏である。

「植村は怪しからん奴ぢや。俺を瞞しをつた。さう云ふ奴の顔を見るのも厭ぢや」

と、誰が何と取り做してもウンと云はない。仕方がないから、私は匆々に東京へ出たのである。すると又難關にぶつかつた。病床にある父を着京早々見舞ふと大變な權幕である。

「親が病氣だからと云つて御奉公を廢めて歸つて來る奴がどこにあるッ。不埒極まる。いざ戰と云ふ

場合に親が病氣だからとのめ〳〵歸れるか。お前はおれが病氣ぢやから歸つて來たのだらう」。

「さう云ふわけぢやありません。實は……」

と譯を話しても、老の一徹

「嘘を吐くな」

と、聞き入れないから仕方がない。翌日遞信省から辭令を貰つて來て見せると、大變安心した。が、これがためか病勢が昂じて、一週間目に歿かつた—明治十九年九月十四日のことである。

その翌月、已に茨城縣へ行つてゐた渡瀨さんから手紙が來た。

「新聞の廣告で尊父の長逝を知つた。安田知事とも相談したことだが、茨城縣へ來い。縣の會計課長が目下缺員だから、君が來れば會計課長にして、給料も判任一等（當時六十圓）にして上げる」

と云ふ來旨であつた。二十五圓が六十圓になるのだから大變な出世だ。安田知事の親切、渡瀨さんの厚意、何れも斷るに心苦しい、かと云つて、榎本さんの好意も無にすることは出來ない、何しろ遞信省詰になつて一箇月經つか經たぬ時の出來事だから大變困つた。

だが、結局渡瀨さんに斷る外なかつた。が、この時の渡瀨さんの好意位私の印象に殘つてゐるものはない。管理局時代の交際もせい〳〵半年位、それ程深い交渉のあつたわけでもないのに、よく私のことを考へてくれてゐた。で、厚く恩を謝して叮重に斷つた。すると、渡瀨さんはその手紙を直接知事に見せ、「かう云ふ男だ」と話したところが、安田知事は怒るどころか、却つて褒めて

くれたさうである。その翌年(明治二十年)、安田知事が東京へ來て榎本さんや局長の山內さんに私の手紙を見せたところ、昔氣質の人だから「感心な奴だ」とあつて、その年官吏の高等官採用規則が變り、高文合格者以外は高等官に採用せずと云ふことになつたその前に、私を高等官にしてくれたのである。この話は後で榎本さんに聞いた。

この事で私は渡瀬さんを實に親切な人だと思ひ、渡瀬さんも私を大變義理堅い青年だと知つて、この時から交遊更に濃やかになり、渡瀬さんが東京へ來られてからも何かと相談に出かけたものである。當時の渡瀬さんの手紙が今でも眼に見えるやうだ。本當に親切な人であつた。私が蚊帳を入質して藥代を拂ふと云ふやうなことも知りぬいてゐて萬事盡してくれたのである。

その頃、渡瀬さんは

「外國では種子改良と云ふことについていろ〳〵注意を拂つてゐるのに、日本ではさう云ふことの判る人がないし、やる人もない。だから自分は大いに研究する考だ」

と云ふことを口癖のやうに云つてゐた。卽ち興農園創業の意志を常に洩らしてゐたわけであるが、この興農園も渡瀬さんは自分でやる考ではなく、人にやらせる所存であつた。株式會社と云ふ考もあつたらしいが、とまれ、自分が試驗的に創めて見やうと云ふことになつたのである。

札幌に支店を設けたのも、寒い土地から暖かい土地へ種子を送ると良い物が出來ると云ふ渡瀬さんの一つの理想があつた。それが起りである。

私は遞信省にゐて、暫らくして山形へ赴任した。當時榎本さんは支那公使になり、遞相は後藤象次郎氏、その頃遞信管理局と云ふものがあり、私の行つた局の管轄は山形、秋田の二縣であつた。然るに間もなくこれが廢され、自分は非職になつたので、本省へ歸つて來て、後藤遞相に挨拶に行くと、いきなり

「お前は何處の學校を出た」

とやられた。

「は。私は貧乏で小學校だけです」。

「ほう。そりや感心だ」

と褒められた。それから山内局長は局長で

「近く官制が變るから辛抱してゐろ」と云ふので、非職の身ながら出勤してゐた。

そこへ、元開拓使官吏で、當時貴族院議員の長谷部氏が「來い」と云ふから、行つて見ると

「堀基なる人の計畫してゐる北海道炭礦鐵道の創立に從事してはどうか」

と云ふ話。で、私は

「私は非職ではありますが、山内さんが局長だから出勤してゐる、と云ふ事情にあります。で、卽答は致し兼ねますが、一應先輩友人にも意見を訊して見ませう」。

「では、兎も角一應堀に會つてをいたらどうか」。

と云ふので、堀氏に會ひ、更に大いに勸められたのである。

が、仲々決心がつかず、この時も早速渡瀬さんの許へ駈けつけて「官吏を廢めて實業界に入ることの可否如何」と云ふことを相談した。私としては「自分は大學出身でもなし、藩閥のあるわけでもないから、官海に入つたところで、生涯うだつは上らない。舊幕臣は亡國の臣、と云つたやうな取扱を受けてゐるより、寧ろ實業界へ」と考へてゐたのだが、渡瀬さんも「官界は面白くない。實業方面の方が畑が廣くてよい」と、同一意見であつた。殊に安田定則氏も鈴木大亮氏も、自分が官吏でありながら、私の實業界入りに賛成してくれた。獨り山内局長が反對したが、これも遂に先輩の盡力で漸く承知し、私は北海道の炭礦鐵道へ行つた。明治二十二年の秋であつた。

その後、渡瀬さんから妻帶を勸められた。大分候補者を立てられたが、何しろ條件が難かしいので仲々入選しない。結局、明治三十年十二月、私の三十歳の時に母の選んだ家内を娶つた。この結婚には渡瀬さんも賛成してくれた。この結婚式が變つてゐた。先づ基督教式にやらねばならぬと云ふので、以前私の先生だつた英人ワデル氏を頼み、渡瀬さんと植村正久氏が媒酌人で、一切他人の容喙を許さず、場所こそ當時盛にやつてゐた芝の三緣亭だつたが、酒類は一切ぬき、これでは水盃ではないかといふ來客もあつて大笑ひをした。總じて當時の世人は餘り頑迷固陋だから、大いに啓蒙すると云ふ意味で、札幌農學校出身者は渡瀬さん、大島(正健)さん、宮部君等相呼應して基督教宣傳をやつたもの、植村正久氏などは日本基督教新聞と云ふものを出して「基督教

信者は外國人の奴隷に非ず」と云ふことを主張したものである。

この結婚の時のことだが、淺野總一郎さんを招待する筈になつてゐて、何かの都合で呼ばなかつた。すると結婚後一週間許りして、淺野さんが祝の品を持つて來て渡瀬さんと私の家で落ち合つた。當時の淺野さんは態々ズボンの膝に繼ぎの當つた洋服を着て、何でもヘイ〳〵と云ふ調子の人であつた。で、私は淺野さんを渡瀬さんに紹介して

「この人は汽船を幾つも持つて大きな商賣をしてゐるが、わざとこんな風をして我々をごまかさうと云ふ偉い人です」

と云つたので、大笑になつたことがある。

最後に、私は渡瀬さんの性格について一言したい。大體人の傳記を書くには功のみを論じて罪を抹殺するやうなことをせず、功罪ともに論じなければならぬ。人によつては表面の偉い所だけを描いたのでは、その人の全貌は盡せぬから眞の傳記ではない。そこへ行くと、渡瀬さんは表面だけの敘述で全部を盡し得るやうな性格の人であつた。極めて意志の堅固な、正直な、親切な人であつた。知らぬ人は渡瀬さんを頑固だとか偏屈だとか評してゐたやうだが、それは眞の渡瀬さんを知らないからである。長所短所があるのは渡瀬さんのみではないのである。

たゞ、かう云ふ性癖があつた。渡瀬さんは、參事會員とか何とか、自分自身でやることはよいが、

大勢の人を驅使すると云ふことになると、餘り嚴格過ぎて人が寄りつかない。自分の思ふ通りに他人にもやらせやうとする。「もう少し寛容にしたら」と云つたこともあるが、どうしても頑固にやる、さう云ふ點が確かにあつた。信念に強いといふことは大變よいことではあるが、大勢の人の上に立つ時は困る。僅かな事でも假借しないからである。

私が炭礦鐵道にゐる頃は毎晩のやうに宴會であつた。若い時分だし、隨分亂暴でもあつたらうが、渡瀬さんはかう云つた。

「君のやうな者が實業界へ入つて果して勤まるか知ら。朱に交れば赤くなる、君のやうな青年も何れ赤くなつてしまふのだらうな」。

と。で、私は意地になつて赤くならずにしまつたのである。渡瀬さんは猪口も手にしない人だつたが、實業界では仲々さうは行かぬ。「朱に交つても赤くならぬ方法如何」と云ふやうなことを、私はよく渡瀬さんのところへ相談に行つたものである。

こんな風で、渡瀬さんは實業界へ入つても結局喧嘩別れと云ふやうなことになる。もう少し度を合せるとよかつたと思ふ。當時の世間が餘り杜撰だつたから、意志で頭角を現はす考だつたらしい。よい加減な事の大嫌な人だつた。市會へ關係した時も、市會淨化の意味で江原翁等と協力して極力尾崎行雄氏を推薦したり、コンノート殿下御來朝の砌、藝妓の踊や手古舞を出す

案が出ても一人で反對したなど、何れも渡瀬さんの性格の一端を示すものである。

渡瀬君の宗教生活斷片

平岩愃保

君の信仰生活は固より遠く札幌農學校時代に佐藤昌介博士、新渡戸稻造博士、宮部金吾博士、大島正健博士、內村鑑三君などと共にこれを始められたるものなり。而して君の天性は眞面目着實、精確にして、達辯ならざりしかば、猥りに宗教を談論せず、公開の席に於て基督教の演說を試みたることも尠少なり。然れども、その確實にして眞面目なる信仰は、よく周圍に來接するものを動かして、これを感化するところ深く、その眞面目さが君の人を射る眼中に顯はれて人を壓するの威風ありたり。

明治二十三四年頃と覺ゆ。余が麻布東洋英和學校長として、又麻布メソヂスト教會牧師として島居坂に住居し、君は確か赤坂溜池邊に寓居せられしが、余は東洋英和學校生徒に英文學を講ずること及び英書の譯讀を教ふることを君に依頼し、約一年乃至一年半に及ぶ。

君は日曜日毎に麻布教會の禮拜に出席したりしが、或る日曜日の朝、牧師の說教中、人は神の前にはキリストの十字架の贖罪による外、如何なる功績を樹つるも、それによつて善しとせらるゝ

に足らざる所以を説明するに、英國のビショップ・バットラルの實例を擧げたることあり。

ビショップ・バットラルは、十八世紀に於ける英國社會の不信仰と來世を信ぜざる傾向とを慨嘆して、これを矯正挽回するとの目的を以て、約二十年を費して書き著したる有名なる「アナロジイ」は大いに當時の學者の思想を正し、青年の信仰を促進し、以て英國の社會と教會とを裨益したる功績は甚だ偉大なりき。このビショップが臨終の際、己が精神の陋劣にして汚罪の多きを感じ、大いに煩悶したれば、その德を慕ひて聚合せる數百の牧師や信徒は、彼がこれまで施せる慈善と功勞を擧げて彼を慰安し、殊に彼の著書「アナロジイ」は、如何に許多の人の不信仰を挽回し、新に多くの青年の信仰を振起せしや計り知れず、實に社會に對する功績の甚大なるを稱揚するや、彼は首をあげて

「自分の慈善の如きは眞に寡少にして取るに足らず、かの著書の如きも亦初の部分は眞實世を愛ひ、人の益を考へて書きたれども、中途より自分も案外よく出來、これなれば世の好評を博し、名譽を得るならんと私かに考へながら、名譽心に驅られ、勵まされて書き終へたるものなれば、あの書の半分は腐れ汚れをれり。余は神の前に愧ぢ且つ恐懼に堪えざるなり」

と、告白されたり。玆に於て一人の牧師は聖書を開きながら

「閣下よ。然れどもキリストは貴君の救主に非ずや。キリスト曾て述べ給へり。『父の我に賜ふものは皆我に來らん。我に來る者は我これを退けず。夫れ我が天より降りしは我が意をなさん爲にあらず。我を遣し給ひし者の御意をなさん爲なり。我を遣し給ひし者の御意はすべて我に賜ひし者を、我その一つをも失はずして終の日に甦へらする、是なり』と」

と、ヨハネ傳第六章の句(三七―三九)を讀みたれば、バットラルは

「今一度び反讀を」

と請ふに應じて、該牧師は聲高らかに更にその句を反覆したれば、バットラルは大いに喜び且つ納得して

「余は今やそれにより安心して死することを得ん」

と述べて永眠せり。

この逸話を牧師が語りたるものなるが、渡瀬君はこれを聞き、大いに感ずるところありたりと見え、禮拜後余と共に牧師館に來り、更にバットラルの心術の如何に純良にして謙遜なるか、人心の神前に曝露せらるゝ時如何に不純にして倭少なるかを談合したることあり。今、これを憶ひ出でて同君を偲ぶこと深し。

恩人渡瀬さん

清水由松

渡瀬さんに私が初めてお眼にかゝつたのは、明治二十一年、私が札幌農學校を卒業する時で、恰度私が徴兵猶豫中だつたので、卒業後就職までに餘り期間があつてはいけないし、卒業同時に就職すべしと云ふ隨分無理な話になつてゐた。その時はたしか渡瀬さんの奥さんにツルーさんから頼んで戴いた。すると、判任官―茨城縣尋常師範學校教諭に電報で任命された。明治二十

一年七月のことである。當時四十圓と云ふのが相場だつた初任給が私の場合四十五圓であつた。その上私の赴任先のことは住宅其他一切、同校教諭本間小左衞門氏に賴んで定めてあつた——勿論渡瀬さんの計らひである。

當時渡瀬さんはその茨城縣立尋常師範學校の校長であつた。

その頃文相森有禮氏が國民教育は師範教育に重きを置くべしと主張し、從來餘り重きをおかれなかつた師範教育を重要視して、大學教育を輕か輕視した傾向があり、大學生の反感を買つたものである。刺客西野文太郎が森文相に會ふ口實も「大學生の不穩計畫を密告する」と云ふにあつた。

師範教育重要視は延いて師範學校長の地位を高め、渡瀬さんは森文相の意見で特に中學校長から師範學校長に轉ぜしめられたと云ふことであつた。前述の如く、私は明治二十一年七月に就任し、翌二十二年六月に渡瀬さんと共に辭職して東京へ歸つたのであるが、青年意氣に感ず、茨城行について私は渡瀬さんの親切を身にしみて感じてゐたのであつた。

渡瀬さんの水戸時代に私が特に敬服したのは漢學で固め、特に排外思想の盛な水戸に基督教宣教師クレメント氏を中學の英語教師として招聘したことである。何しろ死人が耶蘇教だと寺では墓地を貸さぬと云つた位反基督教熱の强かつた時代であつた。それを私が赴任してからも高木と云ふ牧師を迎へて說教所を設け、教會には毎日曜出席する、時には自分で說教もする

と云ふ風に隨分大膽なやり方だつた。兎に角渡瀬さんは基督教傳道となると少しも遠慮せずにやつてのけられた。

さて、東京へ出てからの私は、方々の學校の講師をしてゐたが、渡瀬さんは始終

「君は何になりたいのか」

と訊ねられ、私なら何處へでも世話をして下さる樣子であつた。私が東京府尋常中學校の講師をしてゐる頃、渡瀬さんは東洋英和學校に敎鞭をとつてゐられたが、その時分、同校には前後して長澤龜之助、內村鑑三、岩崎行親の諸氏がゐた。その頃は渡瀬さんと私との往來が實に頻繁であつた。その中に私は長崎の活水女學校へ行くことになつたが、渡瀬さんが出發は家からにしてくれ」と云はれるので、赤坂溜池のお宅へ泊つたことがある。それからその翌日出發に際して、令兄昌邦氏の長男隆君を託され、當時陸軍中佐で、大阪砲兵工廠提理をしてゐられた父君の許へ送り屆けた記憶がある。

長崎にをること三年にして、渡瀬さんから「東京へ歸つて來ないか。自分の後任者として麻布中學校の敎頭の地位についてほしい」と云ふ書面が來たので、私は喜んで明治二十八年に歸京した。この書面の前に、渡瀬さんから結婚を勸めて來た。當時私は三十歲だつたが、渡瀬さんには全幅の信賴をおいてゐたので萬事お願してをいた。で、二十八年七月に歸京すると直ちに渡瀬

さんの後を襲つて麻布中學校教頭に就任、引續き同月渡瀬さん御夫妻の媒酌で結婚式を擧げた。

かう云ふ次第で、札幌農學校卒業後、就職の時から家庭を營むまで何から何までお世話になつた。私も今年で結婚四十年、同樣に麻布中學校勤續四十年になるが、これ全く渡瀬さんの賜である。殊に、大正十二年の震災後、私は風邪をこぢらして中耳炎になつた時、かう云ふ話がある。最初小此木病院へ入院したが仲々癒らない、とう〳〵手術して切開すると云ふことになつたが、これを聞いた渡瀬さんが「もうかれこれ六十になる老齡の君が切開などしては大變だ」と心配して、恰かも渡瀬さん自身が咽喉を診て貰つてゐた岡田和一郎氏に相談して下すつた。すると「切開はよくない。根岸の病院へ來れば診やう」と云ふことになり、渡瀬さんはわざ〳〵來て「切開は危險ださうだ。が、どうせ切るなら岡田さんにやつて貰へ」と勸められ、こゝで岡田さんの病院へ轉じて、とう〳〵切らずに治つた。渡瀬さんは忙しい最中だつたが親切に面倒を見て下すつた。

私は渡瀬さんに何もお世話しなかつたが、私の方は人一倍お世話になつた。私の忘れ得ぬ恩人である。非常に親切な人であつたが、渡瀬さんはいはゞ主義の人で、一旦自分が信じたことは何處までも通す。例へばかう云ふことがある。東洋英和學校出身者から聞いた話だが、生徒などが運動會をやる時に、教員や出入の本屋、洋服屋邊りを廻つて寄附金を集める習慣があつた。大抵の教師は大した金ぢやないから喜捨する。が、渡瀬さんは違ふ、人の褌で角力をとることの

嫌ひな渡瀬さんは

「君達が自分達でやるのは結構だが、他人の金でやるのは間違だ」

と云つて拒否された。渡瀬さんはかゝる些事でも、これは教育である、と衷心から考へて、嚴格に實行されたのである。

渡瀬さんは身を持すること謹嚴で、貞潔（ピユーリチー）と云ふことを人一倍重んじた。安田定則氏に隨行して初めて渡英した時など、隨員中には如何はしい場所へ出入した者もあつたやうだが、渡瀬さんは外國の風紀が亂れてゐる有樣を痛嘆されてゐた。又、茨城縣在勤中、學務課長として縣下を巡視した頃、酒色の誘惑に遇つて僻易されたらしい。これは地方の一つの習慣で、世間的非難は別になかつたのだが、渡瀬さんは極度に排斥されたのである。

さう云ふ風に、渡瀬さんは堅く主義に立ち、強く意志を通し、獨立自尊の精神に生きた人であつた。從つて、他人に求むるところも聊か嚴に過ぐるなきかと思はれる點がないでもなかつた。令息方に對しても、いつまで親を頼みとするな。自分で何か働き、自分で生活しなければならぬ」とよく云つてをられた。私などが「渡瀬さんは自分で資產を築き上げられたのだからそれでもよいが、既に完成した豐かな所へ生れて來た子供さんにはもう少し寛容にしてもよいと思ふ」と云ふと、「さうではない、自ら働き、自ら生活するのは人の道だ」と頑張つてゐられた。さう云ふ點は

實にしつかりしたものであつた。

それから渡瀬さんは無駄をしない人であつた。無駄と云ふことが大嫌ひだつた。邊幅も飾らず、洵に質素な人であつた。時々

「僕も玉川邊りに家でも建てゝ、自動車でも置いて東京へ通つてもよいのだが、子供のためを思ふと、さうしない方がよい」と話してゐられたこともある。しかし、無駄はしないが、札幌の獨立教會邊りへは時々巨額の寄附をされたやうである。

細かいところに實によく氣のついた人であつた。私の所へよく西瓜を下すつたが、その都度「食べたら種子を保存しておいてくれ」と云はれた。これなどは一寸常人には考へつかぬところである。又、堅過るほど堅い人で、飯を食つても旅行しても費用は必らず折半であつた。かう云ふ點は實に嚴重であつた。

渡瀬さんに最後にお眼にかゝつたのは、私が恰度臺北市で開催される中學校長會議に出席すると云ふ時で、生死のお別れに參つた次第、實に斷腸の思ひであつた。何か云はれたが、聞きとれず、やつと夫人の通譯で「家族のことなど宜しく賴む」とくれ〴〵も云はれ、涙に咽んだのであつた。

渡瀬さんは本當に正しいスツキリした人であつた。質素な點は江原素六翁によく似てゐた。考へてみると私は幸福であつた。學校を出ると直ぐ渡瀬さんと知り、江原翁に紹介され、江原翁

とは二十六年間共に育英に盡し、江原先生御長逝後十三年間、その遺業を繼いで來た私は、今日なほ恩人渡瀬さんの幻を畫いて轉、感謝の念を禁ずる能はざるものがある。

渡米實業團當時の思ひ出

名取和作

渡瀬さんと初めてお近づきになつたのは、明治四十二年、澁澤さんを團長とする渡米實業團に、私が當時の東電社長佐竹さんの祕書として隨行した時のことであります。

其旅行の出發から歸朝まで、往復四ケ月の間、申さば寢食を共にしたのですから、同行者の長所とか短所とかもよく判つた譯です。例へば澁澤さんの偉らさなども、其時始めて理解出來たやうな次第です。渡瀬さんに就いても色々印象に殘つてをりますが、當時渡瀬さんは勿論英語に御堪能であつたにも拘らず、必要な場合以外は口を開かれることなく、常に默々として研究的態度をとつてをられ、一行中では南博士と最も親密になさつてをられたと記憶してをります。御體格も立派で、禮儀作法にも通じてをられましたから、いかゞはしい人も少くなかつた一行中では殊に目立ち、米國人の中に交つてをられる時など、米國人か、日本人か、一寸見分けがつかない程、堂々たるものでした。

私もその頃は未だ若く、同年輩の仲間同志で一のグループを作り、老人達に對しては敬遠主義をとつてゐたし、又渡瀬さんが一寸犯し難い威嚴を具へてをられたため、直ちに親しくなつて話をしたり、教へを乞ふといふ具合には行きませんでしたが、人格高潔、品行方正、學殖豐富の好紳士であることは、よく判つてをりました。しかし、ほんとうに渡瀬さんの眞價を知り、寧ろ味ふやうになつたのは、歸朝後、親しく御交際を願ふやうになつてからであります。あのやうな學者肌のお方でありながら、營利事業たる興農園で成功せられたのは、全く卓越した專門的智識と御努力の然らしむるところであらうと、私は獨り極めにして、尊敬してゐたものであります。

渡瀬氏成功の因

河村九淵

世界五十有餘の國々に亙つて救世軍を組織し、濟民の偉業を立てた救世軍の大祖、ウヰリアム・ブースが、人生について次のやうに語つたことがある。

「世の中には人生を公園と看做し、氣まぐれに、或ひは東、或ひは西と散歩して、一生涯を暮してしまふ人がある。又嚴肅な人生を劇場と考へ、唯、大向ふの喝采を受けることに沒頭し、虛名の虜となつて一生を終る人もある」。

謂ふ心は、人間には一定の目的があるべきである、そしてその目的は空なものでなく、實質的に價値あるものでありたい。又、その目的に對し不退轉の精進がなければならぬ、と言ふのである。

獨國の文豪ゲーテは、充實した人生とは如何といふ質問に答へて云つた。

「己れの個性を圓滿に、完全に、徹底的に發揮するところに人生の充實がある」。

蓋し、人間と生れたからには、各〻その個性を充分完全に發揮すべきである、と言ふのであらう。

顧れば五十有餘年前、笈を負ふて遙々津輕海峽を渡り、今の北海道帝國大學の前身たる札幌農學校に學び、學成つて後、校門を巢立して四方に雄飛した多くの青年たちは、或ひは學者となり宗教家となり、或ひは教育家となり實業家となつて、それ〴〵の天分を發揮した。斯の如く當時の札幌農學校と云ふ花畑は、いろ〳〵の花卉を世に送つた。それが文字通り、黄菊白菊、とり〴〵の色を呈してゐるが、こゝに、我が國實業界に咲いて異彩を放つた一輪の花がある。東京興農園の創立者、渡瀬寅次郎君その人である。

渡瀬氏六十八年の生涯については語るべき多くのものがあらう。しかし、氏の思想、行爲について特に我等の景仰して已まぬところは、恰度ゲーテやブースが言つたやうに、空名を飽まで避け、本質的に價値ある目的を確立し、個性をどこまでも發揮して不撓の努力を續け、種苗農具の生産販賣と云ふ新分野を開拓し、延いて我が國の農界に偉大な貢獻をなした點にあると思ふ。

渡瀬氏はさま〴〵の意味に於て世の成功者であつた。而してその成功の原因は上述の通りであるが、今一つその素因をなしたものがある。人の成功の裏には、必らず潜んでゐる「見通し」即ち、先見の明がそれである。渡瀬氏は明らかにこれを備へてゐた。渡瀬氏はその「見通し」の力により「世の動き」を知り、夙に種苗農具の業を興し、傍ら肥料の改良及普及のことに携はり、其他一般農業上、教育上、社會政策上、さては政治上の功勞頗る多く、屢々表彰を受くるの光榮を擔つた。

かゝる觀點に於て渡瀬氏の志操行動を見る時、筆者は、明治に於ける偉大なる先覺者、子爵澁澤榮一を想ふ。子爵は、大藏省出仕の役人生活を弊履のやうに一擲して商人となり、先輩知友をして「澁澤は氣でも違つたか」と疑はしめた。渡瀬氏は、官尊民卑の風なほ甚だ殷であつたその當時に、師範學校長といふ榮職をかなぐり捨てゝ一種苗商となつた。兩者の行き方を見るとき、その「見通し」といふ點に於て、「世の動きを知る」といふ點に於て、一脈相通ずるものあるを感ずるのは、ひとり筆者のみではあるまい。

筆者は渡瀬氏と親交を結ぶこと五十年、この間或る時は君の配下につき、或る時は君と事業を共にし、又或る時は側面的に君の事業に微力を致すなど、頗る親密であつた。君は曾て書面を寄せて

"I'll stand by you through thick and thin." (余は如何なる場合にも君に對する援助を惜しまざるべし)

との絶大の好意を示して、筆者を感激せしめたものであつた。

君は既に白玉樓中の人となつた。君の成功談を聽き、僕の手柄話を語つて、相共に快哉を叫ぶ機會を永遠に失つたことは、洵に痛惜の情に堪へない。

最後に君を語るについて閑却し得ぬ一事がある。それは明治十六年以來四十六年間、君と苦樂を共にしたる香芽子夫人内助の功である。嘗て筆者と事業を共にした智利硝石普及會東洋本部理事長たりし英國農學博士ストラッザース氏は夫人を評して云つた。

「渡瀬夫人はable woman（卓越する婦人した）である。渡瀬君の成功は夫人に負ふところが多い。」

一言評し得て妙である。

Feeling a Debt of Gratitude to Mr. and Mrs. Watase.

We feel deeply indebted to Mr. and Mrs. Watase for having contributed so largely to the pleasure and profit of our life in Japan. When we went to Mito in 1887 (Meiji 20), Mr. Watase was the principal of the Middle School in which I was to teach; and he and his wife, who were among the few English-speaking people in that city, helped to form our first impressions of Japan and the Japanese. We were the only foreigners living in Mito. In fact, it was through the influence of Mr. Watase and Gov. Yasuda,

who had traveled abroad together, that a foreign instructor of English was called to teach in that old conservative city. But we were treated very kindly and were happy in our life there. We feel,therefore, a debt of gratitude to Mr. and Mrs. Watase and the others who made our way easy in adjusting ourselves.

I should like to relate one little instance of the manner in which we were treated. On one Fourth of July the Governor sent us a tray of little cakes, on top of each of which the American and Japanese flags were crossed, and Mr. Watase granted me a special holiday. It was, perhaps, a small thing from one point of view ; but from our point of view, it was a big thing and showed the beautiful spirit of the donors.

When we reached Japan for the second time in 1895, to start a Baptist school for boys, it was natural that Mr. Watase was asked to be the principal of the school. For several years we worked together in that undertaking in a most harmonious manner. We did not recognize any national or racial difference, but cooperated in a common cause. Mr. Watase was a competent educator with profound Christian principles; and he resigned from one important position rather than follow a course of action against his conscience.

Mr. Watase did not confine himself in any narrow sense to educational work. He was a public-spirited

man and took an active part in educating his ward (Akasaka) and the city by holding offices of importance.

He also made a contribution to the general progress of Japan along agricultural lines by establishing a business for the handling of seeds, plants and agricultural implements.

Mr. Watase was a sincere and earnest Christian. At college he became a member of the famous "Sapporo Band" that furnished so many active leaders in Christian work; and his associations with such companions doubtless affected his whole life.

Edward W. Clement.

（右譯文）　私どもは日本に於ける我々の生活の愉快と利益が非常に大きかつた點につき渡瀬氏御夫妻に深く負ふところがあることを感ずるものであります。一八八七年（明治二十年）私どもが水戸へまゐりました時、渡瀬氏は私が教鞭をとつた中學校の校長でありました。御夫妻は英語を話す人の少い水戸市にあつて日本及び日本人に對する私どもの第一印象を形造つて下さいました。私どもは水戸市に住んでゐる唯一の外國人でありました。實際外人の英語教師があの古い保守的都市へ教師として招聘されたと云ふのも、相共に海外の旅をされた渡瀬氏と安田知事のお蔭なのです。でも、私どもは大變御親切な待遇を受けましたので、幸福に暮すことが出

來ました。ですから、私どもを易々と調和させて下すつた渡瀬氏御夫妻其他の方々に感謝の負債があると感ずるのであります。

私は自分たちがどう云ふ待遇を受けたかについて小さい一例を申し上げたいと存じます。或る年の七月四日（譯者註―米國獨立記念日）のこと、知事は日米國旗が上部に交叉してゐる小さい菓子を一盆贈つて下さいましたし、渡瀬氏は私に特に休暇を與へて下すつたのです。或る見地からすれば、小さな事柄かも知れませんが、私どもの見地からすると大きな事柄であり、贈主の美しい精神を示すものです。

一八九五年、少年達のバプテイスト・スクールを創めやうと二度目に日本へまゐりました時、渡瀬氏にそのスクールの校長になつて戴くお願ひをするのは當然なことでした。私どもは永い年月の間最も融和した狀態でその仕事を一緒にやつて來ました。國民的若くは人種的差別などは少しもなく、共通の正義に立脚して協力を續けて行つたのです。渡瀬氏は深く基督教を信仰する有能なる教育家でした。さうして氏は自分の良心に反する行爲に從ふよりはと、或る重要な地位から退いた方です。

渡瀬氏は教育事業を狹義に解するやうな人ではありませんでした。氏は公的精神の人で、重要な職務に就いて自分の區（赤坂）及び市を教育しやうと活動した人です。

氏は又種子、植物及び農具を取扱ふ事業を創めて農業方面に於ける日本の一般的進歩に貢獻した人でした。

渡瀬氏は眞摯で熱心なクリスチャンでした。學校時代には、基督教傳道に幾多の活動的指導者を與へてくれた有名な「サッポロ・バンド」の一員になつてゐました。かうした團體と氏が結んであつたことが氏の全生涯に影響を及ぼしたに相違ないと思ひます。

Appreciation of the Life of Mr. Torajiro Watase.

For several years I was intimately associated with Mr. T. Watase in connection with the Akasaka Hospital and the Japan Peace Society and can therefore speak from experience as to his very valuable services.

(1) The Akasaka Hospital: Before the Akasaka Hospital was chartered as a Juridical Person (Akasaka Byoin Zaidan Hojin), Mr. Watase was an intimate friend and adviser of the Hospital's founder, Dr. Willis Norton Whitney, a pioneer in introducing modern scientific medicine into Japan. When the Hospital was granted a charter as a Juridical Person, Mr. Watase became a member of the Board of Trustees and continued a member to the time of his death. During most of this period he served as Chairman of the Board. Mr. Watase's well tried Christian integrity and his experience in business life and in public affairs

enabled him to render invaluable services to the Hospital. The Director of the Hospital and the Board of Trustees depended much upon his judgment and service in relati n to the Government and the general public.

(2) The Japan Peace Society: Not long after the organization of the Japan Peace Society in March 1906 Mr. Torajiro Watase began to take an active interest in its work. In fact he was one of a group of Japanese men who were already prepared by previous personal experience to support the Peace Society when the initial steps were once taken toward its organization.

It was within the period when Mr. Ebara Soroku was serving as the first President of the Society that Mr. Watase consented to become the Honorary General Secretary (Kanjichō) of the Society. His work was really that of Administrative Trustee (Jōnin Riji), representing the Board of Trustees in supervising the general work of the Secretaries. He also had oversight of the funds of the Society. The income of the Society was then small and to see that it was used in the most effective way was no small responsibility. Mr. Watase's services in this capacity did much for the Japan Peace Society and helped greatly in preparing the way for the later services of Baron Sakatani when he became President of the Society and superviser of its finances.

Both in connection with the Akasaka Hospital and the Japan Peace Society it was my privilege to be an associate of Mr. Watase for several years. This association in common work in which we were both intersted counted it a privilege to work with him in meetings of Committees and Trustees, and to visit him in his office or home to talk over problems connected with the work in which we were both interested.

Gilbert Bowles.

（右譯文）　私は多年の間赤坂病院及日本平和協會と關聯して渡瀨寅次郎氏とは親交を結んでゐたから、氏の非常に尊い奉仕については自分の體驗から語ることが出來ると思ふ。

(一)赤坂病院　赤坂病院が財團法人となる以前渡瀨氏は同病院の創立者ウイリス・ノートン・ホイツトニイ博士の親友であり助言者であつた―ホイツトニイ博士は現代の科學的醫學を日本へ輸入した先驅者である。病院が愈〻財團法人組織となるや、渡瀨氏は理事會の一員となり死に至るまでその職にあつた。この間氏は概ね理事會議長を勤めてゐた。渡瀨氏のよく洗練された基督教信者としての完璧、事業界に於ける、及び公人としての經驗は、病院のためにどの位役に立つたか知れないのである。病院長及び理事會は政府及び一般大衆に關し氏の判斷と盡力にまつところ多大なるものがあつた。

(二)日本平和協會　一九〇六年三月に日本平和協會が組織されてから久しからずして渡瀨寅次

郎氏は同協會の仕事に重要な地位を占むるに至つた。平和協會がいざ組織されんとするや、これを支持すべき個人的經驗を既に有してゐた日本人諸氏があつたが、渡瀬氏も實にその一人であつた。

江原素六氏が初代協會長たりし頃、渡瀬氏は同協會幹事長たることを快諾されたのであつて、その仕事は事實上常任理事の職務であり、幹事連の一般事務を監督して理事會を代表してゐたものである。その上協會基金の監督權をも有してゐた—同協會の收入は當時僅少だつたから、これが最も有效な方法で使用されたか否かを見ることは小さな責任ではなかつたのである。そしてこの資格に於ける渡瀬氏の盡力は、日本平和協會のため貢獻するところ甚だ多く、後に坂谷男が協會長となつてその會計を監督するに當り、これに資せらるるところ蓋し尠少ならざるものがあつた。

赤坂病院及び日本平和協會兩者と相關聯して多年渡瀬氏の協力者たり得たことは私の特權である。卽ち、我々が相共に關係してゐた仕事の上のこの協力が、私をして、委員會及び理事會の會合に於て渡瀬氏と共に仕事をなし、且つ氏の事務所や家庭を訪問して關係事務に關する問題を相談せしめ得たことを一の特權と思惟せしめるのである。

嗚呼渡瀬先生

渡邊房吉

渡瀬先生を思ひ起すと、眞つ先きにあの濃い一文字の眉が、あの高い美しい鼻が、そしてあの炯々として炬の如き鋭い眼が、直ぐと私の眼前に浮ぶ。『先生』と呼びかけると、僅に双頬に微笑を湛へられたのが、深い印象となつて私の心に跡づけられてゐて、いつ迄も消えない。先生は誠に凛々しい男性的美貌の持主であつた　端嚴にして犯すべからずと云ふ慨があり、凛乎として近より難い風があつた。駄辯冗舌を弄する輕薄才子と云つた様子は微塵も無かつた。私は常に先生を典型的の紳士、模範的の教育者として、心の底から尊敬し、崇拜してゐた。

私は笈を負ふて東京中學院に學び、初めて先生から教へを受けたのであるが、先生の人格は、先生の薫陶は、其後の私の全學業のコースを指導せられたやうに思つてゐる。私は東京中學院々長である先生から、英譯と、萬國歴史と、世界地理と、倫理學とを學んだ。同級生は、今は牧師の聖職にをられる渡部元君と私との二人きりであつた。先生はいつも此二人に向つて、『此の次には此處から彼處までを準備して來い』と命ぜられ、其日になれば、此二人と向ひ合つて、縦横に質問された。いやでも忘けてはゐられなかつた。從つて自習自得の道がおのづから教へられ、勤勉精

勵の習慣が止むなく馴致させられた。先生は、學業と一緒に人を造ると云ふことに力を入れてをられたやうであつた。フランクリンの自敍傳が教科書として用ひられてをつた時など、フランクリンの人物、其の自力的精進などに就き、懇々と噛み碎くやうにして說明された。『二度と生れ變つたとて今迄の經路を繰り返す外は無い』と云ふフランクリンの言葉が、深々と私共の頭腦に刻みつけられたことなど、忘れやうとしても忘れられない印象である。

私が東京中學院に入學したのは明治二十八年九月で、同三十一年九月第二高等學校に入學するまでお世話になつてゐたが、此間日夕渡瀬先生の謹嚴なる人格に接し、撓みなき教訓に與かつてゐたのである。私の學業は全く東京中學院からスタートを切つたのであるが、私のコースは實に先生の監視の中に進行したものと云つて良い。私は今でも先生を父の如く思つてゐる。端嚴にして近づき難い所があつたが、又其の心からの厚情が私共を親しませ、なつかしめずにはおかなかつた。私は僅に三年半の中學教育を受けただけであつたが、それでも高等學校入學の幸運をかち得たのは、全く先生から餘儀なくされた勉强と、充實した薫陶の贈物だと感謝してゐる。

先生に關するエピソードだとか、アネクドートだとか云ふものは想起されないが、あれから星霜幾十年かを閲した今日でも、尙ほ先生はありし儘の姿で私の心に生きてゐられる。そしてあ

の頃の思ひ出を極めて意義あるものにさせられる。私は、今は天父の側にをられる先生から絶えず鞭撻、鼓舞されつゝ、今後の私を自警し、ひたすら精進奮勵しやうと思つてゐる。これが先生の心からの教へを受けた子弟としての、私の踏むべき道と心得てゐる。

あゝ渡瀬先生!!

渡瀬さんと私

出田新

渡瀬さんと私とは隨分密接の關係があつた。

私は幼時亡兄の荷物の中に、渡瀬さん初め、同級生や米國人の教師の寫眞を見、又富田叔父から渡瀬氏のことを多少聞いてゐたが、明治十八年春、私は修學のため上京して牛込區納戸町の富田叔父の家に世話になつたが、二軒長屋の隣りが渡瀬氏のお宅であつた。當時氏は外遊中で、令閨と令息が留守をしてをられた。私の叔父富田耕司は氏と交際あり、又叔父の妻は氏の夫人の知人であつたから、私も夫人と面會する機會を得たのである。

又、隣家に氏の令兄渡瀬昌邦氏（陸軍砲兵少佐であつたと記憶する）のお宅があり、そこに農學士渡瀬庄三郎氏がをられて、理科大學に通學されてゐるのを屢、見かけた。私の共立學校の同級生野口享二氏（渡瀬家の

〔親戚〕から庄三郎氏のことを聞いたが、札幌農學校を卒業した者が又理科大學に通學するとは如何なる意味か當時私には了解出來なかつたが、これ二三年後に米國に留學を命ぜられ、滯米十數年の後に理科大學の教授となつた故理學博士渡瀬庄三郎氏であつた。

私の亡兄晴太郎は、渡瀬さんと同期の卒業生であつたから、前記の如く氏のことは聞き知つてゐたが、氏がその時洋行して御不在であつたため、氏に面會する機會がなく、私は青山學院の寄宿舍に入り、それから札幌農學校に入學したが、在學中氏は札幌に來られ、その時に初めて面會して亡兄のことを色々聞いたことを記憶してゐる。

明治二十六年、私は札幌農學校を卒業して郷里に歸つてゐたが、氏は東京興農園を創立し、又興農雜誌を發行せられ、私は郷里から苺の苗を興農園に註文し、又興農雜誌を購讀してゐたことを覺えてゐる。

明治二十七年春、私は職を求むるため上京し、同窓の先輩を訪問したが、赤坂溜池町にあつた興農園裏の御宅に再三渡瀬さんを訪問し、種々御意見を伺つたが、その時に亡兄晴太郎は氏と靜岡中學校に學び、東京に於て再び東京英語學校に同級生となり、それから共に札幌農學校に入學し、同時に卒業したと云ふ親密の間柄であつたことを聞いたが、亡兄は卒業後間もなく歸省の途次海上暴風に逢ひ、病を得て遂に中途東京に歿したのは明治十三年十月二十二日であつた。

渡瀬さんは亡兄の關係から特別に私を愛されて種々の注意を與へられ、又當時氏は國民中學會講義錄中の農學の部を擔任せられてゐたが、私はこれをお手傳することとなつた。同年九月私が青森縣立中學校八戸分校に赴任した後暫らく繼續してゐたが、何分遠隔の地にゐて不便であるからこれをお斷りした。

翌明治二十八年春、私は鄉里大分縣の大分師範に轉任のため、八戸を去つて上京した際氏を訪問したが、例によつて種々御注意があり、細君を世話するから君の寫眞を貰ひたいとのことであつたが、適當の寫眞がなかつたから、大分に着いたら寫して送ることをお約束したが、私はこのお約束は履行せずに大分で結婚した。

その後、私が越後長岡中學校に奉職中、氏は大阪硫曹會社の用事で長岡に來られ、一度御面會したやうに記憶してゐるが、大阪府立農學校在勤中は、氏は大阪の硫曹會社の囑托であつたから屢々來阪せられて再三御面會した。

渡瀬さんはその後、實業視察團に加つて米國を旅行され、その際に得られた植病に關する二三の材料を私に分與せられたが、これは貴重な材料で私の植物病理學の著述にも參考になつた。

その後私は福井縣立農學校長に轉任し、年一回は上京する機會があり、同窓會の席上で屢、御面會し、又澁谷のお宅に參上したこともあるが、校長としての心得を種々御指導に與つた。

最後にお目にかゝつたのは、東京の同窓會の席上で、私が米國から、歸つた年だつたから、いろいろと米國の事をお話したが、氏は開會の辭を述べられるのに聲が嗄れてをられた。その時に、房州とかに轉地療養してをられると承つた。要するに私は亡兄の關係で同窓の先輩でも特に氏の愛顧を蒙つたものであるが、往時を顧みて感慨無量である。

農會への奉仕

肥田源吉郎

渡瀨寅次郎君が大日本農會特選幹事として、池田謙藏君と共に多年に亙り會の常務に盡瘁されたる時代は、會の經濟狀態餘り豐かならず、その報酬の如きも僅かに車代を辨ずる程度に過ぎざりしが、君はこれを自己の名譽職務として、一意專心會のために貢獻せられたり。

君は同會の常議員及び農藝委員として、將又理事として、よく會務に盡され、或ひは講師として各地の招聘に應じて出張講話せられ、或ひは歐米の農業關係文獻の重要記事を譯述、農會報の資料供給に努められるゝなど、君が獻身的奉仕は農會關係者一同の感激措く能はざるものありき。殊に、君が札幌農學校出身の身を以て、よく駒場出身者の間に伍し、所謂學閥思想を超越して融和協調の實を擧ぐることを怠らざりしは、洵に異彩なりと云はざるべからず。

而して又、東京農業大學の前身育英黌東京農學校に緣故少からざりし君は、東京農學校の經營、大日本農會の手に移るや、講師として又商議員として、これ亦熱心に盡さるゝところあり、同校の卒業式、開校記念式日等には多忙の中を力めて出席され、慈父の如き親しみを以て演示せらるゝを常とせり。

君が我が農業界、及び大日本農會に捧げられたる功績は、同會總裁宮殿下より表彰せられしこと再三に及べるに見ても知るべきなり。

先生と通信販賣

池田次郎吉

渡瀨先生が興農園を創始された動機の根本は、先生が修められた農學を實際に應用される意圖からであつたと思ふ。先生が世に立たれる頃は、凡ゆる方面で先生のやうな新知識を要望してゐた時代であつた。それにも拘らず實際農業と云ふやうな地味な方面に進まれたのは、そこに營利以外の尊いお考があつたのだと思ふ。聖書にもあるやうに、人のよくとる廣い門でなく、餘り人のとらない狹い門を選ばれたのであらう。

種屋を種苗商と云ふ近代的商業の一に進歩させたパイオニアとしては、津田仙氏などもある

が、通信販賣と云ふ在來の型破りをされた點に於て先生は本邦新式種苗業者の鼻祖とも云へやう。今日でこそ通信販賣は立派な組織となつてゐるが、當時では實に嶄新な制度であつた。現在の種苗業者が通信販賣について盛に研究も實行もやつてゐるし、商業學校邊りでも、種苗業者のカタログは同じ日本にあつても他の商業に比して一日の長を有すなどと說くやうであるが、これは何れも先生がこの組織を種苗業に於て卒先して採用された功績を裏書するものと云つてよい。

實際、當時は「農家便覽」の如き立派なものを印刷して無代配符するやうな勇氣のある商人はゐなかつた。それより以前に津田仙氏邊りが「農業雜誌」で種苗の宣傳をしてゐたこともあるが、一冊に纏つたカタログは出さなかつたのである。先生は米國のシーアス・ローバツクの商業組織などを餘程研究されてからこの方面に手を染められたらしい。

又、私は興農雜誌の創刊より編輯を承つたものだが、あれの發刊の目的は、營業の機關雜誌とし、且つ農界の進歩に資するにあつた。記事は先生のお話を伺ひながら私が筆記したり、又先生の御命令で大家を訪問したりして作成したのである。貴族院議員田中芳男氏の所へ「甘藷の話」を筆記に行つたり、山本悌二郎氏の許へ「獨逸帝國農會の話」を伺ひに行つたりしたことを今に記憶してゐる。先生は御交際が廣かつたので記事は比較的有益なものが多かつた。料理の記事な

ども載せた。

今日の雑誌は一律にさうした記事を載せるが、當時は一切さう云ふ傾向はなかつたので、その點興農雜誌の編輯振は頗る評判がよく、川上謙三郎氏の如き、創刊號から讀まれて、「前號のも仲々面白かつた」などと褒められたことがあるのを記憶してゐる。販賣部數はかれこれ三千部位であつたらう。

米國リバーサイドにある大ホテル、ミツシヨン・インは有名、且有力なる親日家ミラー翁の經營するところで、その館内に世界各國からの蒐集品を陳列し、自由に宿泊者に見せる小博物館がある。私も先年渡米の際、この館内を何氣なく見廻ると、そこに、日本紙に日本字で、澁澤榮一、渡瀬寅次郎、……等々諸名士の名を列記したものがあるのを發見した。見ると、これは諸氏が嘗つて日米親善の平和使節として渡米せられた時、館主より受けた厚意に對する謝狀であつた。

此の光榮ある親善平和使節、それがどんなに彼等米人に感激を與へ、兩國平和のために貢獻したか、その深さ、大さは驚くべきものがあつた。が、これらのことに關する幾多の功績事歴は、他にこれを述べる適當な人が多くをられると思ふから私は遠慮して、たゞ、異境に於て、渡瀬先生の御署名を發見した驚きと、喜びを報告するにとゞめる。

主義と溫情の別

松澤市之丞

私が渡瀬先生を知つたのは、私が茨城師範の生徒時代で、明治二十一二年の頃であります。先生が校長の地位を捨てゝ東京へ出られる時、私もいろんな事情から同志三人と共に出京し、それからは事毎に先生御夫妻のお世話になることが多かつたのでした。

いろんな追憶もありますが、一番感銘の深かつたお話を申し上げませう。私が出京後間もなく月給九圓で京橋區役所の戸籍係になり、神田に下宿してそこから通つてゐる内、大變窮迫したことがあつて、先生に御助力を請ひたいと思ひ、神田からテク〳〵歩いて溜池のお邸へ參り、いろいろお話をしてゐる内に、雪が大變降つて來ました。さうです、冬のことでした。

その時のお部屋は、與農園の裏のお住居の二階で、段々話も盡きて、さて「先生、これ〳〵で少し御用立を願ひたい」と申し上げたのであります。師範にゐる時分から怖い一冒し難い先生と云ふ印象を受けてゐたので、切り出しにくかつたのを思ひ切つてお願したのでした。

すると、先生は「どうもね、貸借關係が出來ると、私は良い友達を失ふやうになるので、お氣の毒だけれど、金を貸すことは困るね」と云ふお言葉、私もそれ以上とりつく島もなく、暫らくの間お茶を

戴いて雑談をした上、お暇乞をして二階から下りて參りますと、奥様が玄關までお送り下さいました。

さて、私が辭去しやうとすると「一寸持つてお出でなさい」とのことでしたから、玄關に立つてゐると、奥様が引返して來られ「これをお持ちなさい」と、私が先生にお願ひ申し上げた金だけお渡し下さいました。その時の心持は何と申してよいか、今に忘れることが出來ません。

つまり、先生は「良い友達を失ふから金の貸借はせぬ」主義を一度立派に通されて、さて、氣の毒だから用立てゝやれと、奥様を經て溫情の手をさしのべられたのです。自分の主義は一旦必らず通すが、事情によつては飽まで第二段の策をとつて下さる、こゝに先生の嚴格な中にも優しい人格の一端が現はれてゐると思ふのであります。

先生の英靈に謝す

瀧澤七郎

私が初めて先生にお眼にかゝつたのは明治二十七年頃であつた。後に波多野姓を名乘られた牧師の增野傳四郎先生が信州上田に來られ、私は同先生に基督教及び英語につき教を受けたのであるが、その當時、同先生が東洋英和學校の先生渡瀨農學士が發行されたものであるとて、興

農雜誌を示されたので、その第一號を拜借して讀み、爾來廢刊までこれが讀者になつた。この年、私はこの增野先生の御紹介で渡瀬先生にお眼にかゝつたのである。

二度目に渡瀬先生にお會ひしたのは明治二十八年秋のことであつた。その時「君の國では蠶種が盛である。私の店で賣つて上げるが」とのお言葉があつた。私の家でも蠶種製造の經驗はあつたが、私自身としては農蠶界を去つて東京で苦學せんものと、先生にもお願したのであつた。しかし、先生のこのお言葉があつたため、再び蠶種製造家たらんとの決心を固めたのである。で、興農雜誌へも蠶種の廣告をして戴き、翌二十九年からは名稱も「東京興農園信濃蠶種部」とすることを許されたのである。私は先生の知遇に添はんがため、小縣蠶業學校へ入學し、三十年にこれを卒へたが、同年徵兵に合格して目黑の騎兵第一聯隊に入營した。入營中は弟が代つて蠶種部の仕事をした。明治三十三年除隊となり、後、日露戰役にも從軍したが、引き續き興農園で御販賣下さる蠶種の供給をしてゐたのである。

明治四十五年、私は上京して鑄造業に從事することとなり、次いで大正四年には全く蠶種製造業を廢止したので、永年の御恩顧に對するお禮を述べに先生を訪ね、御夫妻に拜眉の榮を得て四方山の話をしたことがある。

私が先生に深く感謝せねばならぬのは、未だ成年にも達せず、學問の素養もない私を大變信用

して下すつて、その蠶種部主任といふ名義すら與へて下すつた點である。後に、事志と違ひ、上京して今日の事業に從事し、兎も角も一人前に伸びて來ることが出來たのも、偏に先生の御指導の結果であつたと信じてゐる。この機會に衷心より先生の英靈にお禮申し上げたい。

元來興農園は、先生初め全くの素人商人で、往々園員の監督不行屆のため先生が損失をされた話も聞いたし、園に働く青年達のためには隨分御迷惑もされたやうである。が、「強く正しく」のモツトーの下に、「よろづ種物商」の型を破り、種苗商としてよく天下を指導され、己れを利し、人を利し、而して國家のため、農業のために盡瘁されたことは、私が今に敬服措く能はざるところである。

先生の耐忍力

高田篤行

私が最初先生のお世話になつたのは恰度明治二十九年、入營前のことであつた。除隊になつて歸つて來た私は沼津へ他の店を經營してゐたが、その後先生が見えられて、四方山の話の揚句「君も今まで私の店でいろんなことをやつて來たのだから、もう少し續けて見ないか」と云ふお話があり、又桑の苗の時期に中泉方面の桑の苗をお送りしたところ、好成績を賞され、その後は又興農園に歸るやうに度々お話があつたので、とう〳〵明治三十三年に上京した。

先生はまだ經驗の淺い自分をよく導いて下さつたものである。つまり、素養のない者を指導されて、十錢銀貨を二十錢銀貨に通用させて下さつたのだと、今に感謝してゐる。何か會などがあると、「××にかう云ふ催しがあるから、仕事の息抜きに行つて見るがよい」などゝ慰安の言葉と共に切符まで與へられるので、こんな時には涙がこぼれた。

私が先生について敬服に堪へぬことは澤山あるが、就中、先生の耐忍力には心服の外なかつた。私は隨分厄介になつたが、言葉の上で縮み上らされたやうなことは一度もなかつた。何か過失があると、先生の言葉は荒くならないで、却つて叮寧になる、だから先生の言葉が叮寧なのは危險信號であつた。言葉は叮寧だが、眼其他の表情が心持ち違つて來るので判る、と云つて、顏を赤くなさるやうなことは絶對になかつた。かう云ふ點は普通の人と違つて餘程修養を積まれてゐたやうである。

それから商賣については一分間も忘れられたことがない熱心さも、私の祕かに尊敬してやまぬところであつた。伊豆の久連に農場を購入されてからは、屢〻視察に赴かれたが、如何なる時でもカタログはトランクの底に納められてゐた。汽車などで書類は仲々見られぬものであるが、先生は車中で隨分細かい書面を書いたり、窓外に見ゆる農作の模樣を見て氣づかれた點を書き留めたり、又店の者に對する留守中の注意其他を、利用し得る古葉書の表から裏まで細々と書い

て送られたもので、言葉は常に簡にして要を得てゐた。兎角居眠と雑談に過し易い車中の寸暇をも惜しんで利用された先生の精力と熱心さこそ、先生を凡ゆる方面に活躍せしめてその大を成さしめた所以ではあるまいか。

興農學園に起居して

大谷英一

私は昭和二年十二月以來久連國民高等學校に關係して來たのであるから、この機會に二三の思ひ出を述べ、御生前一度も拜眉しなかつた渡瀨寅次郎先生の靈に捧げたいと思ふ。

當時九州帝大に研究中であつた私は、木村修三教授、高須虎六教授、石黒農務局長（後に農林次官）等のおすゝめにより、この事業に關與するに至り、嚮に丁抹から歸朝された平林廣人氏を創立委員長として、東京市澁谷區上通二の二六前田館（五坪位の建物）の中で敷地の選定、學園の經營計畫書作成等に參畫したのであつた。敷地の候補地は、これを東京、栃木、千葉、神奈川等の諸府縣下に求めたのが、種々の事情でその地方は中止となり、昭和三年七月、私は平林氏と共に明治三十五年以來渡瀨先生の御經營にかゝる久連農場を視察し、間もなく同年九月、內村鑑三先生、渡瀨未亡人、小坂夫人、田中次郎氏の方々が視察され、愈々久連を最適地と認め、この地に基督教精神に基く丁抹の國民高等

學校風の一農村私塾を設置するに決したのであつた。當時財團法人興農學園としての計畫を樹て故先生の友人、知己の方々に捺印を求めたことも過去の思ひ出の一つである。

昭和三年九月六日、平林氏と小生とは、久連の地に來て旅館福田屋に陣取つて、愈〻仕事の準備にかゝつたわけであるが、間もなく空家になつてゐた山田さんの家を借り入れ、自分の手ですつかり手入れをして、最初の學園を開いたのであつた。

事をこれまでに運ぶには、内村先生初め故先生の友人知己、遺族の方々の御盡力は勿論であるが、平林氏も相當に苦心されたやうだ。久連の人々の好意―特に故人となつた西島、山田兩氏の援助に負ふところ甚大なるものがあつたことも想ひ出される。卽ち、隱れた數多の人々の御盡力で一つの神の事業が久連に生れ出た次第である。一つの仕事を始めるためには、力强い祈りとその土地の人々の同情とが大切であることもこの時に體驗が出來たのである。

昭和三年十一月二十日附の平林の挨拶狀を次に拔萃すると

〔前略〕故渡瀨寅次郎氏の遺志によつて設立せらるゝ、丁抹の國民高等學校とその精神を一にする興農學園の設立經營を委ねられました〔中略〕久連に於て過去二十年間故人の經營されたこの農園を根據としてさゝやかな一農村家塾を興すことになりました。

翌年六月十三日、渡瀨未亡人寄贈の渡瀨塾（當時の雄心寮）と體操場が落成したので、教師二人と生徒

七名を以て、新渡戸稻造、大島正健兩博士、小坂順造夫妻、渡瀨雅太郎、田中次郎、渡瀨三郎夫妻、相田辰雄等の諸氏を迎へこゝに開園式を擧げることが出來たのである。

當學園の教育は滿十八才以上の青年を一箇年間教育する考であつたが、興農學園の內容が全く理解されず、時には病弱な子弟までも依頼されたこともあつた。で、最初は久連を中心として村の人々に力めて接觸し、村自身の教育運動にも力を注ぎ、子供の會、青年男女の會、壯年老年の會などをやり、講演會、座談會、講習會、活動寫眞會等を次々に催して村人の教育をしたものであるが、それは至つて粗放な教育方法であつた。しかしこれも着手早々のことであるから、許さるべきものであらう。オルガンの調べを珍しがつて集まる小供や老人、お祈りをボカンとして聞く人々等、毎日實に面白いことばかりであつた。時には渡瀨家の利益のためにするのだとか、或ひは耶蘇教を廣めて日本を米國に賣るのだとか、こんな時代に何でもたゞでしてくれるには何か野心があるのだなどと云ふ風評さへも立てられたが、純朴な土地の子供はいづれの會にも百二十名位集つて來るやうになつたし、大人も隨分集るやうになつた。

一方、學園の生徒達とは、朝四時から夜十一時まで起居を共にし、村の生活そのものを生きた教材として教育をしたが、何しろ嫌はれる耶蘇教に教育の基礎を置くのだから、兎角青年達との間に議論の花が咲く、仲々元氣はあるが、世間並の教育もなく、理解もない青年達を相手にするのだ

から、これが又愉快極りない一情景であつた。

かうした體驗を重ぬればこそ初めて神の心を悟り、信仰の惠みを得、益々青年達のよき友とならうと心がけることが出來たわけである。青年期の教育は、教育者自身が青年にならなければ駄目であることも知つた。本當の生きた教育は、生きた信仰によらなければならぬことも體驗した。生きた教育は唯、ひたすら神のみ見つめ又見つめさせることに盡きることも發見した。

この間、小坂順造氏及び加藤成一氏から圖書の寄贈があつた。農村の子弟はもつと鋭い批判力がなければならない、それにはもつと頭を働かせなければならない、從つて、もつと書物を讀む習慣をつけさせたいと云ふ我々の願が容れられたのであつた、更に當時竹内女醫、山田わか女史などの御援助を受けたことも學園の發展について忘れられぬ出來事である。

昭和五年五月、財團法人興農學園寄附行爲を靜岡縣廳に提出、同年十一月、伊豆に大地震あり、これを機として平林氏は學園を去り、靜岡縣囑托として震災地を中心に活動を開始され、その後事一切を私が引受けることになつた。かくて昭和六年から二箇年の豫定で學園事業關係者の多大なる御同情の下に歐洲留學に出發し、昭和七年秋歸朝、續いて再び開園の仕事にとりかゝり、食堂、校長住宅、農場、實驗室、當直室等の新築と相俟つて再開した。次いで、財團法人興農學園は獨立して、私塾久連國民高等學校を維持經營することに組織を變更し、當局に財團法人認可申請をな

し、昭和八年二月理事者の御努力により財團法人興農學園を認可された。

この事業の初めから足掛け七年の星霜を經た今日、靜かに思ひめぐらせばたゞ「感謝」の二字につきる。そして、故渡瀨先生を初めとし、內村、新渡戸、伊藤の諸先生の祈りの一部が聽かれて、こゝに實現しつゝあることを感謝してゐる次第である。

教育は營利會社の事業ではないから、眼に見えて效果は擧らないかも知れぬ。しかし故先生の遺志、よく天に通じて、たゞ神の喜び給ふ器として、日本農村の愛鄉的開拓者を生み出だしたいと希つてゐる。又それ以外になすことはないのである。

私は過去七年の體驗により、如何に主による協力が偉大であるかを、しみ〴〵と知つた一人である。こゝで心をゆるめてはならないと思つてゐる。故先生の志を常に新たに、遺族の方々と、主にある同情者と、我々とが心を一にして、與へられた全國よりの青年男女の魂を教育せねばならない。種々なる學園經營方策や教育法は、この根本精神によつて次から次へと案出されて行くものと確信してゐる。

全國の若き魂は、今、すく〳〵と伸びつゝある。故先生の靈よ、喜びあらんことを!!

亡き父を憶ふ

渡瀬雅太郎

父が亡くなつてから、もう八年になる。

父の病氣は喉頭癌であつたから、病床の苦痛は傍目にも殘酷な位であつた。その劇しい病苦に耐へながら、死の瞬間まで平素の心構へを失はなかつた父の悲痛な面影を想ひ浮べると、この八年の歳月はあまりにも慌しく、私には夢のやうな氣がする。父の死後祿々として何事も爲し得ず、その期待に背いて來た私としては、この「時の流れ」の早さは一種の苦痛でもあり、又それだけに一層亡き父への追憶を唆られずにはゐない。

父の病氣が喉頭癌と決定したのは、大正十五年の初めのことであつた。その少し前、私は或る事情から父との間に感情的なもつれを生じ、暫らく地方へ行つてゐたが、父の重病の報に接して蒼惶として歸京した。父は私の歸宅を非常に喜び、兩者の間の誤解は跡方もなく一掃されたけれども、その後父の病狀は遂に快方に向はず、その年の十一月八日、母や我々兄弟の熱心な看護を受けつゝ六十八年の生涯を終へた。

かう云ふ經緯があるだけに、父の死は私にとつて一種痛切な思ひ出となつてゐる。この八年

間、私は時の經つに從つて、次第に父に對する追慕の情の深まるのを覺えて來た。以前判らなかつた父の一面が近頃では漸く判るやうになり、その性格なども朧ろげながら理解できるやうになつた。これは私にとつて大きな喜びでなければならない。

今度父の傳記が我々遺族の手によつて編纂されるについて、私もまた子の一人として、父に關する記憶を少しばかり左に述べて見たいと思ふ。

父寅次郎は安政六年六月二十五日、渡瀬源四郎の七男として今の東京市牛込に生れた。當時は所謂幕末の動亂期にあたり、江戸市民の生活は極度の不安に脅かされてゐた時代である。かゝる激しい時世に生れながら、父の生立はかなり不運を極め、三歳の時に父親を、五歳の時に母親を失ひ、物心ついてからは兄の手一つで育てられたと云ふことである。かういふ孤獨な境遇と不安な空氣の中にあつて、幼い父は子供心にも自分の感情を抑制し、意志を鍛練する習慣を養はさせられた。後年父が世に示した一見頑なにまで思はれる冷靜寡默な性質は、この幼時の環境に影響を受けたものであることは、想像するに難くない。

明治九年札幌に農學校が設立されるや、父は進んでその第一期生となり橫濱から數百噸の小汽船に乘つて風波に飜弄されながら、遙々北海道へ渡つて行つた。その頃の札幌は市街とは名ばかりの、人家數百に滿たない一小邑で、東京から行くには先づ汽船で小樽まで行き、それから先

は馬に乘つて荒涼たる北海道の原野を渡つて行つたと云はれてゐる。從つて農學校の建物なども極めて粗末なバラック式のものであつたが、年若い父は廣大な自然の懷ろに抱かれて青年らしい理想に燃えながら、日夜孜々として學業に精勵した。この札幌時代に父が得た最も大きな收獲は彼の有名なクラーク先生から受けた精神的陶冶であつた。父はクラーク先生の感化によつて獨立不羈の精神を養ふと共に、熱心なクリスチヤンとなり、後にクラスメートの佐藤昌介男や大島正健博士や伊藤一隆氏、また一級下の內村鑑三、新渡戸稻造、宮部金吾の諸氏と共に札幌獨立教會を作つて、信仰の高揚につとめた。後年父が基督教的立場から各種の育英事業に參與し、又、終生神への信仰を捨てなかつた基督教徒としての素地は、この時に作られたものである。

明治十三年農學校を卒業すると同時に、父は義務奉職の規定に從つて開拓使御用係を拜命し、暫らく北海道にとゞまつて拓殖勸業の事務に從事してゐた。北海道に於て父が行つた主なる仕事は、北海道勸農協會の設立であつて、協會設立後は自から幹事となつて農村開拓のために盡し、また北海道全道に飛蝗の大群が發生した際には、同僚と共に農村各地を巡回してその驅除に功勞を顯した。この飛蝗事件は當時有名な話で、飛蝗の大群が襲來して來る時には一天ために暗くなるかと思はれ、農村兒童の中にはそのために窒息した者さへ生じ、農作物の被害など計り知れないものがあつたさうである。

間もなく明治十八年、時の農商務省管理局長安田定則氏に隨行を命ぜられて、ロンドンの發明品博覽會に差遣されることゝなつた。

ロンドン滯在中は主として博覽會事務を擔當し、傍ら文部省の依囑をうけて英國の農學校に關する調査視察にも當つた。

歸朝後、父はこれを機會に官界を退いて、もつと自由な立場から農業界のために盡したい意向であつたらしいが、博覽會當時の長官たる安田氏の熱心な懇請に動かされてその決心を飜へし、安田氏が茨城縣知事に轉ずると同時に茨城縣立中學校長に任ぜられて水戸に赴任し、更に明治二十一年には縣立水戸師範學校長に任ぜられ、學務課長も兼任して、縣の教育産業の發展に貢獻するところが尠くなかつた。

しかし父の面目が本當に仕事の上に發揮されるやうになつたのは、その翌年六月頃師範學校長を辭任した後に於てである。當時父は時の文部大臣や學務局長の懇切な勸告も却けて潔く野に下り、一個の市民渡瀨寅次郎に復つて、自己の理想に邁進する決心を固めたのである。

退官後父は大日本農會の特選幹事に選ばれ、更に農會學藝委員や常議員にも選出せられて、農界振興のために力を盡すところがあつたが、愈々明治二十五年十月、かねての宿望たる日本農業界の發展に資するための事業機關の設立を計畫し、赤坂溜池に東京興農園を創設して、これが獨

力經營に當ることゝなつた。父の精神と仕事とが完全に融合し、父がその希望や信念を最も自由に實行することの出來たのは、この興農園の仕事であつたらう。それだけに父としては、最もやり甲斐のある仕事だつたに違ひない。父は先づ種苗農具の改良を志し、蔬菜や花卉の優良種を旺に海外から輸入して、その普及を圖つた。その普及手段として父が初めて試みたのが、現在廣く行はれてゐる通信販賣の方法である。又、農具の輸入改善にも力を盡し、今日見るやうな改良農具製造の基礎を開いた。爾來父は死に至るまで興農園の經營發展のために精力を傾注して倦むことを知らなかつた。現在私自身が繼承してゐる澁谷の東京興農園がそれである。

しかし、精力的だつた父の對象は、必ずしも興農園の事業だけにとゞまらなかつた。官界を去つてからも父は依然として教育事業に關心を持ち、進んでミツション・スクールの設立經營(東洋英和・東京學院等)にも當れば、又Y・M・C・Aの理事として青年子弟の指導にも力を盡した。殊に父が強い關心を持つてゐたのは農業教育であつて、生前にあつては東京高等農學校(後に農業大學となる)の評議員としてその經營に努力し、また死に際しては、日頃の抱負たる基督教を精神的基礎とするデンマーク式國民高等學校の設立を、自己の遺産を以て實現するやう我々に遺言した。

父がこの遺言を行つた時の光景を、私は今でも忘れることが出來ない。當時父は氣管切開の手術を受けてゐたため、口を利く自由を全く奪はれ、用件は凡て筆談で濟ませることにしてゐた。

愈々死が迫つた時、父は私初め一同を枕元に招いて、顫へる指先で掌に何事かを書いて示した。父の肉體は既に衰弱の極に達してゐたので、父が傳へやうとする事柄を讀み取ることは容易でなかつた。しかし漸くその意味を汲み取り得た時、私は父が最後の瞬間まで自己の理想に忠實であらうとする態度に打たれて、思はず心の引きしまるのを覺えた。

父の遺言は後に我々遺族の手により、靜岡縣田方郡西浦村久連の久連國民高等學校となつて實現し、財團法人興農學園によつて經營されてゐる。この自由で質朴な鄉土的精神に基いた國民高等學校の組織が、將來多少とも我が國の農村敎化の上に役立つとすれば、それは凡て父の功績であり、父の靈も地下に瞑することだらうと思ふ。

事業の上でそれほど信念に忠實だつた理想家肌の父は、家庭に於てはまた極めて嚴格な父親であつた。一言にして盡せば父の家庭敎育は萬事理性的、道德的であつて所謂子の愛に溺れるやうな風は微塵もなかつた。父の知人で私達の家庭をよく知つてゐる或る人が嘗つて「渡瀨君のやり方はスパルタン・エヂュケーションだ」と云つたことによつてもうなづかれるであらう。從つて子供達の側から云ふと、畏敬の念を以て父を見ることは出來ても、その懷ろに抱かれるやうな親愛の情を感ずることは稀であつた。殊に十人兄弟の長男として、父の最も嚴格な指導を受けた私などは、屢〻「親爺は頑固で困る」といふ不滿をさへ感じたものである。實際、冷靜で意志的

で、自信の強かつた父は、一旦正しいと信じたことに對しては決して自說を枉げない強情な一面があつた。だが、この點がまた父をしてあれだけ精力的に自己の信ずる道に邁進せしめ、幾つかの業績を殘さしめたとも云へるのである。

この剛直な一面は、父の公人としての活動の上にもかなりはつきりと現れてゐる。例へば赤坂時代に父は屢〻市會議員や市參事會員や區會議員に當選し、その間區會議長にも選ばれたことがあつたけれども、父は決して多數議員を操縱して政治的手腕を揮ふやうな政治家タイプの人ではなく、寧ろ單身硬論を吐いて屈しない、所謂正義派議員として通つてゐた。

しかし、かうした父の性格も、晩年には次第に角がとれ、かなり圓滿な人格を形成するやうになつた。從つて年老つてからの子供である下の弟妹達が父から受けた印象は、恐らく私のそれとは大分異なるものがあつたかも知れない。それに私は長男であつたから、父は自分の後繼者として最も私に期待をかけ、そのために餘計嚴格な態度を以て臨んだやうに思はれる。現に日頃から米國大統領のガーフイールド(James Ablum Garfield)を尊敬してゐた父は、私の生れた日が十一月二十日で、ガーフイールドのそれと一日違ひであるのを喜んで(ガーフイールドは一八三一年十一月十九日生)、雅の字をとつて雅太郎と命名し、心ひそかに私の將來に期待するところがあつたらしい。それを私は事毎に父の期待を裏切り、父の心を惱ませたことは全く慚愧に堪へな

いわけで、一と頃父に對して抱いた不滿や反感の如きも、要するに父の心意を理解し得なかつた私自身の不明を示すものに外ならないと、今ではしみ〴〵感じてゐる。この文の冒頭に一寸述べておいた父の晩年に於ける私との間の感情的疎隔の如きも、後から考へると決して父の眞情ではなく、當時父の周圍に、我々父子の間を離間せしめるやうな空氣が醸成せられてゐたためであることが判る。その證據に父の重態を聞いて私が歸京した時、父は私の手を執つて、涙を流して喜んでくれた。私もまた、自分の不用意から老年の父に心勞をかけたことを心から詫び、父の許を乞ふた。この出來事は父の死と結び合せて考へる時、私には悲しい思ひ出の一つでなければならない。たゞ短い期間とは云へ、その後父が息を引きとるまで日夜枕頭にあつて看護することの出來たのを、せめてもの仕合せだと思つてゐる。

以上思ひ出すまゝに順序もなく、父に關する感想を述べて見たが、要するに父の性格はかなり特異なタイプに屬し、內に多分の野心や熱情を包みながら、表面はあくまで冷靜摯實で、その行動は直進的であつた。それ故、周圍のものからは時に頑固で融通の利かない人間のやうに思はれたけれども、內實はなか〳〵情味に富み、殊に晩年には隨分知人や後輩の面倒を見たらしい。たゞそれを露骨に示すことを父の冷靜な理性が許さなかつたゞけである。子供等に對する態度も同樣で、父は決して愛情に欠けてゐたのではなく、子供等をしてそれに狎れしめることを警戒

し、父一流の理想に從つて我々を訓練しようとしたに外ならなかつた。さうした父の隱れたる愛情を理解し得ず、また理解してもそれに充分報ゆることの出來なかつた私などはまことに不肖の子といふ外なく、かへすがへすも遺憾の極みである。

終りに、この本は、最初我々遺族の亡父に對する追憶の記念として、プランされたものであるが、それがかゝる體裁を具へて出來上るまでには、父の舊友である佐藤男爵、大島博士その他の方々の御指導御援助に俟つところが尠くなかつた。それらの方々の御厚情に對して深く御禮申し上げる次第である。

思ひ出づるまゝに

渡瀨喜美子

私は明治四十四年渡瀨家に嫁して以來十六年の長い間、父上の謦咳に接して來ましたので、その思ひ出は洵に盡くるところを知らない程でございます。父上にお別れいたしましたのも、つい、この間のことのやうに思はれますのに、もう九回目の御命日を迎へやうとしてをります。月日の流れの早いことが、今更ながらつく〴〵感じられます。

父上のことを思ひ出す度に、いつも、あの時はあゝすればよかつた、この時はかうもすればなど

と、今にかへらぬことながら、何一つお盡しすることの出來なかつた私の不束さを悔いてをります。派手なこと、贅澤なことが非常にお嫌ひで、いつも地味で質素だつた父上は、又、一面非常に嚴格に見えましたが、他の半面は極めて親切なやさしい方でした。他人に對してはもとより、親近のものに對しても誠に丁寧で、禮儀正しい方でした。父上の病氣は喉頭癌と云ふ難病でございまして、殊に手術いたしましてからは、全く口をきくことが出來ませんので、用件はすべて、筆談でしなければならないやうな不自由さでござゐましたが、さういふやうなお體になられましてからも、我々が何か用事をいたしましたり、喰べ物を運んで參りましたりした場合には、それが私どもも身內のものでありましても、又看護婦や女中でありましても、必ず一々頭を下げて感謝の意を表されました。あのやうに苦しい難儀な御病氣でありながら、不機嫌な顏一つなさらず、誰に對しても一々お辭儀をなされるのを見ますと、勿體ないやら、嬉しいやらで、何とかして少しでも苦痛を輕くして差し上げたいと思つて、努力せずにはをられませんでした。看護婦たちも、こんなやさしい御病人は珍らしいと噂してゐた程でございました。店のものや、女中たちに落度がござゐました場合でも、決して怒つたりなどされたことはなく、やさしく諭して、よく言ひきかせるだけでございました。一體に、喜怒哀樂を餘り顏に出さない、隨分と我慢強い方でありましたので、言ひたいことも言はずに堪へてをられたのでござゐませう。病氣のうちでも一番苦しい、不

自由な、あのやうな御病氣に罹られて、さぞ御難儀なことでござゐましたらうが、修養と信仰のお蔭とでも申しませうか、御臨終は少しのお苦しみもなく、眠るが如く、安らかなものでござゐました。

大正十五年十一月八日――その年はいつになく早々と冬の訪れた年で、十一月と云へばまだ秋の終りでさのみ寒さを覺へる頃ではござゐませんのに、どうしたものか毎日冬のさ中を思はせるやうな寒さが續いてをりました。その日も朝から曇つた空が低く垂れて、吐く息も白々と淋しく見えました。この夜八時、胸をしめつけるやうな悲しみの刻は來て、人々の嗚咽の裡に父上の御靈は靜かに、安らかに、地上を去つて天上に昇つて行かれました。

謹嚴なりし風格

小坂順造

私は明治四十一年に、渡瀬家の長女花子と結婚して以來、大正十五年にお亡くなりになるまで、永い間のおつきあひを致しましたから、御逝去の後、相當長い年月を經てをりますにも拘らず、まだどこかにをられるやうに思はれてなりません。

只今渡瀬様のことを書かうと思つても、端然として座せらるゝ老紳士が眸裏に浮び出づる外

にこれといふ思ひ出もありませんが、これは、年齢の相違、職業の相違、趣味の相違等により、共通の問題が少かつたことゝ、又一つには、渡瀬様は極めて控へ目で、眞面目な方でしたから、自然脫線といふことがなかつたため、人に面白いと思はれるやうな所謂逸話がなかつたからであります。

渡瀬様は話し好きでした。しかも話し上手といふよりも聞き上手でした。低い聲で、私の關係方面の事をよく訊ねられました。殊に政變でもあつた場合には、喜んで話を聞きに來られました。自然私も調子に乘つてお話をいたしましたが、話の最中に氣がついて見ると、渡瀬様は何時も端然として座つてをられ少しも、體が崩れてをりません。不圖自分の不行儀に氣がつき居住ひを正した事が度々でした。渡瀬様は何時も粗服を纏つてをられましたが、その端然たる態度と、嚴格なる容貌とのため、きちんとして非常に立派でした。

渡瀬様は、自分のことは皆自分でなさいました。身の廻りの事のみならず、仕事の方も同樣でありましたため、非常に多忙でした。私は「追々老年にもならるゝこと故、人手を增して體をやすめられては如何」と勸めたことがありますが、働くことが道樂で、趣味であつた渡瀬様は「さうしませう」と言はれただけで、仲々實行はされませんでした。私も渡瀬様の歿後に、その仕事の一部に携はりましたが、その時はじめて、その仕事は容易なものでなく、大きな努力と微細な注意によつてのみ、成績を擧げ得るものであることが解りました。渡瀬様のやうに、すべて自分で働かれた

ればこそ、この仕事で十人の子女を立派に仕立て、なほその上相當の資産を殘されたのであると、つく〴〵感じたのであります。

渡瀬様とお話をして、或る場合に私が無遠慮に、渡瀬様の思ふてをらるゝことゝ反對の意見を述べることがあると、「まあ、考へませう」とか、或る時の如きは「何れ又」とか言つてその儘立つてしまはれたことなどがありますが、つい「そんなことはない」と云ひ爭はれたことはありません。態度は極く物靜かで、丁寧でしたが、意志は非常に强硬で、自身の信念によつてのみ動き、決して他人の意見によつて左右されることはありませんでした。この點は渡瀬様の長所であり、又短所であつたと思ひます。私は後年各方面の知名の人士に接し、この人は、と思ふ程の人も餘り見掛けません內に、渡瀬様のやうな、學殖もあり人物の確固たる方が、大事業の中樞に立つてをられなかつたのが不思議に思はれましたが、それは、苟くも人に合槌をうたぬといふこの性格が然らしめたものと思はれます。

渡瀬様は晩年相州秋谷に別莊を構へ、時々そこへ行かれました。私も子供のために同地に家を持つてをりましたから、同地では殊に繁々往復いたしました。その頃咽喉に故障があつて、聲を出さるゝことが餘程苦しいやうに見受けましたが、矢張り話し上手で、聞き上手でした。又時々御一緒に散歩をしたことがありますが、私の不注意の間に、餘程遲れてしまはるゝことがあり

ました。それでも、徐かに歩いて下さいとか、待つて下さいとか、云はれたことはありませんでした。後になつて考へるのに、その頃は餘程病勢が進んでゐて、幾分上り道の所は疲勞が激しかつたため、歩行が遲れたことゝ思はれますが、自分では決して苦痛を訴へられませんでしたため、他人には解らなかつたのです。臨終近くなつても我慢と辛棒で、苦しい病氣に勝つてをられました。私どもが御面會をする折にはいつもにこやかに叩頭せられ、必ず筆談でその時折の事を聞かれまして、つとめて打寛がるゝ風を示されましたことは、誠にお痛はしい限りで、今に忘るゝことが出來ません。

その面影を偲びて

小坂花子

父上がおなくなりになつて最早十年近くになりますが、私の一番好きな方とて、私の心の中にいつも〳〵にこ〳〵としてをられます。私の小學校時代に友達があなたのお父様はこわい方ね、と度々申されました。私はこわかつた經驗を持たぬためかどうもさうは思へませんでした。父上は非常に多忙で、自分で働かれるので、平常は母上も私どももゆつくり父に接する折はありませんでした。しかし、學校の夏休みは必ず一家族のため御自分から先に立つて萬事お世話下

され、良いパ、さんになつて海水浴に出かけられましたが、初めのうちは手をもち體をさゝへて泳がせて下さるのですが、そのうちヒヨイと手をはなされてあとは自分で泳ぐやうに仕向けられました。私のやうな氣のよわいものはその都度あはてゝ幾度水にもぐりこんだか知れません。しかし、そのお蔭で水泳も上達して十五六歳の頃には春惠さんと二人とも、葉山などでかなり得意の見得を切ることが出來るやうになつてゐました。

質素儉約は父上の生活の標語で、又自身實行されました。正直で人の機嫌とりが大きらひでした。折にふれて、自分も當初官吏になつたあのまゝ、今日まで辛抱してゐたら相當な役人になつてゐたらうと申されました。たしか私の生まれた頃に水戸の中學校長と師範學校長とを勤めてをられ、その後三四年でおやめになつたさうです。後年故濱尾子爵に輕井澤でお目にかゝりました時、父が青年時代には目立つた人材であつたといふお話を承はりました。當時のお話を詳しく筆記しなかつたことを殘念に思ひます。

子供たちの教育は大體母任せのやうでしたが、私の女學校入學の頃、女子大學が出來た當初でしたからこれへ入學することに話が決つてをりましたところ、歴史を持つた女學校の方がよいとの父の意見で、母の出身校たる女子學院へ入學することに變更したのでした。

父の母君は賢夫人の譽れ高きお方であつたさうです。父の父君のことは、父上幼少の折にな

くなられたとかで餘り聞かされたことはありませんが、母君のことは折々お話しになられました。そのお話によれば父が七八歳の頃沼津に假住居の折、朝日の昇る頃學問所に通ふ幼い父と連れ立つて沼津の御城下まで來られ、それから先は一人で行く父の後姿が見えなくなるまで堤の上に立つて見送つてをられたといふことです。又、時には學問所を訪れて隣室にあつて講義を筆記して歸られたこともあるさうです。このやうに育てられた父は勉强家で母思ひの方だつたのです。後年父が沼津に近き久連に農園を持つたのも、その行きつ戻りつに、沼津に安らかに眠らるゝ母君の墓參に行くのが願ひの一つだつたのでせう。

晩年御病氣のためお咽喉が大分お悪くなつてからも、相變らず朝から晩まで働き通しでしたが、その間時折夕方など突然宅の玄關にお立寄りになつて、「一寸子供を見に來た。あの子は、この子は」と、いつも安否を尋ねられました。そして少しでも病氣をしてゐると、それどころではない多忙な母上をおよこし下されて、何くれとお世話下さつたことがしば〳〵でした。

私が父と爭ひましたことは、いつもお體を大切においとひ下さらないことについてゞした。一例を申せば、沼津へ行かれる時はいつも三等汽車でお辨當は汽車のお辨當でした。よく今日の辨當が悪かつたため工合がわるい、頭痛がすると仰有つて、お歸りになつてからお苦しみのことが何度あつたかわかりませんでしたから隨分お案じいたしました。今考へれば無資產より

出發して十人の子供たちをそれ〴〵人並にお育てになり、なほ相當の資產をお殘しになつたのですから並大抵のことではなかつたでせう。人の厄介にならぬやうに御自分の儉約を實行して處世の敎訓を子女の手本にお示しになつたのです。それを思ふと有難いやら申譯がないやらで涙がこぼれることでございます。

御臨終の折にも涙一滴もなく、苦しいお言葉もなく、たゞ「天に行く、天に行く」と指で掌に書かれました。これも私どもにたえず祈れと御敎訓をお與へになつたのです。弱い私に時々迷信の如きいざなひの來る時、いつも私の心に父がよみがへつて、あの「いけない」といふお言葉が私を導いて下さいます。唯今輕井澤にをりますが、父上が晩年この地に土地を求め、家を建てられたにもかゝはらず、とう〳〵御覽になることも出來ず逝かれましたことは誠に殘念でした。父上は「自分はもう行けぬが母さんが行つて住へばよろしい、これから一人になられるからよく注意してあげておくれ」と仰有いました。今は母上が五人の子供とそのよきお嫁樣方に守られて、樂しき日夜を送つてをられることを父上はさぞ御滿足のことゝ存じます。

御在世中私が父のなされることのうち唯一つ嫌だつたことは何かにつけて聖書を讀まれることでした。又時々讃美歌を歌へと申されることでした。父上は「いつくしみ深き主の手にすがりてこの世の旅路をあゆむぞうれしき」といふ讃美歌などお好きでした。しかし今となつて

自分が年をとつて見ると、やはり精神も肉體も主のおん恵みによらねば一日たりとも滿足に元氣に過されぬことを體驗して、これも父上のおん足跡に倣ふつもりです。

父上が植え付けて下さつたヒマラヤ杉は今私どもの家の屋根を越して高く〳〵しげつてゐます。かやの木は立派にその幹や枝をのばしてゐます。父上が永年御苦心になつた久連の農園に御遺言によりて播かれたる一粒の種は漸く若木となつて幹をのばしてまゐります。この地に集まる若人の胸に父の心が宿りましたならば、父が六十八年の生涯は永久に榮えて行くことになりませう。安らかに在ますやう祈り續けます。

亡き父上のことども

加藤春恵

私は娘時代ピアノが好きで、暇さへあれば彈くのを樂しみにしてゐました。又音樂會にもよく聽きに行きました。ところが父上はこれが餘りお氣に入らないらしく、度々私に向つて「お前は特別ピアノが好きだが、ピアノの勉強ばかりしてゐてはいけない、もう少し學問の勉強をするなり、家事を手傳ふなりしなさい」と云はれました。そこで私は、遊んでゐると思はれないやうに弟を背負つてそのお守をしながらピアノを彈いたことがありました。又お小遣ひを貯めては

音樂會の切符を買つたものでした。今となつては、それも、これも、皆懐しい思ひ出の種です。

其頃父上は自分の店の仕事の外に市の名譽職をしてをられましたので忙しく働かれました。それでも夜分暇があれば聖書を繙いたり、古新聞に習字をしたり、常に修養を忘れられませんでした。ひどく疲れた晩は寄席に出かけられることもありましたが、このくらゐが父上のお慰みでしたらう。將棋は好きで、洋行の時船の中で競技をしたことなどを話されたことがありますが、家では稀に食後など、子供相手になさるくらゐなものでした。又、夕食後暫くの間小さな子供たちとふざけて遊び相手をされることもありました。

當時父上は、既に相當の產をなしてをられたやうですが、隨分地味で質素でした。派手なことや贅澤なことは嫌ひで、小成に安んじて逸樂を求めるのを惡んでゐたやうです。しかし、滋養の多い食事を攝るとか、夏、海水浴場に子供を避暑させるとか云ふことは必要と考へられたやうです。そして私達の健康については隨分注意して下さいました。私は「姿勢が惡い、背骨が曲つてゐる」とて度々直されたものです。

私が結婚して長女を生んだ年の夏のことでした。渡瀬家では勝浦に借家してゐて、私にも來るやうにと云はれましたので、子供を連れて半月許り泊めて戴いたことがあります。往く時に父上が同行して下さいましたが、汽車の中で、私が新聞を讀んでゐると、新聞はいつでも讀める、そ

れよりもよく外を眺めて、初めて旅行する地方の地勢や産業を觀察した方が爲になる」と云はれたことを覺えてをります。これは父上が咽喉の御病氣に罹られる前で、明治四十四年頃だつたと記憶します。

この頃までの父上は朝早く起きて一日中働き續けられました。そして勤勉力行と質素とを信條として子女に範を示されました。しかし子供の人格も相當に認めて、飽まで强制すると云ふ程にはなさらなかつたやうです。

以上は私が渡瀬家にあつた時代の記憶ですが、私が嫁いでから感じたことは、父上は他人に對して甚だ丁寧で禮儀正しかつたといふことです。私自身、嫁に行つてから決して呼び捨てにされたことがありません。又實家へ行つた時、父上の肩を揉んであげることがありましたが、その時も、父上は遠慮して、すぐに「もうよろしい、お前も少し揉んであげやう」と云はれる程でした。又、他人に話をさせることが上手で、田舍の人たちともよく相手になつてその話に興じ、これらの人々からでも何か新しい智識を求めることを忘れぬと云ふ態度でありました。

久連學園と父

田中次郎

亡父は晩年宿痾の喉頭癌のため、兎角健康が勝れず、しかも自分は眞に不治の病たるを知らずして、今一度健康を回復して事業方面にも活動し、又一面何か國家社會の利益になることに盡したいと云ふ熾烈な希望を抱き、健康回復のためには隨分努力してゐたやうである。殊に、亡父が自己の生涯を通じて關係してゐた農業方面に於て、社會の爲になることを試みたいと云ふ考を持ち、常にこの方面に意を用ひてゐたものゝ如くである。

私は亡父の病が不治のものであることを知つたので、後々のことを思ひ、渡瀬家の事業及び財産等を整理して置くことの必要を痛感し、亡父に對して種々の提案をなすと共に將來の事に關して相談したのである。その時、亡父は

「目下の日本の狀態としては、農民の教育——殊に精神教育及び實際に卽した農業教育を行ふことが急務であるから、財産の一部分をその方面に使ひたい」

と云ふことを洩らしたから、私は

「それはどの程度の規模のものですか」

と訊ねたところ

「自分の健康が許すなら、自分の手で三十萬圓位出し、知己友人其他の人々を說いて、合計百萬圓程度の金を作り、自らその學校を經營し、且つ教育の任に當つて見たいのである」

と云ふことであり、且つ「その學校は恰度丁抹の國民高等學校の如きもので、特に基督教を基礎としたものではなくてはならぬ」と云つてゐた。

その後病勢愈〻進み、氣管切開の手術を受け、病床に親しむやうになつてから、ラヂオにより平林廣人氏の丁抹國民高等學校の話を聞き、一層この計畫の實現を期待し、青山學院の今井牧師を招いて同氏の意見を聞いたりしてゐた。死去の數日前、病益〻重く、危篤の狀態に陷つた時、我々家族の者數名が枕頭に侍してゐると亡父は突然病床に起き直つて、發聲不能のため、指頭で遺言樣のことを書き述べた。その中に「自分は最早再起の見込なく、これから天の父の許に行かうと思ふが、遺族は、余がかね〴〵希望せる學校を建て、その實現を圖るやうにせよ」と云ふことを書いて示したのである。この遺言が今日財團法人興農學園及び久連國民高等學校の基礎となつたのである。

興農學園の發達經過については、本文に詳しいからこゝには述べないが、「興農學園」の名稱は植村澄三郎氏の發案で、故人が最も力を注いだ興農園の事業に因み、且つ農を興す意味に於て、創立委員の間に決定を見たのである。

興農學園建設の候補地としては、栃木縣下の官林開墾拂下地、伊豆天城山方面、小田原附近、千葉縣某所、東京府下小田急沿線の一部等、多々あり、平林初代興農學園長―平林氏は持地エイ子女史

の紹介により面識を得られた内村鑑三氏の推薦によつて校長に就任された人である―を初め、創立委員等が實地踏査に赴いたが、何れも適當と認められず、一方、財團法人設立の件も數度に亙つて願書を提出したが不備の點があつて許可に至らず、かくて約一箇年を經過した。

その内に學園開設の土地として、當時東京興農園の農場であつた靜岡縣田方郡西浦村の久連が適當ではないかと云ふ案が出た。同農場は、亡父が明治三十七年に購入したものであつて、面積約十町歩、當初山林であつたのを開墾して柑橘を植え、又新種植物の育成培養、並に採種場として用ひられてゐたもので、地味肥沃、氣候溫暖、風光絶佳、故人の殊の外愛好した土地である。兎に角、開墾から始めて種苗を植えつけ、年々苦心して農場を開發し、二十年を經て漸く相當の農場に育て上げて來たのであるから、亡父は殊の外この地に關心を持ち、特別の支障のない限り、毎月一回はこの地に來て、自ら勞働服を纏ひ、剪定も行へば移植、採種、播種等も手づから行ひ、數日間を働きながら都會の疲勞を休めるのを常としたのである。

自分等も父の生前、時々この地で數日間を父と共に過したことがあるが、今でも久連へ行く度毎に、亡父の句を隨所に感ずるやうな親しみの深い土地である。斯の如く故人と非常に關係の深い土地を學園のために用ふると云ふことは、最も意義が深いし、且又、從來の候補地に比して

一、風光絶佳なること

一、既に農場としての態をなしてをり、開墾等のために多くの費用と時日とを要しないこと

一、既に收益を擧げてをり、將來の經營の如何によつては、更に增收を擧げ、學校經營の資を輔くるを得ること

等の有利な點があるので、平林氏を初め、內村鑑三氏其他の創立委員が同地を實際に視察され、こゝにその適當の土地なることを認められたのである。

かくて昭和三年十月十日、創立委員會を開いて各種事項を決議し、平林氏は直ちに久連に移つて同地に居住し、準備を進めた。これより先同二年十二月頃宇都宮高等農林學校出身で、當時九州帝國大學農學部助手として勤務中だつた大谷英一氏がこの事業を傳へ聞き、援助の意味に於て上京され、平林氏と共に創立事務に當つてをられたが、同氏も亦平林氏と共に久連に赴かれ、如上兩氏の熱心なる努力によつて、こゝに初めて學園開校の仕事が緒についたのである。

生徒は、昭和三年十二月頃から約十名入園し、平林大谷兩氏の薰育をうけてゐたが、昭和六年二月、第三回の終了式を行ふまで年々十五名位の生徒を教育してゐた。

然るに、昭和五年末、學園長として創立以來非常な盡力をされた平林氏は都合によつて辭任されることとなり、その後任としては、從來平林氏と共に熱心に生徒を指導されてゐた大谷氏を煩はすこととなつた。且つ、これを機會に學園は一時教育の方を中止し、その間大谷氏に獨逸及び

丁抹等の國民高等學校教育の狀況を實際に視察見學して戴くこととし、昭和六年四月、大谷氏は渡歐された。昭和七年八月、大谷氏は豐富なる智嚢と實際上の經驗と將來に對する大なる希望とを以て歸朝され、翌八年春から興農學園長として再び學園を開き、今日に及んでゐるのである。

一方、財團法人に關しては、種々なる障害あり、靜岡縣廳に提出した願書も屢〻却下された。これには縣當局の誤解もあつて數年間遲々として運ばず、關係者一同困つてゐたが、小坂順造、加藤成一兩氏の非常な御努力と大谷氏歸朝後の御盡力により、昭和八年二月、遂に靜岡縣廳を經て文部省から正式に認可され、財團法人設立後、財團の方を「興農學園」と稱し、學校の方を「久連國民高等學校」と稱することとなつた。

久連國民高等學校は、今まだ搖籃時代にあるが、希望に充ち滿ちて、健全に生ひ立ちつゝある。天父並びに亡父の加護の下に、學園の前途の益々祝福されんことを祈つて已まない次第である。

追慕

渡瀨三郎

子として父を愛し、父を慕ふことは當然のことであるが、いよ〳〵父の臨終が近づいて、この世の訣別（わかれ）を告げねばならぬことを覺つた時は、かねて覺悟はしてゐたものゝ、今更ながら辛く、悲し

く、胸はり裂くるばかりの思ひであつた。私は、今なほその時の有様や、父の面影が目の前に浮び出て忘れることが出來ない。父はその時既に覺悟してゐたことだし、信仰も強かつたので、泰然自若として、安らかな顏貌をしてゐた。この顏が父の死の直後から今日まで、私の身の上に何か重大な出來事が起る度毎に私の腦裏に浮んで、不思議な力を與へ、私を勵ましてくれるのである。何となく、父の靈が私たちを守り、導いて下さるのではないかと思はれることがよくある。

私は、父が三十七才の時に生れ、六十八才でこの世を去るまで三十有二年間、他の兄弟たちと違つて殆んど家を離れず、父母の膝下にあつて起居を共にしたので、從つて父の指導と薰陶と、そして母の愛育と溫情とを、直接に受ける機會が多かつた。隨つて他の兄弟姉妹よりも餘計に世話も燒かせ、心配もかけたこと勿論であるが、しかし、それだけに私をよく理解し、思ふ存分訓練を與へ、時には、あの、近づきにくいやうな父が、非常に打ち解けた話をしてくれたことを憶ふ時、父に對する追憶の情は殊に切である。「父上が今生きてゐて下されば」——折に觸れ、事に當つて、私は、幾度かう叫んだことであらう。ほんとうに懷しく、又、慕はしい父であつた。

父は私にとつて、血肉を分けた親であるとともに、又、慈愛溢るゝばかりの恩師であつた。私は何といふ幸福者であつたらう。家にあつて食卓を圍む時、父に隨つて庭を逍遙する時、杖を曳いてともに郊外散步を試みる時、又、屢〻伊豆の農場に伴はれた時——いつも父は、私の手をとらん

ばかりに、いろ〳〵のことを教へこんでくれたのであつた。東京興農園の仕事で、私の關係してゐたことについては、勿論、隨分丁寧懇切に指導してくれたし、又、私が勤務してゐた智利硝石普及會へ英文の報告書を提出する時などは、手づから字句の修正をしてくれるなど、いはゞ、私の勉強の手傳ひまでしてくれたのである。

父の平素の氣質素行を知るものは、口々に彼が謹直嚴格なる人格者であり、鞏固なる意志の持主であり、忍耐力強き勉強家であつたことを云ふ。勉強家——あらゆる意味における勉強家といふ語は、全く彼に相應しい語である。實際、努力と勉強と活動とが、彼の日常生活を表すすべてであつた。仕事から仕事へ——忙しい中にも憩ふ暇を持たうとせず、手を休めてぼんやりしてゐる父を、私は見たことがない。ちよつとした時間の餘裕にも、必ず書見か書きもの、時には腦を休めるのだ、などと云つて、習字をしてゐた。勤勉と努力の生涯を送つて來た父としては、時間を空費するといふことが、罪惡のやうに思へたに違ひない。「自分に與へられた時間を空費しない」といふことをモツトーとして自ら實行し、又、人にも教へた。父はよく、自分は死ぬまで仕事をする。そして社會に貢獻したい、といふ意味のことを云つてゐた。年を老つてからも、世間によくある隱居の氣分などは微塵もなく、孜々として倦むところを知らなかつた。私もそれが大賛成であつた。出來るだけ永く、父が壯健で、元氣でゐて欲しかつた。父も勿論その積りで、あの重病

の中にも、常に回春の希望を捨てなかつた。

家庭における父は、極く生眞面目な、物堅い、從つて教訓的な一面、非常に親切で、慈愛に富み、我々にとつて優しいPapaであつた。よく夕食後など子供たちと一緒になつて、賑やかに戯れ遊ぶことを樂しみにしてゐた。"Keep Smiling"と紙に書いて壁に張りつけ、我が家の處世訓としたことなどは、理想家としての父を偲ぶよき思ひ出である。私もよく叱られたが、後では必ず優しく笑つて、諭し訓へられたので、決して短氣や反感などを起す氣にならず、むしろ、いまだにその訓誡が感謝の種となつてゐる。

大正十三年一月、父は私を伴つて、香港、廣東方面へ視察旅行に出かけ、歸途、臺灣の興農園農場へ赴いたことがあつた。それは、前年の暮、痔の手術をうけた父が、その豫後の保養に海上旅行を選んだのであるが、傍ら、私に、是非一度臺灣農場を見せてをいて、いろ〳〵引繼的に教へこまうとしたのだといふことが後で判つた。その頃から、父はぼつ〳〵死後の準備をしてゐたとも思はれる。旅行中の父は、言葉の端々から察しても、妙に淋しげで、かなり弱々しい氣持を抱いてゐるやうだつた。再びこの地へ來られるかどうか判らない、といふことも云つた。事務上の引繼ぎのやうな話も出て、死後の希望を述べたこともあつた。又今後に處する方針について教訓を垂れる時の眼には眞劍な色が現れてゐた——あの、強氣な、思慮の深い、滅多にその心情を打明けたこ

とのない父が、かうした弱い半面を示したのは、年を老つてゐたせゐもあつたらうし、又、健康が思はしくなかつたせゐもあつたらうが、それよりも何か豫感めいたものがあつたらしい。その時は氣がつかなかつたが、今にして父の暗い氣持に想ひ到るとき、私は涙なしにはゐられない。父の言葉の通り、父はそれきり臺灣へ行く機會もなく、それから二年十箇月の後に歿したのである。

父上への感謝

相田優子

追憶と思慕のうちに年を重ね、御昇天の後、最早十とせに近い月日を過ごしました。父上の思ひ出は、それからそれへと數限りなく次々に浮び出て、何から書いてよいか判りません。幼年時代、少女時代、結婚後、と色々のことを思ひ出すにつけても、私どもが唯今安らかに日々を送つてをられるのは、全く父上のお蔭であるといふことを、泌々考へずにはをられません。父上の溫いお心に對する感謝は、病める時も、健やかな時も、絶えず私の心の裡に往來してをります。今この感謝の念を文字に綴らうと思ひましても、私の拙筆ではとても表すことは出來ません。言葉に述べることさへも難しいかと思はれます。

父上を憶ふ時、いつも考へることは、成人するまでの御愛育、嫁いでからの御溫情、又おかくれに

なつて後までの御厚志でございます。それを思ふと、御存生中に御恩報じの出來なかつたことが殘念でなりません。けれども今の私としては、七人の幼い子供たちを立派に成人させることが何よりの報恩の途と、それのみを念じてをります。

追憶斷片

渡瀨昌勝

浪花節の好きだつたパヽさん

淺草公園の六區は折柄の祭日の人出で雜沓してゐた。眞黒な外套に中世紀の僧侶のやうな威嚴をつくつたパヽさんと、學習院の制服を着て小ぢんまりと氣取つたぼくと成ちやんとは、右に左に繪看板を見上げながら歩いてゐた。——震災前の或る淺い春のことであつた。

ぼくらは、活動寫眞は前にも見たことがある、しかし淺草は初めてだつた。今日はいよ〳〵活動の本場へ來て、うんと活動が見られるぞ、と小さい胸をときめかしてゐた。それなのに、ずんずん先に立つて歩いてゆくパヽさんの後をついて行くと、浪花節の寄席の前で止つた。パヽさんは

「浪花節といふものを聞かせてやらう」

と、勘からず不満だつたぼくらの意中も無視して頗る上機嫌で入つて行つた。ぼくらも仕方なしについて入つた。

パヽさんが浪花節が好きだといふことは知つてゐた。よく晩食の後で、

「今日は道玄坂のバナヽの安賣を素見すかな、それとも重友にしやうかな」

などゝ云つては二山亭へ出掛けて行つたものだつた。次郎兄さんや三郎兄さんはその感化で、浪花節の口眞似を盛にやつた時代もあるさうだ。しかし、ぼくらの物心ついた頃は、賢兄達は既に西洋音樂に轉向してゐて、國粹浪曲なんかと輕蔑してゐたので、勢ひぼくらもその影響を受けてゐたし、浪花節など勿論聞いたこともないので興味など少しもなかつた。少くとも今日は折角淺草へ來たのに、活動を見ないで浪花節を聞くなんて到底我慢がならなかつた。最初の内こそいくらか好奇心で聞いてゐたが、やがて飽きて來てパヽさんの袖を引張り始めた。パヽさんは、これからだん〳〵虎丸とか樂遊とかのスターが出て來るので名殘り惜しさうだつたが、それでも不精々々子供達に引張られて外へ出た。

「さあ、今度は活動へ行かう」

といふパヽさんの言葉に、ぼくらはホツとして、吸ひこんだ炭酸瓦斯を明るい春の空氣の中へ吐き出した。辨天池の周りは大變な人だ。

ぼくらは今度は先に立つて歩いた。今度はぼくらが選ぶんだぞ、どこにしやう、さうだ、こゝがいゝ。エス・ハートだ。パパさんを引張つて來て電氣館の繪看板を指す。鐵道線路に沿つてカウボーイが勇ましくも疾驅してゐる。ウヰリアム・エス・ハート主演「鐵路の狼」と書いてある。ぼくらは嬉しくて胸がどき〳〵した。繪を見ただけでその勇ましさに魅了されてしまつたのだ。パパさんはよし〳〵と頷いて、切符を買つた。入場らうとすると下足番が「もし〳〵この坊ちやんの切符は子供のぢやいけませんよ、そちらの坊ちやんはいゝけど」といふ。パパさんはにこにこしながら

「兩方ともまだ子供だよ」

といふと仕様がないなあ、まあいゝや」と、二階を仰いで「エヽ一等さん御案なあーい、坊ちやんはおまけえーツ」。僕はとう〳〵おまけにされてしまつた。

荒木又右衞門

「青山館に尾上松之助の荒木又右衞門が來たんですつて、今夜連れてつて下さいな。」

パパさんはどこかへ出かけるらしく、二階で洋服を着更へてゐた。ぼくは隣りの十疊に寢そべつて、新聞の折込み廣告に見入つてゐた。秋の西日がかなり強く差しこんでゐた。

「伊賀の水月三十六人斬、松之助の大殺陣、製作費一萬圓、空前の大作ですつて。」

ぼくはビラを讀んで聞かせるんだが、パ、さんはニヤ〳〵笑ひながら着更へを續けるだけで、一向手答へがない。

ぼくは立川文庫で荒木又右衞門とはお馴染みだ。立川文庫に描かれてゐるとほりの活躍が、そのまゝ畫面に現れると思つたから、荒木又右衞門その人に會へる積りかなんかで、見たくて堪らない。

「ねえ、いゝでせう？」

ぼくは鼻聲になつて甘えた。

「そんなもの下らないよ。」

「いえ、とても面白いんですつて。ぼくの友達も見たつて云つてましたけど、それに、配役も素晴らしいんです。こんな顏揃ひは當分ないでせう。」

ぼくはやつと應答があつた嬉しさに、勢ひこんで一ばし通ぶつて喋舌つた。しかし、パ、さんは落ちついてゐる。

「それは宣傳だよ、活動は今どん〳〵進歩してゐるから、また後から〳〵いゝものが出來るよ。空前の大作が次々に出るんだから慌てゝ見るには及ばないよ。」

「さうかなあ。だけど見たいなあ」

「面白さうな廣告が來る度に出掛けて行つたら限りがない。その暇に勉強でもしなさい。」
「勉強もしますけれど、たまには……。」
「その必要はない。」
パヽさんはいつもこれだから嫌になつちやふな。必要々々といふけれど、人間必要を一歩も出ずに暮して生きて行かれるものぢやない。人はパンのみにて生くるものに非ずだ。
などゝ腹の中で不平を云つても、結局ぼくの負けで、パヽさんは例の髭を撫でながらどこかへ出かけて行かれた。ぼくはあーアと欠呻しながら寢轉がつた。省線電車の走る音がごうツと聞こえた。どこかで百舌鳥が頻りに啼いてゐる。

淋しき父

父の亡くなつた大正十五年の、さうだ、忘れもしない三月廿一日の夜、夕方から降り出した雪が、大學構内に薄く積つてゐた。正門を入つてすぐの掲示場には人だかりがしてゐる。この十五日に行はれた法學部の入學試驗の結果が今夜發表になるのだ。
稻勝と金石とぼく。三人は怖々掲示を覗き込んだ。三人とも名前がある、先づホツとした。他の二人が通つて自分だけ落ちたとしたら嫌だなあ、と思つただけで大して感激もしなかつた。
近所で電話を借りてその旨家へ通じた。歸途早速帽子屋へ寄つて角帽を買つた——流石に

被つて歸る氣はしないので、抱へて歸つた。家へ歸つて、今はない日本間に入つてゆくと、父と母とが炬燵にあたつてゐた。ぼくが挨拶すると、父は

「お前が無事に大學へ入つたので、わたしも安心して死ねるよ」

と、半分冗談めかして笑ひながら云つた。ぼくはその淋しさうな笑顏を見て胸が一ぱいになつた。

この年の初めから、父の健康は大分わるかつた。三月の初、ぼくが高等學校を卒業して弘前から歸つて來た時は、父は久留和の別莊にゐたが、大分弱つて氣力も衰へてゐた。その頃の日記を見ても、日々その肉體の衰へを自覺してか、淋しい手記を綴つてゐる。ぼくの入學にしても氣の弱くなつてゐる父にとつては餘程嬉しかつたのであらう。

かういふやうな、父のやさしい一面、淋しい橫顏の印象が、ぼくにはかなり殘つてゐる。元來父は强い人、怖い親父として有名である。水戸師範學校時代の寫眞を見ても、これは怖かつたに違ひないと思はれる位、嚴格そのもの、寧ろ容貌魁偉に屬する方だし、兄達も父から受けたスパルタ式教育が一番記憶に殘つてゐるらしい。さういふ父は、ぼくにも覺えがないではないが、年を老つてからの父だけしか知らないぼくには、この淋しい父の面影が、少からず腦裡に殘つてゐる。

やはり最後の年の五月、手術の少し前、父は久留和海岸へ行つてゐた。ぼくが東京から見舞に

行つたときは恰度月のいゝ晩で、松の枝を透して見る月と波の景色が非常に美しかつた。縁側に立つた父は

「久留和の月もこれが最後かも知れない」

と云ひながらぢつと眺めてゐた。月光に照らされてくつきりと浮び上つた父の横顔はめつきり窶れが見えて堪らなく淋しさうだつた。

かういふことを口にする父ではなかつたが、と思つて、ぼくは黯然とした。

父の臨終

渡瀬成美

昌勝兄さん

御無沙汰しました。大連はもうかなり寒い、日によると、冬服を着ることもあるくらゐだ。——東京も秋らしくなつたことでせうね。

父上の傳記編纂は大分捗つたやうですね。御苦勞様です。定めしお骨折のことゝお察しするが、ほかに適任者がないことを思へば、やはり、精々才腕を振つて立派なものに仕上げて下さいとお願ひするよりほかはない。

昌勝兄さん

父上がなくなられてからもう八年になるね。そのとき兄さんは二十三で大學の一年、ぼくは二十で學習院の高等科一年だつた。――自分ではもう一人前のつもりだつたが、今から考へると子供だつたね。

父上はその年のはじめからそろ〳〵悪くて、やがて癌の診斷が下されたのだが、そんな話を上の兄さんたちから聞かされても、なんだかほんとうらしく思へなかつたせゐか、不思議に大して驚きもしなかつたし、それだけに又、父上の御病氣に對しても冷淡に考へてゐた。申し渡されたことの意味が――父上の再起の見込みは全然ないといふことが――はつきりのみこめてゐたら、若いぼくらは定めし驚いたのだらうが、ぼくにはそれが何だか嘘か、單なる想像のやうに思へて――近き將來における父上の死、といふことがどうも信じられなかつた。それだけまだ子供だつたのだらう。

昌勝兄さん

ぼくは今思ひ出す――ぼくが父上の健康についていよ〳〵これは大變なことだ、と思ふやうになつたのは、父上が五月に手術をうけられ、話が出來なくて筆談になり、咳をする度に咽喉佛の下のカニユーレ(Kanüle)のガーゼがヒラ〳〵とグロテスクに動き、やがてだん〳〵痩せ衰へて、今

までは寝たり起きたりだつたのが、もう、昨日も、今日も、すつと床についたきり、といふやうになつてからだつた。

十月に入つて父上はめつきり衰へを增した。と同時に、人々の出入はとても激しくなつて、家の中は戰場のやうな忙しさだつた。親戚はもとより、次から次へ聞き傳へた父上の舊知や朋友が、日に何人となく病室の中へ消えて、しばらくして、渡瀨寅次郎遂に起たずと知つて、眼を赤く膨らして出て來るのだつた。殊に札幌農學校創立當時の同窓——共に誇り、倶に勵ましあつた人々が、殆んど口のきけない父上と、固く手を握り、ぢつと眼を見合せて、たゞそれだけで、荒野に馬を驅り、爐邊に談論した昔を腦裡に浮べながら、何十年來の友情を通はせてゐるのを見て、ぼくは胸が一ぱいになつて、その場にゐたゝまれなかつた。「君、僕と一緒に祈り給へ」と云つてくれた人もあつた。學生時代の習慣をそのまゝ英語で信仰の言葉を叫んで病友を慰めてくれた人もあつた。父上は非常に喜んで、痩せた、淋しさうな顏に、幸福な微笑を漂はせてゐた。

昌勝兄さん

父上が遂に危機の宣言をうけられたのは、十月の末だつたかしら——宣告があつてから、一週間餘も保つたと記憶してゐるから、やはり、それは十月の末だつたらう。

しかし、我々は、假令科學が絶望を傳へても、子として奇蹟を信じたかつた。人の一心が、何かの

力を顯はさないとは限らない――かう思つたわれ〳〵兄弟姉妹は、寄つては祈り、集つては相談した。相談したところで仕方がないやうなものゝ、溺るゝものゝ藁のやうに、何かいゝ方法はないか、かういふことを聞いた、あゝいふ話もある、などゝ、ちよつとしたあひ間にも、集つて父上を思ふ眞情で一杯になつた人たちが、爭ひかねまじき氣配で議論した。かういふ時、われ〳〵は兄弟の多いことが實際心強い。皆目標を一にした、よく氣の合つた一隊の看護軍である。隊長として一切の采配を振る母上の心勞も全く大變だつたらうが、それにしてもどんなにか氣強かつたらう。

危篤の宣告をうけた頃には我々は夢中だつた。助からなければ助からないでもいゝ。少しでも樂にしてあげたい。苦痛を減らしてあげなければならない。かう思つて一人殘らずの兄弟姉妹が、家も、仕事も、すべてを犧牲にして父上に侍(かしづ)いた。父上も大變なお喜びで、例によつて氣は遣ひながらも堪らなく嬉しさうに、絶えず感謝しながら、みんなの介抱をうけた。今は亡くなつた里子姉さんの掌に

「一に看病、二に藥、お前の介抱はとても嬉しいよ。」

と、お書きになつたことを、兄さんも覺えてゐるだらう。十月の末頃から、三人或ひは四人が一組になつて、各が半夜交代で、夜通しの看病を毎晩續けた。大がいの人が、時間が來ても交代しない

で、朝まで頑張り通すのだつた。――頭を揉み、肩を擦り、薬をすゝめながら薄暗い電燈の光に父上の筆談を讀みとつて、痒いところに手の届くお世話を心がけるわれ〳〵の神經は、しんとした眞夜中の病室の空氣の中に、針のやうに尖つてゐた。父上が、睡眠藥の力を借りて、咳と、痛みと、寢苦しさから逃れて、やうやくすや〳〵と寢入られる明け方の四時頃になると、凍へるやうな寒さだ。もう始發の電車が通るのか、時々ごうツと音を立てゝ走つて行つたかと思ふと、またもとの靜さにかへる。そつと父上の寢顏を覗くと、窓からさしこむ朝の光に苦惱の皺が痛々しく現れて、永い間の闘ひの疲れがまざ〳〵と見える。もう間もなく父上ともお別れか――と思ふと、泌泌悲しく、情けなく、ひいやりとする朝の空氣に思はずぞうツとして、ぼくも兄さんもジヤケツの上に着た褞袍の襟をかき合せて、父上の寢床の裾の方に丸く蹲つてゐた情景を、兄さんは今でも思ひ出すことがあるかしら――。

危篤の宣告をうけたにも拘らず、父上の精神力が強かつたのか、よく新聞記事にあるやうに、奇蹟的にもよく保つて、父上の容態は一進一退をつゞけてゐた。が、その年の暦は一枚々々と薄れて、十一月八日の夜――その晩のことは今でも忘れられない。七時半頃、やつと寢入つた二階の父上を看護婦に任せて、われ〳〵は期せずして階下の八疊に集つた。今はないが、爐の切つてある日本間の八疊で、どこからか届けられた大阪壽司の折をひらいて、ぼツと一息つきながら、人々

は爐端に茶椀を竝べて雜談に耽つてゐた。

突然、父上に附添つてゐた看護婦が二階から駈け下りて來て、御容態が變りました、といふ。ぼくはくら〳〵とした。來るべき時が來てしまつたのだ——。

二階へかけ上ると、父上はいつもの通り安らかに眠つてゐた。少くともさう見えた。たゞ呼吸が激しかつた。やがてその呼吸が靜になつて——人々は、茶椀に筆を添へて、一人々々、父上の土色の唇を濡らした。誰かゞ大きな聲で父上を呼んだ。父上はうツすらと眼を開けた。けれどもやがてまた、もとの通り瞼を閉ぢた。ぼくの番が來た。死色の漂ふ唇に、白い筆の穗を押しあてたときには、ぼくはぼうツとして、何がなんだかわからなかつた。ぼくは「パヽさん」と呼んだが、聲が出なかつた。思ひ切つて「成美ですツ!!」と怒鳴つたら、突拍子もない大きな聲が出て、誰かがクスリと笑つた。一寸ユーモラスな情景だつた。

主治醫の加藤さんが父上の脈を握つてゐた。八時十五分、冷徹な加藤さんの顏が一寸緊張して「御臨終です」と云つた。あたりはしんとした。やがて人々の啜り泣く聲が聞えた。そのとき、田中の姉さんが一足遲れて階段を馳け上つて來た。「とう〳〵駄目だつたの」と云ひながら、次郎兄さんと相抱いて泣いた。ぼくは次郎兄さんの氣持を想像して、そのとき始めて、ぼくら子供たちと程度の違ふ、大人の悲しみが判つたやうな氣がした。と同時に、ぼく自身の寂莫感、悲壯感も、

曾て自分の體驗しないものであることに氣がついた。

昌勝兄さん

こゝまで想ひ出して來て、ぼくは考へる。——なぜ、父上はもつと永く生きてゐてくれなかつたらう。せめて、ぼくが一人前になつて、世に出るまで生きてゐて欲しかつた。父上が偉かつただけに、若くしてこの父を失つた痛心は大きい。末つ子は不幸だ。末つ子なるが故に、上の兄さんたちに較べて、甘やかされて育てられたことは何の益もない。それよりも、自分の全面的發展が、父を、父の全人格を力強く把握出來るに至つた今日まで、生きてゐて貰へたら、どんなに幸福だつたらうと思ふと、それが叶はなかつた自分の運命が、むしろいきどほろしいくらゐだ。

昌勝兄さん

この事務所からは海が見える。秋の夕陽が美しく水面に照り映えて、鷗さへ飛んでゐる。ぼくは望鄉的にならざるを得ない。家を思ひ、亡き父を憶ふ。明治の初年、黎明日本に雄圖を抱いて北邊開發を志した父上の感懷を想ふとき、今、新興滿洲に職を得て勃々たる野心を包藏するぼくの心臟は、英雄的な高鳴りをさへ感じてゐるのだ。

今、當地には母上が來てをられる。お元氣は恐れ入る、若いものも敵はないくらゐだ。たゞ眼と足とに、お痛はしいくらゐの衰へが見える。それにしても、兄さんはいゝことをした。といふ

のは、母上は、この度父上の傳記が完成されることについて、ことのほかお喜びだ。ぼくもこの仕事は、子供として母上に對する何よりの孝養だと信ずる。父上の生涯が、その死後十年にしてなほ記錄にのこすべき價値があるか、ないかは別としても、父上の傳記を編むことによつて父上のよき半身であつた母上を喜ばせ、その餘生に感謝と光を與へることが出來れば、その意味においてこれは重大なる事業といはなければならない。ぼくは弟として、又、父母の子として、兄さんの努力に感謝しないわけには行かない。

昭和九年秋

對岳五十話

こゝに蒐錄するは渡瀨寅次郎が明治二十七年十月興農雜誌創刊以來、その卷頭社說欄に於て、專ら農家指導の目的を以て書いた所論百數十篇中の代表的なるもの五十篇である。固より搖籃時代にあつた我が國農民の蒙を啓かむとしたものであるから、學術的論文ではなく、寧ろ進歩主義的農業の實際的指導理論である。

目次

第一話　農家の生活を愉快にすべし（二七・二）……二九三
第二話　農家經濟改良意見（二八・一）……二九五
第三話　農と腦（二八・三）……三〇〇
第四話　農家の父兄と子弟に告ぐ（二八・六）……三〇四
第五話　益蟲の說（二八・七）……三〇七
第六話　植林の要を論ず（二八・九）……三一一
第七話　菓實を食ふべし（二八・一二）……三一八
第八話　家禽に割勢術を施すべし（二九・三）……三二五
第九話　更に躍進せよ（二九・五）……三二九
第十話　事業の成敗（二九・一二）……三三四
第十一話　感化力の重要性（三〇・三）……三三七
第十二話　國費を以て種苗を配布せよ（三〇・四）……三四一
第十三話　農家は品性の向上に努めよ（三〇・五）……三四七
第十四話　害蟲驅除論（三〇・六）……三五一
第十五話　種苗選擇の必要を論ず（三〇・七）……三五五
第十六話　益鳥の保護について（三〇・一〇）……三六三
第十七話　農家は鄕隣相親睦せよ（三〇・一二）……三六六
第十八話　農事の觀察力を養へ（三一・四）……三七〇
第十九話　農事視察員の海外派遣（三一・七）……三七三
第二十話　農界の藩閥を排擊す（三一・八）……三七六
第二十一話　農事關係文は平易にすべし（三一・一二）……三八一
第二十二話　農家と冬季（三一・一三）……三八四
第二十三話　農家は前途を洞察せよ（三二・三）……三八九
第二十四話　花の價値（三二・四）……三九二
第二十五話　農、商、工は提携せよ（三二・六）……三九六
第二十六話　我が果樹業の將來（三二・八）……三九九
第二十七話　女子農事敎育論（三二・一一）……四〇四
第二十八話　農家の囀（三二・一二）……四一一
第二十九話　路傍植樹論（三三・二）……四一五
第三十話　農家は時を重んぜよ（三三・三）……四二〇
第三十一話　農事の經營と秩序（三三・四）……四二六
第三十二話　農村の都會熱について（三三・五）……四三一
第三十三話　肥料は彈藥なり（三三・六）……四三七
第三十四話　華を去り實に就け（三三・六）……四四一
第三十五話　府縣郡町村農會に望む（三三・七）……四四三
第三十六話　農事調査施行の急務（三三・八）……四四九
第三十七話　園藝は本邦の富源なり（三三・九）……四五三
第三十八話　植物檢疫部設置の提唱（三四・四）……四五六
第三十九話　勞力尊重論（三五・七）……四五九
第四十話　種畜場規程管見（三五・八）……四六五
第四十一話　本邦將來の農業（三六・一）……四六七
第四十二話　農家の經濟（三六・二）……四七三
第四十三話　算錢の法（三六・五）……四七八
第四十四話　農民の海外移住について（三六・一二）……四八〇
第四十五話　副食品栽培の要（三七・五）……四八六
第四十六話　農產品を恤兵部に寄贈すべし（三七・五）……四八八
第四十七話　模範農場の設置を促す（三七・八）……四九一
第四十八話　養豚を奬む（三八・五）……四九四
第四十九話　老人奮起論（三八・九）……四九八
第五十話　謝恩の說（三八・一二）……五〇〇

第一話　農家の生活を愉快にすべし

日出でゝ畑に上り、妻子兒女を携へ、飼ひ馴れし家畜を相手にし、廣濶なる原頭、新鮮なる空氣中に耕耘し、夜は卽ち爐邊に索を綯ひ、庭前に涼を納る。穀は畑より取り、炭は山より得。農家の生活は泰平、純潔にして詩人、仙客の羨やむところなり。

然れども、他の一方よりこれを見れば、終歲營々、夏の暑き日、冬の寒き朝、全家身を苦しめてその業を勵み、衣食の料を作れども、自らはこれを以て幸福快樂の料とせず、飽食暖衣の樂しみは、却つて他の人々の有に歸す。

常に田圃山野に耕耘し、休日雨日も僅かに親朋隣近の人々と交通するに止まり、廣く世間と交りて、今日文明の便利快樂を用ふることを知らず、迂遠隱逸を以て自ら甘んずるは抑〻亦遺憾ならずや。

さらばとて漫りに華奢を競ひ、豪放を試み、農業の本質を忘れて、他の浮薄なる生活に模擬せんとするは、吾人の最も不同意を表するところなり。今日農家の生活を改良するは必要なれども、その業を變動するは極めて不可なり。吾人の希望は、淡白無味、終歲單調の生活を改めて樂しく面白く、時勢に應じ、季節に從ひ、無邪氣の快樂と幸福とを得んとするにあり。

農家が年中田圃の業にのみ従事し居りて、世間の事情に疎きは、啻に經濟上に損するところあるのみならず、心神上にも亦損ありといふべし。或る種の作物を自ら携へて市場に至り、これを賣却し、若くは市場の商人が來りてこれを買ひ求むる等のことあらば、自然と市場の事情にも通じ、諸品の相場をも知り、利益するところ少からざるべし。

元來農業とて、單に米麥蔬菜を作るのみが本旨にもあるまじければ、果樹を植ゑ、養禽、養蜂及養豚をなし、又草花等を植ゑ、自家にこれを用ひたる餘りは、悉く市場に出して販賣すべし。

果樹の如きは、單にその花を開き、實を結ぶを見るだにも一の快樂なるに、況してこの果を食ひ、この果を賣りて利益を得るは更に一段の樂しみなり。家禽の晨を告げ、友をよび、呱々穀を喙ばみて庭に戯むるゝを見、蜂の王あり、勞者あり、番卒あり、互に相守り、相勤めて、社會的組織をなし、且つ豫じめ備へて未來の用意するを見るも面白し。草花に至りては、青黄、赤白、相交はり、淡裝濃抹、相映じて四季觀を絶たず、誠に天の妙技なり。

斯の如きは、その物を扱ひ、これを世話するだに面白きを、なほその剩餘を賣りて得たる利益は臨時にこれを收めて家内の用に足し、子供の教育費若くは肥料代等にも供し得べし。

人或は曰はん、農家は繁忙にして到底此の如き錯雜なる事をなす能はずと。然れども、これその組織宜しからず、時間を用ふること拙なればなり。方針を確立し、組織を立て、巧みに時間を用

ふるに於ては、必らず成功するところあるべきなり。

人心は變化を好むものにして、年中同じことを繰返してする時は、いつか厭倦を來すなり。春あり、夏あり、又、秋冬あるは、特に吾人に快感を與ふるものにして、常に春のみなれば却つて不快を感ずべし。農家も、異種のものを作り、且つ閑靜なる住居を出でゝ、繁熱なる市場に至りて、その模様を見るなど、變化ありて頗る愉快なるものなりとす。

以上は吾人が農家の生活をして今より一層愉快ならしむべしと信じて敢て大方の教を乞はんとするところなり。

——明治二十七年十一月

第二話　農家經濟改良意見

不景氣不景氣といふは前年來常に商家の唱ふるところなるが、この事は唯に商家のみならず、諸職諸業皆一般に不景氣なるを免れざるなり。蓋し維新前、封建割據、外國との交通もなき世にありては、萬事悠長にしてその生活も容易なりしが、廣く外國と交はり、國内の交通便利となれる今日に至りては、諸國諸州の者入り交り、互に利を競ひ、機を求むるが故に、優者は益々その利を占むるも、劣者、惰者は追々その利を奪はれて生活の困難を感ずるに至る。今後貧富の懸隔と生活の困難とは年を逐ふて益々甚しきに至るべし。されば吾人はこのせちがらき世に處して、困難

に打ち勝ち、家業の隆盛を講ずること肝要なり。

有名なる一商人曰く、「今の如き世に方りては、殊にその經濟に注意し、嚴に冗費を去り、節約を守り、生産費を少くして以てその利益を計るより外なし」と。蓋し大なる商會、工場等にては兎角冗費の立つものにて、その物一個について考ふれば誠に微なれども、一箇月に積り、一年に積る時は非常の巨額となる。

農家に於けるも亦これと同じ。元來農家の生活は恬淡寬大にして、商人の如く精細嚴密なるものに非ず。故に甚だ質素なりと雖も亦極めて粗放不締りなるところありて、無益の冗費散逸等あるものなり。故に先づこの眼に見えぬ費を省き、諸作物耕耘の場合に於ても、專ら注意して入費のかゝらぬやうなさざるべからず。斯の如くすればその作物の價は廉くとも入費少きがため却つて利益を見るなるべし。現に米國の或る地方にて棉の價甚だ廉く、到底高價なる耕作費を支拂ふ能はざるを以て、出來る限り入費を節して作りたるに、その結果は前年に優る利益を得たり。

我が國農家の經濟につき改良すべしと思ふ點は甚だ多し。就中先づ時間を空費せざるやうに心がくることなどは最も大切なりと信ず。例へば市に出づるにも單に一つの用を帶びて行くよりも、かねて心がけおきて一時に多くの用を足さば利益ならずや。油を買ふ序に肥料を買

ひ、農具の修繕を交渉し、又、山野に耕耘する時はよく注意して萬事遺漏なきやうにし、行厨を忘れて子供をとりにやり、或は鎌の錆を發見して畑の中でこれを研ぐ等のことなきやうに注意すべし。雜草を刈るにも順序なく刈りて二度も三度も手をかけるより、豫じめ見込をつけて一度にこれを採るやうにし、人と會ふにも互に時間を定めて自他の時間を接する等は極めて有益なるべし。

右は時間のことなれども、尚作物に要する肥料等についてもよく細心の注意を拂へば、遺利を見ること甚だ多し。堆肥の一物にてもその堆積方不充分にして肝要なる肥料分を雨に流し、殆んどその半價にも足らざるものを施用する者あり。

牛馬の飼小屋もその構造宜しきを得ずして有效肥分が或は發散し、或は地中に浸入し、僅かにその一部分を得るのみなるあり。もしこの廐舍にして、床をセメントの敲とし、周圍に水排をつけ排泄物を一所に集めると大變なる利益となるなり。敲きとするに入費かゝりて困難ならば、他の方法なきに非ず、卽ち、その地を平らにし、堅くこれを叩き、これに敲藁、木葉又は其他のこれに類するものを一二尺の高さに積み、この上に適當の敷藁を置き、その藁は毎日取り替へ、且つその下に入れたる藁は一週間毎に取り替ふれば、牛馬の排泄する肥料分は殆んど悉く取ることを得るが故に、これを堆積し、上に覆をなして雨露を防がば適當の處置と云ふを得べし。

この類のこと甚だ多かるべし。今一々これを云はず。

凡そ商家農家共に富豪となれる者は皆よく微細の點に注意し、人の蔑視するものを粗末にせざるによる者多し。今、その例を擧げん。

我が友某なるもの、その地方の豪家なり。この人の祖父至つて心掛よき人にて、その家より一里半もある市に出る時、途上にある古草鞋及び牛馬糞等は豫じめ用意したる籠に入れて皆持ち歸り、もし籠も持たず馬も牽かざる時は、何人の田畑なるを論ぜず、直ぐその傍らなる田畑に投げ入れて肥料に供せり。常にその子弟を警しめて曰く「汝等自分の田畑と限るべからず。苟くも肥料となるべきものあらば、構はずそこの田畑に入れよ」と。この心掛あり、富豪となれるも亦宜なるかな。

かの岩崎彌太郎氏にも亦この細心あり。曾つて某汽船船長誤つて暗礁に乘りかけ、船舶貨物を損じたれば、船長は悄然として氏に面會し、身の不束を詫び、辭表を呈したるに、氏は溫顏徐ろにこれを諭して曰く「多くの汽船を所有して斯る事あるは固よりの覺悟なり。決して怨むるのところなし。余はそれよりも日常使用する紙筆薪炭等の粗末になるを憂ふ。足下乞ふ、この點に注意せよ。船のことは構はざれば、自今一層微細のことに注意せよ」

とて、これを慰撫せり。然るに他の船長が病氣屆を社用の罫紙に認めたりとて大いにその不

都合を詰責し、罰金を徴したりと聞けり。一枚の紙、一塊の炭、かの大會社に於て何かあらむ。しかもこの微細の點に重きをおくところに氏の氏たる所以はあるべし。

維新以來、農家諸君が多くの新事業を企てたるも兎角失敗せる所以、亦實にこの微細の點に注意せざるによる。何れも新事業を企てその利益を豫想し、未だ儲からざる先にその利益を當にして散財をなすが故に、失費多くして財力續かざるなり。俚諺に「未だ孵らぬ雛を勘定する」と云へるは、この意なり。

商工業に關する事業も惡しきに非ず、唯、その經濟上の點を嚴密にせば成功することなきに非ず、しかも農家諸君は從來粗放寬大にして所謂錙銖の利を爭ふに慣れざれば今日の如き失敗をなすなり。

「爪で拾ひ箕で覆す」とは或る一種の吝嗇坊を評したる言葉なれども、日本人の生活をよく深く研究すれば、この譏りなきにしもあらず。農家諸君、よく質素儉約の生活を保つも、時間と勞力とを空費し、肥料を放散し、以てその生産物の價を高むるもの比々皆然り。吾人はこの時に際し、よく精細に觀察して、耕耘肥料の價を低下せしめ、生產費遞減の然を講ぜざるべからず。

——明治二十八年一月

第三話　農と腦

熟々人體の機關を見るに、耳の聞き、眼の見、鼻の嗅ぎ、手の觸れ、舌の味ふより其他諸機關何れも靈妙不可思議にして、一旦沈思してその理由組織を考ふる時は、到底人智の及ぶ所にあらざるを知らむ。

人、絲竹管絃の樂器を見てその巧みを賞す。しかも人の喉は悲喜哀樂、各その音を異にし、これを聞く者をして情感を起さしむること、固より他の人工樂器の比に非ず。時計を見、蒸氣機關を見て、その精巧に驚くを休めよ。汝の體中には更に驚くべき機關備はりたり。

それ人體の機關斯の如く靈妙なるも、これが主たるものは腦なり。腦の發育不完全なる者は假令その脊力逞ましきも、脚歩極めて健やかなるも、これを利用するの道を知らず。手や、脚や、人その一を失ふことあるも、なほよく己れの用を達し、世に立つを得べし。

もし手足を以てせば、吾人人類より更に大なるものあり、唯、今日萬物の長として吾人の世に處するを得るは、腦力他の動物に優るところあればなり。

人の賢不賢と云ふも、その脊力に於てせず、唯、腦力の鋭鈍によりて定めらる。脊力已に足り、脚歩亦健やかに、身體各部よく發達し、これに加ふるに腦力の利用を以てせば、如何なる事業か成ら

ざらむ。生存競爭の世の中に立つて、優にその尊榮を保つを得べし。

農は力を以てするものなり。力弱く體羸れたる者は到底これを以て尊榮を保つ能はず。然れども單に脊力體力のみを以て充分なりとすべからず。眞に農を以て榮えんとするには、更に腦力を利用し、相俟つてこれに從はざるべからず。腦を用ひずして農業に從事すれば進歩なし。假令有益なる經驗あるも應用の道を知らず。そのよつて來るところの原因理由共にこれを知るを得ず。從つてその害を避け利を求むる能はざるべく、茫として霧中にあるが如く、楫なくして船を行るが如し。寔に憐れにも亦危ふし。

去年失敗せしことを、今年又もこれを繰返し、他人利益を得しことも已れこれを應用する能はず。そのなすところは、いつも同じことを反覆するのみにて進歩なるものなし。

悠長なる昔のことはさて措き、世の中、物忙しき今の時、殊に境土擴がり國費多からむとする今日に當りては、我が農業の如きも極めて意を用ひて少費多穫の法を研究せざるべからず。爰に於てか腦力を働かす必要あるを見るなり。凡そ腦力を利用する者は、自ら改良進歩の道を發見し、自他の利益を增進すること多し。

往昔英國の或る農家、心を用ふること極めて稠密にして、日々その氣象を筆記し、農作物の成育良否と對照するに努めしが、燻したる硝子を以て太陽を望み、遂にその面に黑點多き年は豐饒な

りとの事實を發見し、又、椋鳥の類の多く來る時は同じく豐作なりとの事を知り、これを手帳に記して大いにその子孫を裨益したりき。これ未だ完全の研究に非ずとするも、その農暇よく心を用ひ、自然の現象を見てこの事實を發見せしは感ずべき至りにして、學者の研究を助け、世の益をなせること夥し。

ハンヅ、ウオンテツド(Hands Wanted)とは、「手の要る」と云ふことにして、商家又は農家など、人手を要する時に雇人を入れんがために新聞に廣告し、又は軒先に掲ぐる記標なれば、志願者はこれを見てその主人を訪ひ、主人はこれと應待質問して用否を定むるなり。

或る時米國にてこの廣告をなしたる農家に、三人の志願者來りしが、第一の人は曰く

「余は腕の力逞ましくしてよく勞力に堪え、如何なる事を命ぜらるゝも敏速になすを得べし」

と。主人これを聞きて斥けたり。第二の人は曰く

「余は生來健全、殊に手足は強健にして從來多くの同輩中にても敗をとりたることなく、その功名の特標(しるし)とて、手足ともかくまであれ居り候」

と。主人は默然として聞きゐたりしが、聽てこれをもよきに謝絶したり。第三に出でたる人は靜かに曰く

「主人よ、農業に身體健全の必要なるは今更申すまでもなく、幸ひに余が手と足は君の御用を全

ふするに足るべしと思へども、これに加へて主人よ、余が腦は亦主人の用をなすに十分の働らきをなして、君が事業を最も利益あるやうになすを得む」

と。主人これを聞くや喜んで曰く

「善い哉、言や。手と足の強きのみにては事足らじ。腦の必要に心づきたるこそ殊勝なれ。余は足下を雇ふべし」

と。

已れが命ぜられたることのみを興味なく漠然として行ふものは、生命なき器械の如し。否、器械はつまらぬ批評や惡口をきかず、正直に運轉し誠實に活動す、寧ろ惡しき雇人に勝れり。されば腦力なきものは土偶の如しとや云ふべけん。

今や文化世に普ねく、學術技藝のとつて以て吾人を益すべきもの、何ぞ限らむ。腦力ある者は又他人の腦力を利用す。成功の祕訣は衆腦力を收攬してこれを用ふるにあり。同じく勞力なれども、腦を勞すると、力を勞するとは、その價値大いに異り、腦を勞するものはその酬い大にして且つ人に尊重せらる。

孟子曰はずや「力を勞するものは人に役せられ、心を勞するものは人を役す」と。

腦は吾人人類特有の靈機にして、人類が他の器械と異り、他の動物と異るは、全く腦の靈妙なる

による。今の時に際し、腦を利用し益々これを發達せしめざるべからず。玆に於てか吾人は農業の品位を高め、これを發達せしむる原因たる農業教育の必要を見るなり。

——明治二十八年三月

第四話　農家の父兄と子弟に告ぐ

門墻高く聳え、硝窓日に輝やき、二頭立の馬車喝道、聲勇ましく出づるものを見て羨やむことなかれ。人悉くこれに達し得べきものにあらず。よし達し得るとするも、その境涯は他人の想像する如き幸福なるものにはあらじ。

彼等は老いたる大木の如し。外、頗る美なるも、その中心既に朽ちたり。餘りに奢侈に耽るがために、その財政日に困難を來し、ヤリクリ算段をなし、僅かにその外面を裝ひて體裁を保つもの頗る多し。その然らざる者も、心中千百の思ひ煩ひありて「アヽうるさき世なる哉。この苦しみの中より免るゝ道は何ぞや。余はかの一竿一簑、超然として毀譽の外に立つものを羨む」とは彼等の毎に思ひ且つ云ふところなり。

年若き、農家の子弟等は、未だ世の中の經驗なきがために、一見これに瞞まされ、その生れ出でたる清風綠樹の家を捨て、繁熱溽暑の市街に移り、手練れぬ事業に身を苦しめ、產を破るもの多し。

この人々にして、その故郷に留まり、生來の農業をなすに、己れ市街に出でたると同樣の熱心を以てせば、その成功と致富とは、市街に於けるよりも更に大なりしものあらむ。

天は人に向ひて「汝の額に汗して食へ」と云へども、人は「寢てゐて果報を待つ」といふ。人の私は天の法に勝たざれば、働く者は頻りに賞を得、怠たるものは毎に敗る。財寶世に盡きたるにはあらず。唯、己れ怠るが故に、その財を隣人のために掘り去らるゝなり。一粒の粟も種なくしては生えず。人もしその事業に成功せんと欲せば、先づ己れの能力地位等を考へ、最も適當なるものを選み、既に決したる上は、顧頒を振らず、一心をこめてその方向に進むべし。熱心の極は練達となり、練達は希望を生じ、希望は艱難を變じて愉快となす。

子弟等よ、その事難儀なりとも屈することなかれ。面白からずとも辛抱せよ。古諺に「岩の上にも三年」といはずや。聽てはその事に熟れ、勞力も却つて愉快なるに至らむ。

父兄等よ、汝の子女をして農業を樂しむに至らしめよ。これをなすには、先づ何程かの土地を與へ、種子をも頒ちて、子弟の自ら播種、耕耘をなし、これを收穫せば、相當の價を拂ひ、或は直ちに他に賣り渡し、その代金をば子弟のものとして貯蓄せしむるか、又は有益のものに費すを許すべし。家禽を飼育せしめ、果樹を養なはせ、草花を作らすもよし。

余は世の父兄に特に注意す。卽ち、子弟に與ふる土地、種子等は、瘦地下種なるべからずして、充

分成功すべきものを與へ、且つ有益の助言をなして彼等を勵まし或は教へ、自然の間にその業を樂しみ、愉快を感ずるに至らしめよ。その事業の首途に於て、これを失望せしむることなかれ。もし、かく親切に取り扱はば、子弟は喜んで水を灌ぎ、蟲を除き或は肥料を製し、飼料を採り、學課或は遊戲の間によく果物を實らせ、或は鷄卵を産ましめ、自然にその事になれて父祖の業を嗣ぎ、永く家政を保つに至るべし。

人或は曰はん「幼少なる小兒等をして早くより金錢利得のことを云はしむるは、その心を卑しくし、人品を下さしむるものなり」と。これ舊く吾人の教へられたるところにして、その感化の及ぶところ、大いにこの國を益し、その元氣を養ひたれども、亦更に我が國の富强發達を害したるも事實なり。蓋し人に勤儉貯蓄の精神あるは、一國富强の根源にして、かの粗放磊々、自分一身の始末だにつかざる者は、決して一社會一國の經濟を整理する能はず。而してこの良性を保たしめんには、幼時に於て熟れしむるに如かず。近來、小學校生徒に貯金をなさしむるの利を説き、實地にこれを行ひて、好成績を現はし居るものあり。余輩は世人が今一層金錢を重んじ、その價値を知るの深からんことを欲す。吾人の後に立ちて、この國を引受けんとする子孫に對して、その思ひ更に切なり。

金錢を得るの難事たるを知らざるものは、金錢を貯蓄して自家の獨立を全うし、體面を保つこ

とを知らず。この故にその父祖、粒々辛苦の餘を以て積蓄したる財産も、子はシダラなくこれを費し、よく三世を保つもの少し。凡そ財の悖つて入るものは復た悖つて出づ。自ら汗を流して蓄へたる金ならでは身につくものに非ず。農家子弟をして永く父祖の業を享け、その家名を永遠に傳へしめんとせば、先づ彼等をして、眞に農業の愉快なるを感ぜしめ、而して又金錢の眞價を知らしめよ。

余輩は全國農家の子弟をして悉く父祖の業を繼がしめよとは云はず、その材幹、體軀、性質、嗜好等により、他の事業に從ふを不可とするものにあらず。余輩は從來世人が農業を卑しみ、これを以て有爲の士がなすべきものにあらずとなしたるがため、農家の子弟たるもの、自然にこれに化せられ、動もすれば、ステツキを以て鍬に代へ、高帽を以て菅笠に代へむとする者あるを悲しむ。

吾人は心より農業の尊重すべきを信じ、又その最も有益にして愉快なる事業たるを知るが故に、聊か所見を述べて、農家の父兄及び子弟たるものに告ぐるものなり。——明治二十八年六月

第五話　益蟲の說

農業は一個の戰爭にして、その畦を作り、種を蒔き、肥を施し、栽培をなすは、大將が砦を築き、兵を配置し、兵粮を配り、防禦攻撃をなすに同じ。而して敵は何者なるやといふに、風となり、雨となり、

水となり、雪となり、又霜となり、その形をこそ變へて來れ、一言にして盡せば天變にして、人力これを如何ともする能はず、然るに尚一の敵あり、害蟲これなり。天變の敵固より恐るべきも、この害蟲に比すればその平均數に於て或は輕少ならんかと思はる。

種々の藥品を用ひ、或は火を焚きてこれを驅除するも、敵勢甚だ猖獗にして往々敗るゝことあり。然るにこの害蟲の敵となりて、吾人の及ばざるところを助くるものあり。卽ち、或る種の鳥類、爬蟲類及び昆蟲これなり。

近來有益鳥獸の保護につきては、狩獵法中明らかにこれを示し、漸次保護の道を開きたるも、他の益蟲類につきてはこれを云ふもの殆んどなし。しかも之等は繁殖せしむること極めて容易なれば、その利益或は鳥獸に勝れるものあらむ。さればこの益蟲の保護も亦前者同樣に行はるゝに至らむこと、農業界の一大要事なりとす。たゞ世人がこの有益動物に對する觀念冷淡にして、その名稱すら知らず、敵に糧を與へてこれを養ひ、味方を殺すの愚あるを怨む。今後農村の學校にては、兒童等に益蟲の性質、形態、效用等を知らしめ、その保護に當らしめんこと、余輩の希望するところなり。

果樹園の蟲害は、他の蟲を以て充分に驅除し得る事實は、既に米國カリフオルニア州中の或る部分に實驗せられたり。同地方にては年來種々の藥液を注ぎて害蟲を防ぎたるが、近頃益蟲の

利用に熱心し、現に五十四種の益蟲と認むるものをオーストラリアより蒐集して、これを果園に試みたるに、よくその效を奏し、全くその害を免れたるなり。

この益蟲の內にても殊に有益なりと稱せられたるは、卽ちかの瓢蟲（てんとうむし）にして、瓢蟲は柑橘類につく「かいがら」蟲及び湯蟲を食ひ盡してこれを淸め、曾て一旦思ひ切らんとせる柑橘類栽培を再興せしむるに至れり。

オーストラリアにては瓢蟲に一種の敵ありて、その蕃殖を害すれども、米國にては最もよく蕃殖し、一年若くは二年間に何百萬と云へる大數に達せり。斯く容易に繁殖するを見ては、他日この益蟲も一變して害蟲となることあらんかと思はるれど、今の處にてはその憂あるを見ず、又、すべて世の善きものと稱せらるゝものの自ら制限せらるゝところあるを見れば、この物亦或る程度には自然にその繁殖を逞ましくせざるものなるやも知るべからず。

さて、右の瓢蟲の外に益蟲と稱すべきもの、數頗る多しと雖も、今その特に顯著なるものを擧ぐれば、蜥蜴（とかげ）守宮（やもり）、蟾蜍（ひきがへる）、蛇（毒蛇を除く）、蝙蝠、蜻蛉、馬尾蜂、蟻蜘蛛（ぢがばち）、蠅虎（はえとり）、蜘蛛等にして、之等は何れも昆蟲を捕へ食し、田圃の利益をなすものとす。この小動物がその餌食とする昆蟲を捕ふるの巧みなるは、驚くべきことにして、害蟲類にしてその生命を保たんがために、或はその羽色を己が寄食する樹葉と同色ならしむるあり、或は敵の眼を掠めて身を隱すに巧みなるありて、容易に人眼に觸れざ

るも、同類の昆蟲、益蟲類に逢ひては容易に逃るゝ能はず、遂にその餌食に供せらるゝこと極めて多し。

實に怪しむべきは、人、その田圃の害敵を愛し、有益なるものを捕獲殺戮するにあり。見よ、夏の炎天に常り、害蟲愈〻その害を逞しうする際、吾人を助けて專ら害蟲を捕食する蜻蛉の類は、吾人の最も貴重すべきものなるに、小兒等は黐(もち)を以てし、囮を以てし、專らこれを捕るも父兄敢て咎めず、却つてその害蟲の巨魁とも稱すべき蝶の類が翩翔翩々、花に戲むれ、葉に留まり、(害蟲の卵を產みつくるなり)、或は莖幹に止まるを見ては、これを愛玩し、小兒等の捕獲を禁ずるを見る、これ豈知者のことならむや。

蓋し益蟲の中にても、蜥蜴、守宮其他或る種のものに至りては、その外貌、如何にも醜惡にして、さも毒々しく見え、一瞥人をして嫌惡の念を起さしむるものありと雖も、その貌(かたち)に於てせず、深くその性質、嗜好の點に入り、己れに利あるものをとつてこれに與するは、抑〻又賢ならずとせむや。

余は又毎に思ふ。從來文化未だ開けざるの際、稗史若くは講釋師の類に於て、猥りに虛妄の說を述べ、或る種の動物が魔術猛毒を有するが如くに云ひなし、人をして恐怖嫌厭の念を起さしめたるの害は極めて大なり。蜥蜴、守宮、蟾蜍、蛇等は如何に多くの殺人、呪咀、陰謀等の適藥として用ひられたるぞ。今に至りても、なほ斯の如き害毒あるかとの念は人々の心に深く浸透せるとこ

ろなり。しかも之等の諸蟲、未だ必ずしもさる陰險なるものに非ず、却つて無害有效、日に昆蟲を求めてこれを食ふの外餘念なきものなり。

余輩は益蟲の繁殖につき、今後一層の研究をなさむとす。蓋しこの種類頗る多く、その效益頗る大なればなり。

——明治二十八年七月

第六話　植林の要を論ず

征清征臺の王師は破竹の勢を以て滿洲の野、南海の邊を憚動し、或は全くこれを征服せりと雖も、その間我が忠勇の烈士にして可惜白骨となりしもの亦少からず。而してその統計を見るに、戰死甚だ少く病歿却つて多きを見る。彼地に到れる者は皆曰く

「之等の地一望荒野、山あれども木を見ず、炎熱地を燒き、朔風耳を劈く、水源涸渴し、清泉を見ず」

と。これその疾病を惹起すること多き所以なりとす。

顧れば我が大八洲（更に一大島を添加す）山高く樹茂り、嘉禾こゝに生じ、甘泉こゝに流れ、氣清く地肥え、家給し、人足る。美なる哉、山河。誰かこの故國を愛せざる者ぞ。人曰く、山水秀麗の地偉人を生ず」と。蓋し居室の人に及ぼす關係極めて大なるを見、又現にこの國の人士、高義廉潔心に富み、しかも極めて頴敏なるを見ば、この言實に千古の格言として唱するに足らむ。

惟ふに我が國四面海を環らし、港灣屈曲、山嶽起伏、氣象の變自から繁く、水蒸氣の發散亦從つて多きが故に、草木穀禾の繁茂今日の如く盛にして、この一大美國を造出せるものなるべし。然り、天然の形勢、この國土をして美ならしめたりと雖も、抑〻又國家經綸の道に通じ、造林耕種の要に心を注ぎたる者ありて深くこの事を經營したるによる。

木曾の谿、吉野の山を初め、全國各地に散在せる山林の如き、皆これ古人專ら造林に心がけ、官嚴法を以てこれを監督し、その官有にかゝるが如き、もし一枝を切らば一首を切らんとの法令ありて、專らこれを保護したるより遂に今日の狀態に至れるなり。

然るに明治の初め、百事維れ新たなるの際、舊法悉く破れ、諸般の箝束全く緩みし時、亂伐忽ち行はれ、斧鉞曾て至らざるの地、忽ち樵夫の小屋を生じ、日光曾て透らざるの境、俄かに土砂雨に流るゝの地となり、前年の深林、今日の荒原となりしもの甚だ多し。茲に於てか、氣候調はず、水旱交々至り、土地荒廢、田畑家屋を損害し、疫病の流行を見るに至れり。

爾後數年を經て人々漸くその害を悟り、急に山林保護の說を唱ふるものあり、官も亦山林局を置き、山林學校を開き、專ら造林保護の道を計れり。然れども一旦大いに損害したる山林は、旦夕にしてこれを恢復せしむる能はざると、民人猾吏、一己の私慾に迷ひ、種々なる口實を設けて或は官林を拂ひ下げ、その立木を賣りて利を博するものあり、今日の勢、未だ林業增進の兆を見ずして

却つて年々荒廢に傾くありといふ。

近來年々洪水のために害を蒙ること實に多く、九州、中國、南海、東海を初め、東北地方に至るまで新堤未だ成らず、早く已に洪水の一洗し去るを見る。嗚呼、造林は實に今日の急務なり、今にして大いに努めずんば、後に悔ゆるも及ばざらんとす。

余輩は本年征清事業の記念として、その山林、庭園、道路、學校、社寺の別なく、なるべく多くの樹を植ゑんことを大方に訴へたり。爾來天下の諸士、この擧に贊成せらるゝもの甚だ多く、今よりその準備に着手するものあるは、余輩の最も欣喜するところなり。而して、頃日、德島測候所は、森林の氣象に及ぼす關係」を陳べて、亦征清記念の樹林を造れと同縣下諸氏に告げたり。

蓋し同縣も山林濫伐のため、太く損害を受けたる地にして、今は縣廳も民間も造林の擧に苦心し、曩に開きたる同縣農事大會には、縣廳よりの諮問案中に、楠六百本を植付くるものには補助費五圓、杉、扁柏、欅を植うるものには千本につき一圓の補助費を給與せんとするの議ありき。德島測候所は、この現況を見て深く造林の必要を感じ、愼重なる調査をなせる後、山林の氣象に及ぼす關係を縷述せるなるべし。

蓋し、山林と氣象との關係は

(一)山林の有無は雨量の多少に關係す。

(二)山林の消滅は出水を急遽ならしむるのみならず、土砂を流出して河底を隆起せしむ。河底の隆起のため河水は從つて氾濫なし易し。山にして樹木鬱蒼たるに於てはその結果全くこれに反す。

(三)山林の有無は水源の涸渇に關す。

(四)山林は大いに氣候を調和し、夏時はために清涼なり。

(五)山林は蒸發を妨げ、大いに土地の乾燥を防ぐ。

(六)山林は暴風の猛力を減殺するの效あり。

(七)山林は雷雨を頻繁ならしむ。

これ敢て新奇なる議論といふにはあらずして、古くより唱へらるゝところなり。

蓋し第一の事實は、印度南部の中央某州に於て、六萬一千方哩の地は曾て全く深林なりしが、一度びこれを伐木し、一八七五年再びこれに樹木を植ゑ、數箇所にて觀測したる結果によれば、樹木の繁茂に從ひ雨量大いに增加し、前後を比較すれば、百分十二の增量を見るに至れりといふ。

第二は最も知り易き道理にて、山林の伐られたるため、雨水は直ちに澗(たに)に下り本流に出づるを以て、その出水を僅少時間に見、且つ山巓は雨水に洗はれ、土砂ために流出し、河床を高からしむるなり。今の徒らに堤防をのみ嚴にして河底隆起の源を防がざるものは、多年の後、河床の道路よ

り高きこと甚だしく、恰かもかの湊川若くは歐洲に於ける荷蘭の或る部分にも同じきに至らむとす。

第三、山にして樹木鬱蒼たらば、雨は枝葉より次第に地上に墜下し、隨つて地中に滲透するの量を多からしむるが故に、假令若干日の間降雨なきも、尚よく源流の涸渇せざるを見る。されば昔時滾々たる清流谿間を流れたるも、今はその水源なる樹木を伐られて全く水流を見ざるものあり。

第四に、山林が氣候を調和するの效は、凡そ山巓平地を問はず、もしこゝに森林あらば、日光の爲に地面を熱し隨つて空氣を熱するの度を減じ、且つ光線の反射を防禦するを以て、夏日は暑熱の度を減じ、晝間は烈日のため溫度高昇するも、夜間は大いに低下すること多しとす。

第五の關係は最も著大にして、森林中の蒸發量は平野の蒸發量の半額に達せず、且つ林中に於ける雨量の蒸發すること、平野に比すればその三分一に達せずといふ。而して林中の空氣は平野より常に濕潤なりとす。

第六なる山林が暴風の際その猛力を減殺するは、風力樹木のために反撥せられて、頭上を通過し去るが故に、樹木の枝葉は風に打たれ、或は墜下するものありと雖も、樹下は極めて安穩なりとす。人、この現象を見て、これ山岳が風を遮斷するなりと云はば誤りにして、全く樹木が風を反撥

するによるなり。

第七、山林と雷雨との關係に至つては未だ確說を得ずと雖も、雷雨の起る理由を、溫度の非常に高まりて、俄かに地面を熱すれば、氣流の昇騰は水の蒸發と共に盛となりて氣層の上下に輕重冷熱の不釣合を生じ、極めて變亂し易き狀態となる。而して多くの水分が蒸發するや、多分の電氣を起し、その水蒸氣冲天して雲團となるや、雲亦蒸發して電氣を起すにより、遂に多量の電氣は一の原因となり、かの變亂し易き空氣を激動して、こゝに雷電を發するものとすれば、森林中と森林上とは溫度大いに懸隔し、森林上は地面より溫度遙かに高度を占むるのみならず、濕度に至りても林中林外その差實に甚しければ、雲霧を起し、雷雨を起すの源をなすこと、多からざるを得ざるの道理なり。

右は主として山林につきて論じたるも、平地亦これに異らず、平地に於ける森林接近の地は、烈風を防ぎ、就中寒冷乾燥なる風を遮斷するに足り、空氣靜穩なるがため、夜間の放熱を自由ならしめ、夏季は露の增加するを見る。而して、以上は專ら一國公共の上よりして論じたれども、一家の上に於ても亦その關係するところ殆んど同じ。樹木草花は人の庭園を美にし、惡臭汚氣の發生を防ぎ、空氣を清凉にするのみならず、その美は延いて人の精神上に影響を及ぼし、不知不識の間にその氣品性格を高尙ならしむるなり。

もしそれ植ゑ付けたる樹木にして、日夜成長して或は蠢々天を衝き、或は欝々天を塞ぐに至らむか、以て棟梁となすべく、以て橋梁となすべく、又或は以て船艦となすべく、もしこれを賣らば一木數十百圓の價を有し、一區一谿數千百圓の富を得るに至るべし。

穀菽蔬菜は、自ら蒔きて自ら食ふ一年の作物なり。樹木山林は、自ら植ゑて子孫國家に遺す百年の事業なり。人の尊貴なる所以は、啻に自己淺近の利益をのみ計らず、又公共永遠の利益を思ひてこれに備ふるにあり。植樹は、眼光豆の如く、識見粟の如き人と謀るべからずして、活眼達識遠く萬世の下に徹し、深く子孫公共の利を思ふ人のなすところなり。

今や世界の進歩と共に、電信鐵道の新事業を初め、建築船艦ともに多くの用材を要す。而して深山漸く斧斤の侵すところとなり、木材缺乏を告げんとし、氣象の變は農作の害をなすに至る。寔に植樹は一國の上、一家の上に於て最も急務なるを見る。

征清の擧、その終りを告げ、我が大日本巍然として東海の天に立つに至る。この名譽ある年を紀念せんがため、各自その山林、庭園、道路、社寺、校舎等に樹を植うるは一大美事にあらずとせんや。余輩は來る十一月三日天長節の日を以て多く樹を植ゑんと企てしより以來各地の諸友この擧を贊し、天下亦自らこれを企つるあるを見て欣喜に堪へず、聊か一篇を草して植樹の要を述ぶ。

——明治二十八年九月

第七話　菓實を食ふべし

菓實は一種の無益なる贅澤品と考へ、これを植うるは別に用途なき庭の隅、畑の圍りに限り、偶々これを多く作りて市場に賣るは、已に農業の本領を離れて、恰かも投機の範圍にでも踏みこみたるかの如くに思はれ、これを食ふは主として童幼婦女、若くは老人隱居の輩にして、年壯に氣銳に、一家一國の柱石たる稼人は、これを顧みるを屑しとせざるの傾あり。

殊に怪しむべきは、世の父兄たるもの、その子女又は姻戚の子供等に人造の甘たるく有害なる煎餠、菓子、餠菓子等を與ふるは何とも思はざれども、その天然清凉、滋味にして、榮養に必要なる菓實に至りては、これに金錢を費すを惜しむの風あること、これなり。啻にその子女に對するのみならず、自分自身又は交際場裡に於ける有樣に見るも、亦各種の菓子、葡萄酒、及びブランデー等には、構はず金を費やすも、菓實を買ふに吝しむ色あるは何ぞや。

菓實が人體の血行をよくし、或はこれを清め、以て多くの病者を健康體に復せしめたるは、枚擧し能はざるところにして、なほこの上更に多くの人々、菓實の效用を知りて適當にこれを食するに至らば、從來服用せる幾竹幾石の藥は減じて半ばとなり、或は殆んど不必要なるに至るべし。されば今日の急務は、人をして菓實にこの效用あることを知らしめ、その栽培は無用の業にあら

ずして、最も有益のことなるを教へ、益々多くこれを食せしめ、又一方にはこれを栽培して市場に出す者愈〻多きに至らしむるにあり。

今の菓子類を販賣する店を見るに、その飾り方、如何にも巧みにして、その包紙、入函(いればこ)及び封裝の方法等、如何にもよく人の嗜好に投じ、人目を奪ひ、種々の手段を盡してこれを賣るものあり。顧て菓實販賣の店舗に至れば、土つきたる芋、牛蒡などの間に混りてシダラなく陳列し、毫も人の心目を奪ふが如きことなし。今後追々菓實栽培を盛んにするに至らば、亦かの菓子店の如く、種々の方法を考へ、且つ四時ともに何の菓實にても買ひ得るやうにするが肝要と思ふなり（生菓乾菓及罐詰等の法によりて）。

さて、菓實の食用とし又藥用として最も利益あることを述べんに、すべてよく熟したる菓物は極めて消化し易き形狀に於て多くの糖分を含有す。この糖分は、麵麭又は、米などと食する時は、恰好の滋養分となり、殊に溫帶なる我が日本、若くは濠洲、印度等の如き住民に益あり。もし牛乳と共に食し、或は牛乳鷄卵等と共に食すれば、更に良好にして、人の考へ及ばざるほどに完全なる且つ最も消化し易き食料となる。

脂濃き魚などに生の「大根おろし」の快きが如く、脂肪多き家鴨(あひる)、鷲鳥、鴨又は豚などの肉を食したる後には果實の味極めて快く、從來外國にては、之等鳥獸肉の後には、林檎を食するを常とし、又そ

の調理に林檎ソースを常用するは、未だ世の開けざる昔より自然に行ひ來りたる方法なるが、今その理由如何といふに、これその菓實中に含有する酸は、よくこの濃厚なる脂肪の消化を助くる働あればなり。かくヒツコキものを食したる後には菓實等の酸味漿液あるものを欲するは、人體自然の要求に出づるものにして、古人はその天性に教へられてこれをなし、今は學術開けて何故古人がこれを用ひしかの理を教へ、又この學術は、今の人に向ひ、更に現在よりもなほ多く菓實を食し、以て他の食物消化の助けとなせよと勸告するなり。

栽培せる葡萄、梨、櫻桃、草苺及び桃等の如き菓物は、最もよく類似せる成分を有するものにして、卽ち、その百分中大略左のものを有せり。

葡萄糖	八
ペクトーン	三
林檎酸其他酸類	一
肉を組成する蛋白質物	一
水分	約八〇

食物の消化するは、胃中にある胃液と、その中にある酸の作用によるものにして、脂肪はその酸類及び肝臟より分泌する膽汁の助によりて消化す。而して、菓實に含有する酸及びペクトーンは不思議に胃中の酸を助くるの特性あり。

英國王室に於て、茶の中に檸檬（レモン）の汁を砂糖に代へて用ふるに至りしは近來のことなるが、消化

力の弱き病者に、檸檬液を與ふることは、廣く一般醫師の間に行はるゝに至れり。これその菓實中には最も多くこの酸を含有するによる。菓實が人體に及ぼす更に他の大なる作用は、卽ち血液を清め、その壞敗を防ぐ點にして、これを稱して壞血病豫防作用（アンチスコルビュチック・アクション）といはんか、これその身體を健康體に保つに最も要用なることとす。檸檬液がよくリョーマチスを治することは、學術上より發見せる事實なるが、某氏（ヘンリー・ベンジヤフイールド氏）の如きは現に十五年以前より頑固なる痛風に惱まされ、その間の實驗によりて、菓實を食ふより得たるところの利益は反覆これを證明するに憚らずと云へり。

英京ロンドンにて、痛風治療の大醫ガーロツド氏は、毎にその病者に向ひて、オレンヂ、檸檬、蜜柑、草苺、葡萄、林檎及び梨等を食すべきことを勸告す。佛蘭西の大醫タルジュー氏は、菓實中に含有するポツタース鹽類は、リョーマチス及び痛風患者等の體血を清むるに最も重要なるものなるを證せり。世の開進せる今日にありては、古來未開の時代よりも、腸胃及肝臟等の病氣、頭痛、不消化、便泌等は最も多く人々を苦しむるものにして、これがために、その平常を不愉快にし、天然を縮むるもの甚だ多し。もしこの人々にして、一度菓物を用ひんか、その狀態全く一變するを見む。

都會の裏街に至れば多くの色青ざめたる人々を見る。彼等は固より充分なる食物を用ひをれり。唯、要するところは菓實の不足せるにあり。

小兒には菓實は最も有要なる補食にして、その體に壞血病の如き症狀を呈したる時、唯一の療法は、菓實と新鮮なる蔬菜とあるのみ。今より更に醫術學藝の進むに至らば、現今よりも一層多く菓實を藥品に供するを見んとは、普く識者の認むるところなり。

不純粹なる血とは、卽ち、痛風、リョーマチス、皮膚病等の謂にして、菓實はこの血液を清め、その性質を改善するが故に、菓實は卽ち、食品と藥劑とを兼ぬるものといふを得べし。

熱病患者には葡萄及び草苺を少量づゝ幾度もこれを與へ、もしそのなき時は、オレンヂ及び燒林檎を與ふれば效ありといへり。

リョーマチスには檸檬最も特效を有し、榮養衰へ顏色憔悴せる少女には、日々少量の草苺を與ふれば恢復すれども、もし然らざる時はバナナを與ふるもよし。このもの多量の鐵分を有し、最もよく效を奏す。

有益なる菓物は頗る多しと雖も、苹果（りんご）は最も貴重にして、最上の地位に立ち、他の柔らかなる菓實（草苺の如き）と同樣なる有效成分を保てり。蓋し歐米に於て林檎の貴重せられたるは、古き昔よりのことにして、夙に養老回生の效ありと稱せられ、スカンヂナビア人の口碑に「林檎は神の食物にして、神はこれを以てその身體精神を養ひその衰弱を避けたり」と稱し、又、古諺に「寢る時一つの林檎は醫者を乞食にする」とも云へり。獨逸の一分析家は曰く「林檎は他の菓實に比し多分の燐を

含有す。この燐は肝要なる神經組織、腦及び脊髓を更新するの力著し」と。

林檎の日本人に特に有益なるは、その酸たるや、平常多く坐り勝にして活潑なる運動をなさず、隨つて肝臟の働きの鈍きものに特效ありとのこと、これなり。林檎酸は、既述の如く血分を清め有害物を排除す。この有害物は體內に留まり、腦を遲鈍にし且つ憂鬱ならしめ、又、黃胆或は他の疾病をも起すものなり。よく熟したる生の林檎は、八十五秒に消化し終るといへり。

洋種梨は林檎よりも一層消化よきが如く、その生菓は最も可なりと思はる。乾したる果實は、新鮮なる生菓實のなき時に用ひて宜しく、これを調理する前暫時の間水に浸す時は、殆んど生菓と同樣の效を奏し、且つ廉價に當るならむ。

以上述べたるところは、根據なき空論に非ずして、實驗に徵し、學理を考へ、最もその確實を認むるものなり。これによれば、菓實は無益の贅澤品に非ずして、人の身體健康に最も貴重なるものなれば、その栽培は益々これを擴張し、市場には一層その品種を多くし、價格を低廉にして需要の道を開き、且つその種類を改良するの必要を悟るならむ。又、今後人事頻繁となり、人の心身を勞する多きに至れば、肉食の風も盛なるべく、隨つて菓物の需要も一層多きに至り、その栽培は必要にして且つ利益あるを見るべし。

人もしその家屋衣食を見て文明の程度を卜すといはゞ、余は直ちにその食卓を見てこれを卜

し得ると云はむ。菓實累々として庭園に垂れ、採つてこれを食卓に上すものは、その人必らず強く、その國必らず文明なり。我が國の古諺に「蜜柑が赤くなれば醫者が青くなる」といふことあり。蓋し夏時の炎熱全く去り、清風明月、天高く氣澄みて、血行順を得、運動身に快く、人自らその健康を恢復し、病者の數を減ずるの謂なるべきも、亦溯つてこれを他の廣き意味に考ふるを得んか。

百菓園に滿ち、毎に新鮮の果實を廉價にて供給するに至らば人の身體を健康にし、藥餌用なく、自から醫治の煩を減ずるに至らむか。玆に於て前の俚諺たるや、單にその氣候のために云ひたるに非ずして、更に深き意あるものなることを知るべきなり。米國の俚諺に「醫師に藥料を拂ふよりも菓實を食ふ方廉なり」とあるは、卽ちこの意味なり。

人は木食上人なるものゝ往々長壽を得るを見て、不思議の事實となし、所謂仙術又は神佛の加護に歸す。誰か知らむ、木實はこれ最上の仙食、水はこれ最上の飲料なるを。

肉食のために齒を損するの大なることは、その道の人の說くところなるが、元來人の齒はその構造肉を食するやうに造られず、穀菓を食するに適するやう作られたりといへり。

余輩は、單に之等の說に溺れず。又かの菜食論者（ヴエヂテリアン）の如く絶對的に肉食を非難するものにあらず。唯、菓實はこの滋厚なる肉類若くは穀菽と合せ食して、その消化を助け、身體の榮養を維持し、健康快樂を得るに大いに必要なるもの、卽ち、食品と藥劑を兼ねたる貴重品なるを信ずるものな

り。

第八話　家禽に割勢術を施すべし

——明治二十八年十一月

牡性動物の睾丸を割去するは最も利益あることにして、牛、馬、豚、羊及雞等皆之を行ふを得べし。蓋し睾丸を割去するの一事は最も古くより行はれたる所にして、牡馬に之を行ひたるは埃及に始まり、猶太に傳はり、その希臘に行はれたるは、今より千五百餘年前アプセルクスと稱する人に始まり、是より歐洲諸國盛に之に倣ひ、種用の外は悉く之を行へり。英佛二國の如きは最も盛に流行し、この施術を專業とし、各家の依頼に應じて割勢をなすに至る。

我國牡馬割勢の實施は、享保年間の事とか、長崎に和蘭の船舶來りし時、この船の醫官より同港の人民に傳習せるに始まりたり。故に本邦に於て之を實地に行ひたるは、長崎を以て嚆矢とし、同縣人士に就きて質すも割勢は慥かに維新前より行ひ居りしといふ。我農商務省農務局にて牛馬睾丸切斷手續書を各府縣に頒ち、種用牛馬の外凡て使役に供する牛馬の割勢を奬勵したるは、去る明治十五年のことにして、是より頗る全國に行はるゝに至れるも尚未だ盛なりと云ふを得ず。

割勢の效能　凡そ牡性動物の睾丸を割去すれば、第一身體を肥滿せしめて肉味を改善するを

以て、肉食用の牛鳥豚雞等には最も宜しく、第二其性溫順となり且つ春情を失するが故に、之を牝と雜居せしむるも譁ぐことなく、極めて使役に便なりとす。第三割勢は繁殖用の見込なき劣種のものに施すものなるが故に、その已に割勢せるものはその血液を他に交ふるの憂なし。これ割勢の利益なり。

頃日、農學士山田幸太郎氏が前年自ら試驗せられたる割勢雞の記事を見るに、その割勢をなしたるは二雞にして、同時に一羽の對照雞を、同一の餌料、同一の方法にて管理せるに、甲の割勢雞は五十六日間に體量二百二十匁を增し、乙の割勢雞は三十日間に體量九十五匁を增加せるも、對照雞は甲の二百二十匁に對し同期日間に百四十匁、乙の一日平均三匁一分六厘餘宛增量する間に於て、對照雞は二匁五分を增加し、甲は一日に一匁四分宛、乙は一日に六分六厘宛を利せり。

割勢雞の肉味は美なり　已に增量の利ありとするも、その味にして美ならざらんか、これ恰かも劣等稻種を作ると同じく一方にその利益を殺がるべし。然るに割勢雞の肉味は通常のものに比して更に美なりとす。これ誠に一丸を以て二鳥を獲るものなり。

惜しむらくは、我國は未だこの術盛ならざるが故に、その比較相場なきも、米國紐育にては、通常の雞肉一斤十六錢乃至十七錢の時、割勢雞は二十一錢乃至二十二錢の價を有し、時としては三十錢の價を保てりといふ。

今こゝに一家あり、雄雞五羽を飼養し、之に割勢術を行ふとせんか、之によりて百匁の體量を增加するは容易なり。且つその肉味美なることを以て價格亦騰貴せん。その牡雞一羽は百匁ありとし、百匁の相場六錢とすれば四十八錢なり。今その割勢によりて百匁を增量し且つ相場も二錢を增すものとすれば、その一羽の總價金七十二錢にして、その利益は二十四錢となる。故に五羽の高にては一圓二十錢となるなり。一村戸數三百戸ありとし、平均五羽の雞を飼養すれば前と同樣の割合にてその總額は三百六十圓に上るべし。

我國人口四千餘萬、この戸數八百萬、今各戸五羽の雞を飼養し且つその飼養者全國戸數の半數、卽四百萬戸とする時は、その雞總數は二千萬にして、一羽の利益を前の計算によりて二十四錢とする時は、實に二百八十萬圓なり。

今又牛に就いて算せんか。全國に於ける牡牛の總數概略四十萬頭、各一頭の重量四百斤とし、その相場を百斤五圓とし、去勢によりてその價二圓を增すものとすれば、その割勢によりて得る利益は實に三百二十萬圓なりとす。もしそれ牛と雞とを合算せんか、正に六百萬圓に上る。嗚呼この六百萬圓、我國の今日に於て小なりとせんや、將又不必要なりとせんや。かく打算し來らば、この割勢術の如何に利益あるかを知るに足らむ。

割勢雞は飼料を減ず　それ身體はその運動に從ひ日々消耗するものにして、人體の如きは七

年間に全く一變すといふ。而してこの消耗分は食物を以て補はざるべからず。今この割勢雞の肥滿するは、これ亦多食するがために增量するに非ずやといふに、實際はこれに反し、割勢せるものは食餌の量を減じ、しかもその肥滿の度合は通常のものに優れるなり。蓋し運動不活潑となり。從つて身體各部の消耗を減じ、その結果遂にこゝに至れるものなるべし。

施術の難易　動物に割勢を施すは難事なるが如くに思はるれども、熟練せば決して難きに非ず。殊に家禽の如きにありては、少しく熟練せば、その二三十羽に施すは僅々二三時間にしてなすを得べし。その要する所の器具亦頗る簡單にして、唯一個の解剖刀とピンセツトあれば足れりとす。

牛馬にありては、熟練せざる間は稍〻困難なるを免れざるを以て、初めは先づ專門家に託するを可とすれども、家禽に至りては、よし之を誤るも直ちに食用とするを得べく、最初二三羽を犧牲にするの決心あらば、必らず之に熟練するを得べし。

世には動物天授の體を傷つけ、その一部分を割去するものなれば苦痛を與ふべく、頗る殘忍なりといふものあらんも、これ誠に婦女子の言のみ。雞に割勢を施すや、その雞はさまで苦痛を感ぜざるが如く、施術終るや欣々として食を啄み、爾後數日を經て漸々身體の肥滿を來し、又前日の如く爭鬪をなすことなく、溫順に他と遊び、最もその生を樂しめるに似たり。

今や肉食のこと漸く盛にして、肉類缺乏してその價日に高し。この際割勢を牛馬豚雞に施すは、一家一國に於ける一大經濟たるを信ずるものなり。

——明治二十九年三月

第九話　更に躍進せよ

小兒をして驚ろかしむるなかれ。その事、或は永く小兒の畏怖するところとなり、その體力精神儼として外界の敵に堪へ得るも、なほその事柄に對しては畏怖恐懼の念を持つに至るべし。

魯西亞帝國建設の英傑ピーター帝と覺ゆ、その幼時母に抱かれて同國某の瀑布に遊ぶ、兒の眠り方に濃やかなるの時、瀑下忽ち響音に驚かされ、俄然聲を擧げて號泣し、母や侍女やこれを慰むれども止まず。王の豪邁なる、荷蘭に船工となり、備さに艱難を忍び、よく辛苦に堪へ、砲聲、吶喊、聞いて以て鵜聲となすも、唯瀑布の響は、これを聞く毎に不知不識身に粟を生じ、一種恐怖の念を制し得ざりしといふ。

余もと不肖、識なく膽なし。而して特に犬を恐る。母は云ふ、祖母汝を負ひて市に至り、惡犬に噛まる。これより汝犬を見れば泣く」と。以て人一と度幼時に於て斯の如きことあれば、生涯その人の畏怖となること少からず。しかもその人の體力意識は、優にこれを抑へ得る餘裕あるも、なほ且つこの恐怖心あるは奇といふべし。

東京は人文の淵叢なり。地方の少年氣壯に意傲る。以爲らく、天下亦與し易きのみ。京に上り、議論を上下し、名士に頡頏せんと。しかも一と度京に上れば、その所見淺薄陋隘、未だ以て大家の門にも達するを得ず。こゝに於てか氣挫け意沮み、前日の銳氣去つてその痕を止めず。後、この人學漸く進み、識漸く高きも、なほ前日の畏怖心に襲はれ、自ら長循蹈退する傾向あり。而して一と度人に迫られて論戰を試み、首尾よく勝を制するや、意忽ち昂り、氣更に傲りて又勉勵研究を事とせず、その小成に安んずるものあり。

我が日本は古來遠く東海の上に僻在し、交際未だ開けず、維新の前、外舶來つて交を乞ふや、我鎖國を主張し、外夷にこれを諭し、聽かずんば卽ちこれを國外に放逐すべし、その勞蓋し一擧手のみと。而してこれと戰ふに及んで、かの軍人の素養ある隊伍の齊整、規律の嚴肅、以てその軍器の精良に至るまで、到底我の敵すべきにあらざるを見、又その文運の隆盛、學術の深奥なるを知り、前日の傲氣全く折れ、自ら節を屈してこれに學び、百事その指示に從ひ、拮据多年遂にその奥に達し、學業識見往々出藍の譽あり。しかも自己は尙前日の畏怖心に襲はれ、自己の貫目を知らず、依然として外人崇拜の風ありき。

然るに前年一と度淸國と戰を開くや、曩には佛國を困らせたる同國を微塵にし、これをして俯伏哀を請はしむるに至り、これに加へて內には文學、技術及び商工の業勃然として發達し、往々外

人を驚ろかし、殊に本邦の貨物は盛んに海外に輸出されて彼の製造業を壓し、今や各種の點に於て彼等外人を凌ぐの勢あるを以て、初めて我が國の實力を知り、大いに自重の風を起し、敢て漫りに屈辱に甘んずるが如きことなきは最も喜ばしきところなり。

人、自重の心なかるべからず。自己の品位を保ち、威嚴を存し、自己に相當するの敬禮を享くべきは、吾人が自己に對するの責務といふも可なり。國亦これに異らず、已に自己の地位勢力、列國と相等しきを知らば、又これに對するの幸榮を保つを要す。而して、この際に於ける吾人の注意は、所謂小成に安んぜず、益、進んでその奥に達するにあり。もしその僅かに得たる結果に甘んじ、倦怠の念を生ずれば、進歩忽ち止まり、後者却つて前者となるも知るべからず。

それ我が國の學術、技藝及び商工の業頗るよく進歩せりと雖も、固より以てその極に達せりといふべからず。殊に我が農業改良の如き、余輩は時に天を仰いで浩嘆することあり。知らず、何年の後、吾人の望みを充し、農圃の幸運を見るべきや。海陸の戰器は改良せり。田圃の農具は如何ぞ。文武の教育は進歩せり。農家の知識は如何。粗惡なる種子を蒔き、肥料、勞力を空費するなきや。劣等なる菜菓を植え、その結果に臍を噬むものなきや。その進歩し發達せる文武の學術技藝に至りても、亦なほ足らざるところなきか。

米國前統計局長にして、今はクリーヴランド・ウオールド新聞の社主兼社長たるジエネラル・ボ

ルター氏、先日我が國の形況視察のため來遊し、我が國に於ける各般の事情を視察せり。吾人は氏と舊識なり。その請ひに應じて、これを東京市に於ける各工場及び上州桐生邊の機織場に伴ひ、その實況を示したり。

氏は相當の讃辭を吐けるも、その豫想は實況よりも高かりしにや、視察後語るらく

「然り、貴國の商工業は隆盛なり。又よく發達せり。然れども、余を以てこれを見れば、君等はなほ一段の奮勵を要す。卽ち、これを歐米の工場に比すれば遙かに劣れりといふに憚からず。この際もし歐米の精巧なる機械を携へて工場をこの地に開かば、貴國の商工業者、よくこれに壓倒さるゝことなきか、これ窃かに危ぶむところなり」

と。氏がこの言敢て新奇なるにあらず。しかも今日、戰後の經營、實業奬勵をなすべき時に當りてこれをいふ。吾人亦一顧の勞を惜しむべけんや。

機械は人力を省き、入費を減じ、よくその事業を有利ならしむるものなり。人一と度これを用ひてその利を知れば、後復びこれを棄つること能はず、却つて已れがこれを以て知るの遲かりしを悔ゆるものなり。

前年來、各府縣に於て農事教師を聘して耕耘の術を研究するもの少からず。而して牛馬耕を新たに試みたるものは、皆その利を喜び、前日の迂愚を笑へり。今日、我が農業界に於ける機械の

進歩は、特にその遅々たるを覺ゆ。一と度歐米の農具を輸入し、官、特に農具製作所を設置したりしも、今日これを用ふるもの極めて少く、依然として祖先の耕具を以て農事を營む者滔々たり。泰西大農仕掛の農具は、直ちにとりてこれを我に用ふべからざるものあらむ。しかもその內にはなほ棄つべからざるものを存す。現に北海道を初め、內地にても、今に至り漸次この種農具を用ふるものあるに至る。今や我が國は版圖新たに加はり、拓植務省開設せられ、外國との交通益々繁く、これにつれて內地人の不足を來し、その勞銀甚だ昂騰せり。今より數年の後は、更に高價となるも、決して低下することなかるべし。

されば農業の如きも、復前日の如く安價なる人夫を使ふ能はずして、需要一層增加するに至らば、さなきだに利益なき農業は、こゝに至つて一段の不利とならむ。而してこれを濟ふは精巧なる機械あるのみ。

曾て米國南北戰爭の際、壯者走つて軍に從ふや、老幼家にあつて田圃の耕耘に從事するも、なほその力足らずして、漸次荒廢に赴くため、種々の工夫をめぐらし、遂に幾多便利の機械を製出してよく人力を省き、田圃の收穫を增し、富强の基を開き、糧餉を足し、以て奴隷解放の事を全ふし、戰後農事の面目を一新して至大の發達を現はしたりき。我が國の今日、亦これに類するなきや。戰後經營の談は嘖々として人の話頭に上り、實業奬勵一般にその要を認む。吾人はこの際農業に

精良なる機械を用ふるの誠に要用なるを認む。而して農事試驗場の如き亦この機械調査の上に力を致されんことを望むものなり。

日本は已に成長せり。又、幸にして畏怖の念を去れり。唯、戒しむべきは偸安の念、小成に安んずるの心にして、更に必要なるは、この際更に精巧なる機械を用ひ、農工の業に一段の進歩をなすにありとするなり。

——明治二十九年五月

第十話　事業の成敗

晩近我國戰勝の餘波、經濟界の膨脹に伴ひて、種々なる現象あるは、吾人の親しく膾炙するところなり。企業と云ひ、發會と云ひ、これ亦實に今日の流行に屬す。吾人祕かに邦家の爲この幸機運に向ひしを喜びつゝ、又祕かに憂ふるところなき能はず。今日滔々たる天下幾萬の企業家、果してよく事業そのものの性質並びにこれに對する自己の確信を誤まらざるや否や。これ吾人が常に憂ふるところにして、又聊か大方諸賢と共に考究せんと欲するところなり。

元來人生は無益なる夢幻の爲、又は利己一片の爲に消費さるべきものに非ずして、實に高遠なる義務を有し、吾人各自の境遇を改良進歩せしめ、よつて以て人類社會を裨益せんが爲に存在するものなり。

斯の如く大責任ある吾人人類は、又各々生れながらにして各自天與の天職と、これに伴ふ責任を確認せざるべからず。苟くも各自の天職卽ち事業に向つて一身を投ぜんとするや、必らず之に對する熱心と完全なる秩序を要すること云ふをまたず。

西哲の云へるあり。「人事成功の度は常に敢爲と力行の度に比例す」と。又曰く、勤勉と敢爲は磐根をも引裂くべき楔なり」と。

古來洋の東西を問はず、今日に至るまで、身匹夫より起りて遂に大なる財產を作りしもの、或ひは一介の貧生よく十九世紀の學術界を一新せしもの、若くは稀代の名譽を博し顯榮の地位を占めしもの、其他斯の如き成功者枚擧に遑あらずと雖も、畢竟ずるに彼等が成功の要素は、均しく皆これ人生に對する適當なる解釋を抱有し、各自の天職に向つて熱心と秩序を保ちし結果に外ならず。

人往々福澤翁を指して拜金宗に擬するものありと雖も、吾人の觀點を以てする時は、翁の人生に對し理財に對する解釋は自ら別天地を存するものの如し。之に反して世に往々失意者失敗者を見る所以のものは何ぞ、他なし、彼等自ら人生に對する解釋を知らず、如何に自己を處すべきかを知らざるの結果は、遂に不秩序なる處世法となり、不秩序なる處世法は無論秩序ある結果を來さざるが故に、彼等は益々倦怠に陷り、成功の祕訣なる熱心と秩序とは全く跡を絕ち、而して遂

に全く失意失敗に陥るに至るを常とす。

經書に曰く「荊棘より葡萄の美果を收穫するを得ず」と。蓋し收穫の善惡は種子の善惡を示すの謂にして、人事も亦これに均しく、成功はこれに伴ふ要素なかるべからざるを示すものならずや。世人苟くも口を開けば卽ち曰く「富國强兵は苟くも邦國の體面を維持せんと欲するものの最終唯一の國是なり」と。それ然りと雖も、吾人は未だ國民各個人の富强なくして果してよく一國の富强を致したるものある例を聞かず。況んや各個人の頭腦未だ自己の何物たるかをだに識別せざる國民を有する邦國にして、いづくんぞよく世界に雄飛するを得んや。

然らば卽ち吾人各々人生終局の解釋を明らかにし、各自がとるべき天職に向つて秩序を保ち、忠實に勤めて以て之が成功を期するは、これ實に國民の本分なり。かくして以て上　聖主に報じ奉り、下各自を滿足せしむるに足る所以ならんか。吾人は斯の如くにして初めてよく口、富國强兵を談ずべく、筆、經國濟家を論ずべきなり。

嗚呼、吾人人類の踐むべき大道は、確信と秩序と熱心とを以て裝はれつゝ吾人の前にあり、吾人苟くもこれが大道により正しき方針に向ひ、眞實卒直なる精神を以て努力せんか、事業は必らず成功すべく、又成功すべき天祐は必らず吾人に降らんとす。

——明治三十年二月

第十一話　感化力の重要性

自然の勢力を運用して、以て社會を改造せしめたるその事蹟は、史乘を照して千古朽ちざるの功績にして、當世にありては勿論、後世の人にも倶にその恩澤に浴して、皆々欣仰追慕するところのものたり。然るに、かく欣仰せられ、追慕さるゝ勢力の原素は那邊より生ずるやといふに、その由來は固より種々あるべけれども、就中、俗に所謂一個人の有する感化力に優るものなしと信ずるなり。

仰ぐこの感化力は、靄然としてその人の周圍に浮動しある一種の動氣ともいふべく、精氣の萃なるところ、他を感化誘導するの勢力とはなれるなり。而してその人自己に於ても、かく強烈なる勢力のその內に存在しあるを覺知せざるべし。蓋し、言語と行爲とが、直接にこの大勢力を形成する要素にあらずして、その要素は、その人の品性そのものに準據するものなり。

稀世の偉人にして、然る後初めて感化力を他に波及する資力を具有するにあらざるなり。絶倫の手腕家にして、然る後初めて感化力を縱橫に發揮すといふにもあらざるなり。而して吾人は社交上到る處にその勢力を發見し得るは何ぞや。畢竟ずるに、さまで英雋と目されざるにもせよ、誠意誠實なる品性を有するの人は、我識らず人知らずの間に他を誘導するところの勢力と

なり、社會を結合さする一大連鎖となり、領袖となり、指揮者となり、遂には社會の大勢力はその感化力の指示する方向に漸進するに至れるこそ爭はれぬ事實たるなり。

感化力の鋭鋒の烈しきこと斯の如し。しかも歴史はこの偉人を指し示さず。同時に生存する社會の多數は、その人に逢へども未だその恩澤を承認するに至らず。とは云へ、この偉人は絶えず社會を改良し、又社會を幸福なるものとなし、啻に現在なるのみならず、吾人の後に來るところの社會に向ひて福祉の種子を蒔きつゝあるものなり。

以上の語を以て、感化力を有する人の勢力を列擧し盡したるにあらず。凡ての成功はその人の跡に纏ふて現はれ、凡ての益友は又その人を追ふて集まり、實業家は喜こんでその人の後に從はんことを請ひ、資本家は樂しんでその人の計畫せる事業に資本を投ぜんことを求む。而して社會の進歩と改良とは、これに伴ひて成就せらるゝなり。それ斯の如くんば、假令一二の反對者ありとするも、大勢の向ふところ、これに抵抗すること能はざるは、自然の定數にして、恰かも月の位置に從ひて潮の滿干するが如く、衆星の等しく北辰に向ふが如く、一個人の感化力は擴がりて社會の原動力となり、社會は個人によりて、轉遷變動しあるは顯著なる事實なりとす。

飜つて國勢を通觀するに、戰勝の餘波として、新事業は隆然として興り、改良と稱へ、進歩と稱し、競ふて他を制せんとする有樣を見るは、表面甚だ賀すべきに似たれども、その半途にして斃れ、或

は羊頭を掲げて狗肉を鬻ぐの類蓋し鮮しとせず。思ふに、誠實熱心事に從ふにあらずんば、到底最後の勝利を占むること能はざるは見易き道理なるに拘らず、眼前の小利に眷戀して、永久の福祉を度外視せるに至れるは、吾人の甚だ遺憾とするところなり。故に、國家永久の福祉を期して自ら任ずる偉人ありて、中天にかゝる玉兎となり又北辰となりて萬生を指導し、訓誡せられむことを望むや切なり。

況んや、禾耜を執りて耕耘に從事せる者は、大抵奇利を冀はず、輕浮に失せず、一言以て盡せば、純然無垢の良民たるなり。世間の利勢に關せざる樂土の民たるなり。この民と共に計り、この民と共に進んで、以て國家無限の福祉を增進せしめんと期するは、豈亦樂しからず乎。近來、勳賞局處定の綬章を授けらるゝ老農及び篤志家の頻々輩出するに至りたるは、吾人甚だ滿足に堪へず、滿腔の熱誠を以て賀詞を呈すると共に、この偉人の勢力は、陰に陽にその地方人心の好指南たるを信ずるものなり。今や世界の大勢は激烈なる競爭となるにつれて、國費の負擔は愈〻重からざるべからず。されば吾人は益々農事の改良進歩を計りて以て收穫を增進せしめ、この重き負擔を避けざるべからず。吾人は切に地方人士の、先輩偉人諸氏と共に提携奮發して斯業に精勵せんことを望みてやまざるなり。

既に論ずるが如く、精誠なる品性は、實に社會の原動力たる大勢力を有するの效力あり、然れど

もこの品性は卒爾瞬間に得らるべきにあらず。その見るところ、その聞くところ、その思ふところ、その談ずるところ、類積疊重して一種の固有品性とはなれること、恰かも有機物が地上に落ちて、漸次膏腴なる土壌を形成するが如く、細微たる珊瑚蟲の遂に一大島を形成せるが如く、侵潤の久しき、かくその人の固有性を變じて一大勢力あるに及べるものなり。周の大成したるは、その初め大王の狄人を避けたる美徳に起因し、威權赫灼たる羅馬帝國の覆沒は、その初め道徳の腐敗したるに原因せることを知らば、吾人の微細なる行動も、他日積りては有爲の勢力となれるものなることを思ひて謹誡せざるべからず。

曾て「余の他に及ぼしたる感化力を採集して余と共に埋沒せよ」と、死期に臨んで絶叫したる青年あり。されどその語も果して何の效かある。すべて善にもせよ、惡にもせよ、一度內外に現はれたる行爲言語は、如何なる手段を以てするもこれをとり返す能はず。所謂駟も及ばざるものにして、死後と雖も滅沒し得べきにあらず、その感化力の波及せる範圍は、極めて永遠にして、且つ極めて微妙の裡にあり。吾人はその結果を現在に受くるのみならず、吾人の子々孫々は、吾人のなしたる結果によりて、善を受け又惡を受くるにあらずや。

雜草の種子の數百萬は風の間に〳〵片々と飛散して吾人の眼界を離れ去るとも、何時しか吾人の門前に哀れなる收穫を見るに至るべし。一度飛散せしめたるの種子は、復た掌に還す能は

ず。吾人の思想、言語、行爲は、電信又は雜誌の如く、宇宙に向つて毎瞬時發送するところの種子なり。されば、吾人の責任は極めて大にして、吾人の義務も亦多しといふべし。而して、地方の先輩諸君は、已にその地方に於ける北辰たり又主動者たり。諸君の一擧手一投足は累積して善果を構成するの微分子たるべきなり。然らば卽ち、彌が上にもこの潛勢力を張皇して、以て現時社會の潮流と共に進むのみならず、この進歩的潮流を組織するところの原動力たらんことを望むものなり。

——明治三十年三月

第十二話　國費を以て種苗を配布せよ

戰後の經營として、百般の事業を勃然として擴張すべきは、現今の世界大勢上避くべからざることとして、何人もこれを首肯すべし。さてその經費の支出方法はといへば、農工商業よりするといふの外なかるべく、我輩も亦その負擔を辭せざるの覺悟なり。然るに從來の負擔のみにても輕からざるところ、更に加重せんとするには、何かそれに相當なる方法を設けて、この苦痛を輕減するの策を講ぜざるべからず。

その方法としては固より萬般あるべけれども、興農事業は最も切要に、最も正確に、又最も行はれ易かるべしと信ず。興農事業には種々の方法順序ありて、農事試驗場を設くるとか、各地に農

會を起すとかは既に官民共に熱心に勸むるところの事業にして、我輩も亦筆を以て論じ、口を以て講じ、努めて辭せざるところありき。而して、我が國民の未だ注意せざる農事奬勵國產增加の一方法あり、卽ち、國費を以て種苗を全國に無代價にて配布すること、これなり。

元來、農家が何ほど出精耕耘しても、純良肥料を用ひても、播く處の種子が精良ならざれば、充分に好果を得る能はざることは、皆人の容易に諒解すべき處にして、我輩の贅辯を要せず。然るに往々種子の貴重なるを知らず、若くはこれを輕視して意にも介せず、只管に働きさへすれば、種子の精粗に係はりなく收穫あるものなりと信ずるものあり。現に、頃日我輩が府下某郡の農談會に臨みて一場の演說をなせし折、或る人の演說に「種子肥料の如きは善惡精粗を問はずして可なり。唯、朝より晩に至るまで精出して耕耘すればそれにて可なり」と眞面目に辯じたるものあり、聽衆も亦稍、感服して傾聽せしもの、如かりしは我輩の實に奇怪とするところなりしなり。

現今、文明の農業は決してかゝる淺薄輕易のものに非ず。種子の精良ならざるべからざるは、學理に學理を加へ、經驗に經驗を重ねたる上の一定不動の確說にして、その間に異議のあるべきにあらざるなり。我輩は先年、安房某地に於て、代々作りかへしたる大根種子を蒔きて、一反歩の收穫僅かに六圓を得るものを見たり。同じ大根の種子にて精良ならんには、同じ勞働と、肥料と、地質とを用ひて三十餘圓の收穫を見ること容易なるものなり。されば、粗惡の種子を用ふるは、

假令種子代に多少の差あるも、誠に不經濟の極みなることは明瞭なる事實なりとす。

今や世界の事物、一切萬事競爭を免れず。我が國農家の如きも安閑として油斷するならば、外國の農產物は忽ち我が市場に現れ出でて、我が農產物を壓倒せんずる勢あるは自然の數なり。而してこの大勢に抗せんとするには、我が風土に適應する農法を作り出して、獨り我が國の需要に應ずるのみならず、進んで海外の市場にも輸出して、かれを制するの策に努めざるべからず。近來外國に於て年々有益の種苗を繁殖して、農產の收利を增加せしめんと努めをるは誠に著しき事實なり。特に米國の如きは、過る三十年來、官民共に盛に力を斯業に盡しつゝあり。我が國にても同一の奬勵法を用ひて、農家の福利を增進せしむると共に、國產を豐饒ならしめんことを希望する次第なり。

この程到着せる北米フイラデルフイア發行の日刊新聞パブリツク・レツヂヤアは、その紙上に於て、米國政府にて種苗を配付したる事蹟と功績とを詳細に揭載せり。今その大意を記して紹介し、我輩の處論を確實にする一助になさんと欲す。

この種苗の配布方法は、米國政府にて該國に有名なる種苗販賣店と特別契約をなし、多量の種苗を買ひ上げ、これを吾國に無代價にて配布せるものなり。この業務を監督するため、農商務省にては特別の委員を派遣してその事務を執らしめ、且つ監督をなさしめしことなるが、該委員等は先づ種子の內より見本を

とり、これをワシントン府に送りてその發芽力及その純粹なるや否やを檢査せしめ、その結果によりて契約金を增減することとせり。又、契約書中には、種子一片につき各種とも幾袋を配布せられ得べきや、及び種子は純良なるものにして黴黄、麥奴蟲類の卵又は蛹なきもの、野生亞麻、野生芥子、魯西亞種薊、カナダ蘇の、びる、等の種子なきものすべて之等を有せざるものならざるべからず等の個條あり、時に監督官來りてその品物を精査するなり。もし又、種子發芽力なき時には、政府がこれに對する代價を支拂はざるは勿論なれども、純粹の程度及發芽力の規定しある程度以下の種子なる時は、その以下に對する割合に應じて價を減じ、もしその程度以下二割五分に下るものには全く代價を支拂はざるものなり。

米國に於て初めてこの法を實施したるは今より凡そ三十年前のことにして、當時農務局(當時は局と稱せり)より配布したる種子は、すべて三十一萬千八百二袋なりしが、その內上下兩院の議員へ十一萬千九百七十五袋、各地農會へ六萬四千九百七十五袋、農事通信委員へ六萬五千二百七十四袋、氣象委員へ一萬三千十六袋、其他は篤志者に配付せり。又、苗木の配布數はすべて三萬千七百本なりき。當時の農務局長ホレス・ケプロン氏(ケプロン氏は先年農業顧問として我が開拓使の聘に應じて來朝したる人物なり。この人の勸めにより苹果、梨子其他の種苗を米國より取りよせ、北海道の各地に配布して植へつけたりしが、今は盛大になりをれり)は、時の大統領グラント氏へ出せし報告書中、この種苗配布の少量にして偉大なる目的に應ずる能はざるを嘆じ、且つその配布方法を適當にして敏活ならしめんには、農產上數百萬弗の增收あるべき確たる見込あることを主張せしが、爾來氏の意見は年を逐ふて人々の耳を傾くるところとなり、その後十六年目には、配布の種袋數は總て三百六十二萬二千七百三十八個となり、內、上下兩院議員へは二百九十一萬二千七百三十袋、他は篤志者へ配布したり。然れども當時配布の種類は多からずして、野菜の種

子類は百二十種、草花の種子類は百三十一種、纖維植物の種子類は五種なるのみなりき。

さりながら、この無代配布に對しては、從來種々なる非難少からざりき。そは他なし。棉種を寒冷の諸州に贈り、球葱種を極南の地に配布して、氣候風土等に無頓着なること、種子到着の時季遲延せること、配布せられたる種子は古種、屑物にして家禽の飼料には適すべきも配布の目的には合すべくもあらざること等の非難にして、苦情も隨分多かりしが、之等の非難苦情は、政府にて種苗買上の契約書中にて充分に取締をなしたるため、無代配布の豫算案は年々議會を通過するのみならず、業務も次第に擴張され、配布を受くる人々に大利益を與ふるに至れり。卽ち、昨年の種苗配布高は從來の配布高に比して最も多量なるものなりしが、配布委員の報告によれば、蔬菜の種子のみにても郵便にて送り出したる重量は、四十六萬五千七百五十六英斤なり。假りにこれを汽車に積みこむものとすれば、荷車三十輛を要し、又、これを種苗郵稅につもる時は、郵稅のみにても七萬四千五百二十弗九十六仙に相當す。而してこの種子は、七萬三千六百四十四英町(一英町は我が四反餘)の土地に播きつくるに充分なり。もし亦三尺畝幅の全圖に隙間もなく播きつくるものとする時は、その長さ三萬六千八百十七英里(一英里は我が十四町四十間)となるものにして、卽ち全世界の周圍の一倍半に相當するものなり。當時配布されたる野菜種の袋數は千十二萬五千個なりき。

以上の數量は誠に夥多にして、最早此上の多量を要せざるが如く見ゆれども、決して然らず。今年配布したる數量は昨年に比すれば殆んど二倍せるなり。卽ち、野菜種子の袋數は、千九百五萬三千八百三十九個、草花種子の袋數は、百一萬二千五百個、穀菽の種子は二千九百二十五ヨーツなり。而してこの配布種子の內、蕃茄の種子のみにても四萬八千八百二十六英町を植えつくるだけの數量あり。甘藍の種子は四萬

二千三百四十二英町、燕菁の種子は四萬七百十三英町、砂糖、玉蜀黍の種子は一萬三千二百三十二英町の數量となりしなり。

この種子は氣候風土の異同に應じて夫々適當なるものを選びて送りたるものにして、例へば農務省にては、特にこの目的のために輸入したる埃及の棉種をば南方の地に配付し、オーストラリヤより輸入したる有益なる牧草種ソールトブツシュをば太平洋海岸の地方へ配布せるが如きの類これなり（註、東京興農園と取引をなせる米國のバーピー商會は、本年該國政府の無代價にて配付せる種子全量の三分一だけを請負ひて該政府と契約し、太平洋岸、ロツキー山及東方諸州の配布を引受けをれり。本年一月中、興農園より該商會へ輸送したる朝顏種子三石餘も米國の之等各地方へ配布せられたりとの報あり、されば今や我が國の朝顏は曉起庭園を漫歩せる外客に接して、旭光を浴びつゝ幾多の稱讃を得るならむか）。

各議員が本年領收したる野菜の種子は、四萬袋、草花の種子は二千袋、穀菽の種子は二百五十コーツなり。而して各議員はその受領したる種子を自己の選擧區民其他へ配布するを常とす。

以上記載せる如く、米國にては上下擧つて農事を奬勵して、その產額と價値とを增加せんと努めをるは實に感服に餘りあり。我が國に於ても、既に一縣若くは一郡に於て、地方稅目中、種苗購入費の一項を置きて種苗を購入し、その地方へ配布して利益を得たることありと聞く。さりながら、未だ適當なる方法を見出だざるがために、充分なる好果を見る能はざるが如くなれどもこは方法の問題なるが故に實際上好成績なる以上は、何ぞ好方法を見出すに難からんや。苟くも方法適當ならんには、農業を進め、農業を豐ならしむること、必然の數なり。故に我輩は、更に一

地方に限らず、國費を以て普く全國に實施せんことを望むものなり。

我が農務局に於て、外國麥種の配布ありてより以來、僅に數年間に、全國の麥種を一新したる如く、穀菽、蔬菜、草花の種子及び苗木をも彼の米國の方法に倣ひて配布するに於ては、その成績の顯著にして俄然農事を一新するに至るべきは、我輩の確信するところなり。故に、かの收穫多量なる穀菽や、甘味秀逸なる蔬菜や、清麗高雅なる草花や、利益夥多なる特用植物類や、產豐味爽なる果樹や、一旦轉じて我が農家の田園に培養せらるるに於ては、その利益を增し、その快樂を加へ、我が農事の面目を一新せんこと、期して俟つべきなり。

——明治三十年四月

第十三話　農家は品性の向上に努めよ

近年來、各府縣に於ては追々農會の設立あり、又、農家の子弟に農蠶の進を教授する學校又は講習所等の續々開設せらるゝありて、興農の機運駸々として歩を進むるの勢を示せり。斯の如くして撓むことなくんば、我が國の農產は久しからずして豐富の實を見るべく、隨つて商工の業も繁榮するの道理にして、我輩の甚だ滿足するところなり。

然りと雖も、更に裏面に立ち入りて觀察する時は、聊か農家諸子の警戒すべきものなきにあらず、請ふ、我輩、これを辯ぜん。

抑も國の隆盛に赴くに伴ひ、人民生計の程度を增加するは一定不易の道理にして、避くべからざるの道理なるのみならず、寧ろ當然の出來事なれば、我輩は或る論者の如く、今日の農家をして維新前の農家と同一の生計をせよと勸告するものにあらず、又、世人は農民の赤毛布を纏ひ洋傘に縋りて旅行するを輕嘲すれども、我輩は毫も之等に留意するものにあらず。凡そ現在の社會に相當せる勞働をなして、その報酬を得、又、現在に相當せる消費をなして衣食すべきは甚だ穩當の所爲といふべし。否少しく働きて少しく費さんよりは、多く働きて適宜に費すこそ望ましけれ。

勤勉貯蓄は、我輩が屢〻唱道する所なるが、この習慣の一日も早く農家の腦裡に印象して、着々と實行あらんことを期して已まざるなり。さればとて、我輩は役々辛苦經營するのみにして、一切快樂すべからずと云ふものにあらざれば、況してそのなし難きを責むるものにあらざるなり。唯〻相當に働きて、相當に消費し、又相當に貯蓄すべしと勸奬するに外ならざるなり。

今やこの美風は漸次各地に呼唱せらるゝに至り、次第にその勢力を得たり。されば元來卒直なる農家は、幾程もなく當然この美風に沈浸して、天眞の美德を發揮するに至るべきは我輩の信ずるところなり。然れども未だ彼岸に達せざるの今日に於ては、幾多の誘惑を廢し、私情を抑へて、一簣の功を缺くことなきやうに注意せざるべからず。故に我輩は進步發達の根源なる農家

の品行を、一層高尚に、更に堅固にせんことを希望するなり。

粮秀穮らずんば、折角の草をも枯死せしむるに至るが如く、苟くも農家の品行修まらずんば、折角に設置したる農會も、學校の講義も、薄弱となりてその功や奏し難からむ。見よ、地方の小都會は勿論、僻隅の小料理店に至るまで、所謂酌婦てふ豐頰便體の少婦、媚を獻じて嫖客の袖を引きつゝあるにあらずや。蝮蛇の毒舌、奸穢の老狐、しかも農家は衆人會合の席上、常に花として愛でらるるこそ實に奇怪なれ。豈それのみならんや、微雨蕭々の夜、孤燈の下に喃々たる愚痴は、暴露して一家の騒動となり、世間の物笑となり、遂に醜聞を新聞紙上に流す者往々これあり。如何にも嘆かはしき限りならずや。

すべて何業にあれ、一家協心盡力、又團欒和合して從事するにあらざれば、繁榮すべきにあらざるなり。特に農桑業の如き最も然らざるを得ず。然るに、家の主人、又は子息にして、放逸流連、白首の賤婦に心を有頂天にせりと云はゞ、一家忽ち家業を放擲して修羅場を現出せんこと、誠に當然の行き懸りといふべく、自ら作せる禍にして、家道の衰滅は自然の數ならざるを得ず。而してこの惡風が現今專ら流行せる以上、我輩として默して已むべきにあらざるなり。

然らば如何にして地方の道德上の空氣を清め、德行を奬勵して、この陷り易き弊害を防遏し得べきやといふに、我輩は、地方の先覺者の勵精盡力によりて、左の諸項を實施せられんことを希望

するものなり。

(一)老少擧つて斯る賤業者を輕蔑して近寄らざるは勿論、醜猥の語を發せざるやうに謹まざるべからず。又、農談會の宴席上にて地方の先輩長老として崇まるゝ身分にてありながら、禿頭を擦りつゝ世間憚からずに醜猥の語を談じ居るは、甚だ見苦しき次第のみならず、不知不識の間に後進の少壯者を左道へ引き入るゝの媒介となるものたる故に、儼として之等の不都合なる擧作を謹誡せざるべからず。

(二)賤業者の繁榮する所以は、畢竟その地方に嫖客多數なればなり。されば賤業者を廢滅せしめんとするには、嫖客の數を減ぜしむるに如くはなし。故に地方の農家は、擧つてかゝる賤業の家に出入せずと誓約するを得策とす。もしこの約に違ふ者は斷じて相交することをなさざるの習慣を養成すべし。苟くも斯の如くんば、地方の空氣を清爽高雅ならしむること、期してまつべきなり。

(三)追へども去り難き蒼蠅に類せる賤業者は、又一種の潛勢力ありて、巧みに人を引き寄すること妙なり。故にもしも離隔せる他村より嫖客の入り來りて自村の空氣を汚濁するが如きことあらむか、則ち他村と交渉して一の規約を立つるも可なり。又密賣淫の故を以て政府の干渉を請ふは最も可なり。退治の方策は種々にあるべきなり。

凡そ姪風の盛なる時は、總ての事業、決して永く繁榮すべきものにあらず。姪風は恰かも蠹毒の如し。勤勉の風も貯蓄の習も、家族の和合も、これがために一拂し去られて害惡を蒙ること然り。古昔、美術、技藝を以て當時に冠たりしグリースも、姪風一と度起りて忽ち敗滅の不運を招き、又强大を世界に誇れる羅馬帝國も、亦姪風に襲はれて脆くも、萎微するの悲運に際會せり。

愛國奉公の念に富める農家諸子、國力を衰替せしむべき惡風を千里の外に放逐し、更に日新の學術を農事に應用し、以て他日の大成を期せられよ。かくて心身爽快、德行圓滿、鹿鳴を歌ふて世界の競爭舞臺に馳聘し得べきなり。又快ならず乎。

——明治三十年五月

第十四話　害蟲驅除論

外國の昔物語に、牛と鼷鼠との譚あるは、人の知悉するところなり。その譚に曰く、或る日のこと鼷鼠は牛の虛に乘じ、一噛みしていたく傷を負はせければ、牛は怒れる角をふり立てゝ鼠の穴を鑿り穿つこと暫時なりしが、疲勞に堪へずやありけむ、我ともなしにその場に微睡を貪りけり。さるほどに、奥深く潛める鼷鼠は、得たりと走り出で、復もや一噛みを逞しうせり。牛は暴れまはり、狂ひ猛れども、何のせんすべもなかりけり。この時穴中に鼠の聲あり。

「小者必ずしも敗るゝ者なりとはいふべからず」。

この一小話、我輩をして如何に深く警戒せしむるの價値を有せるよ。

又、かの獸類中にありて暴威を弄せる北海の猛熊も、夏季に及びては蚊群に抗すること能はず、水中に投じて僅かにその襲撃を避くるを見るにあらずや。又、埃及王フハローは、その赫々たる威權に似もやらず、蠅、虱、蛙の群陸續と宮廷へ來襲せるため、遂に意を屈して、イスラエル人の國境外に出づるを許容したり。これ實に弱者とても輕視すべからず、小動物とても意外に附し去るべからざるの好例といふべし。

害蟲の農產物に害を加ふるも亦これに類せり。故に當業者の寸時も輕忽に附すべからざるものたるや明白なり。然るに我が國農業は遂に進歩せるにも拘らず、獨り害蟲の驅除に關しては、智識狹隘にして、當局者も農業者も、俱に冷々淡々、對岸の火難視するの有樣あるは痛嘆に堪へず。試みに一顧せよ。農業上最も畏懼すべきは、天災と害蟲なるにあらずや。飢饉これがために起り、餓莩これがために生ず。而して、天災は人力の如何ともすべからざるものなるも、害蟲の如きは人智を應用して以てこれを除遏し得べきものなり。現に、米獨諸國の如きは、近年學理を應用して害蟲驅除に大效を奏せるに非ずや。然るに我が國農業家の害蟲に對する觀念は、遺憾ながら甚だ幼稚なりと云はざるを得ず。農業家の多數は、害蟲は植物又は汚穢物より自然に發生するものとして、その如何にして成長するか、如何にして脫皮するか、將又その如何にして變形

するかを知らず。否、その形狀、性質、變化等を審かにせんとするもの、實に寥々たり。されば害蟲驅除法の如き、隨つて迂遠拙劣なるも亦已むを得ざるの結果といふべきなり。しかも害蟲の群を成して來襲するを見る時は、周章狼狽、これを防ぐの策をも設くべけれ、害蟲少數なる時は、恰かも害なきかの如くに思惟して、甚だ無頓着なるを見る。もし我が農產物の蟲害より受くるところの損害を仔細に調査したらんには、實に幾百千萬圓の巨額に上るべし。故に完全なる方法を以てこの害を防遏するを得ば、卽ち毎年幾百千萬圓の富を增殖し得るの理なり。されば軍艦を造り、砲臺を築き、學校を設くる等、國利民福の具もこれを得ること易々たらんのみ。然るに害蟲驅除の不完全なるため、年々歲々巨額の損耗をなしつゝあるは遺憾の極みならずや。

害蟲の及ぼす損害、毎年凡そ何程なるや、未だ完全なる統計なきを以てこれを知る能はざるも、その額は極めて多額なること疑を容れず。我が國に於て毎年產出する米の石數は、糠（うるち）及び糯（もち）を合して大體三千七八百萬石なるが如し。この內何程が害蟲のために減少しつゝあるかと云へば、全國を平均してその一割を減ずと云ふも不當にあらざるべし、卽ち、三百七八十萬石は蟲害に遭ふものにして、一石六圓とするも、その金高は二千萬圓に垂んとす。征淸の役に我が國の威武を萬國に輝やかしたる陸海軍兩省毎年の經常費は、兩省合して從來右の金額と相伯仲したる事實に想到すれば、豈忽諸に附するを得べけんや。

害蟲の割合を一割と見たるは、極めて内輪の勘定にして、その直接被る害のみにても苗代より抽穗に至るまで通常三回乃至數回の害を受け、殆んど二三割による害を受く。或る人の試驗によれば、枯穗の數のみにても一段歩につき三萬本乃至六萬本ありて、この米量五斗内至一石とす。十萬町歩の縣下なれば、この害のみにて五十萬石乃至百萬石にして、その金額三百萬圓より六百萬圓に上るなり。

凡そ地として害蟲あらざるなく、年としてその發生を見ざることなし。しかも造化は又この害蟲をしてその繁殖を恣にせしめざらむがために、害蟲の敵となるものを備へてこれを制裁せり。即ち、或る種の鳥類及び蟲類これなり。蟲害の及ぼす影響前述の如く大なりとすれば、今後益〻その驅除豫防法を講ぜざるべからず。その第一着として益〻有益鳥蟲の保護蕃殖の勵行を切望するものなり。

これに次いでは人工を以て驅除する手段なるが、從來害蟲驅除の法として我が國に行はれ來れるもの、即ち、黐（もち）を以てし、網を以てし、燈火を以てし、油を以てする、何れも多少の效果なきにあらざれども、如何にせん、害蟲の性質を研究せずして施行せるものなるが故に、その效力甚だ薄弱となり、隔靴搔痒の憾みを免れざるなり。近來、害蟲驅除法發布せられ、共同驅除を施行することゝなり、現に今年も佐賀、鹿兒島等の諸縣にては已に蟲害發生のため共同驅除法を施行せりとの報

告を得たりしが、この驅除法を施行するに當りても、もし害蟲の性質等を知らずして施行すると、そのこれを知りて施すとは素より雲泥の相違あるべし。例へば、等しく夜間に施行する誘蟲燒殺法の如きも、星の炳やき、月明らかなる、晴天の夜に施行するよりは、曇天風なく、蒸し暑き夜に施行する方幾十倍の效力あるが如く、同じ勞力と費用とをかけるにしても、よくその理を究めて施行せば、その利益の莫大なること言を俟たざるなり。

——明治三十年六月

第十五話　種苗選擇の必要を論ず

同類は同類を生ずとの通語は誠に明確なる事實にして、その間毫も枝梧を存すべきにあらざるなり。見よ、我等農業に從事しつゝあるものは、種苗の繁殖上に於て常に歷々顯著なる證蹟を得るに非ずや。されば、我等は、よくこの眞理を應用實施して、勤勞の效果を增大せしめ、以て己れを利し國を益することに努めざるべからず。然るに、從來我が國農家一般の狀況を通觀するに、この理を應用して、よく施設計畫したるものは甚だ寥々稀有なるは如何にも痛嘆に堪へざるところなり。況んや收穫の消長に大關係ある種苗の選擇の如きには、殆んど全く無頓着なるを見るに至りては、默して已む能はざるものありとす。例へば、翌年の種子用に貯ふべきものは無論精選せる純品たるべき筈なるに、かゝるものは却つて市場の利を爭ふ要品とされ、粗惡物は委棄

されて辛くも翌年の種子用に供するといふ冠履顛倒の處分を見るは奇らしき例に非ず。又、種苗價格の高下にのみ屈指して、品質の優劣精粗に留意せず、「彼は此より五厘高し」、「此は彼より二厘安し」と、その毫厘を爭ひて、異日收穫の大小長短を問はず、これ亦所謂寸外暗黑—俗に云ふ安物買ひの錢失ひとこそ冷評すべけれ。

抑〻種子選擇の一事は、農業家及び種苗販賣業者の最緊要なる任務にして、農業の隆替が一に種子の精粗如何に基因せるは敢て贅語を用ひざるものなれば、當業者は精細周到に汲々乎として之が選擇をなさざるべからず。凡そ一個の或る種類を發達改良せんとするには、必らず先づ種子を選擇するの一事は、卽ちその要素なることを忘るべからず。否、單にその種族を保存永續せしめんとする企圖のみにても選種を等閑に附すべきものに非るなり。

農家がその種族を改良し、その改良したる種族を保存するに銳意すべきの理は、恰かも小兒が凧を揚ぐるに餘念なく勤むるが如くして可なり。見よ、小兒等が一旦凧を放つや、風便に乘じてはすかさず飛揚せしめ、又已に中央漂渺たる大空にかかれる際にも進退張弛應接の度を違へざるに非ずや。この一小事、よく農事改良の指針たるものなり。

元來選種には相背馳せる二個の主旨あり、一は最精良にして最多量なる種子を獲んと欲し、他は種子の最少量なるを望むもの、これなり。例へば、米麥類の種子を選擇せんとするには、藁稈の

量割合に少くして種子の多量なるもの、穗は長大にして發育健全に、且つより充實したるものを標準とし、その穀類に適したる土地を選びて丁寧に栽培し、丈高からんよりは寧ろ強健に成育するを旨とし、充分なる場席を與へ、且つ適應せる肥料を施してその成熟を全からしむ。此の如く深慮して耕耘すること年を遂ふて之を重ね、精選を屢〻する時は、その種類は改善の結果として著しく產出力を增加し、遂に卓越せる新種類を獲るに至るものなり。已に改善し得たる新種類にしてその位置を永く保存せんとするには、亦常に種子の精選に注意せざるべからざるなり。

玉蜀黍等の選種にも亦前述と同一の注意を要するものなり。然れども一般農家にてはさまで腦裡に留め置かず、只管大形にして善き穗をのみ擇むを以て足れりと思惟せるものの如し。これ固より惡しきことにはあらねども、それのみにて選種の目的を達せりとなすべきにあらず。卽ち、通常の方法は最大の穗を選びて種子用となせども、さてその最大の穗なるものは、一本の莖に僅か一個の穗を獲るに止まるを常とす。故に各莖ともに同時に成熟したる穗を獲るは頗る困難なり。而して、同時に成熟したる穗を用ひて、熟期の等一を圖るべきは、選種上の要素の一たるべきものなり。弱質の莖又は習性惡しきものにも時に大形の美事なる穗を生ずることあり。卽ちこは已に弱質惡性を保有するものなり。故に、之より獲たる子粒は又夫々の遺傳を生ずるの理なるを以て、完全に玉蜀黍の種子を選まんとするには、莖を刈り取るに先立ち、その丈餘り高

からず、穗は稍〻地面に接近し、穗の形の正しきもの、且つ莖の精力、葉の長幅宜しきを得たるものが卽ち强健の證左なることを知り、なほその產出の盛なると熟期の早生なるとをも識別し、何れの諸點にも欠くるところなきものを以て撰種とすべし。特に成熟期を同一ならしめんがためには、その穗を同時に採收することを要するものにして、如上の周到なる注意は一種類の植物發達上欠くべからざるものなり。

完全に成熟したる穀粒又は最大なる額の種子產出を以て目的とせる選種方法は、右に論述したるが如しと雖も、その菓を目的とせる蔬菜の選種にありては正反對の方針を採らざるべからず。卽ち、種子は最僅少にして外被なる肉質の成育を旨として選種せざるべからず。例へば、胡瓜、甜瓜等の屬せる蔬科植物は、もと暖帶地方にて生育したるものなるを以て稍〻乾燥したる暖地を好めり。故に、乾燥溫暖の地より隔離すれば、その割合に應じて生育の程度低まり、種子の產出少量となり且つその生力も僅かとなる。故に造化はこの少量なる種子の保護に努めをれり。今その次第を略述すべし。

種子の外被、卽ち肉質は、種子の幼稚時期に對する保護の爲に設けられたるものにして、成熟すれば肉質は乾燥又は腐敗して跡を止めず。元來外被は植物の必要に應じて厚薄あるものにして、溫暖地方の如く僅少の保護にて足れりとする時はその質薄く、又、寒帶地方の如く保護の重大

を要する時は厚くなるものなり。すべて蔬菜類にありては、肉質は吾人の食料となるものなるが故に、種子を產出する額の少量なればなるほど作物の目的に適ひたるものにして、卽ち價貴き品となり、之に反して種子の額多量なれば肉質減少して價亦卑し。されば蔬菜類の價値ある善良なる果實を得んとするには、種子の生力、卽ち發芽力の稍〻僅少なるものよりするをよしとするなり。促成栽培を目的とする園藝家の生力僅少なる甜瓜、白瓜、胡瓜、南瓜等の種子を好むはこの理に因るものなり。蓋し生力の強盛ならざる種子より發生したる苗は、果實を生ずるの力多く、果實の肉質亦厚く、且つ枝を生ずること少なければなり。抑も生力の程度微弱なる種子は、造化の之を保存せんと力むる度の隨つて多きこと、恰かも纖弱なる子供を病氣に罹らせぬやう、風邪を引かせぬやうに母親の怠りなく看護するが如し。かく造化は土地氣候の寒冷に應じて特別なる厚き外被もて弱き種子を保護するものなり。

茄子はもと北亞弗利加洲及び東印度の原產なるが、この植物によりて以上の理は更に明らかに證せらるゝなり。蓋し溫暖なる風土にありては、茄子の菓は種子多くして、殆んど外被の處まで充滿すれども、その栽培地の寒き北方に進むに從ひて、菓はその量を增し種子はこれを減ず。これ寒き地方にありては種子を保護するために外被を厚くして以てその種族を保存せんとする造化の働きに外ならざるなり。斯の如く造化はその種族の保存永續に銳意なるものにして、

例へば、暖地と寒地とに於ける種子の差は、暖地四と寒地一との割合にして、寒地にては四倍に菓を生ぜしめて以てその種子の不足を補ふものなり。されば、一菓中に於て多量の種子を得ることは能はざれども、食用としては却つて恰當せるが故に、蔬科茄科類の種子は寒き北方より得るを以てよしとなす所以なり。

蔬菜の形狀は風土の感化によりても亦種々に變化することあり。例へば同じ大根にても土地によりて種々の類別あるが如く、又智識他に勝れ且つ觀察力に鋭敏なる人々がその土地に應じて特殊の種類を産出するに妙を得てよく改良し、又よく保存し來りたるが如きは、現に我國各地の大根に於て見るところなり。かゝる人々がよく前述の理に基きて新種類を作り出すと同時に、舊種類をも改良するの擧あらんには、我國の農業竝に種苗の前途は甚だ多望なるものあるべきなり。

以上縷述したる事實は獨り蔬菜にのみ適應するものに非ず、凡て他の植物にも應用せらるべき理なるが故に、選種の一事が甚しく緊切なることは自ら明らかなりと雖も、斯業者が幸に新良種類を發見するに至りても、苟くもこれを等閑に附する如きことあらんか、多年の勞苦も僅か一二年にして粗惡なる原狀に復して空しく水泡に歸するの悲境を呈するに至るべし。故に斯業者はよく努めて寸時もこの理を腦底より去らしむべからず。

種子交換の事に於ても、氣候風土の如何を問はずして一概に主張するものあれども、此の如きは我輩の斷じて首肯する能はざるものたるなり。抑〻種子交換の事たる、場合によりて利害を異にするものにして、全然緊切なりといふべきものに非ることを知らざるべからざるなり。見よ、或る場所に於ては特別の或る種類は容易にその物質を維持し、且つ改良し得らるゝものあるにあらずや。かゝる便利あるにも拘らず、尚交換せんとする如きは一笑に附し去るの外なきなり。況して我國の如きは、土地氣候の變化著しく、南は臺灣の南隅より、北は千島の北端に至るまで涎引細長せるを以て、炎熱灼くが如き土地あれば氷寒指を落すの氣候あり、四時霜雪を見ざる場所あれば中夏尚寒き土地あり、轉遷變更、千差萬別なる我風土にありて、種苗業に從事するものは他邦人の夢にも遭遇せざる艱難苦楚を實歷するの覺悟なかるべからざるなり。或は又豫じめその土地氣候の狀況と之に適應せる植物とを知悉して以て之に恰當せる種苗を發達し得るの學理と知識とを具備せざるべからざるなり。見よ、僅々一二里の離隔せるのみなるに、又氣候地質のさまで變化なき場所なるに拘らず、獨り植物に於て著しき變化を見ることは屢〻これあるに非ずや。これ、需要、供給兩者の一段の注意を要するところなり。

されど我輩は確信す、將來新種苗を續々産出して以て我農産の發達を全うせんことは敢てなし難き業に非ることを。泰西の學者云へることあり。「よく一穗を二穗となさしめ得るものは、

その功績他に比類あるべからずと。我輩は農家諸君と共に、よくこの語を服膺して以て斯業に貢獻し、聊か以て國家に益するところあらんと欲するものなり。　——明治三十年七月

第十六話　益鳥の保護について

暴風霪雨旱魃の類、氣候の激變、四時の不調、固より農家の懼然として慄（おそ）るゝところ、しかも、かれや所謂天災にして殆んど人力を以て左右する能はざるものたり。その人力の防遏し得べきものにして、尚且つ恐怖措く能はざるものは蓋し蟲害に如くはなきなり。青々たる田圃の穀稈も莪々たる裏園の菜蔬も、一朝忽焉として消失し、痕跡を留めずなりぬるこそ無殘なれ。農家が營々役々耕耘栽培惰（おこた）りなく、穰々乎として蕃熟せよと期する甲斐もなく、愕憂忽ち轉換し、肥瘠忽ち狀を更ふるの悲境に陷らんとは、豈歎ずべきの至りならずや。とは云へ、蟲害は天災と異り、人力を以て防遏し得べきものなれば、人々の注意如何によりてこの悲慘は免れ得べきなり。

我輩はこの秋に當り、二十年來筆に口に論述したる、かの食蟲鳥類にして、農家に於ては最も益友となす有益鳥類を完全に且つ嚴重に保護すべきことを高唱し、當局者並びに農家諸子の注意を喚起せんとす。

抑〻小鳥類の多くは艶麗なる羽色、微妙なる聲音を以て吾人々類の耳目を喜ばしむるの外に、蟲

類を啄食して農作物の蕃殖を助成するものなり。蓋し生物界に於ける生存競爭の狀態を熟視するに、蟲類の植物を餌として生存するあれば、又その蟲類を啄食して蕃殖するの鳥類あり、斯く轉還聯食して以て度外の增殖を防遏するに至れるなり。然れども、人類の漫然その間に干渉して交互の推衡を失はしむる時は、俄然一方の增殖を促がして農事に至大の損害を蒙らしむるの不幸に遭遇することあり。

米國ニューイングランド州に於ける殖民の當時にありては、種々なる鳥類甚だ多かりしかば、新來の移民はこれを或は食用に供し、或は娯樂に供するとなして濫りに捕獲したるものなり。かゝる濫獲捕殺の結果、鳥類の數は著しく減少せるのみならず、或る種類の如きは全くその跡を絶滅するに至れり。かくてその後歲月を經るに從ひ、蟲害の漸次猖獗を逞しうするに逢ひて初めてその原因の鳥類濫獲に基けることを發見し、卽ち、米國內は勿論遠く外國よりも有益鳥類を輸入し、且つ同時に捕獲禁斷の法律を施行して以てその蕃殖を促がし、又以て害蟲の猖獗を防ぎたることあり、殷鑑遠からず、我が國の農家は今に於て嚴に益鳥の蕃殖を計るに非ずんば、他日臍を噛むの憂を遺すに至るや必然の數なり。

我輩の如き、もと甚だ遊獵を嗜む者なるが故に、獵期至れば輒ち一挺の銃を肩にして、近郊を彷徨するを快樂とせり。然るに、二十年前に捕獲鳥の胃腑を解剖してその食せし處の蟲類を研究

したる結果、國のため、農業のため、爾來復た益鳥を獲殺すること能はずなりしなり。若し農家諸子にして、その田圃に於て害蟲を啄食する鳥類を識別するに至らんには、無論我輩と同じ感情を抱きて斷じてその鳥を獲殺し得ざるのみならず、寧ろこれに親しみ、これを愛して、他人の銃撃又は、捕獲せんとするをも停むるに躊躇せざるべきを信ずるなり。たゞ惜しいかな、世人の多くは不幸にして鑑識に乏しく、却つてこれを疎んじこれを遠ざけ、甚しきは己が正敵と誤認して以てこれを害ひ、又他人を誘ふて獲殺せしめ、怍乎怪しまざるに至りては、誠に痛嘆の外なきなり。況んや近年遊獵を嗜む者年を逐ふて增加し、苟くも鳥音を聞けばその何たるを問はず濫獲暴殺、毫も容赦するところなきに於てをや。故に都市の附近にては益鳥の數著しく減じ、中には全く絶滅せる種類さへ生ずるに至れり。

先年我が政府は法律を設けて益鳥を保護せりと雖も、その取締は實際に行き屆かざるものあり、且つこれが保護の責任ある當局者の如きも、或は各種保護鳥を識別するは甚だ難事なるところなしとせず、又銃獵者自身にありても恐らくはその保護鳥なるや否やを區別する明なき者多かるべし。或はこの法律の精神を理解し得ざるより、敢て重要視せず、小鳥位が何だと暢氣にきめこむ輩もあらむ。現に我輩の遊獵中に出逢ひたる人々の中には保護鳥を獲殺して得々たる風情ある者ありしを目撃して窃かにその暴慢を憤りしこともあるなり。かゝる現狀により、益

鳥は次第に減少する傾向にあるは豈慨かはしき限ならずや。

我が國に産する四百餘種の鳥類中、最も有益なる鳥類少しとせず、就中、四十雀、五十雀、燕、鶺鴒、鶺鴒、鴾、柄長、鶯、椋鳥、赤腹鳥等の如きは人々の常に見慣れたるものなり。人その階々たる音を聞き、又その可憐なる貌を見る。然れどもその農事に如何なる關係あるやに至りては、これを識るもの稀なり。故に、之等は重要なる益鳥なるにも拘らず、これを保護せんとするの念起らざるのみか、獲殺せんと欲するに至るなり。

見よ、かの四十雀の如きは、樹木の杪頭、しかも容易に人目の及ばざるところに産みつけある蟲卵を喙み去り、而して一羽の小鳥にして一年間よく二十餘萬の大多數の卵を食すといふに非ずや。又、かの燕を見よ、翻遷飛翔しながら一日中よく平均五百四十餘の蟲類を食すといふ。されば人々は、之等食蟲鳥類の益友は、如何なる洪益を吾人に與ふるかを知らざるべからざるなり。

故に、その保護方法を完全にして、以て有益鳥類の安寧蕃殖を謀るは吾が國農事中の緊急要務たるは論を俟たずして明らかなり。よりて我輩の冀望するところは

(一) 有益鳥保護法律の勵行を當局者に促さざるべからず。

(二) 單に政府にのみ依頼し置かず、各村一致團結して以て有益鳥類の保護蕃殖を計らざるべからず。

その政府の義務に屬する分は、政府自ら施行を嚴勵すべき義務あり、宜しく政府これをなすべし。而して農家諸子も亦その勵行を當局者に要求すべし。各地に於ける村農會其他の農業團體にありては、益鳥の保護、蕃殖を完全にせんがため、周到なる注意を以て且つ成功を期して以て種々なる方策を講究せざるべからず。卽ち、各地の村農會團體は交互に氣脈を通じ、一致團結してその近傍の地に於て銃獵禁斷の制札を立て、以て獵者をして恣縱漫然、手當り次第に捕獲する如き暴擧なからしめざるべからざるなり。

——明治三十年十月

第十七話　農家は鄰隣相親睦せよ

梅風浴雨、戴星蹈月、役々として働らき、營々として勤む。農家は所謂力を勞するものなり。勞力作業中、農家は實にその巨擘となす。然れども、その勞や、礦夫の暗澹たる地底にあるが如きの危險なるにあらず、及商家の喔咿嚅唲として顧客に事ふるの勞を用ひず。播種耕耘、徐ろにその苗の成長を俟つあるのみ。器具を改良し、種苗を精選して、以て自家福利の增進するを計るのみ。對店の繁昌するは、自家店頭の衰運なりとして、同業相妬む如き店賣り商人の陋を學ばず、突梯滑脫、以て長官の鼻息を候ふ如き小吏の煩をなさず、農家は實に獨立獨歩なり。その心中の優々和樂なる、亦他に比類なきは、農家の特色とするところなり。蓋し世に仙源ありとせば、農家は必ら

ず神仙の棲息するところたらざるべからず。故に、志を朝に得ざるの士は、去りて農に隠るゝの例は古今同一なりとす。況んや耕耨その時を失はず、種苗その選を怠らざるに於ては頗る利徳の多きに於てをや。

農家は既に他に超越せる快楽を有し、又尠なからざるの利徳あり、嗚呼農の業、一に奚ぞ多幸なる哉。然りと雖も人類は社交動物なり。如何に多幸なる業務なればとても、單獨にてはその興味薄きものなり。山に遊び水に泛ぶも、我唱へ人和すればこそ一層の風致を添ふるなれ。月は郭公を得てその雅を加へ、梅は鶯を存してその趣を増す。故に錦を衣て故郷に歸るの諺あり、郷隣呼應歡語する、その樂しみや融々又孰れかこれに加へむ。況んや農家は已に業務の競爭上より生ずる妒嫉なく、却つて親睦によりて業務の共同を得らるゝの便利あるをや。

故に、郷隣相親睦して以て一は各個の快樂を増し、又一は斯業の革新を計ることに努めざるべからず。元來、隣傍は近きに狎れて相互の欠點を見出し易きにより、識らず知らず不快の念を生じ易き例ありて、家々相嫉視し、村に相爭闘すること往々にしてこれあり。かゝる藩閥思想若くは蕞爾たる苦情をば一掃し去りて、霽雲光月の心もて輔車唇齒の關係を懐はざるべからざるなり

齊楚六國連衡したるの時に當りてや、虎狼の強秦も手を袖にして屏息したりしが、合從破れて

各自墻に覗ぐに及んでや、忽ちに暴秦の腹を肥やし、麥の空しく秋天に秀いで、礎の果敢なく田圃に横たはるの悲況を呈したるに非ずや。源氏の骨肉相食むは、平民の閨門懿親を失はざるに孰與や。五指を交々彈かむよりは一拳の強きに如かず。和合聯結の強盛にして、しかも樂しみ多きこと、その例に乏しからざるなり。

一重箱もて贈られたる萩の餅は、その味の美を鳴らすに先立ちて、その厚意の優しきを感謝するにあらずや。一言の挨拶、一個の贈物も、先方の赤誠より出でたる厚意と思へばこそ、仲々に戀かしく感ぜられて同情を深からしむるなれ。幕末の壯士榎本釜次郎氏(武揚子)等の函館籠城、遂に支ふる能はず、將に國に殉ぜんとするの時に當りて、榎本氏は所持の兵書の倶に灰燼となりて畢るを惜しみ、これを官軍に贈りたるに、大將黒田清隆氏はその返禮として酒を贈りたりといふ。然るにこの些々たる贈答は、端なくも和議を結ぶの緒となりたりてふ美談あり。之等は事固より大なれども、鄰隣の交際も、この心もて應答したらむには、よしや多小不快なることある折ありとするも、忽ちにして親交舊に復すの機を見るに難からざるべしと信ずるなり。

鄰隣相親睦するによりて得らるべき心の快樂既に多し。而して又更に經濟上、業務上に於ても莫大なる利益あるを知らざるべからず。例へば、三伏の暑中、一頭の豚を屠り、一羽の大鷄を食せんとするに當りてや、少數家族の一團にては食し盡せず、さればとて市場に持ち出さば廉價に

捨賣せざるべからずといふの場合に於て、近隣申し合せて食膳に供したらむには、如何に兩得の策にあらずや。斯の如き例は些少の金額なるが如くに似て決して鮮少にあらざるなり。又、種苗、蠶種、家禽等を注文するに於ても共同して多額を購入すれば、自然に割引低廉となり、新聞雜誌を購讀するにも、相互申し合せて各種別類のものとすれば、一部の代價もて數多の新智識を得らるゝの便あり、又、純良なる種畜を購入して交互に用ふることをも得べく、其他農具機械を購入するとか、道路を改良するとか、今日に當りて農事改良上農家の親睦和合を要するもの一にして足らざるなり。

顧みれば藩代の當時、小天地に齷齪して互に敵視したるその思想は、于今全く霽れやらず、時としては一村内一局部に於て城堡を構ふるが如き觀なき能はざるは、吾人の深く嘆惜するところなり。吾人農家にして正當に受け得らるべき心中の快樂も、これがために縮少せられ、他業者の豫想し得ざる仙境も、これがために殺風景となり、文明の餘澤として自然に受け得らるべき利德も、これがために消失し去る。而して相反目したるによりて得るところの利德は一もあることなし。

茲に於て乎、吾人は切に望む。相互間に於ける舊來の行き懸りとか意志の確執とかは、斷じて齒牙の間に置かず、胸間を豁大にし、神氣を清爽にし、我不欲人之加諸我也、吾亦欲無加諸人の意を

以て心となさば、鄰隣益々親睦和合して、我が國農事の改良上、一大革新の機に進みたるものとなすべきなり。請ふ、農家諸子、輕々に看過するなからむことを。

——明治三十年十一月

第十八話　農事の觀察力を養へ

春鶯を翻弄するの梅花は、既に開謝し去りて、杏雲靉靆たる櫻花は、方に時を得顏に爛漫たり。眞に佳期淸爽、雅といひ、嬌といふ、燭を秉りて夜遊ぶも亦以なきにあらざるなり。而して南圃に耕耘する農家諸君は又八十八夜の季節を眼前に控へ、漸く繁劇の時となりぬ。かくて播種したるものは、農家の周到なる注意の下に、いつしか成長して花を開き、實を結びて、穰々滿籯の祝盃を擧ぐるに至るべし。農家昨今の希望萬丈、實に愉快なることならずや。

然り、されど落花流水、輕々に經過したらむには、往年去歲、同一轍の農家にして、又進歩改竄の好果あるべからず。特に開花結實は大抵一年一回に過ぎざれば、農家の經驗試作も今年誤れば後の滿一年を俟たざるべからず。されば農家たるものは、時々刻々眼前に現はるゝところの農事上の現象をば、精細微密に觀察して以て自他の經驗を蒐集して、智識を增進せしむることを計らざるべからざるなり。見よ、農事上の學理にして尙埋沒して探究し得られざるもの、その幾百千なるを知らざるにあらずや。これを漸次に講究搜索するは、當事者の責務なりと覺悟せざるべ

からず。

獨り農業上の事のみならず、世間萬般の事物に關する學理は、凡て往古より人類の觀察攻究したる事實をば、網羅蒐集したるものなれば、我等が日常觀察して攻究するところの新事實は、又後世の學理を裨益する好材料たるを得べきなり。元來、宇宙間には、世界創造の當時より、人類の應用して以て智識を擴め、福利を增すべき材料は充滿したるものなるに拘らず、我等人類はこれを觀察するの力に乏しく、隨つてこれを利用することを知らざるは、誠に遺憾とするところなり。例へば、晩近、大發明者、大學者等の苦心研究によりて、人類の智識を次第に增進し得るは、甚だ愉快なることなれども、これとても世界の創造當時已に宇宙に存在したるところのものにして、偶〻發明されたりといふに過ぎざるなり。

されば、今や日に〳〵新智識を汲みとるべき井中の泉は湧き出でて、吾人の着手をば待ちつゝあるなり、豈努めずして可ならむや。人あり、一日、有名なるサー・アイザック・ニュートンに向ひて、その學術の深奥なるを賞讃せしに、氏はこれに答へて「唯に濱の眞砂を一握せしに過ぎず」と云へりとぞ。實に吾人の農事上に於て得たる今日の智識は亦大海の一滴たるに過ぎず。故に、既に得たる智識を運用して、又新智識を得るの策を講ぜざるべからざるなり。然らば、智を增すの法如何。さして佶倔聱牙なる注文をなすを止めよ。單に農家諸子が斯業上につきて觀察するの

力を養へば足れりと信ずるなり。卽ち、その從事する田圃山林原野其他動植物上に現はれしところの現象を理解するにあるのみ。換言せば、動植物は我輩に談ずべき舌を有せざるも、我輩は、その成長變化につき精細に觀察したらんには、無限の會話を卽了し得らるべきなり。

觀察力なるものは、我輩の感管に觸るゝものを確かと印象し置くの理にして、何事にまれ注意して觀察する時は、興味深くなり、隨つて智識も增進するものなり。もし空々に看過したらんには、孔子の所謂「心こゝに非ずんば視て見えず」と同一にして、呆然一生を過すの愚に至るべきなり。例へば我輩が時々時辰儀を見ても忽ちにその時を忘るゝに至るは卽ち注意しあらざるによる。又、我輩曾てロンドンに在留せる時、警部長に聞きたることあり、曰く「初めて巡査を奉職したる者には、步行中第一に途の兩側に注目せよと命ずるに、日を歷るに隨ひて容易にその警誡を實行し得らるゝなり」と。亦觀察力を專門の方向に養成したるの效力なりといふべし。

又、我輩の初めて植物採集に出かけたる當時は、艱難を感じたるものなれども、多年經驗の結果は、平素の散策にも不圖好植物を得らるゝことあり、之等は單に少しく注意するといふに過ぎずして、その效力は更に大なるものとなるなり。況して農業は複雜なる仕事にして、獨り植物の成長、動物の養育に止まらず、種々萬般の事物に係累しあれば、之等萬事を精細に注意して攻究したらむには、將來自他を益すること決して小少ならざるべし。

我が國の習慣として、農業の閑暇には、名山舊跡の神社佛閣を巡禮參拜するもの多く、卽ち、伊勢、善光寺、大山、羽黒等に參詣するは殆んど毎年のことなり。その信心によりて得らるべき幸福は、我輩措いて論ぜず、寧ろ農事上の智識を得べき好機會たるを知らざるべからざるなり。卽ち、異鄉の栽培方、耕耘方、施肥方等を見て、これを參酌して自己に應用せらるべきもの、若くは參考上の新智識を得べきもの、蓋し莫大なるべきなり。例へば、北國人が西國を旅してその地方に於ける耕地のよく整へるを見て感ずるところ多かるべく、南人亦北地に入りて、その種苗を携へ歸るの便を得べし。かくて年々旅行によりて得たる利益は、枚擧すべからざるに至るや必然の數なり。況してや汽車あり、汽船あり、旅行甚だ便利となりたる今日に於ては、舊來の參詣の傍ら、農事視察として思ひ〳〵に目的の地方を漫遊するも亦一策たるべし。

今や我が國の農業は、果然振興せざるべからざるの時期に到着せり。この際に於て、農家諸子は、內にしては自家の農事を整へ、外にしては農業上に於ける百般の現象を視察して、以て累々加增、新智識を得るの策をなさざるべからざるなり。

——明治三十一年四月

第十九話　農事視察員の海外派遣

本邦近來に於ける長足の進歩は、內外人の等しく認むるところにして、以往三十年の歷史を回

顧したらんには、何人と雖もその進歩の迅速なりしには一驚を喫せざるを得ず。この進歩たるや、實に天祐の我が國に著しく優かなりしによれるは、吾人の大いに感謝するところなるが、亦飜つて三十年間に於ける我が國同胞の苦心經營せる事績を追想せば、その勇猛邁進の歴史は、日本人の不屈不撓にして敢爲の氣質に富めることを示せるものにして、甚だ頼もしき次第なりといはざるべからざるなり。況んや政治上の進歩の如き、早や已に政黨内閣の端緒まで進みたることにて、歐米人の東亞の勃興と稱して嘖々歎美するも良に故なきにあらず。我輩國運の前途多望なるを見て、躍然奮起せずんばあらざるなり。

我が國民の一心不亂に勇往せし活劇は、實に壯絶なれども、前途なほ起すべき事業、改むべき舊習は決して少しとせず。爾今、益々勇進を要する所以なり。されば隨つて經費の増加すべきは數の免れざるところにして、さてその經費は那邊より收得して可なるべきか、豫め講究を要する問題にして、そは製造工業を興し、商業を盛にし、又生産力を増さしめて一切萬事遺利なきを期すべきなりとは、誰しも即答に躊躇せざるところなるが、その方法手段に至りては、輕重本末を精査して違算なからしめざるべからず。

我輩の見るところにては、商工業を振興すべきは勿論なれども、就中、農事を改良して根本を培養するは、急中の急なるものにして、先づ彼の長をとりて我が短を補ひ、彼の農産物にして本邦に

於て産出して利益あるものは速やかに移植栽培し、或は我が國の農産にして輸出の有利なるものは亦速やかに輸出方法を講じ、又、將來輸出の見込あるものは、今より速やかに栽植蕃衍を計り、若くは外國に於て耕耘したる方、利便多き土地あらんには、宜しく速やかに鋤を擔ふて移住を斷行すべし。其他我が農界に利便を與ふべき方略は一切擧用せんことを欲するものなり。

かくて農業者を指示奬導すべき方策としては、書籍によりて外國の農況を調査するを得べく、外國に在住する本邦人に照會するも可なるべく、公使領事に囑して精査せしむるも得策なるべし。然れども、こゝに困難なるは、農事は一種の專門にして、その道に精通せるにあらざる限りは、到底精細なる觀察をなし得べきものにあらず。故に特にその道に精しきものを實地に派遣して調査せしむるが第一の得策なりと云はざるべからず。

されば諸國の言語にも差支なく、學問あり、才識あり、又信用あるものを速やかに派遣して、到る處、各國の農況、農業消費額、輸出入狀況、農家の現況、農業團體の組織及其效用、將來に於ける彼我農產輸入の關係等を明らかにし、以て我が農界に於ける將來の方針を知悉せしめんには、我が農界に一大新面目を起さしむるや必せり。勿論視察員を特派するにつきては夫々費用を要すべけれども、之等は農界收益の全體より見る時は誠に些々たるものにして、斷じて齒牙にかくべきにあらざるなり。

これまでとても視察員と稱して、農工百般の事業上につき、時に特派員を遣したることにて、今日の文明の多くはその人々の土産とも申すべきものなれども、さてその中には、飛脚同樣に通過し去りて一も得るなきの失敗談なきにしもあらず。我輩の海外在留中、この種の人に會ひて屢〻憂愁をなしたることありき。昨年農商務省より支那印度地方に派遣されたる人々の有益なる報告を齎し來りて、斯業に大利益を與へたるは耳底に存して忘れざるところなり。故に、單に養蠶製絲に限らず、廣く農事に精通して、よく外國語を解し、萬般の調査に差支なき有爲の人々を特派して、世界の現況を視察せしむるは目下の急務と信ずる所以なり。今より十二三年前のことなるが、英國にて同樣なる視察員を派遣したるに、爾後英國の農事は斬然面目を一新せり。我が國にても、速やかにこの擧に出でて、以て我が農界を振起せしめ、由て以て國力の增進を計らんことを望むものなり。

——明治三十一年七月

第二十話　農界の藩閥を排撃す

藩閥とは、さまで能力なきものが何かの餘風を藉りて權柄を翻弄するの言なるが、さて藩閥の弊風は、政治界に於ける專有物にあらずして、世間到る處にこれあるを認むるなり。而して我が農界に於ても亦この藩閥弊風の橫行して年少技倆あるもの〻進路を障碍しつゝあるは誠に痛

嘆となすところなり。

吾人の所謂農界とは、その意義廣うして、養蠶、製茶、種禽等の副産物界を含み、之等の團體若くは集合は、全國幾千百の多きに及び、彼此氣脈を通じて往來頻繁なる、その狀況は實に整々循々、祝すべきの觀あり。故にその運轉機關の大柄を握れるものは、必らずやそれに相應せる技倆なかるべからざるのみならず、世界の大勢に通達するとまでは行かざるも、文明日進の素養だけは充分に保有せるものならざるべからず。然るに單に素封とか爵位とか、何や彼やの餘風を藉り、長上に立ちて配下を顧使する如きは、吾人の斷じて好まざるところなり。

元來實業團體なるものは、表面一邊より素見する時は、各個斯業の隆盛發達を期するがために設立したるものにして、少にしては一個人の利益となり、大にしては國家の富殖となるものなるが、さて、照魔鏡を藉りて各個の胸間を仔細に觀察せば、同業者は各々所謂商賣敵とも云ふべき感ありて、隱然隔意なき能はず。よしや隔意にまで至らずとも、反撥し易き理由ありと斷定せざるを得ざるなり。

故にこの離隔し易き分子を集合密着せしむる引力となりて、臨機應接の策を施し、以て着々斯業の發達隆盛を計るこそ頭領たるその人々の手腕加減に存するものにして、斯業の隆替は擧げて頭領の双肩に懸れりといふべきなり。故に、頭領たるものは、公平無私、律義一遍の人たる上に、

全團體を掌上にて運轉するの技倆なかるべからざると同時に、その團體の規約を硬守して、この軌道を通過せしむるの要あるなり。而して、規約に關せず、頭領自身の意思を以て隨意に伸縮しつゝあるは、現時の情弊にして、假令その人の胸中だけは磊々落々一點の私心なしとするも、團體分子は、その因由すべき方針を知悉する能はざるのみならず、姦邪の陰謀、よつて以て生じ易く、表面は無事に裝ふとも、內裡は常に吳越の嫉視なき能はず、斯くては斯業の發達に資する騷ぎにあらざるなり。

抑〻我が國藩閥の弊風は、歷史と共に根底を深うしたるものにして、大權の相門に歸するや、藤原氏に非ずんば政治に參與する能はずとして、その家系は卽ち參政權を得たるものとなりしが、降つて平氏となり、源氏となり、德川氏となる、何れも家系を重んじて人才を輕んずるの弊風を生じ、遂に今日に至りてはその風農界にまで跋扈するに至り、その浸潤の久しき、人々も見て以て怪しとなさゞるのみならず、中には敬慕崇拜するものさへあるに至り、或は虎の威を籍りて我威を張らんと欲するものあれば、或は人爵者を以て一種の先天的高等人間となすものあるに至る、吾人甚だ奇怪の感あるものなり。

然れども、吾人とても一概に爵位門閥を排するものにあらず、勿論實業上、その爵位門閥が何の用をもなさゞることは、明々白々なるものなれども、苟くもその人にして、それ相應なる技術あら

んか、吾人は甘んじてその下風に立つべく、その使役をも受くべく、又、相談相手となるもよし。これを要するに、こはその人の能力を敬慕するものにして、吾人の眼中、毫も人爵の價値を認めざると共に、農界に於ける藩閥の情弊は厭までもこれを掃蕩せんと欲するものなり。

少數人士が理論の外に立つて我意を張らんとすることは、未開時代の附屬物にして、時勢の進運につれて、豁然一掃、自然淘汰の制裁を受けざるべからざるは、世界人類の歴史の明らかに指示するところなり。かの羅馬の貴族連が政權を掌握するの時に當りてや、平民の發達進歩を抑壓するの目的を以て、苛法虐政を施行したるに拘らず、聖山退去の端緒より漸次に勢力を加層し、遂には、至權、平民の手に落ちたりしが、不思議にも、尊卑平等以後は國力頓に加りて、羅馬大帝國を成すの基を開きしに非ずや。奏始皇が六國を討滅したる後、乃ち六國の俊才を薦めて事を議したらんには、三世を遞ふて萬世に君主たるべしとは、獨り牡牧之の私議にあらざるなり。

故に吾人は確信す。如何なる豪傑と雖も、國運の進歩に逆らひて藩閥の我意を恣にすること能はず、又如何なる小團體と雖も、この潮流に逆らつて、久しく藩閥の情弊を持續する能はざることを。更に近く一家の內情につきて觀察せよ。家長權をふり廻して、細君や奴婢を泣かしむるの家は、鬼その室を瞰ひ、暮雲慘憺、秋眉毎に開くの時なく、家運隨つて衰替するにあらずや。故に家を榮えしめんには、家長權の暴行を止むるに如かず、農界の振作を計らんには、藩閥の情弊を去

りて青年の技倆あるものを用ふるに如かざるなり。

絺綌の涼を服するものは、盛暑の鬱燠に苦しまず、狐貉の煖を重ぬるものは、沍寒の悽愴を憂へず、そは時に順つて迓迎するの明あればなり。今や我が國の情勢は、日又日進百事改革の進運を實施し來り、農界亦一大面目を現はしつゝあるを見るは、我人倶に歡喜措く能はざるところなれども、更に全局面を達觀すれば、種苗の改良交換、若くは外品の輸入、家禽の刷新、適肥料の撰擇其他農事上改革を要すべきもの百にして足らず。この難局を擔ひてこの大任を達成せんものは、自己の技倆によるにあらずんば、到底成就し得べくもあらず。固より老成守舊家の如何ともなす能はざるところのものなれば、守舊家は宜しく時勢に隨つて退去すべきの秋なり。

一說によれば、爵位とか門閥とかの貫目ある人々を加ふる時は、團體の光彩を添ふるの便ありと演ぶるものあり。一應は尤もらしく聞ゆれども、元來農界現時の大勢は、各自胸襟を披きて改良に軼掌すべきの時にして、貫目を要するの時にあらず。特に花鳥風月の友ならざれば、光彩の必要は斷じて用ふるところに非るのみならず、無用の長物は却つて進路阻碍の恐れあるものなり。

蓋し、今の老成守舊者の眼より見る時は、少壯青年の輕擧驚くべく、一瀉千里に直進するを見ては、如何にも懸念措く能はず、地位を讓る如きは、先づ以て困難となすに相違なかるべきも、今の時

勢は決して守舊藩閥の夢を貪るの時にあらず、現時の農界が他の進歩に比して領る遲緩せるは、畢竟かゝる輩の蟠居して手放さざるに因由したるものなれば、曉鐘一聲、速かに地位を讓らざるべからざるなり。況んや、近來教育の結果漸く顯はれ、實業を輕視せざるの風次第に加はり、尋常中學卒業以上の學力あるものにして、鄉里にありて鋤犂を手にし、或は養蠶に從事し、或は家禽の改良を計る等、各自舊來の農家の働きと同一なる勞働に服しつゝあるもの多く、しかもこの人々は、已に文明の教育を受けて世界の大勢にも通曉して、進歩の鋭氣を滿腔に抱養せるに於てをや。

かゝる人々にして未だ手腕を揮ひて雄飛する能はざる所以のものは、守田老成の藩閥者流に壓伏され、その蹼足を縮むるがためにして、誠に一掬の涙なき能はざるなり。顧るに、昨秋の如き浮塵子の蟲害も、かゝる少壯文明家諸子に一任しありたらむには、豫め何等かの防禦策を施せしならんと吾人は信ずるものなり。これによつて見れば、守舊藩閥家は、最早その地位に眷戀するの時にあらず、否、今の大勢は決して守舊藩閥を扶助するの時運にあらざるなり。宜しく速かに勇退して、以て青年手腕家にその位置を讓らんことを切に勸告するものなり。

——明治三十一年八月

第二十一話　農事關係文は平易にすべし

自己所信の意見をば、一枝の擧によせて、以て讀者の首肯を買はんと欲するは、操觚者の最も苦心するところにして、その果して讀者の意志を一方に傾向せしめて、よく所說を享受せしむるに至りては、又極めて難事となすところなり。佶倔聱牙に失すれば、難澁にして解し難きの苦情あり、艶麗冗暢に流るれば、浮虛にして主要を捕捉し難きの恐れあり。況んや教育その度を異にし、才識その難を同じうせざる幾千萬の讀者に滿足を與へむと欲するに於てをや。

もしそれ、國史傳說の如きにありては、忽ちにして電光閃戟、忽ちにして悲慘瀟條、浮世の無常を形容して、名利の舞臺を演寫する、亦難きにあらざるべしと雖も、農事の如きは、濤穩やかに畠靜かに、平坦なる語調もて學理の運用實歷の經迹を露列するものなれば、その讀者をして飜弄翫味、春の經るを惜しましめんと欲するは、至難中の難事といふべきなり。

然りと雖も、文は則ち文なり。抑揚なき能はず、頓挫なき能はず、時に或は聲色を勵ますの場合もあるべく、鋒芒を露はすの必要をも生ずるなるべし。取捨進退宜しきにつきて、よく擒縱するは、卽ち行文の要ならむ歟。見よ、學校の教授上に於て、最も必要とするところは、教授そのものに興味多からしめんと努むるにあり。教授にして興味なからむ歟、教場は乾燥無味となり、生徒の疲勞厭倦を來して、教師の撰擇整備せる學科も殆んど效を奏せざるに至るべし。故に良教師たるものは、理化學の如き、學理一片の科學をも、生徒をして沈思聽聞せしむるに至るものなり。

農事の如き、學校教育の理化學に比すれば、數倍の興味あらしむるを得べく、しかも學校に於ける自裁力なき兒童と、地方に於ける心意固定せる年長者にして、その自ら農事を研究せんと欲するものとは、已に霄壤の差あるなり。故に我輩は確信す、農業記事上の行文をして、平易にして解釋に苦しまず、抑揚ありて興味多からしめば、以て農事振興の一大原因を形成するに至るべきを。

これを以て、農事振興の一手段として、我輩は先づ農業に關する行文の改良あらんことを主張するものなり。從來、各地に於て發刊する農事關係の雜誌及び報告の如きは、統計表たる數字を以て大部を填充したる片端に、法語の如き口調もて、嚴格に、簡單に、告ぐるが如く、命ずるが如くに記載あり。その讀者が精細に了解し得るものは、恐らく僅少に止まるのみならず、數字を點註して意得せんとする途中、早や既に厭倦を來して讀了するに至らざるものあるべし。我輩は固より繁文冗暢を好むものにあらざれども、文の簡潔と要語とは同一視すべきにあらざるのみならず、かくてはよく咀嚼するの力なきもの多きを信ずるなり。

其他農事上に於ける著書、說明、應答の類に至りても、執筆の地位にあるものは、恰かも教師の教場に於ける如き親切なる思想もて、屢〻身を讀者の地位に置き、反省熟慮して自己の意志の果してよく讀者に傳達され得べきや否やを考査せざるべからず。農事興隆の稍〻その緒につかんとする今日、なほ行文にして繁簡適當を得ざらんには、空文徒勞に屬して、しかも農事進歩の阻碍たる

なき能はず、識者の默視すべきにあらざるなり。況んや、稗史小說の如く變化を幻出し難き事情あるに於てをや。

故に、農事に筆を執る者は、宜しく行文に苦心して、以て讀者の興味を增加せしむるの工夫なかるべからず。我輩は將來自ら深くこれに注意せんと欲すると共に、敢て世人の一考を煩はす所以なり。

——明治三十一年十一月

第二十二話　農家と冬季

朔風梢を拂ふて滿目荒涼、飢鷹高く翹けりて食なきに悲鳴す。實に殺風景なる景色よな。もしも悲運なる人の方面より觀念し來らんには、應に歌ふなるべし「客心何事轉凄然」と。亦一理なきにあらずかし。されどそは變調なり。天爭で悲愴をば旨とせるものなるべき。更に得意なる人を想起せよ。俗界の汚點は包み藏して、一面の銀世界、心の清さを寫したる白皚皚の雪景は、又如何に壯絕奇絕なるにあらずや。唐人は同じく詠じたりしなり「雪花滿高閣苔色上勾欄」と。かれも一時、これも一時と云はゞ云へ、人はもと苦を去りて樂につくべき智識を有せり。苟くも天運のために悲境に沈淪するものに非ずんば、平生の心懸け次第にて安樂に渡世するを得べきものなり。その所謂平生の心懸けとは、閑にゐて繁を忘れず、よく繁に處するの準備をなすの謂

にして、この義をば毎々心頭に留めをきて、敢て失墜することなくんば、世の中は先づ以て安穩といふべく、心中はいつも綽然として裕かに、興味深く、冀望大に、陶然たる樂しみに天地の化育を送迎するなるべきなり。然り、今や卽ち我が農家の閑時季とはなりぬ。戴星踏月の勞働は正に報酬を收めたり。向ふ四五十日間は、夢暖かに、意靜かに、家族團欒、爐邊に笑語するを得るの所とはなりぬ。思ひ〳〵の行樂もあるべし、又、それ〴〵の準備なかるべからず。

さて、我輩をして農者が從來冬季の間に如何なる仕事をなしたりしかを繰り返さしめよ。座談、惡戲、恐らくはその大部分を占め、冬季は寧ろ品位を陋劣ならしむるの媒介季たるに外ならざりしならむ。年々歲々、同じ軌道を經過するのみにして敢て新智識を得るなく、新事業を計畫するなく、齷齪として渡世する有樣は、蟻の春夏秋に勞働して食物を己が穴中に運びこみ冬間の座食に供するが如く、蜂の花邊を漁りて又冬間に蟄居すると殆んど同一轍にして、去年の蜂は今年の蜂に同じく、今歲の蟻は亦來春穴中より匐ひ出づべきを信ず。無意識に動作せる小動物は、かくしてこそ自然に適合するなれ、人類はかくては自然に適合するものにあらざるなり。

見よ、世界文明の潮流は、萬籟を破りて、その勢滔々實に防ぐべからざるものあり、——自然陶汰——優勝劣敗——野蠻の惰眠は到底文明の逸民に抗すべきにあらず。單に農事上より觀察するも、その進歩の勢甚だ鋭く、瞬時も停止することなきにあらずや。されば我が國農者も今や決

して舊來の畫餅を想像するの時にあらず、勇進決行、大いに奮發すべきの時季にして、しかも冬季間はよくその準備をなすの好時季たり。

本年中の農耕は如何にして經過せし、耕耘は如何、收穫は如何、勞働上の不注意はなかりしか、收穫高の違算はなかりしや、農作物の市價は信に豫期をば誤まらざりしか、之等の得失をば批評的に調査し、更に前年の農作物と對比して精細なる觀察をなし、以て次年起算の資に供せざるべからず。その次年に於ける農作物の撰定は、時勢の潮流を豫想せざるべからざるものにして、最も周到なる注意を要するものなれば、深考熟慮なかるべからず。その査定、既に終らば、先づ農者の一段落として、さてこゝに農事上の新智識を得べき時は到りぬと知るべし。

この際繁忙中輕々に看過したる雜誌の再調査を始むべく、他の諸問に答へて智識を頒つこともあるべく、諸問案を發して教を請ふこともあるべく、或は論說を草して提携抱負を計るもよかるべく、若くは一事の研究を思ひ立つも亦興あり、しかも亦農書を繙きて孤燈の下、矻々たる勉學は、老書生の風情見えて床しく、講議錄によりて朝行暮歸、學校通ひに擬するも興あるべし。其他短期の農事講習會を開き、講師を聘して聽聞するは一段の得策にして、農事の新設をば、直ちに應用實施するを得べし。或は農談會を開きて交互の所見を闘はすも亦甚だ利便多きなり。

凡そ人のこの世に處するは、恰かも市場に於ける貨物の市價の高低常なきが如く、片時も舊體

に安委するものにあらず。進んで新智識を得るにあらずんば、卽ち退歩して老朽無用物となるは、免る能はざるところの數理にして、彼の老爺が守舊思想に富めるは、全く以て新文明の眞價値を翫味せざるよりかくも落魄せるものにして、その頑愚となり、因陋となるも、寸寸退歩したるより、空しく舊態を夢みて新奇を嫌ふに至れるものなれば、今日の農者は、老幼の差別なく、邁往不屈の氣力もて、決行せざるべからずと覺悟するこそ肝要なれ。

農閑の時を利用して新智識を得るの方法は、斯の如くにして、それ以上は各人次第にて如何樣にもなりぬべし。かくて又、農閑なる冬季に於て草鞋を作るとか、索(なは)を綯ふとか、紙を漉くとか、麥殻細工をなすとか、もし山家ならんには、薪を採るも可なるべく、その地方に相當せる小勞働もて賃銀を得るの便法あるべし。假令少額の勞銀なりとも空しく逸して惡習慣を踏襲するに比すれば、莫大なる差違あるや明らけし。

この他家畜小屋の修築、自家破損の繕ひ、推肥の反覆、籬の撓め直し、排水溝渠の用意は暗渠とせんか明渠となさんか地の利を見計らふもよかるべく、種子の撰擇は農家最大の要務なれば、この際注意して精撰すべく、もし自家品の不良なるを認めたらむには、躊躇なく、購入の手配に出づべし。害蟲は冬季蟄伏せるものを捜索するは頗る難事なれども、さればとて一旦彼等の飛翔したらんには由々しき大事なり。寒を冒して撲滅に軼掌すべし。諺にも、驅除劑の一ゲレインは防

礬劑の十斤に優る」といへり。ゆめ怠りて悔をな殘し給ひそ。

又苗木としては、石榴、草果、梨、櫻桃、梅、栗、柿、葡萄、桃等、果樹類の移植肥培あり、而して一月ともなりなば、大小麥、蕎麥、桑、楮、櫨、桐、竹類に施肥亦怠るべからず。其他地方によりては蔬菜の手入施肥肝要なり。凡て農繁時季ともなりなば、一點他を顧慮するなく、他のために勞力を奪はるゝことなきを期すべし。これに關し、頗る恰適なるフランクリンの逸話を想起するなり。

或る騎兵のことなるが、一日馬の蹄鐵の手入を惰りて戰場に赴きけるに、馬は緩みたる蹄鐵の釘に刺されて跛くも跛引きつゝ進退不自由となりぬ。かくて兩軍入り亂れて戰ふに及び、不幸にも我が軍敗れ、味方は先を競つて敗走せるに、奈んせん、件の騎兵の馬は進まず、遂に敵に獲られきと。

もと、僅かに些々たる蹄鐵の釘の注意を怠りしより一命を損するの大不運に至れるも、畢竟自己の不覺に起因せるものにして、自業自得といふの外なきのみ。さはれ農家に於ては新智識を得るに怠らざると共に、又、次年の用意周到なるを期せざるべからざるなり。

さはあれ、我輩は農家に向ひて、終歲役々として働き、片時も娯樂するなかれと警告するものにあらず。一張一弛は物の自然、しかもよく働きよく樂しむは文明人の常態なり。故に、室家にありては家族の團欒たる樂しみは、冬季の農閑なる時に行はるべく、親戚朋友間の徵逐（ちょうちく）はこの際又

深く溫めらるべく、實に清爽にして愉快なる家族を見んことは、我輩の最も希望するところなり。

元來、眞の快樂は、心中の快樂を以て最となす。而してその心中の快樂をなさんには、平生心がけて、すべて規律正しき働きをなすよりよきはなし。されば冬季こそ一年中の決算期ともなり、準備期ともなり、快樂期ともなり、新智識をも得べく、新計畫をも樹つべく、萬事を造成するの根底なりといふを得べし。今やその好機は到りぬ。速やかに凡百の用意にとりかゝるべし。斷じて「轉凄然」などの變句調を發するの非運を齎らすべからざるなり。——明治三十一年十二月

第二十三話　農家は前途を洞察せよ

貨物に於ける價値の高低は、恰かも岸打つ波の寄せては返り、返りては復た擣くが如く、時に狂瀾怒濤の凄慘を演ずるありて、殆んど霧中に彷徨するの感なきにあらねども、細かに觀察すれば、整然たる一個の理由のその間に存するを見るなるべし。卽ち、所謂需要供給の釣合これなり。故に農家はこの需要供給の釣合工合を豫じめ達觀して農作に着手するこそ肝要なりといふべし。

而して一旦起業し、着手したる以上は、些々たる物價の高低や、區々たる世間の風潮に左右せらるゝことなく、直進勇往、必らず目的地に達せずんば已まざるの覺悟なかるべからざると同時に、

その着手する初めに當りては、充分に且つ精密に前途の難易如何を調査せざるべからず。

然るに、今の農家の狀態を通覽するに、兎角世間の流行に驅られて我も我もと一方に偏頗するのみにして、殆んど沈着の風を缺けるは、我輩の深く遺憾とするところなり、例へば、或る農產物が流行せりとて、何の思慮もなく、俄かに競ふて產出し始むるを以て供給頓みに增加し、その市場に利を求めんとする頃には、需要供給の不釣合となりて、貨物は低落の悲運に遭ひ、不慮の損失を蒙ること頻々としてこれあり。さてこそ失敗せりとて、復又他の新農作に傾向する有樣は、恰かも群雀の餌を漁りて翺けまはるの風情あり。

かく轉移流落、一定の見識なきが如きは、到底文明の今日の農界に奇利を爲すべき所以にあらず。宜しく時流に雷同するの弊風をやめて、以て靜かに前途を達觀し、綽々然、事に當るの決心をなさゞるべからず。見よ、かの百合の輸出の盛なるを見ては、赤鹿の子、白鹿の子、山百合、鐵砲百合など、思ひ〳〵に競作して無暗に產出したる結果は、價格次第に下落し、この下落を見たる農家は忽焉去りて他に轉じたるが故に、復又騰貴するに至りて、呆然一驚を喫するのみ。その海外に於ける需給如何の原理を研究するに心づかざりしは、不覺といふの外なきなり。其他ラミー草栽培に至りても亦豫想の如き奇利を得ざりしを嘆つものあるを見るは、畢竟需要並びに製造法の如何を辨ぜず、無暗に他人の迹を逐ひて東奔西走するに坐するのみ。

一昨秋米の不作なりしために米價の騰貴せるを見て、昨年中は水稻の外に俄然陸稻を栽培せるもの多く、大いに米の産出を增したるが、今やその下落せるに遭ひて漸く復た他に轉ぜんとするものあらむとす。元來、米作の如きは、支那印度地方の豐凶によりて影響を蒙ること多きものなれば、眼前の現況を見て進退せんとするは、甚だ早計の嫌あるのみならず、陸稻の如きは將來頗る有望の農作物なれば、我輩は農家の一考を煩はさんと欲するものなり。

「十年の謀は植樹にあり」とは千古の金言たり。かの穀菽の如きは、大抵成敗ともに一年にして轉移するを得べけれども、果樹に至りては、數年の費用と丹精とを要するものなれば、最も注意肝要なり。而して、將來肉食の增加と、世界交通の頻繁なるに從ひ、且つは內地雜居ともなりなば、外人の嗜好する果實は、益々その需要を增加すべきこと明らかなり。この際機先を制して永くその利に浴せんこと、なし難きの業にあらず。宜しく前途の狀況を洞察して、今よりその準備を怠るべからず。

「正直と勤勉とは最良の策略なり」——海の內外を問はず、一代に崛起したる富家の經歷を閱するに、よくこの規鍼を奉ずると共に、確乎不移の識見を有して、着々前進したる結果にして、決して時勢の潮流に左右せられて、右往左往する如き根據なきものにあらず。されば我が國農家にありても、その初めや、着實深慮、處女の如く、その發するや勇邁果行、脫兎の勢もて、斷じて世間の風潮

に意を傾くることなく、よく忍びよく勤めて各自の成功を期すべし。今や、農家一方の前途を畫策すべき播種の時期に至りぬ。靜思深考、先づ種苗を精選し、肥料を用意し、以て武器を完備せしめたる後、汪然、沛然、農界の勝利を得られんことを希望するなり。

——明治三十二年三月

第二十四話　花の價値

烟斜めに霧濃やかなる晨、窓外に侶呼ぶ聲の階々たる小鳥に華胥の夢を破られて、前庭後園を徙倚逍遙しつゝ、花の眺めの愉快なる、これぞ眞の高潔とやいはん歟、仙境とや評せん歟、梅上半稜殘月白、詩情一倍勝黄昏。實に瀟灑落莫一點の汚垢なく、自然の眞理を味ふは、卽ち堆花裡中にあるの時なり。されば古より世の紅塵を厭ふの士は、去りて園に灑ぐの習慣あるは良に以なきにあらずかし。故に、花は人間界の俗事に離隔たるを去つて、自然と親しましむるものなり。

錦衣玉食、綺羅を飾りて傲遊する紳士貴女の傍には、蔽衣垢顏蹩躠徒歩する賤夫あり、人爲の階級は千差萬別、境遇素と一ならず、されど天眞の花は爲に愛惡の念を發せず、均一平等にその娯樂を享受し得らるるものにして、更に又、人爲的階級を去つて一視同仁の眞理を味ふを得るものなり。

菁々たる莪は發して蕾を成し、放つて花を唉かす、次第固より序あり、馥香親しむべく、嬌艶愛す

べし。その蜜蜂の往還去來する、胡蝶の翩々舞翔する、その狀態を注視し居る小兒女は、幾多の興味と學問とを習ひ得べく、自働自裁の精神もこれより發するものなれば、花は又教育上の好材料と云ひ得べし。

精神過勞、宿痾痼疾の人には、花は又得難き治術たるべし。種を蒔き、培ひたる自己の働きは、優麗なる花と化して顯れ出づる愉快さ、いかで病苦を覺ゆべき。況して新鮮なる空氣を呼吸し、清爽なる神氣を保養するに於てをや。外國人が肺患若くは勞症に罹りたる折、靜かに花園を栽培して天壽を保全し得るは全くこれがためなり。故に、花は亦病者の栽培すべき恰敵唯一のものなりといふを得べし。

商業の駈引、世間の交際、將た營利に汲々とし或は學海に浮沈する人々の時々園に灌ぎ、花間に逍遙せば、精神新たになりて衰勞したる能力は再び興り、變調を來したる體質は再び順に還るべし。卽ち花は亦衞生上大いに效力あるものなり。

本邦に於ては未だ多く行はれざれども、西洋にては病者に花を贈りて慰愉するの習慣あり。病床に苦悶呻吟する者に對して食品を贈るは、その好意に反對せる結果を見ること屢〻これあり、寧ろ弊習とも云はんのみ。花を眺めて暫しなりとも病苦を忘れしめんとの意想は、眞の友情といふべき歟。嘗つて英國在留の同胞が、ロンドン市に日本街なるものを設けて本邦品を賣り捌

きたることありしが、同胞の病床にある者をば、かの國の慈善貴婦人等が續々花を贈りて慰愉したるは、我輩のロンドン在留中實見してその好習に感じたるものなり。花は慥かに病者を慰愉するの眞價を有す。

花は又感化力を有す。血氣盛なる時は、天にも勝つを得べきも、折にふれて悔恨の念を起すは、良心の勢力ある所以なり。異鄉の天にありて、左道に辷り陷りたる暴漢惡婦も一輪の花を見て忽焉故鄉の空懷かしく家を懷ひ、父母を想ひ、己が幼き時を繰り返して一點慚悔の端を開くこと往々これあり。近着の米國新聞にもその一例見えたり。

スコツトランドにありて、中流の資產を有せる家の孃にマリオンと呼べるものあり、この孃二九の春を迎へけるが、一度ロンドンの榮華に浴せんものと兩三年を期して父母の膝下を辭したるに、その着英以來は不幸にも素行修まらず、遂に惡婦の群れに入りて、復た故鄉の音信も絕えぬ。然るに、或る日馬車の顚倒せるため大怪我を受けて入院治療中、慈善貴婦人より贈り與へられたるその花の、圖らずも己が故鄉にて見慣れたるものなりければ、聯想は忽ち故鄉に及び、懷舊の情に堪え得ず、一轉父母を懷ふの念となり、再轉愧心內に纏ふて、現在の不埒を悔ゆるの念とはなりぬ。次いで父母の遠く來りて看護しくれたるに遇ひて益々悔悟の念深くなり、病癒えたる後は、身を慈善界に投じて今は勇々しき働らきに愉快の月日を送りつゝありと。而して、この發善心

は卽ち花の勢力にして、かゝる實例尙少しとせず。故に、花は又感化の勢力ありとなす所以なり。

其他冠婚葬祭に於て花を用ふるの例あり、式場の飾あり、胸間に挿むあり、嬋妍たる嬌態の婀娜たる芳艶と相映じて、滿場の光彩を添ゆるなど仲々に雅趣あり、或ひは堆積花中に遺骸を葬るは歐米開明國の通例なるが、そは蓋し優麗なる素花を用ひて沈痛悲哀の情緒を和らげんとの趣向によれるならん歟。

花の效用、花の需用、大略斯の如し。その詳細に至りては一々枚擧すべからざるなり。然るに世の論者花の栽培を以て一概に奢侈なり、贅澤なりとして擯斥せんとするの謬見を抱ける者あり。成程或る意味に於ては慥かに贅澤なるべし。されどその效用と需用とを見て論ぜずんば、世間の直接衣食の外は悉く贅澤物となり、養蠶家の類も亦特に排斥せられんとするなるべし。實に極端に偏する管見たるを免れざるなり。更に請ふ、花の市價を見よ、米國桑港に於て通例葬式或は婚儀の時に當りて會堂を裝飾するに費す百合其他の花の價は無慮一千弗(我が二千圓)を下らず、演戲見物の折胸間に挿める熱帶地方の花は一輪の價實に十六圓を支拂ふなり。菊花一輪の價二圓、麝香なでしこ一房五十錢、香すみれ、麝香れんり草の如き亦高價を支拂はれて交際場裡に薫ずるは、歐米今日の實況にして、從つて新奇異類を競ふの供給者あり、現に横濱邊りにて、夜會演戲のために薔薇、香すみれ等の突然高價を呼ぶことあるは屢〻ある事柄なり。我が與農園と

取引をなし居る米國のバービー種苗商會より發賣したる矮生爵香連理草はカリフオルニア州の或る農家で偶然發見したるものなるが、この事を傳へ聞ける該商會は、七千圓の巨額を投じて逸早くその發賣專權を購求し、これを蕃殖して今なほ高價に販賣して利益を收めつゝあるなり。我が國內地雜居實行後は外客の次第に入りこみ、歐米風習の行はるゝは到底避くべからざるの定數なり。故に、よくこの氣運を達觀して機宜に投ずれば必らず異常の利益を收むるを得べし。

細小なる粒種、眠れるが如く又無生に似たり。しかも、その一旦發芽し、生長し、蕾綻ろぶの時としなれば、馥乎たる芳香は招かずして人の來り訪ふあり、嬌嫣たる風姿は呼ばずして人を徘徊顧望せしむ。誠に自然の人を待つの慈仁の深きかな。我輩は我が國民が繁忙中にも尙よく花卉を栽培してその天眞を味ひ、その利益を收めて、時勢に先んずるの識見あらんことを冀望するものなり。

——明治三十二年四月

第二十五話　農商工は提携せよ

農業は商工業に比して、その發達頗る遲々たりとは、世間の往々稱說するところなるが、元來農業そのものの性質上より觀察すれば、その因順濡滯なるは、誠に已むを得ざるの次第なれども、今は大いに警醒覺悟するところありて、晝然面目を改めつゝあるなり。加之、地方の農者は、彌增に

改良進歩を加へて、日一日と新奇を競へるあり、遠からず成功を見るに至るべきを信じ、我輩甚だこれに囑望せり。

然るに世人は、一概に論じて、本邦は商業國となすべし、否、工業に利ありなど、喋々囂々、立國の基を議するは我輩の解釋に苦しむ所以なりとす。かゝる論者は、商工業の原料を他國に仰ぐの考案かは知らざれども、かく一方に偏するは、決して國家の生存上その適度を得たるものとは云ふを得ず、且つ四千萬同胞を滿腹せしむる材料を供給すべき農業を輕視せんとするは、我等の到底首肯し能はざるところ、寧ろその無謀なるに一驚する所以なり。我等は農を以て立國の基となす往古の說に左袒するものにあらず、單に天產物にのみ依賴するの危險なるは、我等もよくこれを知るものなり。故に今日我が國の狀態より觀察すれば、工業起すべし、商業盛にすべし、されど農業亦決して忽せにすべからず、三者相俟つて國家生存の基礎を堅實ならしむべしといふなり。

商工論者の說も亦一理ありて、強ちに排斥すべきにあらざれども、奈んせん、農は就業者の數より見るも、亦租稅の負擔額より考ふるも、その大部分を負ひ、その大多數を占むる現況なれば、農の盛衰は、直ちに商工の盛衰に影響すること、甚だ顯著なる事實にして、卽ち、一昨年中の不作は、大不景氣を招來して、起りかけたる事業も顚跌し、商業は見る影もなく萎微したりしが、昨年の豐作によりて漸く挽回の色を現はしたるは、とりも直さず、農の豐期直ちに商工に波及したるの實例な

るにあらずや。

この故に、商工を以て立國の基となさんとするは、未だ以て正鵠を得たりとなすべからず。況して人口は強烈の勢を以て增加し、しかもその割合に他に向つて排出する途を得ず、到底農業を改良して多產を計るの急務なるに歸着せざるべからず。之を要するに、商工と農との關係は、共に進み、共に退くものにして、提携扶助、以て國家の隆運を計るべきなり。もしそれ、彼の長を嫉み、その盛を羨やむ如きは、誠に輔車唇齒の勢を解せざるものと云はざるを得ず。故に、各自その本分に盡瘁して、その農たり、工たり、將た商たるを問はず、均しく進歩せしめざるべからざるの理を知了して、以て前途を畫策すべし。

時としては熱心の餘り、或は私利を營むの極、計らずも、他の事業を輕視し、又は自己の稅額を輕減せしめてその負擔を他に嫁せしめんとすることなしとせず。近來市と郡部とに於ける租稅上の衝突ある所以にして、無邪氣なる農家に、過重の租稅を負はしめんとする、固より宜しからず、されど、適當に負ふべき稅額を免れんとする亦不可なり。清廉高潔の心もて國家を料理せんことは我輩の切望するところなり。

近來、立國の事業につきて議論頗る盛なれども、農家はこの際輕々の浮辭に雷同することなく、よく自他の關聯を洞察し、農工商と共に進みてこそ、國家を堅實强固ならしめ得べき所以の理を

思ひ、以て熱心に斯業の改良進歩を計り、よつて他日の效果を卜すべきなり。

——明治三十二年六月

第二十六話　我が果樹業の將來

我輩の待ちに待ちたる改正條約は、本月を以て實施され、我輩の認めて以て先進國人となしたる歐米人は均しく我が法權の支配を受くることゝなり、我等同胞の面目はこゝに改まり、我が國の聲價はこゝに倍蓰するの高きを加へたり。我輩は一大白をあげてその成功を視せずんばあらず。今より後、彼の外客は、本邦到る處に於て軒を並べ、店を接して、思ひ〳〵の雜業に從事するなるべく、田舍等にては不慣れの邦人が習慣違ひの外商と駈引をなす際には、可笑しき話柄の起ること屢〻なるべし。

元來外商は、多年文明の素養ある上、萬里の波濤を越えて進入するだけありて、事業には拔け眼なく、圓轉歡語の間にも乘ずべき儲け口を覗ひねる技倆は仲々に侮るべからず。身を商界に置く人はまだしものこと、緣遠き農業者は、時に、或は不慮の失敗なきを保せず、本來から云へば、農業とて世界の大勢、國情の如何、市場の需給等を察して以てそれに應ずる農作物を作るが當然なれども、從來の慣習として、農者の多數は隱遁の風を學び、世外の業と認めねるものゝ如し。我輩の

懸念して屢〻忠告を試むる所以なり。

陰霧一霽乾坤轉還、內地雜居となりたる曉は、農者も亦その決心を以て業務に當らざるべからず。維新以來三十餘年、その間國粹保存とか、守舊主義とかを云々する輩もあり、多少の勢力なきにしもあらざれども、國家進取の國是は、一定不換蕩々炎々、文明の潮流は歐化主義と隨伴して、疾風迅雷到る處の舊慣を破り、衣に食に住に、これを老人の眼より見るならば、殆んど危ふしとまで怪しむほどの變化を致したるものにして、更に將來は數倍の猛力を以て歐化さるゝは、自然の數なることを斷言して憚からず。

歐風悉く善なりと云ふべからざるも、歐風の侵入は決して憂ふべき現象にあらず、寧ろ喜ぶべきもの多きを以て、農者はこの際流言浮說に動かさるゝことなく、時勢の變遷と共に進歩し、食物の需要に應じて供給するの準備肝要なり。否、獨り外人の食膳に供するのみならず、接比隣交する本邦同胞も、自然見習ひて食物の變化をなすものなれば、彼此斟酌勘考して農作をなすべきなり。

かの葱頭（たまねぎ）の如き、甘藍（たまな）の如き、將又苹果の如き、洋桃の如き、洋梨の如き、その初めは居留外人を目的に作りたるものにして、東京にては一二八百屋店の外、見ることさへ容易ならざりしものなりしに、今は場末の八百屋店頭に累々たること、大根蕪菁と毫も異ることなきに至れり。東京附近

の川崎に於て、初めて水蜜桃を作りしは、僅々十數年前のことなりしが、當時は賣り捌きにも頗る窮し、一顆の價實に一錢を出でざりしと。然るに、今や、甘酸度に適して艶肥なる好果は、一顆五六錢より八九錢の高値を呼び、嶄然園藝家の專業となりしなり。

頃日我輩が四國漫遊の途次、讃州高松を過ぎたるが、同地附近の鬼無村にては、苹果の出來頗る美事にして、水蜜桃亦仲々の好成績なりき。同縣吉原知事は、大いに桃樹の栽培を奬勵して一大富源をなさしめんと欲すと語り、松崎郡長は、小學生徒に果樹を栽植せしむる見込なりと云へり。蓋し時宜に投じたるものにして、我輩の大いに同感するところなり。

而して、果樹は讃州のみに限らず、本邦の風土は溫帶より寒帶に連亙して、各種植物に好適し、到る處に成果し繁茂するを見るが故に、各地方に相應せるものを選びて栽植し、差し當り、在留外人及び同胞の需要を充し、追つては海外へ輸出するの企てなかるべからず。米國カリフオルニア州は、もと果物に適したる地なりとはいへ、當事者その栽培に甚だ熱心にして、改良に改良を加へ、大いに面目を改めて盛に輸出するに至れり。

我が農者に於ても宜しく土地の適否、及び栽培法の如何を考察すると共に、販路擴張の方法をも研究して、利益を永遠に持續するの策をめぐらさゞるべからず。蔬菜果物を不時に市場に出して顧客の好奇心を釣り、異常の利益を占むることは、歐米當業者の常に實行するところなるが、

我が國にても速成栽培法によりて利益したるものなきにあらず。草苺(いちご)を不時に持ち出して、一粒五六錢の高値を占め、蕃茄(トマト)の一顆十四五錢を價することあるは横濱附近の農者の屢〻實見するところなり。花卉の如きも、一概に觀察すれば、贅澤なる感なきにあらねど、外國人にありては缺くべからざる必需品にして、自家庭前の眺めには勿論、冠婚葬祭弔慰祝期、凡ゆる場合に用ひらるゝものにして、これ亦爾後農者の手によりて大いに利益を得らるゝものの一なるべし。

斯の如く、時勢の變遷、否、内地雜居の當然の結果として、農界に一大變革を促すべき、寧ろ一大富源を與ふべき時機到來せりと云はざるを得ず。而して花卉蔬菜の如きは、大抵思ひ立ちたるその年内、又は翌年に供給するを得て、相當の利益を見るを得べけれども、果樹に至りては、古人の所謂「十年の謀は植樹にあり」にして、かく短期間に收利さるべくもあらず。比較的結果早しといふ桃の如きも三年後ならでは結果を見る能はず、その盛んに成果するは六七年の星霜を要す。その一と度成果するや、長日月その利德に浴するを得る代りに、後年來るべき成果を豫察して以てその準備をなすの明なくんばあらず。然らずんば、その需要の頻繁なる時に於て應急の策を施すに由なく、手を拱して徒らに他の巨利を占むるを羨望するのみとなるべし。

果樹類に於ては、もと生食に適するあり、料理に便なるあり、貯藏に利なるあり、菓子の原料に資すべきあり、乾干すべきあり、又釀酒すべきあり、現に米國より本邦に輸入する乾燒酎(ほしはたんさう)、杏乾(ほしもも)、桃乾(ほしもも)、李乾(ほしすもも)、乾

葡萄乾スグリー等の乾果類は誠に多額なるものにして、先頃東京與農園にても之等乾果類を輸入したりしが、その賣行甚だ好況なりき。而して今後在留外人の多數なると、食物の變化するに伴ひて、之等果物の需要の轉增加すべきは見易き道理にあらずや。故に農者は、今日に於て早く既に果樹の栽培を怠るべからず。

「療法を研究するよりは、寧ろ强健となるの方法を講ずるに如かず」とは、泰西の俚諺なるが、彼等はよくこの意を遵守して、健康を保持するために、多額の果物を喫するなり。果物は健康を補ひ、排泄をよくし、消化を助け、殊に熱病に罹るの憂をさへ避くといふ。況して肉食者の副食物としては缺くべからざるの必要品たり。されば本邦に於て肉食の盛なるべき兆候ある今日に當り、果物需要の盛にならざる理由なきなり。

果物需要の盛なる泰西にありては、毎に常食物と拮抗し、或は多量の果物を喫してパンを省くことあり、又は果物を以て畜類を飼育する場合あり、又以て果物需要の盛なるを察するに足るべし。果物需要の盛なること斯の如くなるが故に、泰西文明諸國に於ては、果樹栽培家の團體頗る勢力あり、政府に於ても亦努めてこれに便宜を與へんと欲して惰らず、隨つて排水、灌漑、培養、奬勵、蟲菌の驅除豫防より輸出販路等の機關は悉く具備せざるなく、果實專門の雜誌あり、改良進歩に關する協會あり、鐵道汽船の運賃割引等、その用意の周到なる、殆んど間然するところなき有樣な

るが、これ畢竟、果樹栽培家の多數なるよりこゝまで進みたるものに外ならず。

氣候風土の果樹栽培に適せる本邦に於ては、各其地に適應せる果樹を選び、栽培法を研究して、着々植樹したらんには、米國の盛運、强ち期すべからざるにあらず。況してや貨銀低廉なる本邦なれば、栽培に手數をかくるも尙生產費を減じ得て、優に彼の地の市場と競爭するを得べし。

故に我輩は切に望む。農者は先づ內地の需要に應じ、進んで海外輸出を計るべしと。世界の大勢に於て果實需要の潮流は益〻盛なるべく、供給何程多額なるも決して販路に窮するの失態を見ることなかるべし。時やよく、機は熟せり。請ふ、直ちに實行せられよ。

——明治三十二年八月

第二十七話　女子農事教育論

一國の人口は、男女相半數を占むる割合にして、その一方なる男子のみが學問あり智識ありといふ場合には、卽ち半數の働きなるが故に、決して圓滿なる社會を形成すること能はざるのみならず、眞の文明國、進步せる國家として成立すること能はざるは誠に見易き理なり。女子の教育あると否とによりて文明の程度を計るべしと云へる泰西の語は、決して意味なきものにあらざるなり。

試みに思へ、男子がその業務のために役々勤勞するに際し、女子は少しも同情を表するの思慮なしとせば、如何に乾燥せる、如何に殺風景なる、如何に不愉快なる家庭なるかを。一家團欒の上よりするも、女子に教育を授け、知識を有せしむることの必要なるは、自明の理にして、家にありては男子をして內顧の憂なからしむると共に、陰に陽に男子の勤勞を助けて、その勞苦を輕減せしむるは、眞に教育ある女子に於て初めてこれを見るべきのみ。

男子の死亡年齢について、或る確實なる統計によれば、男子が五十歳以上となれば俄然死亡數の增加するを見る。而して教育家はこれに理由を附して曰く

「その然る所以は、平生男子一人にて一家の全生計を負擔し來りたるところ、兒等の成長を見て先づ一と安心と思ふ頃、宿勞忽ち襲ひ來りて他界に入るものなり」

と。實にさることなるべし。もしこの際幾分たりとも教育ある女子にして勞を分ちて自ら負ふところあるか、又は同情を表して慰愉するところあらんには、大いに快豁するものありて、老衰を早むるには至らざるべし。特に一家の風波は、大抵知德なき女子の主婦なるより起るものにして、忍耐も、勤勞も、苦痛も、擧げて教育ある知識より割り出してこそ、眞に平和なる家庭の得らるゝものなれ。

又、業務の繁昌もこれによりて得らるべき筈にして、教育なきものは、暗夜の無提灯の如く、盲者

の無杖と同じく的途なき勤勞にして、悉く客氣たるに外ならずといふを得べし。これ蓋し普通教育に於てのみ然るにあらず、農工商何れの業に論なく、それに相應せる知識を有することは甚だ肝要なりとす。されば、農家に於ける婦人は、その身分相應の普通教育を受け、更に又農事上の教育を修めて以て家庭を治め、農業に從事したらんには、その勞少にして效多きこと、筆硯のよく盡すところに非るや明らかなり。

近時農事講習會の實施せられたる地方に於ては、その講習する時間の極めて短期なるにも拘らず、卒業せる男子はよく學理の端緒を發見し、進取改良の途に向つて着々進みつゝあり、從來父祖傳來の迂遠なる方法は漸次掃蕩せられつゝあるを見る。かの苗代の改良、害蟲驅除、選種、農具改良其他凡ゆる方面に向つて進歩の跡を示し來れり。而して、之等の人は既に素養あるが故に、農談會に出席しても、よく學士、專門家の講說を諒解し、なほ進んでその蘊奥を極めんと欲するは、誠に賴もしきことと云ふべし。然れども、これ獨り男子に於てのみ然るなり。その男子の侶伴たるべき、配偶者たるべき、仕事相手たるべき、將又留守居たるべき婦人にして、何等敎へらるゝところなく、依然として父祖傳來のまゝに放任しあらんには、假令男子にして從前に優りたる思想と敏腕とを有せるにもせよ、その活動の上に思はざる障碍を見ることありて、常に隔靴搔痒の感に堪へざるものあるべし。何となれば、一家の風波は主として嗜好の相反するに起因するもの

なればなり。

故に、社會の一半を形成する女性にして、農工商、その何れを問はず、適應せる教育を受けて進むにあらずんば、我が國の繁榮は決して充分なるを期し得べからず。殊に農業は商工業に比すれば保守的なるものなる上、婦人亦保守的傾向を有するものなるが故に、これを扶持誘掖するには一層の注意を用ひざるべからず。況して都會を隔てたる僻隅半仙の地にありては、特に新思想の注入につき意を用ひざるべからざるなり。

去る九月中、文部省は、全國農業學校長を省内に會せしめて諮問案を議せしめたりしが、その原案中に、女子の農業教育に關して左の如き一項あり。

女子の農業教育に關する施設は如何なる程度組織を以て適當とすべきか。女子の農業教育は或る程度に於て之を一般に普及せしむるは頗る必要の事たるべし。而してその程度組織につきては男子と全然同一になし難きものあるべきを以て、その最も適當とすべき施設に關し、各員の意見を問ふ。

而して、これに對し會議員は次の如き答申をなせり。

女子の農業教育を普及せしむるには、土地の狀況により、尋常小學校に於ては補習科として、高等小學校に於ては正科として農業科を課し、農業補習學校のある處にては女子部をも併置するにあり。而してその程度は最も簡易なるを要す。

我輩は、保守的の稱ある我が文部省が女子教育に對する諮問案を出すに至りたるを悦ぶとと

もに、會議員の答申の餘りに簡潔にして不充分なるを悲しむものなり。女子に農業教育を課するは、本邦現今に於ける重要適切事項なれば、我輩は寧ろ冗長を厭はずに解說して遺漏なからむことを望むものなり。

しかし、そは措いて論ぜず、我輩の卑見を以てすれば、女子の教科中、普通の讀書算術等を教ふるは勿論、農業科を課するには、その地方々々に於て行はるゝ種類を程度標準とし、見計ひて編入するを適當と信ず。例へば、蠶業地方にありては桑の性質、選種、挿秧等、果樹の地方にありては適地、接木、肥培、剪定等、野菜の地方にありては蔬菜栽培一般、茶の地方にありては製茶、除草、茶樹栽培等、其他牧牛、豚、家禽、又は養魚、養蜂、養兎等に關してもそれ〴〵專門の飼育法あることなれば、直ちに實地に應用せらるゝ事を度として教課を組織すべく、特に海を離れたる信州地方の如きにありては、養魚、養畜は必要に應じて課せざるべからず。鹿兒島、琉球等にありては、現に養豚は女子の仕事と看做されをるものゝ如し。伊豆の大島等にありては、牧牛は女子の作業となりをれり。之等の地方の女子にはそれ相當の簡易なる課程を要す。

又、家政學の一通りをも教へて家事に當るの準備をなさしむべし。又、從來は迷信謬說多く行はれて、何もなき處より蟲が湧き出づるとか、狐狸憑據するとか、童雨を降らすとか、卑賤なる陋說に眩惑せられて信心するもの甚だ多し。教授講習中に之等を勉めて排除すべきは當然のこと

なり。

大凡教育をして興味あり、活氣あるものとなさんには、直觀より入らしむべきもの、卽ち實物教授を先とせざるべからざるは一般の通則なるにより、特に農業教育の如きは直ちに採り用ひて實地に適應さすべきものなるを以て、試作物を設けて一々實地に當らしむべく、又審美的興味を起さしむるは最も必要なるが故に、女生徒をして喜び且つ樂しみつゝ習得せしむる方案を立てざるべからず。女子は從順にして愛に富み情に深きものなれば、方策次第によりて著しき效果を見るべきや必せり。

學校に於ける正科教授の外になほ我輩の望むことあり。卽ち、土地相應せる短期農蠶講習會を開きて男子に教授すると同樣の方法を以て、女子にも簡單なる講習をなすべきにあり。從來男子に短期講習をなして著しき好成績を得たりしが、女子に於ても亦これに劣らざる成績を見るべしと信ずるなり。我輩は昨年中養蠶地方なる信州に赴きて、婦人に對する短期農蠶講習會を設くべしと、その地の當路者に語りて贊同を得たれども、未だ實行の運びに至れるを聞かず。信州地方に於ては、養蠶盛なる頃となれば、小學女生徒の多數は休校し、家にありて養蠶の手傳をなすものなりといふ。されば、その給桑又は取扱に於ても徒らに理窟を知らざる他人の飼育を見習ふまでにして、その基礎原理に至りては全く暗黑無智識なるものなり。故に給桑の過不及、

取扱の不都合は頻繁に起るを以て、これより生ずる損失は決して些少ならざるべし。故に老少を問はず、婦女を集めて講習せしむるは極めて緊切なりと信ずる所以なり。

これ單に信州地方を例として述べたるものなれども、製絲、茶業、果樹、蔬菜、家畜等に於ても同樣の方法を以てその地方に施行したらんには、著しき便益を得べきなり。我等の曾て英國にありし時、酪農業改良の目的を以て、その道に精進せる巡回教師を派し、酪農業の盛なる土地に於て婦女子を集めて教授せしめたるを見しが、實地につきて一々理論を說明し、一村より一村に轉じて奬勵せしかば、忽ちにして酪農改良の實を擧げて繁昌を極むるに至れり。これ亦酪農に於ける實例に過ぎざれども、とりて以て我が農界の改良に資するに足るべし。

これを要するに、男子に農事の教育を施すの必要なると共に、女子にもこれを課せざるべからざるものにして、從來の如き有樣にては、折角の男子の勞苦もその效薄くして充分なる效果を得る能はざるのみならず、常に不快の生活を以て終らんのみ。されば、利益の點より云ふも、愉樂の上より見るも女子に農事教育を施してその知見を增進するは目下の急務にして、又充分なる理由ありといふべし。唯、その宜しきに適へ、度に應じて施行あらむことを望むなり。凡そ利のあるところには、害の隨つて起ること、何事にも免るべからざるの數たり。新事業實施の際に當りては注意に注意を加へて、害を去り利につくの成算なかるべからず。大方針既に決したる以上

は、小事に拘泥せず、邁往果敢、速やかに着手せんことを冀望して已まざるなり。

——明治三十二年十一月

第二十八話　農家の聲

人類には意志を發表すべき天賦の聲あり、窘窮愉怏假りて以てその聲を大にすべし。「大凡物不得其平則鳴」この冒頭句を以て韓文公は孟郊野を假りて自己の不平を鳴らしたるが、その平を得るの際も聲なきにあらず、獨り不平に際會せば、その聲の强激なるのみ、悲痛なるのみ、蓋し今の世に處して、その宜しく鳴るべきの時に鳴らざるは、恰かも無能を告白すると等しきなり。故に、歐米に於ては、農工商の何れなるに關せず、新聞に、雜誌に、演說に、遊說に、其他凡ゆる手段を術數を盡し、各その聲を大にして自家營業の利益を計りつゝあり。

その一個人たり團體たるの差別なく、權利を侵害せられんとする場合、若くは權利を振暢せんとする場合、或は利益を保護せんとする場合には、大聲疾呼社會に訴へて同情を求め、輿論を喚起せんとする有樣にして、その振舞如何にも雄々しく感ずべきこと多し。既に斯の如きが故に、自家の利益を容易に他に侵さるゝことなく、各自本業の範圍を固守し、自然競爭の原則たる攻守の內にありて、美事隆盛に赴ける狀況は、寧ろ羨やましき事にして、歐米社會の漸次盛運を致せるは

決して偶然にあらざるを知るべし。

されど我輩をして未開當時の歴史を繰り返さしめよ。云はんと欲するも云ふ能はず、訴へんと欲するもその道を得ず、不平憤懣は悉皆方寸の裡に收めて絶えて漏洩するの策なく、甚しきは、路上、眼を以て意志を相通ずるに至る。當時の人民が如何に苦痛悲哀に充ち滿ちたりしか、推測するに餘りあり。利益を與へらるゝも唯々甘諾するのみ、權利を奪はるゝも耐へて忍ぶのみ。一言以てこれを盡せば、實に我れなきものなりしなり。躊躇咯咀踼蹐迂餘、その勘忍袋の破るゝに及んでは、命を賭して竹鎗蓆旗の暴擧に出づるのみ。實に言語に絶する時勢なりしと云はざるを得ず。

飜つて我が國の農民を見るに、我が國の農民ほど忍耐強き者は世界中に又と見るべからざるものゝ如し。戴星踏月營々役々、苦辛勤勞せる報酬は如何と問はゞ、僅かに一家を支持するに過ぎず、自家に生産せる甘き米は食し得ずして、却つて麥飯芋汁に腹を肥やすが上に、三百諸侯を一手に引き受けて奉養し來りたる苛稅に鍛へられし腦髓は今もさほどに進化することなく、增稅せらるゝことあるも、將又その利益を侵害せらるゝことあるも、その不平と不愉快とは一切懷中に疊みこみて毫もその聲を鳴らすことなく、恰かも牛馬の重荷を負はされて、鞭撻の下に汗を流しつゝ馳驅すると同樣なる風情の見ゆるは、寧ろ悲しむべき狀態なりといはざるを得ず。然れ

ども これ豈國家のためには喜ぶべきものとなさんや。

農者は國民の過半數を占めをるものなれば、その思ふところは自由にこれを演べ、その需むるところは自由にこれを求めて、以て自家の利益を保護擴張し、伸展せしむるにあらずんば、斷じて將來の發達は期し得られざるなり。見よ、商工業者は、農者に比すれば甚だ少數なるにも拘らず、聊か智力の優れる者あるによりて、盛にその聲を大にし、漸次に勢力を擴張し、將に農家の領有すべき權利をも侵略せんとするに至れるは、我輩の甚だ慊焉たらざるところなり。

されど、我輩とて本來商工業を輕視するものにあらず、農業と共に商工業の發達せんことを切望するものなり。商工業の發達する時は、農產物の販路自から擴まり、隨つてその價格の騰貴する原因となる、卽ち、商工業の隆盛は延いては農業の盛運を喚起する效力なるを確信するものなり。世に重農說を主張するものありて、獨り農をのみ奬勵せんと企つることあらば、我輩は躊躇なく反對の意思を表明すべし。何となれば、今日の開明世界に處して、重農說の既に陳腐なるを信ずればなり。

然れども、これと同時に、商工を重んじて農を輕視せんとするが如きは又斷じて不可なりとす。とまれ農產收穫の多寡によりて我が國經濟界の隆替を來す今日の實況なるが上に、國稅の負擔亦重く農者の双肩にかゝりをることなれば、一方には大いに農事を奬勵して以てその發達進步

を促し、一方にはなるべく農者の負擔を輕減して以てその改良に餘地を與ふるの策を講ぜざるべからず。

かゝる重大時期に際會せる我が國農者の意思如何を揣れば、遺憾ながら「我は國家の重要位置にあるものなり」との自信は毫もなきものの如く、或は知らざるが如く、又覺らざるに似たり。世間は如何に進みつゝあるか、自分の本領が他の業者に侵蝕せられつゝありや否や等の諸問題は一切度外視して、曉夢暖かに太平を謳ふ有樣の見ゆるは、國家の經營上、甚だ悲しむべきことなりといはざるを得ず。試みに思へ、農者自身の選擧したる代議士にして、農者の意思の反響たるべきものが、却つて農者に重稅を課する問題に贊成したる時の如きは農者の頭上にかゝる大問題といはざるを得ず。我輩はこゝに增稅の可否を論ぜんとするものに非れども、かゝる大問題に際會して農者は可否の意向を發表せず、寂として沈默を守りたること、恰かも對岸の火事を眺むるが如き事實ありたるは、我輩の大いに執らざる處なりしなり。

畢竟ずるに、農者が自己の利害に無頓着なること今日の如くんば、その權利は益々侵蝕せられ、負擔は愈〻增加せらるゝとも輕減さるゝことなく、遂には少數商工業者のために漸次立脚の地を失はずんば已まざるに至るべし。故に、農者は今に及んで大いに顧みるところあり、昂然その聲を大にし、以て自己の利益を保護するの策なかるべからざるなり。——明治三十二年十二月

第二十九話　路傍植樹論

樹木の人生に有用なるは、今更喋々するを要せずと雖も、なほ大いに警告せざるべからざる所以のものは、昨今に於ける木材並びに薪炭の價格の騰貴傾向が、世の進歩につれて益〻甚しからんと思惟さるゝが故なり。建築工事の彌〻盛なるあり、人口の益〻増加するあり、何れも木材の需要を増すべき原因となれる一方、樹木を養成すべき土地は、開墾して他の利益多き植物を栽培するに至るが故に、供給は自然に減じて木材の價は高くなり、又薪炭の拂底を來すは免れざる現象なりとす。

維新前に於ては、晝然たる植樹法が諸藩の間に行はれ、一樹を僵せば新たに苗木を植ゑつけてこれに代るの準備整ひ、よく後年の遠慮をなしたりしが故に、用材の缺乏を訴ふる憂少く、濫伐より生ずる弊害を見ずして、誠にこの一事は無事平安、曾て苦情なきのみならず、外國人も我が國の植樹方法の行き屆けるには讃嘆措かざりしといふ。

然るに近年は之等の植樹規定もなく、濫伐勝手なるがため、河水漲溢して田畑は侵され、橋梁は破壊され、殆んど處置に窮せる場所少しとせず。これ畢竟我が國人が植樹の要を忘却したるに起因せずんばあらざるなり。我輩が植樹を勸奬する所以は、樹木そのものに實利あるは勿論な

れども、單に實利をのみ云ふものに非ず。彼の鬱々蒼々たる壯觀は何となく心氣の爽快を覺え、又亭々として高く空を凌げる狀（さま）は凜として犯すべからざるの威風あり、その如何に精神的訓育に效あるかを知るべし。掌上に翻弄さるべき蕞爾たる一粒の樹子は、潤澤宜しきを得ればかゝる大樹ともなり、或る時は風に搖られ、雪に壓（お）されて寸退尺伸、遂によく嶄然秀でたるものなるべく、又或る時は英雄に一夜を貸すこともあるべく、豪傑に暑を避けしむることもあるべし。彼を思ひこれを想へば、幾多の感慨、去來してやまざるものあり。

我輩の樹木を愛するは單純なる意味に非ざる所以にして、且つ他に卒先して學校生徒の植樹を屢〻稱道したる所以なり。ノースロップ博士は米國にて學校生徒に植樹せしむることの極めて效顯あるを論じ、大いにこれを實行するに至りたる人にして、米國に於て植樹記念日を設くるに至りたるも全く同博士の與りて力あるところなり。又、荒涼として一樹の日光を遮ぎる影だになき處も、今は鬱々蒼々たる森林を成すに至りたるは、卽ちノースロップ博士の唱道によりて學校生徒の植樹したる結果なりと云ふ。去る二十八年中、博士の本邦に來遊したる砌、我輩は博士をその旅宿なるミラー氏の宅に訪ひて懇談したることありしが、博士の說はよく我輩の卑見と契合せるを見たり。

爾來愈〻植樹の必要を唱道せしが、日本人の性質として熱するに疾くして又冷ゆるに速く、同博

士來遊の後暫らくは植樹必要の聲頗る高く、諸處に傳稱せられしも、年を經るに從ひて、淡然冷然、今は全く意識の外に放逐せられて寂として音だに聞かざるは遺憾の極みなりとす。ノースロップ博士は昨年を以てその偉大にして有益なる事業を遺して不歸の客となれり。詩聖シエークスピアは「人のなしたる働きはその死後に生存す」と云へるが、眞に然り。博士の着手したる事業は今に於て存在し、なほ生長しつゝあり。我輩は自己の存生中植樹の必要を唱道し、實行し、次の代に於て鬱蒼たる若くは壯麗なる樹木の、空を凌ぎ天を衝きて聳ゆるあらむことを念じて已まざるものなり。

米國の詩人ホイツチヤアは、自然を歌ひ農業を讃美したる人にして、自然を歌ふ詩人の名を謳はれしが、その人の作品中に

黄金（こがね）のぞまば　をろかしき
人にあたへん　權力（ちから）をも
たのまば惡（あ）しき　人にさへ
まかせんものを　あはれ世の
運命こそは　うたかたの
水の泡なれ　いくとせを
ふるもくちせぬ　木草うゑ

千世の後まで　にほふなる
花につちかふ　そのわざは
げにもめでたし　もろ〳〵の
いとなみよりも　うるはしく
はたかぐはしき　わざぞかし

と云へり。然り、一樹を栽植したる人は、卽ちこの世に美を遺し富を增したるものに外ならざるなり。

植樹の必要斯の如しとすれば、學校の生徒を初め、何か記念すべきことあらば、卽ち各地の人々はこれを機として必ず植樹を實行すべし。我輩旅行の都度視察するに、路傍又は丘陵の斷面、及び河邊等には空地となしおく處多し。これに樹木竹類を栽植すれば、優に町村の基本財產として相當の利益あるのみならず、地力養成の利益は勿論、外見も甚だ美觀を添ふべし。我輩がこゝに特に注意を喚起せんとするは路傍樹に關する一事なり。

我が國にては從來「並木」と稱して、主要なる街道の兩側に列をなして植樹せり。こは天下周知の事實にしてその利益の如き更めて贅言を要せず。我等の祖先が斯るところに注意して惠みを後世に遺したるは、深く感謝すべき點にして、外國人にも誇り得るところなり。當時に於て、路傍樹の性質につきては格別に攻究することなく、氣候適地等につきても漫然たるは稍〻遺憾なれ

ども往時の狀況に照しては實に大出來なりとして稱讃せざるを得ず。

然るに、封建時代の紆回屈曲せる道路は眞直に改造され、又各地に於ける道路の擴張や市區改正等の續々行はるゝ今日となりては、路傍樹につき大いに攻究せざるべからざるものあるなり。我輩は東京市政に關係を有するが故に、その市區改正の行はるゝ場所に植ゆべき適樹につきては聊か攻究せるところあり。市街內に植うるべき樹木の種類は、同一市街中にありても住宅の如何によりて異同なき能はず、もし商家軒を並べて繁華熱鬧せる場所ならば、樹木繁茂のために店の屋號、看板、又は建築の模樣等を蔽ふ如きことなき種類を植えざるべからず。これに反して官吏の多く住居せる街又は商店街ならざる場所ならば充分に鬱蒼繁茂せるものを植えて可なり。先年我輩の外遊せし折、都市の模樣を見るに、並木の均齊にして優美なる、如何にも市街の美觀を增し、且つは漫步の快味を增さしむるを覺えたりしが、これ畢竟、樹の撰擇宜しきを得たるによらずんばあらず。而して市街並木の管理、植付費用及び手入の如きは、市に於て全然負擔するものと、市と植樹前面の家屋所有者と半々持ちにするものとありて一定せず、その何れにしても樹の性質を撰むこと肝要なり。元來樹種に富む我が國のことなれば必らず相當せる好樹木多かるべしと信ず。

これを要するに、市街に植うるべき樹木は、實は食し得ず、花は美麗ならず、又、なるべく蟲のつか

ざるものをよしとす。果、花の美なるは盜心を誘發する憂あり。而して火難に罹り易からず、又、出來得べくんば他日木材として用途あるものを選ぶべきなり。すべて、樹木を植うるは、恰かも金錢を銀行に預け置くと同じく、人の遊べる時も、眠れる時も、安閑として無爲にをる時も、預金の利子が增加する如く、一旦植えつけたる樹木はその成長によりてその利益を增しつゝあり、況んや樹葉の呼吸作用によりて空氣を清淨ならしめ住民の健康補益の力あるに想倒すれば、植樹の效用は蓋し計り知れざるものあるなり。

今や樹木移植の好時期に向ひたるを以てこの季節を逸せず夫々實行せざるべからず。路傍植樹の如きは一個人の仕事に非るが故に、或は市町村會を鞭韃し、或は農業團體より建議し、凡ゆる手段を盡して直ちに實行に着手すべきなり。都て植樹の如きは、一年先んずれば一年の益あり、一年遲るれば一年の損あり、我等は一日も速かならんことを望むものなり。

——明治三十三年二月

第三十話　農家は時を重んぜよ

——時と稱する大時計には唯一語の記されあるのみ。曰く、今。故に直ちに働きてこの瞬時を捕へよ。ナポレオン、曾て墺軍の敗北を嗤ひて曰く「彼等は五分間の價の幾何なるやを知らざりしが故に

敗れたるものなり」と。文明の今日に生活する農家は、宜しくこの語を特筆大書して、以てその居に扁せらるべし。

時の貴重すべきことは、何人も認むるところにして、今更喋々するを要せざることなるが、さて實際に立ち入りて、果して貴重すべき實を踐み居るやと云ふに、否と答ふるの外なかるべし。見よ、政府の工場より民間の工場に至るまで、或る特別なる場合を除くの外は、時間には一切無頓着にして、頽然、蕩然、毫も意に介するところなきは、明らかなる事實なり。而して、農家に至りては、特にこの惰弱氣風の習慣あるを見るは遺憾に堪へざるところなりとす。

我輩は諸方を巡回して、親しく各地の農家と交り居るが故に、農家生活の實情にも通ずるを得たり。農家の親切にして素朴なる、眞律にして隔意なき、愛情の掬すべき、無邪氣の賞すべきなど、平生都會に生活して、商工家に接する我輩などにとりては、實に愉快を感ぜしむるものあり。もし、我輩をして他の境遇ならしめば、直ちに去りて、之等質實素朴の人々と共に、農圃にありて悠々歳月を樂しまんものをと思はしむること屢、これあり。然り、農村は或る點より評すれば、實に樂土に外ならず。

その餘りに氣樂なるがために、遂に世外漢となりて、世間の進歩に頓着せざるほど悠長に流るゝを見る。特に時間を貴重せずして閑日月を送ること、恰かも時間と生命とは全く相關係なき

が如くなるを見る。例へば、農談會其他農事上の會合を催す折には、朝九時より參集せらるべしとの案内を受けながら、九時、十時はをろか、時としては午前十二時に至りて漸く開會に至ることあり、尤も商工者にてもこの弊習あることにて、農家をのみ責むべきにあらざれども、農家にありては、その一層甚だしきを見るなり。かゝる弊習は文明の今日斷じて許されざるのみならず、その現存する限り、凡ゆる方面の改良發達は阻止さるべし。假りに二百人集まるべき農談會の席上、その半數が一時間を待ち勞れて徒消したりとすれば、積みて百時間となり、もしこれを二時間とすれば二百時間となるの割合なり。賃銀騰貴の昨今、二百時間は決して少額に非ず、一日十二時間働きて四十錢を得るものとして計算すれば、六圓六十錢餘の損失となるべし。況して三時間五時間をも待つものとすれば、實に時間と生命との濫費といはざるべからず。且つ既に正直に時間を守りて出席するものは損失ありて定りたる以上、人誰か好んでその失敗の轍を踐むものあらむや。かれも遲參、我れも遲參、遲參するものは勝利ありてふ變則に陷りて底止するところなきが故に、こゝに於てか、案内狀にも亦遲參を豫想したる時間を記せざるべからざるの必要起り、而して、案内狀に懸け値あれば出席者はその内實を見透して益々遲參すと云ふ。殆んどこれ商賣懸引の觀あるは、抱腹に堪へざるところなるが、畢竟は、國家の損失といふべきのみ。

農會令も發布されて、系統的農會は各府縣に組織せられ、各府縣の農家は町村農會又は府縣郡

農會の會員となりて各自力を盡さむとするの時機に際會したることなれば、自今、農會の開會は極めて頻繁なるべし。然るになほ從來の陋習を撤去せずして、今日の如く會合の時間に懸値あるに於ては、折角の苦辛して成立せしめたる農會も殆んどその效なきのみならず、或は却つて貴重の時間を徒費するの器具となりて終らむも亦知るべからず。商工業者にありては、農業者に屬する町村農會の如き便利なる機關、未だ備はらざることなれば、我が農家は先づ自ら時間を嚴守して以て時を重んずるの美風を率先して一般に示さざるべからざるなり。

抑も吾人の行爲、思想及び感情は、すべて時間によりて成立するものにして、又、吾人の生命も刻々に飛び去る瞬間の連續したるものに外ならずといふを得べし。しかも一度飛び去りたる時間は、決して復た還り來る能はざることを諒せざるべからず。況んや時なるものはその用途の如何によりて、人の品性を善ともなし、亦惡ともなすものなれば、この「時」を正當に使用するは、正しく生存する方法を得たりといふべし。フランクリンは、時は因て以て生命の成立つ原料なり」と云へり。眞に然り。既說の如く、生命なるものは、單に片々になりたる瞬間の連續せるものなるに止まらずして、有機的の全體として考ふることを得べきなり。

故に我輩が一瞬間を消費する方法如何は、直ちに次に起り來るところの瞬間に影響を及ぼし、なほ又その次のすべての瞬間にも影響すること、恰かも身部の一部の狀態が延いて全體の安寧

に影響するが如し。もしそれ今日放逸を縦にせりとすれば、その中には明日の損失あることを意味し、今日の働きは又明日の財産を意味し、又今日の浪費は明日の缺乏を意味す。反應の事情、斯の如くなるが故に、吾人は一時限と他の時限とをよく一致せしめて、その働きの最も有效ならんことを心がけ、我輩の行爲は、眼前に經過する瞬間の有效ならんことを計るのみならず、なほ終生に於ける福利を擧げむことを慮り、而して我輩の今日の行爲は明日の行爲と衝突することなく、終始一貫せしめざるべからざるなり。

人の年壽は、平均上より調査すれば、頗る短縮せるものなりと雖も、假りに六十五年間生存するものとして、その中最初の二十年間は、父兄保護の下にありて教育を受くるなど獨力自活し得ず、又終りの五年間は老衰期として控除し、しかもなほ四十年あり、この四十年間こそ人の社會にありて活動する時限なりと假定せんか。しかも、四六時中、三分の一、即ち八時間はこれを睡眠に費して無味中に夢と過ぎ去るものとし、その五時間はこれを食事及び休息に使用するものとして大差なかるべし。即ち、殘餘の十一時間は正しく一日間に於ける勤勞時間となるべきものなり。かくて一年間の勞働時間は、即ち四千〇十五時間となり、これに一生の活動期なる四十年間を乘ずれば、十六萬〇六百時間となるべし。

かの英雄豪傑俊才のなし來りたる事業は、すべてこの刻々を活用して成功したるものなりと

想像すれば、又甚だ多望なる生涯と云はざるを得ず。然れども、我輩自身を顧みれば、早や既にこの十六萬餘時中に切りこみたること頗る多し。故に、將來は一層事々物々に注意し、よく順序と方法とを確定して、自己のため又國のために勤勉力行、以てすべての時間をば悉く有效なるものとなし、好き事績を顯してこれを後代に遺さゞるを得ず。人或は、人生計り難し、明日を恃めぬ世の無常なりなど云ひて、飽食暖衣、出來得る限り眼前の快樂を貪るものあれども、これ實に人間の尊き性格と、社會の眞味とを解せざる痴呆者として速やかに驅逐すべきなり。

蓋し、現在に於て安寧逸樂の地位に達し居るものは、卽ち過去に於ける時間を正しく使用して働きたる結果にして、その飢餓至らず、沍寒懼るゝことなく、內心優(ゆた)かに社會に立つを得るは、卽ち現在の瞬間を捕へたる報酬なり。畢竟、現在は未來に於ける幸福の種子を含有しをるものあればなり。故に各自時間を浪費することなく、時々刻々に働きて以て他日の好結果を收めざるべからず。鎖國當時の悠長なる時代は既に過ぎ去りて、優勝劣敗の實力競爭となりたる以上は、宜しく業務萬般の上に注意して瞬間をも輕視することなく、直ちに進んでその瞬間を利用せよ。現在の瞬間には、未來の幸福を宿せりと信ぜよ。我輩は、農家諸子の劃然一新、よく時間を貴重せられんことを望んで已まず、こゝに一言する所以なり。

——明治三十三年三月

第三十一話　農事の經營と秩序

物に本末あり、業に終始あり、よく先後するところを察知して處置すれば、卽ち道に近きものなりと古聖の述べられたるは、誠に確切適當の至言にして、古今となく、東西となく、何れの處に引用しても的中せらるべく、もしこの範圍を脫したらんには、決して事の成功を望む能はざるや明白なり。故に、何事に限らず進んで事業をなさんとするには、前後を定めて順序を追はざるべからざるは當然のことなるが、特に農家の如き複雜繁多なるものにありては、よくこの心して諸般の仕事を經營せられむことを勸奬せんとするものなり。

抑〻農の仕事たるや、天候の如何に關係すること極めて多く、折角計畫したる仕事も、天候の如何によりて見合さざるを得ざることあり、插秧（たうあう）の如き、除草の如き、雨天にも晴天にも、殆んど同一に從事し得る業務もなきにあらざれども、播種の如きは、その或る種は雨天にして土地泥濘となりをる時に播種せば、發芽力を止むることあり、斯の如く雨天のために豫期したる仕事も變更せざるべからざるは農業仕事の通例なりとす。

近來は天候を豫報する方法ありて、明日の天候の工合を知りて計畫するの便あるに至れる故、農者もこの天氣豫報によりて仕事を定むべきが適當なれども、その天氣豫報とても未だ完全の

域まで達しをらざる今日にありては、晴雨反對の現象なしとせず。故に、豫め晴雨の場合を計りて晴天ならば甲仕事、雨天とならば乙仕事をなさんといふが如く、兩者の仕事を定めをくこそ肝要なれ。然らずして晴天と見込みたるものが、降雨と變じたるがために、袖手雜談に一日を過すは、諸方に於てあり勝ちのことにして、その損失甚だ多しと云ふべきなり。

英國人の俚諺に「一つの石を以て二羽の鳥を打ち殺す」と云へるあり。農者の仕事をなすにも亦この心もて立ち働くは極めて肝要なりといふべし。卽ち甲の仕事をなす序に乙の事をもなし、丙處の歸途に丁の用を足すといふ譯にして、豫め順序を定めて着手せば、大いに時と力とを節約し得らるべし。然るに畑に行き辨當を忘れ、麥を刈るに砥石を忘れ、更に水を忘るゝなど、往復奔走に疲れたるの笑話は往々に聞くところにして、或は町に買物に行きて、彼を忘れたり、又はこれを忘れたりといふ如き、世間有勝のことなれども、これを些事として等閑に附するは、往々注意力を減却して、品性を下劣ならしむるのみならず、一箇年中に於ける經濟上の損失は決して鮮少にあらざるべし。

次に、器具を仕舞ひおくことにつきて整理の必要を一言すべし。凡そ何仕事にても同時に要すべき器具は、これを同處に仕舞ひをきて、出し入れの便に供すべきは、誠に都合よきことゝ知りながら、放任しをきて、事に當りて捜索するは、何人も同じ弊風なれば誠しめざるべからざるなり。

例へば、皿鉢は臺所の棚にあり、衣服は箪笥の内にあり、紙屑は籠にあり、鍬鎌は土間の壁にかけ、簑笠は戸口の傍らといふが如く、一切萬事、簡便なる方法をなさゞるべからず。

凡そ何に限らず、仕事に關係ある事物は、夫々相當なる置場所を定めありて、一目瞭然、直ちに用に應じて出し得らるゝやうに準備しおくことを心がくるは、甚だ大切なることにして、獨り農家のみ然るにあらず、大工でも左官でも役人でも商人でも用途相應の設備肝要なり。かの商家が各項目を分けて夫々明細に記入する如く、又、學者がいろは順に區別したる箪笥の抽出中に書き物を仕舞ひおくが如く、農家に於ても各、置場所を定めて整頓せざるべからず。斯の如く諸物を種類別にして仕舞ひおくは、卽ち組織あることにして、この組織正しきによりて、時間も省略され、永く保存することも出來、心安らかに、氣平らかになり、進歩發達、その中より湧出すべし。

これに反して、組織なくしては、何事もよく成就し得るものにあらず。大事業に於て殊に然り。組織なき人が十の仕事を苦艱の間に僅かになしたる同時間に於て、組織あり秩序正しき人は、優に一千の仕事を遂行し得べし。これとても強ち組織的のものは勞力强烈なりといふ所以にあらずして、たゞ順序正しきが故に時間の省略となり、勞力の省略となりて、成功に大差あるを致せるなり。組織的の人物は、政界に立ちては、大政治家となりて國家調理の大任に當り、農家としては豪農となりて大規模に農作するを得べし。商人となりては、物價高低の急端に立ちて大會社

を支配し得べきものにして、かの放逸氣儘なる、組織なく無頓着なる人の決して夢想だもし得るところにあらず。且つ、組織正しく整備せられたる事業は、その事業を擴張する場合に於て、何時にても苦もなく安心して裕(ゆるやか)に擴張するを得べし。故に、順序と組織とは、實に成功に達する鑰なりといふべきなり。

本來自己の監督の下に屬せる事業をして、順序正しく組織したらんには、何時にても緊張伸縮、發縱指示、意の儘に行はれて、その事業は擧げてその人の意志通りに服從すべきものなれども、組織に重きを置かざる、所謂無頓着不注意の人にありては、却つて自己の業務に左右せらるゝものにして、彼を得んと欲して搜し得ず、これを求めんと欲して見出し得ず、茫然漠然、恰かも事々物々自己を避け隱れて窃かに嘲笑するの感あり、不快に充てるものなり。故に組織なき人は、寧ろ我を捨てゝ業務に制御せらるゝところの、極めて薄志弱行なることを發表せるものといふべきなり。元來、自己の管理に屬しある物品器具若くは業務なれば、勿論我れに忠實に、且つ有效なるべきは數の當然なるに、却つて我れを制御し、主宰權を我れの上に加へて、我れの時を消費し、我れの忍耐を毀(こぼ)り、我れの事業を損ひ、我れの財産を失はしめんとは、豈顚倒せる現象といはざるべけんや。

故に、何事業によらず、秩序と組織とは、最も重要なる一事項にして、必須のものといはざるべか

らず。近來商工業の如きは、漸次外國に於て行はるゝ文明的の組織方法が採用せられて、物の配置法、事務の取扱方等、頗る見るべきまでに發達したれども、農業に至りては、殆んど全く進歩なく、舊來の儘に放任しあり。歐米の農業と競爭場裡に立たざるべからざる今日となりたる以上は、宜しく時間の經濟を重んずると共に、秩序と組織との大なることを考へて、勞力と時間とを利用するの考案なかるべからず。

秩序を立つるは、その初めは頗る面倒なるべけれども、一旦秩序整然たる以上は、秩序によりて大なる利益を收め得らるべし。故に順を逐ふて正しく事をなすは、勞力を省く最大最捷の手段たるなり。かゝる淺近なる理由は、何人もよく承知せることにして、實に云はでもがなと思ふことなれども、その淺近知れ切つたる細事に拘捉せられて手足を伸し兼ぬるが現在の實情ならずや。畢竟ずるに、目前の安全を貪るがために、永く不自由不便の淵に沈みゐるものなり。故に我輩は、本末順序を重んじ、組織を立つることに注意して、常々これを實行したらんには、殆んどその習慣は、第二の天性を形成して、何事にも規則正しき働きをなすに至るべし。放置放任は、事業を妨げ、性格を損ふものなれば、文明の今日に於て、一日も默許すべからざるものなるが故に、我輩は速やかにこれを我が農界より驅逐せんことを勸むるものなり。

——明治三十三年四月

第三十二話　農村の都會熱について

本邦の農業を革新改竄して以て泰西の農業に頡頏せしめんとは、我輩平素の志望なるが、見よ、泰西の農産は漸次我邦に輸入し來りて漸く我農産を壓倒せんとする傾向あるを。元來泰西の農業は、機械力によりて營まれ、學理の力に基きて施され、且つそのこれを營む人々も、智識教育の上に於て、大いに我に優るところあるを認むるなり。この競爭場裡に立てる敬愛すべき本邦農者は、如何なる方策術策を以て、外は外國より侵入する競爭者に打ち勝ち、內は商工業者の侵蝕を防がむとするか。一意これを思へば、寔に安きこと能はざるなり。

試みに思へ、我が國の綿の如き、砂糖の如き、煙草の如き、藍の如き、又米の如きは、外國品のために、或は殆んど全廢せんとするに至れるものあり、或は又大に輸出額を減縮するに至れるものあり、更に又、近年小麥粉の需要大いに增加せるにつれて、麥粉の輸入を促し、又小麥の輸入も漸次盛ならんとするの傾向あり、かくて日一日と進み行かんには、大麥其他の農作物の如きも亦外國品のために壓倒せらるゝに至るやも知るべからず、誠に痛嘆の至りといふべきなり。

近來、我が國の農界は、彩色大いに新を加へ、各地に於て農事改振方策の施設せらるゝを見るは甚だ喜ぶべきことなるが、これを以て我が國農事改良の緊切を補充するに足ると思惟するは、早

計の謬見にして、仲々以て今日までの改良施設にては海外諸國の趨勢に對抗し得べきにあらず。我輩はなほ數層の革新を我が農界に望まざるを得ざる所以なりとす。抑〻歐米開明國の現狀は、農業にあれ商、工業にあれ、凡百の程度は大いに我に優るものあり。本邦三十年前の狀態は、恰かも歐洲の三百年前の風情ありしなり。この莫大なる懸隔をば、僅に既往三十年間にとり返して、彼と倶に並進競行せざるべからずとは、本邦人上下一般の覺悟にして、實に勇往邁進、非常なる進歩をなしたりと雖も、この間に彼に於ても靜止して我が到るを待てるものにあらず、均しく進行しつゝあるものなるが故に、我が國の彼に追ひつき若くはこれを凌駕せんとするは、尚時日を要するものにして、我が國民たるもの、大いに困難に耐へて急進せざるべからず。特に進歩の風潮には、兎角緣の遠き、寧ろ先天的に保守の傾向ある農者にありては、最も斷然たる覺悟と、決心とを以て勇進するに非ずんば、競爭場裡の失敗者として不幸の天地に齷齪せざるべからず。これ我輩が毎度論述し、又は演說して、農者の注意を喚起せんと欲して已まざる所以なり。

近來我輩の見聞するところにては、地方の農者は漸次都會の地に移住して、從來の農業を轉換するの傾向あるを認む。玆に於てか、我輩の知友及び農界に關係ある人々は、經國上憂ふべき現象なりとして、これが防遏策を講ぜざるべからずとなせり。その國を思ひ、農を懷ふの心情は、誠に感ずべきの至りなれども、畢竟するに、大勢に通ぜざる處の杞憂たるに外ならずと信ずるなり。

勿論我輩とても地方農家が悉く、又はその多數が、その業をすてゝ以て都會に集中するとするならば、國家に害ありとせんも、かゝることは經濟上、利益上、あり得べからざる事實なりと信ず。故に、かゝることを憂ふるは、恰かも富士山の顚倒するかを憂ふると一般なりと信ず。

元來、農者の都會に轉住するを憂ふると否とは、もとその程度如何の議論にして、比較的少數農者の都會に轉住する如きは、毫も憂ふるに足らざるのみならず、我輩は寧ろ喜こんでその轉住を迎へんと欲するものなり。由來、我が國農者の數は、割合上、甚だしく多數なるがために、農業漸減法の制裁によりて勞力は次第に徒勞に屬せざるを得ず。卽ち、農者の勞力を極く低廉なる賃銀に見積るとしても、一反歩につき一人平均二圓强の損失ありといふ。これを全國の耕地反別二百七十萬町歩に乘ずれば、本邦農者は實に毎年四千四百萬圓餘の損失をなしつゝあるものなりとは、豈一驚ならずとせんや。

然れども、これ、もと多數農者が少數反別を耕すに原因せるものにして、試みに本邦と歐米との一人平均耕作反別を比較すれば、日本は二反五畝九歩、獨逸は二町三反四畝六歩、佛蘭西は二町一反二畝二十二歩なり。卽ち、殆んど、十分一の少耕地に甘んずる本邦農者のことなれば、その衣食に困難なるは當然の數といふべし。加之、國費の負擔額は又大部分を占めをるが上に、尙加重せんとするの一方あるのみ。その生計の困難にして快樂の少きこと、これを歐米開明國の農者に

比すれば、霄壤も啻ならず、今日の有様にては富有の生活をなさんこと、到底夢にだに出來得べきにあらず。故に、この際農家の負擔を減ずると共に、農業組織を一變して、少費多獲の方法により、我が農業を經營するにあらずんば、國家の礎たるべき農業、諸職等の基たるべき農業も、決してその繁榮を望むべからざるなり。

我輩は嚮に、我が國農家に眞の組織なきを慨するが故に、組織的勤勞の必要なるを論じ、我が農者が時間の貴重なるを知らず、一擧手一投足のすべて財產を生ずるものなることを解せざるの觀あるが故に、時間の貴重すべきことを說き、又、改良農具を使用して人力を省くの必要より、肥料及び種子を精選すべきことを反覆せしが、かくて我輩は、篤農諸子と共に、大いに農事の改良をなさんと欲するものなり。

而して、下流貧困の農者は、農事改良の緊要なることを說くも、これを解するの能力を有せず、假令諒解したりとするも、これを實施するの資力を有せざるを以て、之等の人々は、徒らに勞力を費消して少地積を耕さむよりは、速やかに去りて他の業に轉じ、以て耕地に餘裕を與へむことを望むなり。且つ又、何人にても農產物を消費せざるものはなきものなるが故に、茲に農圃を去つて商工其他に轉じたる人々は、更に變じて農產物を消費するの地位となれるが故に、農產物の需要は增加することゝなり、價格亦隨つて騰貴するの道理となるなり。現に或る地方にては、石炭又

は石油などの産出するために、農者の其方へ赴くもの多く、隨つて農産物の著しく騰貴せる實例あり。

獨り農家は、舊來の耕作法を墨守するが故に、人手が少くなり、耕作の便を得ずして、大地主の頗る困難を感ずるものあり、然れども、もし農の組織を整理し、農具を改良したらんには、忽ちその缺を補ふべきのみならず、轉じて利益を得るの因となるべし。例へば、從來の鍬を以て畑地を耕す時は、一日漸く一反歩を出でざるものが、唐犂を用ふる時は、二三反歩を耕し得べく、なほ更に簡便なる洋犂を用ふるとせんか、六七反歩は容易なり。故に、曾ては八九人を要して耕作したるものも、洋犂其他の輕便にして、價格もさして高からざる農具を使用せるがために優に一人にて擔任し得べし。事情斯の如きが故に、我輩は熱心に農具の改良を主張せんと欲する所以なり。

農事經營上、農具諸般を改良せるの故を以て數倍の仕事をなし得たりとせば、こゝに農者の數を減少せしむるの必要起らざるを得ず。農間に餘りある人口を以て、これを目下勃興しつゝある工鑛業等に轉流せしむるとすれば、農産物は高く賣れ、農業は利益ある業となり、而して地積は容易に耕作し得らるべく、空しく打ちすてたる勤勞は、これを國家の用に供することゝなりて、國家の繁榮を增加することゝなるなり。

かくて農家の富は增し、樂しみは加はり、農家の子弟をして農の樂しむべき觀念を起さしめ、決

して他に轉ずる如き不幸を生ずるに至らざるべし。且つ又、農家の父母たるものは、よくその子弟をして農事上の仕事を學ばしむるは勿論、又、智識を開發し德性を涵養して、家を愛し、田園を愛し、家畜を愛するの念をば、その平生に於て訓育し、立派なる繼續者を養成するの心掛け甚だ肝要なり。凡そ富と敎育の程度によりて農事改良の遲速を見るべければなり。

今や、海外諸國に於ては、蒸氣犁を用ひ、蒸氣機關を用ひて脫穀機を運轉し、其他四頭、六頭、八頭、十頭立の馬を用ふる機械を以て農事をなしつゝあることなれば、我が農家に於ても何時までも舊態を固守すべきにあらず、大いに振ふべきの時機なりと信ず。各地の農事試驗場及び農學校等に於ては、肥料、播種、種類の試驗には隨分周到なるも、農具の改良を計るとか、經濟上の試驗をなすとかは、洵に寥々たるものにして、吾人の甚だ遺憾とするところなるが、これ亦一考を要すべき問題なりとす。今や耕地整理法は、各地に實施せられんとするに際せり。從來の不規則なる田圃は、晝然整正して以て泰西風の農具を使用すべき時季は切迫し來れり。その曾て鍬を持ちたる手は、洋犁を用ひざるを得ざる場合となりぬ。內職仕事は增加し、工賃は騰貴し、農家は去つて他に轉ぜんとす。徒らに憂ひてこれを遏めんとするも、決して制し得べきものにあらざるのみならず、これ自然の定數として、更に善後の策に出で、以て百年の長計を策畫し、福利を求めんことを切望す。

——明治三十三年五月

第三十三話　肥料は彈藥なり

抑〻稻作の豊凶は、本邦經濟界を左右すること大なるものにして、もし幸ひに豊作なれば、昨今全國に鳴り渡れる不景氣も、さまで苦慮するに及ばざるべけれども、不幸にして不作ならんには、甚しき恐慌を呈するも是非なきことゝ信ずるなり。幸ひにも我が農事は逐日進歩して、苗代の作り方と云ひ、種の選び方と云ひ、害蟲の驅除と云ひ、大いに改良に赴きたることなれば、之等の點に於ては、各地とも充分とは行かざるも、先づ以てかなりの施設あるべく、而して頗るよき稻苗の出來なりと認めて不可なかるべし。

然れども尙懸念止まず、婆心一言せざるべからざるものは、農家が插秧（たうえ）前後に於てその土地に充分の肥料を施したるや否やにあり。信愛なる各地農友諸氏は時々書を寄せて農況を我輩に示せることなるが、よつて各地方の狀況を知るの便を得るあり。その近信によれば、各地方の農家は米價下落のために金廻りよろしからず、その上贅澤品購買のために金は地方に止まらず、又肥料の販賣を業とする人には、金融のつかざるために、肥料を仕入るゝこと少く、折角銀行爲替にて來りたる肥料をも受取ること能はずして、空しく倉庫に藏（しま）めある狀況なりと云ひ、更に、かゝる時に際しては元來農家の金融を計らんためにとて生れ來れる農工銀行について肥料のための

金融を直談すべきに、そのこれなきは既に一驚なるに加へて一方には農工銀行自らも亦政黨者流に飜弄せらるゝ觀ありて、その重役を政黨者中より出だされんと熱中しつゝあるものゝ如くにて、當初設立の目的は無意味となれりとの報道もあり。之等は我輩の主論にあらざれば、暫らく措き、我輩の眼前に憂慮するものは、插秧時季に於て他日收穫の要素たるべき肥料を充分に施し得ざるは、實に等閑視すべきことにあらざるを以て、こゝに大聲疾呼、大いに農者の猛省を促すところあらむとす。

「播かざる種子は生えず」との諺あるか如く、毎年收穫ある土地に於て相當の肥料を施すにあらざれば、何程精選せる種子ありとも、天候その順を得たりとも、且は農事上の注意凡て遺憾なきに至れりとするも、決して豊富なる收穫を望む能はざるは、恰かも銀行に百圓の金を預けおきては千圓の金を引き出す能はざると同一理なり。抑、肥料は、作物を製造するの原料たり、生品たり。この肥料を用ひて作物なる製造品を收穫するものなり。これ、かの貯金をなして利子を收むると同じく、又は資金を投じて利益を計る商人と一般たるなり。その資金を出さずして利益を得んことを望むは、山師的投機者流の仕事にして、着實なる農家のなし得る業にあらず。況んや肥料を與へずして耕作する時は、勞力に對し、又心配に對し、地價に對し、決して充分なる收穫は望むべからざるのみならず、肥料を施さざる結果として、その年の收穫を減ずるが故に甚だしく地力

を消耗して、後年に至るまでも影響を及ぼすに於てをや。

故に、思慮ある農家は、假令如何なる工夫を凝してなりとも種苗を精撰し、農具を鋭利にすると共に、肥料を充分に施さゞるべからざること、恰かも軍人の銃器彈藥糧食を具備して以て戰場に臨むが如くなすを要す。商業は商家に於ける戰場なり。農業は農家に於ける戰爭なり。その國家のために働くところの兵士と毫も異ることあるなし。今や插秧時季にある我が全國の農者は果して軍人の戰鬪準備の如く、百般の點まで遺憾なく準備しあるや否や。農家のこの戰鬪は、擧げて自己のために戰ふにあらず、又、國家のために戰ふものなることを記憶せざるべからず。故に、我こそ戰鬪準備充實せりと斷言する人あらば、これその人のためのみにあらずして、國家のために祝福すべきものなり。これに反して、もし不充分なるものあらんには、卽ち國家に對して責務を缺きたりと云はるゝも遁辭なきなり。

されば、なほ未だ肥料の準備不充分なるものあらば、本年は遂に戰場敗殘の兵となりて、自己及び國家に損害を與へざるべからざるを悟り、今日唯今、非常なる決心を以て、如何なる辛苦困難をなすとも、肥料なる彈藥を需めざるべからず。銃器なる種苗は已に整頓し、兵糧なる土地は已に完備しても、彈藥なる肥料を缺くに於ては、決して勝利ある戰を望み得べからず。故に、假令一旦好んで購求したる贅澤品を賣り盡すとも、又は典物とすとも、或は一步進んで農工者のために設

立されたる農工銀行又は信用組合を利用してなりとも、其他如何なる手段術策を施してなりとも、德義に背反せざる以上は、肥料の施用に意を凝さざるべからず、時季は逸し易し、復た來るべからず、躊躇して、自家の憂と國家の損害とを招くことなきやうに注意すべし。

我が國農事の發達に伴ひて、近頃在來の天然肥料の外に、種々なる人造肥料製造所起り、最新の學術を應用して、農家に利益なる、且つ施用し易き、しかも有效なる肥料の製造を行へるは、農家のため誠に喜ぶべきことなりとす。之等は恰かも、戰爭に用ふる銳利至便なる彈藥の發明せられて、戰鬪力の增加せるに均しきものなり。進歩したる農家は、よく之等の肥料を應用して、從前に倍蓰せる收穫を得つゝあるは周知の事實なりとす。我輩は、之等效力强き肥料の普く盛に施用せられて、その結果著しく產額の增殖せんことを望むものなり。

然れども善良なるものゝ行はるゝに當りて、奸商詐僞漢その間に横行し、價値なき劣品をば、無邪氣なる農家に販賣して、以て農界の蠹毒となるもの、往々にしてこれあり。恰かも貨幣に於ける僞造物たり。折角苦辛融通して入手したる肥料を、轉じて奸商の腹を肥さんこと、仲々に遺憾なりといふべし。故に農者は、信用あるところより供給を得ることの注意肝要なりとす。一言以て肥料の施用を勸め、婆心を披瀝す。

——明治三十三年六月

第三十四話　華を去り實に就け

農業は本邦立國の礎にして、その盛衰は直ちに邦國の運命に影響することなれば、斯業に從事するものは、よくその責任の大なることを悟りて、假令個人としては些細なるにせよ、延いて邦家の盛衰に關するものとして、その行爲施設を愼しまざるべからず。

我が國近來海外より種々の感化を受くること甚しく、僻遠の地に至るまで、今は善事惡風俱に外國の風潮を避くる能はざる世の中となりたれば、我輩はこの際に處して、我が敬愛する農家と共に、その隆旺せる文明の英を含み、華を咀ふて、以てその惡しき部分を捨つることに勉めざるべからず。然れども、目前の利には走り易く、浮雲の華奢には流れ易きは人情の常態にして、都邑の區別なく、易きに就きて佚を貪らんとする通弊に陷りしなり。而して我が農者も亦近來漸くこの弊風に感染したる模樣あるは、誠に嘆ずべきところにして、警誡せざるべからざることなりとす。

而して、この弊風に感染したる結果を觀察すれば、金融切りに逼迫して經濟滑らかならざるにより、世人も漸く心づきてか、勤儉貯蓄の必要を主張するもの、次第に多きを加へ、一般に悔悟の念現はるゝものに似たり。こゝになほ我輩が憂慮措く能はざるものは、都邑俱に華奢の風を增長

し、隨つて人情は輕薄に赴き、加ふるに僥倖心を逞しうするにあり。見よ、主たる市邑に、投機を主とする取引所の設けられてより、產を傾け家を破るもの續々輩出し、ために、陰に陽に農業上に受けし影響は如何許りなりしや。誠に識者の痛嘆すべきところなり。

今や金融逼迫は、その勢甚だ强烈にして、都會となく、地方となく、一般に沈鬱なる現狀なるに拘らず、華美を競ひ、奢侈を喜ぶの風潮は未だ停止せざるものゝ如し。試みに道往く人の裝纏及び携帶品を見よ。その多くは外國より輸入せる物品を用ひざるはなきにあらずや。頭に被る帽より足にはく靴は勿論、下駄の緒の類に至るまで、多くはこれ外國の製造品に據らざるはなきにあらずや。事情斯の如く、加ふるに國內に於て生產的に使用さるべき金は、なくとも濟む不生產的なるものゝために消費し終る一方に於ては、投機心の發達のために、他方に於ては華奢のために、我が國力を萎靡し、遂に我が農者の嚴乎たる精神をも滅殺せんとするもの、擧げて數ふべからず。亦大息の至りといふべし。

元來、農家の事業は極めて沈着眞面目なるものにして、確實なる勞働と、正直なる施設と、天祐とによりて收穫を期するものにして、決して投機の餘地を許さず。人或は農業には洪水、旱害、暴風等の天變を期するものあるが故に、これ亦投機の一類なりと雖も、これ決して投機にあらず。凡そ人事を盡して、その及ばざるところを自然に一任するは投機にあらず。もし、これをしも投機

と云はゞ、世間何物か投機ならざらむ。且つ農業の如きは、諸業中最も無邪氣なるもの、而して又最も眞面目ならざるべからざるものなり。その天祐を祈り、豐穰ならんことを望むは、固より可なれども、これと同時に農者はその働きを敏捷にし、その施設を出來るだけ完備して、人力の及ぶ限りに於て豐作を得るの設備をなしおき、その餘は卽ち自然に一任して可なり。徒らに苦慮するも要なし。豈獨り農家のみならんや、何人とてもその業に對し、又はその計畫に對しては、自己の境遇に應じてその力の及ぶだけを勤めおき、それ以上の事柄は如何ともすべからざるものなれども、假りにも人力を盡さずして徒らに天爲に一任するが如きは抑も智者の業とはいふべからざるなり。

——明治三十三年六月

第三十五話　府縣郡町村農會に望む

凡そ事をなすには、組織宜しきを得て秩序正しく、且つ熱誠もてこれに從事する時は、遲速こそあれ、早晩その目的を達し得べきものなり。我輩は曾て農業進歩の最も緊要なる機關として、各地に農會の勃興すべきことを希望したりしかば、去る明治十三年、札幌農學校卒業の後、北海道に農會の必要なることを唱道し、書を知人に贈り、且つ該地有力者をも勸誘し、以て北海道勸農協會なるものを組織したりしなり。而して我輩の北海道に止まりし間は、多少力を該會に盡し、聊か

ながら拓殖の裨益を企圖したりき。爾來、勸農協會の名稱は變更せられたるも、當初の目的は漸次遂行せられんとするを見る。現今の北海道農會なるものは、卽ち我輩の嚮に主張して創設したる北海道勸農協會の變稱したるものなり。

大日本農會の組織せられしも亦去る明治十四年のことにして、この會は、本邦農會の先進者とも稱すべきものなるが、爾來各地に於て種々の農事に關する協會設立せられたるも、中には忽焉として煙滅し、事績の見るべきものなかりしもありしなり。然れども我輩が、各地に於て强固なる農會の設定せられて、大いに斯業の革新を促すの機關たらしめんことを企圖したりしは、又實に一日のことにあらざりき。

今や時勢の必要と、特に農事熱心家の唱道とによりて、全國各地に於て系統的農會の設立を見るに至る。蓋し系統的農會の必要は、その初め農事大會に於て決議せられ、次で帝國議會に於て農會法案の通過を見るに至り、その結果、各地所在にその設立せられんとするに及びたることは我輩の實に滿足に堪へざるところなり。最近の官報によれば、國庫金の補助を許可せられたる農會續々として現るゝに至れり。しかもなほ未だ設立の手續を了せざる府縣少しとせず、この際速やかにその手續を歷へて、相當の補助を得、以て國家の望む目的を遂行するに至らんことを望むものなり。

さて、府縣郡農會より、町村農會に至るまで、各地に組織せられたる曉には、各自の農會が旗色鮮明、相當の働きをなすべきは勿論にして、その名ありて實なきに陷るなからむことを要す。顧れば、曾て種々なる農會あり、その初めの一二回は生氣あり、稗益もありたれど、月日を歴るに隨ひて自然に萎靡し、開會するも來り集るものなく、集會は空しく時間を經過して醜態を極めたりなどの苦情多く、折角に骨折りて創めたる農會も僅か一二回の集會を以て消散したるもの、指を屈して餘りあり。既往は咎めず、これを準備の時代と看做すも可なり。

然れども、今は法律を以て農會法を發布され、由て以て相當の補助金を國庫より支辨せられて組織せられたる農會のことなれば、當路者は勿論、農會を組織する農家は、一大決心を以てこの貴重なる機關の運轉を圓滑敏捷ならしめ、以て農會をして眞に國家が望むところの責務を全ふせしめざるべからず。復た從來の如く冷淡にして不始末なる結局を見るなからむことを要す。

元來農會法の發布ありて、農界に良好なる機關を具備するの好機會を得たるは、誠に無上の幸慶にして、この機會を適當に利用したらんには、依て以て農會の現時及び將來に於ける福利を增進せしむることを得べく、而して農家の權利の如きも、これによつて擴張するを得べし。然りと雖も、もし從前の如き輕々の考を以て農會を遇する如きことあらば、却つて反對の結果を見るに至るは瞭然たる數なり。嚮に農會法の議會を經過したるは實に時機宜しきを得たるものなり

しなり。然るに又しても農家の冷淡とその役員の不勉強とによりて、この機關を活用することを得ず、一旦徒法に歸するが如きことあらば、再びこれを施行することの甚だ困難なるべきは今より豫想して餘りあることなり。海外開明諸國と雖も、かくまで農民のために利益ある機關をば法律を以て制定せらるゝは未だ聞かざるところなりとす。故に、我が國の農民たるものは徹頭徹尾この機關を應用して、眞に農業の改良を圖り、內は農家の福利を增進し、以て商工業の繁榮を祈り、外は海外諸國の農產と競爭をなして、以て我が國にかゝる完美の法律ある實を擧げざるべからず。

我輩が海外にありて見聞したる農會其他種々の殖產協會の模樣を考ふるに、その多くは敏活の働きをなして良好なる成績を示し、その會員はこれによつて福利を享けざるはなし。且つその多數は資本裕かにして、常にその勤めを盡し、又斷えず新思想を以て新奇有益なる仕事を畫策しつゝあり、その會員をして飽くことなく怠ることなく、喜こんで會費を出し寄附金を投ぜしむるは、誠に美はしき光景にして、我輩の羨望するところなるが、今回の府縣市町村農會は、法律を以て制定せられたる農會なれば、相共々この美風に則りて優々和樂の裡に、更に一層敏捷に活動せしめざるへからず。舊來の仕事を以て滿足すといふが如き守舊思想は斷じて頭腦に止めをくを許さざるなり。

今の農事は、海外と對陣せる平和の戰場なりとの語は、各農家の唱道せざるべからざるところなり。この進取競爭の精神は、或は農家に聘傭せる農事巡廻教師の口によつて鼓舞奬勵するも可なるべく、又は會報に掲げ、若くは共進會、品評會、試作場、農事試驗場等の如き公衆の會同を機として斷えず勸奬するを怠るべからず。其他嶄新有效なる機械を農業上に適用し、有益なる種苗種畜、肥料等をも用ふべきことどもを說示し、又は有效なる園藝、牧畜、養蠶等の方法を普及せしめて、會員たる農民をして盛に農會の恩惠を蒙らしめんことを勉めざるべからず。斯の如くに注意周到なれば如何に保守的頑冥者流と雖も、自己の利益と快樂とを顧みずして農會に反對するものはこれなかるべし。農會の仕事としては、土地風俗によりて種々萬般あり、決して一概には云ふべからずと雖も、夫々土地相應に改良すべき業務あるものにして、改良の餘地なしなどとて袖手傍觀する如き不動の態度にあるべからざるなり。

農會の事業進むに隨ひ、種々雜多の仕事の湧出するものにして、我輩の曾て英國にありたる時、大英國農會とその支會のなす働きの頗る多端にして、しかも最新奇に且つ最有效なるを見て、甚だ感服したることありしが、その事柄はこゝに演ぶるを要せずと雖も、兎に角農會の働く仕事は、多々益々多くあるものなるが故に、その經費の多額なれば多額なるだけ、成績亦著大なるを得べし。かゝる理由あるを以て、我輩が各地の農會に向つて一考を煩はさんとするはその基本財産

を作るべしといふにあり。

今回の農會法によれば、農會は年々國庫より若干の補助金を得ることなるが故に、自から從來と異りて維持上大いに便利あり。この補助金は固より貯蓄し置くにあらずして、出來るだけ活用して以て法令の精神に添ひ、その目的を達せしむべきものなるが、單に補助金にのみ甘んじ得べきものにあらず、各會員有志者よりも應分の寄附金を募集して農會基本財産の中心となし、なほ又その地方に於て官有の山林原野等の存するものあらば、これを拂ひ下げて材木を仕立て、永く鞏固なる基本財産の基礎を造るべし。今や方に林野整理法によりて各地に存在せる山林原野の處分をなしつゝある折柄なれば、誠に好時期なりといふべし。或は川に接し、山に面したる共有地にして空しく雜草の繁茂に委するものあるべく、又は河原にして時々洪水の害あるも、平生は作物を作り得る處もあるべし。之等種々なる遺地を利用すれば、或る種の樹木を仕立て得べきなり。かゝる空地を見出し、協議の上、これをその地方農會の基本財産となすなれば、容易に財産を得て、將來農會の基礎を堅固ならしむべし。故に之等に類する種々の方法を講じて以て農會の財産を作り、他日事業擴張の謀をなすこと、極めて肝要なりと信ずる所以なり。

更に我輩は各地農會に望むことあり。他なし。農會を組織せんとする時に當りては、その當事者及び農家は、その役員を選擧するにつきては、出來得る限り、虚心平氣公平無私に、適當なる人

を擧げてその局に當らしむべきことこれなり。決して政黨派の異同に執意すべからず。今や政黨の軋轢は、種々微末の些事にまで及ぼして、その弊害底止するところを知らず、實に痛嘆すべきことどもなり。政黨派ありて大政上の論議をなすは、固より憲政上至當の事にして、我輩は毫もこれを忌避するものにあらざれども、この爭鬪を延いて勸業上に及ぼし又は市町村自治の上に及ぼす如きは、餘弊として大いに排除せざるを得ず。切に望む、各地方農會は政黨政派の外に立ちて、超然よくその本分を盡し、又更に基本財産を設けてその基礎を鞏固にし、悠々綽々、他日の大成を期せられむことを。

——明治三十三年七月

第三十六話　農事調査施行の急務

近年我が國農事進歩の速かなるは、誠に喜ぶべき處なれども、これを海外に於ける農業の迅速なる發達、秩序正しき整理及學理的なる行動に比すれば、なほ甚だ遺憾の點少しとせず。今や國を擧げて外國と富强を競はんとするに際しては、もと我が國は歐米諸國と事情を異にし、農業によりて國を立つるものなれば、何とかして農業上の競爭に打ち勝ち、以て我が國の發達を企圖せんことは、我輩の熱望して已む能はざるところなり。

茲を以て我輩は、毎に海外に於ける農業上の發達に着目して怠らざるなり。目下我が國に於

ける農業上の改良施設は、未だ全國に普ねからずして到る處に餘地の存するあり。加之、海外諸國に於ける斯業如何を見れば、その進歩發達實に驚嘆の外なく、我輩は毎便に到着する彼國の新紙農報を閲する毎に、大いに我の彼れに劣れるものあるを悟りて、轉々感慨に堪へざるものあり。而して、我が農事の進歩をして一層秩序的に且つ迅速ならしめんには、種々の方策あるべきも、我輩の持論にして、曾て或る集合の席上にて陳述したることありし我が國農事の調査を行ふの急務なるを信ずるものなり。

農事調査のことたる、一言にして云へばさまで難かしからざる如くに似たれども、このことたる、甚だ多岐複雑にして、實に至難の業なれば、容易に決行し得べくもあらず。凡そ大事業なるものは、何事にあれ、容易に達成し得べからざることは、恰かも人間日常の細事は何人もなし得べきも、その重大なる職務精巧なる工業、微妙なる作事に至りては、大技術家若くは大美術家にあらざれば容易になし能はざるが如し。而してその所謂大技術家若くは大手腕を有するの士は、復た世間に常にある處にあらざるなり。

されば、農事調査の如きも亦大事業にして、隨つて大費用を要することなれば、この道に精通熟練の人を要するが故に、一時に農事上全般の調査をなすは、覺束なきこと、寧ろ絶望と云はざるべからざれども、或る數點の中につきて最も緊要なる事項を調査するは、さのみ難事にあらざるべ

し。而して、その效果は、必らずや著しく我が農界を稗益するところあるべきなり。故に、我輩がこゝに速かに實行を希望する所以のものは、卽ちこの種の調査會を設くるにあり。

嚮に我輩の英國にありたる折は、恰かも同國の農事不振の折柄なりしかば、英國民はその不振を鳴して輿論を喚起し、遂に勅選農事調査委員なるものを設くるに至れり。而してこの委員は、農事について令聞ある貴衆兩院議員及び朝野の農事に關係ある名士より選びたるものなるが、さてこの勅選農事調査委員等は、英國內は勿論、海外に於ける自國の領土及び植民地より、進んで各國に委員を派し、精細なる調査をなして大部の調査書を編成し、これを世に公にして以て英國農事の改良に資したりしなり。これ、もと英國の如き金力にも富み、立派なる學者及び有名なる農學者に事缺かぬ國なれば、かゝる成績を致したるものなるべけれども、その調査事項は餘りに多端にして、我が日本の如きは到底實行すべくもあらず、又實行の必要もなかるべく、よし實行したりとするも效力は少なかるべし。

故に、寧ろその調査事項を限りて、或る數件について調査し、然る後に漸次歩を進むる方得策なるべしと信ずるなり。例へば、殆んど我が國の命脈にも關するといふべき稻作の如きは、極めて細密なる調査をなすの要あるべし。或は古來より各地に行はれ來りたる種々なる耕作の方法もあるべく、それに要する肥料及び農具、手入、除草の仕方等もあるべし。又は米質の如何により

て賃銀に異同を生ずべしと雖も、概して米一石を收穫するには、何程の費用を要すべきか等は、農家に對して重要なる問題なれども、これについて精確なる調査をなしたるものは未だ少なかるべし。

近來、農商務省農事試驗場を初めとし、全府縣郡の農事試驗場より、米作肥料試驗、種類試驗、作り方の距離、播種期等、種々の試驗を行ひつゝありて、之等の點については、凡ゆる改良進歩を促しつゝあれども、なほ一歩を進めて、一石の米を收穫するには、何程の地積を要し、何程の肥料を要し、賃銀は幾何、金利は如何、農具修繕費はといふ如く廣く全般に亙りて調査をなすの必要あるべきなり。かくて各地に於ける精密なる調査によりて出來上りたる統計を類集して比較したらんには、中には不必要の工賃を浪費して、年々空しく餘分の事をなしをる處もあるべく、又中には相當の費用をも支拂はざるか或は其他の原因によりて却つて收穫の減少を見るに至れることもあるべし。

これを要するに、冗費を省きて費用を減じ、適當なる支出をなして多穫を期するは、農業上最も努むべきことなるが故に、之等の調査は各地に於て速かに着手決行せざるべからざるなり。しかも獨り稻作に限らず、小麥、大麥、其他各地の特產物について、夫々調査をなすべきのみならず、なほ海外に於ける農產物に對照して彼我の生產費を比較し、その差等の如何をも調査せざるべか

らず。何となれば、農業上の戰爭に於て、勝敗の決は、主として生産費の多少に起因するものなればなり。故に苟くも我が農作上に缺除せるものあらんか、隨つてこれが救濟の策を講ぜざるべからざるなり。

——明治三十三年八月

第三十七話　園藝は本邦の富源なり

我が國の歐米諸國と交通してより以來、本邦の生産品は盛衰隆替、種々の變遷を生ずるに至れり。卽ち生絲の如きは、その需要年々盛となりて我が産額を增加するに反して、砂糖、木綿の如きは外國品の競爭に遇ひて、年一年に衰替をなせるは、畢竟、人工に巧拙あると風土に適否あるとの然らしむるところにして、誠に是非もなきことなり。凡そ國の産物を興さんとするには、先づその風土に適し、且つその人民の嗜好に投ずべき業を選びて着手する時は、成功必らず期すべきも、徒らに氣候と戰ひ、又は邦人の嗜好に適せざるものに保護奬勵を加へて、以て隆興ならしめんとする如きは、啻に勞多きのみにして功少きは見易き理なり。

我輩は確信す、後來我が國の物産を盛ならしめんとするにも、均しくこの見易き理由に準據して、苟くも我が風土、我が國人の嗜好に恰適するものを選んで、出來得る限りこれを奬勵誘掖し、よつて內國の需要を充たし、又以て外國品の輸入を杜絕すべきのみならず、なほ進んでは大いに外

國に輸出するの策をとらざるべからざるを。本邦は風景秀美にして、氣候亦宜しきを得、加ふるに邦人の資性亦優雅を好み、審美思想に富み、天然を愛慕すること甚だ深きを覺ゆるなり。古名工の遺したる美術品の、大いに世界文明國の喝采を博せるは、往古より我が國人の自然に美術思想に富める事を證するに足るべく、而してこの美術に關係ある園藝の思想に富めることは、古來の書籍繪畫又は庭園等を見ても知るべし。かの賤が伏家の椽先にも盆栽を列ね、九尺二間の棟割長屋にも壞れ柴垣の邊りに牽牛の花の嬋娟と咲き揃ひ、秋の七草の物懷かしげにうなだるゝなど、又は緣日の草花類の賣行の盛んなるなど、すべて我が邦人の園藝思想に富めることを察するに餘りあり。我輩はこの特殊の氣風を思ひて我が國の富源、この微妙なるところに、伏在せるを考へ、窃かに喜悅措く能はざるものなり。

園藝は、單に花卉の培養のみに止まらず、果樹を栽培し、菜花を耕作し、庭園を營造する等、その意義頗る廣きものなるが、元來、本邦の農業は、大いに園藝業の加味されあることにして、かの廣漠たる外國の農場を見慣れたる外國人のこれを評して「日本の農園は狹隘にして、美麗なる苑庭なり」と云へる如く、日本農家は半ば園藝に從事しつゝあるものなり。而して眼を轉じて海外に於ける園藝の盛大なるを見、且つその園藝品の如何にも需要廣く且つ益々增加しつゝあるかを考ふる時、我が國の先進者は、益々日本の園藝を盛ならしめ、我が國に於ける文明の發達と共に、當然興

り來るべき園藝品の需要を充すのみならずなほ進んでこれを普く世界各國に輸送して以て我が國の富有を計るの便をなさゞるべからず。

既に先天的に園藝思想に富める我が同胞をして一層その嗜好を啓發したらんには、精巧なる園藝家を養成し得べきは、我輩の實驗するところにして、固より難事にあらざれば、よく海外に於ける需要を察して、先づ第一に農家の副業として大いに園藝の隆興を計ること肝要なり。現に海外にある同胞の如き、通常の事業にてはさほど利益の得られざるにも拘らず、園藝に從事して少なからざる利潤を得をるもの多しといふ。元來、我が國の勞銀は、これを海外文明諸國に比する時は、大いに低廉なるが故に、この一點に於ても既に彼れ外人に優るものあるに加へて、先天的に斯業を好める性質あるもの多きが故に、少しく注意したらんには、容易に海外同業者と競爭して勝を占むることを得べし。かの接木の如き、我が國園丁にありては賃銀の少額なるに拘らず、結果の甚だよきは、亦實に誇るべきなり。

近年我が國より歐米諸國に向ひて百合其他の觀賞植物を輸出すること年々增加し來り、昨三十二年の如き、百合根六百八萬三千四百六十二個、價額二十五萬九千五百六十三圓八十八錢、其他觀賞植物及種子にて八萬八千百二圓六十二錢を輸出せり。而してこの額を近き將來に十倍にせんことは、さほど難事にあらざるを信ず。然るに斯業者の通弊として、賣行よしと聞く時は需

要供給の均衡をも思はず、我先にと競ふて澤山に植えつけ、忽ち供給裕かとなるを見ては、更に競ふて安賣りをなし、折角占め得べき利益をも占め得ず、空しく損失を招くこと多し。この場合に處して均衡を保持すべきやうに指導するものあらんには、濫賣の弊に陷ることなくして、甚しき困難を招くことなかるべし。

とまれ、日本植物の海外に於ける需要は漸次增加し來る傾向あるが故に、適當の方法を以て益々盛に輸出するの道を謀らざるべからず。一概に園藝といへば、些事に似て、無用贅澤の感なきにあらざるべけれども、園藝は現時文明社會に於ける一大必要事業にして、花卉、果物、蔬菜、共に時勢の進歩と共に進歩せざるべからず。況んや本邦の園藝業によりて大いに國を富ますべき見込あるに於ては、本邦人士たるもの決して輕視すべきにあらざるを信ず。

大方諸君、願くは贊意を表して、我輩と共に大いに我が國園藝の發達を企圖され、本邦をして世界に冠たるの園藝國たらしめんことを。

——明治三十三年九月

第三十八話　植物檢疫部設置の提唱

我輩の關係せる東京興農園よりは、從來多少の種苗類を歐米諸國に輸出しをりしが、近來米國の稅關は或る植物に對し、嚴酷なる檢査消毒法を施行し、これがために往々枯死するもの多きこ

とは、桑港の同業者より屢々報道ありしところなるが故に、その實際如何を確めんがため、今回の渡米出發に際し、種々の植物及び種子、凡そ量目三噸を携へ、手荷物として少からざる運賃を支拂ひ、桑港着の後、他の手荷物と共に相當の稅金を拂ひて、直ちに通關を試みたりしに、固く拒絶せられて容易に通關するを得ず。

元來米國は保護主義の嚴重なる國なるが、かくも植物に對して、通關の手續を面倒にする理由如何といふに、由來カリフオルニア州には果樹の栽培等盛に勃興し、一般に害蟲黴菌の被害を避けんとするの念より、全州本邦に檢疫官と稱する害蟲及黴菌驅除豫防を主る吏員を置き、且つその輸出入港なる桑港には、全州の植物檢疫官を置き、以て輸入に係る植物の病蟲害を防がしめ、且つ輸入に係るもののみならず、例へば、途上にて黴菌に犯されたる果物を販賣する者ある時は、これを沒收するを得る如き權力を附與し、且つ又果樹栽培業者等は、檢疫の勵行を唱道するを以てなり。故に、輸入植物を檢査する檢疫官の行爲往々酷に過ぐるとの風評を免れず。且つ、病蟲害を防ぐよりは、寧ろ外國商品の輸入を杜絶して、自國品の競爭を防ぐがために檢疫官を設くるやの譏りなきにあらず。

かゝる狀態の下に、我輩の携行したる植物類は、二週日以上稅關内に留め置かれたり。よつて我輩は、自らその檢疫所に赴きて監督官と面談し、遂に、植物の消毒法は、我輩の取引先なるオーク

ランド某商會の溫室内にてこれを施行することに定め、漸く取り出すの許可を得たりしが、長途の航海の上に、久しく稅關倉庫内に積み置かれたること故、その消毒を終りたる後は、已に過半は役に立たぬ品物となれり。これ我輩が桑港に於て實驗したる事柄にして、將來、苗木類の輸出に從事するものゝ注意すべきところなるべきを信ず。

尤も携帶したるものの内、種子は稅金二割五分を拂ひて引取り、地下に生ずる百合、花菖蒲の根の如きも一應の檢査を經て、これ亦前同樣の稅金支拂の上受取りたりしが、蠑螈、牡丹、山茶等は消毒法最も嚴しく、櫻、梅の如きは介殼蟲の存在を恐るゝがために、大抵は燒き棄てらるゝを常とし、植物及種子の稅金は大抵二割五分を普通とす。獨り草花種子は無稅なり。オランダより輸入する花椰菜種子も亦無稅なりといふ。

近來、名を檢疫に藉り、外國產物の輸入を防ぐの策をなせるは、獨り米國のみならずして、獨逸國の如きは、病蟲の米國豚肉中にあるを稱し、米國の豚肉輸入拒絕を計りしが、爾後米國政府は輸出前に官吏を屠畜場に派し、屠畜について消毒病蟲の有無を檢閱して、米國より輸出する豚肉は、凡て健康のもののみを輸出することとなり、獨逸政府をしてこれが拒絕に辭なからしむるに至れり。將來我が國に於ても海外に向ひて盛に園藝品の輸出を計らんには、豫めかゝる準備なかるべからざるを信ずると共に、海外より輸入せる品物に對しても、從來の如く一向に無頓着なるこ

とは、我が國の不利益は固より、體面上から云ひても、恥かしき次第ならずや。

我輩は政府が速やかに開港場の稅關に植物檢疫部を設置し、以てこの交通頻繁なる時機に當り、病蟲害の輸入を嚴密に取締らんことを希望せざるを得ず。この設備なきために、從來海外より著しき病菌及び害蟲を輸入して國家の損害を既往、現在及將來に釀せしこと、實に測るべからざるものあり。見よ、フヒロキセラ蟲の如き、介殼蟲の如き、其他有害なる黴菌及植物の如き、漸々輸入せられて、益々猖獗を逞しうせるは實に寒心すべきことなりといふべし。

凡そ米國人は、自國の殖產を計らんがために、他國の產品に重稅を課してその輸入を妨げ、銳意して農業及園藝の敎育を普及するに金錢を惜しまず、或は又農業書籍館を設置し、又は人を海外に派して、新奇の種苗を採收し、學理を應用し、苦心を積みて輕便の農具を發見し、耕作法を發見する等、その熱心なる、實に羨やむに堪へたり。殊に我輩を最も驚かしたるものは、南方なるルイジアナ、テキサス、テンネツシー等の諸州に於て、米作の盛んに行はれんとするの兆候を呈し、北方の富有なる諸州より續々資本の投下せらるゝ狀況は、米作國たる本邦のため寒心に堪へず、併せて農家諸子に警告する所以なり。

——明治三十四年四月

第三十九話　勞力尊重論

國政は代議士によりて論議せらると雖も、國の成立は代議士によりて形成せらるゝものにあらずして、寧ろ彼等は四民代表の榮位を荷ひたる、多くの普通の商人と、多くの普通の工人と、尚ほ、り多くの普通の農民より選擧せられたるものなり。しかも榮譽は獨り代議士に留まりて、選擧區民に及ばざるは何ぞや。

それ善良にして榮ある代議士は、光榮實に亦普くその選擧區民に及べるを現はすと雖も、光輝にのみ眩惑する多くの國民は、敢てその光輝を生じたる本體に着眼し、唯一面を見て他の半面を認識するの明なし。これを廣大なる建築物に譬ふるに、建築費の殆んど大半は、これを土臺に注入するが如し。實に土臺堅牢ならざれば、微震少變にも亦傾軒斜柱の危きを保せざればなり。然れども無智の庶人は土臺に投費するを以て無益の浪費となし、寧ろ柱を大にし棟を太くするに焦心苦慮し、しかも强風に狃じ、微震に轉ずることあらば、その無智を悟らずして、風を恨み雨を嫉むに至る。笑止の極と謂ふべし。

實に農政問題にても、農業經濟問題にても、農事耕作にても、すべて農業問題に限らず他の實業界に於ても、最も緊要なるに拘らず、しかも人目に漏れ易くして措いて顧みられざるものは勞力なりとす。下に純良正潔なる農民商工の團體ありて、初めて不偏不黨なる國の代表者を選出することを得べし。商工の正潔、農民の純良なるは、蓋し正規の途によりて生計の法を立て、四隣相

扶輔し、陷れず、欺れず、惰せず、逸せず、眞心によく日々の消光をなし、以て殖産爲富の成算ある勞働の力に基す。眞正に勞働の力を致さず、巧みに誤魔化して、僅かに彌縫せる仕事にして、曾て大廈の保存せるなく、將た事業の永續せるものありや。

それ勞力の神聖貴重なる、埃及の三尖塔建設の初めよりなりと雖も、人生貪惰の常態習をなし、恐るべし、二十世紀の今日なほこの陋慣を捨てず、殊に農業界にこの惰性甚しきは、實に農界革新の時機既に曉を徹せるも、なほ他の實業界に比して遙かに遲歩なる所以ならずとせんや。今や、農事調査、耕地整理、肥料使用、農作物の調製、農産物運搬等の各事業其他農事試驗の成績、組織的農會の完成、耕牛馬法の事業、牧草の傳播、及び農耕組織の變更等、大小悉く改正を期する、一に皆勞力に關す、上下五千載、眞正貴重の姿を以てして、而して人のこれを重要視せず、輕々不問に附し、寧ろこれを卑下し、これを憎退せる勞力のことは、今や、僅かに本性發揮の機を潮して、百事革新の大根柢、大地盤たらんとす。蓋し、農界のこと、今より益々多事、漸く確實堅牢なる生業の本體を有するに至らんとするに際し、敢て謹んでこゝに潮せる一つの危機を警告す。

人の渇して水を得るや、水中の有害細菌を滅するに隙なく、饑えては食を選ぶに暇なし。その渇を醫し餓を癒やすは、醫癒を求むるにあらずして、偶々笑を招き、死を求むるに過ぎず。抑も朝階に官すると、田圃に耕すると、深窓に息すると、市井に居するとを問はず、その妻妾子弟たるもの、

多くはその夫たり親たるものに徒食して、たゞ徒然無爲にして空活す。

官に食するものは軟骨なるに宜しく、投機に食するものは狐智に長ずるに利とし、而してその妻妾は如何にして今月の割前をその主人より多く得んとし（その大部分を以て飾頭纏身の器を得るに苦心するなり）、子弟は又巧みに當月の貰分を多く（して窃かに遊興に蕩盡）致さんとせざるまでも、ただ無意識に夫々衣食し親に寄らんとこれ努む。今日、二頭曳馬車乃至は人力車に乗る婦人處女にして、將又自轉車の精美を驕りつゝ通學するといふ學校生徒にして、果して夫に藉らず、親に致さず、よく自力にてこの贅澤をなし盡せるもの幾何かある。

父は田畝に流汗して子は半學に流浪し、親は船頭に生死を賭せるに、子は無意識に他の榮華を逐ふて走る。嗚呼、父親の勞力が妻子無意識の浪費に終つて止むなくんば、遂にその結果は何するものぞ。危機とはこれ也。無意識を以て勞力を無にすることこれなり。而して今、我が日本國土は、月を逐ひ日を重ねて、切々としてこの危機を強ふせり。吾人實にこれを危ぶむ。希くは、天下の婦人青年諸子、請ふ、思を深きに沈め、考を遠くして、勞力の神聖にして貴重なるを自覺し、卿等が淺薄なる無意識の虚榮を捨てゝ、一刻も早くこの危機を弛廢せしめよ。

殊に曉を徹して宵に及び、朝の星に出でゝ夜の月に歸り、炎天に照されて厭はず、寒雨に濕れて休まず、糞土に埋れ、泥土に汚れて、しかも重稅に惱み、負擔に苦しみ、祖先來終に薄利に患ふと稱す

る我が農民諸君に計る。諸君の勞働は曾て徒費せられず、嘗て暇休せることなく、老幼その力を擧げてその業に役す。しかもその勞、その働はすべての生業生産の中に於て、最苦最辛なるに於ては最多となすべく、萬民中、卿等は眞によく高尚なる義務を盡し、滿足に天職を行ひ得しものといふべし。然り而して報はこれに伴はず、酬はこれに協はず、終世逐代薄利に沈んで衣食にだも窮困する所以のものは何ぞや。蓋し卿等の職とする農業とは果して斯の如き薄利にして愉快ならざるものなるか。もし農業とは斯の如く高尚に働き、斯の如く萬遍に勞して、尚且つ半厘の餘裕なしに終るものとすれば、國を亡し世を空しうするものは實に農業そのものならむ。農業、豈それ然らむや。

蓋し農業の性、その動作極めて擴大にして、その變化容易に肉眼に留まらざること、恰かも地球の廻轉はこれを目擊し得ざるが如し。これを以てその變化あるもこれを認めず、その大いに慣れて不變性のものと確信し、父は子に傳へ、子は孫に讓り、世々代々一傳一法、よく生を養ひ命を糊するに足り、耕作の事、焉ぞ難からんやと合點せるの結果、農夫執固の性愈〻深く、益々强く、而して、大なる自然は農業本然の活動性を止めずして、一動一轉、その大行跡と益々遠く、愈〻隔り、高尚なる勞働も、萬遍なる力役も、遂になすなく、終世寒食に叫ぶの已むなきに至れるのみ。畢竟、卿等の勞して至らず、働して達せざる所以のものは、農業は、卿等の家業と稱しながら、實は全く農業の性質を

誤つて合點せられたるにありて、農業は到底薄利のものにはあらざるなり。

農業も他の商工業と同じく、一個の職業たる以上は、宜しく營利的に經營せられざるべからず。それ有利の農業を營まんとせば、よく農の性質を知らざるべからず。既に農業も一轉一動、變化して已まざるものとすれば、その經營の法も亦宜しく活動的ならざるべからず。卽ち、世運の進歩、文明の變遷につれて、勞働の利用、人力の經濟を努めざるべからず。動物を利用して人力の勞働を分ち、機械を用ひて動物力を助け、或は耕作に、或は生産に、或は天に於ける風雨を藉り、他に於ける土地を利用して、排水法を加へ、灌漑法を施し、新種を選び、肥料を施し、極めて合理的に、經濟的に勞力を使用するに努むべし。從來農業の薄利なる、勞力を濫用し、その生産費中に勞力の相當價を附せず、或は自分の農圃に生産せるものは悉くこれを輕視してその價を論ぜず、無に看做して打算する等より、自ら最後の苦窮を嘗むるに至れるなり。

今や、農民は間斷なき勞力を以てして、漸く最後的苦窮の域に陷り、祖先の遺法―勞力の安賣―に執着しつゝ、僅かに如何にして農業の利益を獲得せんかに考及せり。農業革新時の第一機を早むるは、實にそれ勞力の貴重なるを自覺し、且つ如何に最も有益にこれを使用すべきかを悟得するに至るより始まらむか、否か。

――明治三十五年七月

第四十話　種畜場規程管見

道廳府縣種畜物規程は、去る四月三十日農商務省令第六號を以て發表せられたり。本規程の精神とするところは、同第二條にありて存す。其他の條項附則は、これより生ずる細目に過ぎず。即ち、第二條に曰く

道廳府縣種畜場ハ畜産ノ改良發達ヲ圖ル爲メ種畜ノ蕃殖育成及配付ヲ行フモノトス

蓋し本邦の家畜は古來牛馬を以てその主たるものとし、鷄、豚、綿羊等の如きは、殆んど有無の狀を呈し來りしが、その牛馬と雖も唯、習慣的使役の觀をなし、敢てこれが改良に努め、促進的發達を圖りたることなし。

これを以て、牛に於ては嘗て乳用としても、役用としても、將又肉用としても、古來良種を產したることなく、馬に於ては、乘用としては勿論（肉用は論外とす）泰西の駿馬に比すべくもなく、偶、鹿兒島馬、南部馬の如きありと雖も、僅かに駄馬として健全なりしのみ（眞に强健なりしにあらず）なるが故に、例へば耕作上、將た運搬上に於ける動物力の如きも、その效程甚だ微少にして、僅かに人力以上たるに留まりしのみ。

而してその蕃殖育成等は全く自然に委せ、家畜（所謂牛馬のみ）飼役の理由を忘却したるを以て、肥料と

しても良好なるものを得ず、一切天然に拋置して利用の途に造詣深からざりしを以て、地瘦せ作物收量亦少きの禍を免れざりしなり。況んや畜産物の點に至りては、各人佛教的迷信力と農民の情性とによりて、全く利用の途を捨てゝ、又顧みざりき。

それ耕作の業と牧畜の業とは、不可動有機的關係ありて、我が國の種畜を改良し、動物力の增大を圖るは、實に農産を多大ならしめ、畜産を改發して食物の改良を惹起し、人身の上に多大の生産力を附與するは、これ亦本邦の國力を增進するものなるを以て、今の時に當り全國各府縣下に種畜場を設け、これに關する規程を定め、卽日よりこれを實行せんと定めしは、吾人の實に慶喜するところなり。

然り、畜産の改良發達を圖るため、種畜の蕃殖、育成及配付を行ふ、固より可なり。慶すべく且つ喜ぶべしと雖も、更に一步を進めて、吾人は本邦をして世界に於ける種畜の飼源地本場たるを期せんことを欲する者なり。それ濠洲の緬羊は、世界の名産にして、萬國の仰ぐところなり。しかもその原種たる緬羊は、歐洲より移傳して、この土に於て改良を加へたるものなりと聞く。英國は萬國無比の良馬を產し、現今世界の種馬供給場たりと雖も、その原種、或は土耳其より輸入し、或は東洋より買ひ入れて種付育成したる結果なりき。其他牛種は勿論、豚種に於ても各地より集め來りて自國にて改良を加へたる結果なりとす。苟くも種畜改良を企つるものにして、嘗て英

國の牛種、馬種、豚種等を採らざるなきに至る、豈亦盛ならずや。

而して年々、英國にて消費する肉類は、始んど米國よりの輸入によると雖も、その割合は一萬弗の種畜一頭の輸出は、一頭五千弗肉二頭分を買ひ占めて優に利得の存するを認むといふに於ては、本邦一般動物體の改良增進發達を計るの理由正にその所なりと雖も、更に天與の氣候、天然に豐肥なる原野ある我が國將來の畜業の方針は、南北の地を酌酌して獨り牛馬のみならず、羊豚鷄狗等の優秀なる種類を作り、日本號の種類を以て、世界に鳴るの種となし、種畜は日本に限るといふに至らしめたきものなり。

濠洲に於けるメリノー種（羊綿）の改良史を翻き、英國に於けるソローブレツド種（乘馬）の發達史を見、將又短角牛の改良法に於ける苦慮困難を思へば、我が國に於ける吾人の囑望、亦實に非理の事に非るべきを信ず。本規程を設定せる當局者の意見果して爾りや否、吾人これを知らむと雖も、果して吾人の解する如き意志に成り、而して又その方針に出でんことを望む。鳴呼、吾人實にその然るを望む。

——明治三十五年八月

第四十一話　本邦將來の農業

過る十九世紀は、世界諸國に非常なる進步發達ありしが、就中最も著しき急速の進步を同世紀

の終に顯はしたる國は、卽ち我日本帝國なることは、萬國の人々の共に認めて驚嘆するところにして、吾人の大いに欣快とするところなり。

世界中最大進歩をなしたりと稱せらるゝ北米合衆國人の如きも、自ら稱して、十九世紀中最大の進歩をなせるは我が北米合衆國なれども、猶一層著しき急劇速度の進歩を顯はしたるは日本なりと云へり。かの歐洲を震憾せしめつゝある米國の人よりかゝる言を聞くは、一應愉快なることなれども、退きて我が實力如何を考ふれば、成程三四十年間に我が國の進歩の速度は著しくして、世界の人々を驚嘆せしめたるには相違なきも、我は恰かも小兒が遠方にある巨人の跡を逐ふて疾走し始めたる如き觀なきにあらず。我の疾走して多くの距離を走りたるにも拘らず、歐米諸國はなほ前路に活歩しをるに等し。我が國人たるもの、誰彼の差別なく皆ともに力を戮せ、益々疾走して我の前途にあるものに逐ひ及ぶのみならず、これを逐ひ越えて先進するの覺悟なかるべからず。而して前世紀より尙一層進歩發達の時代たるべきこの二十世紀の終りに於て、日本は實に世界中最大の進歩をなしたりとの榮譽を博することを心がけざるべからず。年少氣鋭、新進の途上にある日本帝國が、十九世紀の末葉に於て顯はしたる進度を維持するに於ては、この名譽の榮冠を得ること、强ち難きにあらざるべしと信ずるなり。

然り而して、吾人は、國民として、種々の方面より、各その職に應じて眼勉拮据、國家の進歩發達を

圖らざるべからず。商工業等、農業以外の業に於ては、これが勸誘發達を勉めらるゝ士あるべし。故に吾人は農業の方面に於て同志と共にこれが發達進歩を促すに勉めざるべからず。我が同胞各、その分に應じ、その職を進め、拮据眼勉すれば、必ず我が國力の充實することを見るは明らかなるべし。かくて眼勉は進歩を生み、發達は改良を促すに至るべきなり。請ふ、我輩をして聊か我が農業進歩の榮を語らしめよ。これ、隗より始むるの微意に過ぎざるなり。

數年前より我が農業の漸次進歩し來りたるは、各人の認むるところなれども、この進歩が果して時勢に適したるものなりや否やは我輩の大いに怪しむところなり。今や、他の商工業其他諸般の事物の發達に比すれば、保守的の傾向ある我が農業は、種々のこれを誘掖するものあるに拘らず、進歩甚だ遲緩にして、この急進せる開明の事物に伴はざるを見る。農家の收入、耕地の面積、使用の器具等の如きも、從前と異るところなく、依然數百年前の狀態をそのまゝに維持しをれるが如きは、他の事物の發達に伴へりといふを得べきや。而して農者固よりこれを怪しまず、勸農の職にある者亦これを異とせず、農家の徵收及び費用は愈〻增加せるに拘らず、收入は依然として鎖港時代と大差なきが如くんば、農家の疲弊せざらんとするも得べからざるなり。況んや海外よりの農產は我が農產を襲ひ、これを壓倒せんとしつゝあるに於てをや。農事に關係せるものは、官民を問はず大いに焦慮せざるべからざるなり。

如上の狀態を改めんとするには、農家の經濟上に一大革新を加へざるべからずと信ずれども、急劇の施術は却つて病者の危險を釀すの恐れなきにあらざるが故に、漸次にこれが改良を計るの外あるべからず。第一に、我が國の農地面積は、その狹小なるに拘らず、農者の數比較的多きが故に、一人に對する收入極めて僅少にして、勞力の濫費せらるゝこと多し。かゝる有樣にては、到底農家の富裕を期すべからざるのみならず、遂に生計困難をも來すに至るべし。これを以て我輩は、この餘剩ある農家の人口を漸次他の業務に就かしむるの策を執るべきことの至當なるを信ずるものにして、今もし改良農具を用ひ、牛馬を使役し、耕地整理を施したる土地を使用するか、又は新たに開拓せる土地の農業に從事するとせんか、一人にて從前の五倍若くは七倍以上の仕事をなし得るは容易なるべし。かくて餘りたる人手は、これを他の事業又は海外の有利事業に轉用せば、その利益は國家にとりて洵に巨大なるのみならず、農業の如きも益々改良發達して、遂には海外の農業と競爭するも難からざるに至るべし。

然れども前述の如く、卽時にこのことを保守的なる我が農家に强ゆるは稍〻酷なるべきにつき、我輩は先づ農家の副產を盛にすべきことを奬勵せんと欲す。從來とても農家の多くは養蠶をなし、機業を營み、麥藁細工其他種々なる副業を經營し居りて、ために閑時間を利用し、多少の收入を博しをりしが、今後は一方に於て耕作上に精練なる機械を用ひしめ、耕地整理及び新地開拓を

奬勵して、勞力の節約を計ると共に、他方に於ては農家に適當せる副業を盛んに誘導してその收入を增加し、且つ異日他の業に轉ずるも容易なるやうに準備しをくこと肝要なるべし。なほ副業の中にても果樹栽培、家禽及家畜等の蕃殖の如きは、勞力餘りある我が國の農家には、最も勸奬すべきものたるべし。之等の業より產する物は、將來國內の需要益々增加するのみならず、海外との交通彌々頻繁に赴くに從ひ、海外の需要をも喚起するに至るべし。

近年農商務省を初めとし、各府縣郡村に至るまで、農事試驗場を設くること頗る多く、地方に於ては一種の流行となれる如き觀ありて、各所に種苗、肥料、栽え方等の試驗行はれ、その效亦少きにあらざれども、之等の試驗は斯の如く各所にて一々これを行ふを要せず、且つ此の如き試驗のみに各地にて金錢を費すよりは、寧ろ我が國の農業を時勢に伴ひ得せしむる開明國農業法の試驗を樞要の地に施行するに至らんことを望む。換言すれば經濟的模範農事試驗場の設立を希望するなり。

近年、海外農產の我が國に入り來るは種々の原因あるべしと雖も、慥かに勞力節約の機械を我が國に用ひざる如きも、かゝる輸入を促す一原因なりと信ず。我が國人の輕侮せる支那人の如きは、大なる機械を用ひ、動物を使役しをる點に於て、大いに我が農家より進步せるものといふべし。支那より、大小豆、胡麻、粟等の近年漸く輸入を增加し來りたるは大いに戒心すべきことに屬

す。

卽ち、我輩は良機具を使用して經濟的に農事を經營する試驗場又は講習所の一日も早く設定せられ、我が國農民を覺醒せしむると共に、盛に實習生徒をこゝに養成して、これを國內に用ふるのみならず、進んで韓清の諸國に移住せしめ、該國人を使用して盛に農業を經營し、我が國の勢力を永久に韓清國內に扶殖建設するの端緒たらしめんことを望む。

歐米各國にては、商工業等に電氣蒸氣等の力を用ふると同樣に、これを農業上にも應用して、精巧なる機械を使用せるに、我が國にては祖先傳來の鋤鍬鎌にて農業を經營せるを、官民共に意とせずしてこれが改良を促がさざるは、迂遠の譏りを免るゝこと能はざるべし。頃日、橫濱なる米國總領事、本國に報告して曰く「日本にては勞力を濫費し、米國人一人にてなすことは、日本人の四五人を要す」と。我輩の實見するところに於ても、米國農夫一人が精巧なる機械を用ひてなすことは、日本人十五六人前の仕事をなせり、誠に殘念なりといふべし。

我輩は斷言す、日本にて最も遺利多きは勞力なりと。この遺れる勞力を巧みに利用する時は、國の繁榮期して待つことを得べし。而してこれを利用するには機械を精撰するにありと信ず。近代の戰爭は多く機械の精否によつて勝敗を決すとは我輩の屢〻陸海軍將校より聞くところなるが、農業上の戰も亦多くその使用する機械の精否に關すと信ず。古語に曰く「工其事をよくせ

んと欲すれば、先づ其器を利す」と。我が農業の改進は、その機械の改進によること多しと信ずるなり。

農業の盛否は、我が國運の消長に大關係を有することにして、我が國農業將來の運命の如き、志士の一日も等閑に附し置くべき問題にあらざるが故に、我輩は興農に熱心なる餘り、他に卒先してこの問題につき普く江湖の高說を仰がんと欲し、こゝに卑見の一端を述べたるなり。幸ひに高諭を吝むなかれ。

——明治三十六年一月

第四十二話　農家の經濟

月を踏んで出で、星を戴いて歸り、孜々汲々としてその職に忠實なるものは農家にあらずや。かの官吏及び商賈等が、相當の休息時間を有するに反し、我が農家は些の休息時間なしに勞苦しつゝあるなり。しかも官吏商賈等は安樂なる生活を送りて、農家は安樂なる生活を送る能はざるは何ぞや。

疎食を食ひ疎服を纏ひ、最も節儉なる生活を送るものは農家なり。然るに美酒に醉ひ、美味に飽きて、なほ官吏商賈が富むに反して、農家は水及び麵麭にだにも滿足する能はざるは何故ぞ。

斯の如く勤勉にして、斯の如く質朴なる農家に、天は何故冷酷なるか、世間は何故に報ゆること

厚からざるか。吾人は思ふてこゝに至る毎に、未だ嘗て農家のために一掬の涙あらざるなり。

實に吾人は農家が現在の境遇に泣く。しかも吾人は獨り農家のために同情の涙を濺ぐのみにして已むべからず。何となれば、吾人は農家を利益し、農家を補益せんことを契へる者なればなり。然り、吾人は農家の地歩を進めずんば、滿足せざる者なればなり。

故に、吾人は興農園を起したり。故に吾人は興農雜誌を發行せり。吾人は筆と口とを以て農家の利益のために說き、吾人は力と心とを以て農家の利益のために働きたり。しかも農家は、なほ深き不幸の底より僅かに一步を進め得たるに過ぎざるが如し。これ、吾人が微力にして、以て農家を啓發するに足るものあらざるによると雖も、農家自身が經濟的觀念に迂なるによりて、斯の如き不幸の境遇に陷りつゝあるや論を俟たず。

實に農家は經濟的觀念に迂なるがために、常に多くの勞働をなして少許の利益に滿足しつゝあり。卽ち、農家は、好んで低廉にその生產せるものを賣却し、好んで高價にその必要品を購入し居るなり。嗚呼、安く賣り、高く買ふ、これ第一の不經濟なる方法にあらずや。

然れども、農家は吾人の所說を聞かば、必ずや云はむ。天下何れの所にか、好んで低廉に賣り、好んで高價に購ふ者あらむやと。しかも吾人は農家が安賣高買しつゝありと斷言するに躊躇せず。請ふ、吾人をして何をか農家の廉賣といひ、何をか農家の高買なりといふかについて、少しく

詳細なる說明をなすところあらしめよ。

試みに都會と地方との物價の高低を比較するに、多くの日用品にして都會にて十圓にて販賣せられつゝあるものは（十中八九は）地方にて十三四圓に賣り捌かれつゝあるなり。現に吾人の見たるところに於ても、東京にて一斤三十錢の茶は、地方にて一斤四十五錢に販賣され、東京にて一個三錢の墨は、地方にて一個五錢に販賣されをれり。而して、都會にて十圓の價格ある農產物をば、農家は六七圓にて地方商人に賣却するを見たり。豈これをしも高く買ひ安く賣らずといふを得べきか。

然れども、農家は云はむ、右の如き打算は、運搬又は荷造り等の費用を算入せざるためにして、もしその價格に運搬費及雜費を算入すれば、決して右の如き不相當の計算を來すこと非るべしと。然り、吾人の計算は、運搬費其他の雜費を算入せざるものなり。しかし、運賃荷造費等を加ふるも、なほ都會と地方との價格の差に二割三割の相違あることを見るを得たり。

概して云へば、都會と地方との價格の相違は、運賃を算入して、なほ二割以上の差あるを見る。物によりては實に五割の大差あるものを見たり。農家は東京にて一圓の物品を二圓以上にて購入し、都會にて十圓の物品を地方にて五圓以下に賣却することすらあり、不經濟もこゝに至りては甚しと云はざるを得んや。

而して農家が斯の如き不利益の狀態に陷りつゝある間に、不當の利益を壟斷するものは、地方の小賣商人なり。彼等の多くは僅少の資本を以て若干の貨物を都會より購入し、その運賃荷造費等を控除して、なほ三四割の利益を得るなり。又他の商人は地方の農家より低廉に農作物を購入し、これに運賃及び二三割の利益を加へて都會の商人等に賣却するなり。後者は、その購入する農產物の金額鮮からざるを以て、一回の賣買にても相當の旅費利益を得るが故に、價格の差異を甚しからしむるの要なしと雖も、前者は、その資本仕入高、共に多からざるを以て、旅費運賃等を算入する時は、勢ひ非常なる割增を加へざるを得ず。故に現今の農家は、殆んど地方商人の虐待を受けをれりといふも不可なき結果に陷りつゝあるなり。

要するに、農家は單に生產者を以て自ら任じ、最高の市場に販賣して最低の市場に購入することを研究せず、これ一は經濟的觀念に乏しきの致すところなりと雖も、一は事の煩雜を厭ふの心より生じたるに外ならず。斯の如くにして農家は、自ら不利益の深淵に投身するものといふべし。

然るに、或る地方商人は、農家が直接に都會と關係するを防禦するため、詭辯を用ひ、農家に最も必要なるものは地方的結合なり、農家が個々別々に都會と關係を生ぜんとするは、恰かも自身の勢力を減少するものに等しと云ひ、農家をして團結せしむるに汲々たるものあり。然れども、こ

れ決して農家の利益を保護せんがために唱ふるにあらずして、商人自身の利益を保護せんがために唱道する詭辯なり。農家は地方的壓制に服從するに至つて益々苦痛に陷るものにして、特に地方の小賣商人等が農家の忠告者として信任せられたる時は、農家の不利益その極に達すといふべし。實に地方の小賣商は、農家の利益を剝奪するものに外ならざるなり。

故に農家は努めて都會の市場に注目し、可及的高價に販賣し、可及的低廉に購入するの手段をとらざるべからず。農家は都會の市場より物品を購入するを難事なりと思惟する風習あれども、その實斯の如く易々たるものはあらず。卽ち豫め新聞紙又は定價表によりて、必要なる物品の價格を知り（場合によりては見本の送附を請ひ）然る後唯一片の郵便を投ずれば、數日にして欲するところの物品は到着すべし。

唯〻注意すべきは都會には地方の農家を瞞着するを目的として、廣告を利用しつゝある奸商多きを以て、可及的有名且つ信用ある商店に注文することを忘るべからず。もしかゝる奸商の惡手段に陷ることなくんば、地方の農家は輕便なる信書によりて、地方と都會との間に横たはれる價格の差を打破し得て、その利益を增進すること、蓋し鮮少にあらざるべし。吾人は切に農家が經濟的觀念を增進されんことを希望して已まざるなり。

——明治三十六年二月

第四十三話　算錢の法

こゝに人あり、日々汲々として錢を算す。彼昧旦にして起き、直ちに打算の場に赴き、打算の事に關す。口、汲々として數を呼ぶを止めず、午孜々として盤を動かすを止めず、午に至るも飯に遑あらず、晩に至るも餐に暇なし。而して夜深うして將に鷄鳴に及ばんとして止む。彼の算し得るところ果して幾何ぞや。

彼、一呼吸にしてよく十枚の錢を算す。素よりその技に拙ならず、その勞に吝ならず、昧旦より深更に及んで打算に從事するの間、實に四萬呼吸、算し得るところの錢、多きこと四十萬枚、天下豈斯の如き黽勉なる者あらんや。しかも彼の算し得るところ、果して幾何ぞ。

吾人、初め謂へらく、四十萬枚素より鮮からず、恐らく富豪一代の產を算へ盡すことを得たるべし、と。何ぞ計らん、彼はたゞ僅かに四百圓を算了せるのみ。彼は實に一厘錢を算しつゝありしなり。故にその勞苦彼の如く甚しく、その煩ひ彼の如く繁くして、しかもたゞ四百圓に過ぎざりしなり。

而して又、茲に人あり。日毎に錢を算すること曩に說ける者に同じ。然れども、この人は則ち彼の人の如く早起ならずして、日三等にして初めてその寢より起ち、朝餐に先ちて一瓶の美酒を

酌み、陶然たるに及びて朝餐に就く。餐終つて更に煙を喫すること數口、低聲數首の俗謡を唱し、後、悠然として錢を算し來る、算すること一咳四千、呼吸一呼吸、十枚の通貨を算へ、四萬を算し終つて止む。時に日未だ午に至らず、しかも再び酒を呼び杯を汲み、遂に醉倒して眠る。この人の算し得るところ、果して幾何ぞや。

吾人窃かに謂へらく、彼の勤勉を以てして尚四百圓以上を算し得ず、この懶惰、恐らくは四十圓をも算すること能はざりしならむと。しかも、事吾人の想ふ所と違ひ、この人の算し得るところ却つて四十萬圓の多きに及ぶ。實にこれ一個豪商の體面を保つに足るの財貨のみ。この人は實に十圓金貨を算へつゝありしなり。故にその勞爾く小なりしに拘らず、優に四十萬圓を算するを得たりしなり。

嗚呼、その勞とその利と伴隨せず、その苦とその益と平均せず、却つてその怠とその利と合一し、その逸とその益と等同す。これ初めに赴くところを錯ると否とによつて來るところの結果なり。

而して、我が農業界のこと亦酷だ相類せるものあり、然り、我が農家は多く汲々として一厘錢を打算するの途を選み、十圓金貨を數ふるの策をとらず、その勞大にして利の小なる、豈怪しむを要せんや。

何をか一厘錢的農業といふ、疎なる種苗を栽培し、不完全なる農具を使用する、これのみ。何をか十圓金貨的農業といふ、良好なる種苗を栽培し、完全なる農具を使用するこれなり。古人曰く「毫釐の差千里を生ず」と。實に彼と此と、種苗農具の價を比する時は、その差たゞ毫釐のみ。しかも彼と此と、その收穫の多少を論ずる時は、その差數千萬里に及ぶ。

嗚呼我が農家が昧旦にして始め、鷄鳴にして止み、汲々として耕し、孜々として耘し、鞠窮黽勉、なほ食ふに餘りあらざるものは、此を選ばずして彼を擇べるが故なり。十圓金貨の算者たらずして、一厘錢の算者たるが故なり。農家諸子、請ふ、大いに稽ふるところあれ。——明治三十六年五月

第四十四話　農民の海外移住について

敵を知り己れを知るものは戰へば必らず捷つと。故あるかな、兵家の言や。寔に覆載の間に紛糾せる千態萬様の人事にして、一の爭闘ならざるものなきなり。請ふ、吾人の用語が甚だかの政論者流に髣髴たるを怪しむことなかれ。世界の學者が滔々として進化説を奉戴せる今日に於て、何人かよく生存競爭の原理を排斥することを得んや。既に生存競爭の人生に避くべからざるを知悉せば、何人か敢て人事の爭闘にあらざることを斷言せんや。嗚呼、爭闘なるかな、爭闘なるかな、覆載の間に紛糾せる千態萬様の人事にして、眞に一件の爭闘ならざるはなきなり。

人生の百事にして、悉く爭鬪なる以上は、吾人の一擧手一投足と雖も、必ず敵に克ち、必ず他を制するの覺悟を以てせざるべからず。特に國家と國家との間に行はるゝ爭鬪に於ては、最も多く這般の注意を要す。然り、國家と國家との間に於ける各種の生存競爭に於ては、敵を知り己れを知るの必要を感ずること甚だ切なり。茲に於てか、兵力の國家的競爭には必ず敵情を偵察し、商工業の國家的競爭には必ず對手國の商工況を視察す。而して、農業の國家的競爭に於ても亦對手國の農況を視察する要あるは論を俟たざるところなり。

兵力に於ける日本の價値は既に世界の認むるところなるが、商工業に於ける日本の進歩も亦容易に侮るべからざるものあるなり。從つてこの二者に於ける候偵視察の周到なることも亦吾人の知るところに屬す。たゞそれ我が國の農業に至りては、これを兵力、商業及び工業に比して劣ること、啻に數等にして止まらざるものあるは何ぞや。他なし。當業者の覺悟肯綮に中らず、當業者の措置機宜に適せざるによる。當業者が、農業も亦戰ひに同じきを知らずして、戰鬪の準備を整へず、配兵の策略を定めず、敵を察することをなさず、己れを測ることをなさざるによる。これ手を束ねて、敵の到るに委せ、枕を高うして仇の襲ふを待つものに非ずして何ぞや。

もし晏然たること斯の如くにして、更に數年を經過せば、我が豐葦原瑞穗の國は、遂に國家的農戰場に敗衂し、根據の地を喪ひ、立脚の處を失すべきや必せり。實に、旌旗を齊へ、氣力を振ひ、面も

ふらず農事の戰場に走せ向ひて、敗殘を未然に防ぎ、狂瀾を既倒にめぐらすは、この時を外にして再び得べからず。

もし農業の戰場に於て、鋭利なる兵器を携へ、精練なる將卒を有し、風靡電撃、直ちに吾人の陣前に殺到するものありとせば、これ恐らくは米國に於ける米に外ならじ。米國に於ける商工業が近來長足の進歩をなし、一氣に世界を席巻せんとする勢あるは、夙に識者の知るところなるべく、その急先鋒たる煙草、石油等は既に我が國の一部を占領せり。而して更に恐るべき農業の强兵は、米國南部の諸州——殊にテキサス、ルイジアナの二州を根據として世界の米界を蹂躙せんとしつゝあり。米を以て主産物とし、瑞穗の國を以て自らをる我が國の如きは、基礎崩壞して居屋倒るゝの感なくんばあらず。特にテキサスを初め、米國南部に耕作せらるゝ米穀は、支那、朝鮮、暹羅、柴捉、緬甸等に産する如き不良なるものにあらずして、多くは我が國に於ける三備地方の米粒に比するも、些の遜色なき優良品なるのみならず、米國に於ける價値の低廉なること、遙かに清國米の下にありて、一噸僅かに五十六圓（今春の調査による）即ち一斤二錢五厘を出でざるは、寔に驚くべき廉價にあらずや。たゞ目下米運輸の船舶に欠乏し、一噸約二十五圓の運賃を要するを以て、本邦米をして纔かに餘命を保たしむと雖も、もし彼等にして一と度運輸の便法を發見するに至らば、我が日本米は到底この强敵の對手にあらざるや明らかなり。

然れども、我が國の米作にして、更に改良すべきの餘地なくんば則ち已む。苟くも將來改良し、發達するの餘地あるに於ては、未だ遽かに失望し落膽すべからざるなり。吾人が斯の如く斷言するを聞かば、或は疑ふものあらむ。我が帝國が農業を基礎として春秋を經たること、既に數千百、米作に關する諸般の設備は殆んど窮極に達して、また伸張すべき尺寸の餘地あらざるべしと。豈知らんや、千古の疑問も一朝にして分明し、百載の難題も一夕にして解決せらるゝことあり、幾千百歲を經て、些の進歩をなし得ざりし米作も、今や局面一轉の機運を胎して、長大足の進歩をなさむと欲す。而してその先蹤は實に米國によつて踏み下されたるに外ならざるなり。南米に於ける米作の景況を視察するに、農具を改良し、耕地を擴張し、規模を大にし、勞力を節約して、遂に前記せる如き低廉なるものを産出するに至りたるや明白なり。この理を直ちに我が國に移して、農具を改良し、耕地を整理せば、假令地力は增加せずとも、勞力の節約によりて生ずる利益は蓋し鮮少にあらざるべきなり。

耕地整理のことは、既に近時諸方に行はるゝを見れども、その結果は何れも良好にして、耕地面積を增加し、一毛作を變じて二毛作となし、大いに仕事を容易にし、收穫を增殖し、道路畦畔を改正して交通運搬を便ならしめ、耕地の區劃を整正し、動作の自由を得せしめたるため、大いに勞力を節約するに至れるものの如し。然れども、これに伴ひて改良農具を使用せざれば、未だ耕地整理

上得たるところの利益を完く獲得したりといふべからず。米國人の諺に「機械にて製作し能はざるものは、たゞ孩兒のみ」と云へるあり。この諺は米國にては農業上にても實行せられ、種子を播き、畦畔を作り、作物を收穫し、結束し、耕耘する等、一として機械を利用せざるはなし。

その米作地方に到り見るに、渺茫たる數百千町歩の田地は、水を要する時は喞筒を以て瞬時に全田に灌漑し、これを要せざる時は乾田となし、機械と牛馬とを併用して一人よく三四十町歩を耕作す。實に壯なりと云ふべし。一方瑞穗の國と稱する本邦農業の狀態は如何。我輩屢汽車に乘じ內地を旅行する毎に、その迅速安樂にして、昔日五日六日を要せし道程も僅か半日にて達することを得、又行路難を嘆ずることなく、偏に文明の利器の我が國に行はるゝを喜ぶ。然るに車窓より沿道の耕地を窺ふに、農業は太古の時代と毫も變ぜず、その農具は鍬鎌に過ぎず、袒裼裸體終日齷齪してなすところは僅に數歩に過ぎず。これを海外の農業に比較する時は、その迂にして憐れなる、歎息の外なきなり。

農具を以て兵器に比すれば、彼の使用するものは大砲連發銃に比すべく、我が使用するものは刀劍の類に過ぎず。刀劍如何に精銳なりとも、如何ぞ銃砲に敵せむ。その勝敗優劣は鬪はずして明らかなり。故に、彼と戰はんとせば、我亦これに匹敵する利器を選ばざるべからざるなり。然れども、銃砲に比すべき改良の泰西農具は狹隘なる耕地に適せず。耕地整理を實施せる地は、

これに好適せるを以て、宜しく犁等を用ひ、牛馬を使役し、益々労力を節減せざるべからず。然れども、人或は云はむ、既に舊來の農具を用ひてすら耕地整理の土地に於ては労力に餘りあり、更に改良農具を用ひて労力を省けば多數の農民はなす事なきに苦しまむと。然り、實に我が國の人口は土地面積に比して甚だ多く、加ふるに連年五十萬人の增殖を見る。斯の如く人口は將來益々過剩充溢すれば、我が同胞は勢ひ海外に殖民せざるべからず。否、宜しく進んで朝鮮なり、支那なり、其他暹羅、布哇、米國、南洋等へ移住し、彼地に於て貨殖し、我が國力の欠乏を補ふべし。故に耕地を整理し、農具を改良し、それにて労力餘ればこれを海外に用ふるの策を講ずべきなり。

然れども、我が國の農業にては直ちにこれを海外に用ふる能はず、又これを用ふるもその利するところ少し。故に農家は牛馬を使役し、改良農具の使用法を學び、而して海外に移住するを可とす。海外に於ては労働者の給料甚だ高く、最初は一日一弗（卽ち我が二圓）の給料に過ぎざるも、やがて二弗三弗となり、年々數百弗の貯蓄をなすことを得べく、志ある人は彼地に獨立農業を經營し、立派なる紳士となることを得べし。既に近年に於て太平洋岸に殖民し、三百エーカー、卽ち百町歩位の土地を借りて農業に從事し、年々二三千弗の純益を得る人甚だ多しとす。而して之等の人の消費する米、醬油等は皆本邦より輸出するものなれば、國家經濟の一助ともなるなり。

この他米國に移住して既に百萬弗以上の富豪となりし者あり、二十萬弗、三十萬弗の財産家と

なりし者あり、之等は海外に移住せしがために成功せるものにして、內地にありては到底なし得ざることなりとす。かの英國が今日世界到るところに殖民地を領するも、畢竟、早くより人民を海外に移住せしめたる結果なり。我が大和民族も、古昔は遠く支那を掠め、朝鮮を討平せし勇敢なる歷史を有せり。中世にして國是を誤まり、長夜の眠りを貪りしが、今日以後の大和民族は、再び古昔の勇敢進取の氣象に復し、大いに國力を膨張せざるべからず。

——明治三十六年十一月

第四十五話　副食品栽培の要

農作の豐凶如何が本邦の經濟上に著しき影響あることは、明白なる事實にして何人も疑ふ餘地を殘さず。元來平作の年柄にても、辛うじて國民を養ふだけの食物を得るに過ぎざるは、遺憾ながら我が農業の現狀にして、一旦氣候の順を誤まるか、暴風雨の來襲に遭遇するか、もしくは害蟲の蔓延に際會せば、海外より多大の輸入米を見んとする狀態にして、現に一昨年の如きは東北地方の米穀凶作にして、收穫米三千六百九十六萬四千餘石、外國米を輸入すること千七百七十五萬圓に及べり。昨年の如きは亦麥作不良のため、その收穫高は大小麥合して僅かに一千三百五十四萬千百五石、ために外國に逸出せる金額は兩年度に於て、米穀及麥合計七千三百萬圓に上れ

り。本年の如き、未だ麥作の收穫期に達せざるが故に、その豐凶を明らかに知るの由なきも、地方によりては、急に麥稈の延び過ぎたるため、平年作を得るは困難なるべしとの通信に接せり。

然り而して、糧食を豐かに收穫し、優にこれを國民に供給して平常に倍蓰せる活動を促し、益々各自の業務に精勵せしむることは實に緊急の要務たるなり。然れども、米麥作のみによらずして、更に他に糧食となるべき有用有利のものは、各地に於てその適するものを選び、空地を剩さず、この際播下せんことは切に望みたき一事なりとす。

吾人の糧食として、容易に各地に產出するを得べきは、馬鈴薯、玉蜀黍、蕎麥等は、我が國の南北到る處に容易に耕作するを得て、豐產多穫なる上、日常の食糧に適すべし。甘藷の如きは、我が北海道及び東北の寒地には未だ栽培の方法熟練せざるがため栽培せられざるも、その他の地方にては到る處に最も多量に且つ容易に產出せらるゝものなるが故に、我輩は手廣くこれを栽培せんことを奬むるものなり。蓋し之等の作物は、現に內外の諸國にて常食として使用せざるなきは、周知の事實なりとす。

之等並びに此他各地に適應する夫々の副食物を盛に產出收穫し置かば、假令不幸にして秋季の米作豐穰を告げざるに於ても、さほどの苦痛を感ぜざるべし。幸にして天候の恩惠を享け、米穀萬作を得るに於ては、これを海外に輸出して大いに國利を計るを得べし。これ我輩が是非と

も各農家の分限に應じ、速やかに可及的多量に副食品の栽培に着手あらんことを希望する所以なり。

——明治三十七年五月

第四十六話　農產品を恤兵部に寄贈すべし

辛酸苦楚を嘗め、死生の間に出入して、國家の榮光顯揚に努めつゝある我が忠勇無双の軍人に對しては、吾人はあらん限りの方法を以て同情を表すべきにして、これ吾人國内に安堵せる者の愉快なる義務なりと信ず。

頃日、戰地にある某新聞特派員の通信を見るに、我が軍隊は惡路汚泥に困難を極むる上、食料は多く粗惡極まる朝鮮米の半ば生なる飯と、大根の切干にして、その宿舍は不潔汚穢、豚小屋に等しき民家なりといふ。之等の困苦艱難を侵して進み、終に鴨綠江岸に於て敵の精銳を挫んでたる大敵を美事に擊破したる如き、我が軍隊の忍耐勇氣は、吾人滿腔の感謝を禁ずる能はざるなり。

開戰以來、各地より恤兵部へ向け續々寄贈するところあるは吾人の大いに喜ぶところなるが、吾人が更に農家に望みたきは、各地に於て產する農產物にして、遠地の輸送に堪へ、しかも出征者の受領に便なる種類を選び、懇篤に栽培して勉めて精良なるものを產出し、これをその有力者又は農會に於てとり纏め、當局者と交涉の上、便宜これを出征者に寄贈するにあり。

滿韓の野、若くは海上の勤務にありて、平素單調にして粗末なる食品を口にせる軍人にとりては、本國にありて特に品種を精選し、肥培を懇にし、夜に日に丹精をこめて收穫したる農產物を寄贈せらるゝに於ては、聊か困苦を慰め得べきのみならず、異鄉の空にありて幾多の苦慘を嘗めつゝ敵軍を掃蕩しながらも、內地農作の豐凶を氣遣へる折柄、懷かしき遠き故鄉より送りこしたる佳品を接受せる勇士の心は如何あるべきか。その道德上、精神上の效果は、蓋し至大なるべく、彼等をして益々勇躍せしむるに至るべし。

從來伊勢の大廟に供するため、諸縣の農業篤志家中より、特に若干人を選拔して御供米を叮寧に栽培せしめらるゝ例なるが、今日の時局に際しては全國の農民は軍人に供するがために、その地方々々に於て、かの御供米を作る精神にて、各戶毎にその地の特種物產を叮寧に栽培し、これを少量づゝなりとも持ちよりて軍人への寄贈品となすことは、最も時宜に適したる處置といふべし。

前述の如く、この目的に供すべき農產物たるや、遠地の輸送に耐へ、容易に食料に供し得るものに限らざるべからず。例へば、糯米の如きは砂糖を混和して製したる砂糖餅となすを可とす。蔬菜果物の類もこれを乾燥し、運搬に便にして、容易に食料に供し得るやうにすべし。出來得べくんば、適宜に味をつけ、直ちに食料に供して差支なきやうにして輸送したきものなり。又特に、

福神漬其他これに似よりたる珍味の漬物類を製して寄贈するも可ならむ。苹果、梨、蜜柑等の果實は永く輸送及び貯藏に堪ふるが故に、生のまゝ各戸より三十個乃至四十個宛集めても、一地方の生產地より集むる時は、數百萬個となるべきにつき、多數の人に飽食せしむるに足るべし。

今年米國聖路易大博覽會開期中には、種々の計畫實行せらるゝ順序なるが、その中に苹果日なる日ありて、來る九月二十七日には、入場者一人に紅色の苹果三個宛を贈り、人々をして苹果の眞味を覺らしめ、この果樹を益々廣く栽培せんことを奬勵する目的なりといひ、これがために當日要する苹果の數は、これを積載運搬する汽車の貨車數二十一輛を要し、又その配布する苹果は今より各地の栽培家より寄附を募りをれり。

誠に面白き思ひつきにして、如何に少數のものが集りて大多數をなすかを見るべし。今、我が出征軍人に贈るに、右の米國の催しの如く苹果、蜜柑、梨等を多數に集め得て、これを贈り得たらんには、その愉快、如何ばかりぞ。吾人は地方有力者が、その發起人周旋人となり、或は農會を動かしてこの事に當らしむる原動力たらしめんことを望むものなり。

元來、農家に於ては、金員を寄附すること困難なる場合に於ても、その生產品を寄附するは、さのみ苦痛を感ぜざるが一般の狀態なるは世人のよく知るところなり。故に寄贈品として、今より心にかけて餘分に產出しおかんには少しも苦痛を感ぜざるべし。已れの生產品又は所持の物

品を贈與するの、金員を贈與するより苦痛少くして容易なるは、獨り農者のみならず、世間一般の情狀なれば、今もし農家にして廣くこの寄附品のことを計畫したらんには、他の水產業に從事する者、又は食料品其他の製造販賣に從事する者も、夫々思ひ〳〵に工夫相談して、全國各地より思ひがけなき多量且つ佳良の精品を我が軍人に供するに至らむ。かくて國民は軍人をねぎらふ志の一分を充すを得べきなり。

農家に於て右の企圖をなし、各地の有力者又は農會に於て、これが奬勵及び斡旋をなすに於ては、この一事たるや、與ふる者、受くる者、又これが斡旋をなす者、共に倶に多大の幸福を受け、好成績を呈すべきことを確信して已まず。農會の如き、この有事の日に於て、卒先して種々有益なる事業に與り、活動するに於ては、將來その信用益々揚り、前途に光明あるべきを疑はず。我輩は全國諸農會の之等緊要の事業に參畫斡旋するの外、なほ種々の方面に於て極力盡すところあらむことを、この機に切に望むものなり。

——明治三十七年五月

第四十七話　模範農場の設置を促す

今春各府縣に於ては、戰爭のため地方費の緊縮を唱へ、或はその農事試驗場を廢止し、或はその經費を減額したるものありしが、そのこゝに至れるは、中には試驗場の效果擧らざりしため、廢止

の口實を戰時緊縮說に藉りて、好機逸すべからずとなし、直ちに試驗場を閉鎖したるものありと聞く。勿論效果なきものは一時も存置せしむべきにあらず、一日も早く閉鎖すべきが當然にして、戰爭の有無を問ふべきにあらず。されど戰爭中なりとも有效のものは益々これを擴張してその實益を大ならしむるを要す。

抑〻農事試驗場は中央の農商務省直轄のものを初めとし、各府縣中央部に大低一箇所宛存する上に、尙各郡又は町村に互りて農事試驗場の設置を見るものあり、同樣のことを、餘り距離の遠からざる諸所に於て、繰返し〳〵試驗するは尙怨すべしとするも、中には不完全なる設備の下に試驗をなし、到底試驗の目的を達し難きの感あるものなきにあらず。之等試驗場は、所謂一時の流行又は地方的感情によりて設立されたるものに外ならざるべく、而してその試驗の成績に注意し、これを利用せんとする人に乏しき地方に、かゝる試驗場の續々設置せられたりしは、寧ろ奇觀と云はざるべからず。

かゝる不完全なる農事試驗場は現時その存在せざるを信ず、もし、これあれば速かに廢止すべし。要もなき不完全なる試驗に貴重の時間と費用とを消すべきにあらず。農事の試驗は、宜しくその完全なるものに委すべし。元來我輩は農事試驗場の數の餘りに多きを望まず、その設備の完美を欲するものなるが、今や更に進んで、完全なる農事試驗場と相俟つて、經濟を專旨とし、實

益を重んずる模範農場の速やかに各地に設置せられんことを切望す。

我輩の模範農場と稱するものは、世間に是認せられたる最近の改良方法及び利器を應用し、農事試驗の成績を利用し、最も經濟的に我が農業を經營し、巧みに實利を收めて、眞に我が農家の模範たるに背かざるものをいふなり。かゝる農場を先づ以て本邦樞要の地數箇所に設け、漸次これを道各府縣臺灣及朝鮮に及ぼし、各地の農家をして親しく實地につきその施設するところを見せしむるにあり。凡そ耳にて聞くより眼にて見る方の判り易きは、所謂百聞は一見に如かざる諺の如し。農家自身にて、この模範農場に來り、そのなすところを視察するに於ては、現在の農事試驗場を參觀するより必らず興味と實益とを感ずること深かるべく、隨つてその出入は頻繁にして、その利益は擧げて算ふべからざるべし。理を以て說明するに困難なる農家も、利を以て勸誘する時は存外容易に改良の效を奏するものなり。

我輩は模範農場の設置を希望すること、こゝに年あり、しかも未だその實施を見る能はざるは、頗る遺憾とせしところなるが、最近米國よりの通信によれば、機敏なる米國農務省に於ては、南部諸地方に、デモンストレーション・ファーム（說明農場）を設立せんとすとのことなり。その設置せらるべき地方は、先づ南カロライナ州、ジヨオヂア州、アラバマ州にて、その外テキサス州其他二十八箇所の說明農場を設け、漸次全國に擴張せんとすといふ。米國農務省にてこの事業の實施を擔

當せるスヒルマン教授は「以上の農場は試驗場にあらず、經濟的に農業の實物教授を農家に與へむと欲するにあり」と云へり。

將來經濟上、殊に農業上の到敵たるべき米國人にして我に先んじてこの業に着手せんとす。その盛なる農業が尙一層の發達を來すべきは明らかなり。我輩は、皇軍連捷の快報を祝すると共に、我が國家の基礎にして、その大發展の起原たるべき農業を如何にせば盛大ならしむるを得べきやを考察するは、目下の急務なりと信ず。而して模範農場設置の如きは實に緊急の要務なるを疑はず。

——明治三十七年八月

第四十八話　養豚を奬む

飼養頗る容易にして、よく本邦農家の副業に適し、蕃殖も盛にして、畜養の利益饒多なるは、養豚業に如くはなかるべし。その肉の味は甚だ佳良にして滋養質に富み、需要頗る多く且つその脂肪の用途、內外に普し。吾人は何故に養豚業の今日まで本邦に振はざりしやを怪しむなり。

今や開戰以來、牛肉を初め豚肉鷄肉等の肉類は、その需要頓に增加し、隨つて價格倍々昂騰を告げ、昨今にては、牛肉の價一斤六十五錢、豚肉は同二十七八錢の珍直を示し、實に古來未曾有の高價となれり。元來、本邦牛の肉味は最も美良なれども、その價の高きは、世界にその比を見ざるとこ

ろにして、これ主として牛數の寡少なるに基因するなるべし。この狀況にて需要倍々增加する時は普通の蕃殖方法にては、假令戰爭の俄かに終局を告ぐることありとも、今後到底供給は需要に應ずる能はざるべく、勢ひ海外より輸入を仰がざるを得ざるに至らむ。況んや戰役の前途、なほ遼遠ならむとせる今日に於てをや。

然るに、牛の蕃殖力に比すれば、豚の蕃殖生長力は、非常に迅速にして、牛は、今より官民擧つてこれが蕃殖に力を致すとしても、急に三五年間に多數を蕃殖せしむる能はざるに反し、豚の蕃殖力の旺盛なる、一番の豚より五年間によく一百萬頭の蕃殖をなさしめ得る計算あるが故に、今より盛に養豚の業を振作して、需要激增せんとする肉類の供給を充し得るは決して難事にあらざるべし。

無爲座食、閑散安靜なる生活を送る場合には肉食の必要もなかるべきが、或は從軍して晝夜分たぬ劇務に從ひ、或は生存競爭上活潑に精神及び肉體を勞苦するものには、肉食の必要なること論を俟たず、今後の日本人は大いに肉食を要する國民たらざるべからざるなり。然らずんば、永く東洋の覇者として列强に位すること覺束なかるべく、國民の糧食供給の大任ある農家は、今後進んで大いに牧畜の業に從ひ、食肉毛皮の產出を盛んにし、併せて肥料の供給を豐かならしめざるべからず。

見よ、かの國威隆々として宇內を睥睨する北米合衆國の如きは、昨明治三十七年、卽ち千九百四年に於ける小麥、玉蜀黍、馬鈴薯、棉花、燕麥、大麥、乾草、苹果等の重要農作物の收穫高は、これを價額にして約六十五億五千六百餘萬圓なるに對し、同年間に於ける畜產物の價額は約六十三億九千八百餘萬圓なるを。更にその內容を見るに、豚はその數五千餘萬頭、一頭十二圓三十八錢の相場なるが故に、この價額合計六億二千六百餘萬圓、乳牛は千九百餘萬頭、價額十億六千四百餘萬圓（一頭の相場五十四圓七十八錢）、肉牛及耕牛等は五千二百萬頭、價額二十億三千六百餘萬圓（一頭の相場三十九圓二十錢）、綿羊四千三百餘萬頭、價額二億二千餘萬圓（一頭の相場五圓十六錢）、馬匹千九百餘萬頭、價額二十四億五千二百萬圓（一頭の相場百二十七圓六十錢）なりとす。

豈羨やむべく驚くべき巨額ならずや。然れども、今、俄かに牛馬羊豚を蕃殖せしめんがため、大規模に外國風の牧場を開設することは、我が國情から見て容易に行はれ難きところなれば、差し當り農家の副業として家毎に少數の養豚をなさしむること、恰かも臺灣又は沖繩縣下に於けるが如くするは甚だ容易な業にして、實際上何等の障礙もなきことなれば、各地にて奬勵されんことを望むものなり。

或は曰く、一時に各地に於て養豚を奬勵する時は、他日供給が需要を超過し、その始末に大困難を來すこと生ずべし。殊に養豚熱は我が國にては已に三十餘年前より時々現れ來り、その都度

多少の失敗者を生ぜしめたれば、今これを盛に奨勵せば、必らずや先年の二の舞を演ずるに至るべし」と。これ一應道理ある如く聞ゆれども決してさにあらず。先年來時々養豚熱流行して、倒産者を生じたるは、もと肉用又は脂肪用を主とし、併せて肥料用にする目的を以て養豚をなせるにあらずして、單に一時の流行に逐はれたる、恰かも兎、鶏、萬年青の流行と一般にして、その毛色とか眼色とかとるに足らざる點のみに重きをおき、非常なる高價を以て賣買せるに過ぎざる一種の投機熱に過ぎず。焉んぞ、これを以て將來有望にして最も必要なる給肉の事業を抑ゆることを許さんや。況んや豚肉の需要は海外に於ても頗る盛にして、その價額は往々牛肉の上にありとす。殊に我が國にては、豚肉を生肉のまゝにて調理すれども、海外にてはこれを鹽藏又は燻製等にすること多く、且つ燻製品は高等の食物にしてその需要最も廣く、價格極めて貴し。

今日我が國にても燻肉の製造さるゝものありて、その質も仲々上等なれども、産出高極めて僅少なるが故に、外國品の輸入、年々多きは甚だ遺憾なり。今後養豚等の興るに從ひ、盛に燻肉を製造し、又は鹽藏をなし、これを遠地に輸出するに於ては、平和克復の曉に於ても決して販路に窮する如きことなかるべし。然れば、將來に於ては、或は必要上、廉價なる濠洲産又は南米産等の牛肉を輸入するの已むを得ざる時期あらんも、我より豚肉を輸出してこれに代ふるを得べきが故に、さまで痛痒を感ぜざるべし。

この他養豚業より生ずる利益は枚擧に遑あらず、今日こそ、實にこの有望有利にして大切なる事業を奬勵すべき絶好の機會なり。大方の贊同を求めて擱筆す。

——明治三十八年五月

第四十九話　老人奮起論

平和確立後に於ける我が國の社會にありては、各方面の人々が從來より數層勤勉奮勵せざれば我が巨億の國債を負擔し且つ國力の發展を見ること難かるべし。我が國人の平日の動作を歐米の先進國人に比すれば、大いに遜色あるは甚だ遺憾とすべきところ多し。殊に米國人の活動振を見るに、勞働者は勿論、總ての業務に從事する人々、何れも活活潑潑たり。これ、米國が近來大進歩を來したる所以にして、我が國人の範とせざるべからざるところなり。抑〻人生は働けば元氣旺盛となり、怠れば活力減耗するが自然の法則なれば、活動する人々より成れる社會は繁榮し、然らざるものは衰退するは已むを得ざるなり。

今や、世界の視聽は我が國に漸く集中して戰後の發展如何を知らんとしつゝあるに際し、吾人は我が國人早老の弊を矯め、その比較的多く有せる經驗と智識とを應用して、その業務に永く死するまで從事せんことを望む。蓋し、これは當人の利益にして、將又國家經濟上の洪益なるが故なり。此頃吾人の接手したる米國雜誌に左の記事ありたれば、略載して我が國の年老いずして

翁と稱し、働き盛りにして隱居する人々に示さむとす。

カンフイールド教授は、實業及び實務に當れる老人につき、說をなして曰く

「その職より退隱するに當り、善事の爲に退隱する外、隱居する機會は何人にもあるなし。老年は、成功又は有用なる仕事より人の働きを遏むものにあらず。有名なるマーシヤルフイールド氏は、今や七十歲にして世界最大の店舖の主人となり、その活潑なること恰かも二才駒の如し。シオドルカイラ氏は有名なる說敎者なるが、八十三歲の老軀を提げて五十歲位の人の如く快活雄辯に說敎を續けつゝあり。三十八年間米國高等法院の椅子を占有せる判事ジョンハーラン氏は今や七十二歲なるが、その元氣は壯者を凌ぎて、今後少くも尙二十年間その職に堪へ得るが如き觀あり。檢事總長フルラ氏も亦七十二歲なるが、壯健快活、毫も老者の態を現はさず。チヤールス・ハスウエル氏は九十六歲にして今なほ紐育市土木局に顧問技師の職を奉ぜり。著名なるラツセル・セーヂ氏は、九十歲にして日每に賣買に從事せるが、その狀恰かも氏が、日用パンを購はんがために勞働して金を得んとせるが如し。」

以上の實例により、カンフイールド氏は次の如く結論せり。

「人は七十歲になりたる後もその職務に適當するのみならず、死に至るまで勤勞することを喜ぶものなり」。

吾人はカンフイールド教授の說の正當なるを信じて疑はず。もし人にして、その職業を止め、無爲にその日を送るが如き狀態に至らば、これその人は世に益なき廢物にして、寧ろ死し去るに如かず。而してもしその人にして、從來活潑なる勤勞者たりしなれば、その人の多忙なる事業を

退隱するが如きは、壯年の頃何も纏りたる仕事をなさゞりし證左といふべく、老いて壯健なるも何等の役に立たざる人なるべし。

——明治三十八年九月

第五十話　謝恩の說

抑〻人間の力には限りありて、何から何までその欲するがまゝにはならぬものなり。かるが故に、かの報德の主義を主張せられたる吾人の尊敬措かざる大人物二宮尊德翁の如きも、常に人事を盡して天命を待つべきを唱道せられたり。假令何程學術の進步發達せる國々にても、人力の及ばざるところは甚だ多く、人間の働きの成果は天祐の多少によりて決すべきもの多し。

吾人勞苦の結果は、何事によらず、人力以外の祐助によりて厚薄ある中にも、農業の如く自然を相手にして、播種、耕耘、收穫する事業に於ては、殊に天祐の如何によりて豐凶あるものなれば、平素勤勉よくその業に勵むと共に、嚴肅なる心を以て皇天の祝福を祈らざるべからざるなり。見よ、如何に農家の播種する種子の精良なるも、その栽培せる苗の良好なるも、又肥培耕耘法の到り盡して收穫の豐稔を豫期すべきものあるも、一朝狂風猛威を逞しうするに當りては、忽ちにして週歲の勤勞苦心水泡に歸し去るを常とす。世間幾多の事業中、最も健全、安康、確實なるは、農業なりとするも、しかも氣象その序を失ふ時は、他の播種其他百般の事柄に於て完美せるも、決して收穫

を望むべからざることは、往古より史上に散見するところなり。

害蟲の發生によりて作の害はれたるがため饑饉の起りたる如き、農業の未だ發達せざる地方又はその時代の出來事にして、之等は人智の開發により、よく阻遏することを得べきも、氣候の激變又は不時の霜雹害の如きは、今日の學術發達の程度にては、これを豫防する能はず。吾人はこれまで內外諸國に於ける饑饉の慘狀悲境を閱讀する每に、眞に慘鼻の情に堪へざるものあり。

此を思ひ彼を意へば、我が國が近年全國を通じて凶作の著しきものなく、殊に昨年及び一昨年の如きは、有史以來最も大切なる年柄なりしに、異常の豐作を得て、國民の意氣大いに擧り、內、農家の繁榮を促し、これを基礎として商工鑛業等百般の事業大いに振ひ、外、世界の最強國と稱せられたる露國に勝ち、大いに國光を宇內に輝かして國家の位置を高うしたるは、要するに前二年間に、天祐頻りに我が國に加はり、先づ農作の豐穰を得たるに起因せりといふべし。

これに反して、もしこの二箇年間凶作に終りたらんか、國民、ために鬪志なく、意氣阻喪して、初めより於女々々と露國の脅喝に涙ながら屈從し終りたるか、又は半途にして敗北を招きたるやも知るべからず。それ、我が軍人の如何に忠勇無比にして智力を盡すも、萬一內に凶作ありて、その糧食を補ふこと能はざるのみか、これがため、本國にある最愛の妻子は飢に泣き、路頭に迷ふの慘狀にあるを聞かば、如何に君國のため一身を犧牲となす武夫も、永く健鬪する能はざる悲運に遭

遇せしならむ。今にして過去二年間の天祐の、我が農界のみならず、海陸の戰場に於て最も我に厚かりしことを回想する毎に、吾人は信に感謝の念に堪えざるなり。

今や日露の役も終結して、平和こゝに克復し、我が農業の隆盛を慮るべき秋に際し、滿腔の熱誠を捧げて、既往に於ける天祐の厚きを神明に感謝すると共に、更に謹嚴の心を以て農界將來の祝福を祈るべきは、我が淳朴なる農家のなすべきことなりと信じ、敢てこれを農界の諸君に勸めんと欲するものなり。我が國民の最も尊敬し奉る、至仁至愛の

今上陛下には、その著しき功績と美名を宇内に轟ろかせし東郷大將に命じ給ひ、その凱旋に先立ち、先づ伊勢の大廟に參拜して神助の洪恩を感謝すべきの勅諚あり、亦

陛下おん自らも近々に御參拜あらせらるゝやに拜聞し奉れり。

陛下の御聰睿御高德は、今更申すも畏れ多きことながら、これ誠に神授とも申し奉るべきにして、かゝる明君を戴く我等臣民たる者、亦等しく

聖主に對へ、嚴肅にこの敬虔なる信念を持し、その本分を盡すを怠るべからざるなり。我が國の祭日中、神嘗祭は農家の大いに感謝の意を表すべき祭日にして、當秋稔りたる瑞穗を收め、これを伊勢の大廟に捧げ奉り、以て當年神靈の冥助により收穫を得たるを感謝し、併せて農民の殷富を祝するを常とせり。然るに世人のこれを知るも、その多くは意を深くこゝに致さず、吾人の私

かに怪しむところなり。

歐米諸國にては、謝恩日（サンクスギヴィング・デー）と稱し、毎年十一月二十三日に、我が神嘗祭の如き農家の祭日あり、この日は人々一般に天恩に感謝せんがために擧行する祝祭にして、その賑々しくしかも謹嚴なること、我が國民の思ひ及ばざるところなり。吾人は忠實なる農家が、今後深く謝恩の日を記念して、大いに皇天に謝すると共に、その祝福を祈り、併せて益々精勵且つ愼重、その本分を盡さんことを望む。

——明治三十八年十一月

年譜

皇紀	西暦	年號	年齢	
二五一九	1859	安政六年	一	六月二十五日江戸牛込仲町ニ生ル
二五二三	1863	文久三年	五	四月二十二日父源四郎逝去
二五二七	1867	慶應三年	九	一家駿州藤枝ニ移ル
二五二八	1868	明治元年	一〇	藤枝ヨリ沼津ニ移ルヽ沼津城内ナル代戯館ニ入學ス
二五二九	1869	二年	一一	八月二十四日母ゆう女逝去ヽ祖母りき女ノ薫陶ヲ受クヽ代戯館、城内ニ新設ノ兵學寮附屬小學校トナル
二五三〇	1870	三年	一二	八月兄昌邦、室政子ヲ娶ルヽ附屬小學校、靜岡藩小學校トナル
二五三一	1871	四年	一三	靜岡藩小學校、沼津小學校ト改稱ス

二五二	二三五二	一四	一家、靜岡縣中澤田村ノ士族長屋ニ移轉ス
二五二	三三五二	一五	一月學制ニ基キ沼津小學校ヲ小學集成舍ト改メ、初メテ公立小學校トナル▽二月同校ニ特設サレタル小學校變則科ニ入學ス
二五二	四三五二	一六	初メテ外國人ニツキテ英語ヲ學ブ
二五二	五三五二	一七	一月一家出京、殘留シテ江原素六ノ金岡村塾ニ學ブ▽三月出京▽四月東京英語學校入學
二五二	六三五二	一八	七月東京英語學校卒業▽同月札幌農學校入學試驗ニ合格シ官費生トナル▽七月末玄武丸ニテ渡道ス▽八月十四日札幌農學校入學
二五二	七三五二	一九	七月四日創立一週年紀念講演會席上英語演說ヲナス▽八月米國宣教師M・C・ハリスヨリ洗禮ヲ受ク
二五二	八三五二	二〇	七月三日大試驗終了式席上英語演說ヲナス
二五二	〇四五二	二一	七月十日札幌農學校卒業、本邦最初ノ農學士トナル▽同月開拓使御用掛拜命、民事局勸業課詰トナル▽十月飛蝗被害地調查ヲ命ゼラレ、驅除法草案ヲ作成シテ採用サル

二四五一	1881	十年四	二三	太政官ヨリ交附ノ經費四萬圓ヲ以テ害蟲驅除ノ任ニ當リ四年計畫ニテ遂ニコレヲ殲滅スヽ十月北海道勸農協會設立ヲ提唱シ官民ノ贊同ヲ得テコレヲ創設、自ラ幹事トシテ活動ス
二四五二	1882	十年五	二四	三月開拓使廢止ト同時ニ札幌縣御用係ヲ拜命、勸業課詰トナル
二四五二	1883	十年六	二五	埼玉縣士族相田新助ノ五女香芽子ヲ娶ル
二四五二	1884	十年七	二六	七月願ニ依リ札幌御用掛ヲ免ゼラルヽ九月農商務省御用掛ヲ拜命シ北海道事業管理局事務取扱トナルヽ十二日英國倫敦ノ萬國發明品博覽會事務官長安田定則ノ隨員トシテ渡英ヲ命ゼラルヽ長男雅太郎出生
二四五二	1885	十年八	二七	一月倫敦萬國發明品博覽會事務官補兼農商務省博覽會事務取扱ヲ命ゼラレ且ツ文部省ヨリ英國農學校ノ調査方ヲ委囑サレ文部省御用係ヲモ兼務スヽ三月渡英スヽ同博覽會ヨリ功勞賞ヲ授與サル
二四五二	1886	十年九	二八	博覽會終了後歐洲農界ヲ視察シ、四月米國ヲ經由シテ歸朝スヽ八月茨城縣立水戸中學校長兼一等教諭ニ任ズ
二四五二	1887	二十年	二九	長女花子出生
二四五二	1888	二十一年	三〇	五月茨城縣師範學校長ニ任ジ、縣學務課長ヲ兼務、公私立小學校教科用圖書審査委員長及習字本編輯委員長ヲ命ゼラル

二五二	1889	二十二年	三一
九四			
六月茨城縣師範學校長ヲ辭ス▽十一月大日本農會特選幹事ヲ命ゼラレ、同會農藝委員ヲ委囑サル▽次女春惠出生			
二五二	1890	二十三年	三二
〇五			
三月第三回內國勸業博覽會審査官拜命▽平岩愃保氏ノ請ニ依リ東洋英和學校ニ教鞭ヲ執ル			
二五二	1891	二十四年	三三
次男次郎出生			
一五二	1892	二十五年	三四
一月大日本農會常置議員ニ當選ス▽五月赤坂區會議員ニ當選ス▽十月東京興農園ヲ赤坂區溜池五番地ニ創設ス			
二五二	1893	二十六年	三五
五月東京農學校評議員ニ選任ス▽東京基督教青年會理事ニ選任ス▽日本園藝會評議員ニ選任ス			
三五二	1894	二十七年	三六
十月月刊「興農雜誌」ヲ創刊ス▽十二月大日本農會北白川會頭宮殿下ヨリ綠白綬有功章ヲ授與サル▽東京興農園札幌支店ヲ設置ス			
四五二	1895	二十八年	三七
一月東京農學校教務委員ヲ委囑サル▽三月東京府荏原郡駒澤村ニ東京興農園試驗場ヲ設ク▽四月麻布中學校教頭ニ就任ス（七月辭任）▽九月東京中學院院長ニ就任ス▽大阪硫曹株式會社顧問トナル▽三男三郎出生			
五二	1896	二十九年	三八
一月札幌ニ東京興農園果樹園ヲ設ク▽二月東京地方森林會議々員ニ選任ス▽同月大日本農學講習會ヲ創立シ、農學講義錄ヲ創刊ス			

二七五五	1897	十三年	三九

一月東京農學校、榎本子ヨリ大日本農會ニ讓渡サレテソノ附屬校トナルニ際シ、移管ニ關スル調査及整理委員トナリ、更ニ同校商議員ニ選任ス▽三女優子出生

二七五五	1898	一十三年	四〇

三月農商工高等會議臨時議員ヲ命ゼラル▽十月第三代赤坂區會議長ニ選任ス

二七五五	1899	二十三年	四一

五月東京市會議員ニ當選ス▽四女愛子出生

二七五六	1900	三十三年	四二

四月大日本農會小松總裁宮殿下ヨリ紅白綬有功章ヲ授與サル▽日比谷公園造營委員會委員トナル▽九月東京中學院、東京學院ト改稱シ依然院長タリ▽十一月米國及加奈陀ニ於ケル農事視察ノタメ渡米ス▽東京興農園札幌支店ヲ札幌興農園ト改稱ス

二六五二	1901	一四十三年	四三

一月赤坂區會議長ヲ辭任ス▽七月大日本農會附屬東京農學校ヲ同會附屬東京高等農學校ト改稱ス▽五女里子出生

二六五二	1902	二五十三年	四四

六月東京市區改正委員、同常務委員、東京市養育院委員及東京築港調査委員ニ就任ス

二六五二	1903	三六十三年	四五

東京學院院長ヲ辭任ス▽東京府下澁谷町ニ東京興農園澁谷支店ヲ設置ス▽靜岡縣田方郡西浦村久連ニ柑橘園及東京興農園農場ヲ設ク▽日本園藝會評議員ヲ辭ス

二六五四	1904	三七十三年	四六

八月東京市參事會員ニ當選ス▽十二月東京築港調査委員ヲ滿期辭任ス△四男昌勝出生

二五六五	1905	三十八年	四七
二五六六	1906	三十九年	四八
二五六七	1907	四十年	四九
二五七八	1908	四十一年	五〇
二五七九	1909	四十二年	五一
二五七一	1911	四十四年	五三
二五七二	1913	大正二年	五五
二五七四	1914	三年	五六

六月東京市會議員ヲ辭ス▽智利硝石普及會東洋本部顧問トナル

五月利源調査委員トシテ滿鮮各地ヲ視察ス▽日本平和協會幹事長ニ就任ス

四月「興農雜誌」ヲ廢刊ス▽七月信州戶隱山ニ高山植物種苗ノ大採集ヲ行フ▽十月大阪硫曹株式會社顧問ヲ辭シ、關東酸曹株式會社顧問ニ就任ス▽五男成美出生

一月赤坂區學務委員長ニ就任ス▽四月日本大博覽會東京市博覽會局長ニ任命サレ、同時ニ東京市參事會員及赤坂區會議員ヲ辭任ス▽十一月同博覽會中止ト同時ニ局長ノ職ヲ辭ス

二月三度赤坂區會議員ニ當選ス▽六月渡米實業團員トシテ渡米、米國、加奈陀及墨西哥方面ヲ視察ス▽十一月東京興農園主催農產物品評會ヲ開催ス▽東京興農園本店ヲ赤坂分店トシ、同澁谷分店ヲ本店トス

十一月東京高等農學校、東京農業大學ト改稱ス

十月農商務大臣ヨリ功勞賞銀牌ヲ受領ス▽臺灣總督府ニ對シ臺南州善化里西堡茫萊宅ノ官有原野六百甲歩ニ係ル豫約拂下ヲ出願ス

六月大隈首相及大浦農相ノ招集シタル全國實業家大會ニ出席ス▽七月歐洲大戰起ル▽十月大日本農會伏見總裁宮殿下ヨリ銀杯ヲ下賜サル▽同月東京市長ヨリ金杯ヲ贈ラル▽十二月大日本農會伏見總裁宮殿下ヨリ紫白綬有功章ヲ授與サル

二五七五	1915	四年	五七
十一月東京市長ヨリ銀製花瓶ヲ贈ラル			
二五七六	1916	五年	五八
六月大日本農會社團法人組織トナリ理事ニ選任ス			
二五七七	1917	六年	五九
十一月赤坂區會議員ヲ辭任ス			
二五七九	1919	八年	六一
十月埼玉縣北足立郡神根村ニ山林畑地約一萬一千坪ヲ購入シ、コレヲ苗圃トシテ經營ス			
二五八〇	1920	九年	六二
三月室香芋子外遊ス			
二五八二	1923	十二年	六五
九月關東大震災ノタメ赤坂溜池東京興農園分店烏有ニ歸シ、後間モナク同分店ヲ廢スヽ小坂順造氏ト連帶名義ニテ臺灣總督府ニ對シ高雄州鳳山郡燕巢庄ノ原野二百甲歩ニ係ル豫約拂下ヲ出願ス			
二五八四	1924	十三年	六六
一月香港、廣東ヨリ臺灣ニ渡リ、農場及各地農況ヲ視察スヽ大日本農會理事ヲ辭任ス			
二五八五	1925	十四年	六七
五月東京農業大學、大日本農會ノ經營ヲ離レテ財團法人トナリ、大學令ニヨル大學設立ヲ認可サル			

二五八六	
1926	
年五十	
六八	

五月東京興農園ヲ株式會社組織トス▽同月喉頭癌ノ大手術ヲナス▽十一月八日昇天

譜系氏瀬渡

系譜

渡瀨氏源姓（家紋桐桔梗）

- 清和天皇
  - 帝在位十八年傳位於皇太子爲大上天皇
  - 帝美風儀端嚴如神性寡言語好讀經史
  - 皇太子受禪於染殿第是爲陽成天皇
  - 諱惟仁年九歲卽位
  - 母皇太后太政大臣良房之女諱明子稱染殿后
  - 元慶四年清和帝崩壽三武一歲葬於山城國愛宕郡上粟田山
  - 貞純親王
    - 醍醐天皇御宇延長十六年四品貞純親王薨清和帝第六子世稱日桃園親王
    - 滿仲
      - 長德三年一條天皇御宇前鎭守府將軍源滿仲清和帝曾孫六孫之子也
      - 通武藝又和歌致仕居攝津多田卒年十八
      - 賴義
        - 永保一年前鎭守府將軍賴義卒年八十八
        - 永承中征安倍頼時及子貞任攻戰陸奥平定
        - 賴信
          - 承保二年前鎭守府將軍
          - 左馬之助
          - 天德二年皇孫經基王薨清和帝第六子世稱日六孫王勇而有謀便弓馬天慶之亂從小野
          - 經基王
            - 脾右討賊純友有功歷任諸國㕝守府將軍後賜其子孫姓源蒙世任將師圖賞日清和瓊林一枝賜源姓分源滋旗幟成尙色皇爪牙鬢々
            - 左馬之助賴信子性沈勇果斷有得師之器少時從于父討平忠宗有功防東將士多屬焉

義國　近衛天皇御宇源義家三男義國居下野尻刺別業是多新田兩家之祖也

義家　義家每擧軍事設甲乙席勇怯分座俯亦異之以勵戰功云〻

義重　新田大炊介　治承四年秋八月源義重據寺尾城義重義家之嫡男孫新田氏官大炊助初不從頼朝後從之

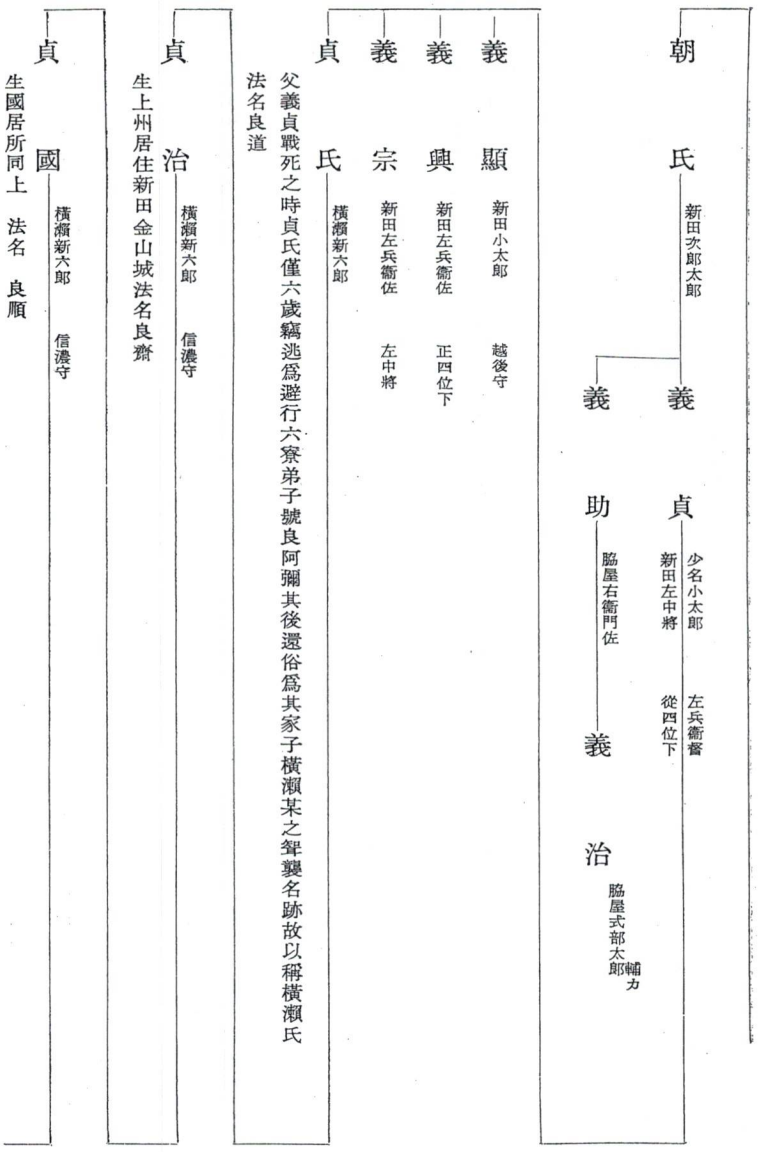
義兼　新田藏人

義房　新田太郎

政義　新田太郎　號由良

政氏　新田太郎

基氏　新田又太郎


朝氏
新田次郎太郎
義貞
少名小太郎
新田左中將
左兵衛督
從四位下
義助
脇屋右衛門佐
義治
脇屋式部太郎
輔力
義顯
新田小太郎
越後守
義興
新田左兵衛佐
正四位下
義宗
新田左兵衛佐
左中將
貞氏
橫瀨新六郎
父義貞戰死之時貞氏僅六歲竊逃爲避行六寮弟子號良阿彌其後還俗爲其家子橫瀨某之聟襲名跡故以稱橫瀨氏
法名良道
貞治
橫瀨新六郎
信濃守
生上州居住新田金山城法名良齋
貞國
橫瀨新六郎
信濃守
生國居所同上
法名
良順

國繁　橫瀨新六郎　信濃守
生國住所同上

景繁　橫瀨新六郎　左衞門佐　信濃守
生國居城同上

國經　橫瀨新六郎　左衞門佐　信濃守
生國居城同上武州須賀合戰之時討死法名宗功

泰繁　少名　新六郎　橫瀨雅樂頭　信濃守
生國居所同上父國經討死之時萬松院義晴公賜御書天文十四年乙巳九月九日歿法名宗虎

成繁　橫瀨新六郎　雅樂頭　信濃守
由良刑部少輔
生國居所同上
將軍光源院義輝公賜御敎書之時被稱由良刑部少輔顯本名由良屋形上州國司上杉輝虎佐竹義重等出張之時羽生黑河沼田等所々與北條相模守氏政合戰于時成繁城堅守故輝元等引退討捕三百餘人氏政之感狀五通有之又輝虎赤垣陣之時成繁父子有軍功光源院殿爲三好氏被弑時義昭公遣使於於關東賜密書於成繁可抽軍忠之由也

天正六年戊寅六月晦日歿法名鳳仙寺殿守山宗得大居士

繁顯 金井五郎

後世補入
金山ノ由良刑部入道宗得嫡男信濃守國繁ヲ始子息達一族宿老ノ面々ヘ遺言セラレケルハ當家新田大炊介義重入道上西以來ノ居城ハ寺尾亦ハ德川ナリ岩松治部大輔直國ノ四世兵庫頭明純始テ當金山城ニ城ヲ築カレシヨリ今ニ數代安堵ス山上池有テ飲水ニ渴スルコトナク林薪乏カラズ要害ハ渡瀨川ヲ東北ニ拘ヘ利根川ヲ南ニ受無雙ノ良城ナルヘシ 關八州右

顯長 長尾但馬守 長尾修理亮景養子

女 信州小笠原氏室

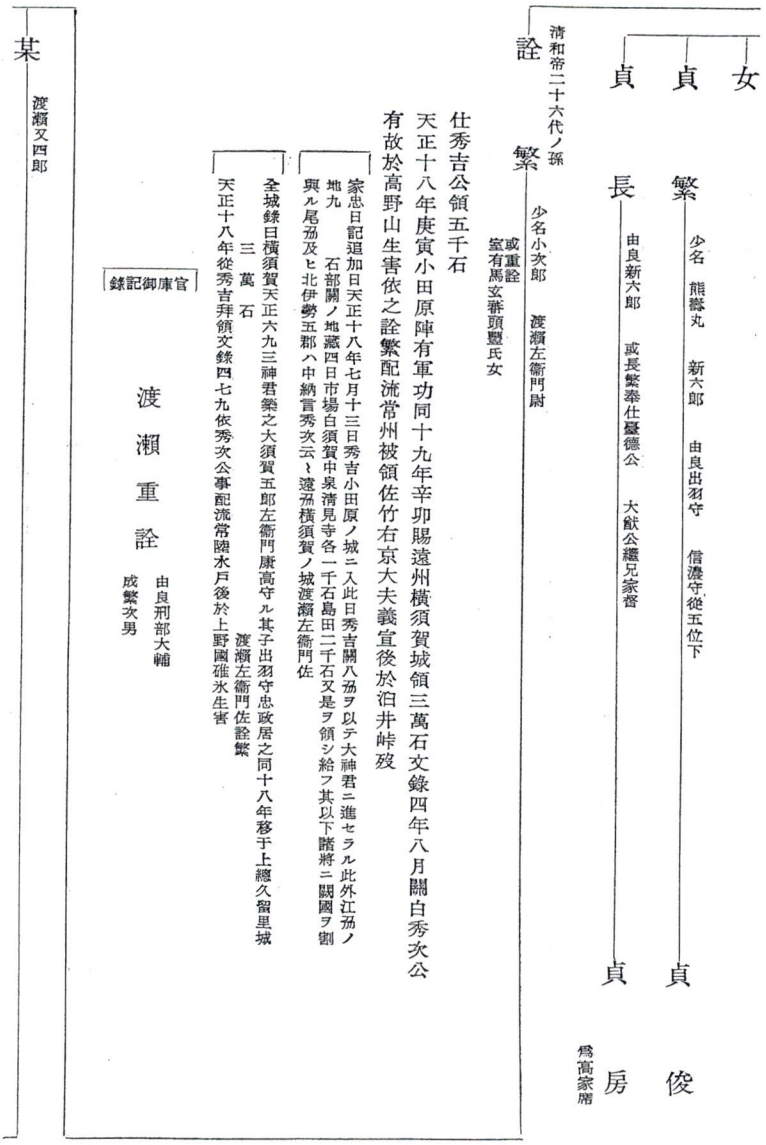
國繁 少名國千代 由良雅樂頭 信濃守 式部少輔

室結城左衛門尉晴朝女 實長沼領主皆川山城守藤原廣照女

天文十九年庚戌於上州金山與上杉輝虎合戰有戰功
天正二年甲戌四月出相生之時國繁守城能防故輝虎退去北條氏政賜感狀
同十八年庚寅小田原沒落以後屬太閤秀吉公賜常州之地叔從五位下任式部少輔其後奉仕
大神君慶長五年庚子關東歷上杉景勝同七年壬寅五月八日佐竹氏國替之時守常州水戶城同十六年辛亥正月二日歿時六十二歲法名良

入道宗得之後室ハ國繁顯長繁詮同胞ノ母堂ニテ心猛ク發明ナル女性ナリ云々北條氏政氏直ノ從士氏照氏邦等五千餘騎ヲ引ヒ金山ヘ寄ル時太田口ハ渡瀨右衛門佐繁詮橫瀨勘太郎大將トシテ防禦ス云々 關東古戰錄

氏繁 少名六郎 由良民部少輔



仕秀吉公領五千石

天正十八年庚寅小田原陣有軍功同十九年辛卯賜遠州横須賀城領三萬石文錄四年八月關白秀次公有故於高野山生害依之詮繁配流常州被領佐竹右京大夫義宣後於泊井峠歿

家忠日記追加日天正十八年七月十三日秀吉小田原ノ城ニ入此日秀吉關八州ヲ以テ大神君ニ進セラル此外江州ノ地九　石部關ノ地藏四日市場白須賀中泉清見寺各一千石島田二千石又是ヲ領シ給フ其以下諸將ニ闕國ヲ割與ル尾州及ヒ北伊勢五郡ハ中納言秀次云ヽ遠州横須賀ノ城渡瀬左衛門佐

全城錄曰横須賀天正六九三神君樂之大須賀五郎左衛門康高守ル其子出羽守忠政居之同十八年移于上總久留里城　三　萬　石　渡瀬左衛門佐詮繁

天正十八年從秀吉拜領文錄四七九依秀次公事配流常陸水戸後於上野國碓氷生害

官庫御記錄

渡瀬重詮　由良刑部大輔成繁次男

父詮繁爲流人依兄弟倶流浪依乳父介抱來住遠州渡瀨邑

某　渡瀨源左衞門
　　又四郎子

某　渡瀨源左衞門

某　渡瀨庄右衞門
　　妻遠江見付天神神主齋藏越後女　法名光照院誓譽信女
　　享保十六年辛亥正月五日死

　　遠州住石田村爲鄉士享保六年卒　四日死

某　渡瀨庄兵衞
　　妻　松平大和守醫師望月善賀娘
　　法名　學連院慈達信女　寶暦七年丁巳八月沒

　　松平大和守ニ客分トテ奉仕シ千五百石ヲ宛行ル後年故アッテ退去シ浪人トナル

　　享保二十年乙卯閏三月九日死　法名夏雲院却外是春信士

某　三浦理太夫

某　若林彦八郎

女　法名　肪靈院月心理用信女
　　延享元年七月廿二日死

女　成見
　　法名　養善院仰譽値法尼

歳十三ノ時ヨリ紀伊家大奥ニ宮仕シ後姫君ノ傳トナリ松平越前守嫁娶ノトキ隨ヒ行老女ト成リ奉仕シ姫逝去ニヨリ尼トナリ退隠シ寛政十二庚申年七月廿九日歿四ツ谷酉應寺ニ葬ル此尼公幼ヨリ渡瀬ノ家ヲ中興セント勤勞辛苦セラレ寛政九年十二月神山藤兵衛勝秀ノ外孫生嶋彌藤太末子知宣ヲ養テ子トシ娶スニ甥若林仁左衛門娘春女ヲ以シ御徒方ノ衆ニ召出テ渡瀬氏ヲ中興アリ　依テ此尼公ヲ渡瀬中興ノ祖ト尊崇スヘキ也

渡瀬兩家ノ祖

知宣　庄兵衛　庄右衛門
生嶋彌藤太四男
妻成見尼公ノ甥若林仁左衛門女

成見尼公ノ養子トナリ寛政九年丁巳十二月後徒方ニ召出サレ文政三年二月御徒組頭ニ轉シ百五拾苞ヲ賜ハル天保十一年庚子三月病ニ依テ役ヲ免シ無役トナリ源四郎昌俊ヲ養子トシ娘喜武女ニ娶セ家ヲ繼カシム勤功ニ依テ終身七十俵五人扶持ヲ賜ハレリ天保十四年癸卯九月廿五日歿ス法名寶海院知宣弘誓

宣靜　始知儀　庄次郎　龍之助
妻佐々木三右衛門女

文政八年御徒方見習勤ニ奉仕シ同十二年十月父ノ勤功藝術出精ニ依テ新ニ御徒ノ衆ニ召出サレ別家トナル是ヨリ渡瀬兩家トナレリ安政五午年三月御徒組頭ニ轉シ百五拾苞ヲ賜ハル萬延元庚申年八月十九日歿ス法名寶晃院宣靜深心

孝房　與一郎　六兵衛
宇津木氏ヲ繼

知顯　覺之助
平源氏ヲ襲

信衆　健一郎
實完戸市右衛門三男

女 宣靜女 信衆妻

昌俊 源四郎 實池田錄助四男知宣聲養子トナリ其遺跡ヲ襲 妻竹田伴内女

天保十亥年御徒方見習勤ニ奉仕シ同十一子年三月御徒方ニ召出サレ安政四巳年八月日光奉行手附出役文久元酉年九月日光奉行支配吟味役出荷同三亥年五月病ニ依テ役ヲ免シ歸役トナリ同年四月廿二日歿法名昌俊院釋深心淨樂

錆太郎 母知宣女喜武

金四郎 母知宣女喜武

廣太郎 母知宣女喜武

源之助 母知宣女喜武

昌邦 房太郎 母竹田伴内女勇 妻原田鐵之助女政

新六郎 母竹田伴内女

渡瀬氏系譜

- 寅次郎　母竹田伴内女勇　妻相田新助女香芽
- 庄三郎　母竹田伴内女勇　妻中井猛之進姉
- 女勢以　母知宣女喜武
- 女登喜　母竹田伴内女勇

渡瀬寅次郎傳

昭和九年十一月二日印刷
昭和九年十一月八日發行

—非賣品—

編者　東京市澁谷區美竹町三十八　渡瀬昌勝
發行者　東京市澁谷區美竹町三十八　渡瀬雅太郎
印刷者　東京市神田區錦町三丁目十七　白井赫太郎
印刷所　東京市神田區錦町三丁目十七　精興社
發行所　東京市澁谷區美竹町三十八　渡瀬同族株式會社

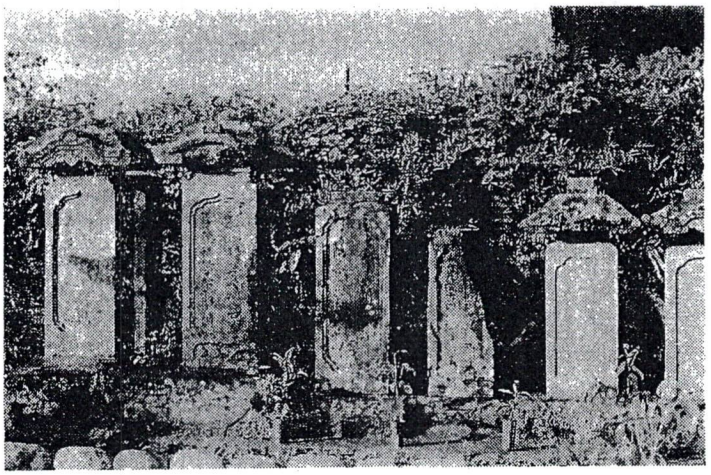
資　　料

— 渡瀬寅次郎傳 —

渡瀬に住みついた横須賀城主の後裔〔渡瀬町〕

市街地の東南部に渡瀬町という町がある。江戸時代の長上郡渡瀬村である。渡瀬という村の名は江戸時代のはじめこの地域を開発した渡瀬四郎又兵衛の名をとってつけたものであるが、この四郎又兵衛は単なる落人ではなく、実に波乱の生涯を送った横須賀城（小笠郡大須賀町）の城主渡瀬左衛門佐詮繁の子であり、遠江の地に定住するようになるまでには、ながい困苦の時代を送ったのだった。そこで渡瀬町の渡瀬家の系譜をひもときながら、渡瀬村（渡瀬町）の歴史をふりかえってみよう。系譜によると、同家の先祖は鎌倉、室町の昔にさかのぼり、室町の末期には渡瀬左衛門佐詮繁の登場をみる。渡瀬の姓は同氏の発生地である上野国（群馬県）山田郡渡瀬の地名をとったものである。戦国期のあるじ詮繁は土豪として活躍したが、やがて豊臣秀吉に仕えるようになり、小田原攻めに参加して戦功をたて、秀吉に目をかけられ、天正十九年（一五九一）九月、大坂（大阪）から横須賀に移され、三万石の城主となった。それより前、秀吉は浜松城の徳川家康を駿府（静岡）に移し、さらに関東に移封させたため、秀吉としては自分の息のかかった詮繁を遠州の横須賀に置いたのである。

その詮繁に破局がおとずれた。豊臣秀次の自刃である。養子秀次が驕暴なふるまいをしたとして秀吉が自刃を命じたものであるが、この背景には実子秀頼が生まれたため、秀次が邪魔になったというお家の事情があった。このとき詮繁は秀次側に加担した一人とみなされ、領地没収のうえ水戸の佐竹家にお預けとなり、そして文禄四年（一五九五）上野国（群馬県）碓氷峠で斬罪に処せられたのである。このとき詮繁には五人の子供がいた。



渡瀬町の浄土宗正授院に苔むす渡瀬家歴代の墓

二人が男子で、三人が女子であったが、流浪の日々を送るうち長男は早逝、三人の女の子も次々となくなり、次男四郎又兵衛だけが残った。四郎は家老にともなわれて信州伊那の里（長野県）にかくれ住み、時の来るのを待った。信州在住三年ののち縁故をもとめて遠州蒲之郷に来住、蒲之郷の一角を拓き、蒲氏の娘を妻にめとり、やがて一村を開いた、それが渡瀬村である。四郎が土に生きた生涯を了えたのは寛永十二年（一六三三）、四十有余歳であった。法名清徳院殿久誉浄世居士。四郎の他界後十二年目の正保三年（一六四五）妻が没した。四郎又兵衛のあと渡瀬家は長男繁道、次男別久、三男次広によって開発がつづけられた。別久と次広の兄弟はそれぞれ独立して一村を構えた。別久村と次広村（両村は現在渡瀬町の一部になっている）である。渡瀬家の初代四郎又兵衛繁元とその妻の墓所は西伝寺になっているが、二代目繁道以後の歴代の墓は渡瀬町正授院にある。

渡瀬雅子氏提供

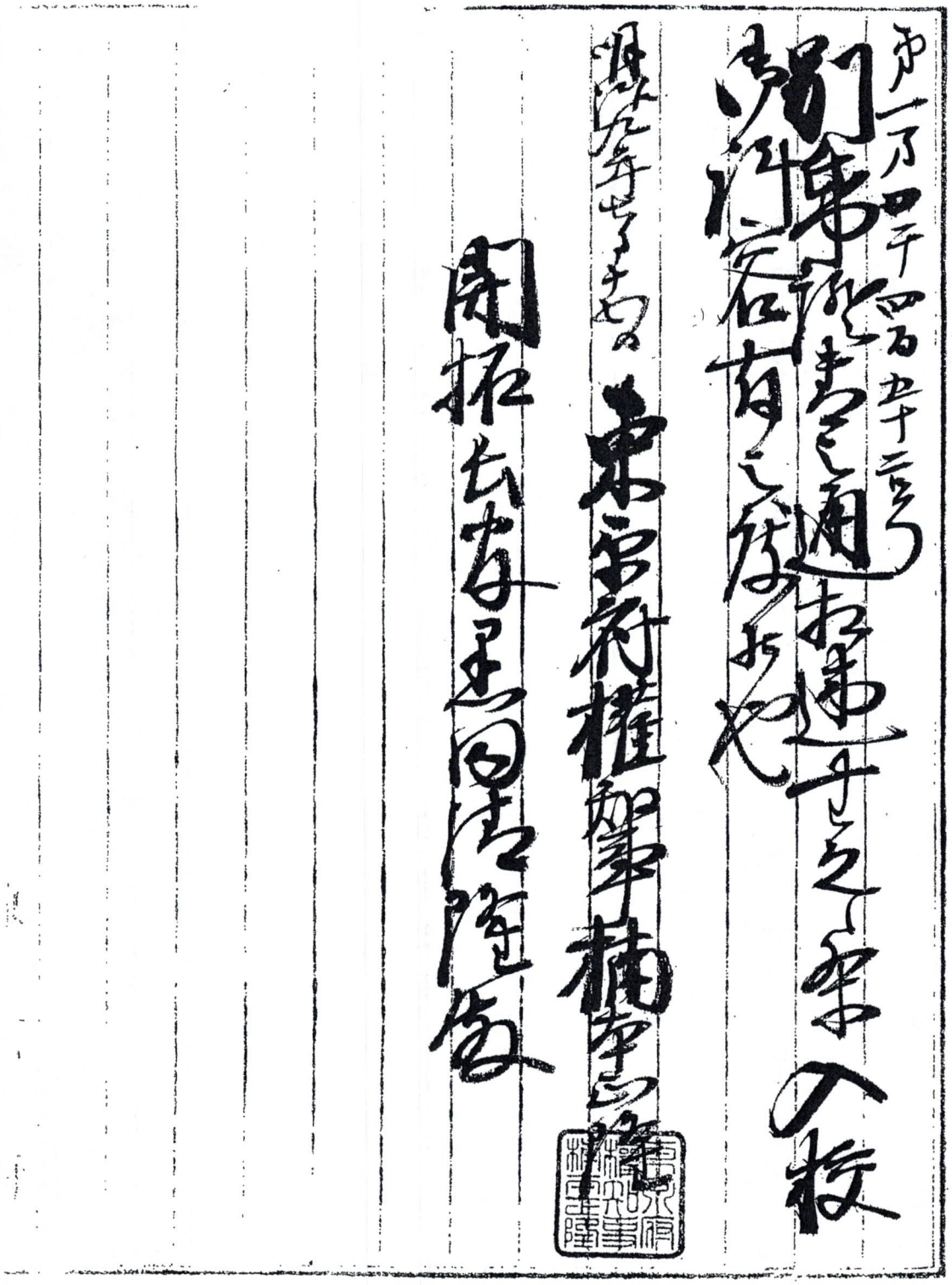
入学願

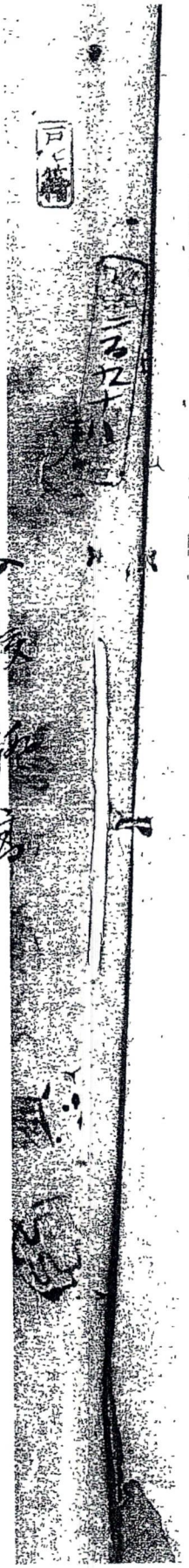
私儀農学志願ニ付相願候就而ハ諸御規則堅ク相守リ勉励可仕候間
査之上御許允被下度候也

宿所第三大区五拾壱小区(静岡五十番地)
静岡縣士族
渡瀬昌邦㊞

明治九年六月七日

開拓使出張所
学校掛リ御中





入校誓約書

今般入校被　仰付候ニ付ハ左之通堅ク可相守事

一　品行ヲ慎ミ不都合之儀無之様可致事

一　入校中之学費壱ヶ月金拾壱円宛之割ヲ以テ即時上納可仕事

一　成業之後ハ北海道ニ編籍シ五ヶ年間侵ニ於テ仕ヘ可キ筈ニ候ヘ共他ヘ籍ヲ移シ候儀願出申間敷事

一　在校又ハ従事中ニ係ル大病等差起候共退校之儀願出申間敷事

一　学校ニ於テ故有テ退校願出候節ハ在校中之学費総生徒之員数ニ割合其一人分ヲ即時上納可仕候事

一 右退校等ニ付ク納入ノ儀ハ一相當ノ猶予願ヒ請人引受ケ速ニ納可仕候事

右之條々聊違背仕間敷候依テ證書如件

明治九年七月十四日

靜岡縣士族 昌幹 弟
生徒 渡瀬寅次郎
第四大區壹小區神田錦町二丁目五番地
東京府平民
請人 竹田義行
第三大區五小區牛込浦町十番地寄留
靜岡縣士族
願人 渡瀬昌幹

陸軍省
海軍省
内務省
大蔵省
文部省
工部省
司法省
宮内省
開拓使
元老院
会計検査院
各府県
各鎮台
各裁判所
各学校
各病院
各監獄
各鎮守府
各造船所
各砲兵工廠
各分営
各出張所
各屯所
各分署
各分遣隊
各分局
各分所
各分院
各分校
各分教場
各分病院
各分監獄
各分造船所
各分

Covenant
of
Believers in Jesus.

The undersigned, members of Sapporo Agricultural College, desiring to confess Christ according to his command, and to perform with true fidelity every Christian duty in order to show our love and gratitude to that blessed Savior who has made atonement for our sins by his death on the cross; and earnestly wishing to advance his kingdom among men for the promotion of his glory and the salvation of those for whom he died, do solemnly covenant with God and with each other from this time forth to be his faithful disciples, and to live in strict compliance with the letter and the spirit of his teachings; and whenever a suitable opportunity offers we promise to present ourselves for examination, baptism, and admission to some evangelical church.

We believe the Bible to be the only direct revelation in ~~language from God to man and~~ the only perfect and infallible guide to a glorious future life.

We believe in one, everliving God who is our merciful Creator, our just and sovereign Ruler, and who is to be our final Judge.

We believe that all who sincerely repent and by faith in the Son of God obtain the forgiveness of their sins will be graciously guided through this life by the Holy Spirit and protected by the watchful providence of the Heavenly Father, and so at length prepared for the enjoyments and pursuits of the redeemed and holy ones; but that all who refuse to accept the invitations of the Gospel must perish in their sins and be forever banished from the presence of the Lord.

The following commandments we promise to remember and obey through all the vicissitudes of our earthly lives.

Thou shalt love the Lord thy God with all thy heart, and with all thy soul, and with all thy strength, and with all thy mind; and thy neighbor as thyself.

Thou shalt not worship any graven image or any likeness of any created being or thing.

Thou shalt not take the name of the Lord thy God in vain.

Remember the Sabbath day to keep it holy, avoiding all unnecessary labor, and devoting it as far as possible to the study of the Bible and the promotion of thy own and others for a holy life.

Thou shalt obey and honor thy parents and rulers.
Thou shalt not commit murder, adultery or other impurity, theft, or deception.
Thou shalt do no evil to thy neighbor.
Pray without ceasing.

For mutual assistance and encouragement we hereby constitute ourselves an association under the name "Believers in Jesus"; and we promise faithfully to attend one or more meetings each week while living together for the reading of the Bible or other religious books or papers, for conference and for social prayer; and we sincerely desire the manifest presence in our hearts of the Holy Spirit to quicken our love, to strengthen our faith, and to guide us into a saving knowledge of the truth.

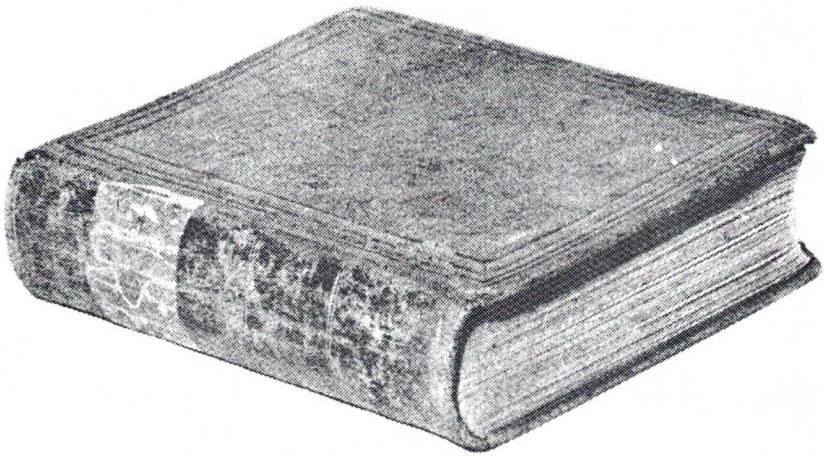
Sapporo, March 5, 1877.

Signatures.

Y. Kurosawa.
John K. Sts.
T. Yamada.
S. Sato.
K. Ueda.
S. Tanaichi
S. Takahashi.
M. Oshima
T. Watase.
M. Yanagimoto.
K. Ono.
I. Sato.
N. Yasuda.
S. Ishida
S. Akakiwa.
T. Ono.
I. Ota.
N. Sakuma.
K. Miyabe.
M. Adachi.
T. Takagi.
S. Hiroi.
K. Uchimura.
K. Machimura.
T. Minami.
K. Fujita.
K. Imanaka.
S. Ueda.
J. Iwasaki.
E. Ito.
K. Ito.

「イエスを信ずる者の誓約」・署名
原本より直接撮影

W．S．クラーク博士



クラーク博士が学生に配布した聖書

札幌独立キリスト教会会員名簿

（明治15年12月～昭和57年12月）

署名番号	氏名 生年月日	入会年月日 入会牧師名	備考	署名番号	氏名 生年月日	入会年月日 入会牧師名	備考
1	伊藤一隆 安政 6.3.13	明15.12.28	始英国監督教会に属す	23	伊庭野 健三郎 弘化元.3	明16.5.6 牧師小川義綏	永眠
2	大島正健 安政 6.7.23	明15.12.28		24	岩井信六 萬延元.1.23	明16.5.2 牧師小川義綏	明30.11.5 永眠
3	渡瀬寅次郎 安政 6.6.26	明15.12.28	明24東京麻布美以教会へ転籍	25	仁科信藏 嘉永 6.3.1	明16.5.2 牧師小川義綏	大13.6.8死亡
4	田内捨六	明15.12.28	明26.12.28除名	26	新田誠三	明16.5.2 牧師小川義綏	先代岩井氏実兄 除名
5	内田瀞 安政 5.8.13	明15.12.28		27	高木秀太郎	明16.5.2 牧師小川義綏	明26.5転籍
6	小野琢磨 安政 5.4	明15.12.28	明35.5.6除名	28	内村達三郎 慶應元.11.8	明16.5.2 牧師小川義綏	明25.12 退会
7	黒岩 四方之進	明15.12.28		29	櫻永佐治平 嘉永 3.2.1	明16.5.2 牧師小川義綏	明38.4.9退会
8	柳本通義 安政 4.2.1	明15.12.28	京都へ転居	30	宮崎濁卑	明16.5.2 牧師小川義綏	明29.1.10 除名
9	内村鑑三 (文久元.3.23)	明15.12.28	明24.7.5転籍 明33.11.18再入	31	水野義郎	明16.5.2 牧師小川義綏	明20.2.6除名
10	藤田九三郎 安政 5.7.28	明15.12.28	明27.2.21 永眠	32	水野某	明16.5.2 牧師小川義綏	水野義郎妻 明20除名
11	足立元太郎	明15.12.28	退会	33	森山源五郎 弘化元.5.14	明16.5.2 牧師小川義綏	明31.6.27 永眠
12	宮部金吾 萬延元.3.7	明15.12.28		34	西堀幸八	明16.9.2 宣教師タムソン	明22転籍
13	廣井勇 文久 2.9.2	明15.12.28	昭 3.10.1 永眠	35	大石源二郎 萬延元.6.2	明16.9.2 宣教師タムソン	大 5.6.16 死去
14	伊藤トミ 慶應元.10.25	明15.12.28	伊藤一隆妻	36	黒野泉三郎	明16.9.2 宣教師タムソン	明17除名
15	平野トミ 天保 5.7.3	明15.12.28	平野彌十郎妻 大元.12.9 永眠	37	不動某	明16.9.2 宣教師タムソン	明17除名
16	平野コウ 文化 4.3.15	明15.12.28	平野彌十郎母 明24年中永眠	38	岩井ウラ 元治元.10.18	明17.11.30 宣教師スクワヤ	岩井信六妻
17	平野彌十郎 文化 6.1.28	明15.12.28	明22.10.8 永眠	39	幡鎌イチ	明16.9.2 宣教師タムソン	與右エ門妻 明29.4.6永眠
18	平野彌一 元治元.3	明15.12.28	平野彌十郎男	40	仁科タカ 安政 3.4.8	明16.9.2	仁科信藏妻
19	柳内義之進	明15.12.28	明24除名	41	小野チヨ	(明16.9)	小野琢磨母 大12.2除名
20	渡瀬庄三郎	明15.12.28	明33.10 退会	42	内田コウ 慶應元.3.20	明16.9.2 宣教師タムソン	内田瀞妻
21	中村邦佐 文久 3.2.27	明15.12.28		43	足立ツネ	明16.9.2 宣教師タムソン	明35.8.25 退会 美以教会へ転会
22	黒岩ノブ	明15.12.28	黒岩四方之進母 明31.4永眠	44	北岡一直 安政 5.4	明16.5 宣教師タムソン	

札幌独立キリスト教会創立のころ

塚本淳

一、あけぼの

一八七六(明九)年七月二五日、北海道開拓使御用船玄武丸は品川沖を出帆して北海道に向ったが、六四四トンの船内は満載の貨物と乗客とで混雑をきわめていた。乗客の中には時の内閣参議、陸軍中将、開拓使長官、黒田清隆はじめ開拓使御傭教師、ウィリアム・スミス・クラーク(アメリカ、マサチュセッツ州々立農科大学々長兼任)、同ウイリアム・ホイラー、ダビッド・ピアス・ペンハロー、通訳堀誠太郎と此度開校される札幌農学校に入学のため東京英語学校、開成学校などから志願選抜された一〇名の青年(佐藤昌介、大島正健、黒岩四方之進、内田瀞、田内捨六、中島信之、渡瀬寅次郎、柳本通義、出田晴太郎、山田義容)らが居た。

この一〇名の青年たちは、既に開拓使仮学校を経て一年前に札幌に移されて居た札幌学校からの一四名(この中八名は学力不足のため退校を命ぜられ、荒川重秀、伊藤一隆、小野兼基、小野琢磨、佐藤勇、安田長秋の六名が残った)と合流して札幌農学校第一期生となり、やがてその中から札幌バンドと呼ばれ、熊本バンド、横浜バンドと共に日本へのプロテスタント・キリスト教土着の苗木となる一団が生れるに至るのであるが、今は未だ向う見ずな腕白者に過ぎない。それが船尾の三等船室に貨物と雑居させられての憤懣から、土佐出身の乱暴書生、黒岩、内田、田内らは黒田長官の居室上の甲板を踏みならして放歌乱舞するの狼藉に至った。之を知るや黒田は烈火の如く怒り出し、函館入港次第、総て放校、直ちに追い返せと言い出したが側近が四方取りなして漸くその場を収めた。実は彼には四年前、一八七二(明五)年東京芝に仮学校が開設された折、選抜方法の不備もあって、生徒の質は玉石混交、喧嘩騒乱の絶え間ないのに業を煮やし太いステッキを片手に寄宿舎に躍り込み、「みんな出てゆけ、お前らのような輩に用はないわ」と全員を追い出し学校を一時閉鎖してしまったという苦い経験があったのである。それ故、クラークと黒田との間に学生の教育問題、特に徳育についての話し合いがこの航海中に交わされたことは疑を容れない。

当のクラークは黒田の懇請によってマサチュセッツ農科大学長のまゝ一年間の賜暇を得て、日本最初の高等農業教育の基礎を築くべく札幌農学校の教頭(英文契約書によればプレジデントと記されている)として招かれたのである。ホイラー、ペンハローも共にクラークの教え子であり彼の推挙により帯同されて大平洋を渡って来たのであった。

クラークは既にアマスト大学で教授として一五年、マサチュセ

ッツ農科大学で学長として一〇年、計二五年の経験豊かな教育者であるばかりでなく、常に新しい計画に心を燃やす熱血の人でもあった。この招きを受けるや、彼は他人が二年かゝる処を自分は一年でやって見せると豪語したと言うがその言葉はやがてそのまゝ実現されることになった。

彼は時に年五〇才、欧米人としては中肉中背ながら自から威厳備わり美髯に縁どられた温容のうちにも鋭い目指(まなざし)は相手の心中をも見抜かんばかり、語れば理想と実務を併せて人を説得せずんば止まざるの概がある。此度の農業教育についても、単なる実務家の養成に止るべきでなく、宗教を含めた全人的教育を施してこそ、はじめて真に国家有用な指導者を生み出し得ること、黒田の望む徳育とは正にこの事に他ならないことを示すのであった。加うるにクラークは若くから苦学し、精励してアマスト大学を卒業、更に、ドイツ留学を果し母校の教授に就任、その後南北戦争（一八六二―六四年）勃発するや、マサチュセッツ義勇軍第二一連隊長として凄惨な戦闘に従い武勲により陸軍大佐の称号を得た武人でもあり、同じく維新革命の騒乱の巷を往来し薩摩藩の下士の子から身を起し三六才にして今や明治政府の大立者の一人となった黒田の共感と信望を一挙に獲得したのであった。黒田が学校経営ばかりでなく、北海道開拓全般に亘り、彼の献策の殆んどを受け入れ膨大な予算を自由に使用させたのもこの故であろう。

玄武丸は七月三〇日午后三時、小樽に入港した。翌三一日はクラークの五〇才の誕生日にも当り、早朝彼らは勇躍、騎行して札幌に向い、午前一一時頃、宿舎に予定されて居た開拓使本陣（今の南一条東一丁目に当る）に入った。所が翌八月一日、思いもかけぬ相談を持った人物がクラークを訪れて来たのである。英国聖公会宣教師、ワルター・デニングがそれであって、相談とは此度農学校第一期生となるべき一青年の洗礼をクラークの宿舎で行わせて欲しいと言うことであった。この青年は伊藤一隆といゝ、東京の仮学校時代既に築地ユニオン教会のホールズ博士より聖書の手ほどきを受け、札幌に移ってもその志を変えず、開拓使女学校女教師イー・デニスの聖書講義を聴講して居たが、学校当局はキリスト教は国禁なりとして様々な圧迫を加えて彼の入信を阻止しようとする。しかし伊藤は一向にひるむことなく、是が非でも洗礼を受けて彼らに抵抗してやりたいと思う折から宣教師が伝道のため函館から札幌に出張して来て居ると聞き、直ちにかけつけて洗礼を迫ったのであった。デニングはそのような不遜な心は洗礼を受けるにはふさわしくないと言って翻意させようとするが彼は頑としてきかない、明日に迫る函館帰還をひかえ、このまゝに彼を放置するにしのびず、洗礼を授けることにしたが、宿の一室で式を行おうとすれば旅館の主人は絶対に許さないと言う、さらば路傍にてと街に出ると巡査が飛んで来て、国禁の宗教儀式を行うことは相成らんとおし止める、幸いクラークたちが札幌に着任したことを知り、これこそ神意なりと信じその宿室を借り、洗礼を施したいが如何かというのである。彼は直ちに之を快諾し、式は翌八月二日の夜、三人の立ち合いの下に無事取り行われたが、計らずもこれが札幌での受洗者第一号となった。

クラークにとってこの劇的事件は単なるエピソードでは済まされない神の深い摂理を感じさせた。何故なら彼の旅嚢には既に三〇冊の英語聖書が秘ませてあったからである。この聖書は彼が日本到着直後、アメリカ聖書協会極東担当代理人ルーサー・ハルゼー・ギュリック博士の訪問を受けた際に寄贈されたものであった。クラークは故郷への私信の中で「私はこれらの聖書を農業学校に教科書とし

て導入することを試みるつもりです」と書き送っている（太田雄三「クラークの一年」W・B・チャーチル宛第一〇信八七頁）。

彼は牧師でもなく、ましてやキリスト教伝道の目的で来日したのでもない。彼のそれまでの平凡無事な信仰生活を外面的に見るならば、以後わずか八ヶ月の間に彼が農学校で為しとげた驚くべき信仰の業を「あのクラークが?」と不審がられたとしても無理からぬことであろうが、彼の故郷、ニューイングランド、マサチュセッツ州はピリグリムス・ファーザーズの初めて降り立った所、その大地も空気もピューリタニズムの香に満ちて居り、彼はそれを吸って生い育ったのである。殊にアマスト大学在学中、彼は火の如きリバイバルを経験して居り、心中深く埋れて居たとはいえ、熱い霊火はその発火点を求めて居たのである。

クラーク自身、来日するに当って、よもやこのような使命が自分に托せられようとは想像もしなかったに相違ない。然し、彼は日本上陸以来、短かい観察ながら、強い印象を受けて居たのである。一見、日本の一般農民は畜力、機械力の代用のように酷使されて居り、住居も服装も粗末に違いないが、その農業技術を見ると故国アメリカをも凌駕するものがある、水田耕作にしても、一片の土地をも、一滴の水をも無駄にせず、施肥にしても、経験的ながら合理的であり、畑作にはありとあらゆる種類の蔬菜、果実を季節に応じて産するように按配している。建築にしても開国わずか数年だというのに設計図さえ与えられゝば西欧人の手を借りることなく立派な西洋館を建て上げてしまっている。東京工学寮(後の工部大学)の如き、アメリカにも見劣りせぬ施設と文庫を備えて居る。こゝ、開拓使本庁舎も既に三年前、アメリカ州庁舎を模した三階建ての堂々たる姿を見せて彼らを迎え入れたのであった。農学校のための生徒選抜に当っても彼らが予想外に優秀であることに驚き、次の如く妹、リード夫人に書き送っている。

「彼らの中の多くはマサチュセッツ農学校入学志願者平均よりも英語の読み書きが上手です。」(上掲書、八三頁)

クラークは正に此処に未開の荒地ではなく、美わしき葡萄園を拓くべき沃野と、故国から携え来った文化の精髄を接ぐべき優れた「野のオリーヴ」の台木を発見したのであった。加うるに政府高官らの盛大な歓待、直属上官たる黒田との精神的共感は彼の魂のうちに次第に一種の霊気を孕(はら)ましめ、この日本の北辺フロンティア開拓に対する大望と期待に満されて、今やその職務たる札幌農学校教頭(プレジデント)の席についたのであった。

開校式を目前に控えた八月七日から一一日までクラークは黒田長官に随って三〇トンばかりの蒸気船に乗り、石狩川を空知まで遡行し、北海道内陸部の視察を試みたが、その折に農学校の道徳教育について、相当突込んだ話会いが持たれたのである。

クラークはこの時の双方のやりとりをかなり詳しく故郷に書き送って居る。

「……私達の石狩川を上る旅行中に私は黒田長官と話して、彼が〔聖書を教えることに〕反対するのはキリスト教自体に敵意を持っているためでは全然なく、たゞ英国国教とか、フランス・カトリック教、ロシヤ正教、ギリシャ正教といった〔外国〕国家勢力と結びついた宗教を恐れるためだと分りました。私は彼に自分は牧師ではないが、聖書は書物中の最善のもので、日本でもいつか必らず自由に読まれるようになるに違いないと信じていると言いました。彼は生徒に聖書を使わせるわけにはいかないが、私が健全なる道徳のすべての原理を生徒に教えることを望むと言いました。私はそれに対

して、長官としては勿論それを望むだろうと思うが私の考えは主に聖書から取られて居るので絶えず聖書に言及せずに〔道徳を〕教えることは不可能である――実は自分は新入生用の聖書を三〇冊持っている、長官が私がそれらを配り使用することを許してくれるならば、それは非常に彼の名誉を高める行為だと答えました。私は彼にやがて〔日本の〕すべての学校で聖書が使われるようにきっとなるに違いない。私は札幌でその先鞭をつけたいのだと言いました。」（上掲書、一三四頁）。

更に

「彼〔長官〕はそれに対して、私が聖書の含む真理を学生に教えるのは構わないが聖書をみなの前で読んだり、個人的使用のために学生に聖書を配ったりするのは困ると言いました。私はそれは非常に残念だ、でも御命令には従いますと答えました。それから約一ヶ月後〔九月半ばと思われる〕長官は私を呼んで学生によい道徳教育を施してもらいたいと言いました。私には絶えず聖書に言及せずに道徳を教えることは出来ない、だから道徳を教えると長官を怒らせるようなことになるのではないかと恐れると答えました。翌日、彼は聖書の使用禁止は撤回する、思うようにやって宜しいと私に言いました。それで私は手持ちの聖書を配って、それらを活用することにしました。さて注意することがあります、あなたはこのことが絶対新聞に出ないように気を付けて下さい。そうでないと風波が立つかもしれません。御承知のように日本は台風の国ですから。」（前掲書、キャプテン・W・B・チャールズ宛、私信、一四九頁）。

これらの書簡から官立学校に於て聖書による教育を行うという大胆な企てはこの旅行中の話し合いから生れたものであり、黒田としては自分の惚れ込んだこの人物に思う存分腕を振るわせるために一時目をつぶろうと決意したのであろうし、クラークも黒田の立場が薄氷を踏むような危険なものであり、日本の政治的中心を遠く離れた北辺の地なればこその一種の純粋培養試験の如きものであることをよく承知の上で事が公にならぬようにと気を配って居る様がよく解る。またクラークという人物は、先進国の優越した文化文明を笠に着て、未開国の相手に自説を押しつけるという型の人物ではなく、相手の文化なり立場なりをよく理解しつゝ、自らの持つ最も良きものを頒ち与えようとする真の教育者であったことが窺える。

二、札幌農学校にて

いよいよ八月一四日、午前一〇時、札幌農学校の開校式が挙行された。第一講堂（後の北講堂）の壇上中央に黒田長官が着席し、左右に調所広丈校長、堀基開拓中判官、クラーク教頭、ホイラー、ペンハローの二教授が居並び、下には第一期生、来賓ら百余名が堂を埋めた。

黒田長官の式辞、堀判官、調所校長の告辞が代読された後、クラークは立って大要次の如き演説を試みた。

「……マサチュセッツ農科大学長たる私は日本に於ける最初の農学校の基礎を築くべく、同大学出身者二名と共に日本に招かれた誇りと喜びとを以て、その崇高な職務を各自の実践と教授によって熱心に果たす決心である。

教育こそは進歩的国家の責任であり、黒田長官が北海道開拓の初頭に当り、西欧諸国にさえ先んじて農科大学を建てたことはまことに

偉とするに足る達見なりと信ずる。やがてこれが成功を収めて、その政策が賢明なりしことを証するに到らんことを期待したい。

今や日本国は東洋諸国民を多年暗雲のようにおし包んで居た階級制度や因習という暴君から解放され、各人に自己の勤勉と徳性とによって如何なる責任ある地位にも達し得らるゝ機会が平等に提供されている。

見よ、諸君の目前にその典型の如き黒田長官その人が居らるゝではないか。それを思えば諸君の胸中に自ら崇高なる大志（ロフティ・アムビション）が湧き上るであろう。

しかしそれには諸君の精励と努力による知識と経験の獲得と蓄積とに待つのみ。その妨げとなるものゝうち最大なるは飲食の欲と性欲とである。請う、諸君、よく之にうち克たれよ。」（蝦名賢造「札幌農学校」三六頁、ジョン・M・マキ著、高久真一訳「クラーク―その栄光と挫折」一八八頁等より）

この演説は若い第一期生に強烈な衝撃を与えたものと見え、彼らは後々までこの時のクラークの言々句々を正確に覚えていた。それは彼らが暗黙のうちに抱いていたに違いない「醒めては握る天下の権、酔うては枕す美人の膝」式の大志に真っ向から立ちむかう個人の尊厳と国民への責任との自覚を要求する「大志」だったからである。

更にクラークは札幌学校から引継がれた煩瑣な規則を「今後、自分が主宰するこの学校に於ては凡て廃止する。自分が学生に臨む鉄則は唯一言、『紳士（ビー・ゼントルマン）たれ』に尽きる。ゼントルマンとは鉄の規則に縛られて事を為すのではなく、自己の良心に従って出処進退を正しくする人間のことである。私はそれを君らに期待する。」と学生たちを前に宣言した。

これ又、学生にとって大なる感激であって、以後、我こそはジェントルマンなりと身を慎しみ、責任を重んずるの気風が生ずるようになった。

学校当局は之に対し何も知らぬ外国人が何を言うかとばかり、その様な生温いことでもし規則を犯す者が出たら如何するか迫ったのに対し、彼は「直ちに退校あるのみ」と言い放って取り合わなかった。

クラークがこのとき最も心を砕いたのは学生の人格教育であった。彼の手に託された時は余りにも短かい。学業そのものは優れた同僚の手にゆだねても自らは学生の魂の教育に全力を投じようとしたのであった。先ず東京から持参した聖書に各自の名を記名して与え、彼の受持ちの授業の始めにはその中から選んだ個所を読み、簡単な解説を加え、讃美歌を朗唱し次いで熱心な祈禱をさゝげるのであった。恐らく学生たちはあっけに取られたことであろう。彼らにとって宗教の世界と世俗の世界とは別々の世界と考えられていた。しかるに近代科学の蘊奥を極めた上、実務に於ても第一流の学者が実生活の只中でこれ程真摯に「聖なるもの」を語り、且つ熱心に祈るということが既に大なる驚異であり感動であった。彼らはこのクラークに捕えられたのである。

彼らにとり、クラークは師であり、父であり、ある時は兄でさえあった。彼は生徒にとって難渋を極めた英語書取りによる授業ノートを自ら訂正してやり、夜間は居室を開放し三々五々訪れて来る彼らを盛り上げた密柑を以て喜ばせ、聖書を開いて教訓を垂れるかと思えば、靴下をかゞりながら波瀾万丈な経験談を語り聞かせるのであった。また彼らの目を常に自然にむけさせ、机上の空論に止まらせぬよう常に郊外への散策に引き出すのであった。校庭に降り積む雪の中で雪投げをしたり角力を取ったりして「さあ、これで温かくな

ったろう」と破顔一笑することもあった。就中、有名なのは翌年、一八七七(明一〇)年一月三〇日の藻岩山雪中登山の折の逸話である。山頂の雪に埋れた巨木の梢にまつわる見事な地衣を見つけたクラークは到底手が届かぬと見るや雪中に四つ匐いとなり、学生中一番背の高かった黒岩に向って「早く俺(むし)の背にのってあれを取れ」と命じた。黒岩があわてゝ靴を脱ごうとすると「そのまゝ、そのまゝ」とせかされる。彼は土足のまゝ師の背に乗り首尾よく目的の地衣を採取することが出来たが、それを手にしたクラークは喜色満面、「これは新種だぞ」とペンハローに呼びかけた。この出来事は深い印象を一同に与えたが、特に当の黒岩の感激は一通りではなく、常々この時の師の闊達な自由人らしい振舞を語って止まなかったと言う。

クラークは更に日曜毎に講堂に学生を集めて聖書講義をはじめた。その情況を一期生大島正健は次の如くに記して居る。

「集会は主の禱(いのり)を以てはじめ、次に聖書朗読、そしてその聖書は交る交る生徒が読むのであるが、先生は簡単に之を説明する。以上は規則正しい場合のことで、いつもは決してそうではなく、先生は屢々数分間静かにして黙禱されて居るが、それが遂に学生の心を貫く熱烈な祈禱となって爆発する。ある時は新聞雑誌や書籍より説教や論文を朗読せられ、また自ら起って自己の説教をせられるかと思うと或る時はまた、諄々懇々あたかも慈父がその子に教うるが如く静かに話されるのである。」(逢坂信忠「クラーク先生詳伝」一九二頁)

また

「日曜礼拝ごとに聖書を読ませられることになっていたが、どうかして名句を探そうとするにはその前に一生懸命、聖書を飜して探さねばならなかったので、いやが上にも聖書と親しむ機会が多く、その中に生徒仲間で聖書研究をするようになった。」(前掲書 九三頁)

この集会でクラークは学生に讃美歌を教えたが、特に彼が愛誦したのは「いさおなき我を血をもて贖い……」(現行讃美歌二七一番)と「北のはてなる氷の山」(同二一四番)で、彼は之を音吐朗々と朗誦するのであった。こゝからクラーク先生音痴説が出て来るが、明治の初年、西欧風の歌なるものを全く知らぬ学生に曲調(メロディ)を教えるよりも寧ろその意味内容を彼らの心霊に刻みこむがためには朗誦風なのが最適なることを承知の上での親心からだったことと推察される。

クラークはまた学生が飲酒や喫煙によって健康を害し誘惑に陥いることを憂い、「禁酒禁煙の誓約」を草し、自ら署名すると同時にホイラー、ペンハローにも署名を求めて之を学生に示した。学生も総員署名したが、その全文は次の如くである。

「我ら下に署名する札幌農学校の職員並びに学生は学校と関係する限り、薬用の外に如何なる形式に於ても阿片、煙草及び酒類の使用を厳禁することを誓約する。又併せて賭博及び神の名を穢すことなきを誓う。」

クラークらはこれと同時に、母国から持ち来った葡萄酒類すべてを溝に流してしまい、以後いかなる宴席に於ても一滴の酒も口にせず、黒田をして感歎せしめた。

この「禁酒禁煙の誓い」はやがて全国的な禁酒会組織にまで成長したが、それには一期生の伊藤一隆の精力的な活躍に負う処が多い。

クラークの日本政府との契約は往復を含み一八七七(明一〇)年五月二〇日までゞあった。離任の日を一ヶ月後にひかえた三月のはじめ、彼は「イエスを信ずる者の契約」なる一文を起草し、之を学生に示し志を同じうするものゝ署名を求めた。この文書こそ、当教会

の信仰の基礎となった不朽の信仰告白的文書でもあるので左にその邦訳全文を掲げることとする。

「こゝに署名する札幌農学校の職員生徒は、キリストを、その命にしたがって告白すること、及び十字架の死によって我らの罪のために贖をなし給うた貴き救い主に対して、我らの愛と感謝とをあらわすために真の信実を以てキリスト者としての凡ての義務を果すことを願い、又、主の栄光のため、及び主が代って死に給うた人々の救いのために主の聖国を人々の間に前進させることを熱望して、こゝに今より後、イエスの忠信なる弟子なるべきこと、及び主の教の文字と精神とに厳格に一致して生きるべきことを、神に対し、又相互に対して、厳粛に契約する。又適当なる機会ある場合には、我らは試験、洗礼、入会のために福音的の教会に出頭すべきことを約束する。

我らは信ずる、聖書は神から言葉を以て人に与えられた唯一の直接の啓示であって、光輝ある来世への唯一の完全無謬の指導者であることを。

我らは信ずる、我らの慈悲深き父、我らの義なる至上の支配者にいまし給い、又我らの最後の審判者にいまし給うべき、唯一なる永遠の神を。

我らは信ずる、真実に悔い、そして神の子イエスを信ずることによって罪の赦しを得る凡ての者は全生涯、聖霊によって恩恵豊かに導かれ、天の父の絶えざる摂理によって守られ、かくて遂に贖われた聖徒の歓喜と希望とにあずかる者とされるべきことを。しかし福音の招きを受けることを拒む凡ての者は、己が罪の中に死し且つ永遠に主の御前からしりぞけられねばならぬことを。

次の誡は、我らの地上の生涯に如何なる変転があっても、常にこれを記憶し、これに従うべきことを約束する。

汝、心を尽し精神を尽し力を尽し思を尽して、主なる汝の神を愛すべし、又己の如く汝の隣人を愛すべし。

汝、被造物或は被造物の如何なる彫像、如何なる肖像をも拝すべからず。

汝、主なる汝の神の名をみだりに口に挙ぐべからず。

安息日を憶えてこれを聖く守るべし。即ち凡て不必要なる労働を避け、その日を能う限り聖書の研究と自己及び他人の聖き生活への準備とにさゝぐべし。

汝、汝の両親及び支配者に服従し、彼等を敬うべし。

汝、殺人、姦淫、或は他の不潔窃盗、或は詐欺を犯すべからず。

汝、隣人に何の悪をもなすべからず。

絶えず祈るべし。

我らは、互いに相援け相励まさんがために、こゝに『イエスを信ずる者』の名のもとに一団体を構成する。そして聖書或は其他宗教的書籍新聞を読むため、会議のため、祈禱会のために、我らが生活を共にする間は、毎週一回以上集会に出席すべきことを固く約束する。そして我らは衷心より願う、聖霊明らかに我らの心の中に宿り給うて、我らの愛を励まし、我らの信仰を強め、救いの真理を知るの知識に我らを導き給わんことを。

一八七七年三月五日　札幌にて　W・S・C。」　（「独立教会のしおり」第一二頁、この訳文は内村鑑三著鈴木俊郎訳「余は如何にして基督信徒となりし乎」に據り、一部文体、文字を改めたものである。英文原本は当教会に今も尚大切に保存されている。）

之に対して黒岩四方之進をはじめ一六名全員が、ひとりひとりクラークの前に進み出て署名した。

黒岩四方之進、伊藤一隆、山田義容、佐藤昌介、内田瀞、田内捨六、中島信之、大島正健、渡瀬寅次郎、柳本通義、小野兼基、佐藤勇、安田長秋、出田晴太郎、荒川重秀、小野琢磨の順序で、各人の特徴あるローマ字書きの署名を、その原本上に見ると、緊張し切った彼らの真剣そのものゝ姿を目の前に見る思いがする。

この文書の特徴は、第一にアメリカ新英州（ニューイングランド）ピューリタニズムによる福音的信仰の真髄を語って殆んど余すところなきこと、第二に、単に信条の列挙に止まらず後に残される小さき群がとるべき道を事細かに指示してあり、クラークの心優しい教育者魂がありありと映し出されていることである。更に重要なことは、「契約」という姿で宗教が日本人の精神につきつけられて居る点であろう。契約内容が正確に箇条書きにして示され、人間はそれを自主的に納得して受け入れ、その条項の遵守に責任を持って生きると言うようなことは、今までの日本人の宗教観には全く無かったことである。二〇才前後の若い彼らが皆、その意義の重大さを充分に理解したとは言い難いが、彼らは彼らなりに「契約」の真意を何とかして摑（つか）もうと熱心に聖書を学び、注解書や宗教書をむさぼり読んだことは彼らの証言から明らかである。またこの後、幾許（いくばく）もなく背教者となった一青年（山田義容、一七才）が、この「契約」にふさわしくない自己に悩み苦しんだ末、思い余って帰国後のクラークに寄せた書簡が残っている。

「先生、私は一年間というもの、より良い人生を歩むべくキリスト教を信じようと熱心に勤めて参りました。ところが、他の学生と違って、私の良心がキリスト教を素直に喜ぶことを許さないものですから、私はしばゝ泣いてしまいました。そこで長い黙想のあとで、偽善の中に生きるよりは良いと思い、私はキリスト教を棄てる決心をしたのです。

私の悲しみは先生の悲しみより大きいと思います。というのは、先生の御親切を思い出す度に私の心は痛み、何を食べても前のようにおいしいと感じられないのですから。私は私の身体が再び土に帰る日まで、先生の御親切を忘れないでいることを覚えていて下さい。キリストの宗教は棄てゝも、キリストの教えの中には実に良い教えがあり、それを守って行きたいと思って居ます。」（J・M・マキ「クラークーその栄光と挫折」二六六頁より）

この痛切にして誠実な手紙は、彼らのこの「契約」に対する態度を、いわば逆光線によって鮮かに照らし出すものと言えよう。

扨、四月一六日、クラークはいよゝ札幌を発って、帰国の途につくことになった。当日は全校教師、学生総て馬に乗り、クラークを中心に開拓使本陣前に整列して写真を撮り、札幌の南二四キロの島松駅に向った。一行は正午すぎ島松に到着、此処で昼食を摂り、やがてクラークは学生ら一人々々と固い握手を交わし、便りを忘れず寄こすよう、約束させた後、ヒラリと馬に跨がり、「少年（ボーイズ・ビイ）らよ、大志（アンビシアス）を抱（いだ）け！」と声高（こわだか）に呼ばわるや回頭一鞭、千歳に向う急坂を駆け上り、やがて残雪のかなたに消え去って行った。

大島正健はこの時の感動を直ちに次のような漢詩に詠みこんだ。

懐クラーク先生

青年奮起立功名　馬上遺言籠熱誠
別路春寒島松駅　一鞭直蹴雪泥行

（大島正健「クラーク先生とその弟子たち」一一七頁）

三、小さき群のために

札幌を発ったクラークは室蘭、七重(今の七飯)を経て、函館に出た。こゝで彼はアメリカ・メソジスト監督教会宣教師、M・C・ハリスに会い、札幌に残った愛弟子らの信仰の指導を懇請した。

四月二五日、彼はもはや二度と訪れることもないであろう日本の各地を少しでも視察しようとの願いから、長崎行の便船を得て、北海道を後にした。

彼は長崎で、あまりにも北海道とは異る南日本の一面に目を見張り更に神戸に向った。此処でも彼は幾人かの宣教師に出会ったが、特に八〇才にして尚、矍鑠(かくしゃく)たるP・J・ギュリック牧師夫妻と会食したことは、正に神の摂理の御業と言う外はない。何故なら、この老ギュリックの息子こそ、一年前、東京でクラークに三〇冊の聖書を贈った当の人、L・ギュリックだったのである。しかも、丁度この時、たまゝそこに居合わし、かの聖書がクラークによって素晴らしく用いられたことを聞き、大いに喜び、更にもう三〇冊を寄贈したのであった。クラークは直ちに之を、後任新教頭、ホイラーに送るよう手配したが、後に第二期生らが彼から受けた聖書は恐らく之であろう。

更にクラークは京都にアマスト大学時代の教え子新島襄を訪れ、その創立になる同志社のために寄附金を献ずると共に、札幌に於ける小さき群のため、指導と援助を依頼した。

「契約の書」の中に彼は「……適当なる機会ある場合には我らは試験、洗礼、入会の為めに福音的の教会に出頭すべきことを約束する。」と記(しる)したが、之は彼にとって決して空言(そらごと)ではなく、人知れず、根まわしの手を着々と打って行ったのである。宣教師ハリスが札幌を訪れ、第一期生、第二期生らに洗礼を施すに到ったのも、新島が後々まで札幌独立教会に深い関心と同情を寄せ、伝道者として同志社卒業生を斡旋し、或は伝道方法につき具体的な助言を与えたのも、総てこの時のクラークの深い配慮の賜物である。

こうして彼は五月二四日、横浜を出帆し永久に日本を去ったのであるが、彼の心は常に札幌にあり、弟子らとの交流は絶えることがなかった。また、彼らに教会設立の議ありと聞くや、一〇〇ドル余りの献金を贈った(詳細は後出)。

彼のその後の生涯は決して平坦なものではなく、打続く事業の失敗と、その打撃による心臓病のため、暗澹たるものとなったが、臨終の床に於ても尚、「余の事業にして一として誇るに足るべきものはない。唯、日本の札幌に於ける八ヶ月の基督教を伝えたことが今、死に臨んで余を慰むる唯一の事業であった。」(逢坂信忰「クラーク先生詳伝」三五九頁)と満足して語ったという。

四、教会の芽生

クラークの去った後、ホイラーが教頭職を継ぎ、職員生徒一致団結して彼の遺訓を守り、一路邁進を続けた。ホイラーは朝の聖書集会を指導し、学生らは夜の集会、また水曜日の祈禱会を守った。

一学年も終り、最初の夏休みを迎えた彼らは二班に分れ、第一班はホイラーに引率されて、余市―長万部間の道路予定地の測量実習に向い、第二班はペンハローに率いられて、石狩川を遡行し、遠く空知、芦別の奥地にまで分け入る調査探険を試みたのであるが、第

二班に属した内田瀞のクラークへの書簡によると、疲労困憊の中にも、彼らは集会を怠らなかったことが判る。「私は先生に、私達が原野の中で、定例の聖書集会を開いたことを、お知らせしなければなりません。それはとても爽やかな経験でした。」(太田雄三「クラークの一年」二六六頁)

新学期も始まろうとする九月二日、M・C・ハリスが、クラークとの約束に従って、第一期生らに洗礼を授けるために函館から来札した。

ハリスは既に三年前、一八七四(明七)年、若妻を伴って函館に上陸、以来、居をそこに定めて伝道中であった。その頃、函館駐在ドイツ領事が狂信的国家主義者の一青年によって斬殺されるという事件が起り、在函の外国人の間に少なからぬ恐慌が拡まったが、温厚ながら豪毅な信仰に燃えるハリスは少しも動ぜず、「私たちは日本を救うために来たのであって、たとえ、不幸にして日本人の手によって死ぬことがあろうとも、本望である。」と言って、某ドイツ人から護身用にと贈られたピストルを海中に投げ捨てゝしまったという。ハリス夫人も病弱の身を以ってよく夫君を援け、全生涯を日本伝道のために献げ、今も尚、夫妻とも青山墓地に眠って居る。

この日、伊藤一隆をのぞき、残る一五名が洗礼を受けたが、その蔭には長老格の佐藤昌介の並々ならぬ苦心があった。実は既に三名の者が信仰に動揺を来していたのを、彼が説得に説得を重ねて、漸くこゝまで漕ぎつけることが出来たのである。彼らは感激に満ちあふれ、翌、三日の夜、講堂に集まり、受洗感謝の祈禱会を催し、夜の更けるのを忘れて、熱禱を捧げたのであった。恰もこの日は第二期生らが、遙々東京から入校する日でもあり、祈禱の中心は、この「新入生(フレッシュメン)」を如何にして、神の恵みにあずからせ得るかに集中された。

暗く静まりかえった原始林の中に、幽かに望まれる講堂の灯火を目指して、一団の「新入生」が乗り込んで来たものゝ、予期に反して、誰一人、出迎える者も無く、森閑とした校庭に不審と不満の面持ちで佇むのみであった。やがて彼らは、かの講堂から讃美歌がもれ聞えて来るのに気付き、さてはこれこそ、噂に聞く耶蘇教の祈りの声なりと頷いたのである。

この一団、一八名(宮部金吾、太田稲造、内村鑑三、岩崎行親、足立元太郎、高木玉太郎、佐久間信恭、藤田九三郎、伊藤英太郎、伊藤鏗太郎、毛受駒次郎、永井於菟彦、〈以上東京英語学校より〉広井勇、南鷹次郎、町村金弥、諏訪鹿三、〈以上工部大学予科より〉村岡久米一、西村規矩〈以上長崎英語学校より〉)はその年の六月、開拓使出仕、堀誠太郎の在京各校に於ける札幌農学校生徒募集の演説に感激し、応募した者たちだった。堀は嘗て、マサチュセッツ農科大学に学び、その縁でクラークの通訳兼秘書役に選ばれ、札幌農学校の掲げる理想と使命とをよく理解して居たゞけあって、その演説は青年たちの心に強く訴えるものがあったのであろう。北海道といえば外国も同然と思われて居た当時、これらの青年たちが、東京大学に無試験で進み得る特権を棄てゝまで、何故にこの勧誘に応じたのか、しかも後年、この中から聖俗両界を制する人物が輩出するに到ったことを思えば、正にこの刻、奇蹟的出来事が起ったと言う外はない。

第二年目の新学期の授業は九月一五日に開始された。ホイラーは第二期生に向って先ず、「禁酒禁煙の誓約」を示し、有志の署名を求めたが、学徒として誠に適切な教訓でもあることから、全員が之に署名した。ホイラーがクラークより送付された聖書を新入生一人一人に手渡したのはこの時だとされる。

さきに洗礼を授けられ、霊火に燃えた上級生たちの「新入生」への攻撃は、この時とばかり熱烈執拗を極めた。「耶蘇坊主（モンク）」こと、大島正健、「ジョン・K」こと、伊藤一隆らを先頭に、昼は学業の合間を縫い、夜は寝室にストームをかけ、日曜集会や祈禱会への出席、更に「イエスを信ずる者の契約」への署名を勧誘するのだった。

先ず落城したのは太田（後の新渡戸）稲造だったが、彼は既に東京に於て、聖書を手に入れ、キリスト教に強い共感を覚えて居たので、率先して「契約」に署名したのである。それをきっかけに、二、三ヶ月の間に、一八名中一五名までが次々と署名するに到った。原本には次の順序で、先輩につゞく署名が見られる。

「太田稲造、佐久間信恭、宮部金吾、足立元太郎、高木玉太郎、広井勇、内村鑑三、町村金弥、南鷹次郎、藤田九三郎、村岡久米一、諏訪鹿三、岩崎行親、伊藤英太郎、伊藤鏗太郎。」（資料篇Ⅰ(5)）。

この間の事情については、内村鑑三の名著「余は如何にして基督信徒となりし乎」に活き〳〵と描写されている。彼も、入校当初は邪教退散の祈りを札幌神社に捧げ、彼らを再び改宗せしめんものと決意を固めて居たが、多勢に無勢、遂に鎧（かぶと）を脱いだのであった。

「一二月一一日　『耶蘇（ヤソ）教』ノ門ニ入レリ。

あるいはむしろ入ることを強制された、すなわち『イエスを信ずる者』の契約に署名することを強制されたのである。」（内村鑑三著、鈴木俊郎訳「余は如何にして基督信徒となりし乎」三五頁）

内村はこの「強制」を決して悲しまなかった。何故なら、「それ程に『神』は一なりとの思想は感激的（インスパイアリング）であった。新しき信仰によって与えられし新しき自由は、余の心と体とに健全なる感化を与えた。余の勉学は更に集中を以て為された。肉体に新しく活力を亨けて、余は山野を跋渉し、谷の百合花（ゆり）、天空（そら）の鳥を観察し、『天然』を通して『天然』の『神』と交らんことを求めた」（前掲書三四頁）からである。

しかし大半の署名者にとって事は同じではなかった。次の年の六月二日、ハリスが再び来札した時、受洗を申し出たものは太田、宮部、足立、高木、広井、内村、藤田の七名に過ぎなかった。この時、受洗を拒否したものゝ中の一人、町村金弥は「皆、洗礼を受けるであろうと鶴首して居る中で、之を拒むことは相当苦しいことであって、私と岩崎行親、南鷹次郎の三人のごときは、一時は退校しようかとまで議論した程であるが、ハリスに向って、我々は感ずる所あり信仰もないのに偽信者（にせ）になることを潔（いさぎよ）しとはしないと衷情を訴えた処、彼は流石、人格高潔な人で、反って正直で良いと讃めてくれた。」（逢坂「クラーク先生詳伝」二八五頁より要約）と語っている。信じるにせよ、信じないにせよ、彼らは真剣だったのである。

この日、洗礼を受けた七人は、早速、各自「クリスチャン・ネーム」を附けようと、ウェブスター辞典を開いて、自分に適当と思う名を探し出すことにした。太田はパウロ、宮部はフランシス、足立はエドウィン、高木はフレデリック、藤田はヒュー、広井はチャールズ、内村はヨナタンを選んだが、如何にもその人の性格に相応（ふさわ）しいのに思わず微笑させられる。この外に、既に一年前、東京で洗礼を受けていた佐久間信恭がカハウ（天狗猿）という綽名（あだな）をつけられて仲間に入り、最初の二年間、行動を共にすることになった。

一期生たちは彼らだけの聖書集会を守っていたので、二期生らも、自分たちだけの集会を持つことにし、日曜日の夜には両者が聖書研究のために合同した。二期生は又、水曜日の夜に祈禱会を持った。総じて二期生の方が熱心に於て優り、一期生組から羨望されたもののようである。

彼らの日曜集会は素朴な原始教会を思わせるものがあった。会員

各自が順番に司会役と牧師役を受け持ち、「牧師」は自分の居室を当日の会場にあてるとともに、定刻に会衆を招集する義務を負っていた。板の間に毛布を敷いて会衆の座席とし、メリケン粉樽に青毛布を掛けて祭壇を整えるのも彼の役目であり、会衆の「引力」として働らく量と質を持つ茶菓の用意も怠ってはならなかった。

礼拝は先ず祈禱を以て始められ、次いで聖書の朗読、「牧師」の短い説教、それが終ると会衆一同が茶菓を喫しながら各自の感想を述べ合った。しかし堅い板の間での四時間に及ぶ正座は苦業に等しく、昼食の鐘が鳴り渡るや否や、慌たゞしく祝禱が唱えられ、彼らは大いそぎで食堂へかけ込むのであった。

水曜日の祈禱会は夜九時半から催されたが、一同が祈り終るのに一時間を要し、これでは膝関節の滑膜炎をも起しかねないというので、同じことは二度と祈らぬことと定めて、苦痛の軽減を図ったという。ある夜のこと、午后からの農場実習に疲れ果てた上、満腹の「牧師」フレデリック・高木はメリケン粉樽の上に組んだ両腕の中に頭を埋めて祈りはじめたまではよかったが、一同が祈り終っても一向に最後の祝禱を唱えず、しびれを切らしたヨナタン・内村が薄目を明けて様子を窺うと、「牧師」は樽の上にすっかり眠りこけているではないか。内村が立ち上って、彼に代り祝禱を唱えたが、それでもまだ丸太のように動かない。広井に揺り動かされてやっと目を覚ました彼は寝ぼけ眼のまゝ祝禱を唱えはじめた。彼らの純情そのものゝ姿には涙さえ催さしめるものがある。

日曜日夜の一期、二期生合同の聖書集会を牛首ったのは大島、佐藤(昌)、渡瀬たちで、難解なキリスト教弁護論、神義論を述べたてるので「新入り」は口を挟む余地もなく、唯々、早く集会の終るのを待ち、漸く解放されると、再び彼らだけの礼拝を持ち、聖日の幕を閉ずるのを常とした。

この親密な交わりも、平穏無事とばかりにはいかなかった。屢々思いがけぬ不協和音が鳴り出すことがあったが、いら立つ彼らの心を静めるのが美しい天地自然であった。丸山の森に花を摘み、野葡萄、野苺を味わい、石狩の川辺で祈りを捧げ、石山に登って思い切り蛮声をはり上げて彼らの知る限りの讃美歌を唱うのであった。

この年、一八七八(明一一)年一二月一日、ハリスの来札を待って、彼らはメソジスト監督教会に入会した。彼らにとっては、聖公会宣教師デニングも、メソジスト宣教師ハリスも、共に誠に良き牧者であり、唯、「デニングは甚だ仏教臭い形式に則り、ハリスは簡潔だ」程度の認識に止り、その背後に強固な教派組織が控えて居ることなど、考え及びもしなかった。

二年を経たクリスマス近い頃、二期組の「話」もいよいよ種切れになり、何か集会に変化をと、一つの提案がなされた。世の中に出れば必らず不信者に出会うであろう、そのような時、どんな答を用意すべきか、今から準備するのも悪くはあるまいと言うのであった。

早速、不信者組とキリスト信者組とにくじ引きで分れ、論題を「神の存在」と定めて論戦を開始した。扨、不信者側のパウロ・太田、―この何物でも疑うことができ、また何からでも疑いを造り出すことが出来る最も手強い男の番となった。彼は言う、「神が全智全能であり、如何なることも彼に不可能ならざることを認めよう。この宇宙も亦彼の手に成ったものであることも認めよう。しかしこの神が、この宇宙を創造し、これが独力で成長発展する潜勢力を与えた後、彼が自分自身の存在に終止符を打ってしまわなかったと、君は証明出来るか？　もし彼が全能なら彼は自殺することも出来る筈ではないか！」このほとんど冒瀆的な質問、しかも容易に答えようも

無い質問に、皆はあっけに取られ、フレデリック・高木の答えを今や遅しと待ち構えた。「馬鹿だけがそんな質問をするのだ。」「馬鹿とは何だ。」「そうだ、君は馬鹿だ。」やにわに太田は部屋を飛び出し様、怒鳴った。「こんな処に、貴様らと一緒に居られるか！」かくて、この計画は二度と実行されなかった。

しかし、一二月二四日のクリスマス・イヴには再び全キリスト教徒は一体となって会合し、先夜の言い争いは全く忘れ去られ、愛餐、茶菓、懇談の限りをつくして、「我等ノ愉快限リナシ」（内村「余は如何にして……」七五頁）

これより先、同年、五月の頃、一期生、伊藤一隆の実父、平野弥十郎は、愛息の切なる願いを容れ、一家を挙げて札幌に移住し来り、雑貨商店を開いた。家郷を離れ、家庭愛に飢えて居た学生たちにとって平野家の来札は旱天に慈雨を得た感があり、伊藤をはじめ、黒岩、田内、内田、大島、柳本らの六人は足繁く通うようになった。

一八八〇（明一三）年一期生の卒業も間近くなるにつれ、これ程、親密な友垣も、跡形なく崩れ去るのは如何にも残念だとの思いが、彼らのうちに生まれ、誰いうともなく、この六人で土地を共有開墾し、そこに根拠を定め、長く共同生活を営み、友誼を全うしようとの議が熟し、平野弥十郎に相談を持ちこんだ処、彼も亦、異議なく、やがて山鼻に二ヶ所、合計一四、九〇〇坪に及ぶ広大な土地を共同出資という形で買い求めたのである。この土地の世話人、小笠原豊平の娘、トミと伊藤一隆の間にロマンスが芽生え、一年後には同級生中、第一号の家庭が生れることになる。

同年、五月に入るとデニングが、六月には再びデニングとメソジスト教会のハリスの後任宣教師J・C・デヴィソンが来札するなど、この地の伝道戦線は漸く活気を帯びて来た。しかし、農学校の若いキリスト者たちにとって如何にも理解し難ったことがあった。それは、「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ」なることを信ずる同信の友らが、何故に彼は聖公会に、此はメソジストにと相別れねばならぬのかということである。

彼らの疑問は誠に当然な事だったのである。現に、明治初年、横浜に上陸した各派宣教師たちらも早くからこの矛盾に気付いて居た。彼らの多くは来日以前、中国伝道に従っており、その苦い体験から、教派制度は伝統長きヨーロッパ、アメリカ等に於てこそ歴史的必然性を持っているが、キリスト教にとって処女地なる東洋諸国に於ては、全く無意味、不必要なものであり、中国での失敗を再びこの日本に於ては繰返すまいと決めていたのである。従って彼らは常に超教派主義を基本とし、その集会をも教会と呼ばず公会と称した。日本での最古のプロテスタント教会なる横浜のそれも、「横浜公会」（また「日本基督公会」）と呼ばれて、一八七二（明五）年三月一〇日、設立された。その信条も亦、万国福音同盟会の九ヶ条の「教理的基礎」と同じ内容の、極めて簡潔なものを採用している。また牧師は当然、日本人であるべきだが、今はその資格ある者無き故に、当分の間、J・H・バラを仮牧師と呼ぶことゝした。しかし彼らの苦心も、彼らと無関係に後から後からと送り込まれて来る各教派、伝道団の宣教師の増すにつれ、脆くも崩壊するに至った。その原因の最大のものが経済問題であったことを我らはよく銘記すべきであろう。

一八八〇（明一三）年六月一三日には伊藤の母、平野トミ、祖母コウ、小笠原トミ（前述、伊藤一隆の妻となった女性）がデニングによって洗礼を授けられ、更に九月一七日には伊藤の実父、弥十郎、実弟、弥市が受洗して居る。この平野一家は後に農学校一期、二期卒業生らと共に独立教会の創立者の栄を担うことになった。

この時の感想を平野弥十郎自ら次の如く認めている。

「これまで我家は法華信者にてまことの神あることを知らず。暗きを愛せし者なりしが、我が男、一隆の導きにより、始めて真実の正道に帰し、親族一同皆々洗礼を受けたること、この上もなき幸なり」。（大島「クラーク先生とその弟子たち」一九四頁）

これが当時五七才、嘗ては江戸屈指の土木請負業者、明治五年には請われて開拓使出仕となり、五百数十名の土工らを引具して来道、札幌―千才―室蘭―函館間の幹線道路建設の難工事を為し遂げた傑物の告白であることを思うと、そのあまりの謙虚さ、誠実さに胸打たれる。

さて、内田瀞の日記中の一八八〇（明一三）年の項によれば、

「六月一一日（金）　今日デヴィソン氏〔メソジスト監督教会〕着札す。今夕信者達集合し、札幌教会々堂入費の金子五〇〇円計り借用すべきことを決す」。（大島「クラーク先生とその弟子たち」一八四頁）

とあり、後に彼らとメソジスト教会との葛籐の種がこの時、播かれたことがわかる。

七月一〇日、第一期生らは四年間の学業を終えて、卒業式を迎えることとなった。午后三時から全学生の兵式教練の後、演武場（現在の時計台）内の式場に於て、選ばれた五名の者が卒業演説を試み、首席、荒川の告別演説、教頭ペンハローの奨励演説、最後に「農学士」の学位免状が一三名の卒業生に授与された。

この日、別れを惜しんで二期生中の信徒たちは、卒業生中の八人の信徒を囲んで写真を撮り、晩餐を共にし、近い将来に一つの礼拝堂を建築しようと協議した。

かくして目出度く卒業免状を手にした一期生らは故郷に錦を飾って、各々一時帰省した。この間に平野家では、かねて手狭な旧宅から、後志通り（現在の南二条西一〇丁目附近）に移転していた。そこへ一期生の六人組が帰札したのはよいが、柳本は弟、彦次郎を、田内は弟、熊を、大島は作男、仁太郎と見事な黒軍鶏一番まで、携えて来たのである。この一団が平野家へ一度に寄寓したのであるから、その賑やかなこと一通りではなかった。やがて彼らは開拓使庁との契約に従い、柳内は七飯の勧業農場へ、伊藤、黒岩、内田、田内は開拓使御用係として、佐藤（昌）と大島は母校に留り後輩の教導に当るなど、社会人として出発した。

この頃、聖公会宣教師デニングが、北四条東一丁目、中村守重方に講義所を開いたので、二期生の信徒組は校内に於ける集会をやめて、一期生たちを含む聖公会派信徒と共に、此処に出席して礼拝を守るようになった。しかし、彼らの胸中に、一度燃え出した自分たちの教会を持ちたいとの願いは一期生が社会人として世に出るに従って、いよいよ膨らんで行った。他方、予ねてからの計画に従い、先に入手した山鼻の農地に、黒岩、内田、大島、田内、平野一家が合資して、家屋を新築し、若者らは此処に移転、「荒野の都」と称して、梁山伯さながらの生活を開始した。そして内村をはじめとする二期生らを頻繁に招きよせてはカルタ会、我慢大会、肝だめしを催し、また屢々鶏肉や野菜を煮込んだ大鍋で愛餐会を開くなど、血肉にも優る親密な交りを持つにつれ、この望みは益々強固になって行った。

かくして翌、一八八一（明一四）年、一月九日には「新教会建設委員」として佐藤（昌）、渡瀬、大島、足立、内村の五人が選ばれるに到った。

メソジスト教会側、デヴィソンは、この計画に就いて可成り前から相談を受けていたにも拘らず、恐らく彼らのいう「独立」という言

葉の真意を図りかねたのであろう、あまり気乗りせぬ様子であったが、前任者ハリスが折角洗礼を授け、入会まで果たしていた「小羊」たちが、教会の無いのに迷い、この頃、聖公会派の講義所に出入しはじめたのを知り、急遽、教会建築費として四〇〇弗を援助しようと申し出て来たのである。これに意を強うした委員達は同年三月一八日、直ちに会合し、地所と建物の規模を決定した。しかし理由もなしに多額の寄附金を受けることは「独立」を標榜する彼らの自尊心がゆるさない。一時借用ということにし、出来るだけ早く返済しようと決議した。月給、僅かに三〇円そこそこの新学士と月、一五円の給費生らの集りが、当時の日本円にして七〇〇円余の借金を負うのであるから彼らの心が大いなる不安と焦慮の念に駆られたのも無理からぬことながら既に矢は弦から放たれたのである。予定敷地も決り、大工からは見積書が出され、同月二四日には、約束の四〇〇弗の為替さえ到着した。ヨナタン・内村の言葉によれば、

「金、終に〔デビソンより〕来る。ヨナタン、臨事会計係となる。彼は寄宿舎の自室に厚み三寸〔一〇センチ〕の紙幣を持参した。生れてより彼の取扱いし最大の金額である。併し見よ、我が霊魂よ、金は汝の有(もの)にあらず、正に教会の有(もの)たるにも非ず。其は返済せらる可きものである。注意して其を用いよ。」(内村「余は如何にして…」八八頁)

この間、三月三〇日には「ジョン・K」伊藤一隆と中村トミとの結婚式がデニスの司式の下、「聖公会」式に行われた。これが札幌のキリスト信徒間の最初の結婚式であり、花婿と花嫁が聖壇の前に立って指輪を交わす異国風の儀式に出席者一同は眼を見張るのであった。続く祝宴では夜の更けるのを忘れ主客歓を尽して散会した。

しかるに一方、教会建設問題は思わざる暗礁に乗り上げてしまっていた。予定敷地は入手不能となり、適当な替地も見付からず、更に悪いことには、気の早い足立が独断で既に工事を発註してしまっていたのである。大工もまた木材の切り込みに入っていると言い、今更この契約を破棄するとなれば多額の違約金を支払わねばならない。「長老」佐藤と渡瀬は、責任は軽率な足立にあり、委員側は一切関知せずと法律論を以て頑として譲らず、大島と内村は、足立は委員会の意を受けたものと思い込み行動したので、彼にのみ責(せめ)を負わせるのは酷に過ぎる、また未信者との契約を軽視するのは信徒としての信用を失うものだとの道義論によって対峙したので、中に挟まれた足立は窮地に陥ってしまった。

「長老」たちの主張に何としても納得出来ない大島と内村は、或る雪の朝、会合して、足立のために二人で責任を負おうと取り決め、直ちに大工を訪問し、我らは貧しくあるが、違約の責任を逃れようとは思わない、と申し入れた。当の大工も二人の誠意に動かされて、二〇円で決着をつけようと折れて出た。足立もこの厚い友情に感激し、残金は自分が責任を以て払おうと言ったものゝ、彼にしても、内村にしても開拓使より受け取る定収入は高が知れている。そこで大島は、「自分が全額、立替え払いにしよう。やがて君らも月給を取る身になる。その時に幾分なりとも支払ってくれ。」と言って、さしもの難問もこれで解決した。後にこれを聞き伝えた内田瀞と、藤田九三郎が加勢した。終生、金銭に恬淡で、窮境にある者には己を顧みず施し与えて一向に苦にしなかった大島の若き日の面目躍如たるものがある。

しかし教会建設問題そのものが解決したわけではない。寧ろ、会合の度に論争の度を増すのであった。内村と広井とは連れだって家探しに歩き回ったが、適当な家は容易に見付からず、会員の間には意気消沈するものも現われて来た。

当時、デニングは教理問題で本部との間に意見の相違を来し、専らその折衝に当っていたらしく、札幌の伝道所は放棄されるか否かの瀬戸際にあった。これを聞き伝えた彼らは、聖公会派の信徒（伊藤一隆、平野一家等）と合同し、こゝに独立、超教派の教会を持つことは神の導きであろうと勇み立った。

五月一五日（日曜日）、全キリスト信徒は「荒野の都」に会合し、教会独立問題を論議した。理想家にして熱血的な内村は教派主義を全く払拭した教会を構成すべきだと主張し、内田、大島も亦之に賛意を表したが、多少とも世故に長けた「長老」佐藤と渡瀬は時期尚早なりと反対し、結局その日は何ら確定的結論に達しなかった。しかし純真無垢な内村らの主張は次第に会員に波及し、賛成者が増して行った。更に大島と内村は新教会の会則の草案起草を始めた。

五月の末近く、デヴィソンが札幌を訪れ、説教、洗礼、聖餐を執行し、その後の教会設立の件に就いて探りを入れたが、今や意気の挙っている「小羊」たちは無教派、独立の意図を隠そうともしなかったので、著しく不快の念を抱いて函館に帰って行った。

二期生らの卒業の日も間近に迫り、堅い床板に毛布を敷き、メリケン粉樽を聖壇とした会堂とも永久に別れる日が近づいて来た。彼らがこの賤しい一室に、ひれ伏して祈った夜々の感動は終生忘れることの出来ぬものとして深く心に残った。彼らは満腔の思いをこめて、農学校に於ける最後の日曜日（六月二六日）の礼拝を此処で守り、七人総ての者が三年半に及ぶ信仰生活を顧みて感謝と将来の抱負を語り、一つ心になって祈りを共にした。

一八八一（明一四）年、七月九日、第二期卒業式が行われた。例により、全校生による兵式操練の後、日本語と英語とによる卒業演説が為されたが、その栄を担ったのは、内村以下六名、すべてキリスト信徒であった。キリスト教反対者の主な攻撃の理由の一つは日曜日の安息遵守にあったが、これを厳格に守った者たちが、反って彼らに優り、学業優秀者に与えられる賞金七箇の内、六箇までを獲得したのであった。次いで、卒業生を代表して内村が立ち声涙共に下る告別演説をなし、満堂粛として声なく、キリスト教反対の旗頭だった流石の志賀重昂（当時一年生、後に「日本風景論」によって洛陽の紙価を高めた人物）も脱帽せざるを得なかった。

第二期卒業生全員は七月二五日付で開拓使御用係に任ぜられたが、宮部金吾は将来、農学校教師に補せられるの含みを持って、東京大学留学を命ぜられた。天性、善人にして如何なる人とも争わず、人の悪を思わず、常に「平和ならしむる者」として終始した宮部にとって、この任命は正に適材適所と言うべきであった。

五、教会の誕生

第二期卒業生が一時休暇を得てそれぞれ帰郷している間、大島は札幌市中を隅なくめぐり歩き懸命に礼拝の家を探し求めて居たが、遂に、南二条西六丁目に「白官邸（しろかんてい）」と呼ばれた地所つき家屋を見出したのである。この建物は開拓使が嘗て、「札幌市街ノ家屋改良ノ模範トシテ、本使、殊ニ設ケタルモノ」という二戸建二階屋の洋館であったが、外壁が白ペンキで塗られていた処からこう呼ばれていた。（札幌市教育委員会編「お雇い外国人」五〇頁）。大島は苦心の末、その一戸を二七〇円で手に入れることが出来た。階下は広く、会堂としては最適であった。粗末な講壇に、机を置き、その前方の畳敷の所を婦人用に、後方を男子用とし、此処には六脚の頑丈な椅子を置い

た。出席者が溢れた時は、中央の囲炉裏に板をかぶせ、更に一〇人分の席を得て総計五〇人余を容れることが出来た。尚、デニングは札幌伝道所を閉じ帰函する事になり、オルガンやキリスト教書籍などを寄附して行った。こうして念願の教会堂が誕生したのである。メソジスト派信徒は直ちに脱会届を本部に提出し、同時に三〇〇円余を返却した。聖公会派信徒も彼らと合同し左記の独立宣言を公にした。

「一、同窓の学生その宗教上の意見殆ど相同じきに係らず分離するの不可なる事、

二、札幌の如き狭隘なる市街に二派の集会所を設けて競走するの愚策なる事、

三、厳格なる信仰箇条と煩雑なる礼拝儀式の束縛を厭いたる事、

四、外国人の扶助を借りずして我国に福音を伝播するは我国人の義務なりと知りたる事。」

時に、一八八一(明一四)年一〇月二日のことであった。

宮部は、この日を以て独立教会の「創立記念日」としてもよいと言っていた。

内村はこの間、東京に在り、各教会に出席し、証詞を為し、親戚知己の間に伝道を行ったが、その最大の難関であった父親も遂に入信の決意を固めるに至った。彼が感謝に溢れ、弟、達三郎を伴って一〇月中ば帰札して見ると、夢にまで見た教会堂は既に出来上っており、住居も太田が一軒家を借り、足立、広井、藤田と共同生活をするよう用意を整えて待っていた。それは今迄の寄宿舎生活の延長のようなものであったが、更に自由と楽しみが加わった。

「一〇月一六日、日曜日、朝、K氏〔角谷省吾〕説教す。始めて『南通』の我等の新教会にて集会す。

K氏は『長老派信者』であった、〔農〕学校卒業生ではなかったが、我我『基督信徒』団体の貴重なる加入者であった。彼は未だ青年であった、併し深い精神と広い『基督信徒』としての経験を有せる人であった。」

(内村「余は如何にして……」一一一頁)。

これが新会堂での最初の日曜日の記録である。彼らが如何にその第一歩を慎ましく踏み出したかゞ窺われる。

一〇月二三日(日曜日)、青年のための特別な事業が必要だとの意見が起こり、東京の教会の例に倣い、Y・M・C・Aを組織することゝなり、内村がその副会長に任ぜられ、一一月一二日にその開会式が新会堂で開かれた。六〇名に及ぶ聴講者で堂は溢れんばかり、赤飯の接待があり盛会をきわめた。内村はこの時、「帆立貝と基督教との関係」と題する人の度胆を抜くような演題を掲げ、当時、日本にも漸く知られはじめた無神論的進化論者に対して一撃を加えた。一二月には更に第二回の集会が持たれ、足立、大島、内村等が大いに論じた。入会者も次第に増した様である。

はじめて自分自身の教会を持った会員らは瞳の如く之を愛した。日曜日は最も楽しい日で、朝早くから夜遅くまで信徒が出入して、人の声の絶えることはなかった。礼拝にはオルガンの伴奏も加わり、参会者の声は堂をゆるがせ、壁一重隔てた隣家からは屢々苦情を申し込まれたという。教会は人生を旅するものの宿であり、安息所、教室、読書、談論の場でもあった。そこには未熟ながら説教と奨励があり、心をこめた祈禱があり、頭を悩ませる神学議論があり、時には相場や商談さえ聞かれ、又、罪なき冗談に大笑いすることもあった。内村は当時の情況を東京の宮部に宛てゝ次のように報らせている。

「日曜日ごとの定期出席者は五〇人ばかりで、毎会新しい出席者が

ある。皆深い関心を抱いている。ある者〔中村良吉〕と僕の弟〔達三郎〕は聖書販売に興がっている。……〔角谷〕〔省吾〕君は次の日曜日から村落伝道を始める。〔大島〕君は教会の事に実に熱心だ。僕の目下の主な仕事は役所の事よりは教会管理の事である。婦人達への働きかけは、最近東京から一人の立派なクリスチャン婦人が来たので、非常に有望そうに見える。子供たちへの働きかけも、計画されている。明年、君が札幌へ来る時には、われわれの教会が全く一変したことを発見する事は間違ないと思う。……」(山本泰次郎訳編「宮部あての書簡による内村鑑三」四六頁)。

別に訪問委員会が出来、足立が主となって働いた。

日曜日の説教は、大島、渡瀬、伊藤、内田、内村が順次に受持ち、時に角谷が之を援けた。藤田は会計係として忠実にその役目を果した。しかし世間は、学窓を出たばかりの青年たちの思うような生やさしいものではなかった。凡ての事が計画通りに動くものではなく、各自の信仰もまた常に燃えつゞけるというわけにはいかなかった。最も皆の心を苦しめたのは経済問題であった。新学士の太田たちの合宿生活も極度に切りつめたものだった。こういう者たちの肩にメソジスト教会への借金の支払と、少からざる教会の経常維持費が掛って来たのである。

一一月一五日、教会はこの問題の解決のため、全会員の参集を求めた。予め大島、渡瀬、内田の三人が協議を重ねたが、さしたる名案もなく、そのまゝ総会に臨んだが、夜半に到っても解決のめどのたゝぬまゝ散会した。気落ちした大島が重い足を引きずりながら寓居にもどって見ると、懐かしいクラーク先生からの書状が彼を待っていた。開いて見ると手紙と共に一枚の外国為替が同封されて居るではないか。若い弟子らが新しい教会を建設すると聞いて彼が献金を送って来たのである。これを手にした大島は思わず「エホバ・エレ、主は備えたまわん!」と叫び、天を仰いで感謝と讃美の祈りを捧げた。この吉報は直ちに会員の間に拡まって歓喜の渦をまき起した。渡瀬はこの吉報を一日も早く宮部に知らせようと眼病治療のために上京する太田に托して、一一月一七日付で「……この程クラーク氏より当教会へ拠金として一〇九弗八六セントの為替証書到着仕り候、お喜び下され度く候……」と手紙を書いている。この金額については従来「一〇〇弗の為替」とされていたが、一〇数年前、当教会の故古田謙二の手により、手紙の原本が発見され、初めて明らかになった(古田謙二「独立教会の創立の頃—古文書に発見された秘話—」一九六五年一二月号三三頁)。教会設立の計画をいち早くクラークに知らせたのは内田瀞で、師が鉱山事業を始めたのを聞き知って、「ユタやネヴァダ地方で先生が沢山手にされる金銀の中から大きい塊を一個、どうぞ私と私の同志のために持って来て下さい。先生のところの鉱山が金銀をどんどん産出することを希望しています。」(J・M・マキ「クラーク」二二七頁)。と書いて居る。

当時のクラークはクラーク・ボスウェル鉱山会社の社長としてその経営に苦心惨胆して居た頃であった。不幸にもこの会社は程なく破産に追い込まれたのであるが、彼がこの為替を送ってよこした時は正にその倒産寸前であった。これを思えば、日本の弟子に対する彼の愛が如何に深いものだったかゞ窺われる。

この年一八八一(明一四)年のクリスマス祝会は一二月二九日まで延期された。諸方に出張している学士らが全部札幌に帰るのを待っていたのである。用意万端整い、午后六時開会、出席者、男女合せて三〇余名、主の降誕を祝い、「すべての恵みの源なる神」を讃美し合った。また愉快な劇が伊藤、足立、大島、渡瀬、内村ら総出で演

ぜられた。薬屋が重病人に仏教丸や儒教丸、果ては物質至上丸、最後にキリスト丸を売りつけるという内容で、如何にも新学士らしい発想に思わず笑を誘われる。田内は出張中に覚えたアイヌ踊りを披露し、内田も亦、最近経験した愉快な遠征物語を面白く聞かせるのであった。

明けて、一八八二(明一五)年一月一日、日曜日の午后、一同が会堂に集まり、各自感想を語り合い、教会の前途を祝福している所へ函館メソジスト教会から書状が到来した。それはデヴィソンからの、思いがけぬ厳しい内容の手紙であった。札幌のメソジスト会員らによる独立の教会設立の計画には同意し難い、ついては先に建築費用として用立てた資金の残額を幾許なりとも電報為替で返済して貰いたいというのである。今までの歓喜の情は忽ち失望、やがて激しい憤慨の情に変った。「直ぐ払おう。クラーク先生の金には未だ手を付けていない。教会の金庫の最後の一銭まではたき出して、我らの借金を片づけよう。金に縛られて信仰の自由と独立とを失うな!」「賛成!払おう!」一同は期せずして声を同じうした。内村は会計係藤田と共にこの処理を委かされた。

一月二〇付の内村から宮部への書簡によると

「……その時、クラーク校長から一七八円〔前述の一〇九弗八八セントを日本円に換算した額〕受け取っていたので、これにわれわれの或る者がクラーク校長から書物代として贈られた三五円を加え、直ちに電報でデヴィソン氏に送金した。しかしあの手紙はわれわれに大変善い事をしてくれた。二つの教会〔メソジストと聖公会〕の会員はさらに一層かたく結びつけられ、出来るだけ早く金を返すために、皆一つにかたまった。『収入のない』会員までが皆、寡婦の一銭をさゝげようと決心した。……君もこの仕事のためにぜひ我々に加わる事をすゝめる。……しかし死者をもよみがえらせ得る神はわれわれの貧しい精神をも立ち上らせ得給う。教会の兄弟たちのために祈ってくれ給え。……」(山本編「宮部博士への書簡による内村鑑三」五六頁)。

この時からの彼らの必死の努力は涙ぐましいものであった。実質二五円の月給のうちから一―二円を毎月定期献金する他、教会負債支払のため、一〇月までに各自、一四円献金しようと誓約した。その他に金銭的助力を要する会員もいる、YMCAの機関紙「六合雑誌」への寄附金もある、一体どうやり繰りして彼らは生活したのであろう。広井は新会堂二階の空室を月二円で借りることにし、太田、内村、足立、藤田らは賄代八円を浮かせるために、朝夕二食の自炊生活に切替えた。「人はパンのみにて生きるに非ず、自由と独立を求めて生きるのである。」と彼らは歯をくいしばって耐えたに違いない。こうして遂にこの年の終りまでに残金総額を貯えることが出来たのである。

此処に到るまで、彼らは新教会の運営面に於ても積極的に心を砕いた。

一月八日(日曜日)新教会の献堂式が行われた。会する者、五〇余名、空は晴れ渡り、身のひき締るような大気の中に神語りたもうの思いを深くした。大島もまた万感をこめて祝禱を唱えた。

二月一六日、教会規則作成のため、大島、渡瀬、伊藤、内村が集り、その草案起草の任に当った。連日七日間に亘る熱心な討議が続けられ、漸く試案全文が成り、総会の承認を待つのみとなった。

新教会の組織はきわめて簡単なものであった。その信条は「使徒信条」により、教会規則はクラークの起草した「イエスを信ずる者の契約」に基いたものであった。教会は五人の委員会によって管理

され、その中の一人が会計係に任ぜられる事になった。普通の事務はすべてこの委員会によって処理されるが会員の入退会の如き重大問題には全会員が召集され、その三分の二の同意を得て決定されることになっていた。教会は会員各自に対して教会のために何事か奉仕することを要求した。何人もその成長と繁栄に責任があり、また権限に於て平等であった。かくして、大島正健、伊藤一隆、渡瀬寅次郎、内村鑑三、藤田九三郎の五人が最初の委員に正式に任ぜられ、藤田が会計係に選ばれた。

三月六日、内村が会堂二階の空室に移り住むことになった。彼は其処の玄関番、留守番、掃除人、図書管理人とありとあらゆる役をこなした上、月二円の部屋代を払わなければならなかった。

やがて、内村は次年度開催予定の水産博物館へ出品する品の蒐集のため室蘭・日高方面へ騎馬で出張旅行に出かけた。その帰途、大暴風雨にさらされ、急性肺炎を起しかけたが、幸い医師カッターの手当宜しきを得て治癒したものゝ全快に約一ヶ月を要した。彼が自分の現職に疑問を持ちはじめたのはこの頃である。誠実潔癖な彼にとって情実のはびこる官界は、はじめからなじめる処ではなかったのである。「事情は後日話すから、ドーカ僕を狂った人間、新奇と変化を愛する人間と思わないでくれ給え。自分の将来について考えるため、僕は今秋、東京へ行かねばならない。――誠実な科学の研究がしたいのか。札幌県を去れ！キリスト教を宣伝したいのか。官界を去れ！……」と彼は宮部に訴えて居る（前掲書、八八頁）。それでも九月に、内村は、札幌近郊の厚別製材所に伝道説教に出かけて居る。これは内田が彼処に至る道路の踏査隊員に任ぜられたことから始まった。彼は製材所周囲の作業員宿舎に聖書を配り、キリスト教を紹介するのに全力を尽した。次いで藤田が道路の測量を受け持つことになり、この山中の滞在中、遂に一人の回心者を得た。道路建設工事責任者も亦、当教会員で、彼も藤田と共に福音の為に働いた。彼らの原始林に播いた種は無駄ではなかった。新道の開通を待ち兼ねていた求道者の切望に応えて、未だ一片の材木も運ばれぬ先に、「よき音づれをもたらすものゝ足」がこの新道を渡ったのであった。

内村の調査研究は一〇月、「鮑魚蕃殖取調復命書」と翌年六月「北海道鱈漁業の実況」とに結実し、殊に前者は画期的な新研究として賞讃されたが、彼としては将来に確たる展望も持ち得ず、さりとて官界に留る気もなく、いよいよ上京しようと決意した。

一二月末、伊藤と内村が上京するに当り、教会は、既に貯えられた血の滲むような献金を二人に托し、メソジスト教会に対する負債返却の務を委任した。

一八八二（明一五）年一二月二八日、二人はメソジスト宣教師J・ソーパーに面会し、負債残金全額を払い了えることが出来たのである（資料篇Ⅳ(4)(c)）。

「一、金一八一円三一銭也
東京にて、一八八二年一二月二八日、
教会建築補助の為一八八一年「札幌基督信徒」に貸与せる貸金の内、『メソジスト監督教会ミッション』に支払わる可き残高として、金一八一円三一銭也、内村鑑三氏より正に受取申候也
J・ソーパー」

彼らの歓喜は如何ばかりであったろう。二年間の節約勤倹の結果、遂に贖い得た自由と独立は何ものにも替え難い宝であった。爾来、

当教会はこの日を以て、「創立記念日」と定め、永く記憶した。彼らは「聖公会」或は「メソジスト監督教会」に反逆を試みたのではない、外国人宣教団が当然の事として怪まなかった教派性を何としても納得し得なかったのであり、又彼らの内の多くが武士の子であり、外国人の金によって自らの魂が養われるのを恥としたのである。

他方、我らはかのメソジスト教会宣教団に対して感謝を忘れてはならない。彼らは当時、四〇〇弗、邦貨にして七〇〇円という大金を無利息にて二年間借し与えたのである。彼らが信徒を失うのをおそれ、その独立宣言への報復手段として、貧しい信徒らを威嚇したものとのみ解するのはいさゝか行き過ぎであろう。

デヴィソンは一八八二(明一五)年の宣教師報告(ミッショナリー・レポート)に「札幌教会は初めから自給しており、経済的な独立をめざす高邁(ノーブル・スピリット)な精神を表している」と書いているし、後任者L・W・スクワイアーは次年度報告で「二年間、四〇人の信徒が働いて、五〇〇弗近い金を支払った。そして一八八三(明一六)年一月にサッポロ・ユニオン・チャーチとして知られている教会をつくった。これらの若い人々をメソジスト教会は失ったが、キリスト教にとって損失となったものではない。」と報告している(福島恒雄「北海道キリスト教史」一九六頁)。現に「札幌独立基督教会会員籍(名簿)写し」(資料篇名簿参照)を見ると、明治一七年一一月三〇日、岩井ウラ(署名番号三八)がこのスクワイアーに依り、当教会に於て受洗しており、之を始めとして其後二九名の者が明治一八年八月迄に、スクワイアー及び同派の宣教師R・S・マクレーにより受洗している。これによって、彼らが恩讐を越えて当教会に協力の手を差し伸べていたことが解る。かの不幸な事態が引起されたのは双方に何らかの誤解が在った為と思われるが、神はこの出来事の唯中から素晴しい果実を産み出したもうた。誠に「あゝ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」(ロマ人への手紙一一の三三)である。

一八八三(明一六)年二月二八日、メソジスト監督教会大会で彼らの退会が正式に承認され、こゝに名実共に「札幌基督教会」が成立した。「独立」の語が無いのは当時、札幌には教会なるものが他に存在せず、教会と言えば当教会を指したので、この名称を掲げたものと思われる(札幌独立基督教会と改称されたのは明治三三年)。

創立頭初の会員二二名の姓名は左記の通りである。

1伊藤一隆	2大島正健	3渡瀬寅次郎	4内田捨六
5内田瀞	6小野琢麿	7黒岩四方之進	8柳本通義
9内村鑑三	10藤田九三郎	11足立元太郎	12宮部金吾
13廣井勇	14伊藤トミ	15平野トミ	16平野コウ
17平野彌十郎	18平野彌一	19柳内義之進	20渡瀬庄三郎
21中村邦佐	22黒岩ノブ		

六、教会の成長

「白官邸」教会堂設立の頃、日曜日朝夕の講壇は大島、伊藤、渡瀬、内田、内村らが交互に受持っていたが、やがて各人とも開拓使の役人として出張勝ちとなり、大島独りの肩に過重な負担が掛って来た。之を見兼ねた教会員たちは新たに専任の伝道者を迎えようと、当時、東京大学留学中の宮部にその選考、交渉方を依頼した。宮部は実家に近い下谷練塀(ねりべい)町にキリスト教講義所を開いていた牧師が唯ならぬ人物なるを見抜き、彼に先ず白羽の矢を立てゝ交渉した。この牧師こそ後年、日本基督教会の指導者となった植村正久だったので

ある。植村も一時は大いに心動いた様子であったが、婚約者、山内季野の反対に会い、この件は失敗に終った。(佐波亘「植村正久とその時代」第一巻五七〇頁参照)その頃、渡瀬は一致教会の伝道師、辻元全二が北海道に渡り農業に従事しながら伝道したいとの志あるのを知り、早速、交渉の結果、明治一五年九月、専任伝道師として招くことが出来た。

前々から信徒たちは札幌市内を四伝道区に分け、各区に集会所を定め、交替で之に出席し、熱心に伝道していたが、辻元の来札により更に志気が挙った。明治一六年七月には婦人会が結成され、毎月一回、輪番で会員宅に集り、編物、裁縫などの手内職によって幾許かの収入を得て教会を援けた。

かくして、明治一七年までに、在籍会員、六〇余名に達したが、学生よりも寧ろ質実勤勉な商人、開拓者、官吏等が多く、この中に岩井信六夫妻、橘仁夫妻などがいた。岩井信六は維新の際潰滅した長岡藩の家老、河井継之助の家中だったが、明治九年、伯父、森源三(札幌農学校初代の副校長)の勧誘により農学校内の製靴工場に就職し、職員、学生らの靴作りに励んだが、明治一〇年、市内に独立開業した。彼は明治一六年五月に入会し、以来明治三〇年一一月五日、永眠するまで教会の柱石として、又、札幌禁酒会の熱心な支持者として活躍した。橘仁は明治八年、津田仙の学農社に農学を学び、後に北海道開拓の志を起し、明治一六年四月、来道、一七年一二月、入会した。その後、元村に定住、苦心の末、林檎の栽培に大成功を収めた。両家とも一家を挙げて教会を支えた。

やがて「白官邸」会堂は、もはや多数の会衆を収容し切れなくなり、会員たちは新たに独立の会堂を建設することを議決し、南三条西六丁目に二六〇坪の土地を買入れ、此処に藤田九三郎の設計による立派な新会堂を建立し、明治一八年八月八日、目出度く献堂式を挙げた。工費一、三八五円、総て会員と一般の寄附とによったもので、以来、三七年間、「あかしやの教会」と呼ばれ、一九二二(大一一)年五月に到る迄、多くの人々の霊を養い、救いを与うる聖所として用いられた。

一八八六(明一九)年一月、教会は数回の臨時総会を開き、大島正健を正式に牧師として任命し、按手礼を受けていないにも拘らず、洗礼、聖餐の儀式を司らしめることを議決した。「我教会の如き独立独歩の教会に於ては教会員の全体が信頼して牧師と仰ぐ人があれば、其の人に洗礼並に聖餐の式を司って貰って一向差支えがないという信念」(創立六〇年記念日、宮部講演から)によるものである。

この決議のあるまで大島は実質的には牧師の役を果しながらも、洗礼の儀式は一切行なわず、総て小川義綏(よしやす)(横浜一致教会初代長老)D・タムソン(アメリカ長老派宣教師)、L・W・スクワイヤー、R・S・マクレー(以上メソジスト監督教会宣教師)等に之を依頼していた。大島は胚芽の如き信徒の群から堂々たる教会堂を持つに到る迄、常にその中心にあり、その熱誠と努力に於て他に較ぶべきものはなかったが、決して事を私せず、独断を以てせず、常に衆議を重んじ、物のけじめを正しうする真に民主的(デモクラチック)な人物だったのである。

彼は以上の決議に従い、明治二〇年四月一七日、一一名の希望者に授洗したのを手初めに以後引続き公に洗礼の儀式を執り行った。これが伝承を重んずる教派の牧師、宣教師らの物議の的となり、その洗礼の無効を宣し、或は異端の業なりと極論する者さえ出て来た。一方、教会は内部的にも非常な苦境に立たされていた。それは、これまで大島を助け、全霊を傾けて伝道の業に励んでいた辻元全二が

同年三月肺患の為、惜しくも病没したからである。

この内憂外患の折しも、同志社校長、新島襄夫妻が病気静養のため来札滞在し、大島一家と親交を結ぶに到った。新島は嘗て、クラークから札幌の「小羊」たちの教導を依頼された事もあり、又、一期生の内田瀞から、彼らの信仰生活について詳しい報せを受けて激励の返信を出すなど、(大島「クラーク先生とその弟子たち」一七〇頁)常にこの教会の成長に注目し、深い関心を抱いていたので、この時、教会が直面していた難関を他人事とは思わず、早速打開の道を講じた。

京都に帰った新島からその秋、大島に対して一通の書状が寄せられた。彼は先ず後任の伝道師として同志社神学校出身の馬場種太郎(後に竹内と改姓)を推薦し、次いで教会が既に着手していた空知郡市来知(現三笠市)の伝道所を教会として昇格することを薦めて居る。更に彼は

「……然しこの事は貴兄の按手礼の出来候上に被成方が上策かと愚考仕候、何分此一二月の休暇に断然右按手礼御専行の程切望候、グリーン氏ぐらいの臨場を御依頼あるも宜しきかと存候、然し速に江別、当別、岩見沢に御着手あるは小生の最も切望する所に候、願くは石狩川平原に独立の教会を御設定ありて、他年北海道の依って立つべき基礎となし、依て進むべき精神となし給はん事を。

この自由主義の教会を建てるには昔時より為に血を流す者多く、所謂血を以て買われたる自由なれば、差少の理、一時の方便の為にこれを安売りし賜う勿れ。生は此自由を以て我子孫迄も永く信条と為し人民の元気を養生せしめんと焦慮罷居候、貴兄願くは生の老婆心を御了察あり為に御工夫あり賜え、願くは貴兄の全身全力を主に呈し、主の御国の為に御働きあれ、書、万一をつくさず

頓首

明治二〇年晩秋

襄

大島正健兄」(大島「クラーク先生とその弟子たち」二三〇頁)

と記している。

当教会は新島の薦めを受け入れ、馬場を伝道師として招くことに定め、一方、一〇月二五日、左の如き書面を東京の諸教会の牧師並に宣教師の幾人かに送付した。

「益々御清福奉賀候、陳ば当札幌及其近郡に於て福音の勢力日々熾に相成候に付、此際、弊会は愈々独立の体裁と基礎とを鞏固にして益々伝道に従事可仕所存に候処、弊会には未だ一般他教会の公認を受けて洗礼と聖餐との式を司る者無之為めに大に不便を感じ候に付、従来弊会の主任者なる大島正健に今回其権を御公認被下度念願に付き一応御依頼申上候、尤も御承知の如く弊会は他教会とは其起源を異にせる教会に候得者、何率、札幌独立教会会員の一人として同氏に按手礼御授け被下度又御賛成被下度候、諸牧師には可成御立会被下候様御周旋を仰ぎ候　草々頓首

明治二〇年一〇月二五日

札幌基督教会書記」

(有島武郎全集「札幌独立教会」第一巻一四六頁)。

植村正久、井深梶之助、小崎弘道、本多庸一等より之を承諾するとの返事が来たので、大島は翌二一年一月、上京した。

当時、在京中の柳内義之進は、教会総代とし大島と共に各牧師間を斡旋奔走したが、その事情を次のように教会に報告している。

「拝啓仕候陳ば大島君按手礼の事に就きては御着京以来日夜御奔走諸教師を訪ひ種々御相談ありしが漸く御相談も調ひ去る十一日小生より札幌教会総代として

今回大島正健を弊会牧師に選定いたし度候間御試験の上御協議ありて按手礼御授け被下度付ては明十二日午後三時一番町一致教会堂まで御来臨願上候。

との招待状を、本多庸一、井深梶之助、伊勢時雄（今の横井）、小崎弘道、植村正久、木村熊二、田村直臣、小川義綏、三浦徹、和田秀豊、小儀見元一郎、石原量、石原保太郎の諸氏に発したるに、当日御来会相成候は、井深、植村、小崎、伊勢、和田、大儀見、石原量の七教師のみなり。午後三時より会議に執りかゝり、小崎君を議長に、伊勢君を書記に選み、大島君は申すまでもなく、尾崎宗隆君及び小生も其席に列し候。先ず按手礼を授く可きや否やに就き暫く評議せしが、井深、植村二君より要するにかく諸教会の教師集会の上、北海道の伝道師として按手礼を授くる事は六ヶ敷からん其責任は何れの教会に属すべきや誠に漠然たる話なり若し他日大島君が異説にても唱へらるゝ事あらば如何にすべき故に組合教会の教師主任となりて試験を為し一致其他の諸教師は之れに立会ふ事になし按手礼を授け大島君の名を組合教会の牧師の中に列し其牧師たる資格上に就ては組合教会が一切其責任を負ふ事となしては如何との動議なりしに孰れも賛成されしかば小崎君より右にて異議なきや否やを大島君に問はれたり大島君は更に異議なしと答へられ総代も承諾の意を表し候この一條は最も重大なる件なれば之れに就きては諸君に必ず御意見ある可く一応御相談の上にて事を決するが順序なれども事急にして之れを為すの遑なく縦令諸君は御不同意にもせよかくなさざれば按手礼を見合すより外なかるべしかくては大島君が上京せられたる主旨に戻れば必要の場合に処する権限は総代に附与せられたる者として断然右にて異議なき事を承諾致候一寸考ふれば札幌教会は以後組合教会に属したる如く考へらるゝも決して左様にては無之唯大島君が組合教会の牧師の中に列せしまでにて札幌教会は矢張元の如き独立教会に候。（後略）」（有島武郎「札幌独立教会」一九〇一（明三四）年、聖書研究第一四、一五、一六号に連載した文章、有島武郎全集第一巻一二九頁～一六一頁中一四七頁以下）

この書簡が教会員の間に意外な反響を呼び起し、大島も教会も新島の謀略によって組合教会に取り込まれて了ったとの誤解と忿懣が生れ、大島が帰札した時には、停車場に迎え出る者は一人も無いという状況であった。この出来事は大島にとって深い心の傷痕（いたで）として残り、後にあれ程愛した農学校と札幌基督教会を後にして同志社に赴任する原因の一つとなった。

極く最近（昭和五七年八月）、当教会に保管中の古文書の中から次の様な新島より当教会宛の書簡が発見された。

〔封筒表書〕
「北海道札幌北一条西三丁目
大島正健様方
（消印）和田健三様」

〔封筒裏書〕
「京都寺町通丸太丁
新島　襄」

「　　尚々、大島、小寺、馬場諸兄ニ御転声奉仰候
拝啓過般大島正健兄按手礼之儀ニ付、和田兄ヲ以テ御丁寧之謝祠〔詞〕ヲ御送被下候条、小弟ニ於テハ実ニ恐縮千万之至ニ候、元来同兄按手礼之事ニ付、少々工風ヲ廻ラセシハ他ニアラズ、大ニ貴会之北海道ニ孤立シテ他人ノ扶助ヲ仰カレス殊ニ入会者ヲ受クルノ点ニ至リ尤モ御困難ナルベシト存ジ、又大島兄ノ其任ニ当ルニ足ル

ヘキヲ確信致候所ヨリ御周旋致候訳ニ而小生ニモ貴会兄姉ト共ニ我ガ主ニ使フルノ一小分ヲ竭シタルニ止リシ耳(のみ)ニ而決シ而右様御謝詞ヲ受クルノ理由ハ毛頭モ無之事ト奉存候。然シ今回之好都ニヨリ貴会ノ兄姉等一同喜ヒ賜ハヽ小弟モ亦喜ビ兄姉等一層奮励福音之為ニ働キ賜ハヽ小弟モ亦一層兄姉等之為メニ奮励祈禱スベシ。嗚呼兄姉ヨ我等山海ヲ隔テ居所ヲ異ニスルモ矢張主ノ招ヲ受ケ主之恩恵ヲ蒙リタル同一ノ群羊タレバ願クハ小弟之前途謙譲主ト共ニアリ。一小信徒ノ本分ヲ竭シ一生ヲ送リ得ベキ様、又殊ニ同志社之前途全ク主ノ誘導ヲ蒙リ候様、御祈禱アラン事ヲ奉希候。貴答迄匆々敬白

〔明治二一年〕三月十六日　　新島　襄

札幌教会　御中

（原本は巻紙に毛筆を以て走書きしたもの、同志社大学教授末光力作氏が判読清書した。〔……〕は私註。下巻、資料篇に写真を掲載）

これに依ると、教会に生じた誤解は大島の説明によって解け去り、反って感謝の情と変り、教会は新島に丁重な感謝状を呈していることが解る。新島についての評価は人によって異るが、当教会に関する限り、常に援助の手を差し伸べ、愛の労苦を惜まなかった恩人である。

以後、教会はしばらく平安を得ると共に堅実に進展して行った。当時、日本を風靡した欧化主義の影響もあって、明治二一年から二三年に及ぶ三年間は教会の黄金時代とも云うべき時期であって、米国留学を終えた宮部、広井、新渡戸(旧、太田)らが続々と帰朝し農学校教授陣に加わり、一方、本州教会より相継ぐ転会者、新たな求道者も多く、毎日曜日、礼拝に出席する者は二五〇名にも及び、水曜日祈禱会の如きも、参会者三、四〇名を下らず、婦人会、青年会共に大いに振い、別に老婦人会も起った。市内伝道は云うまでもなく、市来知には空知教会を、月形、当別には講義所を設けた。明治二三年一月に行った連夜演説会には会する者、毎回二五〇余名にも及ぶ盛況だった。有名な空知集治監獄にも福音は伝えられ、囚人中に求道者が多く現われるに到った。同年三月、竹内(旧姓馬場)伝道師は同志社に於て更に研鑽をつむため辞任したので、教会は留岡幸助の門下にして囚人伝道に志ある中江汪を教務主任として招き、空知方面の伝道をも兼務させた。空知教会は明治二三年九月、当教会に合併されることになった。

同二三年二月調べの教勢報告によれば、

現住会員　一五九名
道内不在会員　一八名
道外不在会員　三二名
会員総計　二〇九名

となっており、教勢の充実を思わせる。

当時、札幌市内会員は一三の組会に分れ、各組は組長、委員等を持ち、各々が交互に家庭集会を開き、会員の育成と懇親とに努めるなど、組織的活動も盛んであった。

しかるにこの頃から国粋主義が復活し、キリスト教攻撃の声が盛んに起り、その影響は教勢に大きな打撃を与え、参会者も減る一方となった。之に追い打ちをかけるように、明治二三年には一致教会の講義所(後の北一条教会)、メソジスト教会等が相継いで設立され、二六年には聖公会教会も再興されたので、本州方面からの転会者の中から母教派へと転出する者も多く、再び当教会の苦難時代が巡り来った。人口三万にも満たない札幌に四つの教会が竝び立って競うという事がそもそも無理だったのである。当教会の苗穂伝道所も明

治二四年四月には廃止、五月には市内に大火があり、以来、市内講義所も復興せず、地方伝道は全く不可能となった。

一八八二(明二五)年、組合教会牧師海老名弾正が来道したが、その折、当教会員は彼に面会し教派分裂により反って教勢を低下させる愚かさを説き、少なくとも北海道に於ける伝道は超教派の合同教会を以てすべきだと提案した。海老名も大いに賛成し、押川方義(日本基督教会)、本多庸一(メソジスト教会)らと相談の上、是非この議を纏めようと約したが、帰京の途上仙台で押川に面会し、この件に就いて大いに説いたが、彼は全く賛意を示さず、遂にこの事は成らなかった。海老名は更に書を寄せ、この上は、組合教会と一致して北海道伝道に任じようと提案して来たが、之は当教会の根本の超教派、自主独立の精神に反することであり、単に教勢拡張の為めに本末顚倒(てんとう)してはならぬとして応じなかった。

大島正健は明治一五年、教会創立以来、同、二五年まで一〇年間、農学校教授としての公務と並んで教会委員長、後には牧師として、一切報酬を受けず、全心全霊をその維持、発展の為めに捧げて来たが、佐藤昌介校長から官立学校の教授が教会牧師を兼務することの不可なる旨、内々に注意を受け、この年、四月二七日、遂に牧師を辞任し、同時に洗礼、聖餐の儀を執り行うことを停止した。彼が牧師に任ぜられて以来、辞任に到るまで洗礼を授けた信徒は一六四名に及んだ。以後、彼は一信徒の立場に帰り、日曜日の講壇を守りつつ役員として奉仕を続けた。

明治二六年初頭よりは、大島は講壇をも辞し、中江が代って之を守ることゝなった。

当教会の創立一〇周年記念日は明治二五年一二月二八日に当っていたが、翌二六年一月二八日に挙行することになった。それに先だち一月二二日、教会総会が開かれ、諸報告が為された。それによれば、在籍総会員二七三名、会計収支六二〇余円、他に大島が仮議長となり教会規則改正を議した後、左の如く新規則を定めた。

(明治二六年一月改正)

「　　札幌基督教会規則

第一条　教　　会

第一節　本会ヲ札幌基督教会ト称ス

第二条　役　　員

第一節　教会ノ役員ハ牧師伝道師書記会計トス

第二節　牧師ハ会衆ヲ牧シ礼拝及ヒ伝道ノ事ヲ掌ル

第三節　伝道師ハ牧師ヲ補佐シ伝道及ヒ慈善等ノ事ヲ掌ル

第四節　書記ハ本会ニ関スル一切ノ記録ヲ負担シ会員ノ出入統計及ヒ文書往復ノ事ヲ掌ル

第五節　会計ハ本会ニ関スル一切ノ金銭及物品ノ出納ヲ掌ル

第三条　常　議　員

第一節　伝道事業ノ伸縮経費ノ予算ソノ他重要ノ事件ヲ議定スル為メ常議員十名ヲ置ク

但常議員ハ他ノ職務ヲ兼スルヲ得ス

第四条　組　　長

第一節　本会々員ヲ分ツテ若干組トシ毎組一名ノ組長ヲ置ク

第二節　組長ハ受持部内組員ノ動静ニ注意シ役員ヨリ委託セラレタル事件ヲ伝達シ又役員ノ求メニ応シテ役員会ニ列ス

第五条　選　　挙

第一節　会計及常議員ハ教会員ノ投票ヲ以テ選挙シ常議員ノ任期ハ満二ヶ年トシ毎年ソノ半数ヲ改選シ会計ノ任期ハ満一ヶ年トス

第二節　書記ハ牧師之ヲ選定シソノ任期ハ満一ヶ年トス
第三節　組長ハ役員之ヲ選定シソノ任期ハ満一ヶ年トス

第六条　会　　議

第一節　会議ヲ分ツテ役員会、常議員会、及ヒ総会ノ三種トス
第二節　役員会ハ役員ヲ以テ組織シ本会ニ関スル通常ノ会務ヲ議ス
第三節　常議員会ハ常議員ヲ以テ組織シ第三条第一節ニ掲グル事項及役員ヨリ請求シタル事項ヲ議ス
但議員出席過半数ニ充タザルトキハ之ヲ開クヲ得ス
第四節　常議員ノ議決ハ役員会ノ同意ヲ経テ之ヲ実行ス
若シ両者ソノ意見ヲ異ニスルトキハ総会ニオイテ裁決ス
第五節　総会ハ毎年一回之ヲ開キ伝道及会計ノ報告役員常議員ノ改選規則ノ修正ナラヒニ役員会常議員会ヨリ提出シタル原案ヲ議決ス
但シ毎年一月ニ之ヲ開ク
第六節　本会ニ関スル重大ニシテ最モ至急ノ決議ヲ要スルトキハ臨事総会ヲ開ク事ヲ得

附　　則

会員中本会ノ面目ヲ汚損スル者アルトキハ役員会常議員会ノ議決ヲ経テ之ヲ除名ス

以下余白」

一月二八日の創立一〇周年記念祝会には教会員のみならず、ＹＭＣＡ、他教会牧師、禁酒会々員までを含めて来会する者三〇〇余名、盛会を極めた。当時の記録によれば、

「　十　年　紀　祝　会

我教会の十年期は、昨年十二月に相当すれども、時甚だ切迫したりしを以て、協議の上、遂に本年一月二十八日を期して挙行したり、その順序は

第一　讃　美　歌
第二　歓迎之辞　　司会者　内田　瀞
第三　讃　美　歌
第四　聖書朗読　　宮部金吾
第五　祈　　禱　　森山源五郎
第六　教会歴史朗読　　柳本通義
第七　報　　告　　小寺甲子二
第八　讃　美　歌　　青年会員数名
第九　演　　説　　大島正健
第一〇　祝　　詞　　管田勇太郎
　同　　松浦松胤
　同　　塩見孝次郎
第一一　寄贈の祝文祝電（二十余通）　　和田健三
　朗　　読　　岩井信六
第一二　先牧師への謝辞　　仁科信蔵
第一三　委員への謝辞　　大島正健
第一四　感謝の祈禱　　一　　同
第一五　讃　美　歌

続いて親睦会を開き、茶菓を喫し、清く楽しき余興ありて主客共に感じ且つ歓びて散会したり、此時来会者弐百余名、翌二十九日夜、演説会を開く、来会者参百名ばかりなりき。

㈠　社会の原動力　　塩見孝次郎
㈡　嘉の時　　栗原宗治
㈢　今人の義務　　大島正健
㈣　今夕の演説を聞て感あり　　新渡戸稲造　」

（札幌基督教会報告、明治二六年一一月一五日第一号）

農学校時代の青年らが今や錚々たる学者、立派な社会人となり、教会を盛り立てゝいるのに目を見張る思いがする。

同年四月に到って、中江汪が伝道師辞退の意を表したので二〇日、常議員、組長の連合会議が開かれ、一、中江伝道師辞任の件を承認、二、後任牧師斡旋方を同志社に居る竹内種太郎に依頼する、の二件を議決した。かくして同志社神学部出身の四方素（すなを）を牧師として招聘することが出来た。この場合にも当教会が独立の超教派教会だというので按手礼に問題があったようであるが、小崎弘道の取りなしによって、諸教派合意の下に之を受けることを得、七月二六日、四方素、うた子夫妻が着任した。同二九日には、その歓迎会を中島遊園地、一茶亭に開催、市内はもとより遠く郊外からの来会者は一〇〇余名に上り、教会の将来への期待は更に強められた。

一〇月に入って大島は札幌農学校をも辞職し、遠く京都、同志社大学教授として赴任することになった。これは、故新島襄生前の約束に従ったものとはいえ、明治九年、北辺の地に骨を埋めんとの決意に燃えて来道して以来、一七年間札幌農学校と札幌基督教会の為めに全身全霊を献げた彼にとって断腸の思いであったろう。

同月二日夜、送別会が開かれ、会する者一三〇余名、内田瀞が総代として謝辞を述べ「ウェブスター辞典」を贈呈して後、茶話会を催し歓談、惜別の名残りは尽きなかった。

越えて四日、大島は別れを惜む多数の教友と農学校学生等の見送りを受け、遂に札幌を後にした。以後、教会は牧師、四方素を中心に、役員、宮部金吾、伊藤一隆の愛護と指導の下に新たな歩みを始めるのであった。

―― 終 ――

注――敬称はすべて略した。〔……〕は私註とする。

○参考文献

大島正健「クラーク先生とその弟子たち」（図書刊行会、昭和四八年三月二〇日発行）

ジョン・エム・マキ、高久真一訳「クラーク、その栄光と挫折」（北海道大学図書刊行会、一九七八年三月二五日発行、第一刷）

太田雄三「クラークの一年」（昭和堂、一九七九年八月三〇日発行、初版第一刷）

逢坂信忠「クラーク先生詳伝」（財団法人、クラーク記念会発行、丸善株式会社発売、昭和一〇年一月二五日、再版）

蝦名賢造「札幌農学校、クラークとその弟子達」（図書出版社、一九八〇年八月二五日発行、初版）

札幌市教育委員会編「お雇い外国人」（北海道新聞社、昭和五六年一二月一五日発行）

有島武郎全集第一巻（筑摩書房、昭和五五年八月三〇日発行、初版）

宮部金吾博士記念出版刊行会「宮部金吾」（宮部金吾博士記念出版刊行会、岩波書店発売、昭和二八年一二月一〇日、第三刷）

政池　仁「内村鑑三伝」再増補改訂新版（教文館、一九七七年一〇月三〇日、初版発行）

内村鑑三・鈴木俊郎訳「余は如何にして基督信徒となりし乎」（岩波書店刊行、昭和一〇年五月一五日発行、第一刷）

内村鑑三・山本泰次郎訳編「宮部博士あての書簡による内村鑑三」（東海書房、昭和二五年一〇月二五日発行、初版）

前田多門・高木八尺編「新渡戸博士追悼集」（故新渡戸博士記念事業実行委員、昭和一一年一一月二五日発行）

松隅俊子「新渡戸稲造」（みすず書房、一九八一年八月二五日、新装版）

故広井勇工学博士記念事業会「工学博士、広井勇伝」（工事画報社、昭和

五年一〇月一日発行）
宮部金吾「札幌独立基督教会創立六〇年記念会講演」（札幌独立キリスト教会刷）
札幌独立キリスト教会「札幌独立教報」（昭和四〇年一月一〇日発行第一号、同年一二月一七号、昭和五四年一月号六七号、一九八一年二月号七五号、七七号、七八号等、その他教会報告よりの摘要コピー（山本義晴氏による）多数）
札幌独立基督教会々員籍（名簿）写し――明治一五年一二月より昭和五〇年三月（一～一一七二）（札幌独立基督教会史編纂委員会発行）
青芳勝久「植村正久伝」（教文館、昭和一〇年九月二日発行）
佐波亘「植村正久とその時代」第一巻（教文館、昭和四一年三月二五日、復刻発行）
霊南坂教会創立一〇〇年記念事業実行委員会「霊南坂教会一〇〇年史」（一九七九年一〇月一〇日発行）
同志社大学人文科学研究所編「熊本バンド研究」（みすず書房、昭和四〇年八月一五日発行、第一刷）
海老沢有道・大内三郎「日本キリスト教史」（日本基督教団出版局、一九八〇年二月五日発行、第七版）
福島恒雄「北海道キリスト教史」（日本基督教団出版局、一九八二年七月一五日発行、初版）
工藤英一「明治期のキリスト教（プロテスタント史話）」（教文館、一九七九年一一月一〇日発行、初版）
山路愛山「基督教評論・日本人民史」（岩波文庫、一九八二年四月二〇日第五刷）
ビーアド新版・松本重治他訳「アメリカ合衆国史」（岩波書店、一九七六年三月一五日発行、第九刷）
榎本守恵・君尹彦「北海道の歴史」（山川出版社、昭和五五年三月一日発行、二版、一一刷）
近代日本総合年表（岩波書店、一九六八年一一月二五日発行、第一版、第一刷）
北海道大学編写真集「北大百年、一八七六―一九七六」（北海道大学図書刊行会製作）

Lincoln

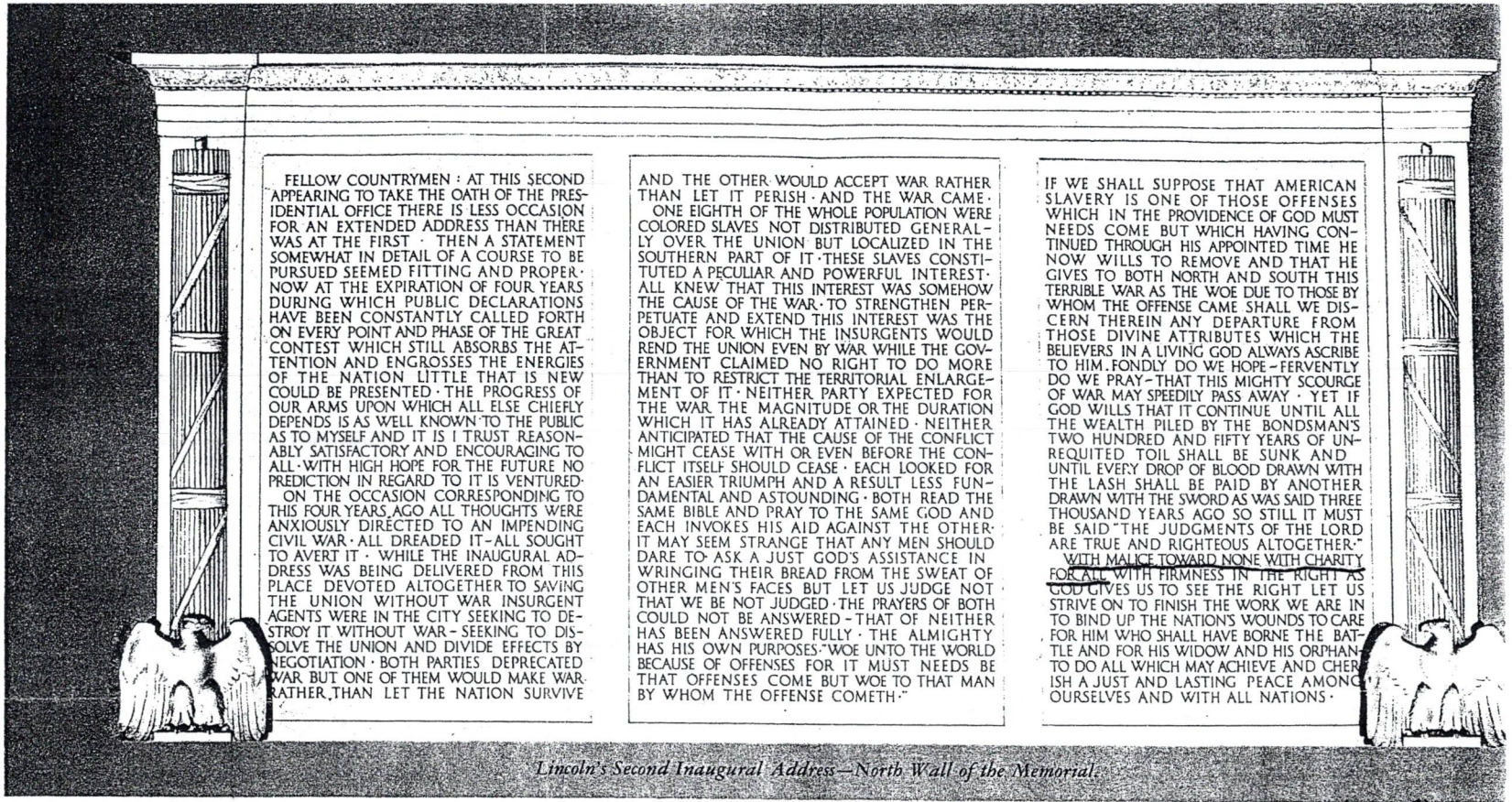
MEMORIAL

r whom he saved the Union, the memory of

forts were made to secure a memorial, it was not until February 1911 that Congress passed the legislation that procured it. In that act, Congress provided for a "Commission to secure plans and designs for a Monument or Memorial to the memory of Abraham Lincoln."

The commission held its first meeting on March 4, 1911. Almost a year later, at its 10th meeting on February 3, 1912, it decided to locate the memorial in Potomac Park on the axis of the Capitol and the Washington Monument, facing east toward them. This site had been recommended by the Commission of Fine Arts. Upon invitation, Henry Bacon and John Russell Pope, architects of New York City, prepared designs for a structure. The commission selected Henry Bacon to prepare a final design, and Congress approved this on January 29, 1913.

Workmen broke ground at the site selected for the memorial on February 12, 1914. The cornerstone was laid a year later. As work progressed on the structure, the commission selected Daniel Chester French to sculpture the Lincoln statue and Jules Guerin to design and execute murals for the end walls and the ornamentation on the bronze ceiling beams. After more than 6 years of work at the site, the completed memorial was dedicated in a ceremony on Memorial Day, May 30, 1922. Chief Justice William Howard Taft, as chairman of the commission, presented the memorial to President Harding who accepted it for the United States.



Lincoln's Second Inaugural Address—North Wall of the Memorial.

Architecture of the Memorial

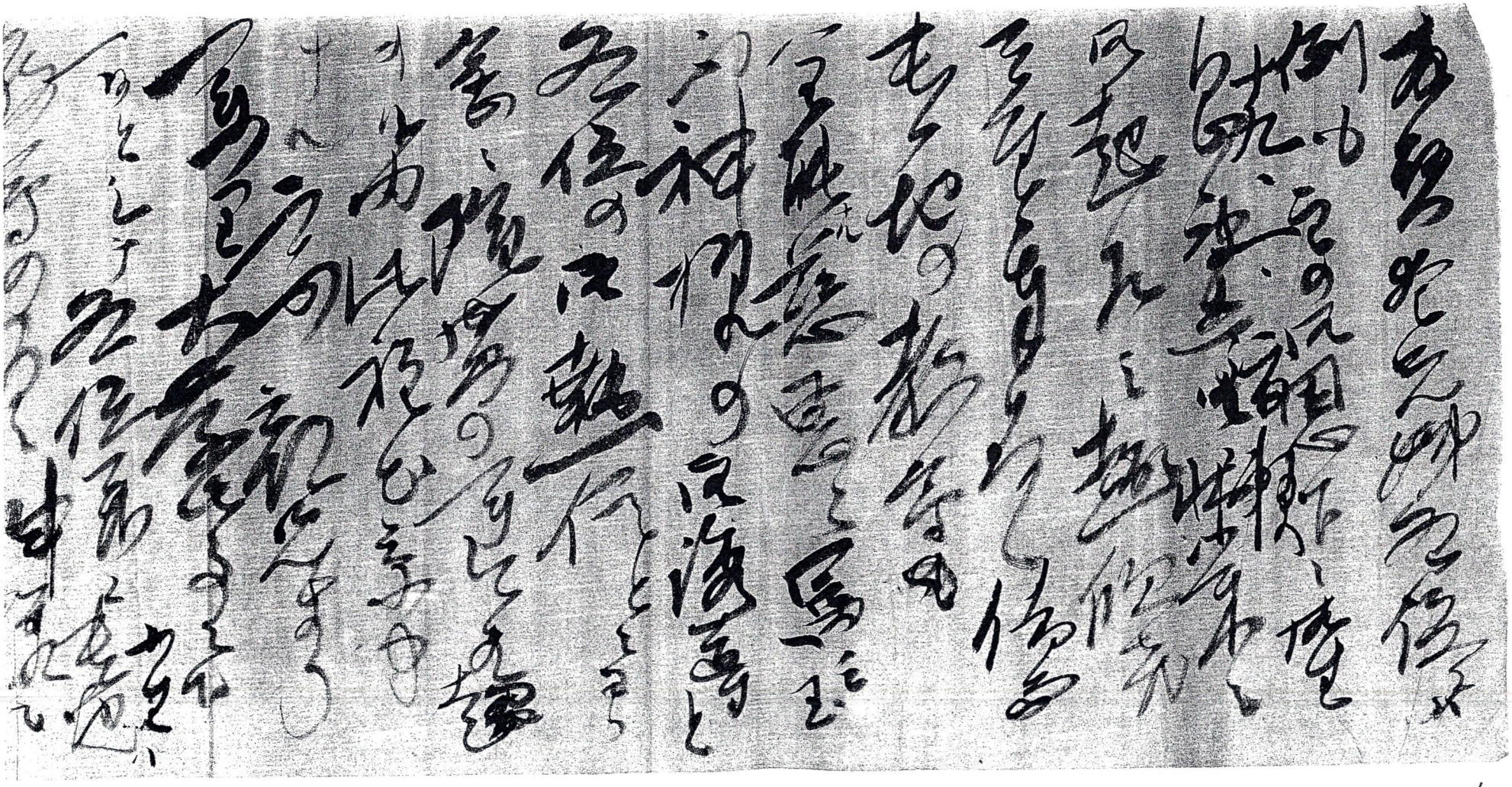
The memorial is of white Colorado-Yule marble. Its architectural lines are classical. The plan is similar to that of the Parthenon, the temple to the Goddess Athena on the Acropolis in Athens. The outer columns are Doric; the columns inside the great hall are Ionic. Together they represent Greek art at its perfection. The memorial building would not be out of place if set down among the great antiquities of Greece and Rome. Its beauty and purity of design equal the best of the ancient world.

Within the broad framework of classical design, the structure has a motif that symbolizes the Union of the States. Thirty-six columns, representing the 36 States in the Union at the time of Lincoln's death, surround the walls of the Memorial Building. A frieze above the colonnade names these States. On the attic walls above the frieze are the names of the 48 States comprising the Union at the time the memorial was built. Ernest C. Bairstow of Washington carved the frieze and the decorations of the attic wall.

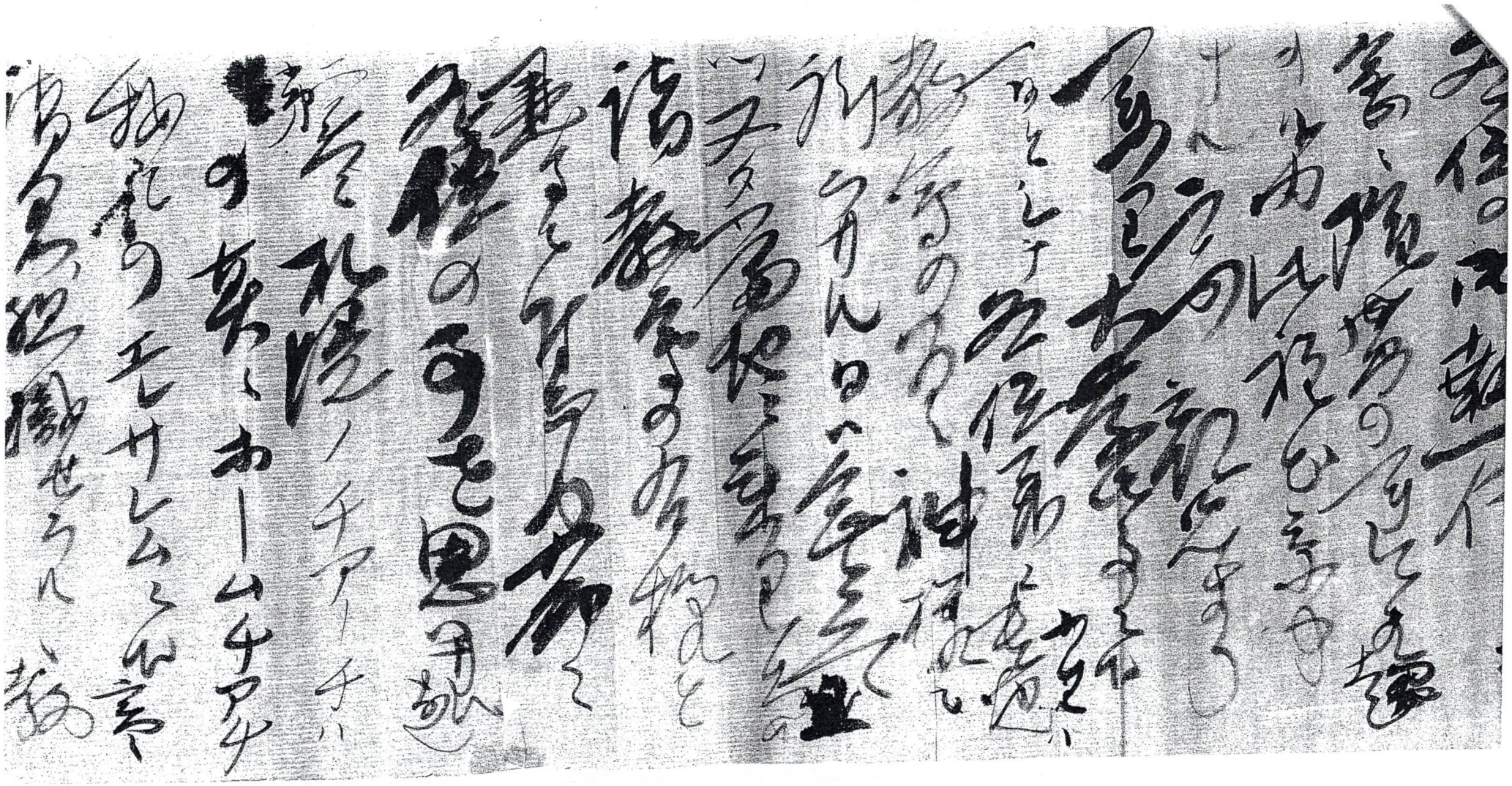
Within the memorial chamber are three commemorative features, a colossal seated statue of Lincoln and two huge inscribed stone tablets. The marble statue of Lincoln occupies the place of honor. It is centrally located near the back of the chamber and faces the Washington Monument and the Capitol. A row of columns separates this central area from either end of t chamber. On the north wall insc stone is Lincoln's Second Inaugural on the south wall, similarly inscribe Gettysburg Address.

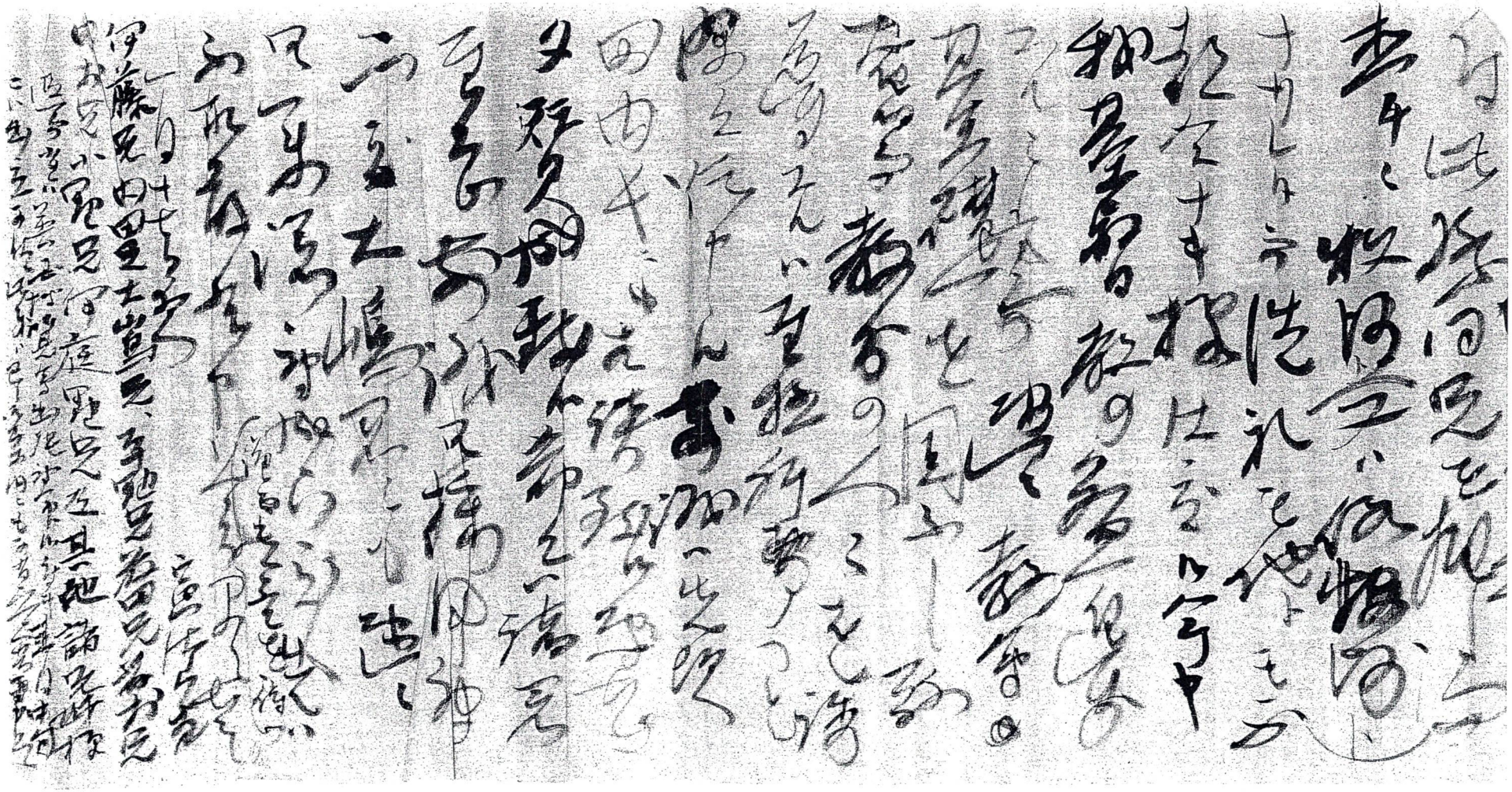
The decorations of the Gettysburg ond Inaugural Addresses were dor the direction of Daniel Chester Fr Miss Evelyn Beatrice Longman, his

There are some structural featur memorial not common in modern b



6-1





No.4

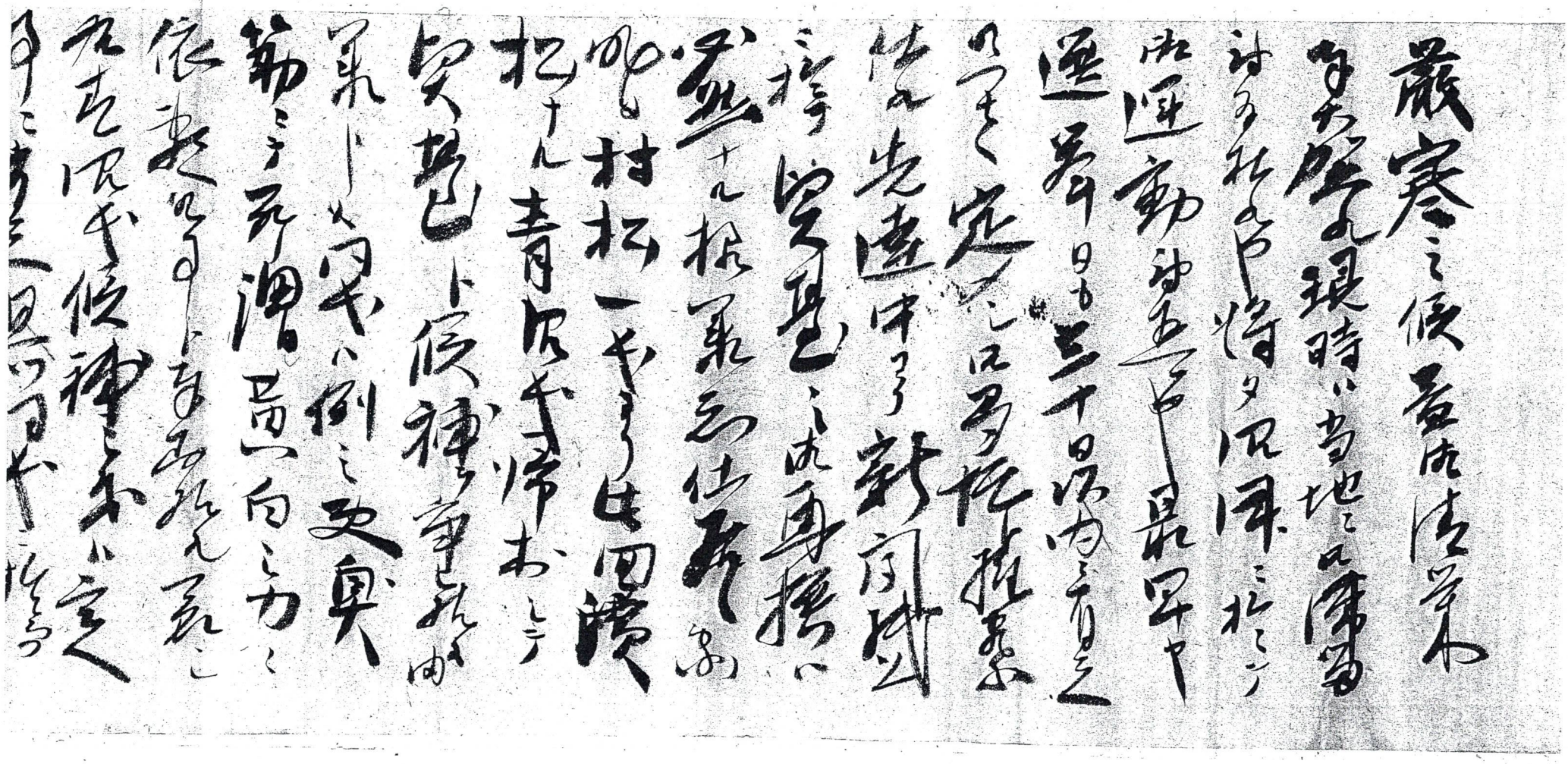
拝啓於兄姉各位ハ
例も主の御思召ニ御生
□□□□□壮栄ニ
御起□之趣欣喜
□□奉存候偖而
貴地の教会も
全能ナル慈恵ニ富ミ□
ふ神□の御誘導と
各位の御熱信とニヨリ
愈々隆盛の□□□□
の候由此程出京中
ナル宮部兄より
□□□□□□□□□小生ハ
一日トシテ各位并ニ貴地
教会の為ニ神様ニ
祈ラサル日ハ無之候且
ツ又タ当地ニ来リ而
諸教会の有様を
見るニ付而□□□
各位の事を思ハサルなく
実ニ札幌ノチアーチハ
小弟の真之ホームチアチ
我々のエレサレムニ候実ニ
諸君組織セラルヽ教
会等ト其基礎の立
派ニシテ善良ナルモノニ
小弟未タ之ヲ東京ニ定る
コト能ハス（尤も在京ハ日尚ホ浅きか故ナルカも知れス
噫々小弟等の最も□□スル
ハ貴地教会□□□□
而し而今茲ニ寸暇を
得而□□を呈スル
以所ハ他ニアラス小弟の
先頃中より思想せるの
一事ニ而貴教会も□
□年を積ンテ盛大ニ
相成るニ於而ハ成る丈ケ
速ニ牧師ヲ置キ其他の
役員を定めテ教会整頓
の途を立テサル可ラス就而

ハ其筋の者へも僻遠地方
教会の有様等尋問せし処
場合ニヨリテハ（札幌の如キハ此□□□□右□□□□
ライセンス又ハ案手礼をも
受ケサル者ニ而も牧師ノ職ニ任シ公之
洗礼を施し又ハ聖餐
の礼ヲ宰ル趣有之□ニテ殊ニ一致
教会の如キ尤の此等の
事を□く申ス教会ニ而も
亦タ此例アルトノコトニ候へハ
貴地ニ於而も早ク此例
ニ準ハレ候而ハ如何ナルヤ
□□者申□□□も無之
候得共大島兄ハ□□
より御目□□も有之候義ニ
付此際同兄を□し而
直チニ牧師（又ハ俗牧師ト）
ナリレタ而洗礼も他トモ不
都合ナキ様仕度候今ヤ
我基督教の益進歩
スルニ□□□ニ教会の
基礎を固ふし□
□□教分の人々を誘
導スルハ至極肝要□□
□□信申候前議論ハ先頃
田内氏ニも相談致候処□□
夕賛成致候希くハ諸君
□□前議御採用被
下度大島君ニも速ニ
御□□被成下度候先ハ
不取敢右申上候謹而貴答を待つ早々頓首

一月十七日　　寅次郎拝

伊藤兄内田兄大島兄平野兄藤田兄□村兄
田村兄小野兄伊庭野兄及其他諸兄姉様

追啓小生ハ英国博覧会出張□□□候ニ付キ来月中旬
ニハ出立可仕候此身ハ己之御□□ニも可有之□□□申上候



沼津市明治史料館所蔵
江原素六文書 E-a-700

中央農事報
7巻 23 M35.2 P54~60

○渡米所感

農學士　渡瀬寅次郎

左は第九回全國農事會に於ける演説筆記に係る

私に亞米利加の農業上の實見談をせよといふ御注文でございますが併し此事は餘程廣い御話でございますからして僅かの時間で終ることは出來ませぬ故ホンの一部分の大略を御話申上げましやう、又た該國の有樣と日本の今日の有樣に比して私が慨嘆に思つて居ることもございますから其部見も序でに一寸述べやうかと思ひます、

先日來諸君は日本の農業の改良の爲に孜々御勉強なすつて入つしやる有樣を見て喜びに堪ゑませぬ、私は昨年丁度今頃亞米利加へ向つて往きましたが彼地に着するや否やカリフォルニヤ州の矢張り斯う云ふやうな農事園藝の大會に出席いたしまして其會は七日の間順序正しく開會してありました、私は其會に出席する折を得まして其時分の會議の有樣を逐一見ましたところが何れも皆熱心當業の利益を保護することを主張しまして中には餘り自己の利巳主義に渉つて酷いといふやうな感を抱いたことも澤山ございました、併ながらその自分の利益を保護するに熱心なのは感服いたしました、之を我邦の農會員或は園藝會員が其利益を保護するのに冷淡なることに較べますると霄壤の差がある、亞米利加が今日の如く隆々として農業に或は工業に頭角を露はして來ましたのは全く自

己の利益を保護する念に厚いから此の如きことになつたものと思ひます我邦の農家が一般に自己の利害に冷淡にして單に一小部の人々が農業の爲に力を盡し色々な農家の利害のある處を顧みて色々憂ひられて居る有樣と較へますれば同日の論にならぬことを考へて慨嘆いたしました、

私は菓樹業者の協議會にも出席しました、彼國に於きまして斯の會に於ては誰でもそこに出席して意見を述べることが出來ます門戶が開け開放主義だそこで菓樹業者は隨意に出て自分の意見を述べますが丁度こちらで色々な事柄を建議するとか請願するとかいふことのありまする如く向ふでは問題が出或は臨時に建議して自分の利益を保護するやうなことを執つて參りまするが、最其議論の激しかつたのは鐵會道社が菓物に對して運賃を負けない或は菓物の如きは最速達を要すべきものであるのにそれを外の荷物と同じやうに扱ふといふ苦情と議論が盛んで遂に大鐵道會社なるサウザルンパミフヒックの重役兼支配人にて重もに事務を執つて居ります者に其所に出席して是に答辯をして呉れといふことを申込んだ、それに應じて右の支配人が來てどう云ふ理由で斯う云ふ風に運賃が掛かるといふことゝ將來は可成運賃の低減と速達を計ることを辯明しました爲に會員の感情を和げました、然して私は過日來本會に臨み此會をなさつて居る有樣を見ると重もに政府に建議するとか議院に請願するとかいふことでございますが之と共に私の希望しまするのは農產等の運輸につき政府及鐵道會社或は又滊船會社に掛合て農產園藝の品物ならば特別の便利を與へて早く且つ廉くすることも斯う云ふ會で將來力を盡すべき事でありまず、其外例へば米國にて海外からして密柑が這入つて來ると亞米利加の柑橘の栽培が振はないから委員を出して先きにワシントンの議會に運動しやうといふことは決議になりましたが其決議の事項に付て運動の結果の報告を詳細聞きました、其運動の結果密柑の栽培が米國に盛んに行はれ來りました、何故かといふと利益があるからである、外國から來る密柑に重稅を課するから夫で亞米利加にある密柑か大に利益を得ることが出來るやうに

なつて參りまして大層密柑の栽培が盛んにおつたが、それに付ては陳情委員はワシントンへ出まして議會の開會中に上下兩院を運動した結果を報告しましたが實に盛んなものでございます、其他葡萄酒とか或は砂糖とか總て海外から輸入するものには皆税を掛けて自分の品物の利益を得るやうに務めますから海外から來るものは夫が爲に大に不利益を被る、又夫を輸入する商人は大層不利益を被つて居ります、保護の精神の盛んなるところの亞米利加でありますから始終保護の聲が勝を得て今日凱歌を奏する有樣でおります、我邦の如きも今や海外から這入つて來る鷄卵と云ひ其他の物も大抵之に向つて來年あたりから制限を加ゆる方針を執つて行きたい、亞米利加では密柑の如きは先年運動の結果でジャメイカ日本等から這入つて來ました密柑に一斤一セント、（我二錢）宛の税が掛かつたといふので是なら彼國で密柑を栽培しても利益があるといふて皆適當な地方に植付けて今日では税を掛ける前と税を掛けた今日とは餘程違つて栽培地が六倍も增したといふことであります、今日は獨り亞米利加で以て消費する密柑を亞米利加で出すのみならず歐羅巴あたりへ輸出するやうになりました、日本密柑の如きも矢張り此保護税の加はつた爲に大に不利益を感じまして亞米利加に輸入せられるもの、如きは大變減つたと申します、總て此亞米利加の國に於きましては何でも自分の國で産出することの出來るものを産出することを務める、御案内の如く土地が廣くて地味が饒かで種々の氣候を持つて居るから凡そ産出しやうと思つて産出されないものは無い、だから今日現に在職する農務卿ウヰルソン氏の如きは最此説を主張して自分の國で出來るものは何でも拵ゆる積りである、斯う云ふ土地もあり氣候も適するからさう云ふことをやる積りであると云つて奬勵します、私が農務卿に遇ひました時に其説を唱ゆて私に聞かせた、此農務卿は前年まで農學校の校長をして居りましたが其人の下にそれ〴〵有名な學者が置いてあつて其人々は始終研究するのみならず、亞米利加で出來得る品は博く種を内外に求めて或は一年或は二年の間相當な學者を海外へ出し

て方々へ旅行せしめ亞米利加に適する植物を研究し輸入することを謀つて居る、だから色々の產物が亞米利加に起つて參りました、そこで亞米利加の方に先年まで出來なかつたものも近頃大層出來まして米の如きも二百年前には亞米利加でも栽培せられる地方もございましたけれ共、近く五七年間は大層米の種類が改良されて米の栽培法が變りました、夫が爲に著しく米作に進歩を見ました、或は茶なども亞米利加では今勞力の高い爲に餘り製茶は致しませぬ、今から數年前始終茶を作らうといふことを心掛けて居りまして其中で茶のことに熱心なセツバートといふ人に年々保護金を與ゐて之に栽培いたさせました、近年は其成蹟が現はれまして昨年の如きはニューヨーク市場に商品として出した五千斤丈けの茶を賣つた所が外國から來る茶よりも一斤十仙(二十錢)づゝ高價に賣れて忽ち無くなつた、だから茶の栽培は利益があるといふので饒かな資本を茶の栽培に向けるやうであります、私の所の東京興農園へ米國農務省から臺灣の茶、烏龍茶(ウーロンチー)と云つて種があるそれを取寄せて欲しいといふ注文が昨年もございました、それは即ち政府で其種を輸入いたしまして世間に無代で與ゐて茶の栽培を奬勵する法であります、米の如きもさうだ、昨年も一昨年も米國農務省より東京興農園に日本米の種を注文して參りまして政府で買つてそれを地方へ無代で配付します今日は日本米の評判が高くなつて諸處方々で日本米を栽培するやうになつて居ります、今亞米利加で重もに作られるのが日本米といふのと、ボンジコラス米といふのが重もであります、其亞米利加の南地方に行くと盛んに耕作して日本の將來に取りまして餘程著しき勁敵と思ひます、此米の栽培のことに致しましても亞米利加では充分に世界の米の栽培地と競爭することの出來るといふ計算を立つて居ります、其亞米利加の農務省で調べました計算に據ると米を作るのが世界中で歐羅巴では西牙班や伊太利である、夫から埃及、マダガスカル、印度南洋諸島、夫から支那朝鮮日本であるが併し何處と競爭しても亞米利加の地が競爭に勝つ、亞米利加では麥や米を栽培して精巧なる人力を省く機械

を用ゐるから優に海外の米産地と競争して勝つことが出來ると言ふて計算を調べました、成程其計算に據れば勝てるに違ひないかもしれんといふのは亞米利加で近來やつて居ります米作法は前年來カロライナ州でやつて居るのと變つて大層進歩して來まして、平坦な是までアルカリ質の土でありました土地を灌漑いたしまして大きな湖水か河から喞筒でズン〳〵水を入て、入れた水は堤防を築いて其堤防の中へ水が流れて其流れた水を方々へ配つて行くといふ米作をして居ります、夫から此堤防の中にある水を收容するのは堀割會社が收容して居りまして其會社が近傍にある土地へ水を分けて行つて用ゐる者は收穫高の十分の一を出すことになつて居ります、此土地は豊饒な土地で水がさう云ふ風に充分でありますから天水を望む必要は無い、雨乞をする必要も無い、水が要る時には堰を取ればズン〳〵這入つて來るから容易に補給することが出來る、又要らなくなれば水を落して仕舞へば乾くのである其土地を初め耕作するには餘程精巧なる馬犁を用ゐ或は蒸氣犁を用ゐます播種は馬用畦蒔器にて蒔きますことは麥作と全じである、苗代を拵ゐて行くことをしませぬ、種を蒔いて仕舞へば水を注いでズン〳〵種が出て來る、草を取るにも平生乾田にして居りますから水草が少ないから草を取る手も省けるといふので大概一人で面積五十エーカー位、即ち二十町位耕して行くには機械ですから雜作も無い、之を收穫する時にも矢張り麥や小麥を刈る機械で刈つて脫穀器へ掛けて穗を落して仕舞ふ、ナカ〳〵稻扱機械といふやうな面倒臭いことをしませぬ、此間も私は山陰道あたりを旅行して鳥取、島根あたりで稻扱機械を製作するのを見ましたが日本では稻扱機械が盛んであつて人力を省くことの出來ないのは殘念なことゝ思ひます、我邦でも此頃大分米作は改良いたしまして米の出來るまでの順序は改良しましたけれ共米の仕上る時になつて大層手數を要します、此の如きことは矢張り村農會或は他の組合あたりで合同して脫穀器其他籾スリ大臼位を買入れたら大層手を省くことになる、米國は脫穀器で穗を落して其籾をライスミルと言つて水車で運轉す

る機械場へ持つて行けば一日で白米にありますから大變利益である亞米利加では米を作るに一段歩から一石五斗位の米は出來る麥抔を作るよりも宜いと言つて近頃北部の有力な富のある資本家が隨分南部亞米利加の方へ土地を購求して米作を始めるやうな有樣であります、米作といふ事は南部の米國に行つては處々方々に喧しい、前述たようにやりましても出來る米の質は日本の米なぞゝ變らない米が出來る、或人は日本では良い米が出來る外國で作つても日本のやうな米は出來ぬから決して恐るゝに足らぬと言ひますけれ共是は世界の農理を知らぬ人の言ふことで、日本の種を適地に蒔くと日本產に劣らぬ立派なものが出來る、だからさう云ふことを言つて安心することは出來ない、一昨年日本の米が宜いと言つて亞米利加で方々評判され日本の米を蒔いた爲に亞米利加の僅かな所に栽培して米の增收穫が亞利米加の金で五十萬弗あつた、即ち日本の金に直すと百萬圓の增收穫があつたといふ位ですから昨年よりは今年の方が栽培者が增しました、殆と無限の面積を持つて居りて此米を作りますから餘程恐るべき敵であると思ひます、此亞米利加の農務省で調べる統計に據ると西班牙や伊太利で耕作する勞働者の十七人前のことを亞米利加では一人でやる、埃及の人々が二十四人掛つてやることを亞米利加では一人でやる、又支那の米作者が三十四人掛つてやることを亞米利加では一人でやるといふ計算が出ました、日本との比較はありませぬけれ共凡そ支那と伯仲するものと思ひます、成程向ふの勞働者は賃銀は餘計取る、一日働いて一弗五十錢位、日本の金で三圓、四圓位は取りますけれ共二頭三頭の大きな馬を用ゐて、非常な働きをなしますから其手間は却つて廉く附いて居る、斯う云ふ有樣であるから日本の農業家も相務めて勞力を省き此方法を一新して世界の大勢に伴つて改良して行かねばならぬさう云ふことをするのは諸君の手に待つものが多いと思ひます、まだ日本は是から農業上非常な改善を施さなければならぬ、それをするには私の希望しますのにどうか今商工立國といふ議論がありますけれ共兎に角農業は是まで日本の命脈を繫い

だ業であるし又充分に官民共に手を盡さねばならぬ業でありますからして、早く日本にも農務省を設けられて此農商務省と言つて商と農と一緒にやつて居ることではいけませぬ、一方に專一なる農務省を置れて充分に力を農の方に寄せて見て日本にも出來る丈けのことを盡し、外國の品に保護稅を掛けべきものはズン〳〵掛けて日本の農業を奬勵するやうにしたいと思ひます、今外國からして米が這入つて來るとか小麥が這入つて來るとか其外砂糖や棉は御案內の通り段々日本の製產を壓倒して參りまするから之に對して我農業界は大に抗爭してどうか日本の農業をモツト保護し奬勵する機關を設けなくてはならぬ、夫をするには先づ初に農務省を設け我日本の農家の利益を之に代表せしめさうして諸君が益〻力を盡されてやつたら世界の色々の競爭に打勝つことが出來ませう、さうで無く長く此儘で置けば日本の農業は危いと思います、

農業組合　1巻1号　明38.11 (1905)

●特撰 最良 穀菜果樹 観賞樹類 種子苗木 新式農具 特別廉價販賣

謹告 ポートランド萬國大博覽會にて名譽金牌を受領せるは本邦にて弊園のみに御座候○外國より農具澤山新着仕候組合員にて多數注文の方へは大割引可致候

●各種明細代價は此他農家便覽にありに申り次第御込御進呈す

●新種甘世紀梨 一本廿五錢 百本二十圓
●日本梨 以下一本五錢 百本四圓
●眞鍮●赤穗●淡雪●長十郎●大平●早生赤●獨逸●世界一●赤龍●力●上花●大古河●幸藏●金龍
●洋梨各種 一本六錢 百本五圓
●苹果苗 各種 一本四錢 百本三圓
●最良早生 興農園魁桃 一本廿錢 十本二圓五十錢 百本廿圓
●新種早生 入梅桃 一本廿錢 十本二圓九十錢 百本廿圓
●最上黃金桃 一本廿五錢 十本二圓 百本五圓
●桃苗各種 一本七錢 百本六圓
●上海天津水蜜桃●早生半兵衛●日の丸●油桃●清國蟠桃
●洋種桃苗 各種 一本七錢 百本六圓
●新種伊國最晩甘夏蜜柑 一本八十錢 十本七圓 百本五十圓
●甜橙ワシントンネーブル 最上一年苗 一本五錢 百本四圓 二年苗 一本八錢 百本七圓 三年苗 一本十五錢 百本十二圓
●温州蜜柑 一本五錢 百本四圓
●梅桃苗 各種 一本四錢 百本三圓

●葡萄苗各種 一本三錢より五十錢迄 一本十錢 百本八圓
●洋種牡丹杏 各種 一本五錢 百本四圓
●李類 以下一本五錢 百本四圓
●角口巴旦杏●古着屋巴旦杏●大巴旦杏●米桃●紅牡丹杏●牡丹杏●極早生李
●最上洋種牡丹杏 (クライマックス絶頂の意) 一本五十錢 十本四圓 百本三十五圓
●柿苗甘澁 各種 一本五錢 百本四圓
●洋種杏 各種 一本十五錢 百本十二圓
●日本大杏 一本五錢 百本四圓
●實成梅 各種 一本五錢 百本四圓
●大盆栗丹波栗 各一本六錢 百本四圓半
●唐枇杷及苗 早生枇杷苗 各百本六圓
●新早生大枇杷 一本十五錢 百本十二圓
●田中大枇杷 一本八錢 百本七圓
●草苺苗 一本八厘 百本六十五錢 最上同十錢 同八圓
●黑木苺 ブラックベリー 一本二錢 百本一圓
●すぐり 一本五錢 百本三圓
●落葉松 一年苗 一千本一圓廿錢 二年苗 一萬本十二圓 山植苗 百本七十錢
●ポプラー 三尺 一千本六圓

●杉 内外三年生山植苗 一萬本五十圓 一千本二圓六十錢 一萬本二十四圓
●檜 三年生山植苗 一萬本二十圓 一千本三圓
●赤松 三年生山植苗 一萬本二十五圓 一千本二圓六錢 一萬本二十圓
●樫 なし山植苗 苗三尺内外 一萬本七十圓 一千本八圓
●椚 なし山植苗 苗根元廻一寸 一萬本四十圓 一千本五圓
●櫟 なし山植苗 苗尺五寸内外 一萬本五十圓 一千本五圓六十錢
●栗 なし山植苗 苗三尺以上尺寸 一萬本三十圓 一千本三圓六十錢
●銀杏 なし山植苗 苗尺以上尺寸 一萬本六圓 一千本九圓
●大島櫻苗 山植苗 三尺込 一萬本七十圓 一千本八圓
●アカシヤ樹 一本一錢 百本八十錢
●赤楊 苗 山植苗 壹弐尺込 一萬本廿五圓 一千本二圓半錢
▲右外桑苗牡丹花櫻其他觀賞樹蔬菜種子等數百種あり

▲舶來一頭曳犁 金十一圓
▲同二頭曳犁 金十八圓
▲同三頭曳犁 金五十五圓
▲和製一頭曳犁 金七圓半
▲同二頭曳犁 金十四圓
▲同 田畑兼用犁 金六圓半
▲鋼鐵製レーキ 十齒金二圓六十錢 十二齒金二圓八十錢
▲練鐵製レーキ 十齒金八十五錢 十二齒金九十五錢
▲新式强力細霧注射器 各種 甲金十五圓 乙十二圓半 丙八圓五十錢

▲芽接兼接木刀 (甲金二圓 乙一圓 廿錢 丙金五十錢)
▲剪枝刀 甲金二圓半 乙金二圓
▲移植用鍬 (甲金六十五錢 乙金卅錢 五錢 丙金廿錢)
▲剪枝鋏 各種 三圓卅五錢 二圓半 二圓七十錢 一圓廿錢
▲舶來碎穀器 十六圓
▲和製同上 十一圓
▲同玉蜀黍脫粒器 七圓
▲籾摺眞棒器 大二圓廿錢 小一圓
▲移植鍬 六十錢 四十五錢 三十五錢 其他
▲移植用ホーク 十八錢
右之外農業具數百種あり 定價郵稅共

▲改良稻作法 同三十四錢
▲五版蔬菜栽培全書 同四十一錢
▲增補五版蔬菜草花栽培全書 同六十一錢
▲新刊果樹栽培新書 同廿七錢
▲嶄新適實肥料新書 同五十一錢
●七版害蟲驅除全書 同九十五錢

月刊 興農雜誌 見本一册五錢五厘
半ヶ年分廿錢 一ヶ年分五十錢

●日本農學講習會講義錄
半ヶ年分 一圓五十錢
一ヶ年分 二圓八十錢

東京興農園分店 東京赤坂區溜池町五番地 東京興農園 電話新橋二四二番

東京赤坂青山七丁目 通宮益坂上

中央農事報　明37.(1904)

種苗 農蠶具 大廉販

内外最良 新式 特別

弊園大に時局に鑑み斯業の改良發達を奬勵せんが爲め今回左の特別割引相添へ空前絶後の大廉價を以て種苗農蠶具書籍等販賣仕候間速に御注文を希上候

- 最上梨苗 各種 各十本四十五錢 百本四圓
- 全 苹果苗 全 全 全 四十五錢
- 天津上海 水蜜桃 全 四十五錢
- 最上柿苗 全 四十五錢 四十五圓
- 全 柑橘苗 全 全 全 四圓牛
- ソシトンネーブル 十本 一圓牛
- 葡萄苗 各十本六十五錢 百本六圓 百本八十錢 二圓牛
- 草苺苗 百本八十錢 二圓牛
- 全 黒木莓苗 百本 九圓
- 唐 枇杷 三圓廿錢
- 洋種白無花果 全 四圓
- 杏、李、米桃 各全
- 早生節成胡瓜 一合四十錢
- 全 最上節成胡瓜 九十錢
- 青大胡瓜 四十錢
- 鳴子胡瓜 三十錢
- 大西瓜 四十錢
- 西瓜アイスクリーム 全 五十錢
- 新輸入西瓜鋼鐵艦 一袋十錢
- 早生千成茄子 全 六十錢
- 中生山手茄子 全 四十錢
- 晩生山手茄子 全 五十錢
- 金時胡蘿蔔 一升入
- 東京大長胡蘿蔔 全 三十錢
- 三寸胡蘿蔔 一升六十錢
- 特別砂川牛蒡 一合二十錢
- 東京赤莖牛蒡 全 廿五錢
- 最上千住葱 全 一圓牛
- 新輸入西瓜ボッス 一袋十錢
- 全 カンタロッフ 全 十錢
- 時無大根 一升 二十錢
- 細根大根 一升九十錢
- 特撰夏大根 一合十八錢
- 二十日大根赤 全 二十錢
- 全 白黄紫 全 三十錢
- 夏かぶ 全 一圓牛
- サンマーテルソンス、ヤンマー 全 十二錢
- 全 六十錢
- 全 新輸入アーレーウヰンスタット 一匁十錢
- 全 極早急行甘藍 全 十五錢
- 全 子持甘藍 全 十五錢
- 極大白木立花椰菜 全 五十錢
- 全 ベツチ、オートムシヤアント 全 上 八十錢
- 玉萬苣 全 上
- 洋種縮緬萬苣 全 上
- 驚菜 一升 四十五錢
- 京菜 全 六十錢
- 羽衣甘藍 一匁 十錢
- 新種極大砂糖玉黍蜀 一合十八錢
- 玉黍蜀甲洲 全 五錢
- 全 ロングフエロー 全 八錢
- 全 エキストラアーリースウヰトコオーン 全 十二錢
- 新種群房菜豆 一合十錢
- 全 加奈陀驚可菜豆 全 十五錢
- 全 極早生黄金帝王菜豆 一合十八錢
- 全 ロンドン園藝菜豆 一合十二錢
- 全菜豆エキストラ、アーリシヨユージ 全 十錢
- 白八房菜豆 一升四十五錢
- 蘭國錦咲分菜豆 一合十八錢
- 佛國極長菜豆 全 上
- 砂糖大豆 全 十錢
- 赤白刀豆 全 十錢
- 舶來二頭曳犁 十八圓
- 全 一頭曳犁替刃付 十一圓
- 和製二頭曳犁 十四圓
- 全 一頭曳犁 七圓牛
- 全田畑兼用犁 六圓牛

特別 大割引券

有効期限 廿七年四月三日 廿七年四月廿日 以後の御申込は無効

峰君著 改良稻作法 定價三十錢 送料四錢
農學士高橋君著 玉蜀黍栽培全書 全 三十五錢 全 大錢
博士松村君著 害虫驅除全書 全 九十錢 全 六錢
右一部二割引 三部三割引 十部以上注文の割引
種子一圓以上 苗木二圓以上 農蠶具三圓以上は一割引
興農雜誌一ヶ年分四十二錢 一ヶ年分二十五錢
大日本農學 一ヶ年分前金二圓四十歩
講義錄 一ヶ年分前金一圓三十錢
右一打以上一割 二打以上二割 五打以上三割引
鹽水撰種比重計一個十五錢 送料二錢

此切抜き券を以て申込まれたし

- 新形舶來耕作器 十八圓五十錢
- 舶來 和製 一艇二圓半 七十錢
- スペード 全 甲 一圓九十五錢
- 舶來 ホーク 乙 全 一圓八十五錢
- 舶來 剪枝刀 甲二圓半 乙二圓
- 舶來鋼鐵 丙 一圓半
- 製レーキ 十二齒一圓八十錢
- 練鐵製 十齒一圓六十五錢
- レーキ 全上 九十五錢
- 全上 八十五錢

- 新式强力細霧注射器 八圓五十錢
- 芽接彙 甲二圓 乙一圓二十錢 丙五十錢
- 接木刀 一圓二十五錢
- 輕便移植器 甲三十五錢 乙二十錢 丙十五錢
- 移植用鍬 一圓六十錢 迄
- 舶來ホー 七圓二十錢
- 特許桑刻器 五十錢より
- 鬻網各種 一反 四十錢より
- 給桑篩 全 六圓三十錢
- 撚簇器

- 桑苅鎌 全 十八錢より
- 農蠶用寒暖計 各種 乾溫計五十錢より二圓迄
- 桑切庖丁 各種四十八錢より

農商務省陸軍省農科大學各府縣廳御用

東京市赤坂區溜池町五番地

東京興農園

和洋園藝家事諸道具類一切 弊園販賣の品は總て精撰最良の實用に適するもののみ

新農家便覽 種苗農蠶具其他販賣品一切定價圖解入 總目錄六十頁のもの御申込次第送呈す

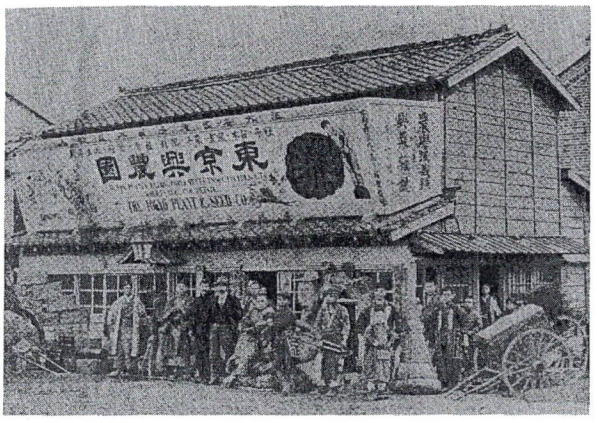
團體又は多數の 御注文には特に大割引仕候

果樹栽培史上における「松戸覚之助」及び「二十世紀梨」の役割

千葉大学名誉教授　永澤　勝雄

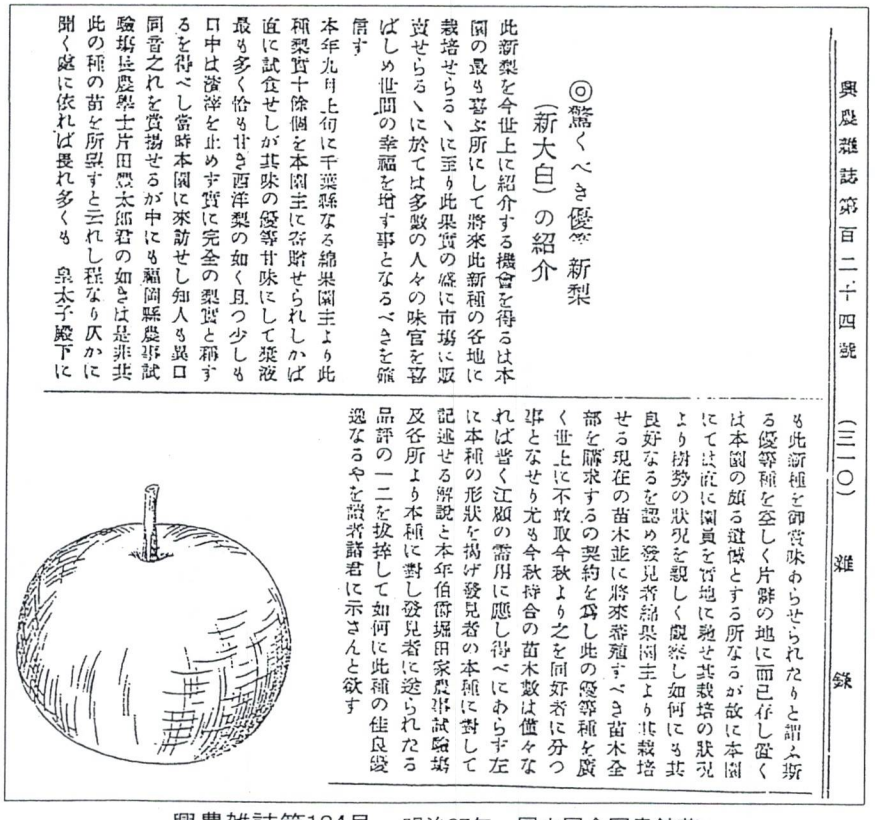
今時代の変革の中にあって、郷土松戸の生んだ先人「松戸覚之助」と、その卓越した業績「二十世紀梨」という品種がわが国農業の歩みの中でどんな役割を果たしたかについて私見の一端を記すこととする。

その人物　松戸覚之助は、明治八年松戸市大橋八二〇において、当時すでに果樹園を経営していた父伊左衛門の長男として生まれ、昭和九年五九歳で亡くなった。覚之助は、小学校を卒業し、高等科にすすんで家業の果樹栽培を手伝いつつ農業経営に励み、果樹苗木の販売を業とした。



興農園 渡瀬寅次郎傳より　明治37年

名付け親 渡瀬寅次郎
安政6年(1859)ー大正15年(1926)



興農雑誌第百二十四號　（三一〇）　雑　錄

◎驚くべき優等新梨（新大白）の紹介

此新梨を今世上に紹介する機會を得るは本園の最も喜ぶ所にして將來此新種の各地に栽培せらるゝに至り此果實の儘に市場に販賣せらるゝに於ては多數の人々の味官を喜ばしめ世間の幸福を增す事となるべきを確信す

本年九月上旬に千葉縣なる綿果園主より此種梨實十個を本園主に寄贈せられしかば直に試食せしが其味の優等甘味にして漿液最も多く恰も甘き西洋梨の如く且つ少しも口中は渣滓を止めず實に完全の梨實と稱するを得べし當時本園に來訪せし知人も異口同音之れを賞揚せるが中にも福岡縣農事試驗場長農學士片田敷太郎君の如きは是非共此の種の苗を所望すと云れし程なり仍かに聞く處に依れば最も多くも　皇太子殿下に

も此新種を御賞味あらせられたりと謂ふ斯る優等種を空しく片隅の地に而已存し置くは本園の頗る遺憾とする所なるが故に本園にては此に園員を當地に派せ其栽培の狀況より樹勢の狀況を親しく觀察し如何にも其良好なるを認め發見者綿果園主より其栽培せる現在の苗木並に將來蕃殖すべき苗木全部を購求するの契約を爲し此の優等種を廣く世上に不日取寄秋より之を同好者に分つ事となせり尤も今秋特合の苗木數は僅々なれば當く江湖の需用に應し得べにあらず左に本種の形狀を掲げ發見者の本種に對して記述せる解說と本年伯爵堀田家農事試驗場及各所より本種に對し發見者に送られたる品評の一二を抜粋して如何に此種の佳良優逸なるやを讀者諸君に示さんと欲す

興農雑誌第124号　明治37年　国立国会図書館蔵

梨実生樹の発見とその育成・頒布　覚之助が発見し、後に「二十世紀」と命名されるに至った梨の実生樹は、父の栽培している梨の品種とは特性がちがい、これが結果期を迎えれば必らずすばらしい果実を結ぶだろうとの期待をもって、明治二一年、彼が一三歳の時に、父の栽培する梨園に移植した。その後彼は、梨樹の特色を観察しつづけ、その特性を発揮するような管理を熱心に行なって、すばらしい果実を生産することに成功した。しかし、黒斑病に弱い特性があるが故に、その栽培には苦労を重ねたが、果実の優秀さの点では、既存の品種の及ぶところではなかった。この品種を安定的に栽培することに成功すれば、梨経営による収益を高め、果樹産業の伸展に寄することまちがいなしとの信念を持ち、これを広く当時発行されていた雑誌類を通じて紹介するとともに、自ら穂木を接木して苗木を養成し、その販売にも励んだ。

覚之助が父とともに梨栽培に従事していた時代には、現在のように、果樹栽培に関する単行本が発売されていたわけではない。にも拘わらず、自園に栽培していた諸品種の特性を綿密に観察しつつ栽培に協力していたからこそ新品種の発見につながる実生に気づき、しかも広く栽培されるに至る基盤となる「実験応用梨樹栽培新書」なる著述をも発行したことは、自らの業の発展が世の果樹産業との一体的発展にまたねばならないとの考えによるものであったと推察され、その見識にも深く敬意を払う次第である。

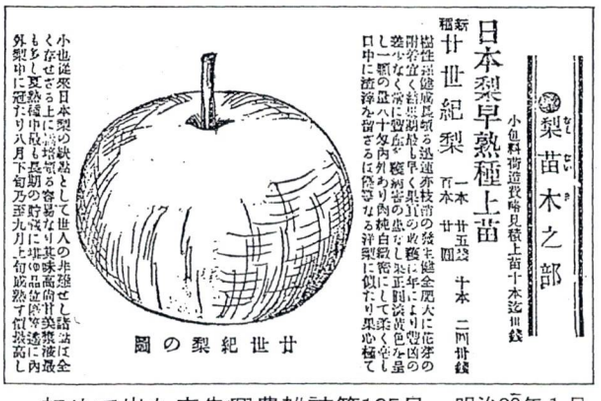
梨経営発展への貢献　松戸覚之助が発見した実生樹に結実した果実は、従来栽培されていた品種にくらべ、果実は緑色で、豊満な球形、肉質、甘味などの点でも実にすばらしいものであった。

◎寄贈大白梨　千葉縣本會員にして果樹栽培事業に熱心なる鎗果園主松戸覺之助氏より這般同氏が多年苦心の結果實生より發見せられたる大白梨鑑頴を寄贈せられたるが其果實は正圓形として果色淡黄一顆の重五十匁餘なりし、之れを試味するに頗る甘味に富み多汁なりし、梨樹の栽培に有名なる能勢五果園主恰も來園せるを以て、氏亦之れを試味し、實に其品味の佳良なるに驚歎せり、聞く所によれば徳川侯爵を始め三井其他貴紳より賞讃の辭を忝ふせられたりとの事なりし本種は其果色は稍世人の好愛を惹くに缺くる所ありしも其品味の佳良なるの點に至つては、多くの在來梨實

果物雑誌第70号　明治35年11月

▲梨二十世紀　之を其の元祖と稱する千葉縣東葛飾郡八柱村松戸覺之助氏に就て聞くに、數年前までは新太白の名ありしものにて、偶然に斯くの如き品種を實生によつて得たるものにて、形質の大體は太白に似て容風味太白に酷く似たるものたり、盖し中生種中の一佳品なれども此にして耐久性を有するあらば、一層貴ぶべきの品種たるなり。

日本園芸会雑誌　明治42年４月



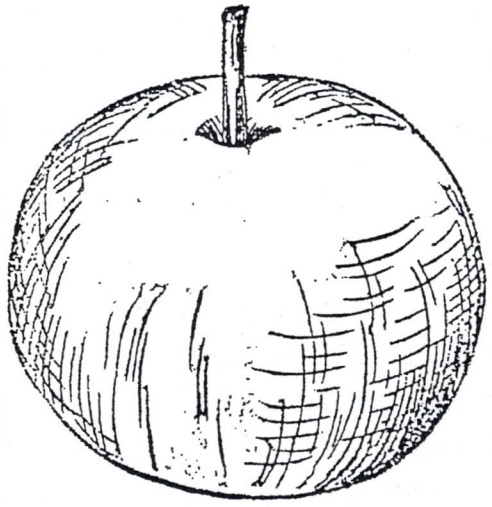
初めて出た広告興農雑誌第125号　明治38年１月

脉本會員にして果樹栽培專業に覚之助氏より這般同氏が多年苦せられたる大白梨數顆を寄贈せ圓形として果色淡黄一顆の量五試味するに頗る甘味に富み多漿有名なる能勢五果園主恰も來園を試味し、實に其品味の佳良なによれば德川侯爵を始め三井其忝ふせられたりとの事なりしの好愛を惹くに缺くる所ありし點に至つては、多くの在來梨實

果物雑誌第70号　明治35年11月

紀之を其の元祖と稱する千葉縣東葛飾
覚之助氏に就て聞くに、數年前までは新
りしものにて、偶然に斯くの如き品種を實
侍たるものにて、形質の大體は太白に似て
中略）

雑誌　明治42年４月



廿世紀梨の圖

梨苗木之部

小包料荷造best見積上苗十本迄卅錢

日本梨早熟種上苗

新種廿世紀梨　一本　廿五錢　十本　二圓卅錢
百本　廿圓

樹性強健成長頗る迅速亦枝葉の發生健全肥大に花芽の開著宜く結果期最も早く果實の收穫は年により豐凶の差少なく常に豐産なり病害の患なし果實は圓淡黄色を呈し一顆の量八十匁内外あり肉純白緻密にして柔く幸も口中に渣滓を留ざるに優等なる洋梨に似たり果心極て小也從來日本梨の缺點として世人の非難せし諸點は全くなせざる上に栽培頗る容易なり其味高尚甘美漿液最も多し夏熟種中最も長期の貯藏に堪ゆ品位優等遠に内外梨中に冠たり八月下旬乃至九月上旬成熟す價最高し

初めて出た広告興農雑誌第125号　明治38年１月

梨」の役割

大学名誉教授　永澤　勝雄

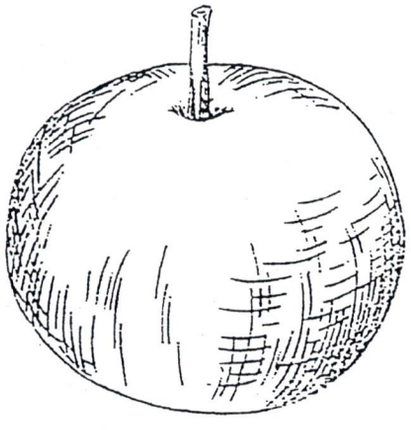
んだ先人「松戸覚之助」
う品種がわが国農業の
て私見の一端を記すこ

ノ市大橋八二〇において、
俐門の長男として生まれ、
、小学校を卒業し、高等
つ農業経営に励み、果樹

名

興農雑誌第百二十四號　（三一〇）　雑　録

も此新種を御賞味あらせられたりと謂ふ斯る優等種を空しく片隅の地に而已存し置くは本園の頗る遺憾とする所なるが故に本園にては直に園員を管地に発せ其栽培の状況より樹勢の状況を親しく観察し如何にも其良好なるを認め発見者綿果園主より其栽培せる現在の苗木並に将来繁殖すべき苗木全部を購求するの契約を為し此の優等種を廣く世上に不日取今秋より之を同好者に分つ事となせり尤も今秋持合の苗木数は僅々なれば普く江湖の需用に應し得べにあらず左に本種の形状を掲げ発見者の本種に對して記述せる解説と本年伯爵堀田家農事試験場及各所より本種に對し発見者に送られたる品評の一二を抜粋して如何に此種の佳良優逸なるやを読者諸君に示さんと欲す



◎驚くべき優等　新梨
（新大白）の紹介

此新梨を今世上に紹介する機會を得るは本園の最も喜ぶ所にして將來此新種の各地に栽培せらるゝに至り此果實の盛に市場に販賣せらるゝに於ては多數の人々の味官を喜ばしめ世間の幸福を增す事となるべきを確信す

本年九月上旬に千葉縣なる綿果園主より此種梨實十餘個を本園主に寄贈せられしかば直に試食せしが其味の優等甘味にして漿液最も多く恰も甘き西洋梨の如く且つ少しも口中は渣滓を止めず實に完全の梨實と稱するを得べし當時本園に來訪せし知人も異口同音之れを賞揚せるが中にも福岡縣農事試驗場長農學士片田豊太郎君の如きは是非共此の種の苗を所望すと云れし程なり仄かに聞く處に依れば曩れ多くも　皇太子殿下に

内村鑑三氏の
直筆

No. 渡瀬氏寄附金使用
の途に就き

1. 財團法人を作りキフ金
の管理を為ぬる事 ワタセ
兄の長男が其一人とな り
財團成立の任に当る事。
2. 財團又はTrustees成立の
上、直に主任者(教育上の)を
選定しその教育上の萬端
を為ぬる事。
3. 小生は自分の仕事多くして
迚も此任に当る能はず。但
しTrusteesの一人となり主と
して生徒修養の任に当るこ
とを辞せざる事。

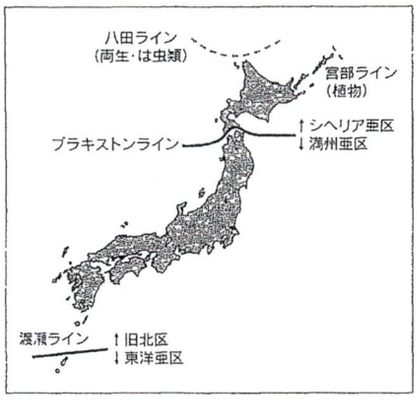
3月10日 1927. 内村鑑三

南方生物の分布に渡瀬ライン

ブラキストンラインと並ぶ重要な生物分布境界線

渡瀬 庄三郎 WATASE Shozaburo (1863-1929)

札幌農学校1884年卒。動物学者。1905年から1924年にかけて7度、日本動物学会会長を歴任。日本生物地理学会を創設（1928年）。東京大学教授（1901-1924年）。札幌農学校卒1期生渡瀬寅次郎の弟。札幌農学校卒業後1886年に渡米、ジョンス・ホプキンス大学大学院にて動物形態学者W・ブルックス教授の下に学ぶ。1890年クラーク大学助手をつとめるとともに、歴代40名近くのノーベル賞学者を輩出し、野口英世も出入りした、米国ウッズホール海洋生物学研究所（MBL）にもオフィスを持ち、レクチャーを行っている。MBLに客員研究員として所属した最初の日本人。1892年から1895年までシカゴ大学助教授をつとめる。



渡瀬庄三郎はトカラ列島の悪石島と宝島の間に設けられた生物分布境界線、「渡瀬ライン」によって著名。渡瀬ラインより北は旧北区、南は東洋区と呼ばれ、旧北区である本州以北に生息する大部分の日本の動物は、トガリネズミ類、リス類、イタチ類など、中国華中以北のユーラシア大陸に生息する動物との類縁性が高く、東洋区である奄美・琉球諸島の動物、例えばケナガネズミは台湾や東南アジア諸国に近縁種が多く生息する。渡瀬はこの境界線を1912年に発表している。「渡瀬ライン」と命名したのは岡田弥一郎（1924年）。また、彼はハブや野鼠の駆除のためにジャワマングースをインドから沖縄へ移入することを提唱（1910年）、初期には一定の効果を挙げたが、マングースが他の希少生物をも補食するため、問題となる。さらに、ウシガエルを実験用として輸入した。

1905年には「ホタルイカ」を研究し、命名もしている。さらに、日本犬の研究（1915年）を進め、秋田犬の天然記念物指定（1931年）に尽力したことでも知られる。

北方動物の分布に八田ライン

八田 三郎 HATTA Saburo (1865-1935)

動物学（発生学）。理学博士。1865年（慶応元）熊本藩士の子（旧名中村三太郎）として生まれる。東京帝国大学動物学教室入学。八田家養子となり改名する。1891年（明治24）同大卒業、翌年九州学院高校教員。1904年札幌農学校赴任。1908年札幌農学校教授、同博物館主任。1912～1915年ヨーロッパ、アメリカに留学。ベルギー・ロイヤルソサエティ（動物学）会員。1929年（昭和4）北海道帝国大学退官。1935年死去。当時、発生学の材料として極めて困難と考えられていたヤツメウナギの発生を研究した。

宗谷海峡によって隔てられた北海道とサハリンの両生類および爬虫類相が大きく異なることを示し、のちに八田ラインと呼ばれるようになる。両者に共通する種類がその後発見されたが、北海道と大陸との離合の地史的反映と解釈されている。